

# 石江遺跡群

## 発掘調査報告書V

—石江土地区画整理事業に伴う発掘調査—

(第1分冊：新城平岡(4)遺跡本文・図版編)



平成24年度

青森市教育委員会



# 石江遺跡群

## 発掘調査報告書Ⅴ

—石江土地区画整理事業に伴う発掘調査—

(第1分冊：新城平岡(4)遺跡本文・図版編)



平成24年度

青森市教育委員会





新城平岡(4)遺跡A区遠景 [平成15年度] (SW→)



新城平岡(4)遺跡A区全景 [平成15年度] (真上一)



新城平岡(4)遺跡A区基本層序 [平成15年度] (NW→)



新城平岡(4)遺跡B・C区埋没林全景 [平成18年度合成データ] (真上一)

## 序

青森市民が長い間待ち望んでおりました東北新幹線が全線開通となり、2年が過ぎようとしております。

東北新幹線新青森駅周辺の石江土地区画整理事業も順調に事業が推移し、本市の玄関口としての整備が進められております。

この土地区画整理事業予定地内には木簡や檜扇などが出土した新田（1）遺跡をはじめとする多くの遺跡が所在しており、その面積は土地区画整理事業予定地46haの半分近くの20haに及びます。

青森市教育委員会では、土地区画整理事業と埋蔵文化財保護の調整について、関係機関と協議を重ね、開発工事に先立ち、記録保存を前提とした発掘調査を実施することとし、平成15年度から毎年度継続して取り組んでまいりました。

本書は、その調査のうち新城平岡（2）遺跡、新城平岡（4）遺跡、新城平岡（7）遺跡の3遺跡分について所収したものであります。

発掘調査の結果、当該地域には、縄文時代から古代・中世・近世と長期的に人々が生活を営んでいたことが判明いたしました。

また、新城平岡（4）遺跡では、弥生時代に相当する時期の埋没林や近代の笹塔婆が出土するなど、本市の歴史の中で、これまであまり知られていなかった情報が新たに発見され、学術上、大いに注目されております。

本書が地域の歴史を解き明かしていくうえで、多くの方々に活用いただければ幸いに存じます。

最後となりましたが、発掘調査ならびに本書を刊行するにあたり、ご理解とご指導を賜りました関係機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成24年11月30日

青森市教育委員会  
教育長 月永 良彦





## 例 言

1. 本書は、青森市（担当：都市整備部石江区画整理事務所）より委託を受け、青森市教育委員会が平成15、17～21年度に発掘調査を実施した石江遺跡群に関する発掘調査報告書である。

2. 本書に掲載される内容は、石江土地区画整理事業に係る石江遺跡群発掘調査の新城平岡（4）遺跡（青森県遺跡台帳番号01074）の調査についてまとめたものである。

新城平岡（4）遺跡は、平成14年度に青森市教育委員会が実施した試掘確認調査によって、従前の西バイパス（1）遺跡（旧青森県遺跡台帳番号01077）と高間（5）遺跡（旧青森県遺跡台帳番号01074）を統合し、所在地の実際の大字・字名をつなげた新城平岡（4）遺跡とし、遺跡台帳番号は高間（5）遺跡として利用されていた番号を優先した。

統合した際の遺跡範囲から、発掘調査の結果、一部範囲を変更している（平成20年6月11日付け青教文第349号）本報告の成果は、範囲変更後の内容を含むものであり、全調査面積は15,052㎡である。

3. 本書に掲載されていない鉄関連遺物については、石江遺跡群を構成する他遺跡の整理作業が終了する平成25年度一括して報告する予定である。

4. 本書の作成および編集は青森市教育委員会が行い、木村淳一・相馬俊也（平成15～17年度青森市埋蔵文化財調査員）・松橋智佳子（平成15・16年度青森市埋蔵文化財調査員）が担当した。内訳は土器の分類と第1分冊第Ⅱ章A区の遺構と石器以外の遺物について執筆・編集を相馬が、石器に関する分類と記述を松橋が在籍当時作成し、その後の調査成果等を踏まえ木村が一部修正・再編集を行った。それ以外の部分の執筆および編集は木村が担当している。

また、発掘調査は前述の担当以外に小野貴之（青森市教育委員会文化財主査、平成19年度担当）、設楽政健（青森市教育委員会文化財主査、平成17年度担当）が現地調査を担当した。

5. 基準点測量および遺構測量図化の一部は国際航業（株）に委託を実施した。なお、巻首図版2の下段に掲載した埋没林の合成写真については測量図化業務の成果の一部である。

6. 遺物実測図トレース業務および一部の遺物実測業務については次の機関に委託を実施した。

（株）アルカ、（株）イビソク、（株）シン技術コンサル、（株）ラング

7. 本書の作成に際し、A区の石質鑑定について故工藤一彌氏（当時青森県総合学校教育センター）、その他の調査区についての石質鑑定を島口天氏（青森県立郷土館）に依頼した。また、掘立柱建物跡については故高島成術氏（前八戸工業大学教授）に調査指導を賜り、門下の中村隼人氏（日本建築学会員）に検討して頂いた。

8. 掲載した資料に関する原図・データ等は、一括して青森市教育委員会が保管している。なお、遺物写真図版中に掲載した木簡の赤外線写真については、独立行政法人奈良文化財研究所中村一郎氏による撮影である。

9. 本報告に係る発掘調査および報告書作成にあたって、下記の諸氏・機関等からご指導・ご協力を頂いた。記して感謝申し上げます次第である。（順不同・敬称略）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、青森県教育庁文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センター、伊藤武士、伊藤由美子、井上雅孝、岩田安之、宇部則保、大山幹成、葛西勲、鍋江宏之、工藤清泰、齋藤淳、柳原忠高、佐々木由香、白鳥文雄、島口天、鈴木三男、出越茂和、能城修一、藤原弘明、古川淳一、八木光則、渡辺晃宏

# 凡 例

1. 図版番号は、本分冊中の通し番号で表記した。表記方法としては図版番号とともに分冊番号である I を先頭に付した。具体的には「図 I-〇」という形にした。

2. 遺構の掲載について

(1) 方位は国土地理院第 X 系平面直角座標系に基づく座標北である。座標系は旧日本測地系 (TOKYO) に基づいている。

(2) 各図の縮尺は以下の縮尺を基本とし、それ以外のものについてはスケールを付して図示した。

1/400 1/300 1/180 1/120 1/100 1/80 1/60 1/30 1/20 1/10

(3) 水平基準は海抜高をメートル (m) で表示した。

(4) 遺構の略号は S I = 竪穴住居跡・竪穴遺構、S K・S K a = 土坑、S E・S E a = 井戸跡、S T P = 溝状土坑 (Tピット)、S B・S B a = 掘立柱建物跡、S P = ビット、S D = 溝跡、S N = カマド状遺構・炉跡・焼土状遺構、S C = 埋設土器遺構、S X = その他の遺構、S F = 道路跡 である。

(5) 遺構番号については、調査区単位で遺構の種類毎に番号を付した。具体的には遺構の略号-番号とした。(例: 第 1 号竪穴住居跡 = S I - 0 1) なお、調査区を跨いで検出した遺構について、調査年次単位で個々の遺構名が付され精査されているものがある。本報告にあたっては統括できるものは統括し、遺構種別の変更等も反映し、調査時の遺構名を付した。

(6) 遺構の規模については、基本的に長軸×短軸×深さを c m で表示した。このうち深さについては、遺構確認面からの計測値を記した。

(7) 本書の土層の注記については、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 1996) に準拠した。

(8) 本書の遺構図中で使用されるドット等の指示については下図のとおりである。

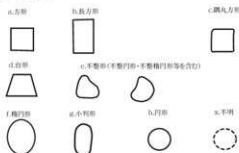
L.B.: ロームブロック  
P.B.: パミズブロック

## 遺構中のドット 種別略号

土器	● P	焼土範囲弱		灰炭範囲		火床面	
石器・石製品	▲ S	焼土範囲中		火山灰範囲		遺構内遺物範囲	
土製品	◆ CR (砂眼) CH (硝口) CF (灰付着砂眼)	焼土範囲強		ローム範囲		硬化面	
鉄製品	▲ F	炭化物範囲		貼床範囲弱			
木製品	● W	貼床範囲		貼床範囲強			
骨	■ B						
植物種子	● NP						
その他	●						

(9) 土坑やビットの観察表中で表記した記号は、当委員会が平成 18 年度に刊行した『石江遺跡群発掘調査報告書第 9 4 集』で提示した分類に基づき提示している。形状の分類については下記に提示する。

## ① 平面プラン



## ② 断面プラン

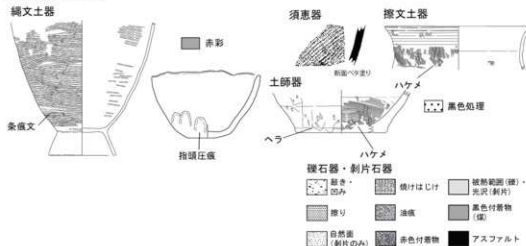


### 3. 遺物の掲載について

(1) 各図の縮尺は以下のとおりである。なお、一部の資料については下記に提示した以外の縮尺で取り扱ったものもあり、スケールで表記している。

土器 1/3を基本に1/2, 1/4 石器・石製品 1/2・1/3・1/10 土製品1/2・1/3  
木製品1/2・1/3・1/8・1/12 古銭1/1

### (2) 遺物実測図の表現



### 遺物の分類

本報告については、以下の分類で報告している。

#### (1) 土器

本遺跡では、縄文時代前期初頭から平安時代までのもの主に出土しており、便宜的にそれぞれを第Ⅰ～Ⅷ群まで分類した。また、縄文時代の土器については、この群にアルファベットを組み合わせて細分した。

#### 第Ⅰ群 縄文時代前期の土器

- A類 前期初頭に比定されるもの
- B類 円筒下層式に比定されるもの

#### 第Ⅱ群 縄文時代中期の土器

- A類 円筒上層式に比定されるもの
- B類 椀林・最花式に比定されるもの

#### 第Ⅲ群 縄文時代後期の土器

- A類 十纏内Ⅰ式に比定されるもの
- B類 十纏内Ⅱ・Ⅲ式に比定されるもの
- C類 十纏内Ⅳ・Ⅴ式に比定されるもの

#### 第Ⅳ群 縄文時代晩期・弥生時代の土器

#### 第Ⅴ群 平安時代の土器

#### 第Ⅵ群 中世の土器

#### 第Ⅷ群 近世以降の陶磁器等

#### (2) 石器等 (A区執筆のみ適用)

石器の分類については定形的な石器を1～14類にわけ、定形的と認定しがたい加工痕、使用痕剥片を15類、石核、剥片類を16類とした。なお他の器種からの転用品は転用後の器種に分類した。また、B区以降の調査区および石製品については分類記号を用いなかった。

#### 1類 石織

- a 回基無基織
- b 平基有基織
- c 凸基有基織
- d 棒葉形織
- e 石織未製品

#### 2類 石槍

#### 3類 石鏃

- a つまみ状の頭部+踵部を持つもの
- b 棒状のもの
- c 剥片の一端に加工調整して踵部を作り出したもの

#### 4類 石匙

- a 縦型石匙
- b 横型石匙

#### 5類 石筥

#### 6類 スクレーパー

- a 搔器
- b 削器

#### 7類 異形石器

#### 8類 磨製石斧

#### 9類 石鏃

- a 4ヶ所の打ち欠きをもつもの
- b 長軸の両端に打ち欠きをもつもの
- c 短軸の両端に打ち欠きをもつもの

#### 10類 浮子

#### 11類 敲磨類

- a 敲石
- b 磨石
- c 回石
- d 磨・敲打痕などの使用痕を複合して有るもの

#### 12類 北海道式石冠

#### 13類 半月状扁平打製石器

#### 14類 石皿

#### 15類 砥石

#### 16類 加工痕、使用痕のある剥片

- a 剥片に加工痕がみられるもの (R・フレイク)
- b 剥片に使用痕がみられるもの (U・フレイク)

#### 17類 石核、剥片類

- a 石核
- b 剥片、碎片

# 目 次

## 巻首図版

### 序

### 例言

### 凡例

### 目次

## 第I章 調査の概要

### 第1節 調査経過・・・・・・・・・・・・・・ 3

### 第2節 遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・ 5

### 第3節 基本層序・・・・・・・・・・・・・・ 5

## 第II章 A区

### 第1節 縄文時代

#### 1. 竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 9

#### 2. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 70

### 第2節 古代

#### 1. 竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 89

#### 2. 井戸跡・・・・・・・・・・・・・・ 102

#### 3. その他の遺構・・・・・・・・・・・・・・ 102

### 第3節 時期不明の遺構

#### 1. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 103

#### 2. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 103

#### 3. ビット・・・・・・・・・・・・・・ 110

### 第4節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 110

## 第III章 B・C区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴遺構・・・・・・・・ 146

#### 2. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 190

#### 3. 井戸跡・・・・・・・・・・・・・・ 207

#### 4. 焼成関連遺構・・・・・・・・・・・・ 210

#### 5. 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・ 215

#### 6. その他の遺構・・・・・・・・・・・・ 217

#### 7. ビット・・・・・・・・・・・・・・ 227

#### 8. 畝状遺構・・・・・・・・・・・・・・ 238

#### 9. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 238

#### 10. 土器埋設遺構・・・・・・・・・・・・ 283

#### 11. 埋没林・・・・・・・・・・・・・・ 284

### 第2節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 284

## 第IV章 D区

### 第1節 検出遺構

#### 1. その他の遺構・・・・・・・・・・・・ 345

#### 2. ビット・・・・・・・・・・・・・・ 345

#### 3. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 345

## 第V章 E区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 畦畔・・・・・・・・・・・・・・ 347

## 第VI章 F区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 349

## 第VII章 G区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・ 367

#### 2. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 375

#### 3. 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・ 378

#### 4. 掘立柱建物跡・ビット・・・・・・・・ 378

#### 5. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 382

### 第2節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 393

## 第VIII章 H区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴遺構・・・・・・・・ 395

#### 2. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 422

#### 3. 焼成関連遺構・・・・・・・・・・・・ 427

#### 4. 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・ 427

#### 5. その他の遺構・・・・・・・・・・・・ 431

#### 6. 掘立柱建物跡・ビット・・・・・・・・ 434

#### 7. 道路跡・・・・・・・・・・・・・・ 434

#### 8. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 447

### 第2節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 454

## 第IX章 I区

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴遺構・・・・・・・・ 455

#### 2. 土坑・・・・・・・・・・・・・・ 513

#### 3. 焼成関連遺構・・・・・・・・・・・・ 515

#### 4. 溝状土坑・・・・・・・・・・・・・・ 516

#### 5. その他の遺構・・・・・・・・・・・・ 516

#### 6. ビット・・・・・・・・・・・・・・ 521

#### 7. 溝跡・・・・・・・・・・・・・・ 521

### 第2節 遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・ 521

### 引用・参考文献・・・・・・・・・・・・ 521

### 報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・ 539

### 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

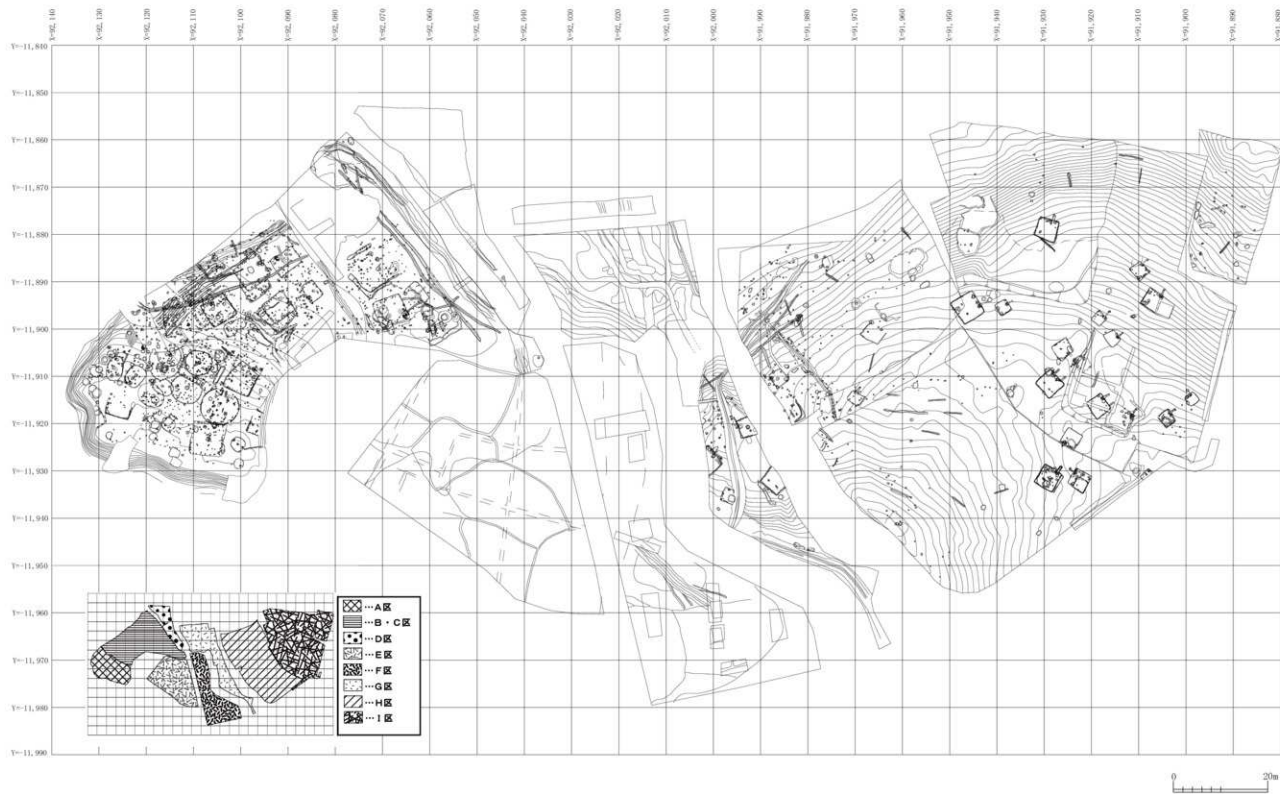


图 1-1 新城平面图(4) 遗址遗构配置图·调查区划图



# 第I章 調査の概要

## 第1節 調査経過

石江土地区画整理事業に伴う石江遺跡群発掘調査の調査経緯および平成15～19年度の調査経過は、平成21年度刊行の『石江遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』第1分冊第1章第5節中で掲載した。しかし、調査全体の経過が主眼であった為、本節では新城平岡(4)遺跡を中心に調査経過について掲載する。

平成15年度から本発掘調査を実施した石江遺跡群発掘調査は、原因者である青森市都市整備部石江土地区画整理事務所の実施する工事工程に対応した調査である。その為、遺跡ごとに発掘調査を完了させていく形ではなく、各遺跡の工事で破壊される部分を優先して発掘調査を実施した。

新城平岡(4)遺跡に対しても同様の措置で、平成15年度にA区とした北側の調査区を調査し、平成16年度は別遺跡の調査対応で調査実施がなく、平成17年度にB区の一部を調査、平成18年度にB・C・D・E・F・H区を調査、平成19年度にD・G区を調査、平成20年度にはH・I区を調査し、平成21年度にI区の残地を調査した。一部公園の緑地部分として保存されることとなり、部分的調査にとどめた地点を除き、周知の遺跡として登録された範囲のほぼ全域を調査完了している。なお、平成20年度の調査成果で、遺跡範囲について変更する必要性が生じ、平成20年6月11日付け青教文第349号で範囲拡張されている。

整理作業は、平成15年度に発掘調査を実施したA区を対象に整理作業を実施し、調査を担当した埋蔵文化財調査員が平成17年度に一度A区のみで調査成果の報告書として組み上げている。しかし、新幹線開業を控えた急ピッチの造成工事に対応する発掘調査優先の予算編成で、報告書刊行は先送りとなった。その後、埋蔵文化財調査員が退職し、平成18年度にA区の斜面下方に相当するB・C区で調査成果によって新たな知見が加わり、A区の遺構評価についても再検討する必要性が生じた。しかし、その取扱いについては、発掘調査優先の事業が交渉し、発掘調査刊行可能な状況まで留保せざるを得なかった。

石江土地区画整理事業に関する石江遺跡群発掘調査報告書は、平成19年度に青森県に発掘調査委託を実施し、翌平成20年度に発掘調査報告書を刊行した新田(2)遺跡の発掘調査報告書(青森県教育委員会2009)を皮切りに、青森市教育委員会でも刊行されるようになった。青森市教育委員会刊行分としては、平成21年度に石江遺跡群調査概要・分析編1と新田(1)遺跡遺構図版編、平成22年度には新田(1)遺跡遺物図版編と新田(2)遺跡

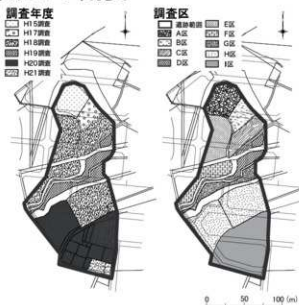


図1-2 新城平岡(4)遺跡調査年次図・調査区図

遺構図版・遺物図版編、さらに新田(1)・(2)遺跡縄文時代遺物編と石江遺跡群分析編2が刊行され、平成23年度には、新城平岡(4)遺跡の報告書を刊行する予定であった。

しかし、平成22年度末に起こった東日本大震災の影響で予算の減額措置となり、刊行そのものが先送りの措置が採られ、整理作業・報告書作成のみが作業として実施された。

前述のとおり、平成15年度に発掘調査を実施したA区について、調査を担当した調査員を主担として平成17年度に一度報告書としてされているが、その後の調査成果による再解釈が必要とされる部分が生じた。本報告書では当初作成された内容についてA区のみで成り立つ内容についてカットし、事実記載は、調査を直接担当した当時の執筆者の記述を優先し、必要に応じ註付した。また、本書は、平成18年度に刊行した東北新幹線建設事業に伴う報告書や、平成21年度以降当委員会で刊行した報告書より後発の報告書であるが、A区に関する記述の作成時期が最も古いもので、記載内容や表記方法に差が生じている。掲載に際し、大きな変更はせず、作成当時の内容を掲載した。

自然科学分析の成果は、他遺跡の追加データも含め、石江遺跡群分析編3の中で掲載した。

その他、新城平岡(4)遺跡についても鉄関連遺物の出土があるが、その整理作業は、調査員穴澤義功氏を中心に平成22年度から整理を実施し、平成24年度中に自然科学分析を実施予定である。その成果は、新田(1)・(2)遺跡と同様に石江遺跡群の鉄関連遺物の成果報告として事業最終年度の平成25年度に報告予定である。



図 1-3 新城平岡(4)遺跡位置図



## 第2節 遺跡の環境

新城平岡(4)遺跡は、土地区画整理事業に伴う発掘調査以前は、高岡(5)遺跡(旧台帳番号01074)と西バイパス(1)遺跡(旧台帳番号01077)の二つの遺跡として登録されていた。

土地区画整理事業の事前協議に伴い平成14年度に実施された試掘・確認調査により、二遺跡が統合され、新城平岡(4)遺跡となった。

遺跡は、新城川右岸の河岸段丘として小高い丘陵部と、一段下がった平坦面がある。標高は5.4～11.8mである。調査前の土地利用は、丘陵部の一部は盛土され宅地として、低い平坦面は水田として、その他は畑地や荒蕪地として利用されていた。

遺跡の東側は、かつて石江堤と呼ばれる溜池が存在していたが、調査前の時点でほとんどが埋め立てられ、一部が湿地として残る程度であった。また、丘陵部も用水路が複数横断し開削されていた。

(※図1-4を見ると旧高岡(5)遺跡は、石江堤の中まで登録されていたことがわかる。)



図1-4 新城平岡(4)遺跡旧遺跡登録範囲図



図1-5 新城平岡(4)遺跡の比高差について

## 第3節 基本層序

前節のとおり、遺跡は河岸段丘上の丘陵地と一段低い平坦地の区分で、土地利用状況も異なる状況であった。しかし、発掘調査の結果、地点によっては調査前の現況とは大きく異なる土地改変が生じた箇所が含まれることが把握できた。

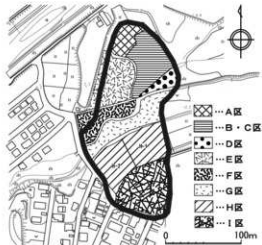


図1-6 新城平岡(4)遺跡調査区分割図

発掘調査は、土地の境界や用水路によって区分された地点ごとに図1-6に再掲したとおりA区～I区まで区分し調査した。北側の旧西バイパス(1)遺跡側のエリアであるA～D区のうち新城川に近接したA区が最も標高が高く、D区側へ向かって緩やかに傾斜する状況で、B区～D区及びG区の東側とH区の斜面下方の一部には砂が厚く堆積している箇所が確認されている。この砂は青森県埋蔵文化財調査センターが調査した新田(1)遺跡、新田(2)遺跡の北側の地点で確認された砂と同質である。A区の東西の基本層序中でも堆積が確認されているが、西側の地点では丘陵の開削された部分の下位にも砂が堆積しており、その上位に古代以降の溝跡(SD-04)が構築されている。また、B・C区では砂の上面に古代の堅穴建物(住居)などが構築されており、砂の下位の黒色土中から縄文土器が出土している。黒色土についてはC区の砂の下位の地点から埋没林を検出しており、ウィグルマッチング法による放射性炭素年代測定法の結果では2σの暦年代で弥生時代前期後半相当の年代値が得られている。人工遺物について黒色土中では、B区内でC層と取り扱った第2層から縄文時代中期の土器を主体とする遺物、A層と取り扱った第17層中から縄文時代後期を主体とする遺物が出土しているが、一部混在しており、流動の要因が強い状況である。

一方、旧高岡(5)遺跡のエリアであるH区とI区は青森県立青森西高等学校側から延びる丘陵の延長上にあたり、H-2区側では北西方向に、H-1区とI区側は東側の石江堤があった方向に傾斜している。東側に傾斜する斜面上に古代の堅穴建物(住居)

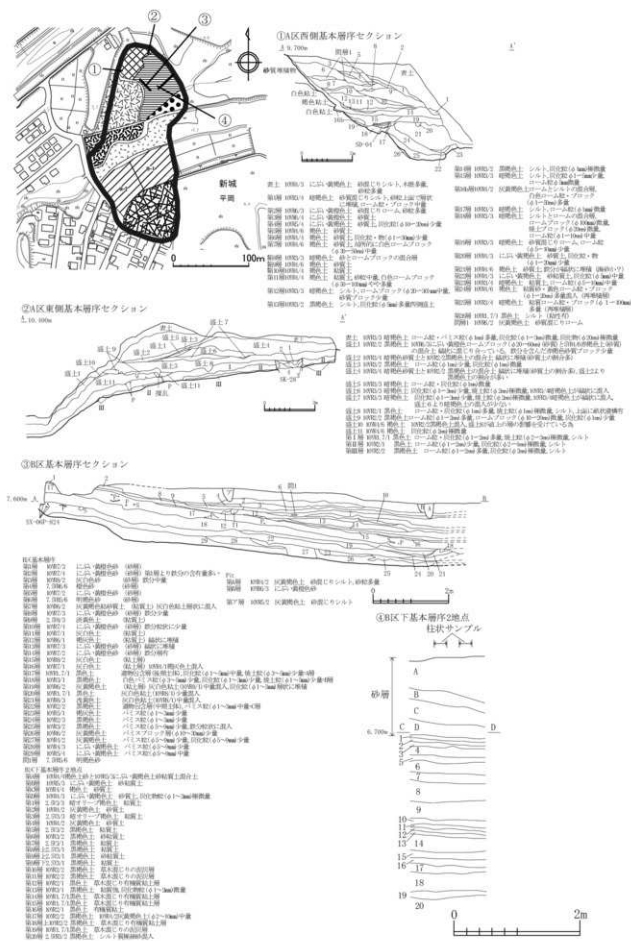


図 1-7a 新城平岡(4)遺跡基本層序 1





図 1-8 新城平岡(4)遺跡A区遺構配置図

## 第Ⅱ章 A区

A区の調査は、805㎡を対象とし、調査の結果、竪穴住居跡17軒、土坑56基、溝跡5条、竪状遺構1基、ピット142基を検出した。

これらの遺構は縄文時代中期、後期末葉、平安時代に帰属するものであり、このうち大部分が縄文時代の遺構と考えられる。調査区は遺跡北端の平坦面を中心とし、その周りを北から西側にかけては急斜面が、東から南側にかけて緩斜面が存在している。遺構の配置状況は縄文時代に帰属する遺構のほとんどは、平坦面と東側から南側にかけての斜面の落ち際に位置している。検出した遺構の状況を確認すると西側と北側は遺構が途中で切れ、急斜面となっている。これは、第1章第3節中で提示したとおり、丘陵の平坦部の側縁が段丘崖となっていて、旧河道の流路の影響により自然侵食された箇所と、人工的な開削によって切られた箇所が存在し、その変遷は複雑な過程を経たものであると考えられる。

よって、本調査区を中心とする平坦面自体は本来北から西側ではさらに広がっていた可能性が考えられる。以下では時代ごとに遺構の詳細を記述する。なお遺物の記述については遺構単位を優先するため、遺構に帰属するものをはじめに記述し、次に遺構に帰属しない遺物を時期別に分類し記述している（※本章のみ古代以降の遺構から出土した縄文時代の遺物は遺構外出土遺物扱いとし、遺構外出土遺物の箇所にて掲載している）。

### 第1節 縄文時代

#### 1. 竪穴住居跡

##### A・中期

SI-07 (図1-9・10)

〔位置〕 A-2の西側で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈し、規模は288×300×19cm、床面積は7.365㎡を測る。

〔壁〕 大谷火山灰層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕 大谷火山灰層を床面としている。多少凹凸が見られるが、ほぼ平坦で堅緻である。

〔壁溝〕 なし。

〔Pit〕 床面でPitを12基検出した。このうち主柱穴と考えられるものはPit1・2の2基である。南西側の壁の中央にPit1(40×65cm)、北東側の壁の中央に2(44×66cm)が向かい合う形で位置しており間隔は約260cmを測る。また壁際位置するPit3、6、7、8、9に関しては壁柱穴である可能性も考えられる。

〔炉〕 床中央付近で地床炉1基を検出した。浅い掘

り込みを有するもので、平面形は円形を呈し、規模は42×46×9cmを測る。

〔その他の付属施設〕 なし。

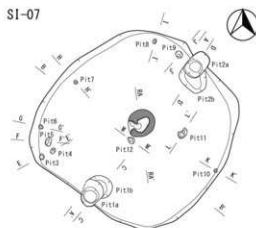
〔堆積土〕 6層に大別した。堆積土はA区基本土層第IV層の黒褐色土をベースとするが、褐色の度合いがかなり強いものである。全体的にローム粒、ブロックが多量に混入しており、また第5層がローム質土の層であるなど人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 8点図示した。1～5は深鉢形土器の口縁部である。すべて第II群A類に分類されるものである。1、2は台形状突起部分である。1はL原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付け、突起中央付近に内側から開けられた貫通孔が見られるものである。2も同じ台形状突起部分である。無文の隆帯を貼り付けたもので、貫通孔外面にも環状に無文の隆帯を貼り付けている。この2つは突起部分の形状が異なり、1は薄い作りで鋭角的であるのに対し、2では突起上部が肥厚しており、頂部は平坦な作りで、この平坦部分を取り囲むように隆帯を貼り付けている。3も波状口縁部でR L斜行縄文を地文とし隆帯を貼り付けている。隆帯は口唇外面では波状を呈し、胴部では刻目を施したのとなっている。この資料には内面から開けられた盲孔らしき痕跡が確認できるが、明確なものではなく胎土に混入した塵が剥落した痕の可能性も考えられる。4、5はともに平口縁部で、R L斜行縄文を地文とし、隆帯を貼り付けたものである。4は口唇下部が肥厚し、折り返し状口縁を呈するものである。口唇外面の折り返し部分の上には無文の隆帯を頂部が互い違いになるように交差させて貼り付けている。また胴部にも同じく無文の隆帯を貼り付けている。5も4と同じく口縁は折り返し状を呈し、口唇外面に波状の隆帯を貼り付けている。この資料には内外面からの補修孔が見られるものである。内面調整はミガキによるものであり、台形状突起部分では縦位、それ以外の部分では横位の調整となっている。これらは円筒上層c式に帰属するものと考えられる。

石器は1類が2点、12類が1点出土している。6は1類aである。7は1類bである。7の基部にはアスファルトの付着がみられる。1類の使用石材はいずれも珪質頁岩である。8は12類で住居内のピットより出土している。長軸の中央部分に敲打により帯状のくぼみが形成され、基底部には磨面が顕著にみられる。使用石材は安山岩である。

〔小結〕 本住居は明確に時期を決定できる要素は持ち得ないが、堆積土の様相が該期に帰属する住居の堆積土に近似していることから中期に帰属する住居として判断した。しかし該期の住居では平面形が精

SI-07



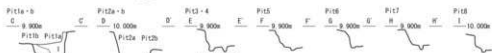
SI-07セクション  
A 10.100m



SI-07セクション  
B 10.100m

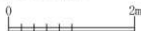


- SI-07  
第1層 10YR4/4 褐色土 ローム殻・ブロック(φ1-10cm)多量、炭化物(φ1-5cm)少量、シルト  
第2層 10YR4/8 暗褐色土 ローム殻(φ1-5cm)多量、炭化物(φ1-3cm)少量  
第3層 10YR2/3 黒褐色土 ローム殻(φ1-5cm)多量、炭化物(φ1-3cm)少量、シルト  
第4層 10YR4/8 褐色土 炭化物・ブロック(φ1-10cm)少量  
第5層 10YR4/8 褐色土 ローム殻(φ1-5cm)多量、ロームブロック(φ30cm)少量、炭化物(φ3cm)少量  
第6層 10YR5/8 暗褐色土 ローム殻少量  
第7層 10YR4/3 褐色土 ローム殻・ブロック(φ1-10cm)多量、炭化物(φ10cm)少量



Pit12a-b

- 第1層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)少量、焼土殻(φ1-1cm)少量  
第2層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)少量、シルト  
第3層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)少量、焼土殻・ブロック(φ3-20cm)多量、シルト  
第4層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)少量、シルト  
第5層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)少量、焼土殻(φ1-5cm)少量、シルト



Pit19

- 第1層 10YR4/8 暗褐色土 ローム殻(φ1-5cm)多量、炭化物(φ1-3cm)少量、シルト  
第2層 10YR2/3 暗褐色土 炭化物(φ1-5cm)多量、ロームブロック(φ30cm)少量、炭化物(φ3cm)少量  
第3層 10YR4/8 暗褐色土 ローム殻(φ1-5cm)多量、炭化物(φ10cm)少量

SI-07遺物分布



SI-07炉



SI-07炉

- 第1層 7.5YR2/3 暗褐色土 ローム殻(φ1-2cm)少量、炭化物(φ1-3cm)少量、焼土殻(φ1cm)少量、炭化物、シルト  
第2層 10YR2/4 暗褐色土 ローム殻少量、炭化物少量、シルト  
第3層 7.5YR2/4 暗褐色土 ローム殻(φ1-2cm)少量、炭化物少量、焼土殻(φ2cm)少量、シルト

SI-07遺物断面分布

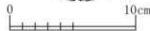
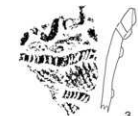
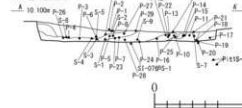


図 1-9 A区 SI-07-1

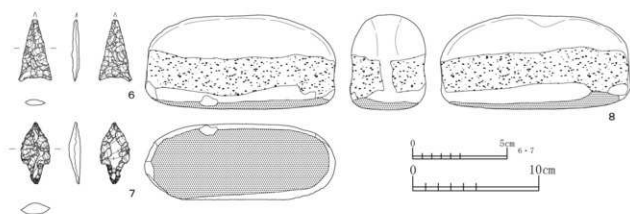


図 1-10 A区 SI-07-2

円形もしくは隅丸長方形を呈し、主柱穴配置が方形、または長方形を形作っているのに対し、本遺構では平面形は隅丸方形、主柱穴は対面する壁際に2基が位置するというように異なっていることから、本遺構と他の該期に帰属する住居には時間差が存在するものと考えられる。

SI-09 (図1-11-13)

〔位置〕 A-3の南側で検出した。

〔重複〕 SI-06、08、14と重複している。本遺構の堆積土がいずれの遺構にも切られており、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 楕円形を呈し、規模は468×340×48cm、床面積は12.941㎡を測る。

〔壁〕 月見野火山灰層を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕 大谷火山灰層を床面とし、ほぼ平坦で堅緻である。

〔壁溝〕 なし。

〔Pit〕 床面で柱穴を4基検出した。これらは主柱穴と考えられるもので、長方形に配置されている。規模はPit1(26×70cm)、2(23×52cm)、3(26×68cm)、4(28×62cm)を測る。柱穴の間隔は長軸約210cm、短軸約160cmを測る。Pit3はメインセクションA-A'ライン側で確認された堆積状況から、埋没途中に再掘削されており、1・2・4・5層は新しい段階での堆積土である。

〔炉〕 中央付近で地床炉1基を検出した。浅い掘り込みを有するもので、平面形は北東・南西方向に長い楕円形を呈し、規模は60×54×9cmを測る。

〔その他の付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 10層に分層した。自然堆積の様相を呈

する。堆積土は基本土層第IV層の黒褐色土がベースとなっているが、全体的に暗い印象で暗褐色の度合いが強いものである。壁際の第7～10層は廃絶過程における最初の段階での堆積土であり、壁崩壊の影響を受けているため第7、8層には黄色浮土の混入が見られる。

〔遺物〕 2点図示した。特徴的な遺物としては床面出土の黒曜石製縦型石匙と異形石器3点がまとまった状態で出土している。1～5は第II群A類の土器である。1～4は深鉢の口縁部である。1は台形状突起部分で、口唇部は折り返し状の肥厚したものとなっている。隆帯はL原体の側面圧痕を施したもので、口唇外面では波状を呈し、その他の部分では環状のモチーフとなっている。突起中央付近には外面に環状の隆帯を貼り付けた貫通孔が見られる。2は波状を呈し刻目を施した隆帯を貼り付けている。3、4はともに口縁が折り返し状を呈し肥厚した平口縁部である。L原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付けており、隆帯は口唇外面では波状を呈している。3は結束第1種を地文としている。4も同様なものであるが地文は確認できなかった。5は胴部で、L原体の側面圧痕を施した隆帯の貼り付け、半裁竹管状工具による刺突を施している。内面調整はミガキによるものである。これらは円筒上層c式に帰属するものである。6～10は遺構に帰属しない遺物である。6～8は第I群A類の土器である。6は半裁竹管状工具を使用した押し沈線文を施した胴部である。7は口唇が薄い作りの口縁部である。端部は若干丸みを帯びる。文様は米粒形の刺突列を重ねたものである。8は波状口縁部である。磨耗のため明確ではないがLRの斜行調文を施しているようである。いずれの資料も内面調整はナデによるものである。9、10は第I群B類の土器の口縁部である。

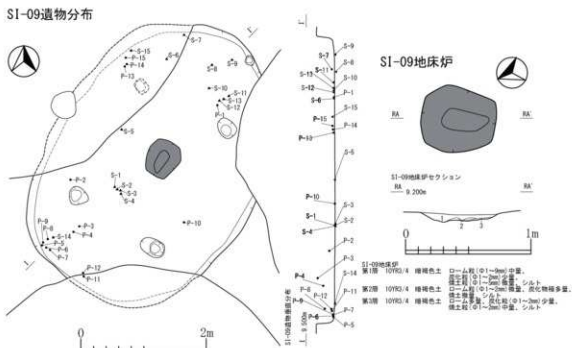
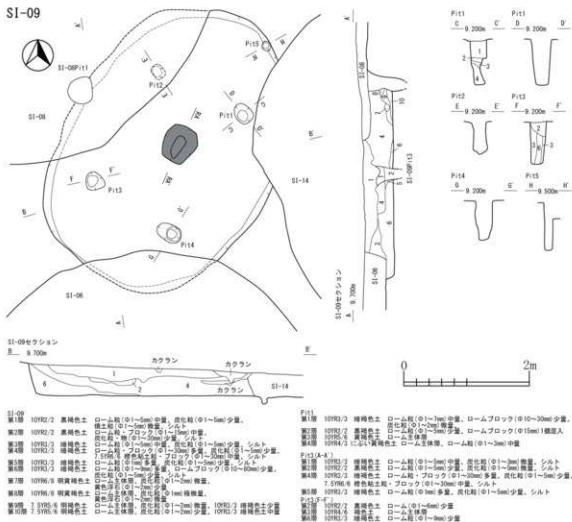


図 1-11 A区 SI-09-1



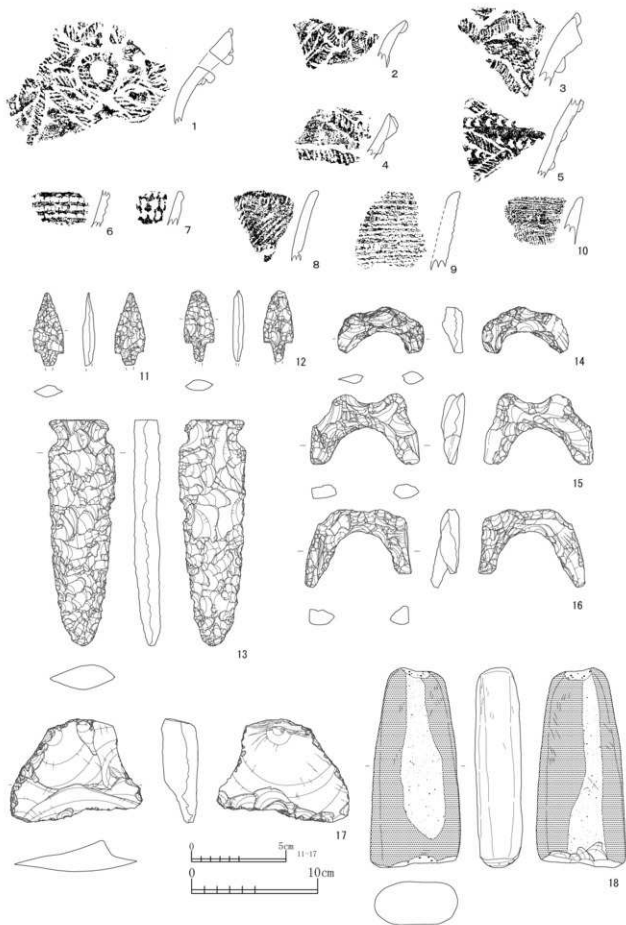


图 1-12 A区 SI-09-2

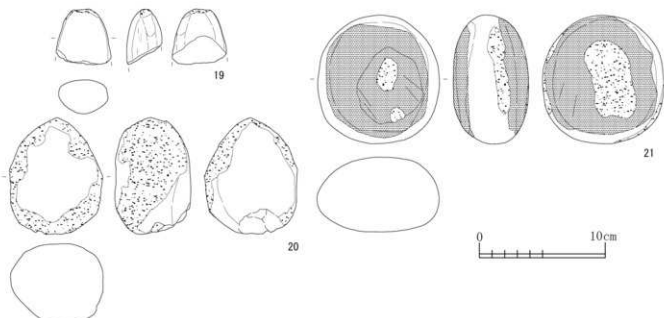


図 1-13 A区 SI-09-3

9は口唇形状を内削ぎ状にし、文様は単軸絡条体を横位回転施文したものである。10は口縁部に単軸絡条体の横位回転、その下には同じ施文原体を縦位に方向を変えて回転施文したものである。内面調整はナデによるものである。また10には外面に炭化物の付着が見られる。

石器は1類が2点、4類aが1点、7類が3点、6類bが1点、9類bが1点、11類が3点出土している。11、12は1類bである。13は4類aである。両側辺の磨耗が顕著である。13～16は床面からまとまった状態で出土している。17は6類bである。横長剥片を素材としている。刃部および刃部以外の右側辺にも微細剥離がみられる。18は9類bである。磨製石斧を破損後に石錘に転用したもので、長軸の両端部に敲打による抉りが出作されている。19は11類aである。磨製石斧を破損後に敲石に転用したもので、端部に敲打痕がみられる。20は11類aである。槽円盤の周辺部に敲打痕がみられる。26は11類dである。やや扁平な円盤の表裏面に磨面と敲打痕がみられるほか、右側辺にも敲打痕がみられる。剥片石器の使用石材は13の黒曜石以外は珪質頁岩、礫石器の使用石材は18緑色凝灰岩、19珉岩、20玉髓、21安山岩である。

〔小結〕本遺構は床面出土遺物から縄文時代中期に帰属する遺構と考えられるが、該期の住居で槽円形を呈するものがほぼ同じ軸方向で存在しているのに対し、本遺構だけが異なる軸方向で存在している。このため本遺構と他の住居とは時間差があったものと考えられる。

SI-17(図1-14-17)

〔位置〕A-3の東側で検出した。

〔重複〕SI-19、SK-14、47、SD-03と重複している。新旧関係については土層堆積状況からSI-19、SK-47<本遺構<SK-14、SD-03の関係である。

〔平面形・規模〕槽円形を呈し、規模は532×352×34cm、床面積15.263㎡を測る。

〔壁〕月見野火山灰層を壁とし、ほぼ垂直に立ち上る。

〔床〕大谷火山灰層を床面とし、ほぼ平坦で壁緻である。

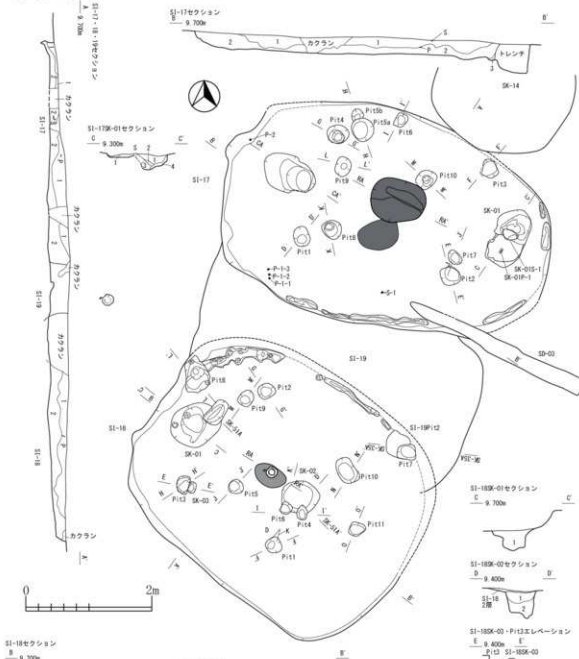
〔壁溝〕南壁から東壁にかけて部分的に遺存する。規模は幅12～20cm、深さ約6cmを測る。

〔Pit〕床面でPitを10基検出している。このうち主柱穴と考えられるものはPit1(25×73cm)、2(28×77cm)、3(27×66cm)、4(27×86cm)の4基である。これらは長方形に配置されており、間隔は長軸約250cm、短軸約180cmを測る。

〔炉〕床中央付近で床炉1基を検出した。浅い掘り込みのもので、平面形は不整形を呈し、規模は90×70×10cmを測る。

〔その他の付属施設〕北西壁付近で埋設土器を検出した。埋設状況は口縁部を北西方向に向けた形で斜位に埋設されていた。土器は円筒上層c式の高さ65cmの深鉢で、口縁部の4単位の突起部を全て欠損した状態で埋設されていた。横位に埋設された場合、埋設後の欠損状況として流動が生じたとしても、埋設部分に突起が残存していることが想定され、また、住居内や土器内、掘り方のいずれの堆積土中からも突起部分が出土しなかったことから、この土

SI-17・18



SI-17  
 第1層 10YR2/2 黄褐色土 ローム層(01~5m)中層, 炭化粒(01~2m)少量  
 第2層 10YR2/3 黄褐色土 焼土層(01m)少量, 黄化層(1~2m)少量, シルト  
 第3層 10YR2/3 黄褐色土 ローム層(01~5m)中層, 炭化層(01~2m)少量, シルト

SI-17K-01  
 第1層 10YR2/2 黄褐色土 ローム層(01~5m)少量, 炭化粒(01~5m)少量  
 第2層 10YR2/3 黄褐色土 焼土層(01~2m)少量, 炭化層(01~2m)少量, シルト  
 第3層 10YR2/3 黄褐色土 ローム層(01~5m)少量, 炭化層(01~2m)少量  
 第4層 10YR2/3 黄褐色土 ローム層(01~5m)少量, 炭化層(01~5m)少量, シルト

SI-18  
 第1層 10YR2/2 黄褐色土 ローム層(01~2m)少量, 炭化層(01~8m)少量  
 第2層 10YR2/2 黄褐色土 焼土層(01~5m)少量, 黄化層(01~2m)少量, シルト  
 第3層 10YR2/3 黄褐色土 ローム層(01~5m)中層, 炭化層(01~2m)少量, シルト

SK-01  
 第1層 10YR4/4 褐色土 ローム層(01~8m)中層, 炭化層・焼土(01~20m)中層  
 SK-02  
 第1層 10YR2/2 黄褐色土 ローム層(01~5m) - ロームブロック(010~50m)少量, 炭化層・焼土(01~20m)中層, 焼土層(01~2m)少量, シルト  
 第2層 10YR2/4 黄褐色土 ローム層(01~5m)少量, 炭化層(01~8m)中層, シルト

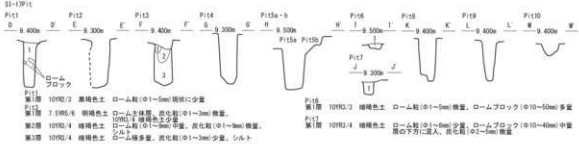


図 1-14 A区 SI-17・18-1

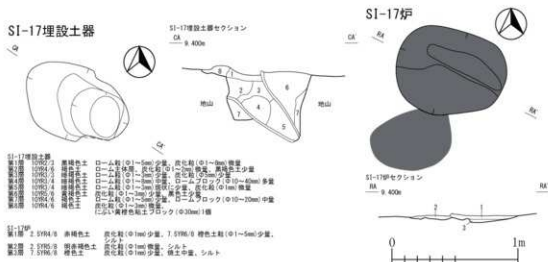


図 1-15 A区 SI-17-2

器はあらかじめ突起部分を欠いてから埋設されたものと考えられる。この他、埋設土器とは反対側の南東側壁付近で土坑SK-01を検出した。平面形は不整形の土坑を2基連結したような形を呈し、床面には段差が見られ、南側の部分が高くなっている。この段差の部分に立てかける形で甕が配置されている。規模は100×50cm、深さは南側で5cm、北側で24cmを測る。これらは主柱次が形成する長方形の短軸側に位置しており、埋設土器は北西側、SK-01は南東側に位置している。

【堆積土】 3層に分層した。ところでここで擾乱を受けているが全体的には自然堆積の様相を呈する。第1、2層は黒褐色土で基本土層第IV層がベースになると考えられる。第3層は壁溝の堆積土である。いずれの層にもローム粒、炭化粒、焼土粒の混入が認められる。

【遺物】 19点図示した。1~7は第II群A類の土器である。1は埋設土器に使用された土器である。波状口縁を呈し、前述のとおり、突起部分を全て欠損している。結束第1種を地文とし、刻目を施した降帯を平行、弧状、環状に貼り付けて文様を構成している。口縁部文様帯と胴部の区画は、平行に貼り付けられた降帯とその下に歯溝状の降帯を貼り付けて区画文様としている。底部には外面から開けられた直径約8cmの穿孔が見られる。胎土には砂粒、小礫の混入が見られ、内面調整はミガキによるものである。2は結束第1種を地文とし、胴下部にやや膨らみを帯びて立ち上がり、波状口縁が大きく外反する器形を呈するものである。台形状突起部分には内面からの貫通孔が見られる。口縁部文様帯にはL原体の側面圧痕を施した降帯を波状や弧状、平行に貼り付けて構成している。内面調整はミガキによるもので、口縁部付近では横方向、胴部では縦方向のものである。3は胴部から底部にかけてのものである。やや膨らみを帯びて立ち上がる器形のもので、

胴部には結束第1種が施文されている。内面調整は縦方向のミガキによるものである。4、5は折り返し状の肥厚した平口縁部である。4は結束第1種を地文とし、刻目を施した降帯を貼り付けたものである。5はL R斜行縄文を地文とし、L原体側面圧痕を施した降帯を口唇外面に波状に貼り付けたものである。内面調整は口縁部付近では横方向のミガキ、以下の部分はナデによるものである。6、7は胴部資料である。6は結束第1種を地文とし、L原体の側面圧痕を施した降帯と降帯間に施した刺突により文様を構成したものである。7も結束第1種を地文とし、降帯を貼り付けたものである。降帯には地文と同じ原体を回転施文している。内面調整は6がナデ、7はミガキである。8~11は遺構に帰属しない土器である。8は第I群A類の土器の口縁部である。口唇形状は丸みを帯び、爪形の刺突列を斜位に施したものである。内面調整はナデによるものである。9、10は第I群B類の土器である。9はR L Rの複節斜行縄文が施された胴部である。内面調整は縦位のミガキによるものである。10は底部片である。平底を呈し単軸路条体を施しているものである。内面調整はともにミガキによるものである。11は第III群の土器である。上部につまみ状の突起を有するもので、無文で器面調整は横位のミガキによるものである。

石器は1類が1点、5類が1点、11類が4点、14類が1点、15類が1点出土している。12は1類dである。茎部にはアスファルトの付着がみられる。13は1類gの可能性が考えられる。14は11類aである。磨製石斧を破損後に蔽石に転用したもので端部に蔽打痕がみられる。15は11類bである。やや扁平な楕円形の表裏面と、両側面に磨面がみられる。16は11類dである。扁平環の周辺部に蔽打痕とそれにとりまじり刺痕がみられるほか、右側縁にザラザラの磨面がみられる。17は

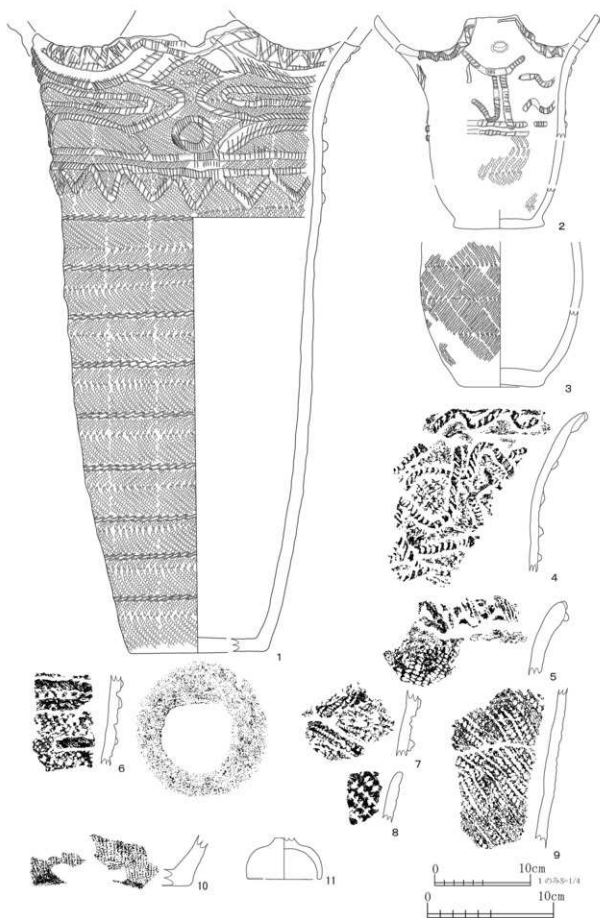


图 1-16 A区 SI-17-3

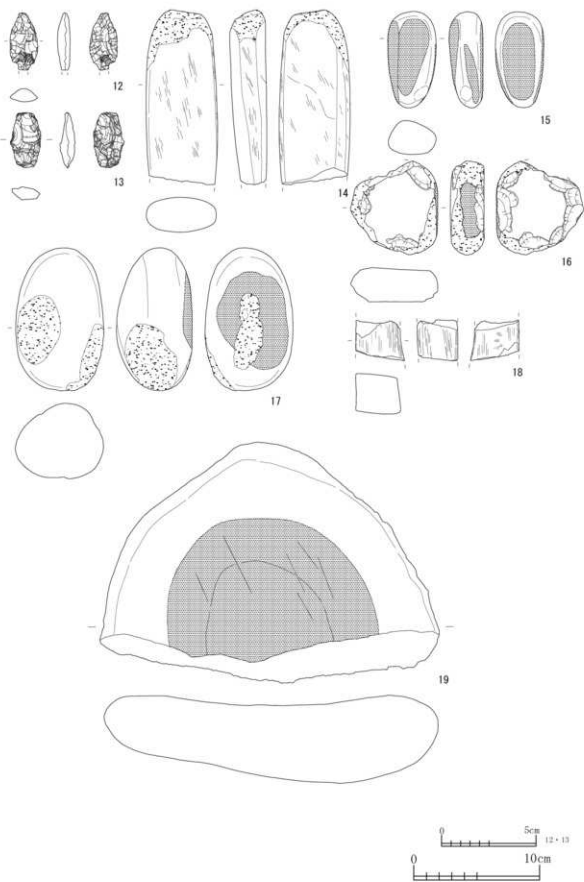


図 1-17 A区 SI-17-4

11類dである。楕円礫の裏面に磨面、表裏面と右側縁に敲打痕がみられる。18は15類である。角柱状の礫の断片に多数の線状痕がみられる。19は14類である。扁平でやや大型な礫を素材としており、片面に磨面がみられる。剥片石器の使用石材は全て瑛質頁岩、礫石器の使用石材は14、17凝灰岩、15、16、19安山岩、18流紋岩である。

【小結】 本遺構は埋設土器から円筒上層c式に帰属する住居である。近接するS I - 18は平面形、柱穴配置、出土遺物に共通性が見られ、堆積土も同じ様相（自然堆積、色調、黄色浮石が混入など）を呈しており、両者の配置は平坦面側を上とした「ハ」字状に並んでいる。本住居の築造の時期は堆積土の状況が酷似しているため、S I - 18とほぼ同じものと考えられる。ただし構築時期については炉の形態が本遺構は地床炉であるのに対し、S I - 18は土器埋設炉というように異なっているので構築時期については時間差があるものと考えられる。

## S I - 18 (図1-14・18-20)

【位置】 A-3東側で検出した。

【重複】 S I - 19、SK-51、52と重複している。本遺構がいずれの遺構の堆積土を切っているため、本遺構が新しい。

【平面形・規模】 北東部が擾乱により破壊されているが、残存した壁溝から判断すると隅丸長方形を呈するものである。規模は464×364×31cm、床面積は15.844㎡を測る。

【壁】 残存しているのは北西から南東にかけての壁で、ほぼ垂直に立ち上がる。

【床】 大谷火山灰層を床面としており、多少起伏が見られるが、ほぼ平坦で堅緻である。

【壁溝】 北隅から東側にかけて断続的に遺存している。規模は幅10~15cm、深さ1.6~11.7cmを測る。

【Pit】 床面でPitを10基検出している。このうち主柱穴と考えられるものはPit1(30×67cm)、2(24×62cm)、3(15×53cm)、10(28×44cm)の4基である。これらは1辺約180cm間隔で方形に配置されている。またPit1と10を結んだラインの南東側に位置するPit11(28×40cm)はほぼ同じ規模を測るもので、これも加えた場合、主柱穴の配置は五角形となる可能性も考えられる。

【炉】 床面中央付近で土器埋設炉1基を検出した。53cm×34cmの楕円形を呈する焼土の坩がりの北東側に土器を埋設したものである。炉体に使われた土器は深鉢形土器の胴下半部を使用しており、底部を欠損したものである。胴部にはR L斜行縄文が施され、被熱のためか器面は内外面ともに荒

れている。また内面下部には帯状に黒色化した部分が見られる。焼成は不良で、胎土には砂粒が若干混入している。

【その他の付属施設】 床面で土坑3基を検出した。SK-01は主柱穴が形作る方形の北西辺の外側に位置している。平面形は不整形円形を呈し、規模は直径76cm、深さ30cmを測る。SK-02は土器埋設炉の南東側に隣接している。平面形は不整形円形を呈し、規模は55×48cmを測る。壁は南東側では段状に立ち上がるが、他の側ではほぼ垂直に立ち上がる。底面は北西側に傾斜している。SK-03は南西コーナー付近に位置するPit3と東側で切り合っており、新旧関係はPit3よりも古いものである。平面形は不整形円形を呈し、規模は(26)×10×18cmを測る。SK-03からは大量の石器が重ねられた状態で出土しており遺物の取り上げは5回に及んだ。筒状石器が中心であり、埋設過程で紛れ込んだものではなく、埋納された可能性が考えられる。

【堆積土】 2層に分層した。自然堆積の様相を呈する。第1・2層は黒褐色土で基本土層IV層がベースとなる。

【遺物】 32点図示した。1~5は第II群A類の土器である。1は炉体に使われた土器である。深鉢形土器の胴下半部を使用しており、底部を欠いたものである。胴部にはR L斜行縄文を施している。内面調整は縦方向のミガキであり、内面下部には帯状に黒色化した部分が見られる。2~5は平口縁部である。折り返し状の肥厚した口縁を持ち、隆帯を貼り付けているものである。2は刻目を施した隆帯を貼り付け、また口唇直下には環状に無文の隆帯を貼り付けている。3、4は結束第1種を地文とするものである。3は刻目を施した隆帯を波状に、4は無文の隆帯を2条交差させて貼り付けている。5はL原体の側面圧痕を施した隆帯と刺突により文様を構成している。内面調整は主にミガキであるが、胴部ではナゲによる調整が行なわれているものもある。6は波状口縁部である。突起は丸みを帯び舌状を呈し、R L斜行縄文が施されている。内面調整はミガキによるものである。1~5は円筒上層c式に帰属するものである。7は第II群B類の土器である。磨耗のため明確ではないが、単軸絡条第1類を地文とし、縦位に幅広の沈線も施したものである。内面調整はミガキによるものである。8~12は遺構に帰属しない土器である。8は第I群B類の土器の口縁部である。口縁部文様帯にはL原体の側面圧痕を横位とX字状に施し、その下には文様帯区画文として半截竹管による刺突が施されている。また口唇にも同一工具による刺突が施されている。胎土には砂粒の混入が見られ、内面調整はミガキによるものであ





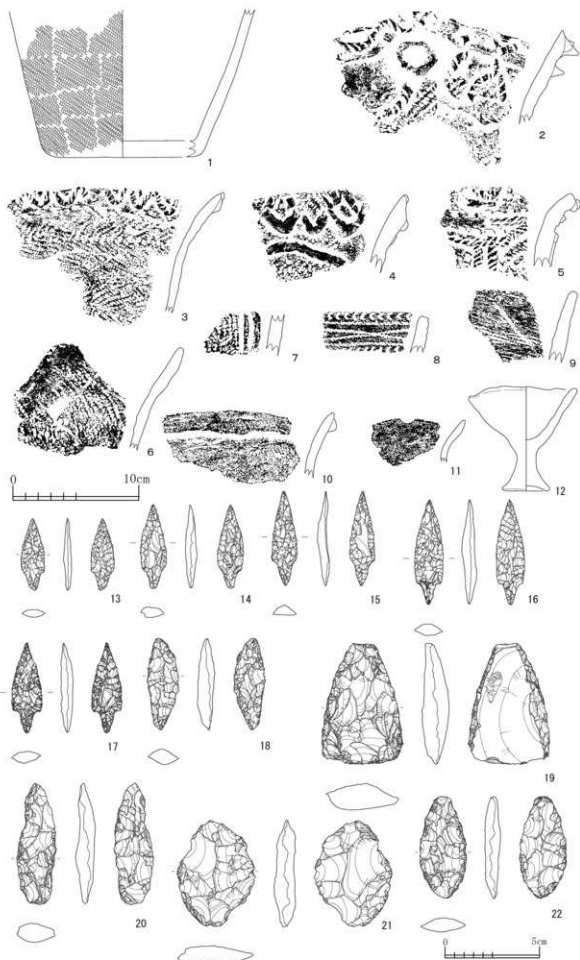


图 1-19 A区 SI-18-3

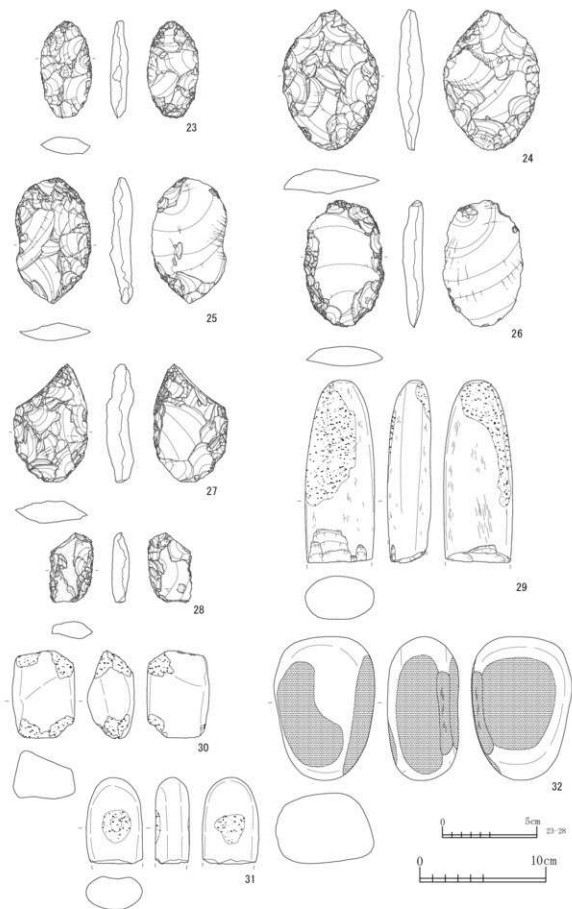


図 1-20 A区SI-18-4

る。9～12は第III群の土器である。9は深鉢の口縁部である。横位の条痕文を施したものである。10は深鉢の折り返し状口縁である。頸部にややくびれを持ち、外面には炭化物の付着が見られる。内面調整はミガキによるもので、胎土には若干砂粒の混入が見られる。11は蓋の口縁部である。頸部にくびれを持ち外反する器形を呈する。無文のもので器面調整は内外面ともに横位のナデによるものである。また炭化物の付着が見られる。12は床面出土のワイングラス状の土器である。一部欠損しているがほぼ完形である。無文のもので調整はミガキによるものである。後期の土器の細分については、9はC類に、それ以外のものはA類に分類されると考えられる。

石器は1類が5点、5類が1点、6類bが10点、8類1点、11類3点が出土している。13～15は1類c、16、17は1類bである。16、18の茎部にはアスファルトの付着がみられる。19は5類である。横長剥片を素材とし、下端に作出された刃部は片刃である。刃部に使用痕光沢がみられる。18、20～28は6類bである。21～24、27は両面全体、25は表面全体、裏面周辺の一部に二次加工がある。26は片面周辺に二次加工がある。28は両面の周辺に二次加工がある。21、25は左側辺、27は右側辺、20、26、28は両側辺、23は上下端部に微細刻離がみられる。29は8類である。刃部を欠損している。30は11類aである。垂角稜の端部に敲打痕がみられる。31は11類aである。楕円礫の両面に敲打痕がみられる。32は11類bである。楕円礫のほぼ全体を磨っている。側面に細長いザラザラの磨面がみられる。剥片石器の使用石材は全て珪質頁岩、礫石器の使用石材は29珪岩、30流紋岩、31珪質頁岩、32安山岩である。

〔小結〕 本遺構は近接するS I-17、19の堆積土と同じ様相（自然堆積、色調、黄色浮石が混入）を呈する。廃絶時期については重複関係よりS I-19より新しく、S I-17とは堆積土の状況が非常に似ているのでほぼ同じ時期と考えられる。本遺構とS I-17の構築時期については炉の形態がS I-17は地床炉、本遺構では土器埋設炉と異なっているが時間差があると考えられる。また南西コーナー付近で大量の剥片を検出している。この部分には篋状石器が埋納されていたSK-03が位置しており、剥片については石器製作時に生じたものと思われる。

S I-19（図1-21-22）

〔位置〕 A-3東側で検出した。

〔重複〕 S I-17・18、SK-31・35と重

複している。新旧関係については土層堆積状況からSK-31、35<本遺構<S I-17、18の関係である。

〔平面形・規模〕 切り合いにより不明確であるが、隅丸長方形もしくは楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸464cm、深さ30cmを測る。短軸については不明である。

〔壁〕 重複の影響により、北西側と南東側の壁の一部のみの検出である。月見野火山灰層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕 大谷火山灰層を床面とし、ほぼ平坦で堅緻である。また、床面上で被熱箇所、焼土、炭化物・炭化材を検出しており、検出状況から本遺構は焼失住居であったと考えられる。

〔壁溝〕 なし。

〔Pit〕 本遺構のPitとして検出したものは3基である。規模はPit1（45×60cm）、2（30×62cm）、3（35×50cm）を測る。主柱穴の配置については切り合いのため不明確であるが、本遺構の時期、形態や検出したPitの規模などを考慮すると本遺構で検出したPit1～3の他にS I-18Pit9（26×66cm）の4基が主柱穴にあたると思われる。S I-18Pit9を含めるとPit4基は方形の配置となり、間隔は1辺約240cmを測る。

〔炉〕 検出した床面の大部分が被熱で焼土化しており、炉と床面の明確な区別はできなかったが、焼土化した部分のうち、住居中央付近で円形を呈し若干窪んだ状態のものを地床炉として判断した。規模は43×37cmを測る。明確な掘り込みを持たない地床炉であると考えられる。

〔その他の付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 6層に分層した。堆積土は基本土層第IV層がベースとなるが、床面直上に堆積する第5・6層の堆積及び第5層上位に堆積した第4層までの堆積と第2・3層までの堆積との間に不整合が認められ、埋没過程に時期差が生じている。第1層は前述の段階よりさらに時期差が生じた堆積である。

〔遺物〕 8点図示した。1～4は第II群A類の土器である。1は回復した深鉢形土器の胴部と底部片である。結束第1種を地文とし、L原体側面圧痕、刻目を施した隆帯の貼り付けと刺突により文様が構成されている。内面調整は縦方向のミガキによるもので、一部赤褐色化している部分が認められる。本資料はS I-09出土のものと同接合しており、接合した割合は本遺構出土のものがほとんどを占める。2～4は胴部である。2はLR原体による同一方向の結束第1種を地文とし、刻目を施した隆帯と刺突により文様を構成したものである。隆帯は環状、横位を呈し、刺突は篋状工具を使用した細長いものと

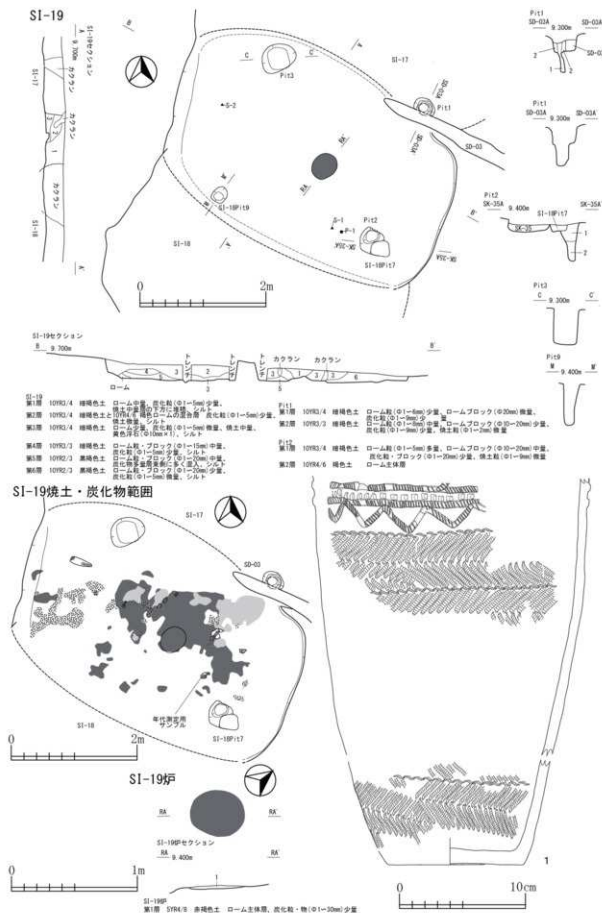


図 1-21 A区 SI-19-1

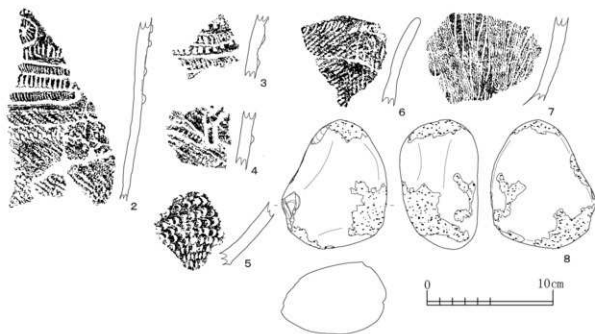


図 1-22 A区 SI-19-2

なっている。内外面とも非常に荒れており、被熱の影響が考えられる。2はL原体の側面圧痕を施した隆帯と刺突を施している。内外面、破断面ともに黒色を呈するものである。4はRLの斜行縄文を地文とし、隆帯を貼り付けたものである。隆帯には無文の部分と刻目を施した部分が見られる。1～4は円筒筒層c式に帰属するものである。5～7は遺構に帰属しない土器である。5は第I群A類の土器である。胴部から底部にかけてのもので大きく外傾する器形を呈する。刺突は上部では三日月形を呈し、底部付近では米粒形を呈する。また底面にも米粒形の刺突が施されている。内面調整はミガキである。6、7は第I群B類の土器である。6は波状口縁部である。口唇形状は丸みを帯び、無胎rの斜行縄文を施したものである。外面に炭化物の付着が見られる。7は底部付近の破片である。単軸絡条体を施したもので、内面調整はミガキである。

石器は11類が1点出土している。8は11類aである。楕円礫の周辺に敲打痕がみられる。使用石材は珪質頁岩である。

【小結】本住居は床上で炭化材・焼土を検出しており、床面自体にもかなり被熱の影響が認められ、焼失住居であると考えられる。しかし床面の被熱の程度に比べると、検出された炭化材・焼土の量は少なく、清掃等による二次的影響が考えられる。床面出土炭化材を放射性炭素年代測定にかけており、測定年代で4,460±60BP、補正年代で4,470±60BPとの結果を得ている。この結果から本遺構は約4,500年前の縄文時代中期中頃の住居跡であると考えられる。

#### B・後期

SI-02 (図1-23-27)

【位置】A-1, 2にまたがって検出した。

【重複】西側でSI-01と重複している。本遺構の堆積土がSI-01に切れ、本遺構が古い。

【平面形・規模】平面形は円形を呈する。規模は81.2×77.6×33.3cm、床面積は51.143㎡を測る。

【壁】斜面上に位置しているため、高い側にあたる北側から南西側部分の検出である。他の側では検出できなかった。月見野火山灰層を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、脆弱である。

【床】大谷火山灰層を床面としている。大部分に攪乱の影響を受けており、小さな凹凸が多数見られる。そのため堅緻な部分は見られない。攪乱を受けていない部分は平坦である。

【壁溝】断続的に全周する。規模は幅10～12cm、深さ15cmである。また北東から西側の部分で20cmほど内側にもう1条壁溝が検出されている。この二重の壁溝の関係については、他の部分では見られず、土層観察においても重複する異なる住居は確認できなかったため、住居の拡張に伴うものと判断した。内側の壁溝が構築時のもので外側の壁溝が拡張時のものと考えられる。

【Pit】床面でPitを47基検出した。このうち主柱穴と考えられるものはPit30(50×58cm)、36(48×72cm)、38(50×76cm)、47(46×80cm)の4基であり、北西辺側が広い台形状に配置されている。柱穴の間隔は台形の上下側が約270cm、下底側は350cm、側辺側290cmを測る。





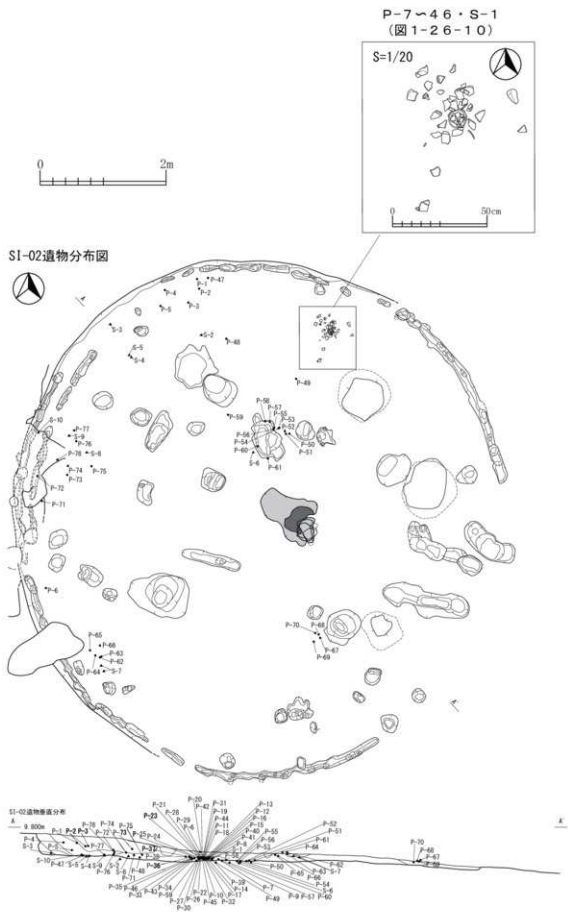


図 1-25 A区 S1-02-3



[炉] 床中央付近で地床炉1基を検出した。浅い掘り込みを有し、北東側に攪乱を受けている。平面形は不整形を呈し、規模は約200cmを測る。また火床面に直径約40cmの範囲で約15cm大の礫が散乱している。

[その他の付属施設] 南東側壁溝付近に出入り口施設と考えられる並列した2条の溝状遺構を検出した。当初はSD-04としたものだけの検出であったが、精査中にSD-04の北東側に位置するPit7、32、33が連結し、同じような軸方向、規模の溝状を呈するようになった。これをSD-04と対応するものとして判断した。配置状況は4基の支柱穴で構成される台形の上下側に位置している。北西→南東方向に直線状に延び、底面は南東側へ向けて傾斜している。規模は長さ120～144cm、幅20～40cm、深さ25～40cmを測り、2条の間隔は約50cmを測る。

[堆積土] 8層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。最上層の第1層については耕作の影響を受けているものと思われる。第2層の黒褐色土は小牧野遺跡における純縄文遺物包含層に比定される層と考えられ、本遺構だけに見られるものである。またこの第2層の上には火山灰(B-Tm)がブロック状に堆積している。この第2層は西から東側にかけて傾斜に合わせて流れ込むような形で堆積しており、東側では床面に接している。第3層は黒色土、それ以下の堆積土は黒褐色系の土であり、基本土層第Ⅲ層がベースとなまっているものと思われる。第6、7、8層は壁際堆積土で黒褐色、暗褐色の土である。第8層は西側壁の下部が袋状を呈している箇所に堆積しており、多量のローム粒が混入していることから壁崩壊による堆積と考えられる。また第7層についても第8層と同じような色調、混入物であるので同じ起源のものと考えられる。ベースとなる基本土層第Ⅲ層の黒色土との比較では堆積土第3層の黒色土の色調が類似している。この層の堆積状況をSI-22と比較した場合、SI-22の第2、3層は自然堆積でほぼ床全面に急激な堆積の様相を示しており、SI-02では第3層は最下層の堆積土ではないので、鍵層の堆積はSI-22よりも遅かったと考えられる。とするとSI-02の廃絶はSI-22よりも遅かったものと考えられる。

[遺物] 30点図示した。1～15は第Ⅲ群C類の土器である。1～9は1である。1はLRの斜行縄文を重層して施し、口唇部に突起を施したものである。突起は両サイドから押しつぶしたように鋭角的なものとなっている。内面調整は横位のミガキによるものである。2も口唇部に突起を有するもので、LR、RL斜行縄文を地文とし、口縁上部は2条の刺突列で区画された摩消帯を設け口唇部直下の

位置に沈線を施したものである。突起は口唇部を両サイドから指でつまみあげて整形されたものと考えられる。3はLR斜行縄文を施した波状口縁部である。内面調整は横位のナデである。4は外反する平口縁部である。無筋1の斜行縄文を施したものである。内面調整はナデによるものである。5は無文の口縁部である。口唇部には外側に突き出す形の刻目を施した突起を有し、器面調整は外面が縦位の雑なミガキ、内面はナデによるものである。6は磨耗のため明確でないが無文の口縁部と考えられる。瘤状貼り付けを施し、外反するものである。調整は内外面ともにナデによるものである。7は斜位に条痕文を施した口縁部である。内面調整は口唇部直下では横位のナデ、その下の部分では縦位のナデとなっている。8も条痕文を施した胴部である。条痕文は7より細いもので施文方向は縦位となっている。9は小型鉢の口縁部である。口縁部は内湾し内面が折り返し状を呈し肥厚するものである。口唇部直下に瘤状貼り付けを施している。10は台付鉢である。口縁部には2条の沈線を横位に施し、2個1単位の大きめの瘤状貼付を上沈線上に、下の沈線上には小さめのものを大きめの瘤状貼付の単位間に施している。調整は内外面ともに横位のナデによるものである。11～14は壺である。11は広口の壺形土器である。口縁部は内傾し、口唇部は折り返し状を呈し肥厚している。調整は内外面ともに横位のナデによるものである。12、13は壺の口縁部である。無文のもので調整は12ではナデ、13はミガキによるものである。14は壺の頸部である。LR斜行縄文を地文とし、頸部は地文を押し消している。肩部の始まりの部分には上下から摩りつぶしたような横長の貼付を施している。15は香炉形土器の頂部である。二又の突起状を呈し、貫通孔を施し、2条の横位の沈線上に4単位の瘤状貼付を施している。その下には貫通孔の方向に2単位のすかし状の窓を持つものである。16～20は同一個体の帰属しない第IV群の土器である。16Aは深鉢の胴部である。LRの斜行縄文を地文とし、胴部上半に幅広の沈線による文様を施したものである。文様区画には横位の沈線を施している。16Bは同一個体の頸部付近と考えられるものである。頸部に列点文を施したものである。ともに内面調整はミガキによるものである。17は波状口縁部で頂部が二股の形状となっている。LR斜行縄文を地文とし沈線を摩消手法で文様を構成したものである。内面に多量の炭化物の付着が見られる。18波状口縁部を呈し、口唇部に幅広の沈線を施したものである。頂部には大小があり数単位の大きなもの間に小さなものを施したものと考えられる。外面には上部が深く断面形が三角形を呈する沈線を施したものである。内面にも口唇部沿

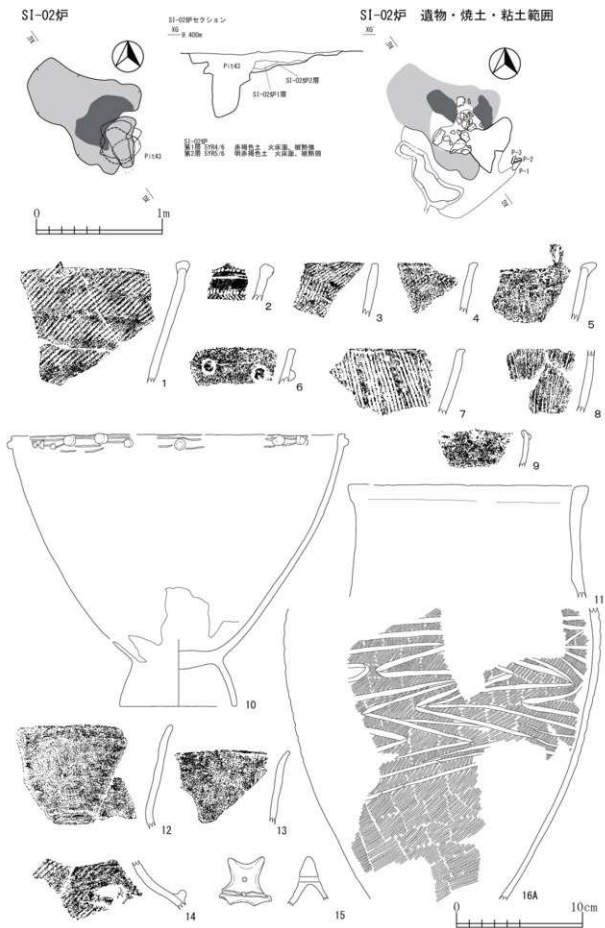
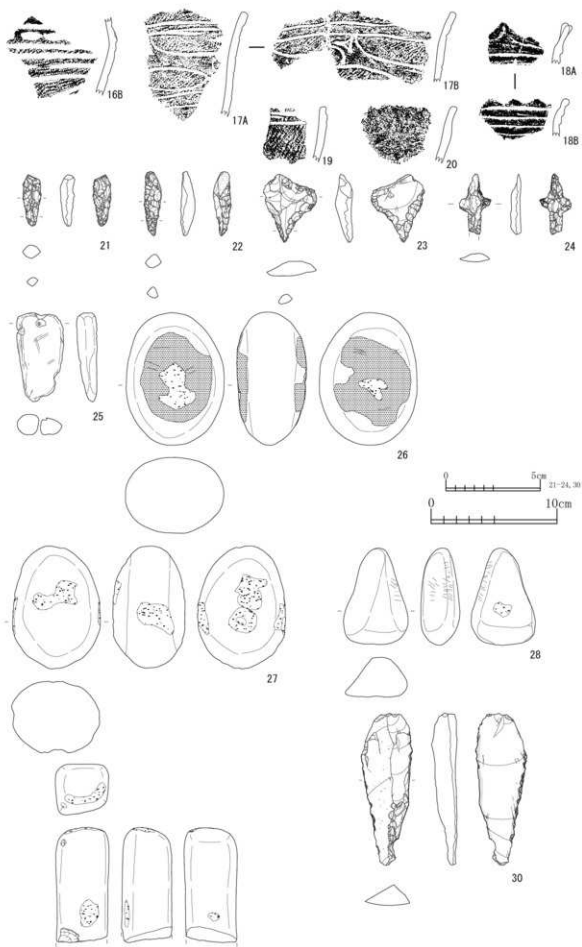


図 1-26 A区 S1-02-4



29  
 图 1-27 A区 SI-02-5

いに1条幅広の沈線を施している。内面調整は横位のミガキである。1.9はL.Rの斜行縄文を地文とし、2条沈線を施した口縁部である。内面調整は口縁部付近が横位のミガキ、以下の部分は縦位にミガキとなっている。2.0は無文の波状口縁部である。口唇部に幅広の刻みを施すことで波状を作り出したものである。内外面に赤色顔料の痕跡が認められる。器面調整は磨耗のため不明瞭だがミガキを用いたものと考えられる。

石器は3類が3点、7類が1点、軽石の石製品が1点、11類が4点、16類bが1点出土している。2.1、2.2は3類b、2.3は3類cである。2.2の先端部にはつぶれがみられる。2.4は7類である。熱によるハジケにより欠損しているため全体形が不明だが、ヤスの可能性も考えられる。2.5は軽石の石製品である。2.6は11類dである。楕円礫の表裏面に磨面と敲打痕がみられる。2.7は11類aである。楕円礫の両面と両側面に敲打痕がみられる。2.8は11類dである。垂角礫の右側面に擦痕、裏面に敲打痕がみられる。2.9は11類aである。垂角礫に表裏面及び状端部に敲打痕がみられる。3.0は16類bである。左側裏面に微細刺離がみられる。使用石材は2.1～2.4、3.0珪質頁岩、2.5軽石、2.6安山岩、2.7凝灰岩、2.8・2.9流紋岩である。  
[小結] 本遺構は床面出土遺物から縄文時代後期末葉に帰属する住居と考えられる。南東側に溝状の出入り口施設を持つ住居である。北西側の二重の壁溝が検出されたことから拡張されていると考えられる。

#### S I-06 (図1-28～37)

[位置] A-1、2、3、4にまたがって検出した。  
[重複] S I-09、2.0と重複している。新旧関係については土層堆積状況からS I-09<本遺構<S I-2.0の関係である。  
[平面形・規模] 円形を呈し、6.72×(5.32)×3.5cm、床面積は(2.8.7.99)㎡を測る。  
[壁] S I-2.0に切られている部分以外での検出である。北西から南東にかけての斜面上に構築されているため北西側では壁は最も高く、南東側に向けて壁は徐々に低くなっていき、最終的にS I-2.0との切り合い部分まで至り、その付近ではわずかに残存するだけである。月見野火山灰層を壁としておりほぼ垂直に立ち上がる。  
[床] 大谷火山灰層を床面としており、ほぼ平坦で堅緻である。また焼失住居であるため、被熱により焼土化しており、ところどころに赤褐色の色調を呈する箇所も見受けられる。また完掘写真の観察によると炉を中心とした環状に焼土化している部分が見られる。

[壁溝] なし。

[Pit] 床面でPitを71基検出した。このうち主柱穴と考えられるものはPit 5a(2.4×6.1cm)、9(2.5×4.2cm)、2.8(2.9×6.5cm)、7.1(2.4×6.8cm)の4基であり、北西辺が下底にあたる台形状に配置されている。主柱穴の間隔は北西辺3.00cm、南東辺1.60cm、北東辺2.48cm、南西辺2.60cmを測る。また壁柱穴と考えられるものも2.5基検出しており、4.0～6.0cm間隔で壁沿いに配置されている。規模はPit 1.1(1.0×2.0cm)、1.2(5.5×4.4cm)、1.6(9.2×2.0cm)、1.8(5.5×2.9cm)、3.7(1.5×1.4cm)、3.8(5.5×1.5cm)、3.9(6.1×3.3cm)、4.0(9.1×1.5cm)、4.1(1.1×3.4cm)、4.3(7.3×3.1cm)、4.4(5.2×2.8cm)、4.5(5.5×1.5cm)、4.6(6.1×1.9cm)、4.8(7.1×1.4cm)、4.9(4.2×0.9cm)、5.0(5.5×1.4cm)、5.1(4.2×2.6cm)、5.3(9.2×2.6cm)、5.4(9.1×1.5cm)、5.6(1.2×2.0cm)、6.0(1.0×2.7cm)、6.1(7.2×2.2cm)、6.2(7.3×3.5cm)、6.4(1.0×1.8cm)、6.5(7.7×1.5cm)を測る。

[炉] 床中央付近で石囲炉1基を検出した。直径約9.0cmの不整楕円形の焼土の拡がりの中に礫が6個環状に配置された状態で検出した。炉石は西、南側のみ遺存しており、大きさは1.0～2.0cmである。その他の側では欠落しているが、写真観察によるとこの部分に炉石とつながる抜き取り痕らしき黒色土の拡がり確認でき、炉石が遺存している部分と抜き取り痕から推測すると本来は直径約7.0cmの円形に炉石を配置していたものと考えられる。

[その他の付属施設] 南東側のS I-2.0との切り合い部分で溝状遺構1条を検出している。SD-0.5として処理しているが本住居の出入り口施設の可能性も考えられる。この溝状の施設は台形配置の主柱穴の下底側に位置しており、北西・南東軸で直線状を呈し、長さ1.24cm、幅1.0～1.6cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は北西側から南東側に向けて階段状に傾斜している。  
[堆積土] 9層は大別した。第8層からは炭化材・焼土が大量に出土しており、上層倒壊による堆積と考えられる。また第7層も少量ではあるが焼土粒が混入していることから同じく上層倒壊に係る堆積土と考えられる。その上に堆積する第1～6層は住居焼失後の堆積であり、基本土層第Ⅲ層の黒色土をベースとしている。このうち第2層黒色土が基本土層第Ⅲ層に比定できるものと考えられる。第2層の堆積は埋没過程の最終段階のものであり、自然堆積の様相を呈し、地形の傾斜に沿って、北西から南東側に傾斜して床面まで堆積している。第3～6層

SI-06

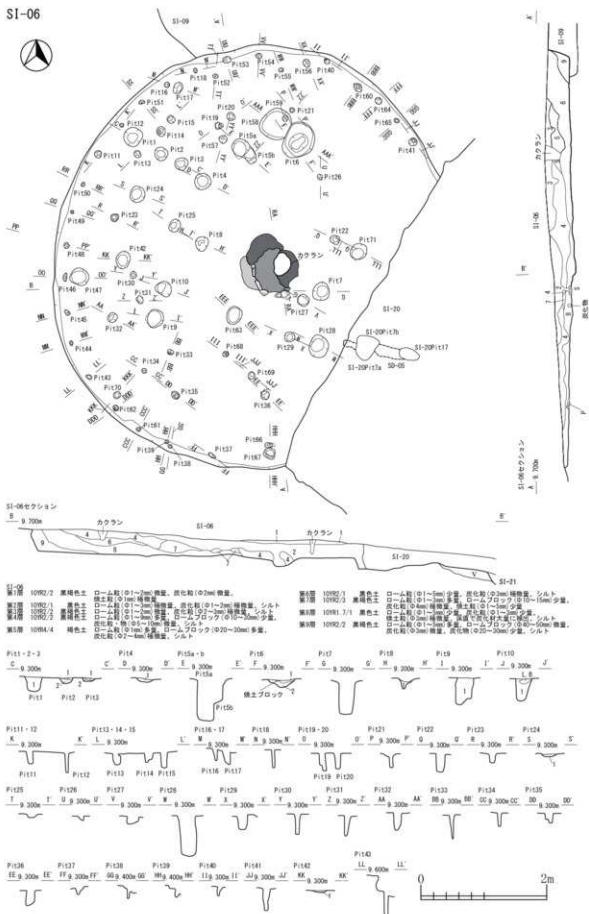
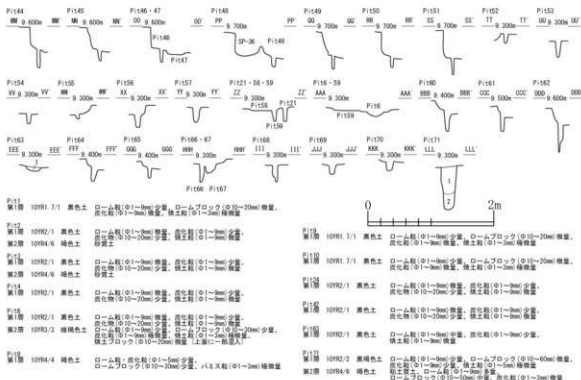


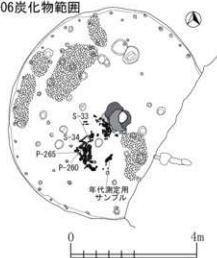
図 1-28 A区 SI-06-1



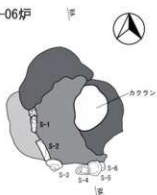
SI-06焼土範囲



SI-06炭化物範囲



SI-06炉



SI-06炉セクション



- SI-06P**
- 第1層 7.5YR2.2 黒褐色土 炭化物(0.5m)少量、炭化物(0.20m)少量、焼土粒(0.1~3mm)少量
  - 第2層 7.5YR3.0 黒褐色土 炭化物(0.1~3mm)少量
  - 第3層 10YR2.3 黒褐色土 炭化物(0.3mm)微量、焼土粒(0.1mm)微量
  - 第4層 7YR3.0 赤褐色土 炭化物(0.3mm)微量、焼土粒(0.1mm)微量
  - 第5層 7.5YR3.8 赤褐色土 ローム状(0.1~3mm)微量、ハヒス粒(0.1~3mm)微量
- 穴**
- 第1層 5YR4.0 赤褐色土 ハヒス粒(0.1~3mm)微量、炭化物(0.1~3mm)少量
  - 第2層 10YR2.4 黒褐色土 ローム状(0.1~3mm)微量、炭化物(0.1~3mm)少量、ロームブロック(0.10~20m)少量
  - 第3層 7.5YR4.6 褐色土 焼土粒(0.1~3mm)微量

図 1-29 A区 SI-06-2

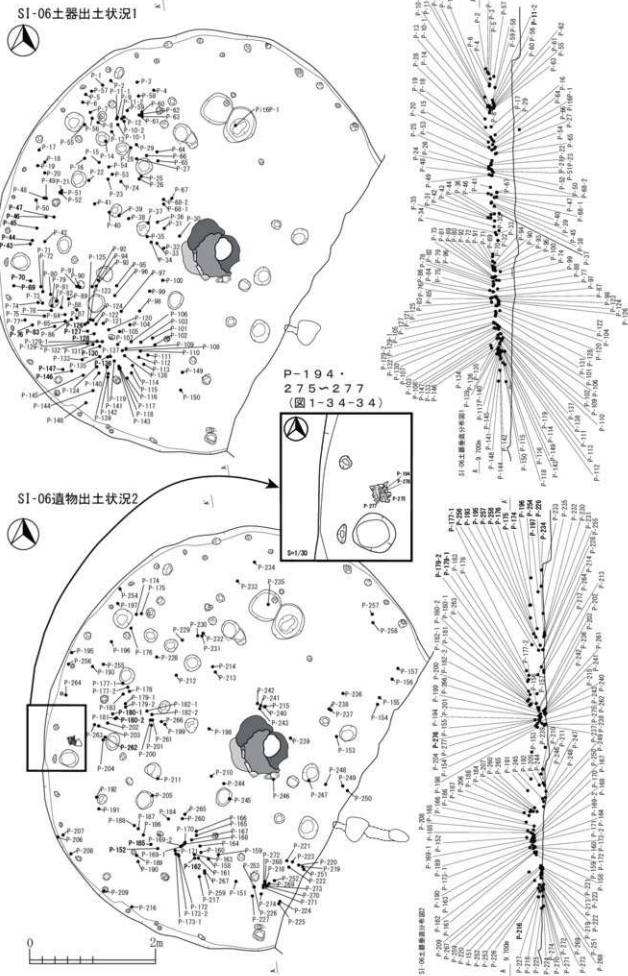


図 1-30 A区 SI-06-3

## SI-06石器出土状況

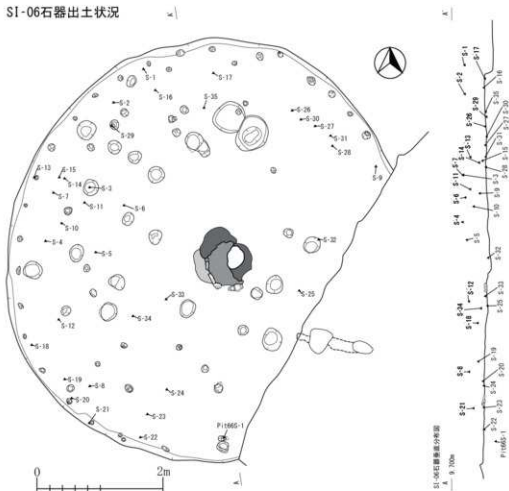


図 1-31 A区 SI-06-4

は黒褐色、褐色、黒色の色調で、人為的堆積の様相を呈している。最下層9層は壁際堆積土であり、埋没過程の最初の堆積土である。

[遺物] 93点図示した。覆土中からは、円筒上層式、後期末葉の土器片が出土している。また床面からも後期末葉の土器片が、壁際堆積土中から完形注口、動物意匠の香炉形土器などが出土している。1～12、18～40は第Ⅲ群C類の土器である。1は深鉢である。文様は沈線上に瘤状貼付を施し、このモチーフを重層させ、モチーフ間に横位のミガキ処理を施したものである。モチーフ間のミガキ処理はモチーフ寄りの部分が深くなり沈線状を呈している。これによりモチーフは上下を沈線に挟まれる形となり、モチーフが強調される効果を得ている。モチーフは口唇部外面では沈線上に2個1単位の突起状の貼り付けを施し、その単位間に瘤状貼付を施すものとなっている。内面調整は横位のミガキである。2は1と同じような器形、文様のものである。ミガキ処理を施した箇所は楕円形を呈する箇所が見られ、瘤状貼り付けのほかには環状の貼り付けも施している。2Bではミガキ処理を施した部分に弧状の沈線を向かい合わせに施している。3はLRの斜行縄文を地文とし、口唇部に刻目を施した2個1対の突

起を有するもので、摩消手法による弧状の文様を施したものである。横位に展開する摩消手法のモチーフの連結部分に瘤状貼付を施している。3Bでは頸部と胴部の境の瘤状張付は中心が深くえぐれ二股状になっている。ともに内面調整は口縁部付近では横位のミガキ、以下では縦位のナデとなっている。4～11は粗製深鉢である。4～6は縄文地のものである。4はRLの斜行縄文を施したもので、口縁部は内湾し、薄い作りのものである。内外面に炭化物の付着が見られる。内面調整は口縁部付近では横位、以下では縦位のナデによるものである。5も内湾する器形を呈するが、厚い作りのものである。無節1の斜行縄文を施している。内面調整は横位のナデである。6は外反する薄い作りのものである。無節1の斜行縄文を施している。内面調整は横位のナデである。7は口縁部が外傾しながら立ち上がる無文のものである。内面調整はナデによるものである。8～11は条痕文を施したものである。条痕文はすべて横位のもので、10、11では節目状の細いものとなっている。内面調整はナデによるものである。12は口唇部に2個1対の突起を有する、横位の条痕文を施したものである。内面調整はナデによるものである。13、14は第Ⅲ群A類の土器で



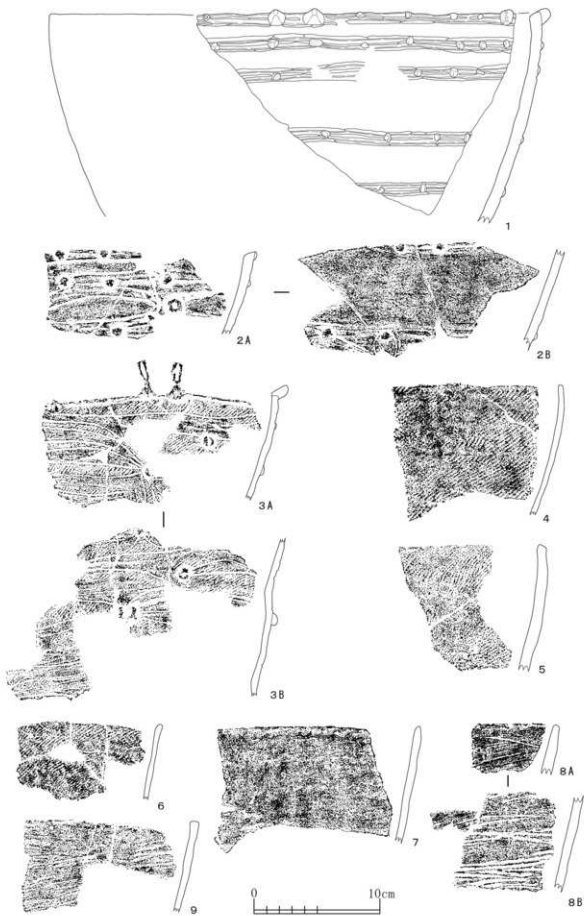


图 1-32 A区 SI-06-5

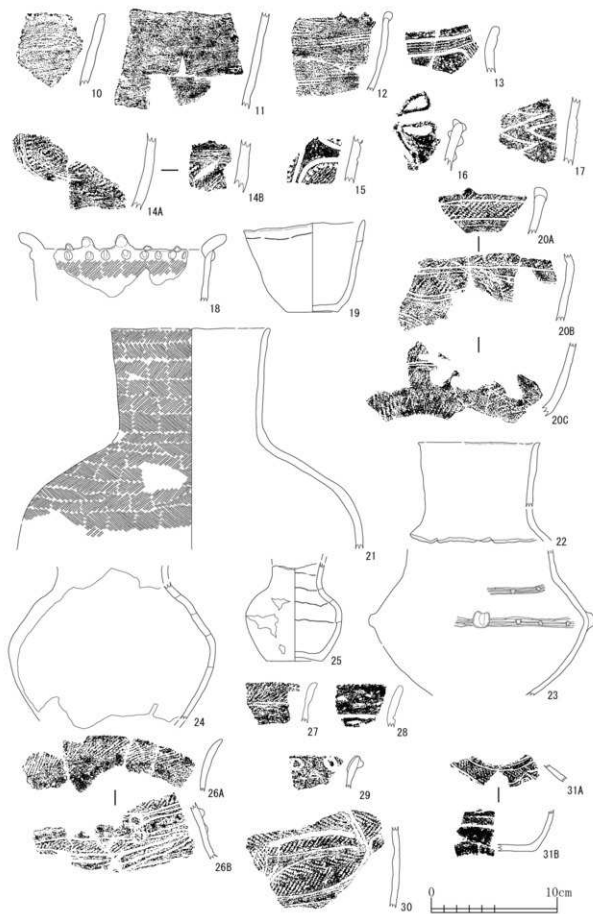


図 1-33 A区 SI-06-6

ある。13は4条の櫛目状沈線の上下を沈線で囲んだものである。口縁部は波状を呈し、口唇形状は若干丸みを帯びるが平坦な作りとなっている。内面調整は横位のミガキとなっている。14も同じく櫛目状沈線を施したものである。13のように上下を囲む沈線はなく、外面には黒色の物質がところどころに付着している。15は第Ⅲ群B類の土器である。LRの斜行縄文を地文とし、磨消手法で文様を施したものである。磨消部分を沈線で囲み、沈線に沿って刺突を施したものである。内面調整は横位のミガキによるもので炭化物の付着が見られる。16、17は第Ⅲ群の土器である。16は波状部分に内外面に無文の隆帯を貼り付けたものである。17は沈線による文様を施したものである。18～20は鉢である。18はLR斜行縄文を地文とし、口唇部に2個1単位の刻目を施した外反する突起と瘤状貼付を施し、口唇部直下には刻目を施した瘤状貼付を施している。19は小型の鉢である。器面調整は内外面ともに横位のナデによるもので、底部は上げ底状を呈する。20はLRの斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を施したものである。口縁部は突起を有し、口唇部は肥厚し厚い作りとなっている。内面調整はミガキによるものである。21～31は壺形土器である。21は口縁～肩部である。器形は肩部が大きく張り出し、口縁部がほぼ直立しながら口唇部で外反するものである。器面全体に多段構成の結束第1種を施している。内面調整は口唇部付近では横位のミガキ、以下の部分ではナデ調整となっている。22も21と同様な器形を呈する口縁部である。無文のもので器面調整は外面が雑なミガキ、内面はナデによるものとなっており、工具痕が確認できる。23は頸部～胴部の雑なミガキによるものである。肩部に最頂部を持ち、頸部には3条1組の沈線と中央の沈線上に瘤状貼り付け、最頂部にも同様なモチーフが施され、この部分では中央部にえぐりを加え二股状を呈する大きめの貼付が追加されている。また施文の順番は頸部では沈線→瘤状貼付であるが、最頂部では瘤状貼付→沈線の順番となっている。24も同じく肩部に最頂部を持つ器形であるが、無文のものである。調整は横位にかけてのミガキである。25は小型の頸～底部である。無文で器面調整は横位のミガキによるものである。底部は上げ底状を呈する。26はRLの斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を施したものである。Aは口縁部で外反し口唇部は先細りするものである。Bは頸部で、瘤状貼付が加えられている。内面調整は口縁部では横位のミガキ、頸部ではナデによるものとなっている。27はLRの斜行縄文を地文とし、頸部を磨り消して無文としたものである。外反する口縁を持ち口縁外面の縄文地の部分に赤色顔料を塗布している。内面調

整はナデによるものである。28は頸部に沈線を2条施したものである。内面調整は横位のミガキによるものである。29は口唇外面に瘤状貼付を施したものである。内面調整は口唇内面では横位のミガキであるが、以下の部分ではナデによるものとなっている。30はこれまでのものと異なり、肩部を持たず胴部が若干丸みを帯びるがほぼ直立する器形を呈するものである。LR・RLの羽状構成の斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を施したものである。一部赤色顔料の塗布が見られる。31は小型のRLの斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を施したものである。文様帯以下の部分は横位のミガキ調整により無文となっている。底部は若干上げ底状を呈する。32、33は注口土器である。32は口縁部が欠損するものである。頸部～肩部まではLR斜行縄文を地文とし、磨消手法により凹レンズ状のモチーフ、肩部はアーチ状のモチーフが施されている。胴部はミガキ調整が施され無文となっている。瘤状貼付は頸上部では4個、頸部と肩部の境には沈線上に13個、胴最長部では注口部周辺に刻目を施した大きめのものを両サイドに配置したのとなっている。注口部の付け根には中央がえぐれ二股状を呈する突起を貼り付けている。最長部よりその部分においてところどころに赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。33は無文のものである。胴中央に最頂部を持ち、ほぼ直立する頸部から口縁部が外反する器形を呈する。調整はミガキによるものである。注口部付け根には欠損しているが、突起状の膨らみを持つものと考えられる。底部は上げ底状を呈する。34～38は香炉形土器である。34は香炉形土器の上部である。LR斜行縄文を地文とし、円形、楕円形の貫通孔を施したものである。動物を意匠としており、胴体を表現した板状の部分を中心とし両サイドの胴部へつながるアーチ部分で四肢を表現していると考えられる。胴体部分には頭部、尾が表現され、目は貫通孔により表現され、大きく開けた口や尾が上へ巻いている様子も表されている。35は無節1の斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を構成したものである。上部の突起は二股状を呈するもので、中央に貫通孔を施している。突起の両サイド、アーチ部分には瘤状貼付を施している。36はLRの斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を構成したものである。口縁部には刻目を施した突起を有し、頸部と肩部の境の隆帯は中央に沈線を施すことで隆帯を2条にしている。37は器種を明確にできるものではないが、口縁部に沿うように外面からの貫通孔を施したものである。無文で器面調整は外面はミガキ、内面はナデとなっている。38は胴～台部である。LR斜行縄文を地文とし、胴部には刻目を施した瘤状貼付とそれを連結する弧状の沈線を施

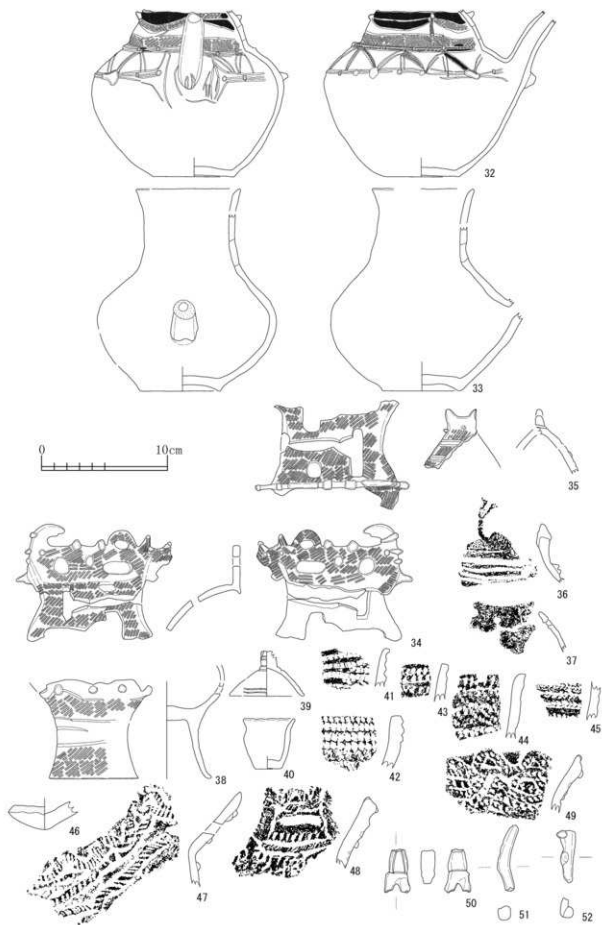


図 1-34 A区 SI-06-7

し、台部には上半部を磨消手法により無文としている。また胴部には蔽蓋所に貫通孔も施している。内面調整は雑なミガキによるものである。39は蓋形土器である。漏斗を伏せた形状を呈し、上部にツマミ状の突起を持つ。突起頂部には欠損が見られるが、欠損の状況から突起は二股状を呈するものと考えられる。突起上部、基部と裾部分に2条1組の沈線が施されている。40はミニチュア土器である。胴上半の最張部から内傾し、口縁部が外反する器形を呈するものである。器面調整は縦方向のナデである。41～49は遺構に帰属しない土器である。41～44は第I群A類の土器である。41は波状を呈する口縁部で、押し沈線文を施したものである。内面調整はナデによるものである。42は4段の刺突列と縄端回転文を施したものである。口唇部は内削ぎ状を呈し、内面調整は横位のミガキによるものである。刺突列は粘土紐成形痕の上に施している。43は刺突列を施したものである。44は若干外反する口縁部である。刺突列とループ文を施している。45は刺突列を施した胴部である。42のように刺突列は粘土紐成形痕の上に施している。46は底部片である。乳房状の尖底を呈するものである。47～49は第II群A類の土器である。47は結束第1種を地文とし、L原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付けたものである。突起の中央には横長の貫通孔が見られる。内面調整は横位のミガキによるものである。48は台形状突起部分で、刻目を施した隆帯の貼り付けと刺突を施したものである。突起中央に横長のくぼみも施している。内面調整は口縁部付近がミガキ、以下の部分はナデによるものである。49は平口縁部である。L原体の側面圧痕を施した隆帯の貼り付けと刺突を施したものである。内面調整は横位のミガキによるものである。50～52は第III群C類に帰属する土製品である。50は二又状を呈するもので、縦位と横位の沈線が施している。土製品としたが二又の部分が入る場合、香炉形土器の突起である可能性も考えられる。51、52は棒状を呈するもので、52では横位のものとも組み合わせている。

石器は1類が7点、3類が4点、4類が6点、6類3点、7類1点、8類1点、9類1点、11類10点、14類1点、石器以外に石製品が4点出土している。53は1類cである。54～59は1類dである。53、54、56の基部にはアスファルトの付着がみられる。60は3類aである。61は3類bである。両端部を欠損している。62、63は3類cである。64～67は4類aである。64は表面の右側辺のみに二次加工がある。65は積み決りの加工が施されている他は、器体に二次加工はみられず、右側辺表面側に微細剥離がみられ

る。66は表面の左側辺に二次加工がみられ、右側辺に微細剥離がみられる。68、69は4類bである。67は表面全体に、裏面は右側辺及び下端に短い剥離による二次加工がある。68は積み決りの加工が施されている他に、裏面下端に部分的な二次加工がある。69は積み決りの加工が施されている他に、左側辺に短い剥離による二次加工がある。70は6類aである。4類aの欠損品の可能性も考えられる。71、72は6類bである。71は尖頭削器である。72は左側辺に短い剥離による二次加工がある。73は7類に分類したが、石鏝、あるいは尖頭器の可能性が考えられる。74は8類である。刃部は部分的に欠損しているが、形状からみると直刃で両刃である。75は9類bである。76～82までは11類aである。76は槽円縁の周辺部に剥離とそれに伴う敲打痕がある。77、78は端部に敲打痕がある。79、80は表裏面に敲打痕がある。81、82は表裏面及び側面に敲打痕がある。83～85は11類dである。83は表面に磨面と上端に敲打痕、84は表裏面に磨面と敲打痕、側面に敲打痕がある。85は上下端部、裏面に敲打痕、表面に擦痕がある。

86は14類である。縁付き石皿の断片である。87、88は16類bである。使用石材は53～73、87、88珪質頁岩、74、76、77、79、81凝灰岩、75、83、86安山岩、78、80、82、84、85流紋岩である。

89～92は石製品である。89は全面を磨削により成形している。欠損のため全体形は不明だが、欠損部に、両面からの穿孔がみられ、穿孔部から放射状に3本の擦り切り痕がみられる。擦り切り形の幅は2、5mmである。90は欠損のため全体形は不明だが、弧状の線刻の内側に格子状の線刻が施されている。89は頁岩、90は泥岩が使用されている。91は棒状石製品である。全体に短い擦痕がみられる。使用石材は泥岩である。92は軽石石製品である。全面を磨削により成形している。

[小結] 本遺構は床直上に堆積する第8層から炭化材が検出され、また床面にも被熱の影響が見られることから焼失住居と考えられる。第9層の壁際堆積土の性質については、外からの流入土、または「住居の壁体の押さえとして貼り付けられていた土」のいずれかと考えられる。この上に炭化材・焼土を多量に含む第8層が堆積していることから第9層の堆積は焼失以前ということが考えられる。本遺構の廢絶過程を考えた場合、この第9層を外からの流入土として考えた場合、住居としての使用が終わった後も上層構造は解体されたと無くそのまま放置され、荒廃する過程で屋根の裾部分の材がなくなり、そこから土の流入があり、その後上層構造が焼

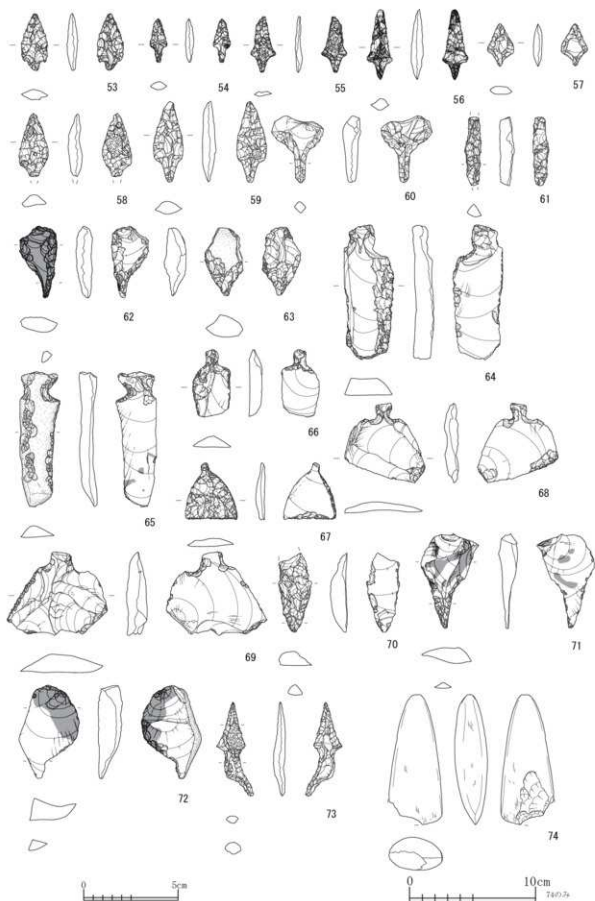


図 1-35 A区 SI-06-8

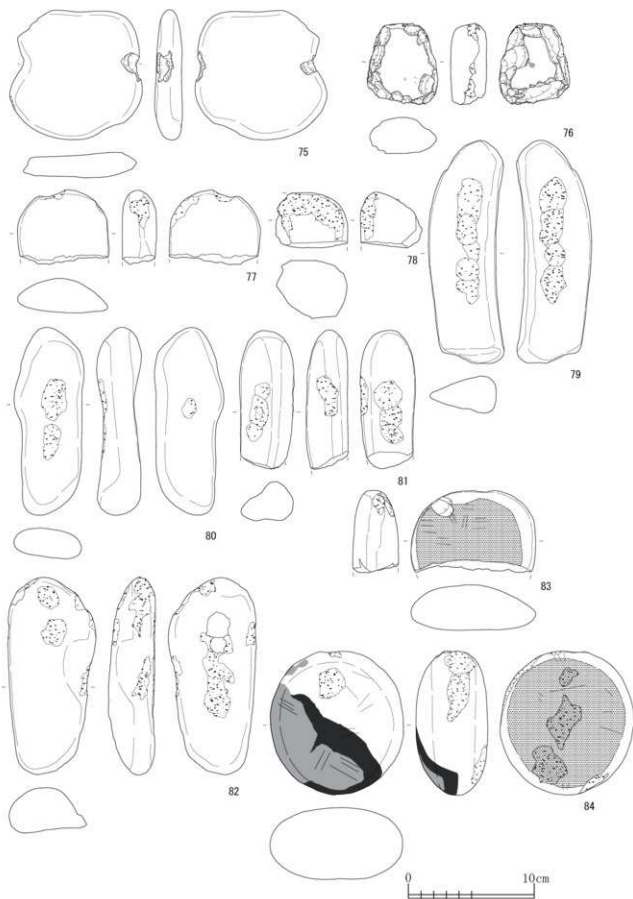


图 1-36 A区 SI-06-9

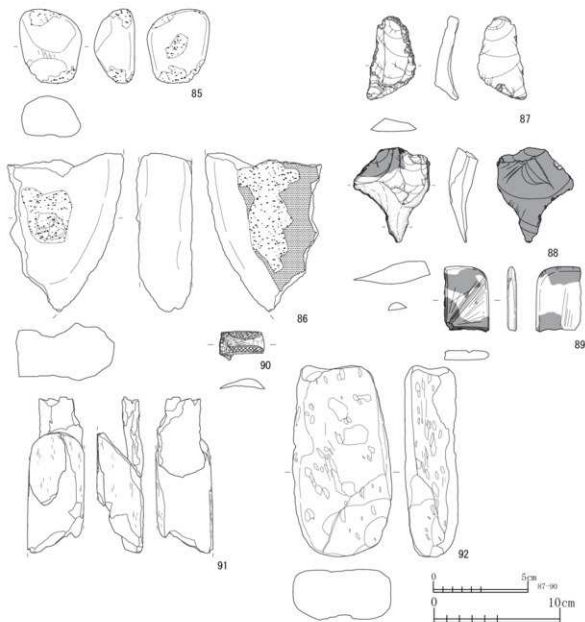


図 1-37 A区 SI-06-10

失・倒壊することによって第8層中の焼土・炭化材が生成されたものと考えられる。この場合住居の廃絶と上層構造の焼失は同時ではなく、時間差があることになる。また基本土層Ⅲ層に比定される層の堆積状況をSI-22と比較した場合、SI-22では廃絶後早い段階で急激に堆積したものと考えられるが、本遺構では廃絶と焼失は同時ではなく時間差があったものと考えられ、また第2層は焼失後に堆積土を挟んで堆積したものであるため、本遺構の廃絶はSI-22よりも古いものだと考えられる。床面出土炭化材を放射性炭素年代測定にかけており、測定年代で $3,100 \pm 40$ BP、補正年代で $3,110 \pm 40$ BPとの結果を得ている。この結果から本遺構は約3,150年前の縄文時代後期末葉の住居跡であると考えられる。

SI-08 (図1-38-42)

〔位置〕 A-3の南側で検出した。

〔重複〕 SI-09と重複している。本遺構がSI-09の堆積土を切っており、本遺構の方が新しい。

〔平面形・規模〕 北西側を攪乱のため検出できなかったが、残存部分の形状から槽円形を呈するものと思われる。規模は $(460) \times 464 \times 19$ cm、床面積は $21.551$ ㎡を測る。

〔壁〕 上部を削平されており、下部のみの確認である。月見野火山灰層を壁としており、確認できた部分ではほぼ垂直に立ち上がるようである。

〔床〕 月見野火山灰層を床面としている。東側に攪乱の影響のため小さな凹凸が多数見られる。その他の部分ではほぼ平坦でやや堅緻である。

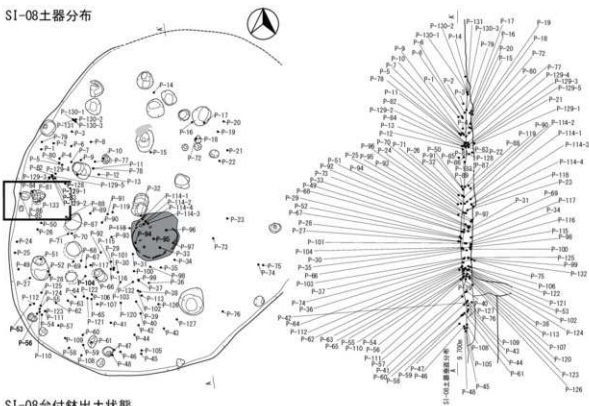
〔壁溝〕 なし。

〔Pit〕 床面でPitを35基検出した。明確に

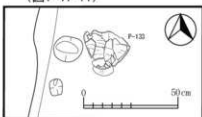




SI-08土器分布



SI-08台付鉢出土状態  
(図1-41-11)



SI-08石器分布

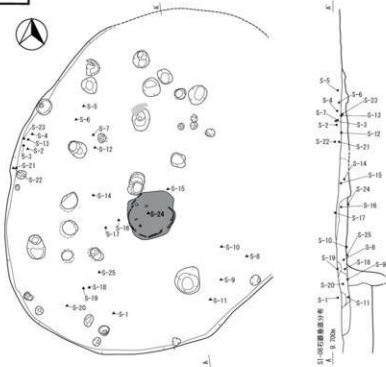


図 1-39 A区 SI-08-2

配置状況を捉えられるものではないが、このうち規模から主柱穴の可能性が高いと考えられるものは Pit 1 (37×60 cm)、Pit 33 (29×61 cm) の2基があげられる。この2基の間隔は約280 cmを測る。これを結んだライン上のほぼ中心に土器片圍炉が存在する。この他の柱穴で同じような規模の呈するものは Pit 8 (26×60 cm) があり、木住居が4基の主柱穴を持つと考えた場合、もう1基については深さが足りないが Pit 24 (20×26 cm) が妥当な位置に存在している。この4基を主柱穴と考える場合には台形の柱穴配列となる。

[炉] 床面中央付近の南西側で土器片圍炉1基を抽出した。SK-12の堆積土を掘り込んで構築した土坑の壁に土器片を並べたものである。炉体土器は北西側が欠落しているが、遺存部分から推測すると円形に並べられていたものと思われる。規模は69×(63) cmを測る。土器片は3個体分を確認しているが、炉体土器の主体となっているのは縄文地の深鉢の口縁から胴部までの1個体分、他の2個体の破片は数が非常に少なく、粉れ込みの可能性も考えられる。

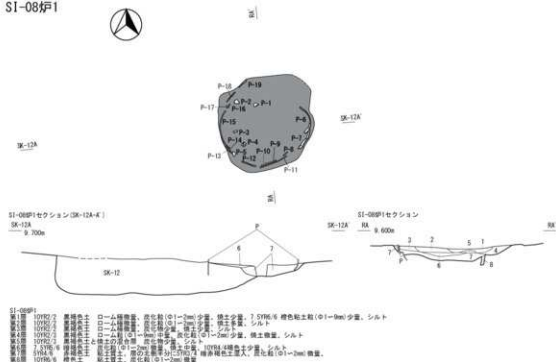
[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 2層に大別した。調査前は畑地であったため上部に削平を受けていることが考えられる。第1、2層とも基本土層Ⅲ層をベースとする黒褐色土であり自然堆積の様相を呈する。最下層に当たる第2層からは床面と接する形で台付深鉢が出土している。基本土層Ⅲ層の黒色土の堆積が見られないが、この2枚の層の上にあったであろう堆積土は削平されている可能性が高いため、基本土層Ⅲ層が削平されて無くなったと考えた場合、廃絶時期はⅢ層が床面に堆積しないことになるので早い段階でⅢ層が床面まで堆積しているS1-2よりも古いことになり、またⅢ層の堆積が無かった場合は本遺構はⅢ層が床面に自然堆積しているS1-2より新しく、Ⅲ層の堆積の見られないS1-14と同じ時期の廃絶になると考えられる。

[遺物] 31点図示した。床面から横位の条痕文を施した台付鉢、赤もしくは注口、飛行機型石磁が出土した。1～13は第Ⅲ群C類の土器である。1は胴部から頸部にかけて丸みを持ち、口縁部が外傾する器形を呈する深鉢である。文様は沈線上に瘤状貼付を施したモチーフを重層させたもので、口縁部から胴最長部にまで及ぶ。このモチーフは口唇部外面と頸部では突起状の貼り付けが加えられ、施文の順番は突起貼り付けの後に沈線を施し、その沈線上に瘤状貼付を施している。モチーフは丁寧にミガキ処理され、モチーフの上下を深く沈線状にすることでモチーフを強調している。内面調整は横位のミガ

キによるものである。2は炉体土器である。胴上部に最長部を持ち口縁部が内湾する器形を呈する。文様はRL斜行縄文を重層して施したもので、口唇部形状は先細りし丸みを帯びるものである。内面調整は横位のナデによるものである。外面に炭化物の付着が認められる。3はLR斜行縄文を地文とし、頸部に摩消帯を持つものである。Bは胴部でLR斜行縄文を地文とし、摩消手法と縦位の沈線により文様を構成したものである。外面にスズ状の付着物が認められる。4、5は条痕文を施した口縁部である。4は平坦な作りの口縁部が若干外側につまみ出され、内面調整は口縁部付近では横位のミガキ、以下の部分はナデによるものである。5は厚い作りで、口唇部形状は丸みを帯びるものである。条痕文は4より細いものとなっている。内面調整は横位のナデによるものである。6は無文の底部片である。底部が大きく張り出し、器面調整は外面が横位、縦位のミガキ、内面はナデによるものである。底面には磨耗のため明確ではないが、網代痕らしき痕跡が認められる。7は鉢の口縁部である。突起部分で、頂部には内外面に張り出す突起を有する。LR斜行縄文を施したものである。8は条痕文を施した鉢である。口縁部が若干内湾する器形を呈し、横位の条痕文が施されたものである。上面から見た形状はやや押し潰されたように楕円形を呈する。内面には口縁部から約5 cmの幅で炭化物が帯状に付着している。内面調整は横位のナデによるものである。9はLR斜行縄文を地文とし沈線を施したものである。この沈線は胴部に施したものは途中でとぎれ全周しない。口唇部形状は内削ぎ状を呈する。10は反外する口縁部で、文様は無筋1の斜行縄文の横位回転によるもので、口唇部にも同一原体を同一方向で回転施文している。11は台付深鉢の胴～台部にかけてのものである。胴部には横位の条痕文が施されている。台部は縦方向のミガキ処理が施されている。内面調整も条痕文によるものだが、外面のものに比較すると雑なものとなっている。胴上部内面には帯状に炭化物が付着しており、見込み部分にも付着している。12は明確に器種を断定できるものではないが肩部が大きく内湾することから壺の胴～底部とした。底部は胴部に比較して小さな作りとなっており上げ底状を呈する。器面調整は横位のミガキによるものである。13はミニチュアの台付鉢である。口縁～胴部は直線的に大きく外傾するものである。器面調整は横位のナデによるものである。14～20は遺構に帰属しない遺物である。14、15は第Ⅰ群A類の土器である。14は縄端回転文を施した口縁部である。口唇部に沈線を1条施したものである。15は平底の底部片である。胴部には刺突列を重層させ、底面には同じ施文具を使用した刺突列

SI-08炉1



SI-08炉2

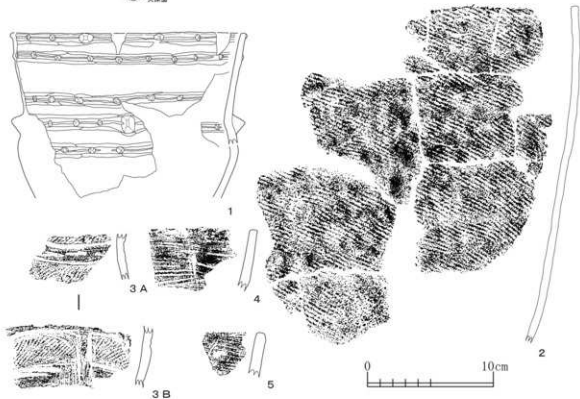


図 1-40 A区 SI-08-3

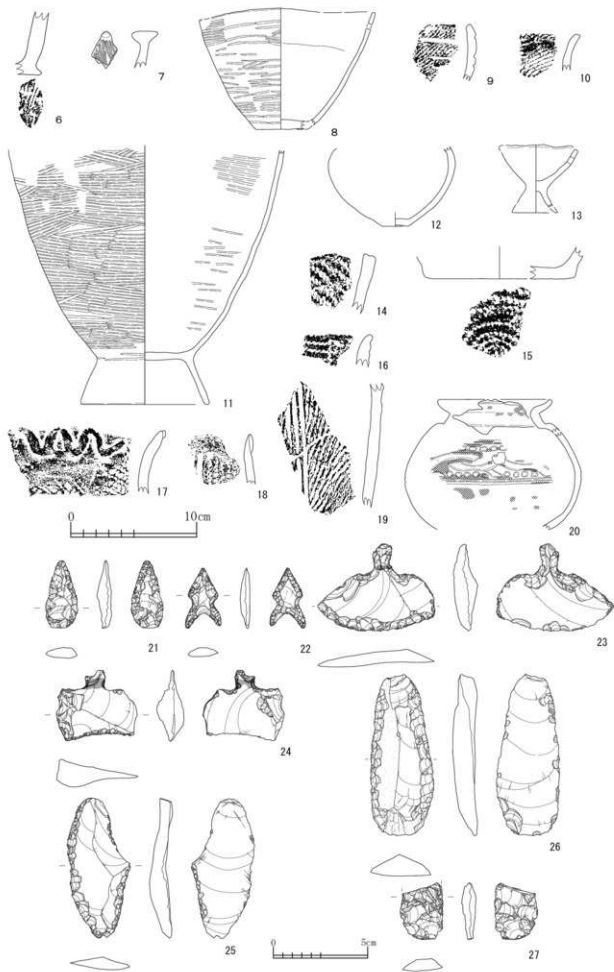


图 1-41 A区 SI-08-4

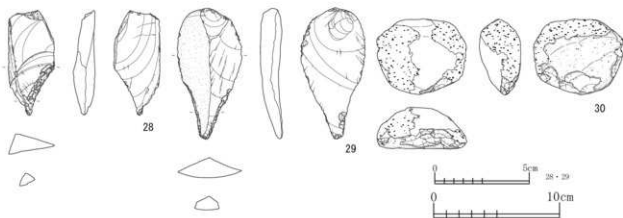


図 1-42 A区 SI-08-5

を環状に施したものである。16は第Ⅰ群B類の土器の口縁部である。R.L.原体の側面瓦痕を横位、縦位に施したものである。17は第Ⅱ群A類の土器の口縁部である。R.L.の斜行縄文を地文とし、口唇部外面に貼り付けられた無文の隆帯は波状を呈するものである。内面調整は横位のミガキによるものである。18、19は第Ⅱ群B類の土器である。18は口縁部で、折り返し状口縁を呈するものである。R.L.斜行縄文を地文とし、縦位に沈線を施している。19は短軸絡条体1類を地文とし縦位に3条沈線を施したものである。内面調整は縦位のミガキによるものである。20は第Ⅳ群の壺もしくは注口土器と考えられるものである。口縁部は外反し、最上部を胸部上半に持っ器形を呈する。文様は口唇部外面に沈線を1条、胸部上半には羊歯状文を施している。胸部下半は無文である。また外面に赤色顔料を塗布している。

石器は1類a 1点、1類eが1点、4類bが2点、6類bが5点、11類aが1点出土している。21は1類eである。22は1類aである。茎部がハの字状を呈している。23、24は4類bである。23の狭み部分にはアスファルトの付着がみられる。24の狭み部分及び刃部の加工は、短い剝離調整が片面のみに施されている。25～29は6類bである。28は石錐の可能性も考えられる。30は11類aである。端部に敲打痕と敲打に伴う剝離がみられる。使用石材は21～29珪質頁岩、30玉髓である。

【小結】本遺構は床面出土土器から後期末葉に帰属するものと考えられる。本遺構の特徴として平面形が楕円形を呈し、土器片圓い炉を持つことが挙げられる。該期の住居は円形を呈しており、また【壁】の項での推測によると主柱穴に対する炉の位置が異なっている。本遺構では主柱穴と炉の位置関係は柱文を結んだライン上となり、主柱穴を結んだ対角線の交点に炉が位置するSI-06、21、22とは異なっている。この違いは時期差によるものか、ま

た堆積土にも違いが見られるので、炉の位置の違いからSI-08は構築された時期は床中央に炉を持つ住居とは違い、堆積状況の違いから廃絶の時期も違うことが考えられる。

## SI-14 (図1-43-45)

【位置】A-3・4にまたがって位置している。

【重複】SI-09、22、SK-22、32、37、38、40、48、55と重複している。本遺構がいずれの遺構の堆積土も切って構築されているので、本遺構が新しい。

【平面形・規模】楕円形を呈する。規模は612×460×35cm、床面積は(37.246)㎡を測る。

【壁】月見野火山灰層とSI-09、22の堆積土を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がる。

【床】大谷火山灰層とSI-22の堆積土を床面としており、SI-22の堆積土の部分には貼り床がされている。大谷火山灰層の床面は堅緻であり、貼り床部分では大谷火山灰層の部分ほどではないが堅緻である。精査時には東側にやや傾斜した状態で床面を検出しているが、貼り床部分を掘り過ぎているためである。本来はほぼ平坦であったものと考えられる。

【壁溝】なし。

【Pit】床面で21基検出した。これらは明確に本遺構に帰属するものとは断言できないが、このうちPit1(10×6cm)、2(10×5cm)、3(10×13cm)、4(14×9cm)、5(14×12cm)、7(10×11cm)については壁柱穴である可能性が考えられる。

【炉】床中央付近ややや西側で焼土の拡がりを見出し、炉跡として精査したが、Pit17に切られているため明確に炉として判断できるものではなく、規模などは不明である。

【その他の付属施設】なし。

【堆積土】6層に大別した。自然堆積の様相を呈す

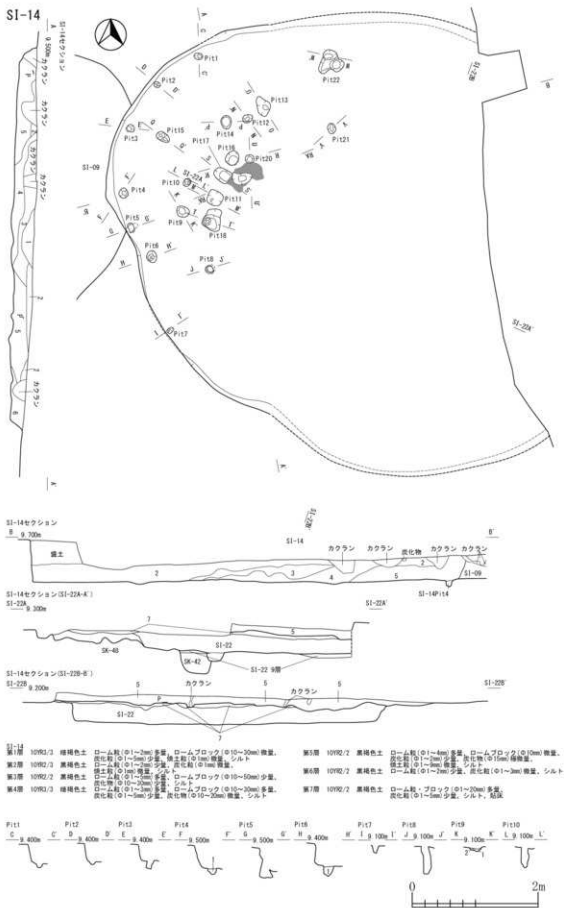
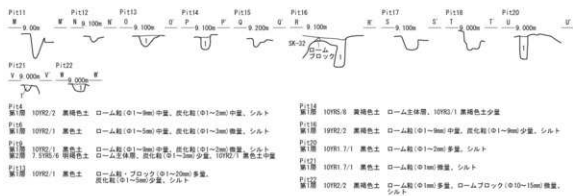
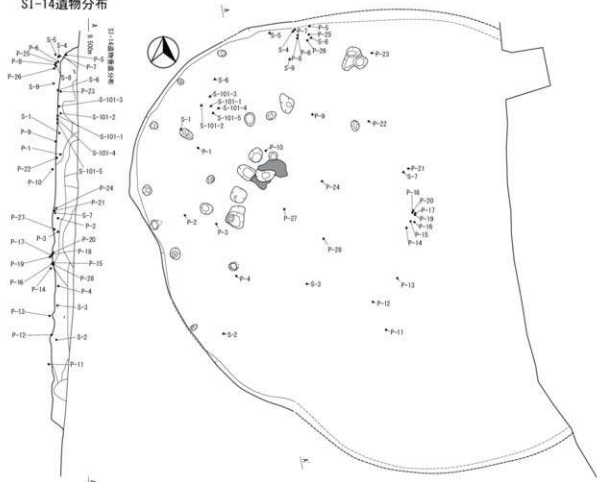


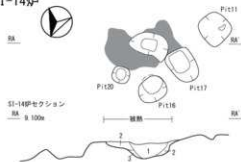
図 1-43 A区 SI-14-1



SI-14遺物分布



SI-14坪



SI-14坪  
第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(0~5mm)多量、炭化粒(0~5mm)微量、  
第2層 10YR2/1 黒色土 ローム粒(0~10~15mm)少量、シルト  
第3層 10YR4/6 多褐色土  
文法層

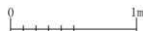


図 1-44 A区 SI-14-2



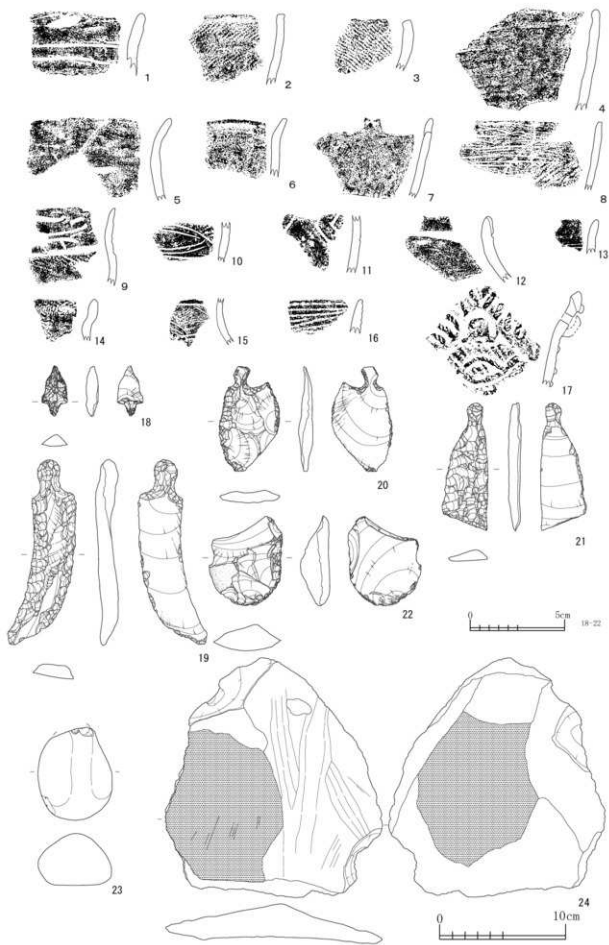


图 1-45 A区 SI-14-3

る。緩斜面上に位置しているため西から東側へかけて傾斜して堆積している。本遺構はSⅠ-22と切り合っており、土層観察からもSⅠ-22よりも新しいものであることは明らかである。堆積土は基本土層Ⅲ層の黒色土ベースの黒褐色土である。廃絶の時期については、明らかにSⅠ-22を切っているためⅢ層の堆積は見られない。他の住居との比較では同じようにⅢ層が見られないSⅠ-08にⅢ層の堆積が無かった場合は同じ時期の廃絶であると考えられ、あった場合にはSⅠ-08よりも新しい時期の廃絶と考えられる。なお、セクション図ではSⅠ-14が基本土層Ⅱ層を切って構築されたことになっているが、遺構精査を進めていくうちに調査区の壁面、ならびにSⅠ-22の堆積土層上にSⅠ-14の貼り床と考えられる層が確認されたことから、本来のSⅠ-14の範囲は調査区外まで及ぶものと考えられる。

〔遺物〕 23点図示した。縄文時代後期末葉の土器が主体である。1、9～12は第Ⅲ群A類、2～8、13～15はC類の土器である。1は若干外反する口縁部を持つ深鉢である。口縁部は口唇部に刻目を施すことで小波状を呈している。頸部に横位の沈線も施したものである。器面調整は内外面ともにナデによるものである。3は2層の深鉢の口縁部である。ともに内湾する器形を呈する。2はLRの斜行縄文を重層して施したものである。内面調整はナデによるものである。3は2層の内湾の度合いが大きいもので、無節の斜行縄文を施したものである。内面調整は横位のミガキによるものである。4～6は無文のものである。4は口縁部が若干内湾し、横位のナデ調整が施されたものである。5、6は口縁部が外反するものである。6には炭化物の付着が見られる。器面調整は5は外面が横位のミガキ、内面はナデ、6は両面ともナデによるものである。7は口唇部にB字状の突起を施した無文のものである。器面調整は縦位のミガキによるものである。8は横位、斜位の条痕文を施したものである。全体的に薄い作りで、口唇部が先細りするものである。9は小波状を呈する口縁部が外反し、胴部に膨らみを持つ器形を呈する。口縁部には太目の沈線による入り組み文を施し、胴部にはLRの斜行縄文を施している。10、11は沈線を施した胴部である。10は弧状を呈する沈線を向かい合わせに施し、11ではクランク状の沈線を施している。内面調整はともに横位のナデによるものである。12～15は壺である。12は短い頸部で口縁部は折り返し状を呈するものである。器面調整は外面は横位のミガキ、内面は口縁部付近が横位のミガキで、以下の部分ナデによるものである。13は外反する口縁部で頸部に沈線を施したもので、口縁上部に丸みを帯びる。内面

調整は横位のミガキによるものである。14はRLの斜行縄文を地文とし口縁部と頸部が段状に立ち上がるものである。15はLRの斜行縄文を地文とし横位の沈線と瘤状貼付を施したものである。16、17は遺構に帰属しない土器である。16は第Ⅰ群B類の土器の口縁部である。RL原体の側面圧痕を横位、斜位に施したものである。内面調整はミガキによるものである。17は中期の深鉢である。山形突起部分で、RLの斜行縄文を地文とし口唇部は折り返し状を呈し肥厚した作りである。L原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付けている。また突起中央付近に内面の孔が見られるが、外面でボタン状の貼付を施してふさいでおり貫通していない。内面調整はミガキによるものである。

石器は1類bが1点、4類aが3点、6類bが1点、11類aが1点、15類が1点出土している。18は1類bである。19～21は4類aである。19の裏面は使用光沢痕が顕著である。19の表面左側縁、20は表面右側縁、21は表面右側縁に微細剥離がみられる。22は5類bである。23は11類aである。円礫の側面に敲打痕がある。24は15類である。表裏面に磨り面がみられるほか、表面には溝状に磨り窪み砥面が3面みられる。使用石材は18～21珪質頁岩、22玉髄、23安山岩である。

〔小結〕 本遺構は床面出土土器から後期末葉に帰属するものと考えられる。当初は円形を呈するものとして精査を行なったが、本遺構と重複しているSⅠ-22の精査時に堆積土層、並びに調査区壁面にSⅠ-14の貼り床と考えられる硬化した層が検出された。そのため本遺構は当初検出した規模よりもだいぶ大きいものとなった。

SⅠ-21 (図1-46～51, 238)

〔位置〕 A-4に位置している。

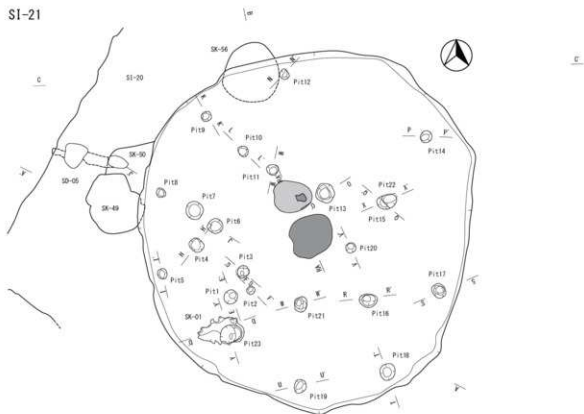
〔重複〕 SⅠ-20、SK-56と重複している。新旧関係については土層堆積状況からSK-56<本遺構<SⅠ-20の関係である。なお南東側の床面でも別遺構との重複を確認しているが、今年度は確認だけとした。この未調査遺構との新旧関係は本遺構>未調査遺構である。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は5.60×5.28×5.55cm、床面積は2.41.32㎡を測る。

〔壁〕 月見野火山灰を壁としており、ほぼ垂直に立ち上る。

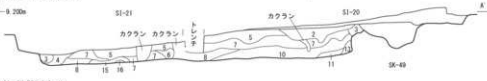
〔床〕 西側では大谷火山灰層を、東側では未精査遺構の堆積土を床面としている。ほぼ平坦で大谷火山灰層の面では非常に堅硬であるが、未精査遺構の堆積土で構築されている面では黒褐色土で構築されており、堅く締まっただけで、大谷火山灰層で構築

SI-21



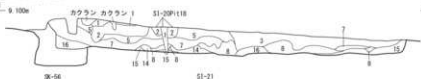
SI-20・21・SK-08セクション

A 0.20m



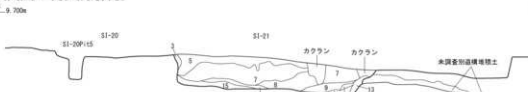
SI-21・SK-06セクション

B 0.100m



SI-06・20エレベーション・SI-21セクション

C 0.300m



SI-21

- 第1層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第2層 10192/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第3層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第4層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第5層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第6層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第7層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第8層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第9層 10191/7/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第10層 10191/7/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト

SI-21

- 第10層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第11層 10192/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第12層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第13層 10191/7/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第14層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第15層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第16層 7.5V192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト

SI-156-01セクション

D 0.600m

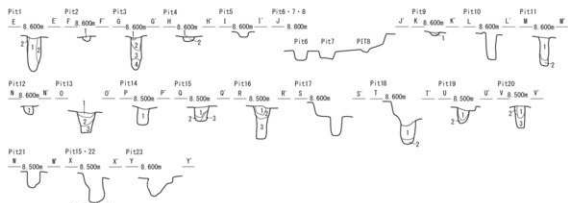


SK-01

- 第1層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第2層 10192/1 黒土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト
- 第3層 10192/2 美焼色土 ローム層(Φ1~2m)多量、炭化粒(Φ1~2m)散見、シルト



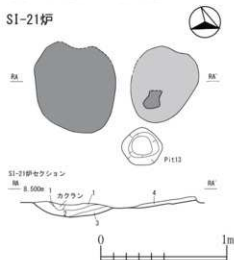
図 1-46 A区 SI-21-1



- P101  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ロームブロック(Φ15~30cm)少量、炭化粒(Φ2mm)微量  
 第2層 10YR2/6 黄褐色土 遺人物なし  
 第3層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~2cm)少量、炭化粒・焼土粒(Φ1mm)微量
- P102  
 第1層 10YR4/6 褐色土 パリス粒(Φ5mm)少量  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~1cm)少量、焼土粒(Φ2mm)微量  
 第3層 10YR2/6 黄褐色土 ローム粒(Φ1~2cm)少量  
 第4層 10YR2/7 黄褐色土 炭化粒(Φ3mm)微量、パリス粒(Φ3mm)少量
- P104  
 第1層 10YR4/6 褐色土 粘土質土、炭化粒(Φ3mm)微量  
 第2層 10YR5/6 黄褐色土 砂質土、パリス粒(Φ6mm)少量  
 第3層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~5mm)少量、炭化粒(Φ2mm)微量、  
 焼土粒(Φ1mm)微量、パリス粒(Φ5mm)微量
- P105  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~5mm)少量、ロームブロック(Φ10~15cm)少量  
 第2層 10YR4/6 褐色土 炭化粒(Φ2mm)少量、焼土粒(Φ2mm)微量  
 第3層 10YR4/6 褐色土 ローム粒(Φ2mm)少量、ロームブロック(Φ20cm)微量
- P107  
 第1層 10YR4/4 褐色土 パリス粒(Φ5mm)微量

- P108  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~4mm)微量、炭化粒(Φ2~4mm)微量、  
 焼土粒(Φ1~4mm)微量、シルト  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~3mm)少量、炭化粒・焼土粒(Φ1~2mm)微量、  
 シルト  
 第3層 7.5YR2/3 緑褐色土 ローム粒(Φ1~2cm)微量、シルト
- P109  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1mm)微量、シルト
- P110  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~3cm)少量、炭化粒(Φ2mm)微量、  
 焼土粒(Φ2~3mm)少量、パリス粒(Φ1mm)微量、シルト  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~3cm)少量、炭化粒・焼土粒(Φ1mm)微量、  
 シルト  
 第3層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~5mm)少量、シルト  
 埋設箇所50cm程度の幅の炭化粒の板が埋め込まれている
- P116  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~5mm)少量、ロームブロック(Φ10~30cm)微量、  
 炭化粒(Φ2mm)微量、パリス粒(Φ4mm)微量、シルト  
 第2層 10YR4/6 褐色土 ローム粒(Φ1~3cm)少量、炭化粒(Φ1mm)微量、  
 焼土粒(Φ1~5mm)少量、シルト  
 第3層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1cm)微量、シルト
- P118  
 第1層 10YR1/7 黄褐色土 ローム粒・炭化粒・焼土粒(Φ1mm)微量、シルト  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1mm)微量、シルト
- P119  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ2mm)微量、炭化粒(Φ3mm)微量、  
 焼土粒(Φ2mm)少量、シルト  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ2mm)少量、炭化粒(Φ1~3mm)微量  
 炭化粒(埋設穴)、焼土粒(Φ3mm)微量
- P120  
 第1層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~3cm)少量、炭化粒(Φ3mm)微量、シルト  
 第2層 10YR2/7 黄褐色土 ローム粒(Φ1~3cm)少量、炭化粒(Φ3mm)微量、シルト  
 第3層 10YR1/7 黄褐色土 シルト

SI-21炉



- SI-21炉  
 第1層 7.5YR4/6 緑褐色土 遺人物なし  
 第2層 5YR2/6 黄褐色土 遺人物なし  
 第3層 7.5YR2/4 緑褐色土 遺人物なし
- 第4層 7.5YR2/3 緑褐色土 土中に7YR2/6 明赤褐色土混入、ローム粒(Φ1~8mm)微量、  
 炭化粒(Φ1~8mm)少量

SI-21焼土・粘土範囲

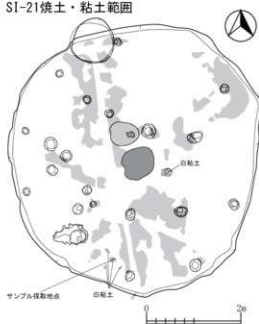
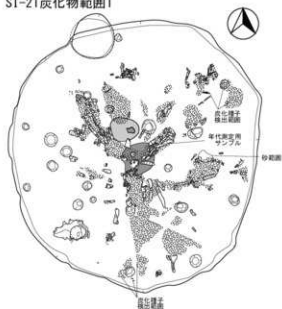
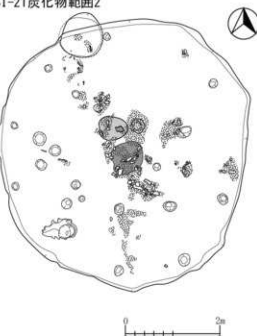


図 1-47 A区 SI-21-2

SI-21炭化物範囲1



SI-21炭化物範囲2



SI-21遺物分布図

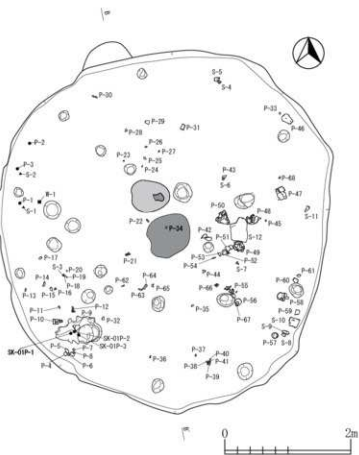
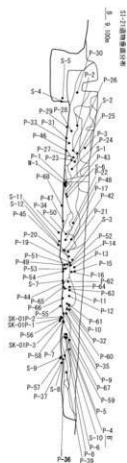


図 1-48 A区 SI-21-3

された面ほど堅緻ではない。

[壁溝] なし。

[Pit] 床面で23基検出した。明確に配置状況を捉えられものではなく、配置状況も不明瞭である。

[炉] 床中央付近に地床炉1基を検出した。浅い掘り込みのもので、平面形は不整形円形を呈し、規模は直径約70cm、深さ9cmを測る。また地床炉の南東側において不整形円形の焼土の拡がりを検出した。地床炉堆積土第1層と同様の褐色土の拡がりであるが、明確な掘り込みは確認できなかった。規模は75×64cmを測る。

[その他の付属施設] 南西側の床面で不整形を呈する土坑を検出し、SK-01とした。規模は65×40×10cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は大きな凹凸がある。

[堆積土] 16層に大別した。傾斜面上に位置しているため南東方向へ流れ込むような形で堆積している。第8層が焼土・炭化材を大量に含む層であり、炭化材・焼土は床面に接しているが床面に被熱の影響は見られない。第1～7層のベースとなるのは基本土層Ⅲ層の黒色土であり、それに焼土・炭化材などが混入することで黒褐色土になっていると考えられる。また第14層は焼土の層であり、南東側を中心に床上に堆積している。第11、13、16層は壁際堆積土であり、炭化材・焼土を大量に含む第8層の下に堆積しており、埋没過程の最初の段階の堆積土である。形態、規模、形の形態を考えるとS1-2と並存していた可能性は高いと考えられるが、鍵層の黒色土に確実に対応するといえる堆積土が見られず、また人為的堆積の様相を示しているもので、同じような時期に構築されたが廃絶時期に差があったということが考えられる。第8層から焼土・炭化材が検出されており焼失住居として捉えていたが、本来であれば床面にも被熱の影響で焼土化した面が検出されると考えられるが、本遺構においては床面で被熱して焼土化しているのは地床炉のみである。焼失住居で無いとすると、この焼土・炭化材はこういった起源のものが問題になる。また焼土・炭化材と床面出土遺物は南東側に集中しており、炭化材は炉を中心に放射状に検出されている。構築面は基本土層Ⅲ層を掘り込んでいる。

[遺物] 39点図示した。後期末葉の土器を中心に、前期、中期の土器も出土している。床面からは十鞭内V式の壺、注口土器などともに39として図示した結菌式赤漆塗壺が1点が出土している。また、東側と南側の壁際の堆積土中からは炭化種子が大量に出土しており、一部は床面まで及んでいる。

出土土器のうち、図示したものに1～23は第Ⅲ群C類とした土器群である。1～7は深鉢である。1はRLの斜行縄文を施した胴～底部にか

ての資料である。底部は上げ底状の作りとなっており内面調整はナデによるものである。2はLRの斜行縄文を施した深鉢の口縁部である。口縁部は内湾し口唇部内面が肥厚するものである。口唇部には丁寧にミガキが施され、内面調整は肥厚した部分の直下に横位の雑なミガキを施し、以下の部分はナデを用いている。3は急な角度で立ち上がるもので、口唇部形状は丸みを帯びている。無節1の斜行縄文を施したものである。内面調整は横位のミガキによるものである。4、5は条痕文を施した深鉢である。4は底部から口縁部にかけて急な角度で立ち上がり、口縁部が若干内湾する深鉢である。口径に対する底径の比率が大きく、底部は上げ底状を呈する。条痕文は口縁部付近では横位、斜位のものを施し、以下の部分では縦位のものに施している。内面調整はナデによるものである。5は大きく外傾する器形を呈し、横位に条痕文を施したものである。底部は上げ底状を呈し、内面調整はナデによるものである。6は沈線により文様を施した胴部である。弧状の沈線を向かい合わせにしたモチーフと、横位、斜位の沈線を組み合わせたものである。内面調整は横位のミガキによるもので外面に炭化物の付着が見られる。7は無文のものである。口縁部が内湾するもので器面調整は内外面ともにミガキによるものである。8～13は鉢である。8は鉢の胴～底部である。無文で器面調整は外面がミガキ、内面はナデによるものである。底面付近に帯状の炭化物の付着が見られる。9は口縁部が内湾し最狭部を口縁部直下に持つ鉢である。器面調整は内外面ともに口縁部付近は横位のミガキ、以下の部分は縦位のものとなっている。底部は上げ底状となっている。10は無文の鉢である。口唇部は先細りするもので器面調整は外面は雑なミガキ、内面は口縁部付近が横位のミガキ、以下の部分は縦位のナデとなっている。11は小型の鉢である。器面調整は内外面ともにナデによるものである。全体的な成形が雑なもので、口唇部、底面の成形において顕著である。12は口唇部に突起を有する鉢である。胴部に若干丸みを帯び、口縁部が外反する。器面調整は外面が縦位のミガキ、内面はナデによるものである。13は口唇部に2個1対の突起を有するものである。条痕文は櫛目状の細いものを横位に施している。内面調整は横位のナデとなっている。14は胴部が球胴状を呈し頸部は内傾し口縁部が外反する壺である。瘤状貼付は頸上部と胴最狭部に施しており、縦位の貫通孔を有する。器面調整は外面が縦位のミガキ、内面は口縁部付近が横位のミガキ、以下の部分はナデによるものとなっている。底部は若干上げ底状を呈する。14～22は壺である。14は最狭部を胴部のほぼ真ん中に持ち、頸部から口縁部にかけて外傾する器形を呈する

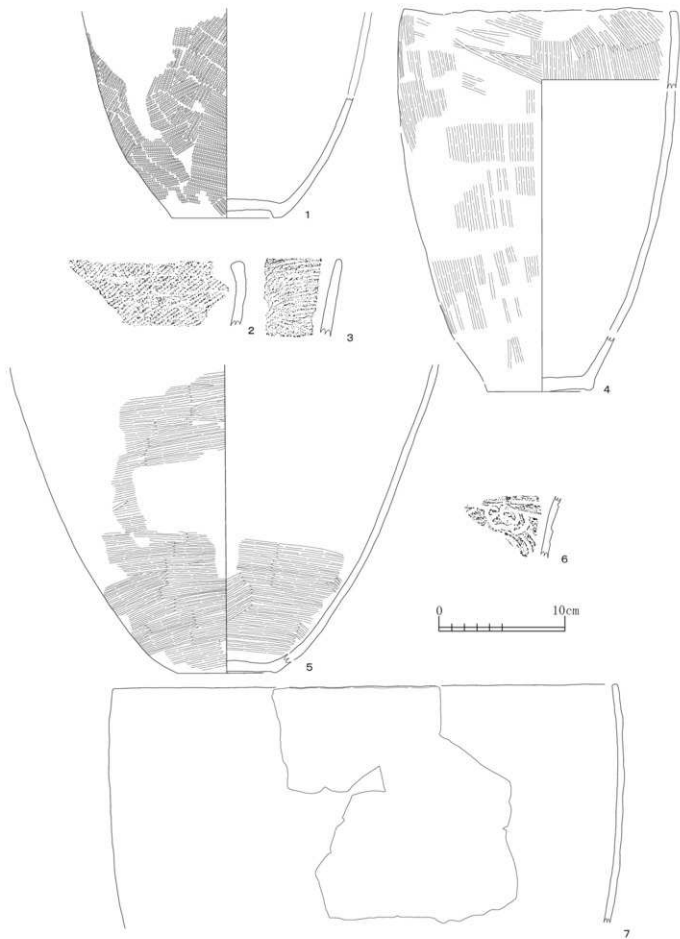


图 1-49 A区 SI-21-4

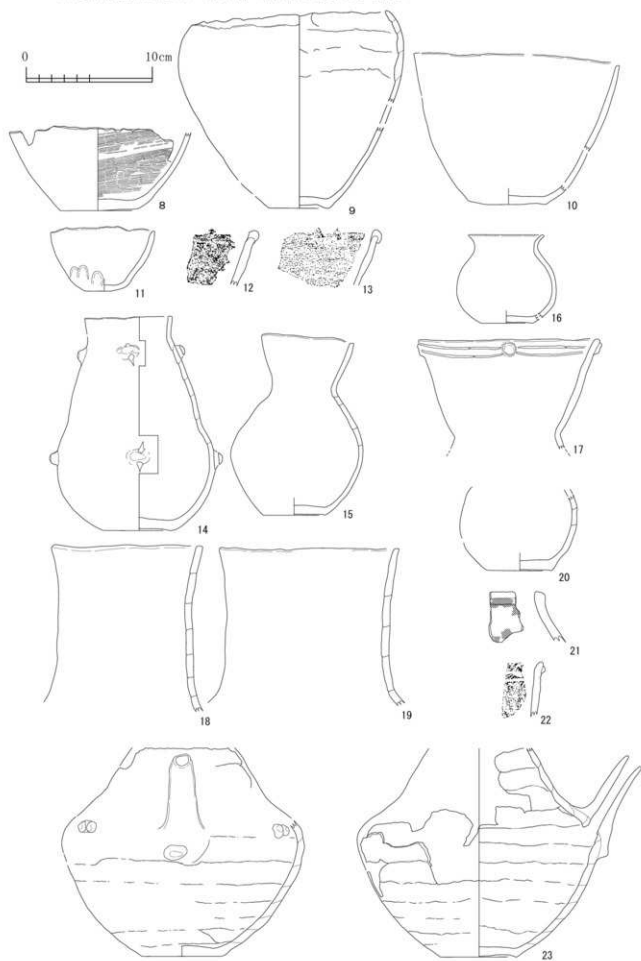


図 1-50 A区 SI-21-5



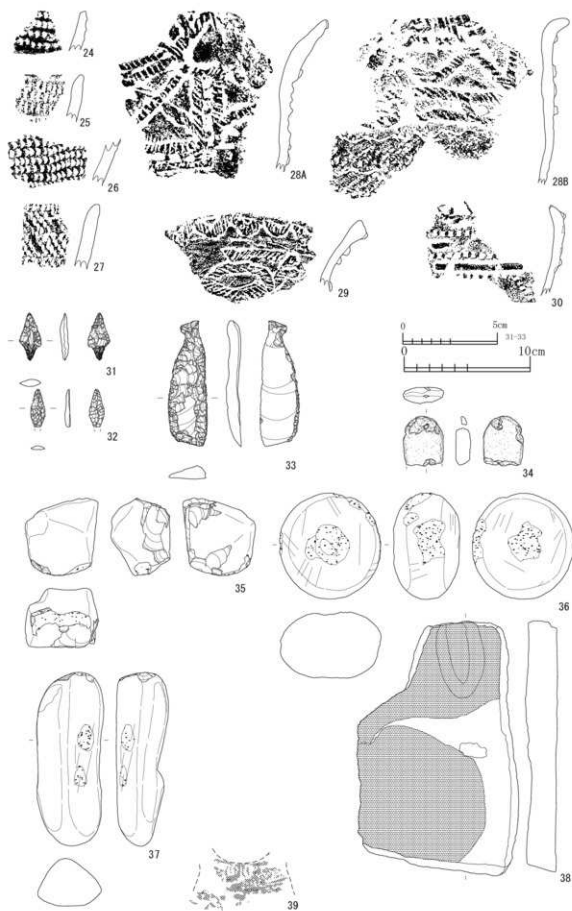


图 1-51 A区 SI-21-6

ものである。器面調整は外面が縦位のミガキ、内面は口縁部付近が横位のミガキとなっている。15は頸部に括れを持ち、口縁が外反するものである。胴部中央に最張部を持ち、器面調整はナデによるものである。16は小型のものである。最張部を胴部下半に持ち、頸部から口縁部にかけて外反する器形を呈する。器面調整は外面が横位のミガキ、内面は口縁部付近では横位のミガキ、以下の部分はナデによるものとなっている。底部は上げ底状を呈する。17は口縁部である。大きく外傾するもので口唇部外面に中央をくぼませた瘤状貼付と沈線を2条施したものである。器面調整は外面が縦位のミガキ、内面は横位のミガキとなっている。18、19も口縁部である。頸部がほぼ直立し口縁部が若干外反する器形を呈する。器面調整は外面が18は縦位のミガキ、19は横位のミガキ、内面は18がナデ、19は横位のミガキとなっている。20は胴～底部である。胴部のほぼ中央に最張部を持ち、底部は上げ底状を呈するものである。器面調整は外面がミガキ、内面はナデによるものとなっている。21は赤色顔料を塗布した頸～口縁部である。折り返し状の肥厚した口唇部は外削ぎ状を呈する。内面にも赤色顔料が認められる。22は口唇部外面に瘤状貼付と沈線を施したものである。外面は縦位のミガキ、内面は横位のミガキによる調整を施したものである。23は注口土器である。最張部を肩部に持ち、注口部の両サイドに二股状の瘤状貼付を施したものである。注口部の付け根には突起状の貼り付けを有する。器面調整は外面がミガキ、内面はナデによるものとなっている。24～30は遺構に帰属しない土器である。24～27は第Ⅰ群A類の土器である。24は口唇部が先細りし内削ぎ状を呈するもので、米粒状の刺突列を重層して施したものである。25は波状口縁を呈し、口唇形状が先細りするものである。細長い長方形の刺突列を重層して施したものである。26は三日月形の刺突列を重層した胴部である。27は縄端回転文を施した口縁部である。口縁部は若干波状を呈し、口唇部外面に1条の刺突列を施したものである。いずれも内面調整はナデによるものであり、27では確なものとなっている。28～30は第Ⅱ群A類の土器である。28は台形状突起部分で、L原体の側面圧痕を施した隆帯の貼り付け、刺突を施したものである。内面調整は口縁部付近がミガキ、以下の部分はナデとなっている。Bは胴部には結束第2種を施している。内面に炭化物の付着が認められる。29は折り返し状の肥厚した口唇部を持ち、L原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付けたものである。内面調整は横位のミガキによるものである。30は口縁部が内湾するもので、黒文の隆帯の貼り付け、方形の刺突により文様を構成し

たものである。

石器は1類cが1点、1類dが1点、4類aが1点、10類が1点、11類aが1点、11類dが2点、14類が1点出土している。31は1類cである。基部にアスファルトの付着がみられる。32は1類dである。33は4類aである。34は10類である。35は11類aである。垂角礫の端部に敲打痕がみられる。36、37は11類dである。36は円礫の裏面に磨面と敲打痕、および周辺に敲打痕がみられる。37は楕円礫の端部および表面に敲打痕と磨面がみられる。38は14類である。裏表面を機能面としている。使用石材は31～33珪質頁岩、34軽石、35頁岩、36～38安山岩である。[小結] 本遺構は床面出土炭化材の年代測定と、床面出土土器から後期末葉に帰属するものと考えられる。本遺構は床面直上の堆積土中から大量の焼土、炭化材が出土しており、焼失住居として考えていたが、床面に被熱の影響は見られなかった。出土した炭化材の量からすると当然床面に被熱の影響が及ぶものと考えられる状況であるが、影響が見られなかった理由としては出土した焼土、炭化材が上層構造(土葺)の倒壊によるものである可能性、または廃絶の過程で投げ込まれた可能性も考えられる。後者の場合、隣接する焼失住居のS1-06の堆積土が廃絶の過程で利用された可能性も考えられる。床面出土炭化材を放射性炭素年代測定にかけており、測定年代で3,020±30BP、補正年代で3,010±40BPとの結果を得ている。この結果から本遺構は約3,000年前の縄文時代後期末葉の住居跡であると考えられる。

S1-22 (図1-52-55,238)

[位置] A-3、4にまたがって検出した。

[重複] S1-14、SK-42、45、48と重複している。新旧関係については土層堆積状況からSK-42、45<本遺構<S1-14の関係である。なお南東側の床面でも別遺構との重複を確認している。B区での重複遺構はSK-101・104が相当する。SK-104が帰属しないしは前段階、SK-101が新しい。

[平面形・規模] 東側が調査区外へ及ぶが、円形を呈するものと思われる。規模は50.4×(31.6)×30cm、床面積は(13.926)m<sup>2</sup>を測る。[壁] 大谷火山灰層を壁としている。ほぼ垂直に立ち上がり、堅緻である。

[床] 大谷火山灰層と南東側では黒褐色土を床面としている。大谷火山灰層の床面は堅緻で平坦であるのに対し、黒褐色土部分は脆弱でしまりが弱い。

[壁溝] なし。

[Pit] 床面で13基検出した。明確に配置を捉

SI-22

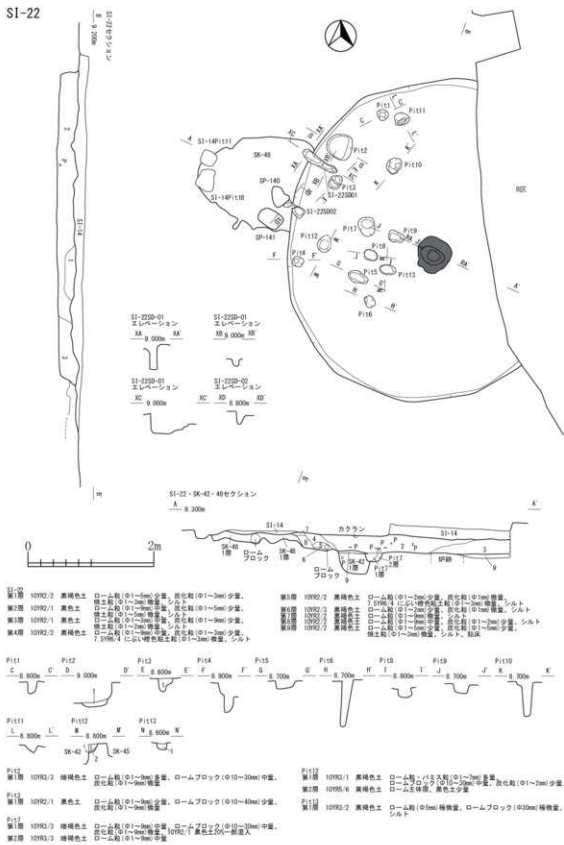
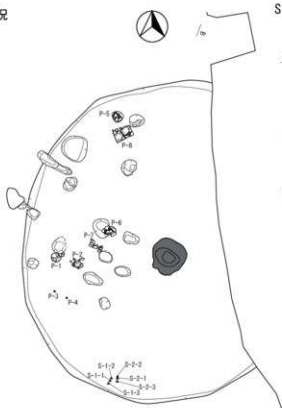
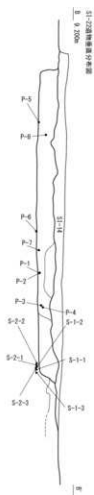
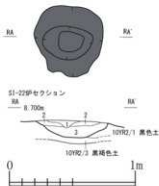


図 1-52 A区 SI-22-1

SI-22遺物出土状況



SI-22炉



- 第1層 7.5192/2 黒褐色土 ローム状(0.1-5cm)程度、  
灰色土粒(0.1-2cm)程度、  
炭化物(0.5-2cm)程度、  
焼土粒(0.1-2cm)程度、  
第2層 7.5192/3 緑褐色土 同上、  
炭化物(0.1-2cm)程度、  
焼土粒(0.1-2cm)程度、  
第3層 5192/5 緑赤褐色土 炭化物なし、  
灰土層

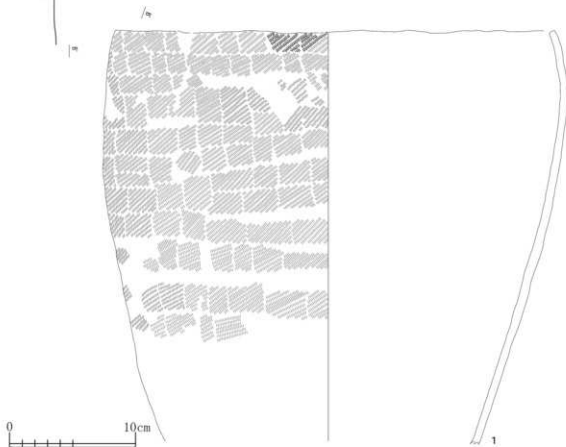


図 1-53 A区 SI-22-2

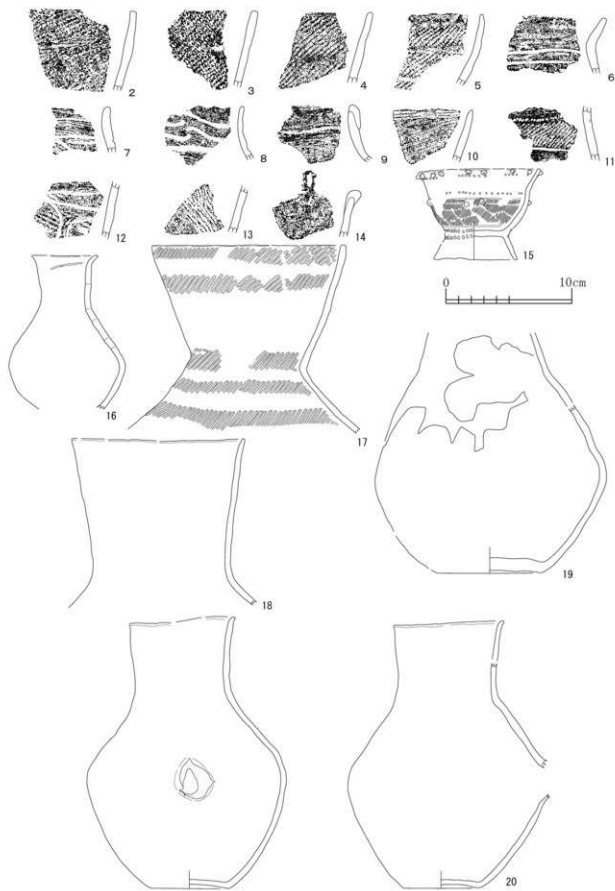


图 1-54 A区 SI-22-3

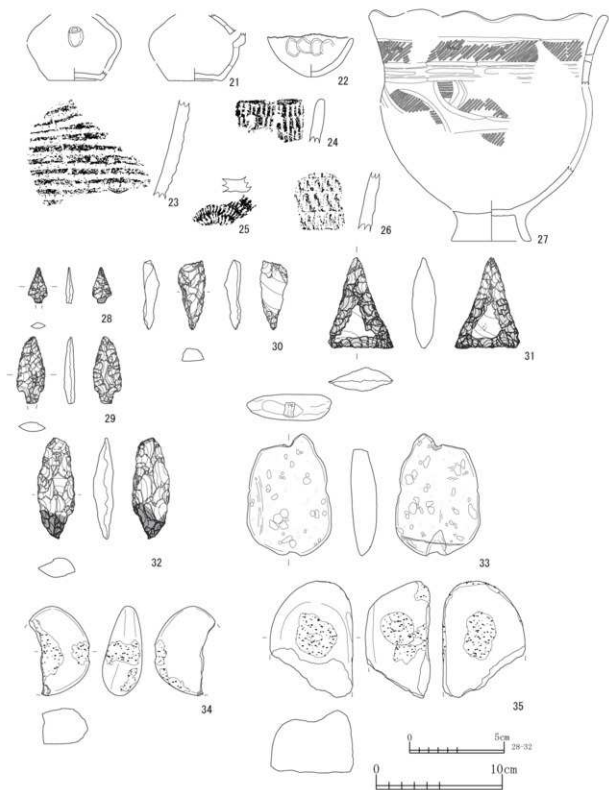


図 1-55 A区 SI-22-4

えられるものではなく、本遺構に帰属するとは断言できないものである。

[炉] 地床炉1基を検出した。位置については検出した壁から推測される平面形では床面のほぼ中央に位置しているものと考えられる。平面形は不整形を呈し、規模は長さ55cm、深さ12cmを測る。[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 9層に大別した。第2、3層の黒色土が基本土層Ⅲ層と酷似しており、これらの層は西側壁付近以外のほぼ全面において床面と接している。第2、3層と分層しているが混入物の量に若干違いがあるだけでほぼ同一の層と考えられる。第7、8層は壁際に堆積した埋没過程における最初の段階での壁際堆積土である。第9層は貼り床部分である。第2、3層は自然堆積の様相を呈しており、南東方向に向けて傾斜してほぼ床全面を覆うように急激な堆積の様相を呈している。このため第2、3層が廃絶後早い段階で流入し、埋没したものと考えられる。

[遺物] 35点図示しているが混入物の土器が中心で出土している。床面からはある程度復元可能なものも出土している。またPitからは同一個体の土器片が積み重ねられた状態で出土している。1～5、10、14～22は第Ⅲ群C類、6～9、11～13は第Ⅲ群A類の土器である。1～13は深鉢である。1は口縁部が内湾し口縁部直下に最張部を持つ深鉢である。無筋1の斜行縄文を施している。内面調整は口縁部付近が縦位のミガキ、以下は縦位のものととなっている。外面に炭化物の付着が見られる。2は口縁部が若干内湾するもので、R.Lの斜行縄文を施している。内面調整はナデによるものである。外面に炭化物の付着が認められる。3は口縁部が外傾し、L.Rの斜行縄文を施したものである。内面調整はナデによるものである。4も3と同じ器形を呈するが、口唇部が先細りし薄い作りとなっている。L.Rの斜行縄文を施している。内面調整は縦位のミガキによるものである。5は口縁部が内湾するもので、口唇部は先細りし薄い作りとなっている。L.Rの斜行縄文を施しており、口唇部外面では摩り消され無文となっている。内面調整は口唇部付近が縦位のミガキ、以下の部分もナデによるものである。6は頸部に括れを持ち口縁部が外反するものである。口唇部に刻目、頸部に沈線を2条施している。器面調整は内外面ともに縦位のナデによるものである。内面に炭化物の付着が認められる。7は波状口縁を呈し、節目状沈線の下を沈線で区画し、斜位の沈線を加えたものである。内面調整は縦位のミガキによるものである。8は頸部に括れを持ち口縁部が外反するものである。口縁部は小波状を呈し、入り組み状の文様を施している。内面調整は縦位のナデによるものである。9は頸部に括れを持

ち口縁部がほぼ直立するものである。口縁部は折り返し状を呈し肥厚する。器面調整は内外面ともに縦位のミガキによるものである。10は口縁部が外傾するもので、口唇部は内削ぎ状で鋭角的な作りとなっている。横位の条痕文を施したものである。内面調整は縦位のミガキによるものである。11は胴部である。L.Rの斜行縄文を地文とし、摩消手法により文様を構成したものである。無文部分と縄文地の区画として円形の刺突を施している。内面調整は縦位のミガキによるものである。12も摩消手法を用いた胴部である。R.Lの斜行縄文を地文とし、曲線的な文様を施している。無文部分と縄文地の区画として沈線を施している。内面調整はナデによるものである。13は胴部下半のものである。単軸絡条体を施したものである。内面調整はナデによるものである。14は鉢である。口唇部に刻目を施した突起を有し、頸部で若干括れを持ち口縁部が外反するものである。器面調整は外面が縦位のミガキ、内面はナデによるものである。15は小型の台鉢である。胴部に丸みを持ち口縁部が外傾する器形を呈する。文様はL.Rの斜行縄文を地文とし、口唇部外面に瘤状貼り付けを施し、口縁～頸部にかけて摩消手法により上下を円形刺突で区画した無文部分を作り出している。胴最張部には2条の沈線とその上に2個1対の瘤状貼付を施している。胴部と台部の境には1条の沈線と米粒状の刺突列を2段施している。内面調整はナデによるものである。16～19は壺である。16は頸部が長く、最張部を胴部中央に持つものである。口縁部は大きくつまみ出され外反し、外面には調整時の工具痕が認められる。器面調整は頸部～肩部にかけて縦位のミガキ、胴最張部付近では縦位のミガキによるものである。17は口縁～肩部にかけてのものである。L.Rの斜行縄文を地文とし、摩消手法を用い帯状に無文帯を作り出し文様を構成したものである。口縁部下半では無文帯は広がっている。内面調整はナデによるものである。18は口縁～頸部にかけてのものである。口縁部はほぼ直立する。無文で器面調整は外面が縦位のミガキ、内面は縦位のナデによるものである。19は肩～底部である。最張部を胴部下半に持ち、肩部は急な角度で内傾する。器面調整は外面がミガキ、内面はナデによるものである。底部は若干上げ底状を呈する。20、21は注口土器である。20は胴部に丸みを帯び、口縁部がほぼ直立若干外反するものである。器面調整は口縁～肩部にかけて縦位のミガキによるもので、胴部は縦位のミガキが主体であるが、縦位の部分も見られる。底部は上げ底状を呈する。21は小型のものである。胴部の真ん中付近に最張部を持つものである。注口部は付け根の部分のみ残存しており、孔は急角度で立ち上がるもの





と考えられる。器面調整はナデによるものである。22はミニチュア土器である。ボウル状を呈し、丸底のものである。器面調整は雑なナデによるもので、指頭圧痕も確認できる。内面に赤色顔料の痕跡が認められる。23～27は遺構に帰属しない土器である。23～26は第I群A類の土器である。23は深鉢の胴下半部である。全面に押し沈線文を施している。24は刺突列を重層した口縁部である。刺突列は細長いもので笕状の刺突列を使用したものと考えられる。口唇部形状は若干平坦な作りとなっている。25は底面に爪形の刺突列を環状に施したものである。26は同一方向の端端回転文を施した胴部である。これらの内面調整はナデが主体であるが、24では横位のミガキとなっている。27は第IV群の台付鉢である。口縁部は波状を呈し、口唇部は丸みを帯びる。RLの斜行縄文を地文とし、摩消手法により文様を構成している。口縁部直下では地文を摩り消し、頸部と胴部の境には幅広の沈線が施されている。胴部は最張部で地文を摩り消している。台部は横位のミガキ調整を施している。内面調整は横位のミガキによるものである。内外面に炭化物の付着が見られる。

石器は1類cが2点、3類cが1点、5類が1点、6類bが1点、10類が1点、11類aが1点、11類dが1点出土している。28、29は1類cである。28の基部にはアスファルトの付着がみられる。30は3類cである。31は5類である。刃部に使用痕光沢がみられる。32は6類bで、下端部が黒く変色している。33は10類である。穿孔部分から欠損している。34は11類aである。円礫の表面と側面に敲打痕がみられる。35は11類dである。楕円礫の表面と側面に凹痕がみられるほか側面と裏面に敲打痕がみられる。使用石材は28～32まで珪質頁岩、33軽石、34は石英安山岩、35は溶結凝灰岩である。

【小結】 本遺構は床面出土遺物から後期末葉の住居と考えられる。

#### C・詳細不明

##### S I - 1 0 (図1-56)

【位置】 A-1で検出した。

【重複】 上部に削平を受けており、調査時には重複関係は確認できなかった。

【平面形・規模】 検出した柱穴の配列は楕円形を呈する。これらの柱穴は本来楕円形を呈する住居の壁柱穴であったが、壁を削平されたため、壁柱穴のみが残ったものと考えられる。ただし全周するのではなく、ほぼ南側半分にあたる部分の検出である。北側では該当するようなPitは検出できなかった。検出したPitの配列から規模を推測すると、

長軸がPit6と11間で570cmほどになり、短軸は400cmほどを測るものと考えられる。

【壁】 削平のため検出できなかった。

【床】 おそらく床面まで削平されているものと考えられる。検出した状況では月見野火山灰層を床面とし、平坦で堅緻である。

【壁溝】 なし。

【Pit】 S I - 1 0のPitとして判断したものは12基である。規模はPit1(13×6cm)、Pit2(15×8cm)、Pit3(12×14cm)、Pit4(24×40cm)、Pit5(15×7cm)、Pit6(19×9cm)、Pit7(17×16cm)、Pit8(14×14cm)、Pit9(10×6cm)、Pit10(14×12cm)、Pit11(17×23cm)、Pit12(16×14cm)を測る。

【炉】 なし。

【その他の付属施設】 なし。

【堆積土】 なし。

【遺物】 なし。

【小結】 楕円形に広がる壁柱穴のみの検出である。重複関係、出土遺物がないため帰属する時期については明確ではないが、柱穴配列が楕円形を呈することから縄文時代の遺構として判断した。

##### S I - 1 1 (図1-56)

【位置】 A-1で検出した。

【重複】 SK-02と重複している。本遺構の堆積土がSK-02に切られているので、本遺構が古い。

【平面形・規模】 円形を呈し、300×252×46cm、床面積は6.242㎡を測る。

【壁】 大谷火山灰層を壁としており、南東側では袋状に立ち上がるが、その他の側ではほぼ垂直に立ち上がる。

【床】 大谷火山灰層を床面とし、ほぼ平坦で堅緻である。

【壁溝】 なし。

【Pit】 南西壁沿いと北東壁沿いで2基検出した。それぞれ対面する形で壁の中央付近に位置し、規模はPit1(23×37cm)、Pit2(8×11cm)を測る。Pit1は斜めに掘り込まれている。Pit2はこれに対応する箇所位置しているが、規模が小さく浅いものである。

【炉】 なし。

【その他の付属施設】 なし。

【堆積土】 4層に大別した。全体的にローム粒・ブロックが多量混入し、第2・5層がローム主体の層であるなど人為的堆積の様相を呈している。

【遺物】 1点図示した。遺物は堆積土中から出土したものである。1は第I群A類の土器である。笕状工具による刺突列を施したものである。内面調整は

ナデによるものである。

【小結】 柱穴の配列状況は対面する壁際に位置するS I - 0 7と同様のものであるが、S I - 0 7では2基とも同規模であったが、本遺構ではP i t 2は規模が小さく、S I - 0 7の主柱穴のような関係ではない。本遺構は縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な時期について明確に判断できる要素がないためここに記述した。

#### S I - 1 5 (図1-56)

【位置】 A - 2から検出した。

【重複】 本遺構は土器埋設炉のみの検出であるが、上層部に削平を受けて炉だけが残存した竈穴住居跡として取り扱った。検出時には重複関係は確認していないが、本遺構に近接するS I - 0 2は後期末葉に帰属する住居であるのに対し、本遺構は炉に使用されている土器が中期の円筒式土器であるので、本来は重複関係が発生しており、本遺構< S I - 0 2の関係であったと考えられる。

【平面形・規模】 土器埋設炉のみの検出であるため、平面形、規模については不明である。

【壁】 不明。

【床】 不明。

【壁溝】 不明。

【P i t】 不明。

【炉】 深鉢形土器の胴下半部を使用した土器埋設炉である。土器を埋設した土坑は円形を呈し、直径13cm、深さ7cmを測る。土器は南東方向の壁に密着させるように埋設されていた。

【その他の付属施設】 土器埋設炉の南側に隣接するP i tを検出した。平面形は不整形を呈し、規模は16×15×5cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は播鉢状を呈するものである。堆積土は1層に大別され、埋設土器内第2層と同じ様相を呈する。

【堆積土】 土器埋設炉の堆積土は2層に大別される。第1層はローム質土の層、第2層は黒褐色土の層で、ともに焼土、炭化物の混入が認められる。

【遺物】 土器埋設炉に使用された土器のみである。第II群A類の土器で、胴部に結束第1種が回転施文された深鉢形土器の胴下半部である。一部、底面を欠いているが故意に穿孔したものではない。内面には一部炭化物の付着が見られる。外面は風化、被熱のため剥落が激しい。内面調整は縦位のミガキによるものである。

【小結】 本遺構については土器埋設炉のみの検出であり、調査時は壁を削平されてしまった住居と考え、S I - 1 5として処理したが、屋外炉の可能性も考えられる。土器埋設炉と隣接する土坑の新旧関係は土器埋設土坑の方が新しいようであるが、堆積土が

同じ様相を呈しており、廃絶はほぼ同じ時期と考えられる。このため隣接する土坑は土器埋設炉に關係する施設の可能性も考えられる。本遺構は土器埋設炉に使用されている土器から縄文時代中期に帰属するものと考えられるが、前述の理由で詳細不明の遺構として記述した。

## 2. 土坑

### S K a - 0 1 [S I - 1 6] (図1-57)

【位置】 A - 3の北側で検出した。

【重複】 S K - 1 5と重複している。本遺構がS K - 1 5の堆積土を切っているため、本遺構が新しい。

【平面形・規模】 不整形円形を呈し、196×228×45cmを測る。

【壁】 大谷火山灰層を壁としている。西側では緩やかに立ち上がるが、その他の側ではほぼ垂直に立ち上がる。

【床】 大谷火山灰層を床面としている。堅緻であるが、ところどころに小さな凹凸が見られる。

【壁溝】 なし。

【P i t】 なし。

【炉】 なし。

【その他の付属施設】 なし。

【堆積土】 6層に大別した。全体的にローム粒が多量に混入しており人為的堆積の様相を呈している。

【遺物】 堆積土中から中期、後期の土器片出土が出土している。

【小結】 本遺構は竈穴住居跡として処理したが、規模や壁の状況から考えると土坑とした方が適切であるため、本項で記述した。

### S K - 0 3 (図1-58)

【位置】 A - 1で検出した。

【重複】 S P - 1 7と重複している。本遺構の堆積土がS P - 1 7に切られているため、本遺構が古い。

【平面形・規模】 円形を呈し、212cm×156cm×22cmを測る。

【断面形・壁】 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。月見野火山灰層を壁とし、やや脆弱である。

【底面】 大谷火山灰層を底面としており、多少凹凸が見られるがほぼ平坦で、堅緻である。

【堆積土】 10層に大別した。全体的にロームブロックの混入が見られ、第4、9層はローム質土の層であり、第4層のローム質土の層が蓋をするような形で堆積している。また第5層もローム主体の層であるなど、人為的堆積の様相を呈する。

【遺物】 堆積土中から淡青色の磯、中期、後期の土器が出土している。

### S K - 0 5 (図1-58)

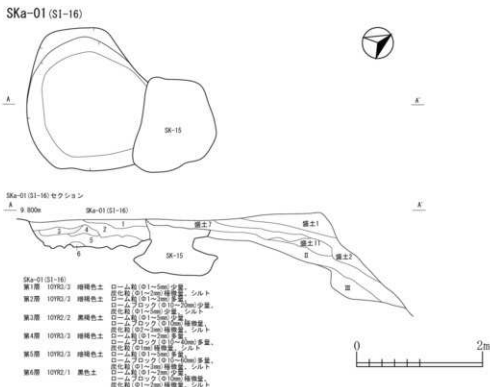


図 1-57 A区 SKa-01(SI-16)

〔位置〕 A-1で検出した。

〔重複〕 SK-01と重複している。本遺構の堆積土がSK-01に切られているので、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈し、規模は196×(156)×25cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は南側で階段状に立ち上がり幅30cmほどの棚状を呈する。その他の側ではほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦であるが、全面に細かな凹凸が多数見られる。

〔堆積土〕 6層に大別した。全体的に少量から中量のローム粒、ロームブロックの混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 堆積土中から前期初頭、後期の土器が出土している。

SK-06 (図1-58)

〔位置〕 A-1で検出した。

〔重複〕 SP-39と重複している。本遺構の堆積土がSP-39が切っているので、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 楕円形を呈し、規模は105×68cm×28cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、多少起伏が見られるがほぼ平坦である。

〔堆積土〕 6層に大別した。全体的にロームの混入が見られ、特に第4層以下ではローム主体層と粘土質土の層になっており人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 なし。

SK-07 (図1-58)

〔位置〕 A-1で検出した。

〔重複〕 SP-18と重複している。本遺構の堆積土がSP-18によって切られているので、本遺構が古い。また南西コーナー付近を風倒木によって切られている。

〔平面形・規模〕 南西コーナー付近に擾乱を受けているが、隅丸方形を呈するものと思われる。規模は216cm×208cm×18cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 1層に大別した。褐色を呈し、ローム、炭化物粒の混入が見られる。人為的堆積の様相を呈する。また西側において大谷火山灰層がブロックに混入している。このブロックは風倒木により底面がめくり上がったものと考えられる。

〔遺物〕 なし。

SK-08 (図1-58)

〔位置〕 A-1・3にまたがって位置している。

〔重複〕 SK-05、SP-23と重複している。本遺構の堆積土がいずれの遺構にも切られているので、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 不整形を呈し、規模は147×145cm×16cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東側13cm、西側8cm、北側10cm、南側7cmを測る。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。底面は壁際が若干高く、中央に向けて傾斜しており、ややすり鉢状を呈する。また直径14cm、深さ5~7cmのPitを2基検出した。

【堆積土】 4層に大別した。人為的堆積である。第1、2層は攪乱によるものと考えられ、SK-08の堆積土は実質、第3、4層だけと考えられる。

【遺物】 堆積土中から土師器?2点出土している。

#### SK-09 (図1-58)

【位置】 A-3で検出した。

【重複】 SK-10と重複している。本遺構の方が新しい。また、本遺構はビット状の掘り込みが重なったものであり、土層的には同時に埋没はしているが、調査時にSK-09a、SK-09bと番号を付け精査している。

【平面形・規模】 不整形円形を呈し、規模は53×35cm×11cmを測る。

【断面形・壁】 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。底面は段状を呈しており、SK-09bとした側の方が若干深い。

【堆積土】 1層に大別した。人為的堆積である。

【遺物】 なし。

#### SK-10 (図1-58)

【位置】 A-3で検出した。

【重複】 SK-09と重複している。本遺構の堆積土がSK-09に切られているので、本遺構の方が古い。

【平面形・規模】 不整形円形を呈し、規模は64×53cm×10cmを測る。

【断面形・壁】 断面形は皿形で緩やかに立ち上がる。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。

【堆積土】 1層に大別した。人為的堆積である。

【遺物】 なし。

#### SK-11 (図1-58)

【位置】 A-1・2にまたがって検出した。

【重複】 SP-56と重複している。本遺構の堆積土がいずれにも切られているので、本遺構が古い。

【平面形・規模】 円形を呈し、規模は208×212×33cmを測る。

【断面形・壁】 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。大谷火山灰層を壁としている。第2、3層が壁土と酷似しており、壁崩壊土の可能性が考えられる。

【底面】 大谷火山灰層を底面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

【堆積土】 4層に大別した。壁際に堆積している第2、3層はローム質土の層であり、第4層はレンズ

状の堆積をしている。

【遺物】 底面から黒曜石の剥片が出土している。

#### SK-12 (図1-59)

【位置】 A-3で検出した。

【重複】 SK-08と重複している。本遺構の堆積土をSK-08が切っているため、本遺構が古い。

【平面形・規模】 円形を呈し、規模は160×156×29cmを測る。

【断面形・壁】 大谷火山灰層を壁としている。断面形はほぼ垂直である。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。中央より南側に直径20cm、深さ15cmのPitを2基検出した。

【堆積土】 5層に大別した。南西側から流れ込むように堆積している。第2、4層がローム主体の層であり、人為的堆積の様相を呈する。

【遺物】 なし。

#### SK-13 (図1-59)

【位置】 A-1で検出した。

【重複】 SK-01と重複している。本遺構の堆積土をSK-01が切っているため、本遺構の方が古い。また北西コーナー付近に攪乱を受けている。

【平面形・規模】 楕円形を呈し、規模は138cm×98×31cmを測る。

【断面形・壁】 緩やかに立ち上がる。東、西、北側では緩やかに立ち上がるが南側ではほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁27cm、西壁31cm、南壁28cm、北壁29cmを測る。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。多少細かい凹凸が見られるがほぼ平坦で堅緻である。

【堆積土】 2層に大別した。第1、2層ともにローム粒、ロームブロックの混入が目立ち、人為的堆積の様相を呈する。

【遺物】 堆積土中から後期の土器が出土している。

#### SK-15 (図1-59)

【位置】 A-3で検出した。

【重複】 SKa-01 (SK-16) と重複している。本遺構の堆積土がSKa-01を切っているため、本遺構が新しい。

【平面形・規模】 不整形円形を呈し、規模は155×165×73cmを測る。

【断面形・壁】 断面形は袋状に立ち上がる。北西側では下部が大きくえぐれている。他の側では5~6cmほど下部が広がっている。壁高は東側67cm、西側68cm、南側39cm、北側64cmを測る。

【底面】 大谷火山灰層を底面としている。中央に向けて若干傾斜が見られるが、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 北東側の下部を掘り過ぎていたため、残存する部分だけの分層である。9層に大別した。第5～9層は壁際の堆積土で、第5～7層はローム粒の主体層、第8層はローム粒、ロームブロックが多量に混入している。第9層がローム質土の層であり、壁崩壊土と考えられる。

〔遺物〕 堆積土中から後期の土器片が出土している。

## SK-16 (図1-59)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 北東側が斜面部分に位置し、壁は検出できなかったが、不整形円形を呈するものと思われる。規模は開口部が144cm、底部では136cm×160cm、深さは84cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は袋状に立ち上がる。壁高は斜面にあわせて北東方向へ行くごとに低くなっている。壁高は東側59cm、西側59cm、南側78cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 14層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。第14層は粘土質の層で、壁下部の袋状部分の崩壊土の可能性が考えられる。第14層以外にはローム粒、炭化物粒、焼土粒の混入が見られる。

〔遺物〕 2点図示した。ともに第III群C類の土器である。1は口縁部が内湾する鉢の口縁部である。無節Rの斜行縄文を施したものである。内面調整は横位のミガキによるものである。2は口唇部が外反する深鉢の口縁部である。横位の条痕文を施したものである。内面調整も外面と同様に横位の条痕を施したものである。

## SK-17 (図1-59)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-13と重複している。本遺構の堆積土をSI-13が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈し、規模は110×(100)×25cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は北東壁がなだらかに、南西壁は下部がなだらかに立ち上がるが、上部は急な角度で立ち上がる。南東壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北東壁23cm、南東壁25cm、南西壁28cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、凹凸が見られる。

〔堆積土〕 3層に大別した。自然堆積の様相を呈する。黒褐色を呈し、ローム粒の混入が見られる。

〔遺物〕 堆積土中から後期の土器が出土している。

## SK-18 (図1-60)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-26と重複している。本遺構がSK-26の堆積土を切っているため、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は152×136×37cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は若干袋状に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦であるが、中央に向けて若干挿鉢状を呈している。堅緻である。

〔堆積土〕 6層に大別した。人為的堆積の様相を呈しており、全体的にローム粒、炭化物粒、焼土粒の混入が見られる。

〔遺物〕 2点図示した。ともに第III群A類の土器である。1は深鉢の口縁部である。外反する口縁部は無文であり、頸部以下の部分に沈線による文様を施したものと考えられる。器面調整は内外面ともに横位のミガキによるものである。2は胴部である。櫛目状沈線文による曲線的な文様を施したものである。内面調整は縦位のミガキによるものである。

## SK-19 (図1-60・63)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-14、41と重複している。新旧関係については土層の堆積状況から、SK-41<SI-19<SK-14の関係である。

〔平面形・規模〕 不整形形を呈し、規模は175×136×47cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はやや凹凸が見られ、北西壁では急な角度で、その他の壁ではなだらかに立ち上がる。壁高は北東壁20cm、北西壁42cm、南東壁15cm、南西壁50cmを測る。

〔底面〕 北西側壁沿いの77×50×16cmの不整形円形のくぼみに向けて傾斜している。

〔堆積土〕 4層に大別した。人為的な一時堆積である。第2層がローム質土の層で、開口部ほぼ全面に蓋をするような形で堆積している。

〔遺物〕 5点図示した。1は第I群A類の土器である。重層した刺突列を施した胴部である。破片の上部において縄端回転文らしき文様が一部確認でき、刺突列の上から施されている。内面調整はナデによるものである。2は第II群A類の土器である。LRの斜行縄文を地文とする深鉢の平口縁部である。口唇部は折り返し状を呈し若干肥厚し窪く目を施した隆帯を波状に貼り付けている。内面調整は横位のミガキによるものである。3、4は第III群C類の土器である。3は横位の櫛目状条痕文を施した鉢の口縁部である。口唇部外面に櫛状貼り付けを施している。内面調整は横位のナデによるものである。4はLR・RLの斜行縄文を羽状構成した鉢の口縁部である。

口唇部は若干内削ぎ状を呈する。内面調整は横位のミガキによるものである。板状土偶の腕の部分も出土している。1は2条一組のLRの原体の側面圧痕を施したものである。形状は舌状を呈し、先端に丸みを帯びるものである。

## SK-20 (図1-60)

〔位置〕 A-1で検出した。

〔重複〕 S1-01、SK-30と重複している。新旧関係については土層堆積状況から、SK-20 < SK-30 < S1-01の関係である。

〔平面形・規模〕 南側と北東側壁の一部の検出であり、検出状況からは不整形を呈するものである。規模は160×100×17～31cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は凹凸を持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。中央付近が高く、壁際へ向けて傾斜し低くなっている。全体的にやや堅緻である。

〔堆積土〕 3層に大別した。人為的堆積の様相を呈し、全てにローム粒、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒の混入が見られる。第1層はS1-01の貼り床の可能性も考えられる。

〔遺物〕 床面から中期の土器、堆積土中からは中期、後期の土器などが出土している。

## SK-21 (図1-60・63)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形を呈し、規模は62×50×38cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は凹凸を持ち、南壁はなだらかに立ち上がるが、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西壁22cm、東壁17cm、南壁10cm、北壁13cmを測る。

〔底面〕 月見野火山灰層を底面としている。西側に大きな凹凸が見られるが、その他の部分はほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に大別した。いずれも人為的堆積である。第1層は土器内の堆積土、第2層は土器が抜かれた痕に堆積したものと考えられる。第3層は掘り方の堆積土である。

〔遺物〕 1点図示した。1は倒立状態で埋設されていた円筒上層c式の深鉢である。口縁部の突起部分と胴部下半～底部にかけて欠損したものである。文様は結束第1種を地文とし、口縁部文様帯はL原体の側面圧痕を施した隆帯の貼り付けと隆帯間に棒状工具による刺突を施したものである。内面調整は口縁部付近では横方向のミガキ、以下の部分ではナデによるものである。埋設時の状況については、突起

部分の破断面は磨耗が見られるのに対し、胴部の破断面には磨耗があまり見られず、胴部以下の欠損に関しては埋設後に擾乱などの要因による新しい段階のものと考えられる。突起の欠損部分に関しては倒立状態で埋設されており、また堆積土中、周辺から突起部分の出土が無かったことから、あらかじめ突起部分を欠いてから埋設したものと考えられる。

## SK-22 (図1-60・64)

〔位置〕 A-3・4で検出した。

〔重複〕 S1-14と重複している。本遺構の堆積土をS1-14が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 不整形円形を呈し、規模は74×75×46cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は38～44cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。若干北東側に傾斜が見られるがほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 1層に大別した。黒色土が急激に堆積したものである。ローム粒、ロームブロック、炭化物粒、焼土粒が少量混入している。

〔遺物〕 1点図示した。1は第II群A類の土器である。深鉢の台形状突起部分で、黒色の隆帯の貼り付けと刺突を施したものである。刺突は半截竹管状工具によるものである。内面調整は横位のミガキによるものである。

## SK-23 (図1-60)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形円形を呈し、規模は78×55×20cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は西壁はなだらかに、その他の壁は急な角度で立ち上がる。壁高は北東側10cm、南東側25cm、南西側30cm、北西側24cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 3層に大別した。人為的な堆積の様相を呈する。第2、3層は暗褐色を呈し、ロームブロックが混入しているなど同じ堆積状況を示している。

〔遺物〕 なし。

## SK-24 (図1-60)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形円形を呈し、規模は80×77×32cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は29cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 5層に大別した。人為的堆積の様相を呈している。全体的に黒色を呈し、ローム粒、炭化物粒の混入が見られる。また第2層には多量のロームが混入していることから壁崩壊などの要因によって堆積した層である可能性が考えられる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-25 (図1-60)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SP-100と重複している。本遺構の堆積土をSP-100が切っており、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は98×90×57cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 4層に大別した。第1層の黒褐色土は擾乱によるものである可能性が高い。第2、3、4層は黒色を呈するもので、基本土層第III層と同じものと考えられる。一時的な堆積と考えられる。

〔遺物〕 堆積土中から中期、後期の土器や30cm大の自然礫が出土している。

#### SK-26 (図1-61・64)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-26、33、47と重複している。新旧関係については土層堆積状況から、SK-33、47<SK-26<SK-18の関係である。

〔平面形・規模〕 北東側壁が斜面のため検出できなかったが、不整楕円形を呈するものと思われる。

検出した規模は開口部が210cm、底面では270cm、深さは62cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は袋状を立ち上がり、南東壁の一部で下部が大きく15cmほど膨らんでいる。壁高は北西側70cm、南西側58cm、南東側32cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 12層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。全体的にローム粒が多量に混入している。第4、7層は壁崩壊土である。また下部に堆積している第12層も壁崩壊に起因する堆積層と考えられる。

〔遺物〕 4点図示した。敲磨器類1点、床面上で石冠2点出土。堆積土中から円筒上層式、後期の土器片が出土している。1は第II群A類の土器である。平口縁の深鉢で、結束第1種を地文としL原体の側面圧痕を施した隆帯を貼り付けたものである。文様

帯と胴部を区画する隆帯には縦長のつまみ状の貼付を加えている。内面調整は口縁部付近が横位のミガキ、以下の部分はナデによるものである。また破損が激しく図示できなかったがミニチュア土器も出土している。

石器は11類dが1点、12類が2点出土している。1は11類dである。扁平な楕円礫の表裏面に磨面と下端部に敲打痕がみられる。2、3は12類である。長軸の中央部分に敲打により帯状のくぼみが形成され、基底部には磨面が顕著にみられる。いずれも床直から出土している。使用石材は1安山岩、2、3変朽安山岩である。

#### SK-27 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-28と重複している。本遺構の堆積土がSK-28に切られているので、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は76×66×28cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は緩やかに立ち上がる。壁高は48cmを測る。

〔底面〕 月見野火山灰層を底面としている。ほぼ平坦でやや堅緻である。

〔堆積土〕 3層に大別した。第1、2層は基本土層第III層と同一のものと考えられる。第3層は黒褐色を呈し、ローム粒を若干多く含んでおり、壁際に流れ込むような形で堆積している。

〔遺物〕 なし。

#### SK-28 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-27と重複している。本遺構の堆積土がSK-27を切っているため、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 調査区外へ延びているので全体形は不明であるが、検出部の形状は不整楕円形を呈し、規模は(46×(33)×30cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は緩やかに立ち上がる。上面は垂直に近い形で立ち上がる箇所がある。

〔底面〕 月見野火山灰層を底面としている。凹凸があり、掘り方状の掘削痕を検出した。

〔堆積土〕 7層に大別した。図1-7中に掲載した基本層序中に本遺構の上面の堆積状況が掲載されているが、第1層上面から掘り込みがなされている。壁の崩落に伴う自然堆積状況を呈している。

〔遺物〕 なし。

#### SK-29 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-19と重複している。本遺構の堆積土がSK-19に切られているので、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 楕円形を呈し、規模は(44)×40×36cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としており、ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 6層に大別した。第2層がローム主体の層であり、人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 堆積土中から中期の土器が出土している。

#### SK-30 (図1-60)

〔位置〕 A-1で検出した。

〔重複〕 SI-01、SK-20と重複している。新旧関係については土層堆積状況から、SK-20<SK-30<SI-01の関係である。

〔平面形・規模〕 検出部分では不整形を呈する。規模は直径80cm、深さ17cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は凹凸を持ち、南東側の壁は階段状に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。全体的に大きな凹凸が見られ、やや堅緻である。

〔堆積土〕 2層に大別した。自然堆積の様相を呈するが、第2層中に底面に接する形でロームブロックが検出された。

〔遺物〕 堆積土中から中期、後期の土器が出土している。

#### SK-31 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-19と重複している。本遺構の堆積土をSI-19が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 上端は不整形、下端は円形を呈し、規模は上端95×(96)cm、下端115×110、深さは54cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は袋状に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 4層に大別した。レンズ状の堆積をしており自然堆積の様相を呈する。北西側の壁際にロームブロックの堆積が見られ、壁崩壊によるものと考えられる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-32 (図1-61・64)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-14、SK-40と重複している。新旧関係については土層堆積状況から、SK-40<SK-32<SI-14の関係である。

〔平面形・規模〕 不整形楕円形を呈し、規模は115×58×67cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は柱穴状を呈し、上部で緩や

かな傾斜が見られる。上端から10~20cmほどなだらかに傾斜し、以下の部分ではほぼ垂直に落ち込んでいる。

〔底面〕 中央に向かって挿鉢状に大きく傾斜しており、大きな凹凸が見られる。

〔堆積土〕 1層に大別した。ローム粒、炭化物粒、明褐色粘土の混入が見られる。

〔遺物〕 4点図示した。堆積土中から多量の軽石、前期初頭、中期、後期の土器片が出土している。1、2は第1群A類の土器である。1は3段の三日月形の刺突列と羽状構成の縄端回転文を施したものである。口唇部形状は平坦である。2は縄端回転文を施したものである。口唇部形状は内削ぎ状を呈するが丸みを帯びる。ともに内面調整はナデによるものである。3、4は第III群C類の土器である。ともに横位の条痕文を施したものである。3は口唇部が外側につまみ出したもので、平坦な作りのものである。4は丸みを帯びるものである。内面調整はともにナデによるものである。

#### SK-33 (図1-61・64)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-26と重複している。本遺構の堆積土をSK-26が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 上端は不整形、下端は円形を呈し、規模は上端(76)×75cm、下端(82)×88cm、深さは35cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は東壁ではほぼ垂直に立ち上がるが、北、西壁は袋状に立ち上がる(西側の膨らみ大きい)。壁高は西壁40cm、東壁30cm、北壁30cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 8層に大別した。全体的にローム粒、炭化物粒の混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 1点図示した。1は第III群の深鉢である。胴~口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形を呈し、口唇部は丸みを帯びている。器面調整は外面は口縁部付近が横位のミガキ、胴部は縦位のミガキとなっている。内面は横位のナデによるものである。

#### SK-34 (図1-61・64)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は83×83×22cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は南西側では緩やかに立ち上がり、その他の側ではほぼ垂直に立ち上がる。壁高は24cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。多少起伏



が見られるがほぼ平坦で堅緻である。

〔堆積土〕 2層に大別した。急激な人為的堆積の様相を呈する。第2層の北東側にローム粒が斑状に集中している。また南西側壁の第2層中にローム粒を多量に含む黒褐色土がブロック状に混入している。

〔遺物〕 1点図示した。1は第I群A類の土器である。縄輪回転文を施したもので、更新形状は若干丸みを帯びるが平坦な作りとなっている。内面調整は横位、縦位の雑なミガキによるものである。

#### SK-35 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-19と重複している。本遺構の堆積土をSI-19が切っているの、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は75×75×11cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は13cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、多少起伏が見られるがほぼ平坦である。

〔堆積土〕 5層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。第5層は黄褐色ローム主体の層で壁崩壊による流れ込みの可能性が考えられる。

〔遺物〕 堆積土中から前期初頭の土器が出土している。

#### SK-36 (図1-62)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-09と重複している。本遺構の堆積土をSI-09が切っているの、本遺構の方が古い。

〔平面形・規模〕 隅丸方形を呈し、規模は(104)×88×34cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は35cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。直径20cm、深さ30cmほどのPitを1基検出した。

〔堆積土〕 4層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。全体的にローム粒、炭化粒の混入が見られる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-37 (図1-62・64)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-14、SK-38と重複している。本遺構の堆積土をいずれの遺構も切っているの、本遺構の方が古い。

〔平面形・規模〕 不整形を呈し、規模は156×128×24cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は西側では階段状に立ち上が

り、北、東側では緩やかに立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、やや楕円状を呈する。

〔堆積土〕 5層に大別した。西から南側にかけて流れ込むように傾斜して堆積している。第1～4層の黒色土は基本土層第III層と同様のものと考えられる。

〔遺物〕 2点図示した。ともに第III群C類の土器である。1は鉢の口縁部で内湾するものである。RLの斜行縄文を施しており、口唇内面が肥厚している。内面調整はミガキによるものである。2はミニチュアの鉢である。ボウル状を呈し丸底である。器面調整はナデが主体であるが内面に一部ミガキ調整の痕を確認できる。

#### SK-38 (図1-62)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-14、SK-37と重複している。新旧関係については土層堆積状況から、SK-37<SK-38<SI-14の関係である。

〔平面形・規模〕 小判形を呈し、規模は100×44×30cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は緩やかに立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、やや楕円状を呈する。

〔堆積土〕 3層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。全て黒色を呈し、基本土層第III層と同じものと考えられる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-39 (図1-62)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 楕円形を呈し、規模は68×44×28cmを測る。

〔断面形・壁〕 ほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、やや楕円状を呈する。

〔堆積土〕 2層に大別した。ローム粒、炭化粒の混入が見られ、自然堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 堆積土中から後期の土器が出土している。

#### SK-40 (図1-61)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-14、SK-32と重複している。本遺構の堆積土をいずれの遺構も切っているの、本遺構の方が古い。

〔平面形・規模〕 切り合いのため不明確であるが、円形または隅丸方形を呈するものと思われる。規模は85×(60)×18cmを測る。

〔断面形・壁〕 緩やかに立ち上がる。壁高は20～30cmを測る。

〔底面〕 中央に向かって若干掃鉢状になっているがほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に大別した。全体的にローム粒の混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 なし。

#### SK-41 (図1-60)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-19と重複している。本遺構の堆積土をSK-19が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 切り合いのため不明確だが楕円形を呈するものと思われる。規模は(72)×(72)×20cmを測る。

〔断面形・壁〕 北東側はなだらかに、南東側は急な

角度で立ち上がる。壁高は18cmを測る。

〔底面〕 多少起伏が見られるがほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に大別した。全体的にローム粒、炭化粒、焼土粒の混入が見られる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-42 (図1-62)

〔位置〕 A-4で検出した。

〔重複〕 SI-22と重複している。本遺構の堆積土をSI-22が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 不整形形を呈し、76×61×29cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほとんどの面でほぼ垂直に立ち上がるが、南東側の上部で若干広がる箇所が見られる。壁高は北側39cm、南側34cm、西側37cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、南東側へ若干傾斜が見られる。

〔堆積土〕 1層に大別した。急激な一時的堆積によるものである。上面にSI-22の貼り床が検出されている。

〔遺物〕 堆積土中から中期の土器が出土している。

#### SK-43 (図1-62)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形形を呈し、規模は(130)×(155cm)×20cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。大谷火山灰層を壁としている。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。南壁沿いに規模30×20cmで円形にくぼんでいる箇所が見られるがこの部分は掘り過ぎたもので、本来はほぼ平坦であると考えられる。

〔堆積土〕 1層に大別した。褐色を呈し、ローム粒、ロームブロック、粘土ブロックが混入しているため、人為的堆積と考えられる。

〔遺物〕 なし。

#### SK-44 (図1-62)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 不整形形を呈し、規模は75×50×22cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は壁上部で一部緩やかな傾斜が見られる。壁高は南壁27cm、東壁15cm、西壁25cm、北壁12cmを測る。

〔底面〕 大きな凹凸が見られる。

〔堆積土〕 3層に大別した。人為的堆積の様相を呈する。第2層の黒色土が基本土層第Ⅲ層と同様のものと考えられる。

〔遺物〕 堆積土中から後期の土器が出土している。

#### SK-45 (図1-62・65)

〔位置〕 A-4で検出した。

〔重複〕 SI-22と重複している。本遺構の堆積土をSI-22が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は81×79×24cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がるが、北、南、西側はほぼ垂直に、東側では急な角度で立ち上がる。壁高は21～24cmを測る

〔底面〕 西から東へ若干傾斜が見られる。

〔堆積土〕 4層に大別した。全体的にローム粒、炭化物粒、焼土粒の混入が見られる。

〔遺物〕 2点図示した。いずれも第Ⅱ群A類の土器である。1はR Lの斜行縄文を地文とする深鉢で、折り返し状の肥厚した口縁部は外反しする。口唇部外面からくびれの部分にかけて地文と同じ原体を回転施文した除帯を弧状に横位連結して貼り付けている。内面調整は口縁部付近が横位のミガキ、以下は縦位のものとなっている。2は口縁部に4単位の舌状突起を有するものである。小さな作りの底部から外傾しながら直線的に立ち上がる器形を呈する。結束第1種を施し、内面調整は口縁部付近は横位のミガキ、以下の部分は縦位のミガキとなっている。

#### SK-46 (図1-62・65)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 東側をSP-125に切られている。

〔平面形・規模〕 SP-125に大部分を切られているため平面形は不明である。規模は40×23×17cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はV字状を呈し、急な角度で

立ち上がる。東側はSP-125に切られており、左側には土器が埋設されている。壁高は17cmを測る。

[底面] 大谷火山灰層を底面とし、やや堅緻である。  
[堆積土] 2層に大別した。第1層は土器内の堆積土である。第2層は掘り方の埋土である。

[遺物] 2点図示した。1は埋設されていた第II群A類の土器である。胴部のみで約3分の1をSP-125との重複のため欠損している。胴部の文様は結束第1種が施されたものである。内面調整は雑なミガキによるものである。2は第I群A類の土器である。コンパス文を施したもので、内面調整は横位のミガキによるものである。

SK-47 (図1-62・65)

[位置] A-4で検出した。

[重複] SI-17、SK-26と重複している。本遺構の堆積土が全ての遺構に切られているので、本遺構が古い。

[平面形・規模] 重複のため不明である。

[断面形・壁] ほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] ほぼ平坦である。

[堆積土] 1層に大別した。黒褐色を呈し炭化物粒と焼土粒の混入が見られる。

[遺物] 3点図示した。1、2は第II群A類の土器である。1は台形状突起部分で、無文の隆帯を貼り付けたものである。突起中央には内面からの貫通孔が見られる。内面調整は横位のミガキによるものである。2は折り返し状の肥厚した口縁部を持つ深鉢である。結束第1種を地文とし、口唇部外面にも同じ原体によると考えられるRLの斜行縄文を施している。またくびれの部分には綾織文を施している。内面調整は横位のミガキによるものである。また口唇部内面に炭化物の付着が認められる。3は第III群C類の鉢である。LRの斜行縄文を施しており、内面調整はミガキによるものである。

SK-48 (図1-62)

[位置] A-3で検出した。

[重複] SI-14と重複している。本遺構の堆積土をSI-14が切っているため、本遺構が古い。

[平面形・規模] 不整形を呈し、規模は(160)×145×20cmを測る。

[断面形・壁] 断面形は一部階段状を呈し、それ以外では壁はほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] 大谷火山灰層を底面とし、大きな凹凸が多数見られるが、西側にはテラス状の平坦な部分も見られる。

[堆積土] 1層に大別した。ローム粒、炭化粒、焼土粒の混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。

[遺物] 堆積土中から中期、後期土器が出土している。ほとんどが後期のものである。

SK-49 (図1-62)

[位置] A-2で検出した。

[重複] SI-20、SK-50と重複している。新旧関係は土層堆積状況から、SK-50<SK-49<SI-20の関係である。

[平面形・規模] 不整形を呈し、規模は直径約100cm、深さ約40cmを測る。

[断面形・壁] 断面形は凹凸を持ち、壁は急な角度で立ち上がる。

[底面] 大谷火山灰層を底面とし、播鉢状を呈する。  
[堆積土] 5層に大別した。全体的にローム、炭化粒などの混入が見られる。

[遺物] 堆積土中から中期、後期の土器が出土している。

SK-50 (図1-62)

[位置] A-2で検出した。

[重複] SI-20、SK-49と重複している。本遺構の堆積土をいずれの遺構も切っているため本遺構が古い。

[平面形・規模] 切り合い関係のため不明である。残存部は(120)×(90)×15cmを測る。

[断面形・壁] 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。

[堆積土] 2層に大別した。

[遺物] なし。

SK-51 (図1-63)

[位置] A-3で検出した。

[重複] SI-18と重複している。本遺構の堆積土をSI-18が切っているため、本遺構が古い。

[平面形・規模] 円形を呈し、規模は56×52×31cmを測る。

[断面形・壁] 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は31cmを測る。

[底面] 大谷火山灰層を底面とし、北東側に傾斜が見られる。

[堆積土] 3層に大別した。第1層はかなり堅く締まっており、SI-18の貼り床の可能性も考えられる。第2層は粘土質土の層で、第3層上面に蓋をするように堆積している。

[遺物] なし。

SK-52 (図1-63)

[位置] A-3で検出した。

[重複] SI-18と重複している。本遺構の堆積土をSI-18が切っているため、本遺構が古い。

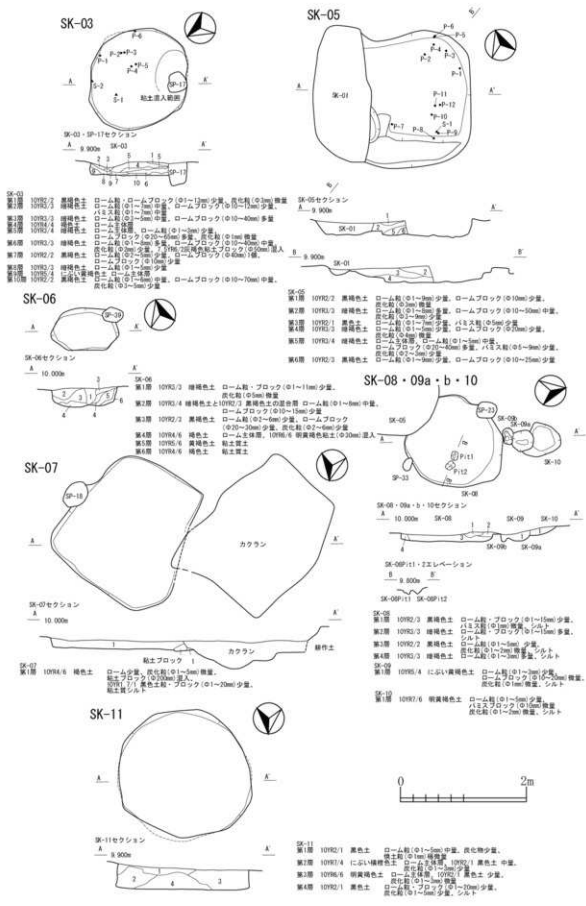
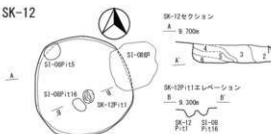


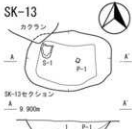
図 1-58 A区 SK-1

SK-12



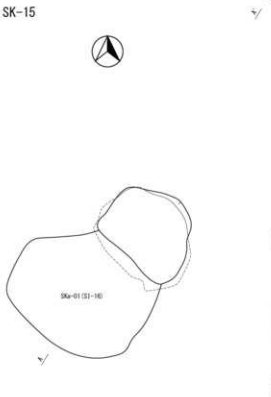
- SK-12  
 第1層 10194/5 赤褐色土 灰化層(0.1~2m)少量、礫土中量、シルト  
 第2層 10194/6 褐色土 ローム層(0.1~1m)少量、ロームブロック(0.10~20m)中量、  
 灰化層・砂(0.1~20m)少量  
 第3層 10194/6 褐色土 ローム層(0.1~4m)少量、  
 ロームブロック(0.10~20m)少量、灰化層(0.1~4m)少量  
 第4層 10192/4 暗褐色土 ローム層(0.1~4m)少量、ロームブロック(0.10~40m)中量、  
 灰化層(0.1m)少量  
 第5層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~4m)少量、灰化層(0.1m)少量、  
 白色粘土ブロック(0.10~50m)中量、暗褐色土少量、入  
 第6層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~4m)少量、灰化層(0.1~2m)少量、  
 白色粘土ブロック(0.10m)少量

SK-13



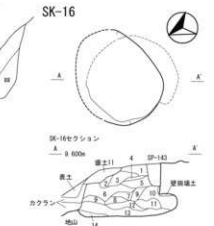
- SK-13  
 第1層 10192/2 黒褐色土 ローム層(0.1~3m)中量、ロームブロック(0.10~20m)中量、  
 パス土層(0.1~3m)少量、灰化層(0.1~3m)少量  
 第2層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~3m)中量、ロームブロック(0.10~20m)中量、  
 パス土層(0.1~3m)少量、灰化層(0.1~3m)少量  
 第3層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~3m)中量、ロームブロック(0.10~20m)中量、  
 パス土層(0.1~3m)少量、灰化層(0.1~3m)少量

SK-15



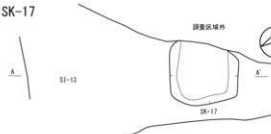
- SK-15  
 第1層 10192/3 暗褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、ロームブロック(0.10m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第2層 10195/2 にじみ層(0.1~1m)少量、灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第3層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、ロームブロック(0.20m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第4層 10192/3 暗褐色土 灰化層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.10m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第5層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.10~3m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第6層 10195/6 黄褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.10~3m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第7層 10194/6 褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.10~40m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第8層 10194/6 褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.20~50m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第9層 10195/6 暗褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.20~50m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト  
 第10層 10195/6 暗褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、ロームブロック(0.20~50m)少量、  
 灰化層(0.1~3m)少量、シルト

SK-16



- SK-16  
 第1層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~5m)少量、  
 灰化層(0.1~5m)少量、シルト  
 第2層 10192/1 褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第3層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第4層 10194/4 褐色土 シルト中量、灰化層(0.1~2m)少量、  
 シルト  
 第5層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第6層 10192/2 暗褐色土 灰化層(0.1~3m)少量、  
 シルト  
 第7層 10192/3 暗褐色土 ローム層(0.1~3m)少量、  
 ロームブロック(0.1~3m)少量、シルト  
 第8層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 ロームブロック(0.1~2m)少量、シルト  
 第9層 10194/4 褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第10層 7.595/6 暗褐色土 粘土層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、  
 シルト  
 第11層 7.595/6 暗褐色土 ローム層、ブロック(0.1~20m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、  
 シルト  
 第12層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第13層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~2m)少量、  
 灰化層(0.1~2m)少量、シルト  
 第14層 7.595/6 暗褐色土 粘土層(0.1~2m)少量、  
 シルト

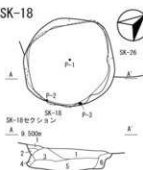
SK-17



- SK-17  
 第1層 10192/2 暗褐色土 ローム層・ブロック(0.1~15m)中量、  
 灰化層(0.1~15m)少量、シルト  
 第2層 10192/2 暗褐色土 ローム層(0.1~15m)中量、  
 灰化層(0.1~15m)少量、シルト  
 第3層 10192/2 暗褐色土 ローム層・ブロック(0.1~20m)中量、  
 灰化層(0.1~20m)少量、シルト

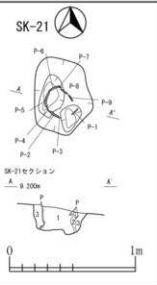
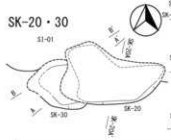
図 1-59 A区 SK-2

SK-18



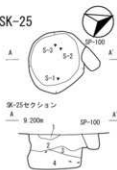
- SK-18
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、    |
| 第2層 | 10192/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/4 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10193/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第5層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第6層 | 10194/4 | 褐色土  | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |

SK-20・30



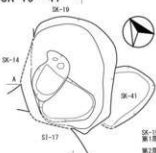
- SK-21
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、    |
| 第2層 | 10192/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/4 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |

SK-25



- SK-25
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第2層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |

SK-19・41



- SK-19
- |     |          |      |                                        |
|-----|----------|------|----------------------------------------|
| 第1層 | 10192/2  | 黒褐色土 | ローム粒、ブロック(φ1~10mm)多量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第2層 | 7.5195.4 | 黒褐色土 | ローム粒、炭化粒(φ1~5mm)少量、シルト                 |
| 第3層 | 10193/3  | 黒褐色土 | ローム粒、ブロック(φ1~10mm)多量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10192/2  | 黒褐色土 | ローム粒、ブロック(φ1~10mm)多量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |

SK-19・41セクション



SK-19セクション



- SK-41
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~5mm)少量、シルト |
| 第2層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |

- SK-30
- |     |         |      |                                                      |
|-----|---------|------|------------------------------------------------------|
| 第1層 | 10193/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)中量、ロームブロック(φ10~10mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第2層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、ロームブロック(φ10~20mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10193/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)中量、ロームブロック(φ10~20mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10193/4 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、ロームブロック(φ10~20mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第5層 | 10194/4 | 褐色土  | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト                     |



SK-22



- SK-22
- |     |         |      |                                                          |
|-----|---------|------|----------------------------------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~5mm)少量、ロームブロック(φ20mm)極少量、炭化粒(φ5mm)少量、練土粒(φ5mm)少量 |
|-----|---------|------|----------------------------------------------------------|

SK-23



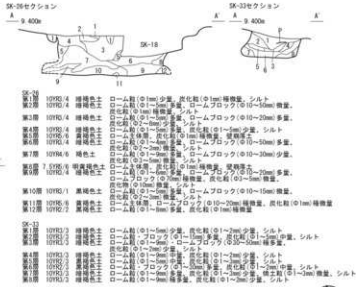
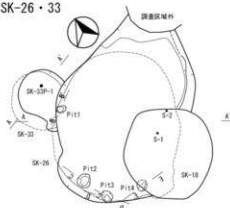
- SK-23
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10192/2 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第2層 | 10192/3 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/4 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~3mm)少量、シルト |

SK-24



- SK-24
- |     |         |      |                                  |
|-----|---------|------|----------------------------------|
| 第1層 | 10191/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第2層 | 10191/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第3層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第4層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |
| 第5層 | 10192/1 | 黒褐色土 | ローム粒(φ1~3mm)少量、炭化粒(φ1~2mm)少量、シルト |

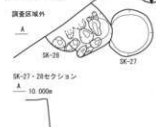
SK-26・33



- |       |      |          |      |                                                                      |
|-------|------|----------|------|----------------------------------------------------------------------|
| SK-26 | 第1層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1mm) 稀散, シルト                              |
|       | 第2層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 多数, 炭化粒 (0.1mm) 稀散, シルト     |
|       | 第3層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 多数, 炭化粒 (0.2~0.5mm) 少量, シルト |
|       | 第4層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第5層  | 10YR2/6  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 稀散, シルト                          |
|       | 第6層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 多数, 炭化粒 (0.2~0.5mm) 少量, シルト |
|       | 第7層  | 10YR2/6  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 多数, 炭化粒 (0.2~0.5mm) 少量, シルト |
|       | 第8層  | 3.5YR5/1 | 黄褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1mm) 稀散, 硬塊層                              |
|       | 第9層  | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第10層 | 10YR2/4  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第11層 | 10YR2/6  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 稀散, 炭化粒 (0.1mm) 稀散          |
|       | 第12層 | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1mm) 稀散                                   |
| SK-33 | 第1層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第2層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 中量, シルト                     |
|       | 第3層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第4層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, ロームブロック (0.10~0.50m) 中量, シルト                     |
|       | 第5層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |
|       | 第6層  | 10YR2/2  | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.5m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, シルト                          |



SK-27・28



- |       |     |         |      |                                                                      |
|-------|-----|---------|------|----------------------------------------------------------------------|
| SK-27 | 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土  | ローム層・バミス層 (0.1~0.5m) 少量                                              |
|       | 第2層 | 10YR2/1 | 黒色土  | ローム層 (0.1~0.5m) 少量                                                   |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量                                                   |
| SK-28 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 多数, ロームブロック (0.10m) 稀散                               |
|       | 第2層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 多数, シルト                                              |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 多数, シルト                                              |
|       | 第4層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 多数, シルト                                              |
|       | 第5層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 少量, ロームブロック (0.10~0.15m) 稀散, 炭化粒 (0.2~0.5mm) 稀散, シルト |
|       | 第6層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 少量, シルト                                              |
|       | 第7層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 少量, ロームブロック (0.10~0.30m) 少量                          |

SK-31



- |       |     |         |      |                                                                 |
|-------|-----|---------|------|-----------------------------------------------------------------|
| SK-31 | 第1層 | 10YR2/3 | 黄褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散                          |
|       | 第2層 | 10YR2/3 | 黄褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散                          |
|       | 第3層 | 10YR2/3 | 黄褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散                          |
|       | 第4層 | 10YR2/3 | 黄褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散, ロームブロック (0.10~0.15m) 少量 |

SK-34



- |       |     |         |      |                                |
|-------|-----|---------|------|--------------------------------|
| SK-34 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量             |
|       | 第2層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量             |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, ローム層が環状に集中 |

SK-35



- |       |     |         |      |                                                          |
|-------|-----|---------|------|----------------------------------------------------------|
| SK-35 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第2層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第4層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第5層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |

SK-29



- |       |     |         |      |                                        |
|-------|-----|---------|------|----------------------------------------|
| SK-29 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量                     |
|       | 第2層 | 10YR2/6 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散 |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散 |
|       | 第4層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散 |
|       | 第5層 | 10YR2/6 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散 |
|       | 第6層 | 10YR2/6 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散 |

SK-32・40



- |       |     |         |      |                                                                                         |
|-------|-----|---------|------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| SK-32 | 第1層 | 10YR2/1 | 黒色土  | ローム層・フロック (0.1~0.20m) 多数, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散, フロック (0.1~0.5m) 少量, シルト |
| SK-40 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散                                                  |
|       | 第2層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散                                                  |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.6m) 少量, 炭化粒 (0.1~0.3mm) 稀散, シルト                                             |

SK-35 S1-18P17・S1-18P12セクション



- |       |     |         |      |                                                          |
|-------|-----|---------|------|----------------------------------------------------------|
| SK-35 | 第1層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第2層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第3層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第4層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |
|       | 第5層 | 10YR2/2 | 暗褐色土 | ローム層 (0.1~0.3m) 中量, 炭化粒 (0.1~0.5mm) 少量, 緑土 (0.1~0.3m) 稀散 |

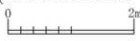


図 1-61 A区 SK-4

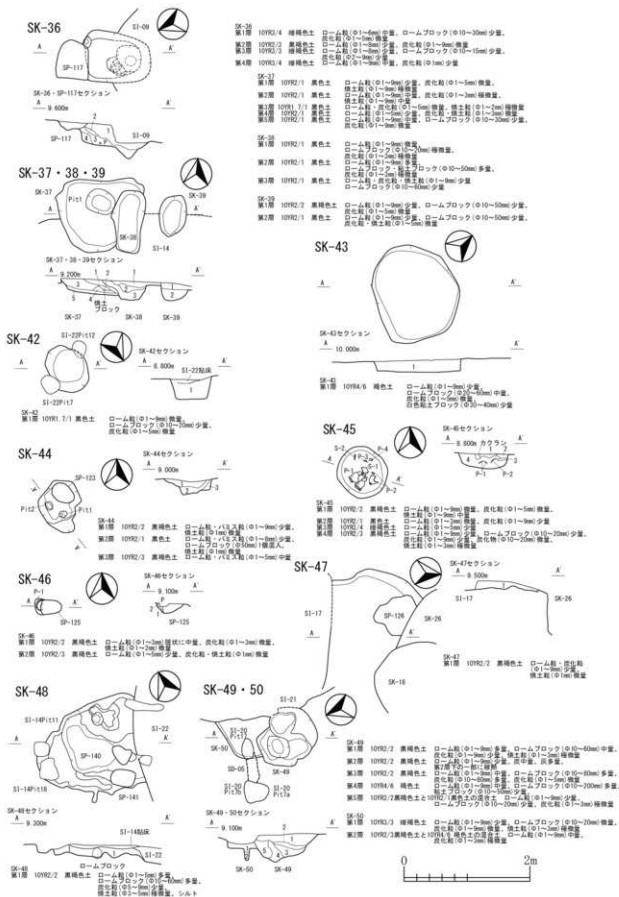


図 1-62 A区SK-5



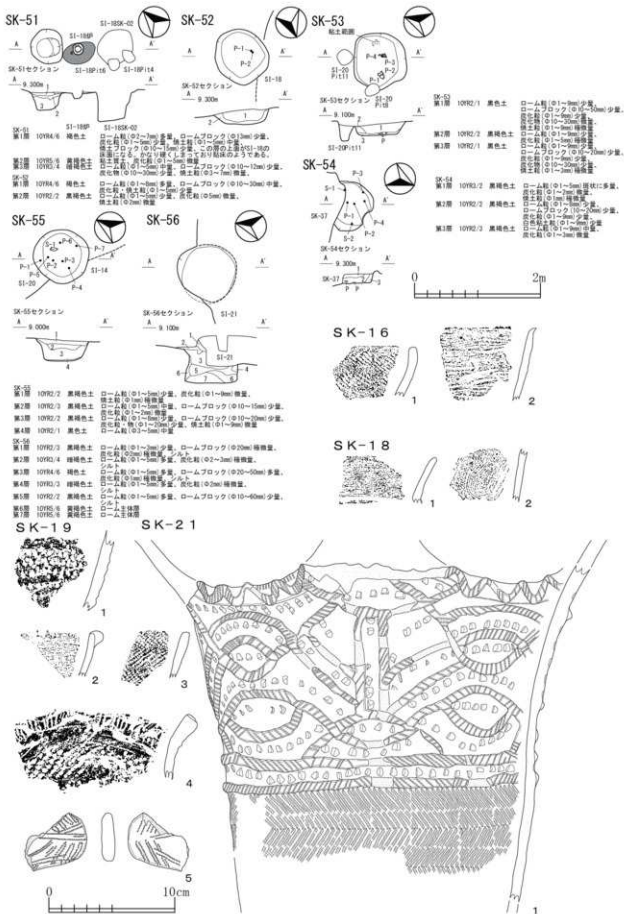


図 1-63 A区 SK-6

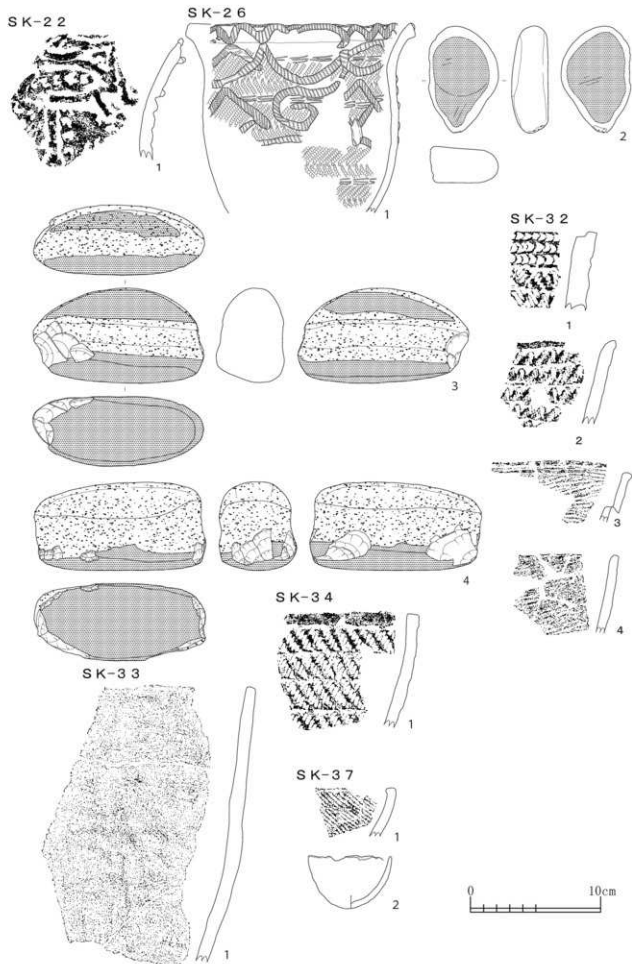


図 1-64 A区 SK-7



☒ 1-65 A区 SK-8

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は88×80×27cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は壁上部の一部で緩やかな傾斜が見られるもので、西、南壁はほぼ垂直に、北、東壁はなだらかに立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 2層に大別した。自然堆積の様相を呈する。ローム粒、炭化粒の混入が見られる。

〔遺物〕 堆積土中から後期の土器が出土している。

#### SK-53 (図1-63・65)

〔位置〕 A-2で検出した。

〔重複〕 SI-20と重複している。本遺構の堆積土をSI-20が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 不整形円形を呈し、89×(86)×19cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がるものだが、南側では底面からなだらかに立ち上がり、上部は急な角度で立ち上がっている。他は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は北側19cm、東側17cm、南側25cm、西側18cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 3層に大別した。全体的にローム・炭化粒の混入が見られる。

〔遺物〕 3点図示した。すべて第II群A類の土器である。1は平口縁の深鉢で、L原体の側面圧痕を施した隆帯の貼り付けと刺突を施したものである。内面調整は横位のミガキである。2は無文の鉢である。胴部は若干丸みを帯び口縁部が外反する器形を呈する。器面調整は外面はナデ、内面は横位のミガキによるものである。また口縁部の内面には外反させる際の指頭圧痕が残存している。3は2と同じような器形を呈する小型の鉢である。半裁竹管状工具による刺突を施している。口唇部外面では口縁部形状に沿う形に施し、胴部においては斜位の刺突列を施している。内面調整はナデによるものである。

#### SK-54 (図1-63・65)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-37と重複している。本遺構の堆積土をSK-37が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 不整形円形を呈し、規模は(58)×79×23cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形はほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦で堅硬である。

〔堆積土〕 3層に大別した。全体的にローム粒、炭化粒の混入が見られ、第2層には白色粘土粒の混入も見られる。

〔遺物〕 3点図示した。1は第I群B類の土器であ

る。3種類の原体を用いて文様を施しており、口縁部には単軸絡糸体第5類の側面圧痕を4条とL R原体の側面圧痕を1条、口唇部には細いL R原体の回転施文、胴部には口唇部に用いたものと同じようなL R原体の回転施文を用いている。内面調整は横位のミガキによるもので、外面に炭化物の付着が見られる。2は第III群C類の土器で、横位の条痕文を施したものである。石器は12類が1点出土している。3は断片のため全体形状は不明であるが、顕著な磨り面と帯状のくぼみが残存していることから12類に分類した。使用石材は安山岩である。

#### SK-55 (図1-63・65)

〔位置〕 A-4で検出した。

〔重複〕 SI-14と重複している。本遺構の堆積土をSI-14が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、規模は86×84×34cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は壁上部の一部で緩やかな傾斜見られる。壁高は北側38cm、東側27cm、南側30cm、西側33cmを測る。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 4層に大別した。全体的にローム・炭化・焼土粒の混入が見られ、自然堆積の様相を呈する。

〔遺物〕 2点図示した。ともに第II群A類の土器である。1は口縁部が折り返し状の肥厚したもので、隆帯の貼り付けと刺突を施したものである。口唇部外面の隆帯は波状を呈しL R原体の側面圧痕を施したものである。胴部の隆帯は無文のものとなっている。内面調整は横位のミガキによるものである。2の隆帯は無文のものだけで、口唇部外面で波状を呈し、口縁部直下に太目の隆帯を横位に貼り付け、その上に細めの隆帯を斜位に貼り付けている。内面調整は横位のミガキである。

#### SK-56 (図1-63)

〔位置〕 A-4で検出した。

〔重複〕 SI-21と重複している。本遺構の堆積土をSI-21が切っているため、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 平面形は上端が円形、下端不整形円形を呈し、上端は92×94cm、下端は87×91cm、深さは58cmを測る。

〔断面形・壁〕 断面形は袋状に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面とし、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕 7層に大別した。ローム粒、ブロックの混入が顕著である。また炭化粒が若干混入している層も見られる。

〔遺物〕 なし。

## 第2節 古代

### 1. 竪穴住居跡

SI-01 (図1-66-72)

[位置] A-1・2で検出した。

[重複] SI-02、SK-13、20、30と重複している。本遺構がいずれの遺構の堆積土も切って構築されており、本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 方形を呈し、規模は1辺約690cm、深さ10cm、床面積は49.06㎡を測る。

[壁] 上部を削平されており、下部の一部のみの確認である。確認できた部分ではほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層を床面としている。南西側に掘り方を持ち、貼り床されている。全体的にはほぼ平坦で堅緻である。

[壁溝] 北東壁と南西壁に部分的に遺存する。規模は幅10～25cm、深さ14cmを測る。

[Pit] 床面にてPitを57基検出している。このうち主柱穴と考えられるものはPit18(14×45cm)、21(19×63cm)、22(23×62cm)、29(23×57cm)の4基であり、1辺320×370cmの方形に配置されている。また壁沿いに壁柱穴が配置されており、各コーナーに1基ずつ対応し、各辺にはカマドが設置されている南東壁沿いには5基、その他の辺には6基ずつ配置されており壁柱穴は4辺で総数27基を数える。それぞれの規模はPit1(17×38cm)、2(20×35cm)、3(20×47cm)、4(17×60cm)、5(19×51cm)、6(24×31cm)、7(34×46cm)、8(22×63cm)、9(22×50cm)、10(27×72cm)、11(20×50cm)、12(19×35cm)、13(14×37cm)、14(17×42cm)、15(17×40cm)、24(36×31cm)、26(19×38cm)、32(23×46cm)、33(20×61cm)、34(17×57cm)、35(17×66cm)、36(32×25cm)、37(15×45cm)、38(14×36cm)、40(19×40cm)、42(12×40cm)、49(12×46cm)を測り、50～70cm間隔で配置されている。

[カマド] 南東壁から2基検出した。カマド1は南東壁の南寄り(67:33)に位置している。規模は袖部分幅110cm、煙道部は重複するSI-02にまで及び、長さ160cmを測る。袖部分は主に粘土で構築されているが、南側の袖で礫が検出されており構築材として使用した可能性もある。煙道部はSI-02の堆積土中に構築されていたと考えられるが検出できなかった。カマド2は最初の段階に

構築されたもので南東壁の北寄り(40:60)に位置している。袖部分はカマド1構築時に除去され残存しておらず、燃焼部と煙道部のみを検出である。カマド1と同様に煙道はSI-02まで及び、長さは160cmを測る。

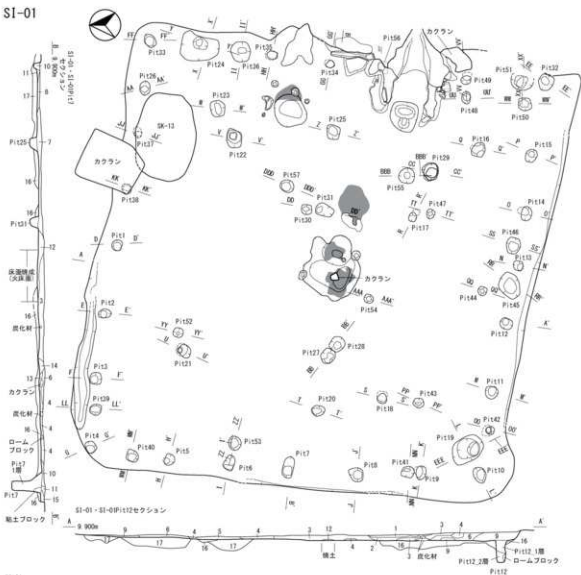
[その他の付属施設] 床面中央付近でSN-01を検出した。不整形を呈し120×80×7～12cmを測る。底面は楕円状を呈し、南東側でさらに落ち込んでいる。この浅い掘り込みの南東側で不整形の焼土の拡がりも検出しており、規模は74×49cmを測る。

[堆積土] 17層に大別した。いずれも褐色土系の色調を呈し、ローム粒、炭化粒、焼土粒の混入が見られる。本遺構は検出時に炭化材を確認しており、これは第4層に含まれているものである。

[遺物] 10点図示した。堆積土中からは縄文土器も混在して出土している。なお時期決定の資料としてはカマドから擦文土器が出土しており、これをもとに平安時代の住居として捉えている。1は胴部が直立気味に立ち上がり口縁部は若干外反する器形を呈する。口径は(18.2)cmを測る。2は頸部にかけて内湾し口縁部が外反する器形を呈する。口径は(15.8)cmを測る。3も2と同じような器形を呈するが、口縁部の外反の度合いが強い。口径は(14.8)cmを測る。4～10は擦文土器である。4は口径23.4cmを測る。器形は台状を呈する底部で一旦窄まり胴上半部に最張部を持ち内湾する。口縁部は外反する。器面調整は斜位の擦痕によるもので台状の底部にまで及んでいる。5は口径(14.8)cmを測り、器形は胴上半部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形を呈する。胴下半部については残存部から推測すると底部に向けて窄まるものと考えられる。口縁部には綾杉状を呈する刻目を施し、胴上半部には数条1組の縦位の刻線と斜位の刻線を組み合わせ、その間に右下がり、左下がりの斜位の刻線をジグザグに施している。また胴下半部との区画に横位の刻線を用いている。6は頸部以下に縦位、斜位の擦痕を施したものである。口縁部はロクロによる成形である。7は外傾する口縁を呈し、口唇がほぼ直立するものである。綾杉状の刻目を施したものである。8も7と同じような器形を呈するが、無文のもので、丁寧が横位のミガキ調整を施したものである。9、10は底部は裾拡がり擦痕を施している。底面には9では横位の調整痕が認められる。

[小結] 本遺構は南東壁にカマドを持つ竪穴住居である。検出時に炭化材を確認しており焼土住居であると考えられる。方形配置の主柱穴と壁柱穴を持つ住居である。カマド出土の擦文土器から11世紀前半の住居と考えられる。

SI-01



SI-01

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~5mm)微量
- 第2層 10YR2/4 黒色土 ローム粒(0.1~0.5mm)微量、炭化粒(0.1~0.5mm)中量、焼土粒(0.1~2mm)微量
- 第3層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、ロームブロック(0.10~10mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)中量、炭化物(0.10~50mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)微量
- 第4層 10YR2/2 黒褐色土と炭化物の混成土、ローム粒(0.1~2mm)極微量、炭化粒(0.1~0.5mm)、炭化物(0.10~100mm)極多量
- 第5層 10YR2/3 暗褐色土と30%程度の粘土質堆積物の混成土、ローム粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第6層 7.5YR2/4 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第7層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第8層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、ロームブロック(0.10~20mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)微量、焼土粒(0.1~0.5mm)微量、焼土ブロック(0.10~15mm)極微量
- 第9層 10YR2/2 黒褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)中量、炭化物(0.10~20mm)微量、焼土粒(0.1~0.5mm)微量
- 第10層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)中量、ロームブロック(0.10~20mm)中量、炭化粒(0.1~0.5mm)極微量、炭化物(0.10~20mm)微量
- 第11層 10YR4/4 褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、ロームブロック(0.10~15mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第12層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、炭化粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量、炭化物(0.10~20mm)少量、母岩が混在するで、5%程度の暗褐色土
- 第13層 7.5YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)微量、炭化粒(0.1~2mm)極微量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第14層 7.5YR4/6 褐色土 ローム粒(0.1~2mm)極微量、炭化粒(0.1~2mm)極微量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第15層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)少量、炭化粒(0.1~2mm)極微量、焼土粒(0.1~0.5mm)少量
- 第16層 10YR2/3 暗褐色土 ローム粒(0.1~0.5mm)多量、ロームブロック(0.10~10mm)多量、炭化粒(0.1~0.5mm)少量、焼土粒(0.1~0.5mm)極微量
- 第17層 10YR6/6 褐色土 ローム土塊層、炭化粒(0.1~2mm)少量

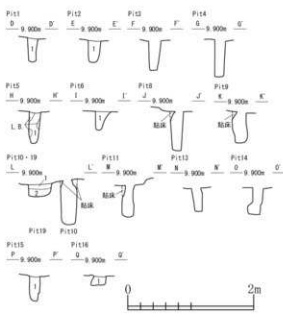
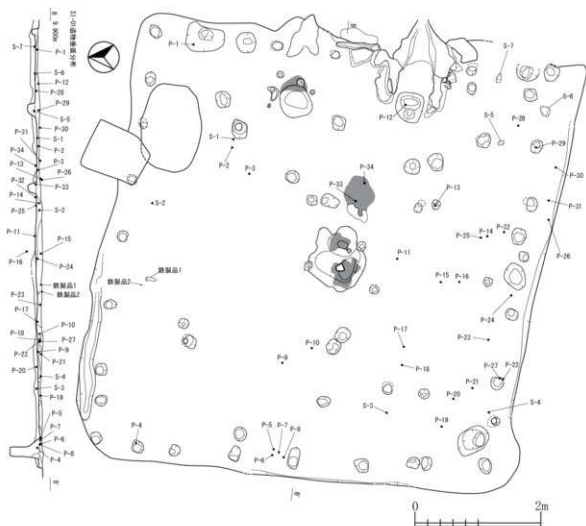


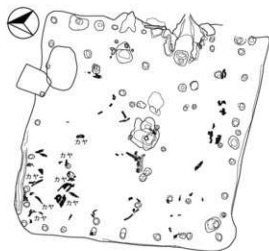
図 1-66 A区 SI-01-1



SI-01遺物分布



SI-01炭化物物出土状態1



SI-01炭化物物出土状態2

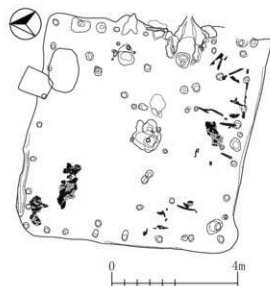
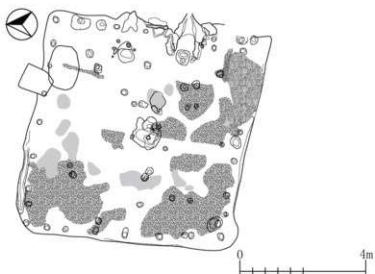


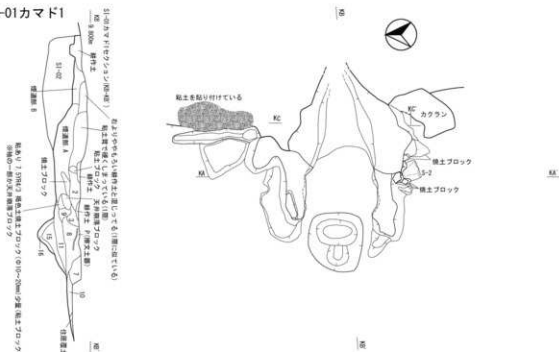
図 1-68 A区 SI-01-3



SI-01焼土・炭化物・粘土範囲



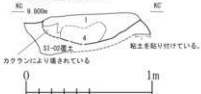
SI-01カマド1



SI-01カマド1セクション(KA-KA)



SI-01カマド1標準断セクション



SI-01カマド1

- 第1層 10R2/4 褐色焼色土 7.50R2/2焼褐色土20%混入 ローム粒・炭化粒 (φ1~5mm) 稀散層
- 第2層 7.50R2/4 褐色色土 ローム粒 (φ1~9mm) 少量、炭化粒 (φ1~5mm) 稀散、焼土粒 (φ1~9mm) 中量、焼土ブロック (φ10~20mm) 少量
- 第3層 10R2/2 黒褐色土 7.50R4/4褐色土10%混入 ローム粒 (φ1~9mm) 中量、炭化粒・焼土粒 (φ1~3mm) 稀散
- 第4層 7.50R2/2 黒褐色色土 ローム粒 (φ1~9mm) 稀散、炭化粒 (φ1~3mm) 稀散層、焼土粒 (φ1~9mm) 多量、焼土ブロック (φ10~30mm) 少量
- 第5層 7.50R2/2 暗褐色色土 ローム粒・炭化粒 (φ1~3mm) 稀散、焼土粒 (φ1~9mm) 中量、焼土ブロック (φ10~15mm) 少量
- 第6層 10R2/2 黒褐色色土 ローム粒 (φ1~3mm) 稀散層、炭化粒 (φ1~3mm) 稀散、焼土粒 (φ1~9mm) 少量
- 第7層 10R2/2 黒褐色色土 ローム粒 (φ1~9mm) 少量、炭化粒 (φ1~9mm) 稀散、焼土粒 (φ1~9mm) 中量
- 第8層 7.50R4/6 褐色色土 10R2/2暗褐色土20%混入 ローム粒 (φ1~9mm) 少量、ロームブロック (φ10~30mm) 中量、炭化粒・焼土粒 (φ1~2mm) 稀散層
- 第9層 10R2/3 暗褐色色土 ローム粒 (φ1~5mm) 稀散、炭化粒 (φ1~3mm) 稀散、焼土粒 (φ1~9mm) 少量、焼土ブロック (φ10~30mm) 少量、※炭が多量に混入 (全体に混じっている)
- 第10層 10R2/2 暗褐色色土 ローム粒 (φ1~3mm) 稀散層、炭化粒 (φ1~5mm) 少量、焼土粒 (φ1~9mm) 中量

図 1-69 A区 SI-01-4

- 第11帯 7.5YR2.4 緑褐色土 ローム粒 (φ1~5㎜) 少量、焼土粒 (φ1~9㎜) 中量、焼土ブロック (φ10~20㎝) 微量  
 第12帯 10YR2.3 緑褐色土 ローム粒 (φ1~3㎜) 微量、灰化粒 (φ1~9㎜) 微量、灰化物 (φ10~20㎝) 微量、焼土粒 (φ1~9㎜) 少量、焼土ブロック (φ10~40㎝) 少量  
 第13帯 10YR2.1 黄褐色土 ローム粒 (φ1~5㎜) 微量、焼土粒 (φ1~3㎜) 微量  
 第14帯 10YR1.7/1 黄褐色土 ローム粒 (φ1~3㎜) 軽微量  
 第15帯 10YR2.3 緑褐色土 ローム粒 (φ1~9㎜) 微量、灰化粒 (φ1~3㎜) 微量、焼土粒 (φ1~9㎜) 中量、焼土ブロック (φ10~20㎝) 中量 田中央に多い  
 第16帯 10YR2.3 緑褐色土 ローム粒 (φ1~9㎜) 中量、ロームブロック (φ10~20㎝) 少量、灰化粒 (φ1~9㎜) 少量、焼土粒 (φ1~5㎜) 微量  
 第17帯 10YR4.4 褐色土 10YR3.3緑褐色土20%混入、粘土ブロック、ローム粒・パリス粒・灰化粒・焼土粒 (φ1~3㎜) 微量  
 第18帯 10YR4.4 褐色土 ローム粒 (φ1~9㎜) 少量、ロームブロック (φ10~30㎝) 少量、灰化粒 (φ1~3㎜) 微量、パリス粒 (φ1~3㎜) 微量  
 第19帯 7.5YR2.2 黄褐色土 ローム粒・灰化粒・焼土粒 (φ1~3㎜) 軽微量  
 第20帯 10YR2.3 緑褐色土 ローム・焼土粒 (φ1~5㎜) 少量、灰化粒 (φ1~3㎜) 微量 掘り方層焼土  
 第21帯 10YR4.4 褐色土 ローム粒 (φ14~9㎜) 少量、灰化・焼土・パリス粒 (φ1~5㎜) 少量、ロームブロック (φ10~20㎝) 少量 掘り方層焼土

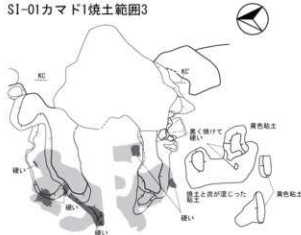
SI-01カマド1焼土範囲1



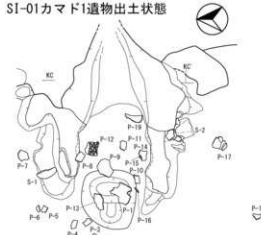
SI-01カマド1焼土範囲2



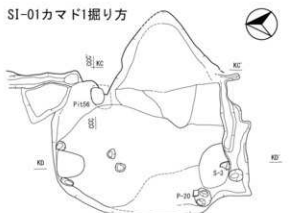
SI-01カマド1焼土範囲3



SI-01カマド1遺物出土状態



SI-01カマド1掘り方



SI-01カマド1掘り方セクション

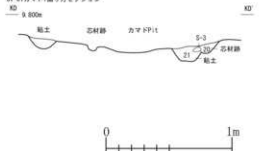
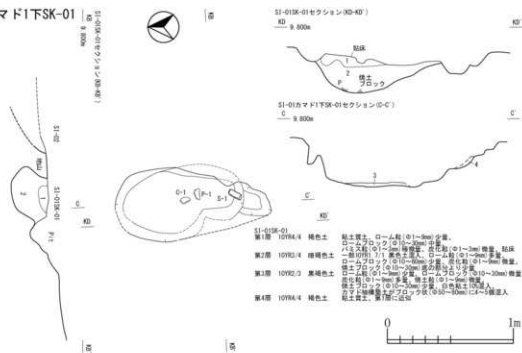
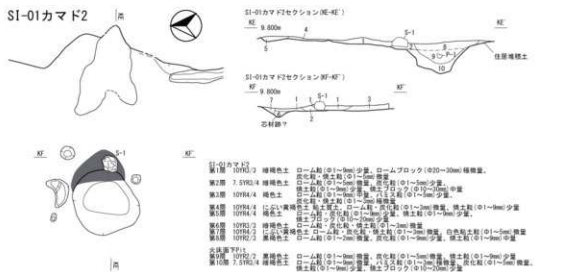


図 1-70 A区 SI-01-5

SI-01カマド1下SK-01



SI-01カマド2



SI-01カマド2  
焼土・粘土範囲



SI-01カマド2  
遺物出土状況

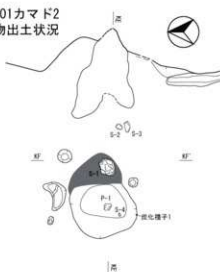
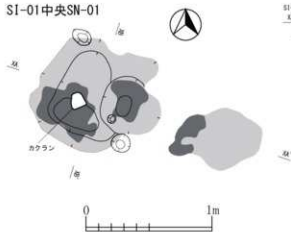


図 1-71 A区 SI-01-6

SI-01中央SN-01



SI-01中央溝セクション(30A-KK)



SI-01中央溝セクション(30B-KF)



SI-01中央溝

- |                   |                                       |
|-------------------|---------------------------------------|
| 第1層 7.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、灰化物 (0.10~25mm) 少量、  |
| 第2層 7.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、灰化物 (0.1~3mm) 少量、    |
| 第3層 5.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒、灰化物、炭屑、灰化土                        |
| 第4層 7.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、炭屑、灰化土               |
| 第5層 10.92/2 黒褐色土  | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、炭屑、灰化物 (0.1~3mm) 少量、 |
| 第6層 7.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、炭屑、灰化物 (0.1~3mm) 少量、 |
| 第7層 7.3192/2 黒褐色土 | 炭化粒 (0.1~3mm) 少量、炭屑、灰化物 (0.1~3mm) 少量、 |

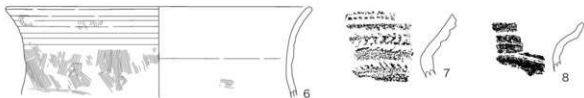
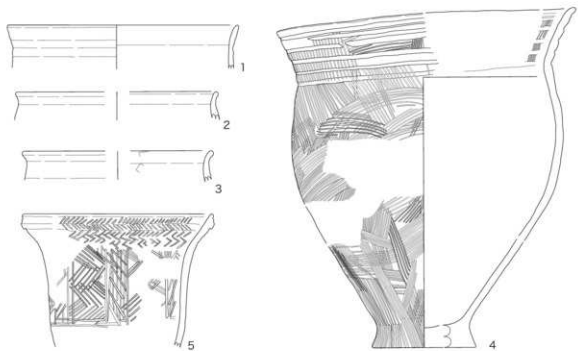


図 1-72 A区 SI-01-7

## S I-04 (図1-73)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 南東側が削平されているが、残存した北西壁と北東、南西壁の一部から形状を推測すると方形を呈したと考えられる。規模は、北西壁512cm、北東壁(328)cm、南西壁(272)cm、深さは10~13cm、床面積はカマドと考えられる部分まで含めると(27.027)m<sup>2</sup>を測る。  
〔壁〕 上部を削平されており、下部の一部のみの確認である。検出した部分ではほぼ垂直に立ち上がる。  
〔床〕 大谷火山灰層を床面としている。ほぼ全面に擾乱の影響を受けており、凹凸が多数見られるが全体的に平坦である。

〔壁溝〕 北西コーナー付近から北西壁と南西壁にかけて遺存する。幅約16~40cm、深さ約10cmを測る。

〔Pit〕 床面でPitを14基検出している。いずれも平面形は不整形を呈するものがほとんどで浅いものである。配列を捉えられるものではなく、上部からの擾乱によるものと考えられる

〔カマド〕 削平を受けている南東側の床面で焼土の拡がりを検出している。検出した焼土の拡がりは削平と擾乱のため約12cmの範囲だけである。検出した位置は南東壁があったと考えられる付近の中央にあたり、この箇所にかマドが存在していた可能性が高いが、上記の理由で断言できるものではない。またこの焼土から土師器製の破片が出土している。  
〔その他の付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 5層に大別した。全体的に自然堆積の様相を呈しているが、最上層に当たる第1層は試掘時の埋め戻した土が除去し切れておらず、その土を本遺構の堆積土とした可能性があるもので、鈍い黄褐色を呈している。第2層は床面ほぼ完全に堆積しており、これは自然堆積によるものと考えられ、褐色を呈する。第3層も第1層と同様に黄褐色を呈しており人為的堆積によるものと考えられる。第4、5層が壁溝の堆積土に相当する。

〔遺物〕 南東側のカマド痕と考えられる焼土付近から土師器製の破片が出土している。他には堆積土中から後期の土器片なども出土している。1は胴上半が内傾し口縁部が外反する器形を呈する。口径は(14.4)cmを測り、調整は口縁部が横方向のナデ、胴部は縦方向のナデによるものである。

〔小結〕 本遺構は平成13年度の試掘の際検出したものである。調査終了後埋め戻し、今年度新たに検出したが、もともと浅く、埋め戻しの土と堆積土の区別が難しかったため、再度検出する際に掘り過ぎて堆積土もかなりの部分で除去してしまった箇所もある。そのためセクション図面も不十分なものにな

っている。遺物も堆積土一括で上げているがその中には床面出土のものも入っている可能性がある。

## S I-12 (図1-74)

〔位置〕 A-2で検出した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 南側を削平されているが、検出した部分から推測すると方形を呈するものと思われる。規模は508×(276)×23cm、床面積は(10.959)m<sup>2</sup>を測る。

〔壁〕 ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕 大谷火山灰層の地山を床面としており、ほぼ平坦で堅緻であるが、小さな凹凸が見られる。

〔壁溝〕 南東側壁の一部に遺存している。規模は幅16~20cm、深さ23cmを測る。

〔Pit〕 床面でPitを19個検出した。このうち本遺構に伴うと考えられるものはPit1(10×32cm)、2(17×26cm)、3(9×18cm)、4(25×42cm)、5(18×36cm)、17(15×45cm)、18(19×29cm)、19(12×35cm)の8基である。これら壁柱穴と考えられ、48~76cm間隔で壁際に配置されている。

〔カマド〕 なし。

〔付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 7層に大別した。全体的に人為的堆積の様相を呈する。第3層はにぶい黄褐色を呈する壁際堆積土、第4層は多量の炭化物を含み、壁際に床面に堆積している。第5~7層が壁溝の堆積土である。

〔遺物〕 堆積土中から縄文中期、後期の土器や石器が出土している。

〔小結〕 本遺構は平面形から平安時代の竪穴住居として判断した。北西コーナー付近の床面で炭化物検出している。南東辺の壁溝は、西側に位置するSD-02と似ている。

## S I-13 (図1-75)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SK-17と重複している。本遺構がSK-17の堆積土を切って構築されているので、本遺構の方が新しい。

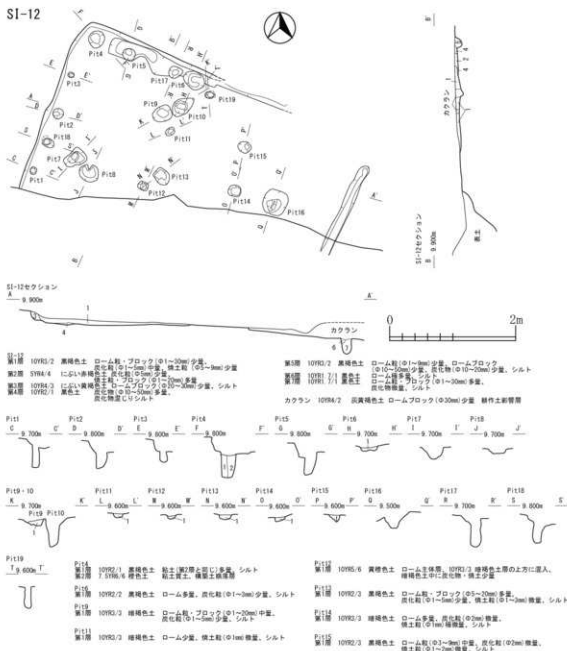
〔平面形・規模〕 A-3区で検出した。平坦面北側の縁辺部に位置しており南東壁と南西壁の一部のみの検出である。その他の部分は削平されており検出できなかった。遺存部分から推測すると隅丸方形を呈するものと思われる。規模は600×(252)×12cm、床面積は(6.662)m<sup>2</sup>を測る。

〔壁〕 大谷火山灰層を掘り込んで構築されており、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔床〕 大谷火山灰層の地山を床面としているが、部分的に掘り方を持ち、貼り床されている部分も見ら



SI-12



SI-12焼土・炭化物範囲

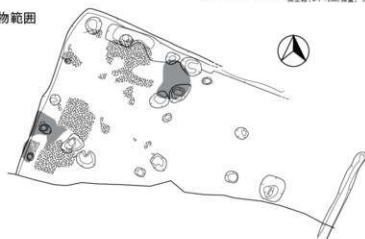


図 1-74 A区 SI-12





SEa-01 (SK-14)

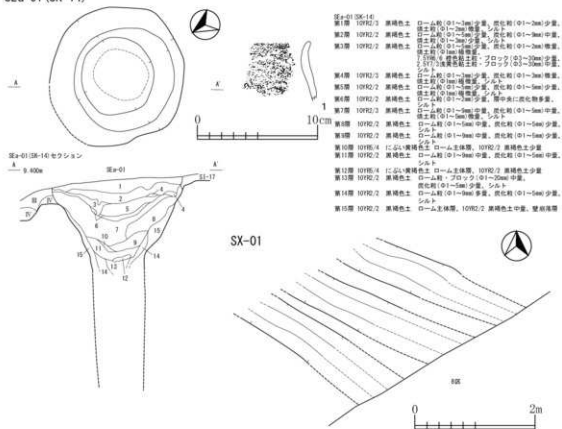


図 1-76 A区SEa・SX

れる。北側に向けて若干傾斜が見られるがほぼ平坦である。大谷火山灰層を床面とする部分は堅緻である。貼り床部分は締まってはいるが、堅緻といえるほどではない。

[壁溝] なし。

[Pit] 床面でPitを6基検出した。それぞれ壁際に100cm~112cmの間隔で配置されており、規模はPit1(20×46cm)、2(17×35cm)、3(15×28cm)、4(30×27cm)、5(23×33cm)、6(18×25cm)を測る。

[カマド] なし。

[その他の付属施設] なし。

[堆積土] 1層に大別した。本遺構の堆積土として判断したのは第1層だけであり、他は撓乱と表土に分けられる。第1層はロームを多量に含み、人為的堆積の様相を呈している。

[遺物] 1点図示した。堆積土中からの出土である。土師器1片、須恵器1片が出土している。1は須恵器甕の胴部である。木目に直交する刻み目を入れた叩き板を使用し、斜位に叩いて調整を行ったものである。内面には筵状当て具の痕跡が認められる。

[小結] 本遺構は平面形と堆積土出土の須恵器から平安時代の堅穴住居として判断した。後世の削平により大部分を消失したものである。

SI-20 (図1-75, 238)

[位置] A-2・4にまたがって検出した。

[重複] SI-06、21と重複している。いずれの遺構の堆積土も切って構築されているので、本遺構の方が新しい。なお北東側でSI-14とも重複していると考えられるが、遺構確認時には掘削が進行していたため、切り合い関係は確認できなかった。ただし、本遺構は平面形が方形を呈し、平安時代の遺構と考えられる。この場合、縄文時代後期末葉に属するSI-14より新しいものと考えられる。

[平面形・規模] 北東壁と南西壁の一部のみの検出である。残存部分から推測すると方形を呈するものと考えられる。規模は(600)×(124)×14cmを測る。

[壁] 上部を削平されており、下部の一部のみの検出である。検出した部分ではほぼ垂直に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰層とSI-21の堆積土を床面としている。南東方向へ若干傾斜がみられるもの、ほぼ平坦である。SI-21との重複部分ではSI-21の堆積土で床が構築されている。この部分は若干堅く締まってはいるが、堅緻といえるものではなく、精査途中で掘り過ぎてしまうケースが見られた。また北西壁から350cmの範囲まで検出できたが、それより南東側では撓乱により消失していた。

[壁溝] なし。

〔Pit〕 床面でPitを16基検出した。そのうち9基が本遺構に伴うと考えられるもので、壁沿いに配置されている。規模はPit4(28×57cm)、5(26×30cm)、6(27×47cm)、7(26×40cm)、8(20×26cm)、9(22×51cm)、11(21×30cm)、14(26×39cm)、15(25×57cm)である。これらは壁柱穴と考えられPitの間隔は52~80cmを測る。B区から帰属可能性のあるピットを11基検出し、他にSP-716・718・719は壁柱穴の可能性がある。

〔カマド〕 なし。

〔その他の付属施設〕 なし。

〔堆積土〕 4層に大別した。全体的に黒褐色を呈し、ローム粒、炭化物粒の混入が見られる。

〔遺物〕 堆積土中から中・後期の土器片が出土した。

〔小結〕 本遺構は平面形から平安時代の竪穴住居として判断した。縄文時代の住居を切って構築されており、北西側は残存していたが、斜面上に立地していた為、斜面下方の南東側では確認時点で掘削が進行していた為、明確に確認できなかった。

## 2. 井戸跡

SEa-01〔SK-14〕(図1-76)

〔位置〕 A-3で検出した。

〔重複〕 SI-17、SK-19と重複している。本遺構の堆積土がいずれの遺構の堆積土も切っている為、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 円形を呈し、直径228cmを測

る。なお深さは危険防止のため、300cmに到達した時点でそれ以上の掘り下げを中止したため完掘しておらず、300cm以上の深さである。

〔断面形・壁〕 断面形は下部がほぼ垂直に立ち上がり、上部は緩やかな傾斜で立ち上がる。

〔底面〕 安全面優先で掘り下げを中止したため未検出である。

〔堆積土〕 半載で精査を行なったが、確認面から約150cm掘り下がった段階で半載状態での掘り下げが困難となったため、一旦掘り下げを中止し、堆積土を15層まで大別して、セクション図の実測・注記を行なった。その後15層付近まで全掘し、改めて第15層以下を半載したため途中で崩壊したため、15層以下はエレベーションによる外形の確認となった。炭化物層が2層検出され、そのうち上層に当たる第6層だけが作図可能であった。崩壊した部分の炭化物層も第6層と同じ様相のものである。湧水は見られなかったが、深くなるにつれて水分含有量が多くなり、掘り下げの最終段階では青白色の粘土質土になった。

〔遺物〕 1点図示した。堆積土中から縄文時代中期、後期の土器片、土師器甕口縁部片、椀の底部が出土している。1は甕の口縁部である。短い口縁部を持つものである。器面調整は磨耗が激しく不明である。

## 3. その他の遺構

SX-01(図1-76)

〔位置〕 A-3のテストトレンチ1付近に位置する。北西→南東方向に延びるもので南東側は調査区外へと及ぶ。検出部分より北西側にも延長していたと考えら

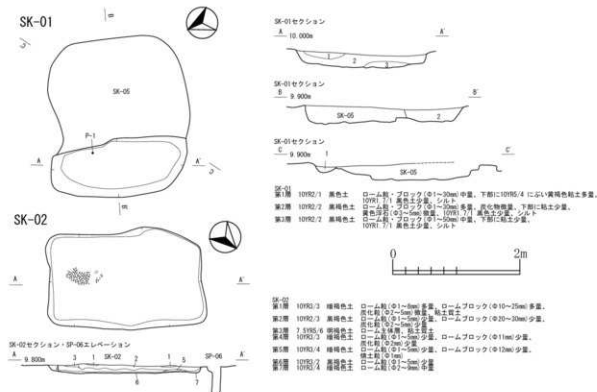


図 1-77 A区 SK

れるが、調査時には検出できず掘下げてしまった。

[重複] なし。

[平面形・規模] 4条検出した。検出した部分では長さ250～270cm、幅約250cmを測る。1条の幅は15～35cmを測る。

[断面形・壁] 基本土層序に現れている断面は波状を呈する。

[底面] 北東→南西方向で波状を呈する。

[堆積土] 本遺構は基本土層第II層上面に構築され、基本土層Ib層に覆われていた。

[遺物] なし。

[小結] その他の遺構としたが検出状況から畝状遺構であると考えられる。基本土層序の土壌分析では盛土の構築時期は平安時代との分析結果が得られており、本遺構が盛土の下部に位置していることから、本遺構の構築時期は盛土の構築よりも古く、また縄文時代後期の遺物包含層である基本土層第III層の上面に位置していることから、時期は古代と判断した。本遺構は基本土層第II層上面に構築されており、基本土層序では波状を呈している。また第II層は縁辺部周辺ではほぼ平坦となっている。この平坦部分では本遺構を作ったときにすで平坦な形としたものか、盛土をする前に土台となる部分を平坦としたのかについては不明である。

### 第3節 時期不明の遺構

#### 1. 土坑

SK-01 (図1-77)

[位置] A-1で検出した。

[重複] SK-05と重複している。本遺構がSK-05の堆積土を切っているので、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 南東コーナー付近が掘り過ぎのため外に膨らんでいるが、小判形を呈するものと思われる。検出規模は220×92×20cmを測る。

[断面形・壁] 断面形は緩やかに立ち上がる。月見野火山灰層を壁とし、やや脆弱である。

[底面] 大谷火山灰層を底面としている。ほぼ平坦で堅緻であるが、細かな凹凸が多数見られる。

[堆積土] 3層に大別した。全体的にローム粒、ロームブロック、粘土、黄色浮石などの混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。特に第2層ではローム粒、ロームブロックが多量に混入している。

[遺物] 堆積土中から後期の土器片1片を出土した。

SK-02 (図1-77)

[位置] A-1で検出した。

[重複] S1-11と重複している。本遺構がS1-11の堆積土を切っているので、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 長方形を呈し、228×146cm×16cmを測る。本遺構の周りに位置するS

P-04、05、07、08、09、38、48、52が1辺に3基対応するように配置されているようである。このピットは本遺構の上層構造に関するものである可能性が考えられる。

[断面形・壁] 断面形は緩やかに立ち上がる。南東壁13cm、北東壁16cm、南西壁9cmを測る。

[底面] 底面は南東側が大谷火山灰層を、北西側ではS1-11の堆積土を底面としている。中央が若干低くなっておりやや楕円状を呈するが、ほぼ平坦である。やや楕円状を呈するのはS1-11の堆積土に当たる部分で、掘り過ぎている可能性が高い。大谷火山灰層、S1-11の堆積土、どちらの部分もほぼ平坦で堅緻である。

[堆積土] 7層に大別した。全体的にローム粒の混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。第3層がローム質土の層である。

[遺物] 堆積土中から鉄製品(スコップ状、棒状)、後期の土器片が出土した。

#### 2. 溝跡

SD-02 (図1-78)

[位置] A-2西側で検出した。

[重複] 西側が後世の削平によって切られている。

[平面形・規模] 南北軸で直線状を呈し、長さ(325)cm、幅15～20cm、深さ45～55cmを測る。

[断面形・壁] 大谷火山灰層を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] 大谷火山灰層を底面としており、北側から南側に向かって若干傾斜が見られる。

[堆積土] 2層に大別した。ともに黒色を呈し、ローム粒、炭化物粒の混入が見られ、人為的堆積の様相を呈する。

[遺物] 堆積土中から後期の土器、土師器が出土した。

SD-03 (図1-78)

[位置] A-3で検出した。

[重複] S1-17、S1-19 Pit 1と重複している。S1-17との新旧関係については不明であるが、S1-19 Pit 1の堆積土を切って構築されているので本遺構の方が新しい。

[平面形・規模] 北西→南東方向で直線状を呈し、長さ233cm、幅21～30cm、深さは北西側から南東側へ向かって深くなっており6～33cmを測る。西側の端部は剣先状を呈する。

[断面形・壁] 大谷火山灰層を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。

[底面] 大谷火山灰層を底面としている。底面は西側から東側へ向かって傾斜し低くなっている。また東側で壁が段状になっているが、これは掘り過ぎの

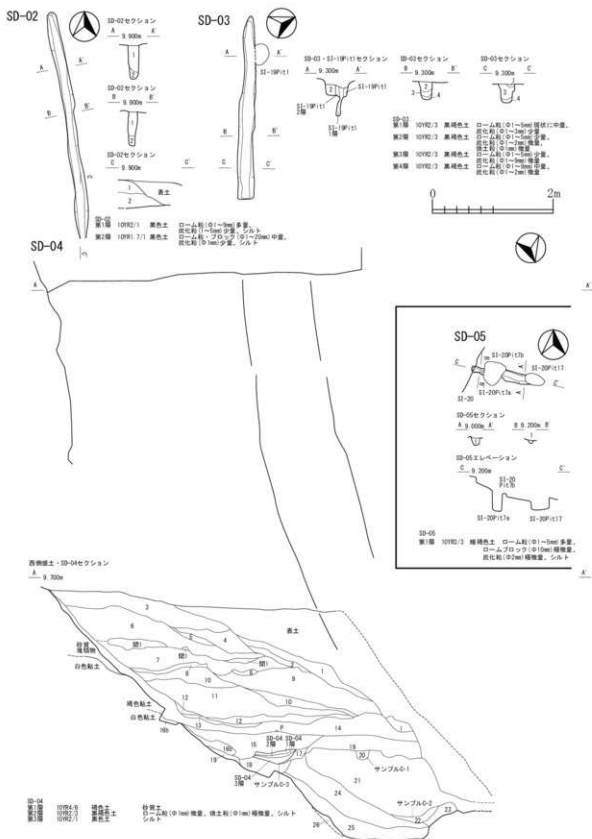


図 1-78 A区 SD

ためである。

[堆積土] 4層に大別した。全体的にローム粒、炭化物粒の混入が見られる。

[遺物] 堆積土中から中期の土器が出土している。

SD-04 (図 1-78)

[位置] A-1で検出した。

[重複] 本遺構は自然堆積層上に構築されているが、その後の土地利用による影響が大きく、遺構扱いにはしていない平坦面造成時に削平されている。

〔平面形・規模〕 直線状を呈する。確認した範囲は長さ643cm、幅132cm程度を測る。

〔断面形・壁〕 東側は大谷火山灰層を壁とし、掘鉢状に立ち上がる。

〔底面〕 調査時に認定した部分については基本土層序西側盛土の第17・18層部分を底面としている。しかし、この部分の堆積状況は掘削行為の伴った掘り

込みと認定でき、本遺構の関連層として第17～19層は本遺構に伴う堆積土の可能性が考慮される。その場合、底面は大谷火山灰層部分が該当し、やや凹凸のある形状である。

〔堆積土〕 調査時の認定が局所的な認定であるため、本遺構扱いとした層位は3層分に分離した箇所となる。ただし、前述のとおり、盛土土層第17～19層



図 1-79 A区SP平面図

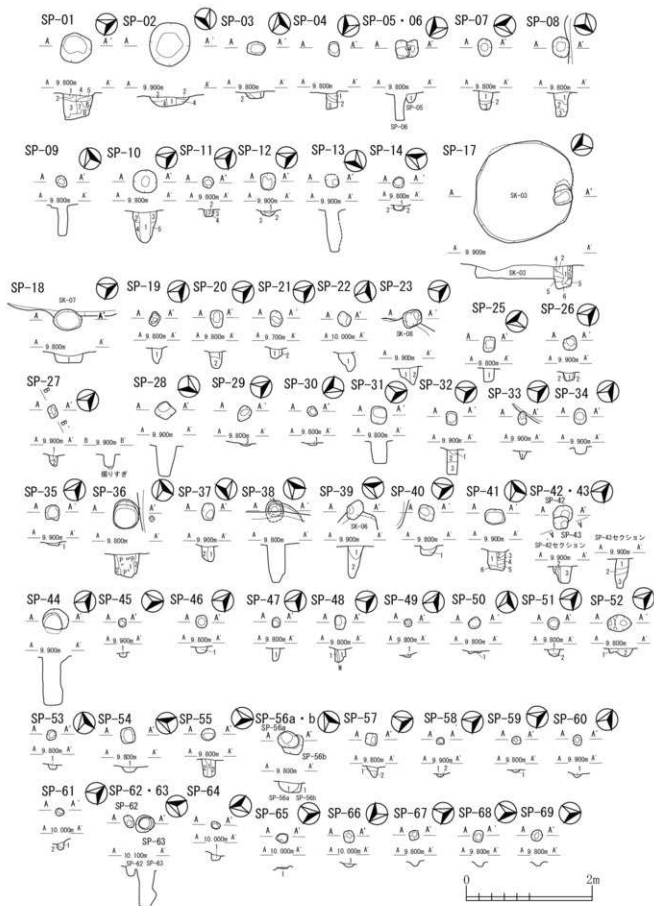


図 1-80 A区 SP-1

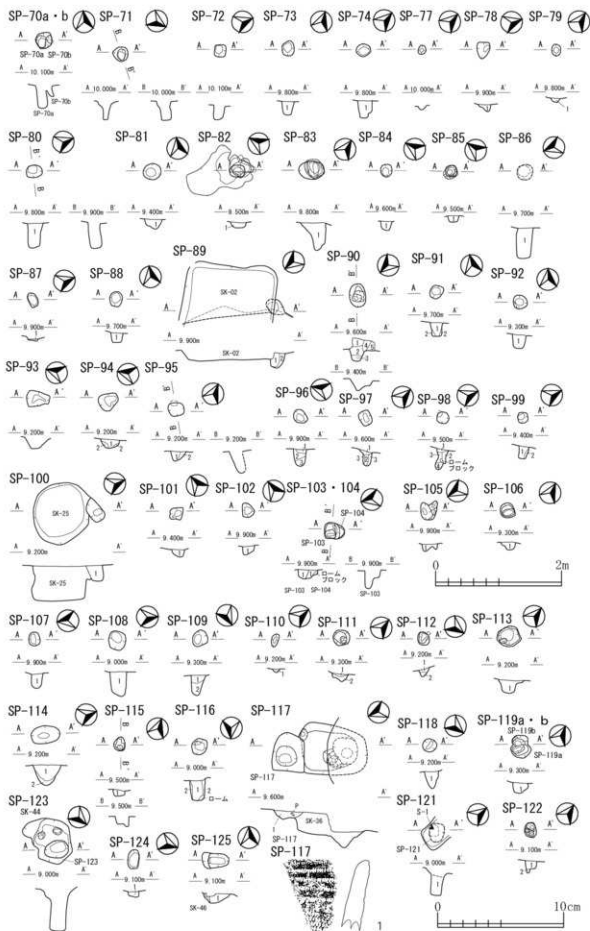


図 1-81 A区 SP-2





SP-47 第1層 第2層	19R03 3 雑色粘土 19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第1層 第2層	19R03 3 雑色粘土 19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、にじみ黄緑色粘土ブロック(0)15mm 少量
第1層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~3mm 少量
第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)9~15mm 少量
第1層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量
第1層	19R04 4 雑色土	少し粘土層、炭化粒に少量
第2層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、炭化粒(0)1mm 少量、ロム殻(0)1~5mm 少量、ロムブロック(0)20~30mm 少量、にじみ黄緑色粘土ブロック(0)40mm 少量
SP-52 第1層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~5mm 少量
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、炭化粒(0)5mm 少量、にじみ黄緑色粘土ブロック(0)10~15mm 少量
SP-55 第1層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 中量、ロムブロック(0)20mm 少量
第2層	19R02 1 雑色土	ロム多量、炭化粒(0)2mm 少量、シルト
第3層	19R02 1 雑色土	ロム多量、炭化粒(0)2mm 少量、シルト
第4層	19R02 1 雑色土	ロム多量、炭化粒(0)2mm 少量、シルト
第5層	19R02 1 雑色土	ロム多量、炭化粒(0)2mm 少量、シルト
第6層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、炭化粒(0)3~25mm 少量
第7層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)9~10mm 少量
第8層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~2mm 少量
第9層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)20mm 中量
SP-64 第1層	19R03 4 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第2層	19R03 4 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~15mm 少量
第3層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第4層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~15mm 少量
第5層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第6層	19R04 4 雑色土	層の下方向西側に集中
SP-71 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~5mm 中量、ロムブロック(0)10~15mm 少量
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 中量、ロムブロック(0)10mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 中量、ロムブロック(0)18mm 少量
第4層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.7mm 少量、ロムブロック(0)10~15mm 中量、赤褐色ロムブロック(0)2mm 少量
SP-80 第1層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~5mm 中量、ロムブロック(0)18mm 少量
第2層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~5mm 少量層の下方に集中
SP-83 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~2mm 少量、シルト
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 中量、焼成粒(0)1mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 焼成土層、層の上および下の方に集中、炭化粒(0)1~4mm 焼成土、焼土粒(0)1mm 少量
SP-85 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~5mm 少量、ロムブロック(0)10~15mm 少量
第2層	19R04 4 雑色土	黄褐色ロム殻(0)1~0.5mm 少量、黄褐色ロムブロック(0)10~40mm 少量、にじみ黄緑色粘土ブロック(0)15mm 少量
SP-87 第1層	7.19R4 4 雑色土	雑色土
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)2mm 少量
第3層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、シルト
第4層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、シルト
SP-90 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、焼土粒(0)2mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~5mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、焼土粒(0)1mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~10mm 少量、炭化粒(0)1mm 少量
第4層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第5層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1mm 少量
第6層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、焼土粒(0)2mm 少量
SP-94 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、焼土粒(0)2mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	19R02 2 雑色粘土ブロック中量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、焼土粒(0)2mm 少量
第4層	19R02 2 雑色粘土	ロムブロック(0)20mm 少量
SP-96 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第3層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第4層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第5層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第6層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第7層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第8層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第9層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第10層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第11層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第12層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第13層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第14層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量

SP-99 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、シルト
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、シルト
SP-100 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~0.2mm 少量、炭化粒(0)3mm 少量、焼土粒(0)1mm 少量、シルト
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~0.2mm 少量、炭化粒(0)3mm 少量、焼土粒(0)1mm 少量、シルト
SP-102 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~3mm 少量、ロムブロック(0)10~15mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
SP-103 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
第3層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量
SP-106 第1層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~5mm 状況中量、炭化粒(0)1~3mm 少量、焼土粒(0)1~2mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~3mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量、炭化粒(0)3mm 少量、焼土粒(0)1mm 少量
SP-108 第1層	19R1 7 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~25mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 状況中量
第3層	19R04 4 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量
第4層	19R03 3 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量
SP-111 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、炭化粒(0)1~5mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量
第3層	19R04 4 雑色土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量
SP-113 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量、ロムブロック(0)20mm 1層
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量、ロムブロック(0)20mm 1層
SP-114 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量
SP-115 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~5mm 少量、炭化粒(0)1~10mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~10mm 少量層の下方に集中
SP-116 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~10mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~10mm 少量
SP-117 第1層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~0.5mm 状況中量、炭化粒(0)1~2mm 少量、赤褐色粘土ロムブロック(0)2mm 少量
SP-121 第1層	19R02 1 雑色土	ロム殻(0)1~0.5mm 少量、ロムブロック(0)10~20mm 少量、炭化粒(0)1~5mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、ロムブロック(0)10mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、ロムブロック(0)10mm 少量
SP-125 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量
第2層	19R03 3 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、ロム多量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量
SP-128 第1層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第2層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第3層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第4層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第5層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第6層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第7層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第8層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第9層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第10層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第11層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第12層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第13層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量
第14層	19R02 2 雑色粘土	ロム多量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量、炭化粒(0)1~3mm 少量、炭化粒(0)1~2mm 少量

はSD-0 4 第1~3層と認定した土層と関連し、その堆積土の上位に一部不整合で第15・16層が堆積している。この部分までが溝状の形状をもった遺構としての堆積土として考えられる。第15層上位は平坦面が形成されているので、さらにその上位は時間的に異なる埋没時期となっている。

〔遺物〕 なし。

SD-0 5 (図1-78)

〔位置〕 A-4 で検出した。

〔重複〕 S I - 2 0 と重複している。本遺構の堆積土を S I - 2 0 が切っている方で、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 北西~南東方向で直線状を呈し、長さ 2.4 cm、幅 1.0~1.6 cm を測る。

〔断面形・壁〕 大谷火山灰層を壁とし、ほぼ垂直に立ち上がる。

〔底面〕 大谷火山灰層を底面としている。階段状を呈し、北西側から南東側に向かって低くなる。

〔堆積土〕 1層に大別した。ロム粒を多量、ロムブロック、炭化物粒を極微量含む。

[遺物] なし。

※編年表は本調査より年代が多少不明確に認識されているが、平安時代の住居は3-2より古く、また、掘出地点は、3-2より数層上層の縄文時代後期の住居である3-0-6の調査結果とも合致する。3-0-6に限定する3-0-2の家屋に遺物の埋蔵があることから、本調査は3-0-6の掘削の一定程度まで可能性がある。掘削が編年表によって、掘削位置の変更も検討したが、入館シフトの変更も必要に感じられた。当時のデータの不足から掘削位置の変更も検討したが、3-0-2と同層と考えるとより一時的な遺物の埋蔵である可能性が想定できる。しかし、調査時には平安時代の住居の掘削がより掘削が調査されているため、現在から正確に把握されておらず、確認できる情報も限られている。

### 3. ビット (図1-79～82)

142基検出した。調査区東側の平坦面に集中している。平面形は円形、隅丸方形、不整形を呈し、規模は15～75cm、深さは3～90cmを測る。明確に配列を捉えられるものではないが、丘陵頂部の集中している部分では環状を呈するようであり、住居跡が削平された可能性がある。個別の詳細については第2分冊表2-6を参照いただきたい。

## 第4節 遺構外出土遺物

A区の調査で出土した遺物はコンテナ箱換算で約100箱を数える。内訳としては縄文時代前期初頭から近世まで及ぶが、縄文時代の遺物が大部分を占め、その中でも縄文時代後期末葉に属する土器が最も多い。本節では遺構外出土遺物を時期別に大別し、文様などの特徴からさらに分類して記述する。

なお、平安時代の遺構から出土した縄文時代の遺物は、本節では遺構外出土として取り扱った。

### 1. 縄文時代

#### A. 土器

縄文時代の土器はA区全体で出土が認められる。特にA-3の北東側では比較的遺物包含層が残存しており、基本土層序第I層は後期の包含層、第II層は中期の包含層という層位ごとの出土状況を捉えることが可能であった。

また、北東端の斜面には縄文時代後期末葉を中心とする遺物集中箇所が形成されていた。この部分では基本土層序第I層と、第I層に鉄分の混入が見られる層の堆積を確認した。調査時に後者を第Ib層とした。第Ib層は斜面下方のみで確認されている。遺物集中箇所は、丘陵の北東端に当たり、傾斜がきつく、作業が困難であったため、新たに小ブロックを設定し、大部分のものを小ブロックでの層一括の取り上げとした。図1-83は小ブロックの配置と、小ブロックごとの出土個数の割合を表したものである。これによると、基本土層序第I層とIb層との出土割合は第I層が大部分を占めており、また第I層での出土状況は、斜面下側での出土数が多くなっている、この部分での土器の集中出土は上部の平坦面上からの廃棄行為によるものと考えられる。出土した土器は第III群C類十腰内V式に比定されるものであり、丘陵上部において検出されている後期

に帰属する堅穴住居跡十腰内V式に帰属するものである。この部分での土器の集中出土はこれらの堅穴住居跡が使用されていた時期に形成された廃棄ブロックと考えられる。

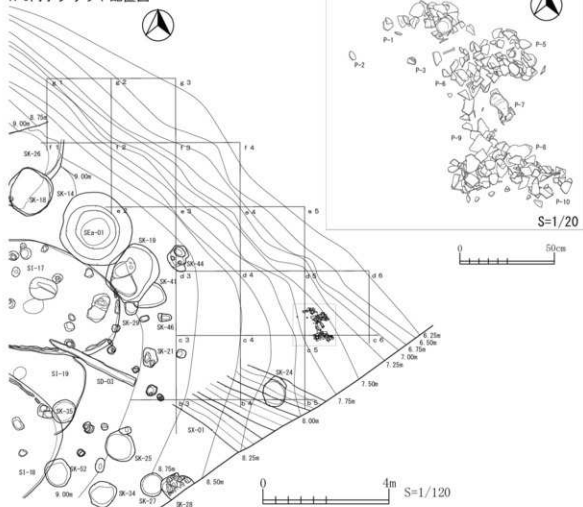
以下では時期ごとに分類し、詳細を記述する。なお後期の土器は非常に大量であるため、破片資料に関しては口縁部片を中心に取り扱い、胴部、底部片などは特徴的なものを選別し掲載することとした。

### 第1群 縄文時代前期の土器

#### A類 前期初頭の土器 (図1-84-1～40)

1～4は押引沈線文を施したものである。1～3は波状を呈する口縁部片である。口唇形状は丸みを帯びるもの、鋭角的なものが見られる。口縁部片様体は数条単位で施した押引沈線文により構成されている。1はやや波状を呈する口縁部で、LRの斜行縄文を地文とし、5条の押引沈線文を横位に施したものである。地文はLR斜行縄文としたが、一部のみの確認であるため、他の原形を使用したものである可能性もある。2は口縁形状に沿う形で押引沈線文も波状を呈するものである。上部の3条は波状に、下部の2条は横位に施している。3も2と同様に口縁形状に沿って押引沈線文を施し、縦位と斜位の押引沈線文を交差させて施しているものである。4は胴部片である。結束第1種を地文とし、横位に押引沈線文を施したものである。内面調整は1～4のいずれもナデ調整によるものである。使用されている粘土は2ではきめの細かい粘土が使用されており、その他のものでは若干荒い印象のものを使用している。また1、3、4では内外面に炭化物の付着が見られる。5はコンパス文を施した口縁部片である。口唇形状は内削ぎ状を呈し、やや内湾する器形を呈する。口縁部文様体は上下に配した米粒状の刺突列の間にコンパス文を施したものである。内面調整は口縁部付近では縦方向のミガキによるもので、以下の部分はナデによる調整である。6～10は刺突列と縄端回転文を施した口縁部片である。口唇形状はミガキ調整により丁寧に作り出されており、平坦なもの、内削ぎ状を呈するものがある。口縁部文様体は三日月形、爪形、米粒形などの刺突を横位連続施した刺突列を数条重層して構成している。このほかに刺突列を重ねて沈線文を施しているものや刺突列が沈線状を呈するものも見られる。胴部は縄端回転文を施しており、同一方向に重層したものや原形を変えることで羽状構成としたものも見られる。6は3条の三日月形の刺突列と羽状構成の縄端回転文を施したものである。口唇部は若干内削ぎ状を呈する。7は口縁部文様体に3条の爪形の刺突列と刺突列を重ねて3条の沈線文を施し、胴部は羽状構成の縄端回転文を施したものである。8、9、10は3条の米

A-3内小グリッド配置図



I 層

e 1	e 2				
0	0				
f 1	f 2	f 3			
1 0 1	4 7 2	1 2 9			
	e 2	e 3	e 4	e 5	
	1 1	2 2 1	2 9 1		
	d 2	d 3	d 4	d 5	
	2 4	1 4	9 0	7 0	
	c 2	c 3	c 4	c 5	c 6
	2	1 1	1 2 3	1 0 7 6	1 1 7
	b 2	b 3	b 4	b 5	
	1	0	1 7 5	3 6 5	

I b 層

e 1	e 2				
f 1	f 2	f 3			
e 1	e 2	e 3	e 4	e 5	
2	1 7	2 0			
	d 2	d 3	d 4	d 5	
	c 2	c 3	c 4	c 5	c 6
				2 4 9	
	b 2	b 3	b 4	b 5	
				6	

図 1-83 A区遺構外小グリッド配置図

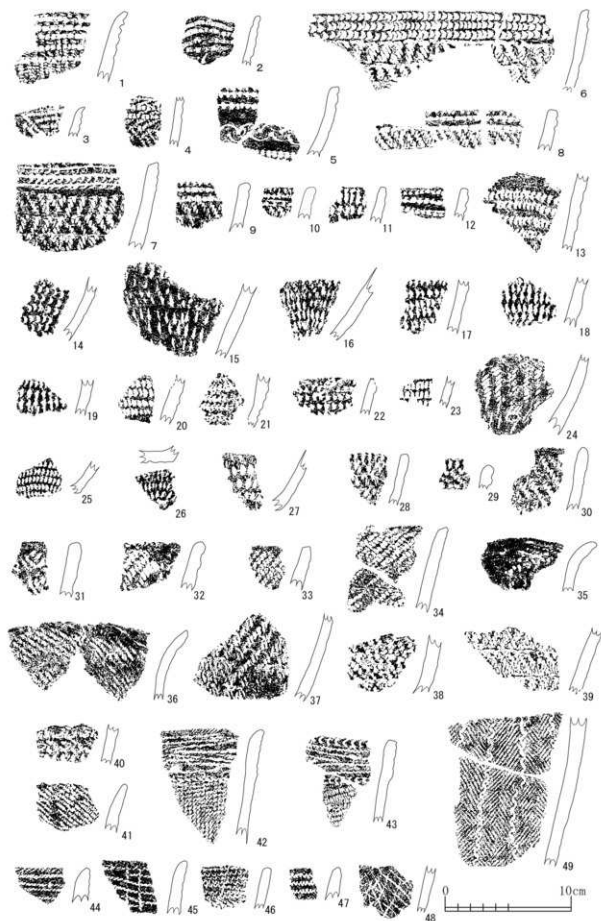


図 1-84 A区遺構外出土器-1

粒形の刺突列を沈線状に施し、胴部は縄端回転文を施したものである。いずれも内面調整は主にナデによるものであるが、口唇付近にミガキを用いたものもある。11～23は刺突列のみを施したものである。大部分が胴部片で口縁部片は11、12のみである。刺突痕の形状には三日月形、米粒形などがあり、刺突列を重層させて文様を構成しているものである。ここでは刺突列のみが認められるものとして分類したが、破片資料であるため出土部分以外に別の文様を組み合わせている可能性もある。器形については破片資料のため明確ではないが、出土資料からの推測では外傾する鉢形土器と考えられる。11は口唇形状が先細りし、口唇が平坦な作りとなっているものである。文様は米粒形の刺突を施したものである。この資料は下部の破断面がソケット状になっており、粘土紐による成形時の痕跡が認められるものである。12は3条の刺突列が施されているが、刺突痕の形状が他のものと異なり、両端が深く挟れるような形状を呈している。これは先端が二又になっている刺突具を使用したためこのような形になったものと考えられる。13～24は胴部片である。三日月形、爪形、米粒形などの刺突列を重層したものである。13、14は三日月形の刺突を重層したものである。13は横位の刺突列の上の部分に斜位の刺突列が一部確認でき、刺突列で三角形を構成していた可能性が考えられる。15～21は爪形の刺突列を重層したものである。22、23は米粒形の刺突列を重層したものである。24は刺突というよりは短斜線を言うべきもので、この列の上部にR Lの斜行縄文を施している。25～27は底部片である。25、26は平底で、底面には胴部に施したものと同じ刺突列を環状に施している。27は底部の始まる部分と考えられるものである。この部分が丸みを帯びていることから丸底である可能性が考えられる。ここに分類したものは内面調整はナデが主体であるが、11、14、17のようにミガキ調整を施したのも見られる。特に17では非常に丁寧なミガキ調整が行なわれている。28、29は口唇に刺突を施したものである。28は口唇部がやや平坦な作りになっており、口唇外側に刺突が施されている。その下には縄文原体を使用した文様を施しているが、磨耗のため使用した原体は不明である。29は口唇部形状が丸みを帯びるもので、口唇部に刺突、胴部には縄端回転文が施されているようである。ともに内面調整はナデによるものである。30～40は縄文施文のみのものである。30～36は口縁部片である。口唇形状は丸みを帯びるもの、平坦でやや内削ぎ状を呈するものや、先細りし平坦な作りとなっているものがある。器形はやや外傾するもの、口縁部が外反するものが見られる。30～

32は縄端回転文を、33はL R Lの複斜行縄文を施している。34～37はR Lの斜行縄文を施したものである。34は内削ぎ状の口唇を持ち、やや外傾する器形である。35、36は外反する器形で、特に35では外反の度合いが強くなっている。37～40は胴部片である。37、38は明確でないが縄端回転文もしくはループ文を施したものである。39は羽状構成の縄端回転文を施したものである。胴部片のみのためここで記述したが、6～10のような文様構成であると考えられる。40はループ文と考えられるものである。また上部には米粒形の刺突列を施している。縄文施文のみに分類したものは内面調整はナデ調整が主体であるが、口唇部付近にミガキを施しているものも見られる。

#### B類 円筒下層式の土器 (図1-84-41～図1-85-52)

41はR L斜行縄文を施した口縁部片である。口縁は外反し、口唇はやや丸みを帯びる形状のものである。胎土には繊維、海綿骨針の混入が認められるものである。内面調整はナデによるものだが、器面全体に磨耗が見られる。42～47は口縁部文様帯に原体の側面圧痕を施したものである。平口縁と波状口縁があり、口唇部形状は外反するもの、丸みを帯びるもの、鋭角的なもの3種類が見られる。口縁部文様帯はL、R原体、または単軸絡条体第5類の側面圧痕を施したものである。原体の側面圧痕には横位、斜位、縦位がある。42～43は口縁部文様帯と胴部文様帯の境を若干隆起させ区画文様としたものである。42は口縁部文様帯にR原体の側面圧痕を横位に施し、口縁部文様帯と胴部の境が若干隆起し区画体となっている。胴部文様帯は区画体直下で単軸絡条体を一度側面圧痕し、そのまま縦位に回転施文したものである。43は波状口縁を呈し、区画体は隆起し半截竹管による刺突を施している。また口唇部にも同じ刺突具を使用した刺突を施している。胴部文様帯は多軸絡条体の縦位回転による文様を施している。44はR原体の側面圧痕を横位に施し、口唇部にL R原体の側面圧痕を施したものである。45はR原体の側面圧痕を横位と縦位に施したものである。下部に隆起している部分が見られる。胴部との区画体の隆起と考えられる。46、47は口縁部文様に単軸絡条体第5類の側面圧痕を施したものである。46は平坦な作りの口唇にも文様を施しているようだが磨耗のため明確ではない。47は口唇が鋭角的な形状のものである。48～50は胴部片である。48は単軸絡条体第5類の回転施文により網目状の文様を施している。49は縦位の羽状構成のR L、L Rの斜行縄文と縦線文を施したものである。50は単軸絡条体第1A類による木目状の文様が施されている。49、50は内面に炭化物の付着

が見られる。5・1、5・2は平底の底部片である。共に単軸絡条体第1類の縦面回転により文様を施したものである。5・1には底面にR・Lの斜行縄文を施している。ここに分類したほとんどのものが内面調整は丁寧なミガキによるものである。これらは口縁部文様帯に原体を押した円筒下層c式の範疇に入るものと考えられる。

## 第Ⅱ群 縄文時代中期の土器

### A類 円筒上層式の土器(図1-85-53～図1-86-78)

全て深鉢形土器である。5・3、5・4は口縁部に4単位の台形状の突起を持つものである。5・3は結束第1種を地文とし、刻目を施した隆帯は口唇部では波状を、胴部では十字状モチーフを呈する。突起中央付近には円形の貫通孔があり孔の外面にも環状に隆帯を貼り付けている。5・4も結束第1種を地文とし、無文の隆帯は口唇部では波状、口唇直下では弧状を呈し、胴部は地文のみとなっている。この資料の貫通孔は横長のものである。ともに内面調整は口縁部付近では横方向のミガキ、胴部では縦方向のミガキとなっている。5・4は外面に炭化物の付着が認められる。5・5は口縁部に4単位の山形突起を持つものである。R・Lの斜行縄文を地文とし、口唇部の刻目を施した隆帯は波状を呈する。また突起中央付近には中央がくぼんだボタン状貼付が施され、内面には貫通していない孔(盲孔)を穿っている。内面調整は横方向のミガキによるものである。5・6、5・7は肥厚した折り返し状の平口縁を持つものである。5・6は結束第1種を地文とし、肥厚した口唇外面にはL・R、R・Lの斜行縄文を施している。口唇外面の文様については口唇直下の部分に結束第1種の結束部分が現れていることから、胴部の結束第1種の下の部分と考えられる。また口唇外面にはL原体の側面圧痕を施した環状の隆帯を貼付している。内面調整は口縁部付近では横方向のミガキ、胴部では縦方向のミガキである。5・7は小さな底部を持ち、口縁に向けてラップ状に応じる器形を呈するものである。結束第1種を地文とし、口唇外面にL原体の側面圧痕を施した隆帯を波状に貼付している。内面調整は口縁部付近では横方向のミガキ、胴部では縦方向のミガキである。5・8～6・3は波状口縁部片である。5・8は台形状突起部分である。刻目を施した隆帯と刺突により文様を構成したものである。突起中央付近には横長の貫通孔が認められる。5・9はL原体の側面圧痕を施した隆帯と刺突により文様を構成したものである。隆帯は口唇外面では波状、下部では横位のものとなっている。6・0は山形突起部分である。R・Lの斜行縄文を地文とし、L原体の側面圧痕を施した隆帯を口唇外面に波状に貼り付けている。6・1はR・Lの斜行縄文を地文とし、無文の隆帯を口唇外面には波状に、その下の部分では横位に貼り付

けている。6・2はL・Rの斜行縄文を地文とし、口唇外面にはL原体の側面圧痕を施した隆帯を貼付しており、この隆帯は一部環状を呈する箇所も見られる。口唇直下の部分の隆帯は無文となっている。6・3は台形状突起部分である。結束第1種を地文とし無文の隆帯を口唇外面には波状、以下の部分には横位や斜位に貼付している。また中央にもボタン状の貼付を施している。6・4～7・4は平口縁部片である。6・4A、Bは同一個体で口縁から胴部にかけてのものである。結束第1種を地文とし、無文の隆帯は口唇外面では波状に、下部では平行に貼り付けており、隆帯間には刺突を施している。内面調整は口縁部文様帯付近が横方向のミガキ、胴部は縦方向のミガキとなっている。6・5は口唇が肥厚し厚い作りのものである。口唇に沈線を施し、隆帯も一部残存している。胴部には剥落しているが隆帯と刺突を施している。6・6は無文の隆帯と刺突を施したものである。隆帯は口唇外面では波状、下部では弧状を呈する。6・7はL原体の側面圧痕を施した隆帯と刺突により文様を構成したものである。6・8は肥厚した口縁を持ち、肥厚した部分が一部突起状に張り出している。口唇外面のL原体側面圧痕を施した鋸歯状の隆帯はこの部分にも及んでいる。6・9は折り返し状の口縁を持つもので、L原体の側面圧痕を施した隆帯と斜位の刺突列で文様を構成したものである。7・0は口唇外面に横位と斜位の無文の隆帯を施し、斜位の隆帯間に刺突列を施している。7・1は折り返し状の口縁を呈し、R・L斜行縄文を地文とし、口唇外面に刻目を施した隆帯を波状に貼付している。7・2も刻目を施した隆帯を貼付したものが地文はL・Rの斜行縄文となっている。7・3は薄い作りの折り返し状口縁を持つものである。胴部には結束第1種を施している。口縁の折り返し部分は無文である。7・4は口縁部付近が無文で、胴部には結束第1種を施したものである。7・5は刻目を施した隆帯を施しており、胴部には結束第1種を施したものである。7・6から7・8は胴部片である。7・6はL原体の側面圧痕を施した隆帯と半裁竹管状刺突具による刺突を施したものである。7・7は結束第1種を地文とし、無文の隆帯を貼付したものである。7・8はくびれの部分が剥落しているが、隆帯を貼り付けていたものと考えられる。その部分より上には線紋状にL原体の側面圧痕を施し、下の部分には結節回転文を施している。ここに記述した資料は内面調整についてはほとんどのものがミガキによるもので、非常に丁寧なものや雑なものも認められる。調整の方向は口縁部付近では横、胴部では縦の調整となっている。A類は円筒上層c式が大部分を占めるが、d式もわずかではあるが存在する。

### B類 最花式の土器(図1-86-79～82)

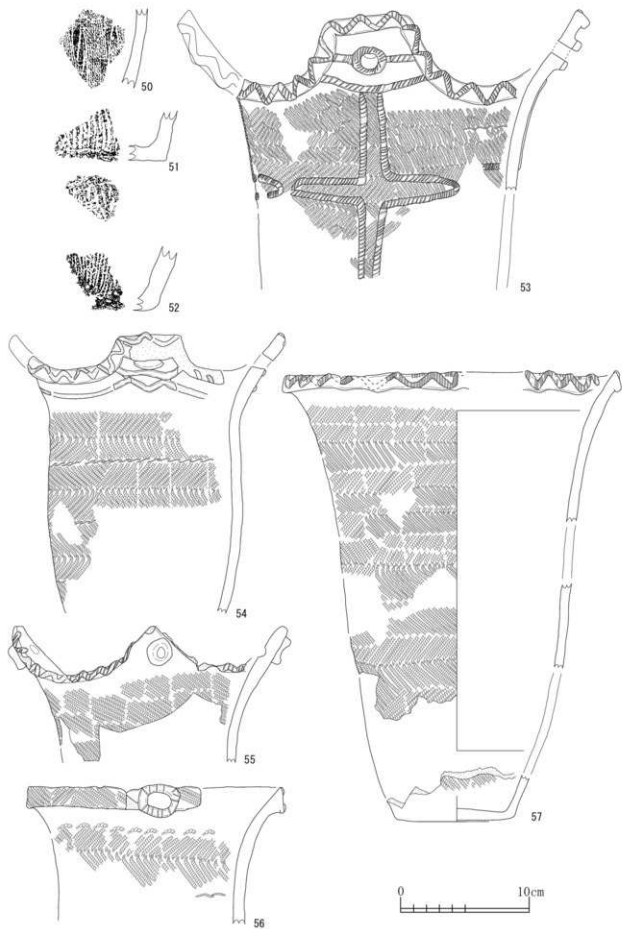


图 1-85 A区遗物出土土器-2

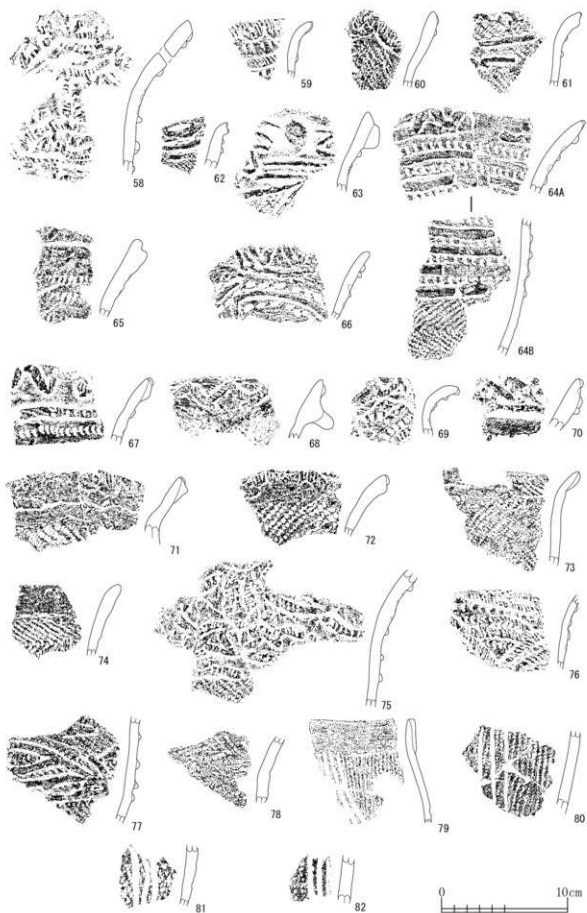


図 1-86 A区遺構外出土土器-3



縦位の幅広い沈線の特徴とするものである。車輪給条体第1類を地文とし、縦位に幅広い沈線を数条施している。焼成は良好で、胎土は若干砂粒の混入が認められるがきめの細かい粘土を使用しており堅緻である。79は口縁部である。頸部にくびれを持ち口縁が直立するものである。口縁は折り返し状を呈し肥厚している。80-82は胴部片である。第III群 縄文時代後期の土器

該期の土器の器種はバリエーションが多く、深鉢形、鉢形、台付鉢形、壺、注口、香炉形土器などが見られる。多くのものは瘤状貼付を施しており、縄文時代後期末葉に位置づけられる十腰内V式の土器である。また装飾を施していない粗製土器には縄文施文のみのもや無文のもの、条痕文を施したものがあられる。なおA、B型の土器は遺構外では良好な資料の出土はなかった。

C類 十腰内V式の土器 (図1-87-83～図1-94-161)

83～129は深鉢形土器である。83は瘤状貼付を施したものである。器形は底部から大きく外傾し、頸部にくびれを持ち口縁がやや外傾するものである。LRの斜行縄文を地文とし、頸部のくびれた部分と胴下半部に磨消手法により無文部分を作り出している。粘土貼付による装飾は口縁部には内傾するB字状突起、口唇外面と胴最張部に約2cm間隔で瘤状貼付を施している。84はLRの斜行縄文を地文とし、磨消手法と瘤状貼付により文様を構成したものである。瘤状貼付は口唇外面では突起状の大きなものが加えられている。口唇付近では地文が残っているが、以下の部分では刻線により綾杉状や斜位の文様を施している。85は波状突起部分である。LR斜行縄文を地文としたもので、瘤状貼付と沈線により文様を構成したものである。瘤状貼付は山形突起中央部と突起両サイドの口唇部に2個1対で配置されている。瘤状貼付には刻目を施している。86は舌状突起部分である。無文の隆帯と二文状を呈する貼付を施している。87は磨耗のため明確ではないが結束第1種を地文とし、瘤状貼付を施した口縁部である。口唇には2個1対の山形突起を有するものである。88は磨消手法により文様を構成した口縁部である。無節1を地文とし、磨消手法により作り出された無文部分を沈線によって区画したものである。89はRL斜行縄文を地文とし、磨消手法により文様を作り出したものである。口唇には刻目を施した突起を有する。90は羽状構成のLR・RL斜行縄文を地文としている。口唇にはB字状の突起を有し、口唇外面に瘤状貼付を施したものである。91、92は羽状構成のLR・RL斜行縄文を地文とした口縁部である。口唇にはB字状の突起を有し、突起の直下に瘤状貼付を施したものであ

る。93は無文の口縁部である。口唇に瘤状の突起を有し、胴部にも瘤状貼付を施したものである。94は口唇外面に縦長の瘤状貼付を施した口縁部である。95は外反する無文の口縁部で、頸部に沈線を施したものである。96も95と同様であるが、頸部の沈線から胴部へかけて斜位の沈線を加えたものである。97は片口状のものである。片口の部分を中心に沈線を施したものである。また外面と片口内面付近に赤色顔料の痕跡が認められる。98、99は横位の条痕文を地文とし、口唇に瘤状の突起を有する口縁部である。99では胴部には節目状の細いものとなっている。100は曲線状の沈線を施したものである。101～109は縄文地のものである。胴部に段状構成、羽状構成の斜行縄文を施したものである。101～103は口縁部が外傾するものである。104～107は口縁部が内湾し、口唇内面が肥厚するものである。また106では磨消手法による無文部分が見られ、口唇は内面に折り返し状を呈する。108、109は胴部から底部にかけてのものである。108はLR斜行縄文を施しており、底部は上げ底状を呈するものである。110～115は無文のものである。110は最張部を口縁部下に持ち、胴部下半から最張部にかけて直線的に立ち上がる器形を呈する。111～113は胴部に若干丸みを帯びる器形を呈する。115は口縁部が折り返し状を呈し肥厚するもので、頸部にくびれを持つ。116～126は条痕文を施したものである。横位、斜位の条痕文を施しており、口縁部は直線的に外傾するもの、若干内湾するものが見られる。11は小さな底部から若干丸みを帯びながら口縁部に向けて立ち上がる器形を呈する。底部は平底である。器面全体に幅1～2mmの条痕文を横位に施している。胴上半部には成形時の指頭圧痕が多数残存している。内面調整はナデである。127では底部形状は上げ底状のものとなっている。128～138は鉢である。128は羽状構成の斜行縄文を地文とし、口唇にB字状の突起を有するものである。胴部に丸みを帯びる器形を呈する。129は横位と曲線的な沈線に瘤状貼付を加えたものである。130はRL斜行縄文を地文とし、口唇に瘤状突起を有し突起下に瘤状貼付を施したものである。瘤状貼付の部分は磨消手法により帯状に無文となっている。131は瘤状貼付を中心に放射状に沈線を施したものである。132は磨消手法により文様を施したものである。133は無文のもので口唇に両サイドから押しつぶしたような鋭角的な突起を有するものである。135は無節1を地文とし、頸部にくびれを持ち口縁部が外反するものである。137は頸部付近に磨消手法を用いたものである。地文を残した部分に縦長の貼付を施している。138は上げ底

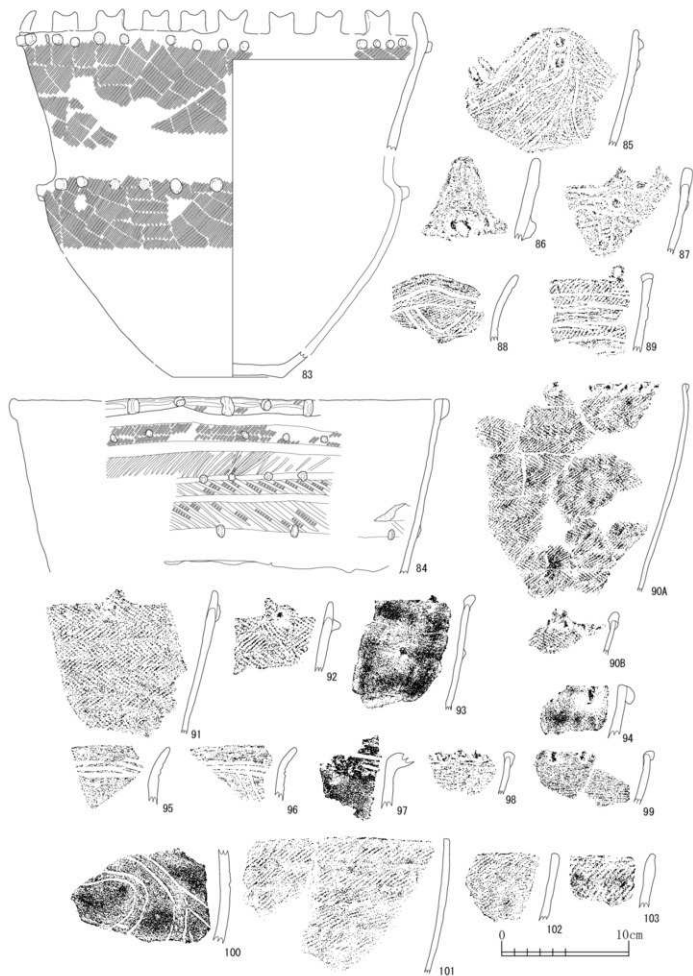


図 1-87 A区遺構外出土土器-4

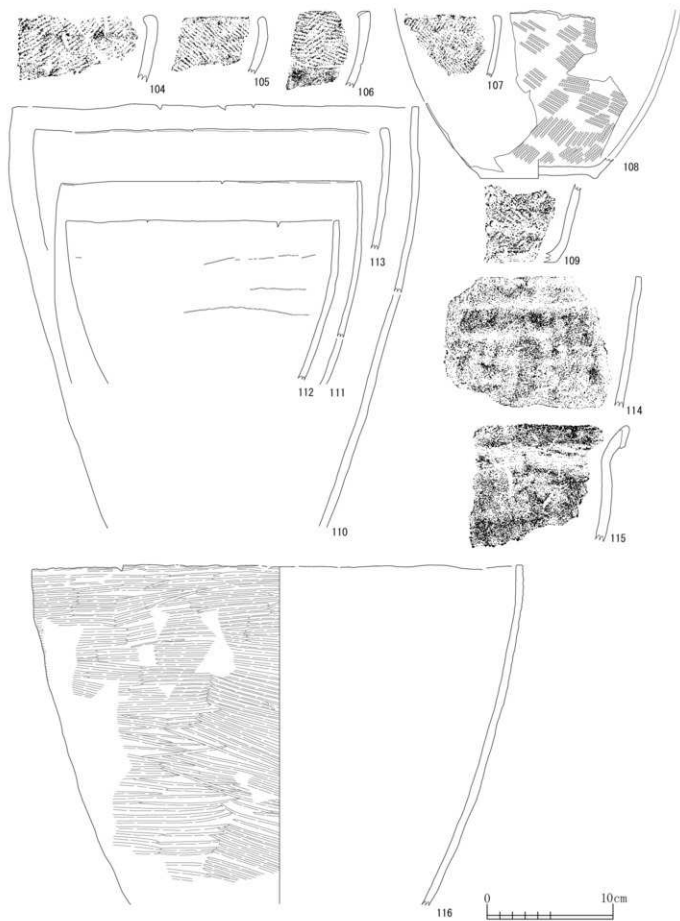


图 1-88 A区遗構外出土土器-5



图 1-89 A区遺構外出土土器-6

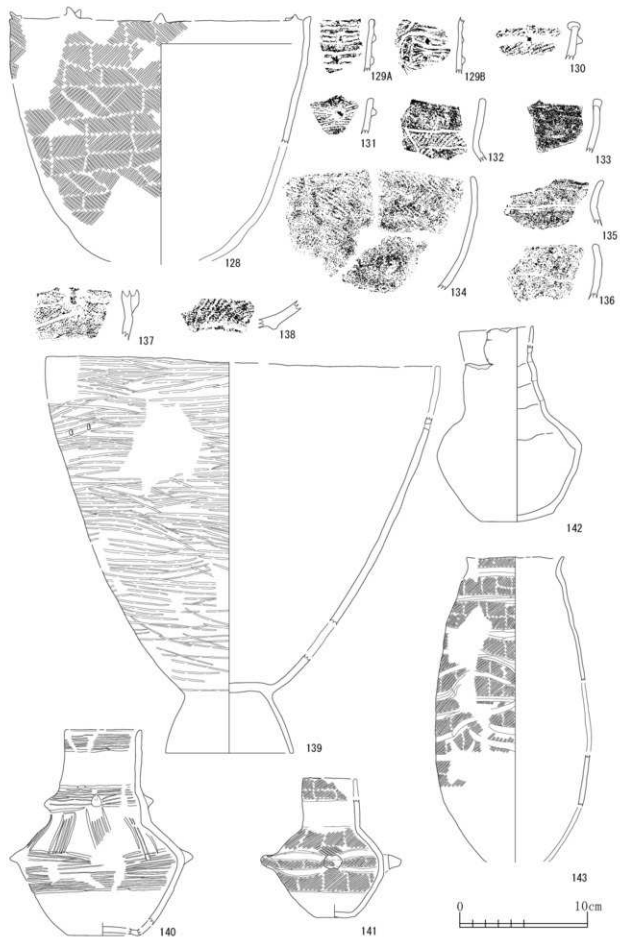


图 1-90 A区遗構外出土土器-7

状を呈する底部である。139は横位の条痕文を施した台付鉢である。口縁部直下に最張部を持ち、口縁部に比較して台部の径は小さなものとなっている。条痕文は幅1～2mmのもの横位に施している。内面調整は口縁付近では横位の条痕文、胴部では縦方向のナデとなっている。また口縁部付近には補修孔が見られる。140～145は壺形土器である。140は櫛目状沈線と刻目を施した瘤状貼付によって文様を構成している。141はLRの斜行縄文を地文とし、磨消手法を用いたものである。胴最張部に縦方向の貫通孔を施した突起を4単位有する。142は頸部の長い無文のものである。口縁部は若干外反する。143は胴部下半に最張部を持つ寸胴形の器形を呈するものである。LRの斜行縄文を地文とし、太く浅い沈線を施し、最張部以下は磨消手法により無文となっている。144は図上復元したものである。胴部形状は143のように寸胴形を呈し、頸部にくびれを持ち口縁部が外反するものである。口縁部は波状を呈する。RLの斜行縄文を地文とし、磨消手法を用い、地文を残した部分に瘤状貼付を施している。この資料の特徴としては断面形状が円形ではなく、楕円形を呈することで口縁部の頂部は長軸方向に有する。145は頸部から口縁部にかけて内傾するものである。146は磨消手法により文様を施したものである。147～153は注口土器である。147、151は頸部に膨らみを持つものである。147は擬似斜行縄文を地文とし、沈線と瘤状貼付を施したものである。瘤状貼付は頸部と胴最張部に見られ、刻目を施した大きめの貼付の間に小さめのものを配している。151は無文のもので器面調整は横方向のナデである。胴最張部に瘤状の貼付と、貼付の間に縦位の刻線を施している。148は結束第1種を地文とし、頸部と胴下半部に磨消手法により無文部分を作り出したものである。頸部から口縁部にかけては内傾しながら直線的に立ち上がる。注口部の付け根の下側は角状に突出している。149、150は無文のものである。頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する器形である。器面調整は149では全て横方向のミガキ、150では口縁部から胴最張部付近までは横方向のミガキ、胴下半部では縦方向の磨きとなっている。また150は頸部と胴最張部に上部に刻目を施した瘤状貼付がされ、注口部付け根下側に膨らみが見られる。152、153は深鉢形の注口土器である。器形は83の深鉢と同じように頸部にくびれを持つものである。152はLRの斜行縄文を地文とし、胴下半部に磨消手法により無文部分を作り出しており、縄文地と無文部分の区画文様として沈線を施している。粘土貼付による装飾は口唇部には内傾するB字状突起を施し、胴最張部に瘤状貼付を巡ら

せたものである。153はLRの斜行縄文を地文とし、頸部に磨消手法による無文部分を持つ。粘土貼付による装飾は口縁部では背面に刻目を施した角状の突起間にB字状と瘤状の貼付を組み合わせて配置している。口唇外側と頸部の瘤状貼付は表面にくびれを持つ大きめの貼付の間に刻目を施した瘤状のものを貼付している。また沈線による文様は口唇外面では綾形状、胴最張部付近では縄文帯を挟んで綾形状をなしている。154～160は香炉形土器である。154はRLの斜行縄文を地文とし、胴下半部と上半部にかけて磨消手法により無文部分を作り出したものである。頂部には横位の貫通孔が見られるつまみ状の突起を有する。上半部の作りは4単位のアーチ状となっており、アーチを粘土紐でつなぐことで三角形のすかしを2分割している。155はLR斜行縄文を地文とし、アーチ部分に3個1組の細長の孔を縦列させたものである。台部は無文となっている。156は上部の大部分を欠損しているものである。装飾は条痕文を地文とし、刻目を施した瘤状貼付を施したものである。157は上部のみのものである。頂部には横位の貫通孔が見られるつまみ状の突起とその両端には貫通孔が見られる瘤状突起も有する。上部を形成するアーチは2単位のもので、アーチ部分の装飾は瘤状貼付、隆帯、すかしで構成されている。158はアーチ部分である。LRの斜行縄文を地文とし、楕円形のうち、円形刺突、沈線による装飾を施したものである。アーチの両端部は外反している。159は波状を呈する口縁部である。口唇に刻目を施した瘤の突起を有し、胴部はLR斜行縄文を地文とし、胴部下半は磨消手法により無文となっている。この部分の頂部には瘤状貼付を区画文様としている。また波状頂部を頂点とする幅広に沈線による山形の文様も施している。160は口縁～台部にかけてのものである。LRの斜行縄文を地文とし、磨消手法により胴部下半を無文としている。口縁は波状を呈しており、アーチ部分につながるものと考えられる。161は小型の台付鉢である。口縁部は小突起の貼付により小波状を呈する。器面は外面は縦位、内面は横位の調整が施されている。

#### 第IV群 縄文時代晩期の土器(図1-94-162～165)

鉢形土器、壺形土器が出土している。162～164は鉢である。162はRL斜行縄文を地文とし、沈線を横位に3条施したものである。口縁部はえぐりを入れることで小波状を作り出している。163は磨耗のため明確でないが、斜行縄文を地文とし、口縁部に横位に幅広の沈線を施した口縁部である。164はLR斜行縄文を地文とし、幅広の沈線で三又状入組文を施した胴部である。165は壺の肩部である。幅広の沈線を施したものである。

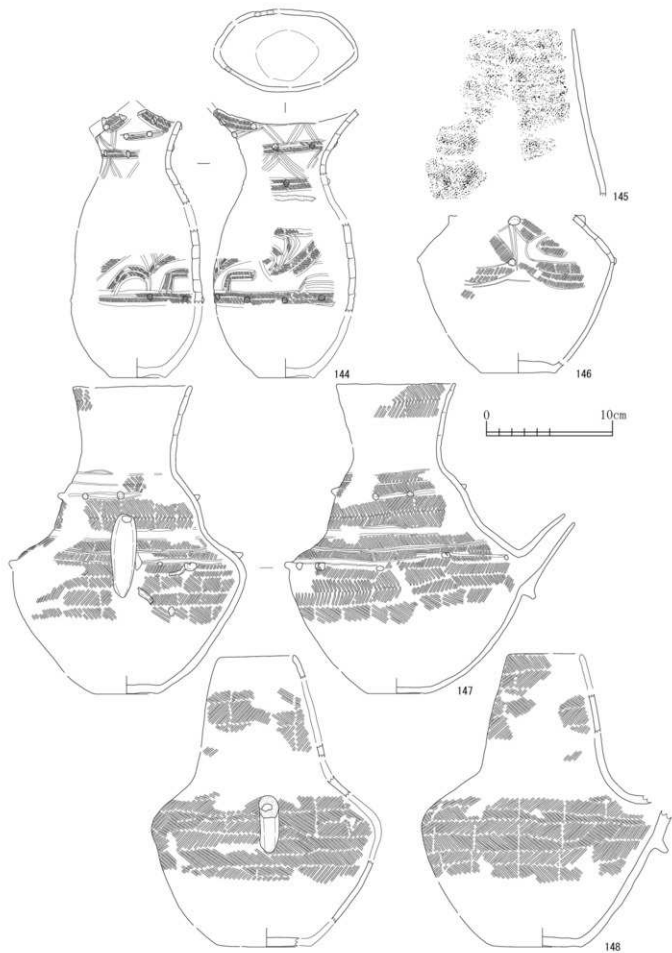


图 1-91 A区遗構外出土土器-8

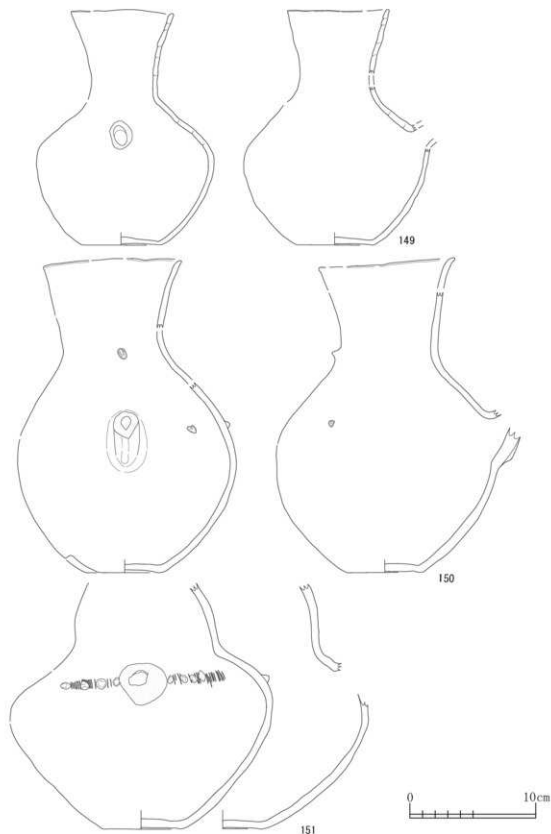


図 1-92 A区遺構外出土土器-9

162は大洞C1式の土器、163、165は大洞A式の土器、164は大洞BC式の土器である。

B. 土製品 (図1-94-166)

166は大部分を欠損しており、残存部分は長さ

3.0cm、幅3.2cm、厚さ2.0cmを測る。外面の調整はナデによるものだが、一部条痕も見られる。全体の形状は不明だが中空と考えられる部分も見られる。土偶の一部と考えられる。



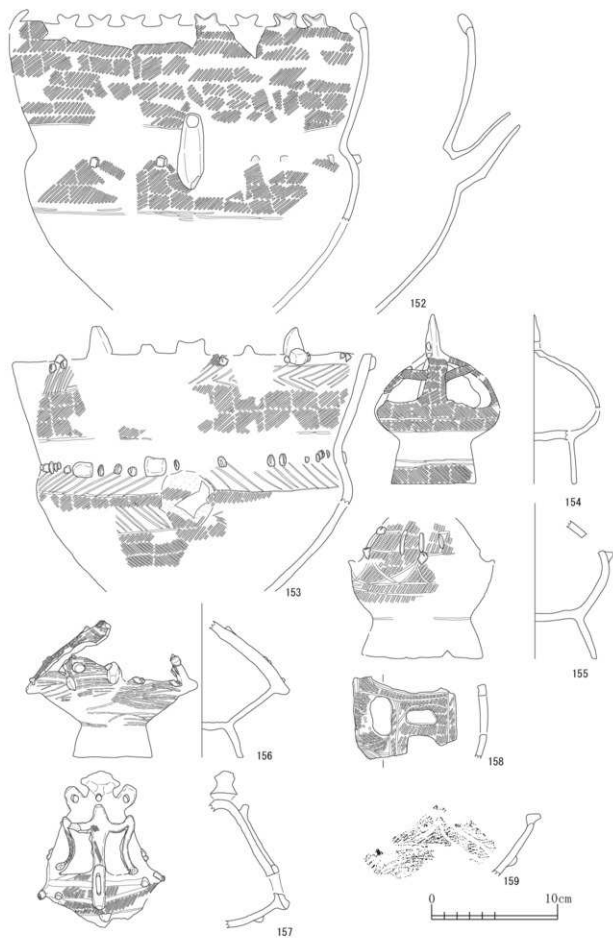


图 1-93 A区遗構外出土土器 -10

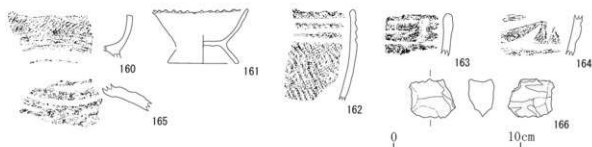


図 1-94 A区遺構外出土器 -11

## C. 石器 (図1-95-1-73)

石器は73点図示した。剥片石器は、1類石鏃はaが2点、bが6点、dが6点、eが3点、fが2点、2類石槍が1点、3類石鏃はbが2点、eが2点、4類石匙はaが6点、bが4点、5類石筈が2点、6類スクレーパーはaが2点、bが10点、7類異形石器は1点、16類加工痕、使用痕のある剥片は、bが4点出土している。1、2は1類aである。3～8は1類bである。9～14は1類dである。14の基部にはアスファルトの付着がみられる。15～17は1類eである。15の基部にはアスファルトの付着がみられる。18、19は1類fである。20は2類bである。21、22は3類bである。23、24は3類cである。25～27、29、30、43は4類aである。25および4類bの28の表面両側面には微細剝離がみられる。29の幅み部分にはアスファルトの付着がみられ、裏面左側面には微細剝離がみられる。30の表面右側面には微細剝離がみられ下部は欠損している。28、31～34は4類bである。31の表面下部部、32の表裏面両側面には微細剝離がみられる。33の表面下部部には微細剝離、刃部裏面側に使用光沢痕が顕著にみられる。35、36は5類である。35は下部部の裏面に使用光沢痕がみられる。37、38は6類aである。39～48は6類bである。42は表面両側面、43は表面右側面及び下部部に微細剝離がみられる。43は4類aの欠損品の可能性も考えられる。44は左側面の裏面に使用光沢痕がみられる。46は刃部に微細剝離がみられる。47は鏃端片で、裏面下部部に刃部が作出されている。49は両端が欠損しているため全体形は不明であるが7類に分類した。両側面の磨耗が顕著である。50、51は16類bである。52、53は16類bである。使用石材は49が黒曜石、52、53はメノウ、ほかは珪質頁岩である。

礫石器は、8類磨製石斧が2点、9類石鏃はaが1点、bが2点、10類浮子は1点、11類敲磨類はaが5点、bが2点、dが4点、12類北海道式石冠は1点、13類半円状扁平打製石斧は2点出土している。54、55は8類である。いずれも

基部のみで刃部は残存していない。56は9類a、57、58は9類bである。58は楕円礫の長軸に敲打による帯状のくぼみが形成されているほか、右側面に細長い敲打面がみられる。59は10類である。全面が磨りにより成形され、短軸の両端に打ち欠きをもつ。60～64は11類aである。60は垂角礫の稜線上に敲打痕がみられる。61は左側面と下部部に敲打に伴う剝離がみられる。62は扁平な円礫の右側面に敲打痕がみられる。63は垂角礫の表裏面に敲打痕がみられる。64は扁平な楕円礫の表裏面と右側面に敲打痕がみられる。65、66は11類bである。65は上下端部に顕著な磨面がみられるほか、右側面に磨面がみられる。66は楕円礫の全体が磨られており、被熱により赤化している。67～70は11類cである。67は表裏面に敲打痕がみられる。68は円礫の表裏面に敲打痕と磨面、右側面に敲打痕がみられる。69はやや扁平な楕円礫の表裏面に敲打痕、右側面に磨面がみられる。70は断面形が三角形を呈する礫の稜線上に敲打痕と磨面が形成されている。71は12類である。長軸の中央部分に敲打による帯状の溝、基底部の顕著な磨面、上部面には敲打痕がみられる。表裏面には2次的なものか直接打撃による剝離がみられる。72、73は13類である。いずれも素材礫の周辺部を直接打撃で成形している。背の部分を弧状に成形し下部面に磨面が形成されるが、73の背の稜線上にはもう1面磨面が形成されている。使用石材は54が緑色凝灰岩、55が緑色片岩、56、61凝灰岩、57、58、62、65、67～70、73安山岩、59軽石、60珪質頁岩、63、64流紋岩、66、71安山岩、72珪岩である。

## 2. 古代

## A. 土器 (図1-100-1～21)

20点図示した。該期の遺物としては土師器の碗、甕、撤文土器の甕、須恵器の甕があるが、いずれも破片資料で復元できたものはない。なお、縄文時代の遺構から出土した該期の土器については遺構外出土として取り扱うこととするため本節で記述する。

1～3は土師器碗である。1は口径(10.7)

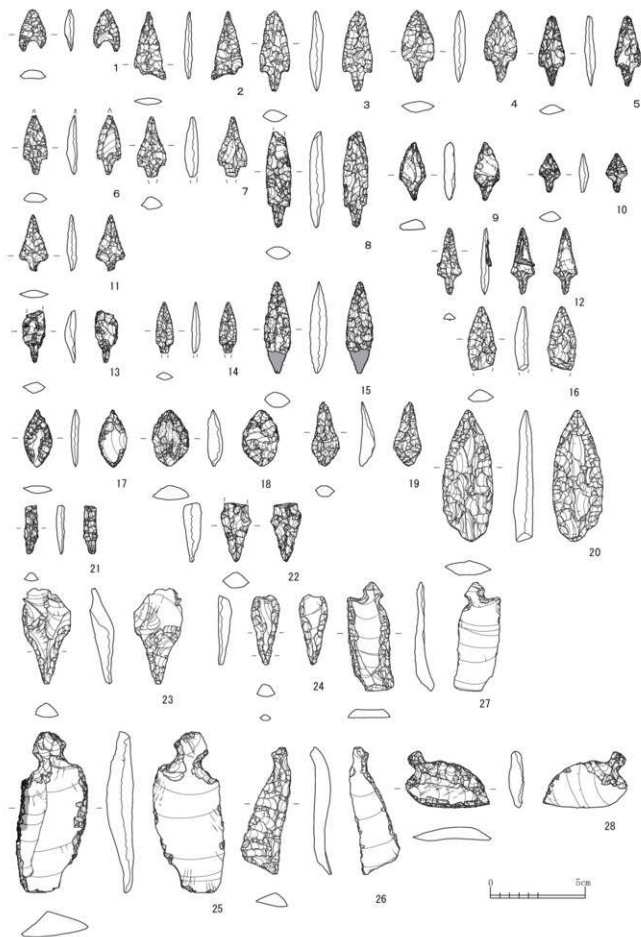


图 1-95 A区遗構外出土石器-1

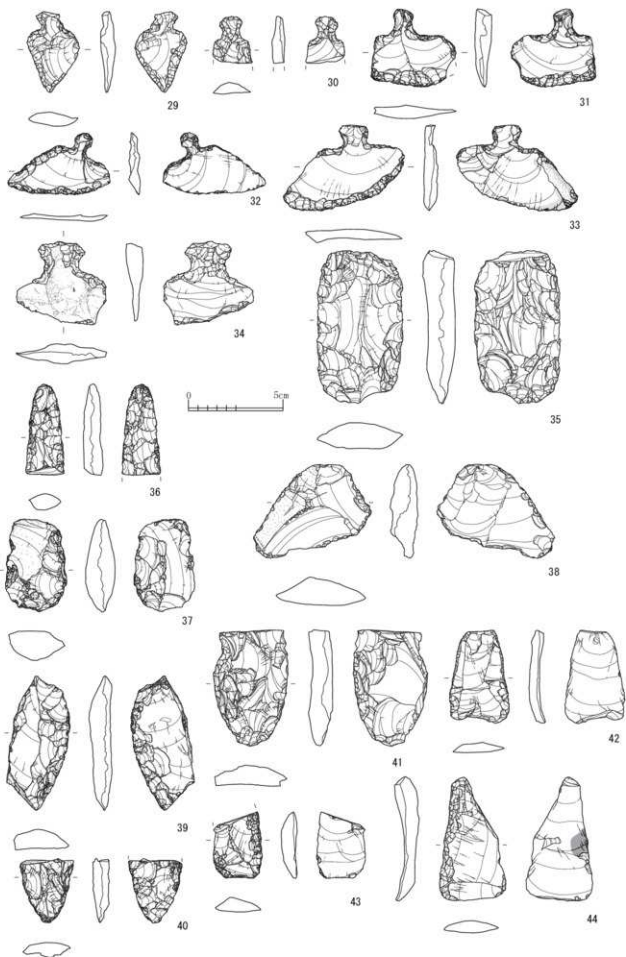


図 1-96 A区遺構外出土石器-2

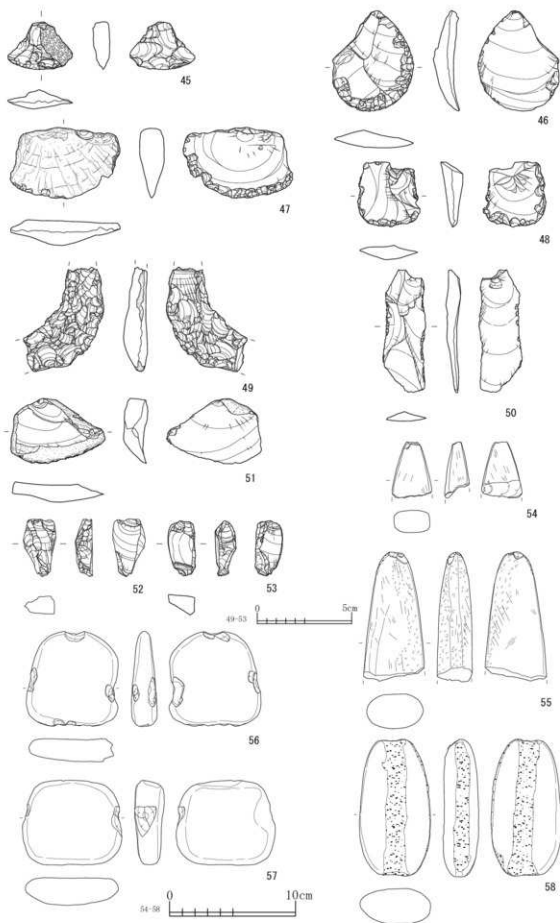


图 1-97 A区遗構外出土石器-3

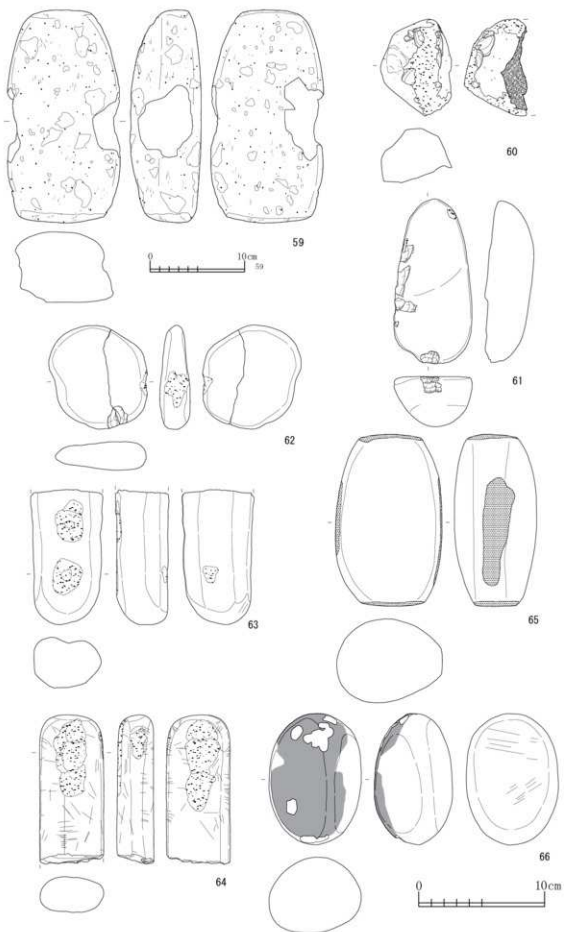


図 1-98 A区遺構外出土石器-4

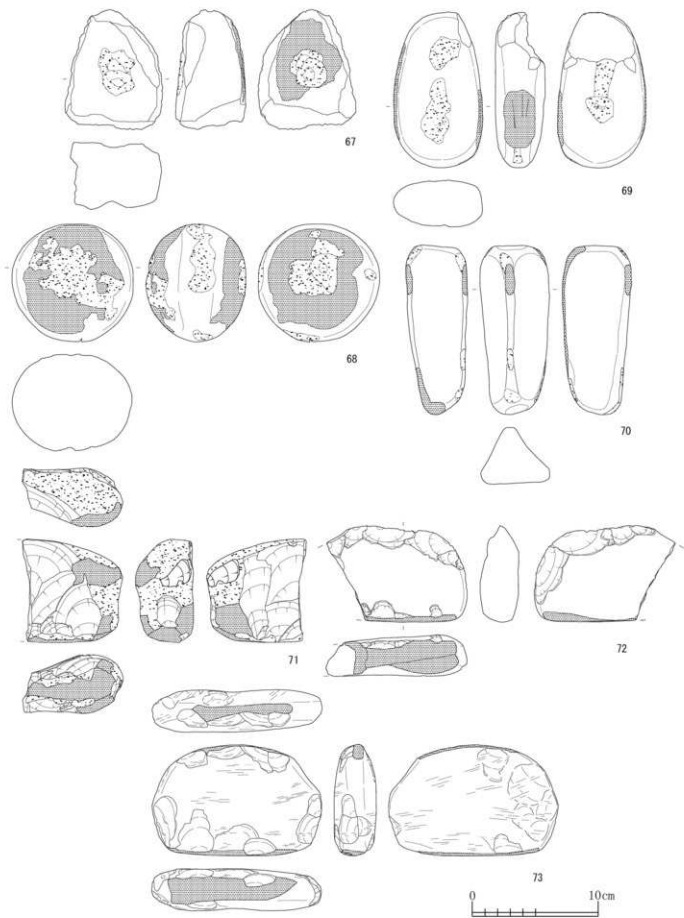


图 1-99 A区遗物出土石器-5

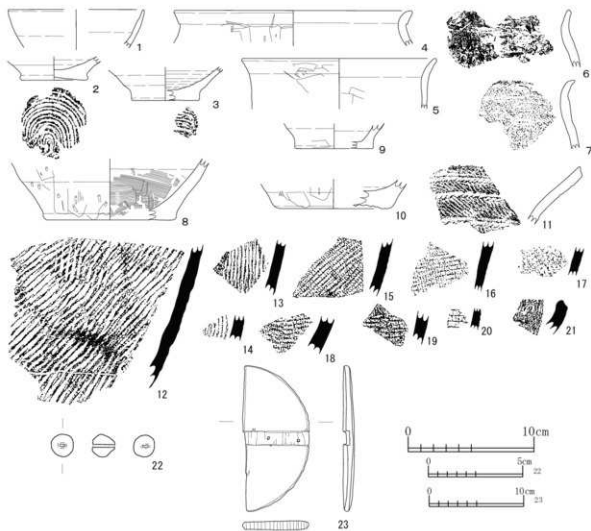


図 1-100 A区遺構外出土土器・土製品・木製品

c mを測る口縁部である。器形は丸みを帯びながら立ち上がり、口縁は若干内湾するものである。2、3は底部である。2は底径5 c mを測る。底部切り離しは左回転系切りである。3は底径(5.1) c mを測る。底部切り離しは回転系切りによるものであるが小破片のため回転方向は不明である。4～7は土師器甕の口縁部である。4は口径(18.7) c mを測り、頸部が大きく屈曲し、口縁が外反する器形を呈する。器面調整は口縁部が内外面ともに横ナデ、胴部は縦方向のナデとなっている。また胴部の調整は頸部で挟れて止まっており、底部から口縁部に向けて調整を行なったものと考えられる。5は口径(15.2) c mを測り、胴部は直線的に立ち上がり口縁部が外反する器形を呈する。器面調整は口縁部が横ナデ、胴部は篋状工具による縦方向のものとなっている。6、7は頸部にくびれを持つ口縁部である。8～10は土師器甕の底部である。外面の調整は8、10は篋削りによるものである。11は椽文土器の口縁部である。大きく外反し口唇が直立気味に立ち上がる。器面には斜位の擦痕、刺突が施されており内面調整は横位のミガキによるもので

ある。12～21は須恵器甕の胴部片である。12～18は木目に直交する刻み目を入れた叩き板を使用し、斜位に叩いて調整を行ったものであるが、12では一部縦位に叩き板を使用しており叩き目痕が交差する箇所も見られる。19、20は木目に平行に刻み目を入れた叩き板による調整が施されている。21は小片のため不明瞭だが甕と考えられる。

#### B. 土製品(図1-100-22)

22は土玉である。貫通孔が見られる。いびつな球状を呈し、直径約1.3 c mを測る。中央に貫通孔を施したものである。

#### C. 木製品(図1-100-23)

時期的に古代より下る資料であるが、遺物包含層から出土した曲物蓋1点を図示した。約半分の残存で、(154.0) × (70.5) × 11.0 mmを測る。中央に溝状の切り込みが施されている。樹種はアスナロである。



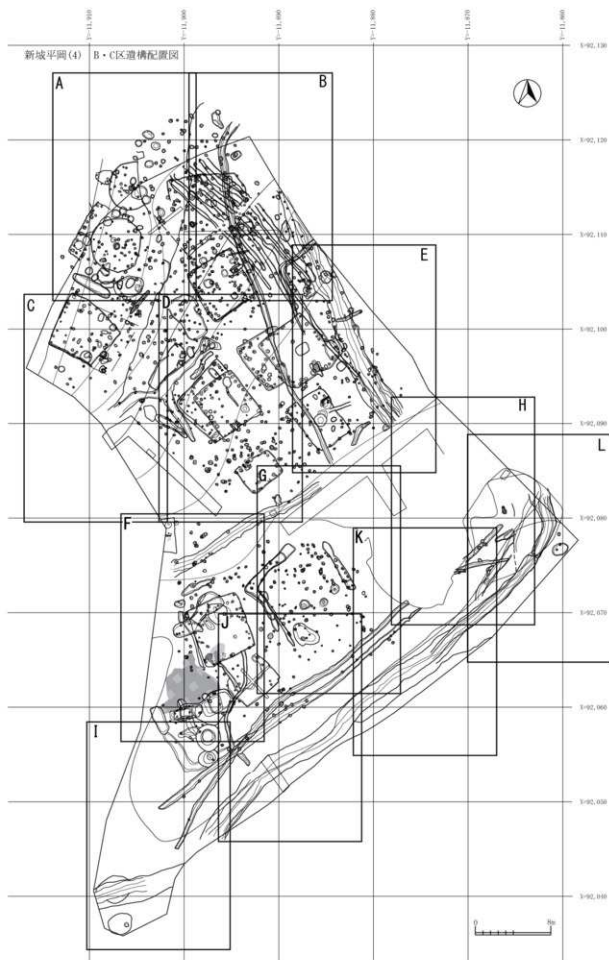


图 1-101 B·C区遺構配置図-1

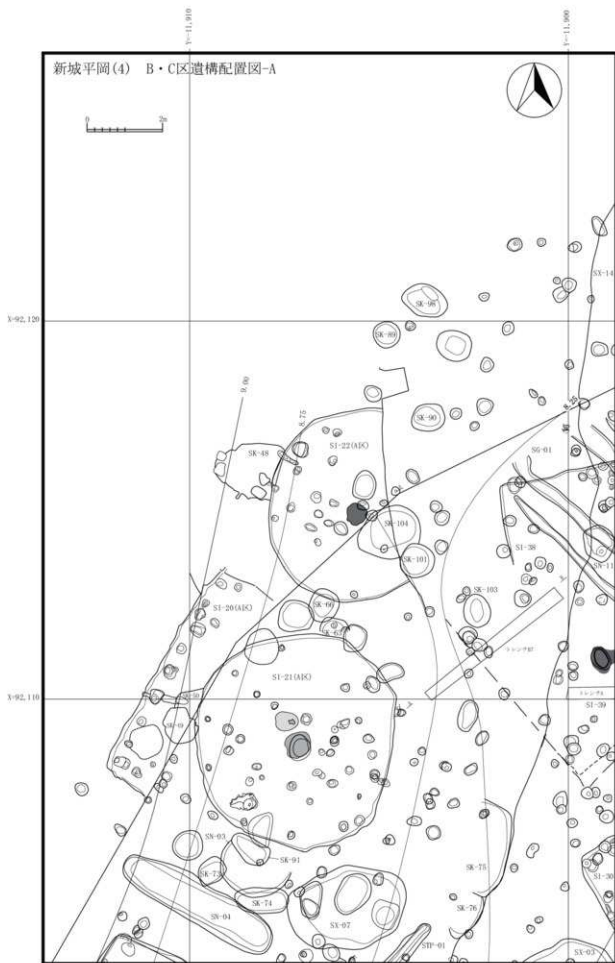
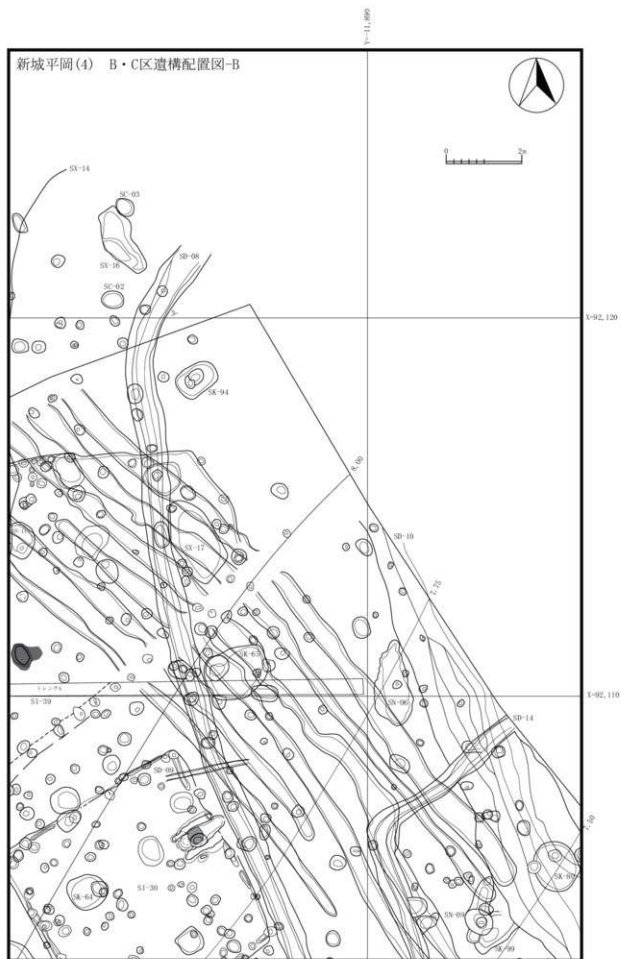


図 1-102 B・C区遺構配置図-2



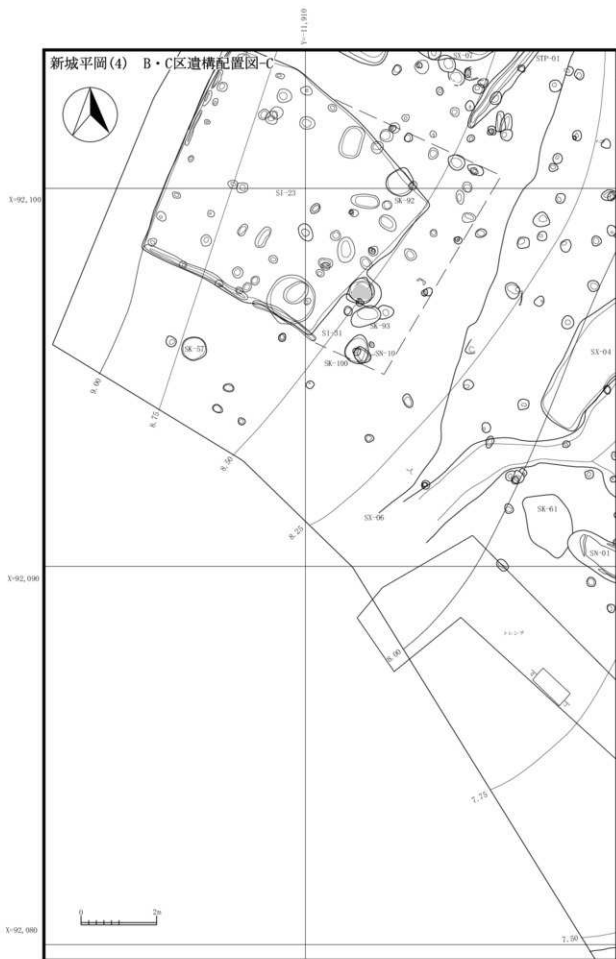


図 1-104 B・C区遺構配置図-4

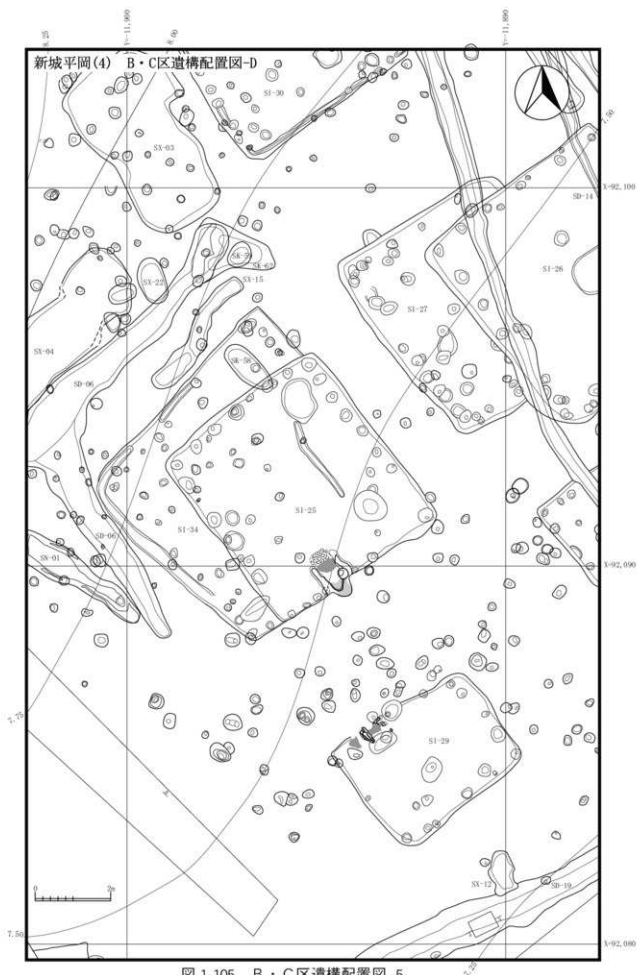


图 1-105 B·C区遺構配置図-5

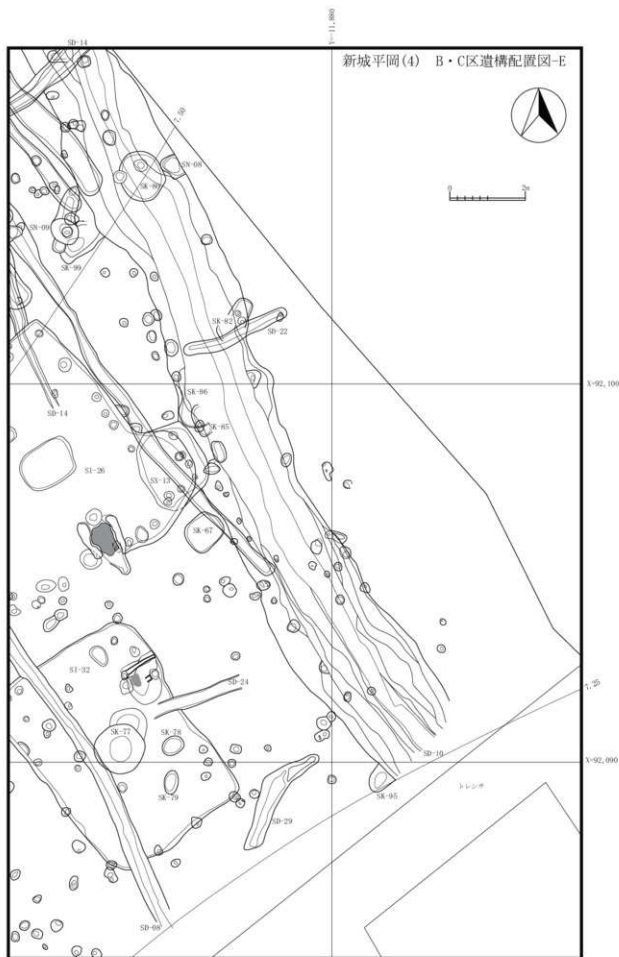


図 1-106 B・C区遺構配置図-6

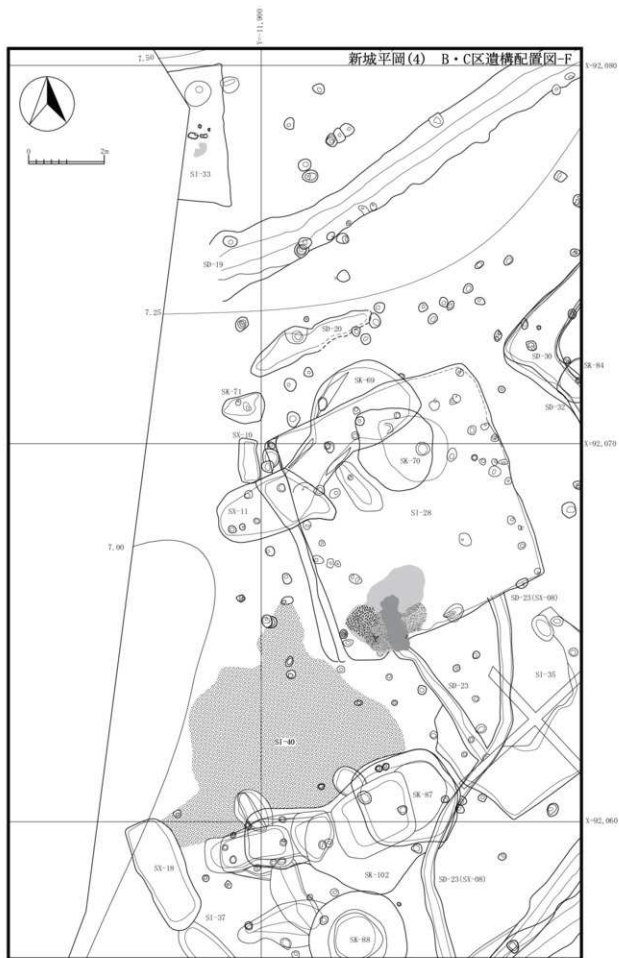


图 1-107 B·C区遺構配置図-7

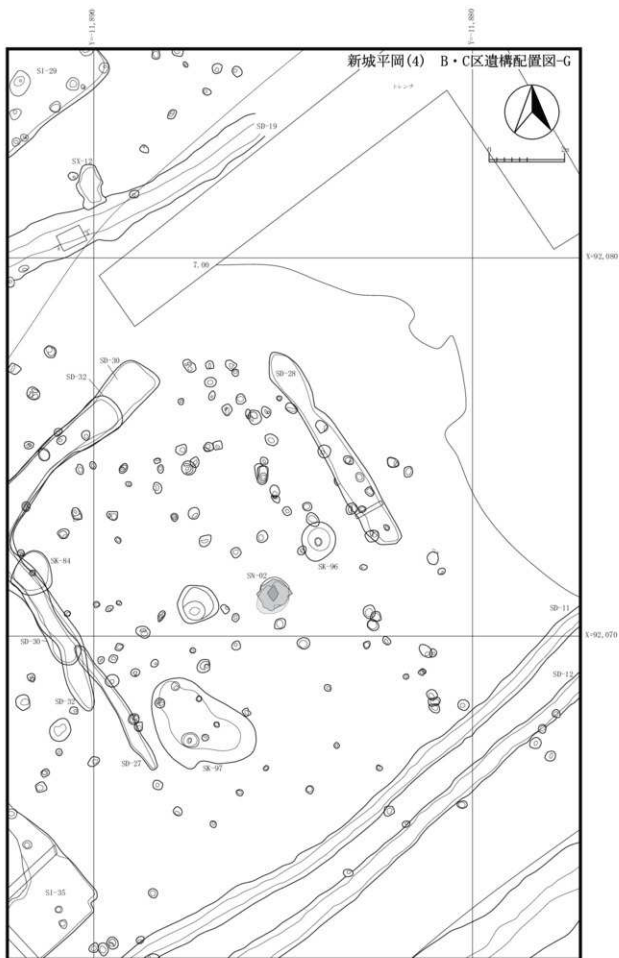


図 1-108 B・C区遺構配置図-8



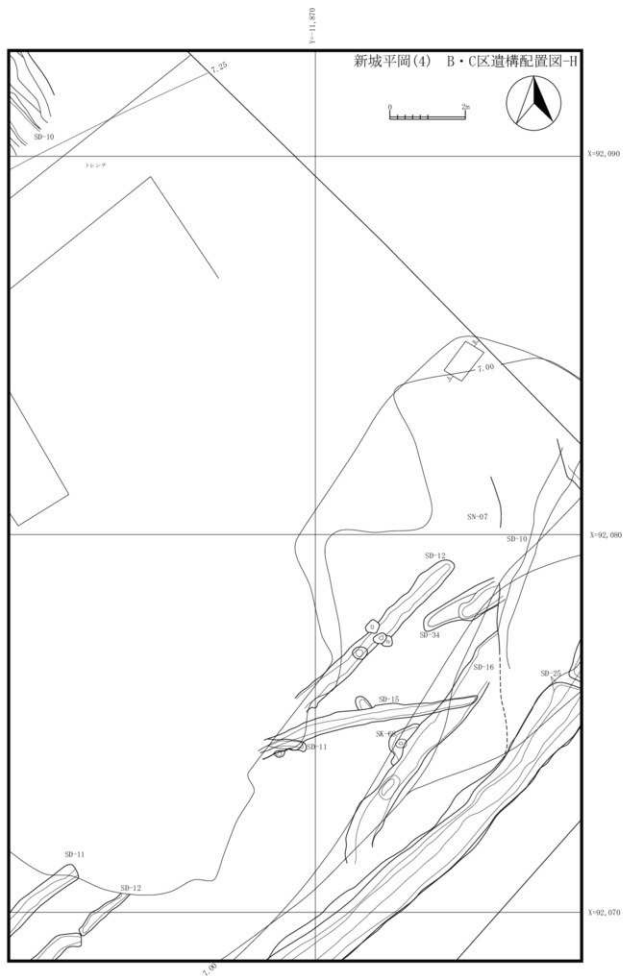


图 1-109 B·C区遺構配置図-9

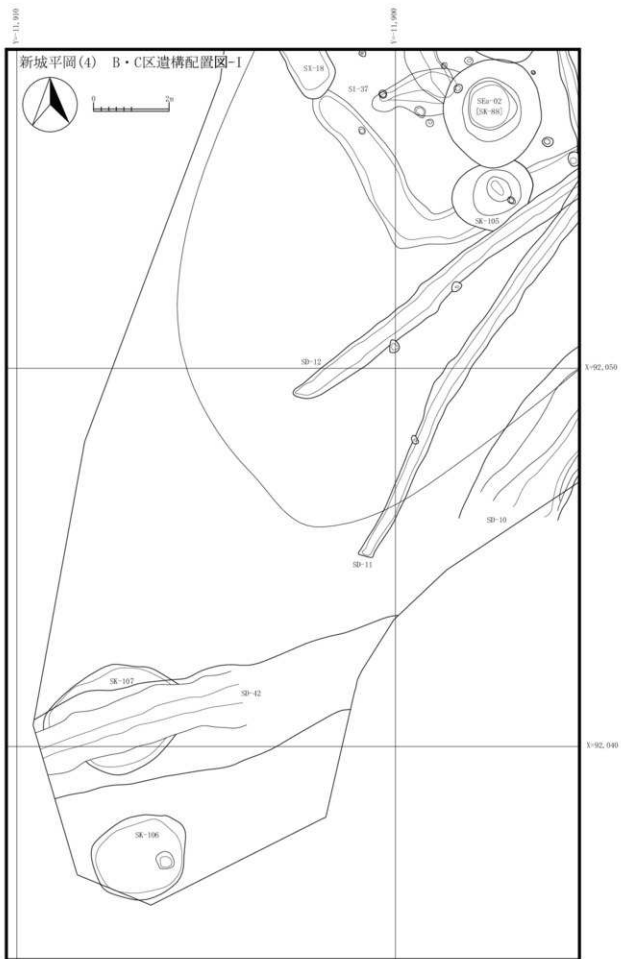


図 1-110 B・C区遺構配置図-10

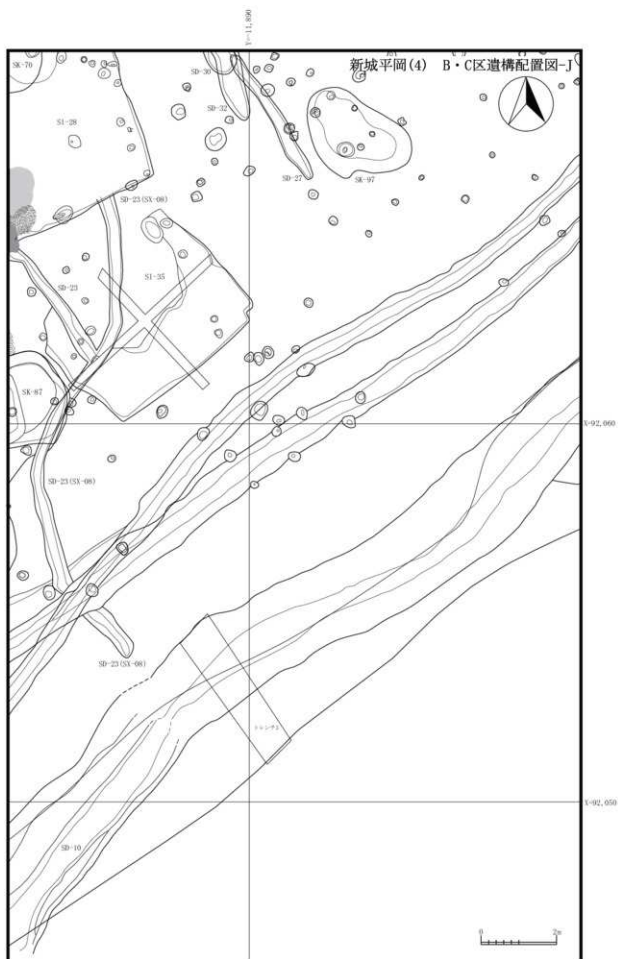


図 1-111 B·C区遺構配置図-11

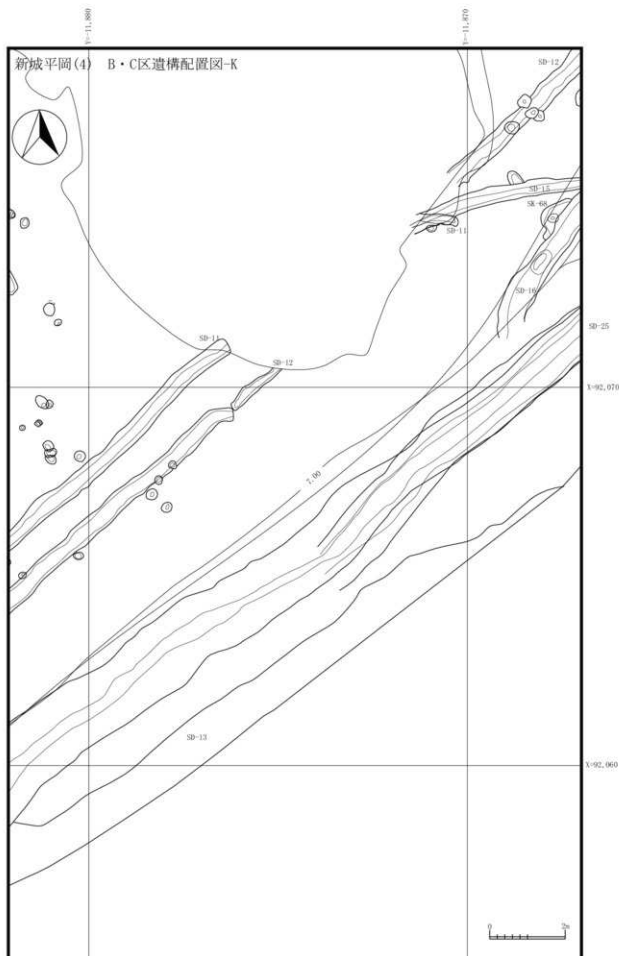


図 1-112 B・C区遺構配置図-12

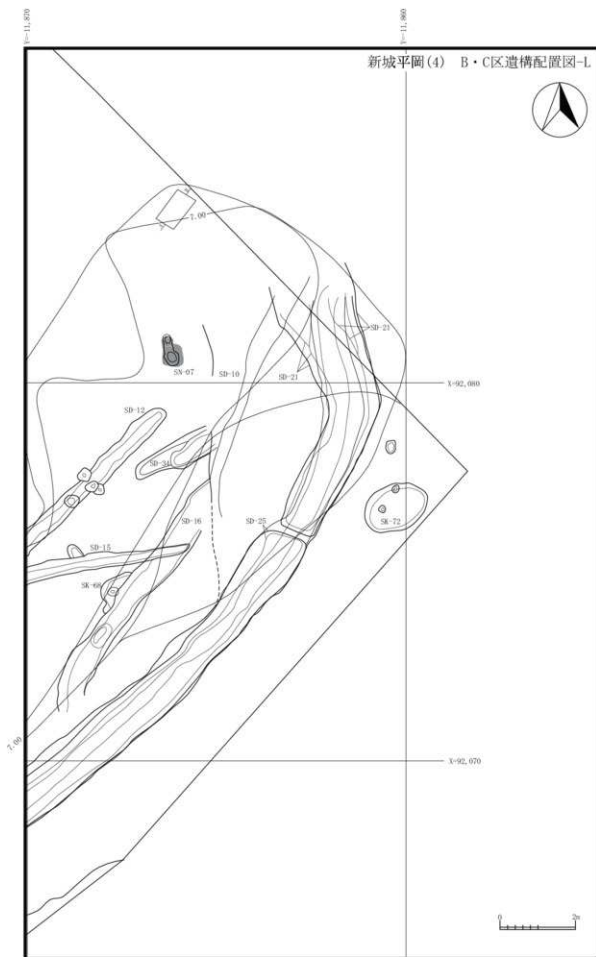


图 1-113 B・C区遺構配置図-13

## 第三章 B・C区

A区の南東側2,320.6㎡の調査区である。調査前はA区側から南東方向にゆるやかに傾斜する地形で畑地として利用されていた。平成15年度に発掘調査が実施されたA区から二年経った平成17年度にA区との境界の一部が別担当者によって調査されており、さらに翌平成18年度には、別担当者によってC区とした南側の地点も含めて全城を精査している。

A区との境界部分の精査では、調査区の拡張に伴い調査漏れの再精査や一部の遺構の形状が広がる成果を得ている。本報告にあたって、A区内で掲載した遺構図の一部はB区の精査の結果を反映した図を掲載している。

また、調査時にはSD-19とした溝跡を境界としてB区とC区を区分して精査していたが、一連の遺構群として認定される遺構が多いため、他の調査区と異なり、B・C区を一括した形で報告する。

基本層序の項目で土層堆積図は掲載したが、B・C区とも上面は砂が堆積している状態で、古代以降の遺構は砂の上面に構築されている。A区では丘陵頂部に近い位置であったため、砂は斜面の落ち際の部分のみで確認される程度で、縄文時代の竪穴住居等の上位に堆積していない状況であった。

B区では斜面の落ち側で角度が変わる境目を検出しており、調査時にSX-06・07・14と名称を付し精査しているが、そのラインより南側では上面が砂の堆積層で古代以降の遺構面、下位が黒色土が堆積し、縄文土器などが含まれる土層が厚く堆積し、砂と黒色土の下との比高差は2mほどになる。

調査にあたってはトレンチで、遺構面の確認を行った上で、上面の砂の上面で精査した後、砂層を重機で除去し、下位の黒色土の面を人力で掘削精査した。なお、X=92,080, Y=-11,875周辺では大規模な土地改変が行われていることが確認されたため、先行してトレンチを掘削し、破壊されていることを確認の上で、重機より土層を除去し、下位の黒色土を精査している。

本調査区では重複する竪穴住居が例えばSI-25とSI-34など離れた番号が付され精査されているケースがある。遺構番号に関しては精査時の番号を優先し、記述に際して一括し、連続して記載する。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴溝構

SI-23・31(図1-114~119, 238, 241~243)

調査区北西隅X=92,100,000, Y=-11,910,000

周辺で検出した。斜面下方に相当する東-南東方向の形状が不鮮明であるが、SI-23と認定した遺構プランの北西・南西壁側には方形のプランを想定させるL字状の壁溝を検出しており、南東側にはSN-10としたカマドの火床面の可能性がある焼土面を検出していることから、古代の竪穴住居であることが考えられる。また、SI-31はSI-23のカマド相当位置よりもさらに南西側に広がるプランで、軸線的にはSI-23の不整形な軸線を修正したような長方形の軸線を呈しており、北東壁には張出状のピットプランも確認されている。北西壁側には壁溝の軸線に平行した内側にPit10-13の小ピットが並んでおり、壁溝の段階と壁柱穴の二段階が存在した可能性がある。なお、同様の柱穴配置についてはSI-34でも確認されており、構築方法に共通したルールが存在した可能性がある。精査において遺構番号が混在している状況ではあるが、メインセクションのE-Fライン状の南東側(SI-23Pit46周辺…Pit46はSN-01よりかなり外側に広がった位置にあり、SN-01とは別段階の柱穴の可能性が高い。)に掘り方があり、破線で表現したラインまで広がる時期があったことが推定される。記録された土層等の情報が少なく、両遺構の新旧関係および変遷過程は不明であるが、竪穴住居跡として最低2時期は存在した可能性が有る。

カマド火床面相当の可能性のあるSI-23SN-01とした焼土面は、N-124°-Eの軸線で、99×74×42cmの土坑状の落ち込みの上面に粘土が貼られ、その上位に炭化粒混じりの焼土層が形成されている。

土坑は、SI-23・31とも一つずつ、柱穴はSI-23扱いでPit55、SI-31扱いでPit7まで付され精査されているが、厳密にそれぞれの遺構に帰属していたとは認定できない資料も含まれる。前述の壁溝と平行したピットなど、変遷を示す資料以外にSI-31のPit1としたピットからは寛永通寶が出土しており、明らかに、本遺構には帰属せず、後世に帰属すると考えられる遺構が含まれる。

出土遺物もSI-23・31とも多量の土器・石器等が出土して出土位置の記録がなされているが、ほとんどが縄文時代に帰属する資料で、遺構外出土資料と同様に縄文時代前・中・後期の資料が混在して出土している。これは遺構が構築されている基盤が既に黒色土上の部分が含まれる為、構築された遺構の前段階に廃棄された遺物が遺構内出土資料として取り扱われたと考えられる。

SI-23·31



X= 92106.664  
Y=11910.475

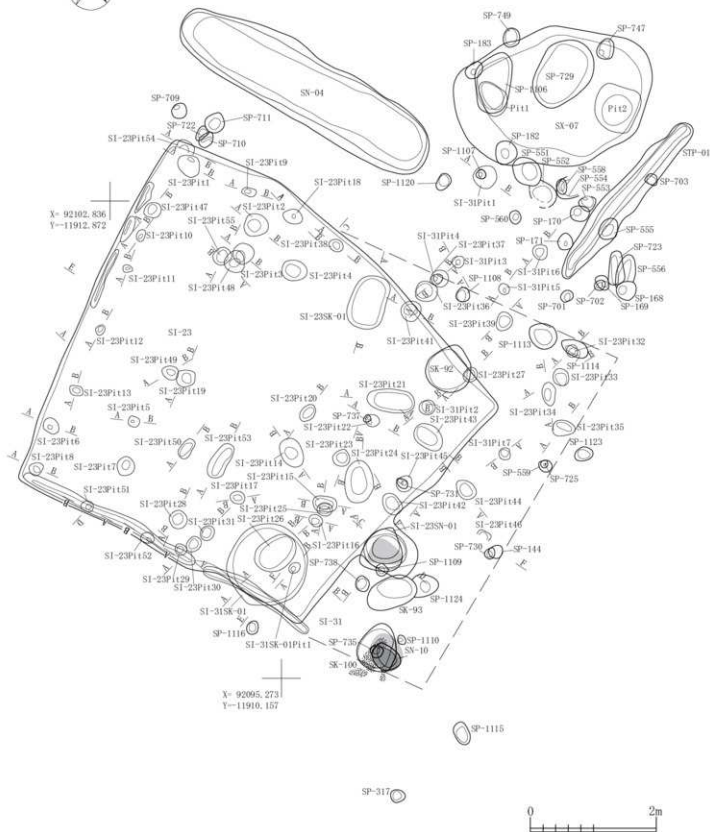


图 1-114 B·C区 SI-23·31-1





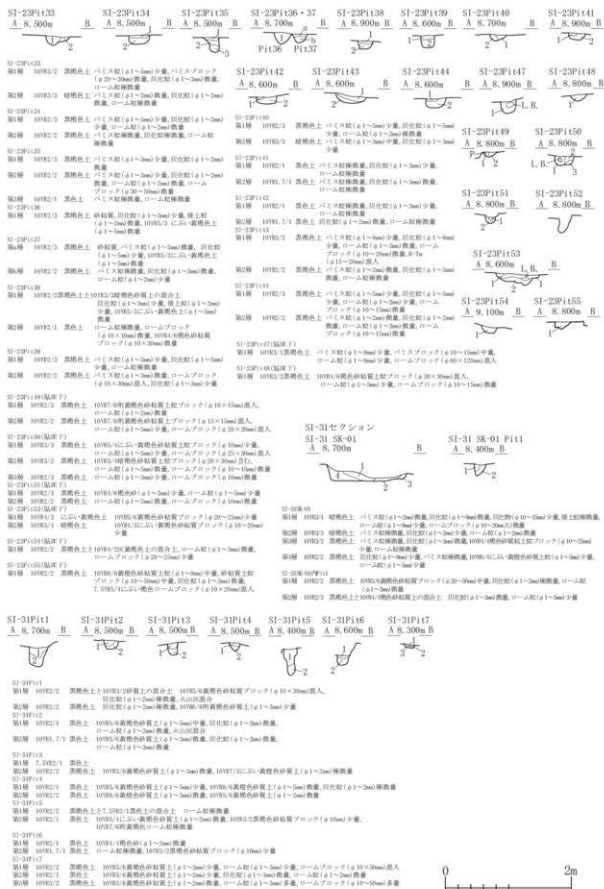
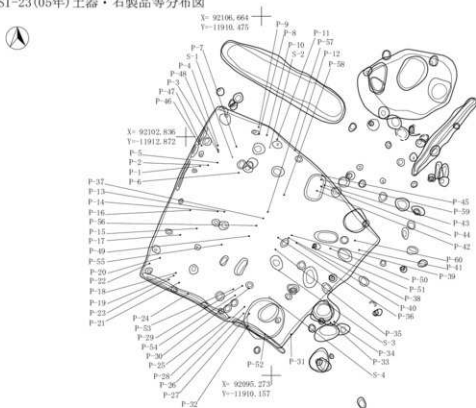


図 1-116 B・C区 SI-23・31-3

SI-23(05年)土器・石製品等分布図



SI-23(06年)土器・石製品等分布図

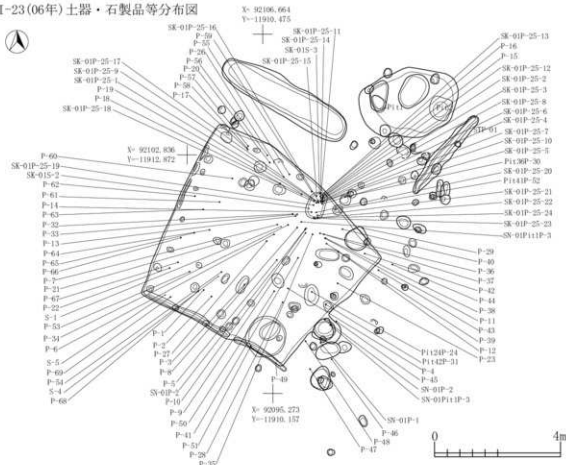


図 1-117 B・C区SI-23・31-4

SI-23SN-01

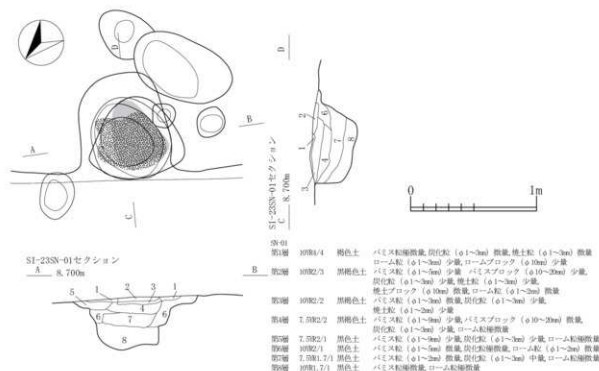


図 1-118 B・C区 SI-23・31-5

S I 2 5・3 4 (図 1-120-126, 239)

調査区中央からやや北寄り、X=92,092,000, Y=11,897,000付近から検出した。S I 2 5と3 4の新旧関係はS I 2 5>S I 3 4の関係である。本遺構の斜面上方にはSD-0 6、SX-1 5とした溝状の施設が巡っており(図 1-1 2 5)、斜面上方から流れる雨水の排水設備等の可能性がある。

S I 2 5は、平面形は長方形を呈し、5 7 3×5 0 8×3 3 cmを測る。主軸方位はN-1 4 5°-Eである。S I 3 4の南東壁に軸線をあわせているが、他の壁面の軸線は主軸を南側に振り構築される、S I 3 4に比べ一回り小型化している。堆積土は2 3層に分層した。掘り方充填及び貼床は第2 0-2 3層で、上面は焼失後の人為的埋戻しの要因が強い。柱穴配置は壁際付近に接した形で配置されており、本遺構は焼失住居であるが、P i t 1・7・9・1 0・1 2・1 4・1 5・1 8・1 9・2 1・2 2・2 4・2 5・2 6の壁柱穴から炭化材を検出しており、一部の柱穴からは炭化した柱が根元に突き刺さったままのものがある。残存していた炭化材は直径1 0 cm程度の細身の材が主体であった。また、床面には炭化物を検出しているが、東側のSK-0 1-P i t 1 3周辺からは多量の炭化米を検出している。中央から北東側にはSD-0 1とした浅い溝跡が確認されているが、本遺構には壁溝は構築されておらず、重複している前段のS I 3 4には

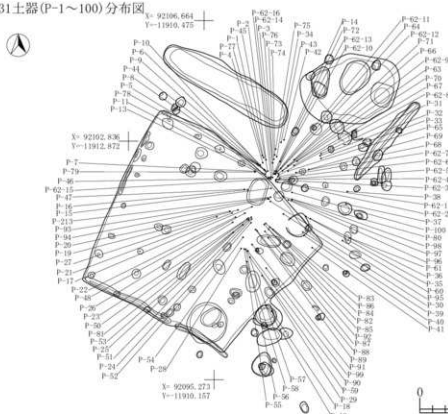
壁溝に伴っており、焼失面より下から検出していることから、基部の一部が残存した可能性が否定できない。ただ、位置的にS I 3 4の壁面より内側に入った位置で、S I 3 4の北東壁の残存部からは壁柱穴しか検出していないことから、S I 2 5内の溝跡のまま報告することとした。掘り方は北西・南西・南東の壁際をコの字状に掘削している。

カマドは南東壁3の位置から検出しており、軸部幅9 9.5 cm、煙道長4 0.2 cmを測る。構造は半地下式で、煙道が短く、芯材は用いられず、粘土のみによる構築で支脚も出土していない。

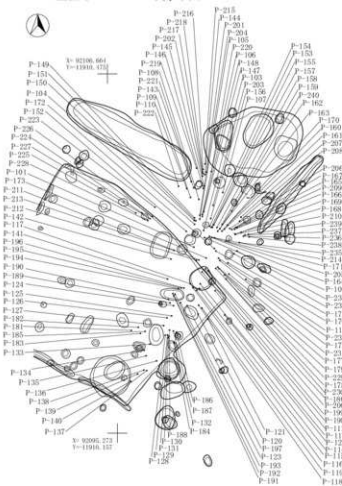
出土遺物はカマド、カマド設置壁周辺にやや密集した傾向はあるが、ほぼ万遍なく出土している。P i t 2 6周辺およびP i t 2 7上面から漆膜が出土しているが、いずれも脆弱で図化に至っていない。W-2の一部の破片は外面が黒漆、内面が赤漆の碗の口縁部破片も一部含まれる。一部の資料は器壁が炭化しており、本遺構の焼失時に炭化したものと推定される。

図化可能な資料は図 1-2 3 9 上に遺構間接合資料も含め1 5点図示した。縄文土器などの一部混入も認められるが、古代の資料は破片資料が多く、食膳具の出土が無く、煮炊具の残主体で、土師器と捺文土器がほぼ半々の出土状況で、土師器は3 4のように短頸甕のタイプやSK-0 1とS I 2 7覆土と接合した4 7のように広口壺状の形態がある。4 2は棒状支脚である。

SI-31土器(P-1~100)分布図



SI-31土器(P-101~239)分布図



SI-31石器・SI-31PitI古銭分布図

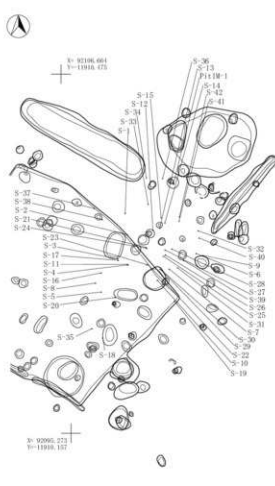


図 1-119 B・C区SI-23・31-6

SI-25・34

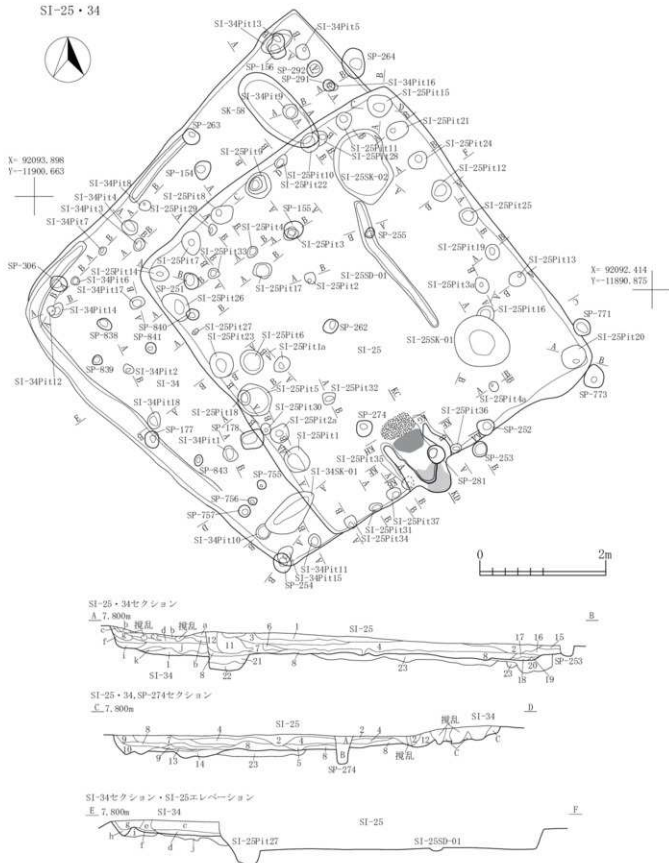


図 1-120 B・C区 SI-25・34-1



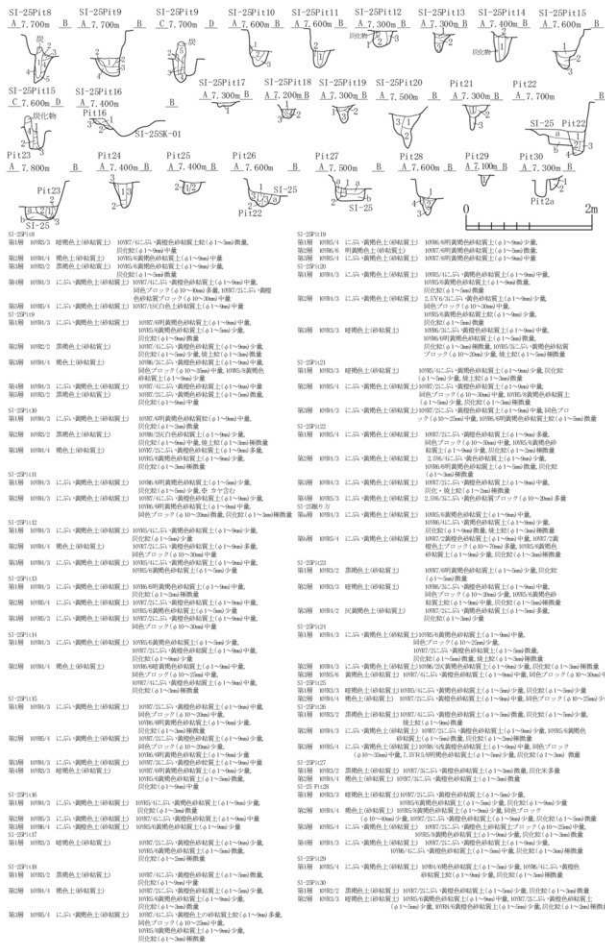


図 1-122 B・C区 SI-25・34-3

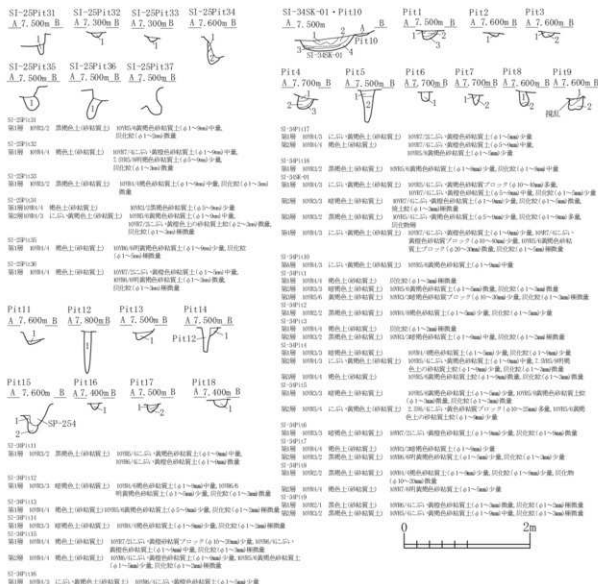


図 1-123 B・C区 SI-25・34-3

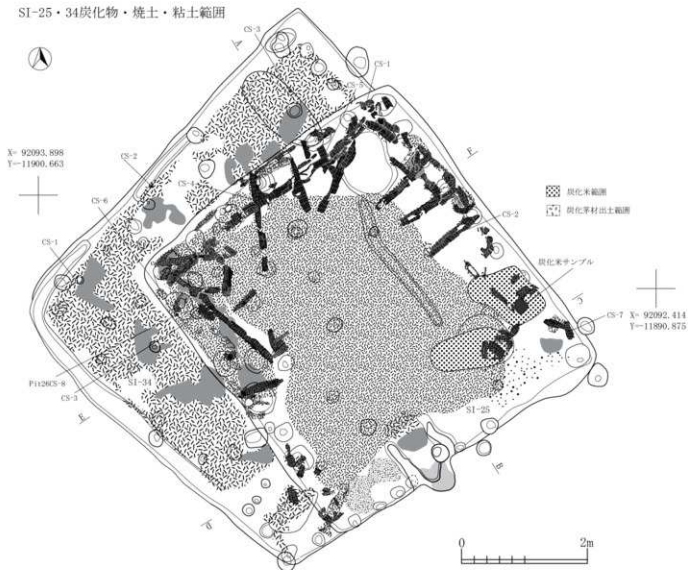
SI-3-4は、SI-2-5に切られている為、東-南壁の一部が欠損しているが、平面形は台形を呈したのと思われる、660×621×22cmを測る。主軸方位はカマド設置部分が欠損している為、南東壁側設置を前提としたが、N-131°-Eである。SI-2-5と同様に本遺構も焼失しており、図上では材の描きこみが少なく、炭化物の検出程度の印象を与えるが、実際はSI-2-5より炭化材の検出量が多く床面直上に炭化材が堆積し、焼土化した部分も多く検出している。堆積層は13層分層したが、焼失に伴い炭化物・材が堆積した後、一気に埋め戻された堆積状況を呈している。

SI-2-5の重複部分でカマドなど滅失ものが多いが、北西・南西壁には壁溝が系統的に掘削され、また、前述のSI-2-5SD-01とした溝跡が本遺構の壁溝であった可能性がある。壁溝は焼失の

影響を受けておらず、一部の地点では埋没した状況で別の壁面が形成され、その内側が炭化している状況である。北西・南西壁側では壁溝の内側にSP-756・839・843、Pit3・4・6・7・8・12・14・18などが壁柱穴として機能した可能性が考えられ、壁溝の埋没状況と対応している。同様に北東壁側ではSP-291・292、Pit5・16、南東壁側ではPit11・15が壁柱穴であった可能性があり、本遺構は壁溝使用の段階から壁柱穴使用に変遷している。出土遺物は破片主体のまばらな出土で、図化したのは図1-239の48と49のみで48は重複するSI-2-5出土破片との接合関係がある。49はSK-01出土の擦土器で、薄手の器底ではあるが、口縁上端をやや厚ませ、口唇部は沈線状に凹ませている。頸部側は格子文が施されている。



SI-25・34炭化物・焼土・粘土範囲



SI-25・34掘り方

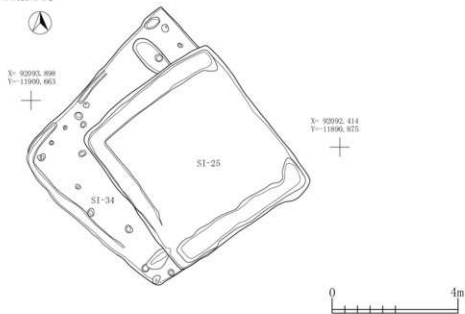
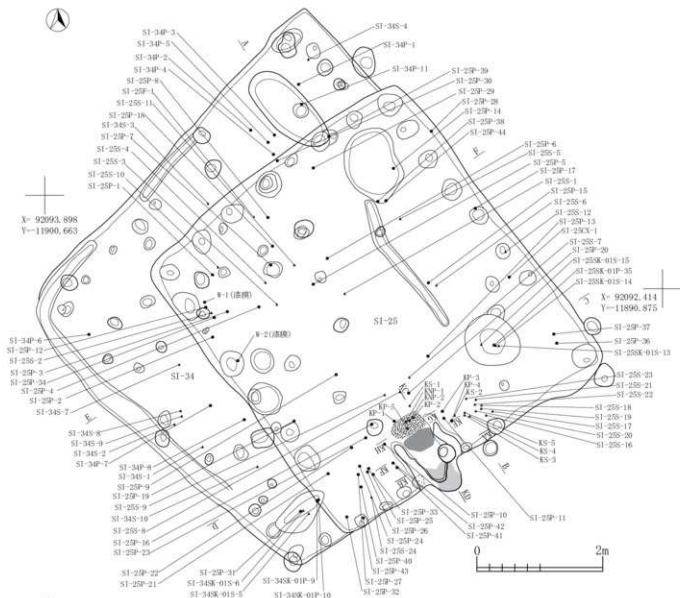


図 1-124 B・C区 SI-25・34-4

SI-25・34出土遺物位置図



SI-25・34外周関連施設

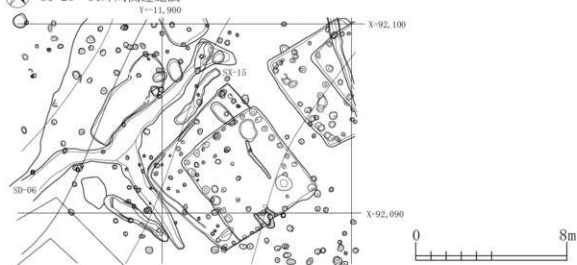
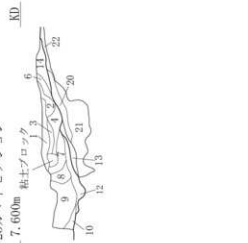
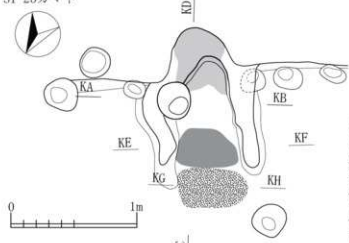
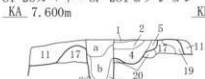


図 1-125 B・C区SI-25・34-5

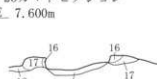
SI-25カマド



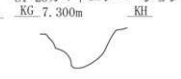
SI-25カマド・SP-281セクション



SI-25カマドセクション

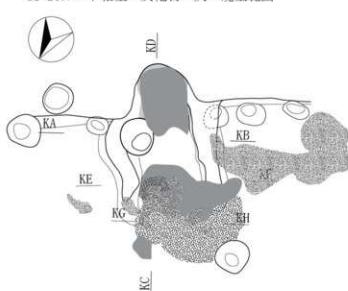


SI-25カマドエレベーション



- SI-25 カマド
- 第1層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)極微量
  - 第2層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~9mm)中量,10YR8.2黄褐色粘土ブロック(φ10~30mm)少量,炭化灰(φ1~9mm)微量,焼土粒(φ1~9mm)少量
  - 第3層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)中量,10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)微量
  - 第4層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
  - 第5層 10YR3.3 暗褐色土(粘粘質土) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)少量,炭化灰(φ1~6mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)微量
  - 第6層 7.0YR3.4 暗褐色土(粘粘質土) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~5mm)少量,10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~2mm)微量,炭化灰(φ1~2mm)微量,焼土粒(φ1~9mm)中量
  - 第7層 10YR3.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR4.4褐色粘砂質土(φ1~9mm)中量,10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
  - 第8層 10YR3.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR4.4褐色粘砂質土(φ1~9mm)微量,炭化灰(φ1~9mm)微量,焼土粒(φ1~2mm)極微量
  - 第9層 10YR3.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)微量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
  - 第10層 10YR2.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR4.4褐色粘砂質土(φ1~9mm)微量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量
  - 第11層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR4.4にごい・黄褐色土粒(φ1~9mm)中量,同色ブロック(φ10~20mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)微量
  - 第12層 10YR2.7 黒色土(黒色灰層) 7.0YR4.4褐色粘砂質土(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~2mm)中量,焼土粒(φ1~9mm)少量,炭酸層
  - 第13層 7.0YR3.3 暗褐色土(粘粘質土) (灰化層) 2.5Y7.6黄褐色粘土粒(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~2mm)中量,炭化灰(φ1~2mm)極微量
  - 第14層 7.0YR3.4 暗褐色土(粘粘質土) 2.5Y7.6黄褐色粘土粒(φ1~5mm)少量,10YR5.4にごい・黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)多量
  - 第15層 10YR3.3 暗褐色土(粘粘質土) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~3mm)微量,焼土粒(φ1~3~5mm)極微量
  - 第16層 7.0YR4.2 褐色土(粘粘質土) (カマド跡) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ2~3mm)微量,焼土粒(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)微量
  - 第17層 10YR5.4 にごい・黄褐色土(砂粘質土) (カマド跡) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)微量,炭化灰(φ1~3mm)微量,焼土粒(φ1~3mm)微量
  - 第18層 10YR5.6 暗褐色土(粘粘質土) (カマド跡) 2.5Y7.4黄褐色粘土ブロック(φ10~20mm)中量,炭化灰(φ1~9mm)微量,焼土粒(φ1~3mm)微量
  - 第19層 10YR3.3 暗褐色土(粘粘質土) (カマド跡) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)微量,炭化灰(φ1~2mm)極微量
  - 第20層 10YR4.4 褐色土(粘粘質土) (掘り方) 2.5Y7.4黄褐色粘砂質土(φ1~9mm)中量,10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~5mm)少量,炭化灰(φ1~2mm)極微量
  - 第21層 10YR4.4 褐色土(粘粘質土) (掘り方) 10YR6.0黄褐色粘砂質土(φ1~9mm)中量,10YR7.2C.2.5.5黄褐色粘砂質土(φ5~9mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)微量
  - 第22層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) (掘り方) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ5~9mm)少量,炭化灰(φ1~2mm)微量
  - SP-281
  - 第1層 10YR2.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR5.4にごい・黄褐色粘砂質ブロック(φ10~80mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)極微量,焼土粒(φ1~9mm)極微量
  - 第2層 10YR2.2 暗褐色土(粘粘質土) 10YR8.2黄褐色粘土粒(φ1~9mm)微量,炭化灰(φ1~9mm)微量,焼土粒(φ1~2mm)極微量
  - 第3層 10YR4.3 にごい・黄褐色土(砂粘質土) 10YR5.6黄褐色粘砂質土(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~5mm)少量

SI-25カマド粘土・炭化物・灰・焼土範囲



SI-25カマド掘り方

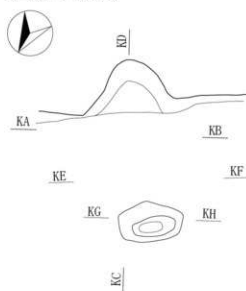


図 1-126 B・C区 SI-25・34-6

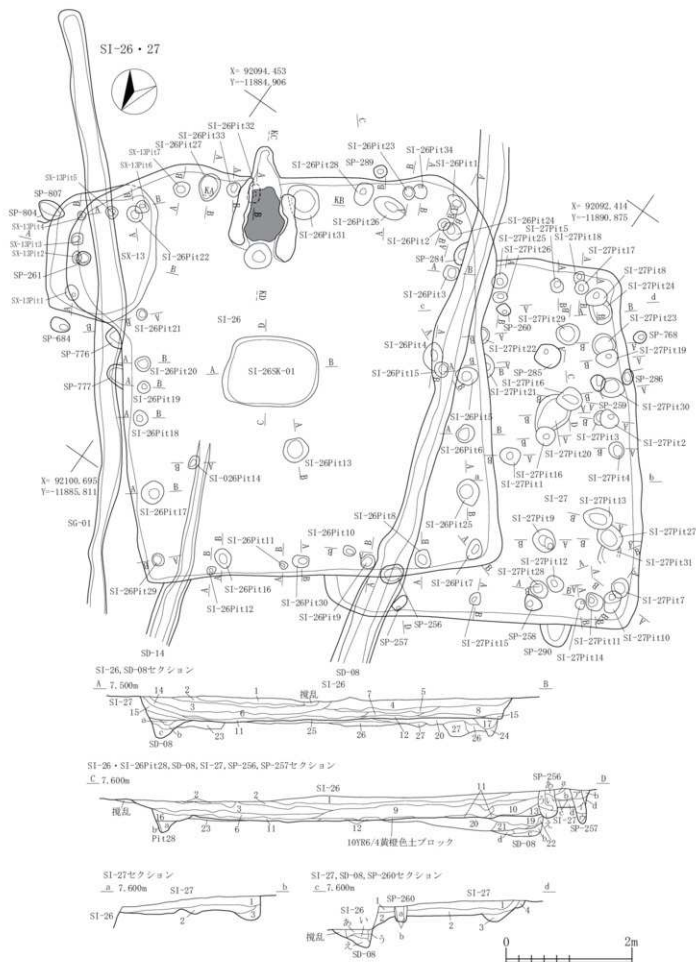


図 1-127 B・C区 SI-26・27-1





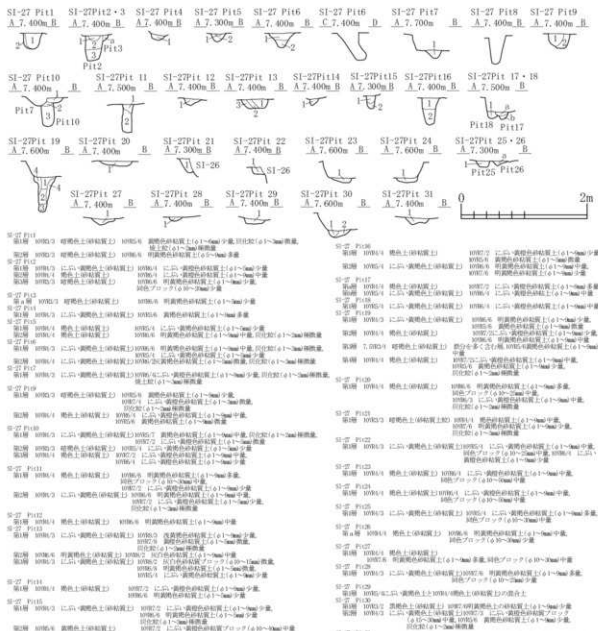


図 1-130 B・C区 SI-26・27-4

S I - 2 6 ・ 2 7 ( 図 1 - 1 2 7 - 1 3 3, 2 3 9 ・ 2 4 0 )

調査区中央からやや北寄り、X = 92,097,000, Y = 11,890,000 付近から検出した。S I - 2 6 と 2 7 の新旧関係は S I - 2 6 > S I - 2 7 の関係である。

S I - 2 6 は、平面形は長方形を呈し、6 5 5 × 5 7 6 × 4 3 c m を測る。主軸方位は N - 1 4 9 ° - E である。東壁の南隅に調査時に S X - 1 3 とした幅 2 0 0 c m の張出部があり、東壁からは 1 0 6 c m 張り出している。堆積層は掘り方充填・粘土を含め 2 7 層分層した。床面には炭化粒・物や焼土粒が堆積している箇所があるが、本遺構内の焼成を証明するものは無い。また、掘り方は、溝跡 S D - 0 8 ・ 1 4 を切る形で構築されており、溝跡周辺は掘り方がやや深い掘り込みであるが、その他の S I

- 2 7 側の北壁・西壁と南壁の約半分の壁跡と S X - 1 3 の張出部分は浅く掘りこまれている。

竪穴中央に長方形の土坑 S K - 0 1 が掘りこまれている。規模は 1 5 0 × 1 1 1 × 2 2 c m を測る。底面直上に堆積する第 5 層は炭化物層であるが、焼土ブロックや灰などとともに骨片を検出した。ピットは張出部分を含め 4 1 基検出したが、ほとんどが壁柱穴である。張出部分はやや混み合った配置状況であるが、北側の一部が開いており、出入口の可能性もある。

カマドは南 2 の位置から検出した。袖部幅 1 0 5 c m、煙道長 4 7 c m を測る。構造は半地下式で、壁跡は竪穴の壁に沿う形で立ち上がり、竪穴外は浅い凹凸のある形状で立ち上がっている。袖部は基部

SI-26・27出土遺物位置図

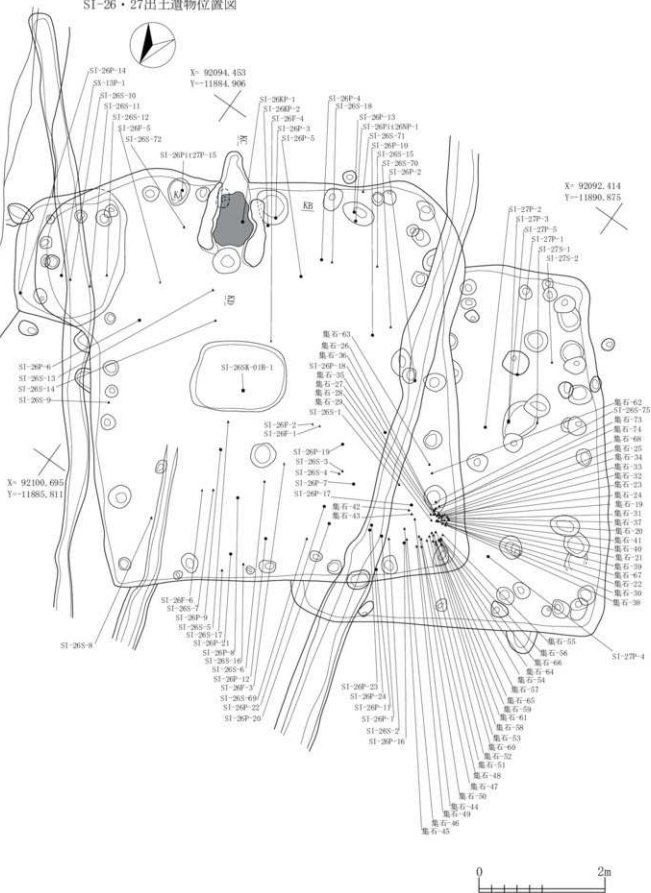
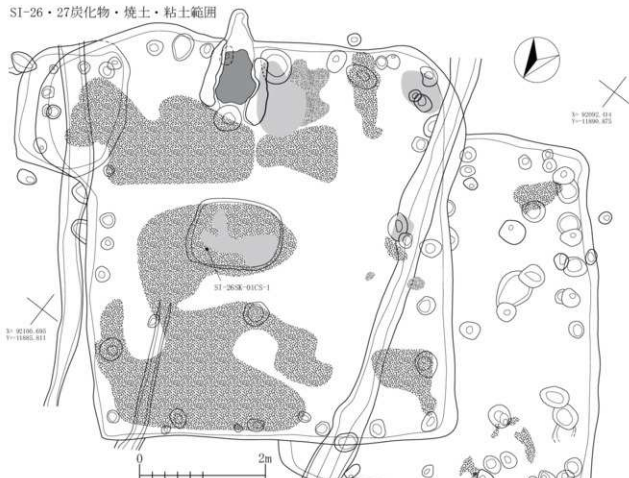


図 1-131 B・C区 SI-26・27-5



SI-26・27炭化物・焼土・粘土範囲



SI-26・27掘り方

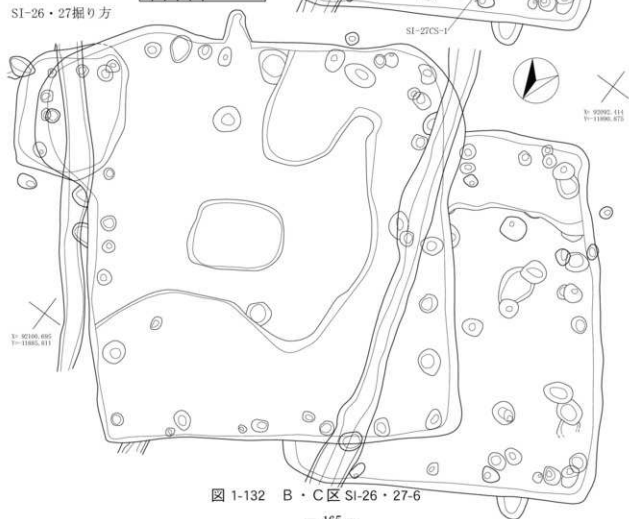


図 1-132 B・C区 SI-26・27-6



のみの残存で、芯材や支脚は検出していない。

出土遺物はSX-13出土扱いの資料も含め図1-239・240上に22点図示した。破片資料中心で、SX-13床面とSI-26の貼床部分から須恵器製破片が出土している。土師器は短頸の煮炊具主体で、覆土からは52のような広口壺状の器形も出土している。擦文土器はPit 27から綾杉文が施された甕が出土している。また、床面直上から57-66に図示した碁石状の扁平気味の円環がまるとして出土している。

SI-27は、SI-26に切られている為詳細は不明であるが、残存部の平面形は長方形を呈し、576×494×266cmを測る。主軸方位については重複関係のあるSI-26と主軸がそのまま変遷している場合N-153°-Eで、4°程軸線を変えただけとなるが、周辺の遺構配置状況を見ると、本遺構は北側にSI-30、南側にSI-32と並んだ位置関係にあり、いずれも北東壁側にカマドが設置されている。特にSI-32は長方形でありながら長軸側の北東壁にカマド設置されていることなど、本遺構と比較できる要素がある。この場合だと主軸はN-64°-Eとなる。

掘り方は、南側のみで検出で、堆積土は一部地点で土色に変化があるが、4層に分層した。ブロック混じりの埋戻しの要因が強い堆積土である。ピットは31基検出したが、混み合った配置で、近接した位置に重複関係があることから建替が生じている可能性がある。浅い柱穴の多いPit 2・8・10・11・16・19は深さがある柱穴で、Pit 19は深さが56cmある。カマドは残存部からは検出しておらず、出土物についてもSI-25と絶号した図1-239-47で図示した広口壺状の土師器以外は図化可能な資料は無かった。

#### SI-28 (図1-134-138, 240)

調査区中央からやや南西寄りX=92,068,000, Y=-11,896,000付近から検出した。平面形は長方形で、642×572×216cmを測る。主軸方位はN-159°-Eである。SK-69・70、SX-11と重複しており、SK-69・SX-11<SI-28<SK-70の関係である。また、南壁2と4の位置にSD-23とした溝跡が接しており、土層の新旧関係は不明瞭であるが、堅穴内を横断したり、北側の地点から溝の延長部の検出が認められていないことやカマド設置箇所と溝の分岐の関連等も含めると、本遺構の排水溝等の機能の可能性がSD-23にはある。南壁は壁が二段階変遷しており、前段階の方が外側に広がっていて、最終段階の壁の方が内側に入り込んでいる。前段階の壁面

の幅は622cmを測り、方形気味の形状である。(図上では最終段階をSI-28a、前段階をSI-28bと記したものがあ)

堆積土は11層に分層し、ブロック混じりの人為的な堆積状況を示す。本遺構中には第一層層の層、SK-01やピットの堆積土中にもB-Tm火山灰が介在しているが、出土遺物を確認するとB-Tm降灰後の時代の遺物がほとんどで、二次的な要因が強い状況である。掘り方は北東壁際に幅広く浅い掘り込みがなされている。ピットは37基検出したが、主柱穴は不明瞭ではあるが、Pit 1・11・24・28の可能性が高い。壁柱穴も併うが間隔があり、小規模なものが多い。

カマドは、南壁4の位置から基部を検出している。掘り方としてSD-23に接する形で溝状の掘り込みがあり、この溝状の掘り方はSI-30のカマドに共通する。前底部は破壊・散乱した状況で検出しており、焼土化した範囲と粘土範囲が確認され、把手付土器等が火床面相当位置から出土している。煙道側の堅穴壁際は焼土化しているが、煙道はSD-23との重複部分の一部までが確認されており、煙道長は60cmである。

出土遺物は、図1-240に5点図示したが、貼床出土の資料はB-Tm火山灰降灰前後の帰属資料として妥当と考えられる74の土師器製の出土があるが、カマド相当のSN-01出土の把手付土器である76やPit 29出土の土師器小甕も短頸のタイプで、Pit 24の擦文土器なども含めると時期的下った段階の資料中心である。

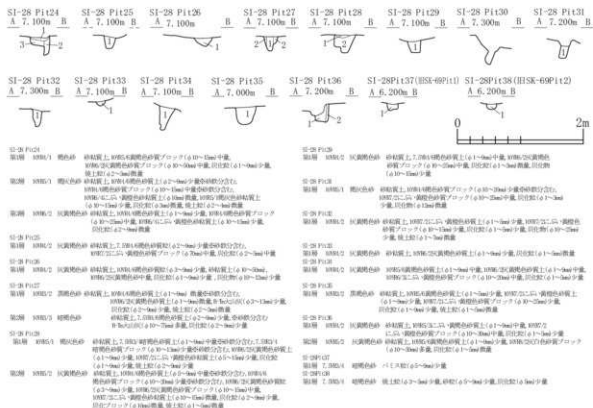
#### SI-29 (図1-139-141, 240)

調査区中央92,084,500, Y=-11,892,000付近から検出した。平面形は長方形で、418×338×166cmを測る。主軸方位はN-36°-Wである。掘り方は斜面下方に相当する堅穴中央より南側の部分に浅い掘り込みがあり、南東壁が若干深めの掘り込みである。堆積土は掘り方充填土を含め18層に分層し第1-3層が廃絶後の堆積層である。本遺構には床面直上に炭化物・焼土ブロック等の廃棄が伴っており、ブロック混じりの堆積土等人為的埋没の可能性が高い。

ピットは、堅穴外にまたがるものを含めて27基取り扱っているが、一部のピットは柱穴として認定できない資料も含まれる。堅穴内の柱穴配置としては、堅穴中央のPit 17を主柱穴とし、壁際のPit 6・8・9・11・12・14・18・22・23・26などが壁柱穴として機能したものと考える。カマドは北壁2の位置から検出された。煙道の形状が平面的に記録されていないが、土層堆積図では記録されており、構造は半地下式で、袖幅73cm







SI-28炭化物・炭化種子検出範囲

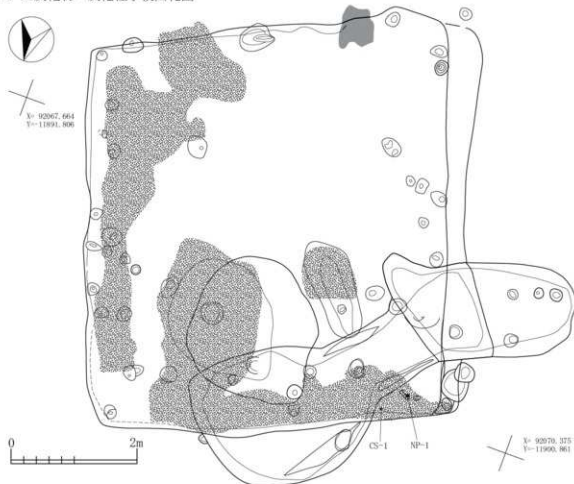
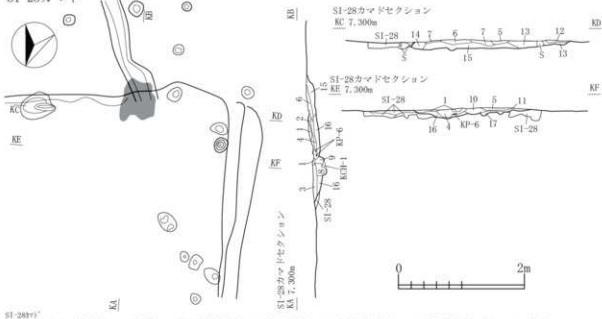


図 1-136 B・C区 SI-28-3



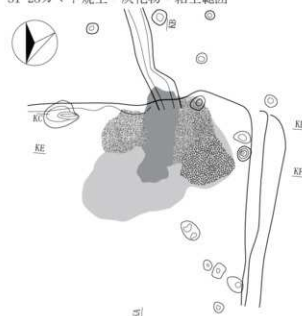
SI-28カマド



SI-28(3)

第1層	7.303.2	暗褐色砂	砂粘質土	10986.6明黄褐色砂(φ1~2cm)中量, 炭化粒(φ2~8mm)少量, 焼土粒(φ2mm~8mm)中量, 焼土ブロック(φ10~22cm)中量
第2層	7.303.4	にじみ・褐色砂	砂粘質土	7.3085.4にじみ・褐色砂(φ2~8mm)微量, 炭化粒(φ1mm)微量, 焼土粒(φ1mm~5mm)少量, 焼土ブロック(φ10~19cm)微量
第3層	7.303.1	黄褐色砂	砂粘質土	炭化粒(φ2mm~8mm)中量, 焼土粒(φ1mm~8mm)少量, 焼土ブロック(φ10~20cm)中量
第4層	7.303.8	明黄褐色砂	砂粘質土	7.3085.4にじみ・褐色砂(φ2~8mm)微量, 炭化粒(φ1~2cm)微量, 炭化物(φ10~20cm)少量, 焼土粒(φ2~7mm)少量, 焼土ブロック(φ10~19cm)中量, 焼土層
第5層	7.303.2	黒褐色砂	砂粘質土	10986.4にじみ・黄褐色砂(φ1~1cm)中量, 7.3084.6黄褐色砂質ブロック(φ10~40cm)微量, 炭化粒(φ1~3cm)中量, 炭化物(φ10~13cm)微量, 焼土粒(φ1~3mm)中量, 焼土ブロック(φ10~20cm)中量
第6層	2.303.4	非褐色砂	砂粘質土	7.3085.2黄褐色砂質ブロック(φ10~60cm)中量, 炭化粒(φ1~10mm)微量, 炭化物(φ10~11cm)微量, 焼土粒(φ1~6mm)多量, 焼土ブロック(φ20~60cm)多量, 焼土層
第7層	1098.6	明黄褐色土	粘土層	ローム粒(φ1~9cm)少量, ロームブロック(φ10~20cm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)微量, 炭化物(φ12cm)微量,
第8層	7.303.2	黒褐色砂	砂粘質土	炭化粒(φ2~8mm)微量, 焼土粒(φ10~30cm)中量
第9層	1093.3	にじみ・黄褐色砂	砂粘質土	炭化粒(φ1mm)極微量, 焼土粒(φ6mm~10cm)中量, 焼土ブロック(φ10~40cm)多量
第10層	1093.4	にじみ・黄褐色砂	砂粘質土	1097.4にじみ・黄褐色砂質ブロック(φ40~60cm)中量, 炭化粒(φ1~4mm)微量, 炭化物(φ11cm~13cm)微量,
第11層	7.303.2	黒褐色砂	砂粘質土	10985.4にじみ・黄褐色砂質ブロック(φ11~50cm)中量, 炭化粒(φ3~7mm)少量, 焼土粒(φ1~9cm)中量, 焼土ブロック(φ10~25cm)中量
第12層	1094.2	灰黄褐色砂	砂粘質土	1097.7明黄褐色砂(φ1~9mm)微量, 1097.6明黄褐色砂質ブロック(φ22~45cm)少量, 炭化粒(φ4~6mm)多量, 炭化物(φ13cm)多量, 焼土粒(φ1~9mm)少量, 焼土ブロック(φ10~31cm)少量
第13層	1093.2	黒褐色砂	砂粘質土	10986.6明黄褐色砂(φ2~7mm)少量, シルト質粘土(φ20~30cm)中量, 10982.2にじみ・黄褐色砂, 炭化粒(φ20cm)微量, 焼土粒(φ1~6mm)少量
第14層	1098.6	明黄褐色砂	砂粘質土	パズル粒(φ3~9mm)微量, 10981.2灰黄褐色砂(φ2~5mm)少量, 10985.6黄褐色砂質ブロック(φ18~45cm)少量, 炭化粒(φ2~8mm)少量, 炭化物(φ11~18cm)少量, 焼土粒(φ2mm~3mm)少量, 焼土ブロック(φ22~28cm)少量, シルト質粘土(φ6~22cm)少量, 10977.2にじみ・黄褐色砂
第15層	7.303.3	暗褐色砂	砂粘質土	7.3085.2灰色砂(φ1~3mm)少量, 10977.2にじみ・黄褐色砂質ブロック(φ18~20cm)少量, 炭化粒(φ4~9mm)微量,
第16層	7.303.2	灰褐色砂	砂粘質土	7.3085.2灰色砂(φ1~2cm)少量, 10982.2にじみ・黄褐色砂質ブロック(φ12~20cm)中量, 7.3084.6明黄褐色砂(φ10~20cm)少量, 炭化粒(φ2mm)微量, 炭化物(φ2mm)微量, 焼土ブロック(φ11cm)微量
第17層	2.303.3	褐色砂	砂粘質土	10985.6黄褐色砂(φ1~2cm)微量, 10985.6黄褐色砂質ブロック(φ40~20cm)多量, 10982.2にじみ・黄褐色砂質ブロック(φ10~30cm)少量, 10982.4明黄褐色砂少量, 炭化粒(φ1~2cm)微量, 焼土粒(φ1~2mm)微量, 焼土ブロック(φ10cm)極微量, 焼土層

SI-28カマド焼土・炭化物・粘土範囲



SI-28カマド掘り方

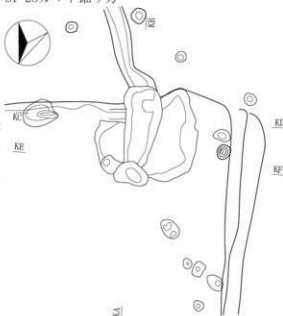


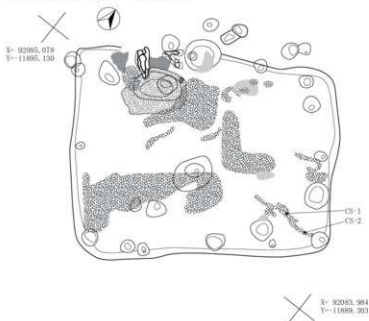
図 1-138 B・C区 SI-28-5





Pit 16	Pit 18	Pit 19	Pit 21	Pit 22	Pit 23	Pit 24	Pit 25	Pit 26	Pit 27
A 7,500m B	A 7,500m B	A 7,400m B	A 7,500m B	A 7,500m B	A 7,500m B	A 7,600m B	A 7,500m B	A 7,500m B	A 7,600m B
<p>Pit 16                      遺跡 3002-2 赤粘質土・砂粘質土・砂質粘砂質土(a1)~(a4)中量                      3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-4 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      3002-5 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 18                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 19                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      3002-4 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 21                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      3002-4 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 22                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 23                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 24                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 25                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 26                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 27                      遺跡 3002-2 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)中量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      3002-4 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量</p>	<p>Pit 22                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 23                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 24                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 25                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 26                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量                      Pit 27                      遺跡 3002-2 砂質粘砂質土(a1)~(a4)少量, 3002-3 赤褐色粘砂質土(a1)~(a4)少量</p>								

SI-29炭化物・焼土・粘土範囲



SI-29出土遺物位置図

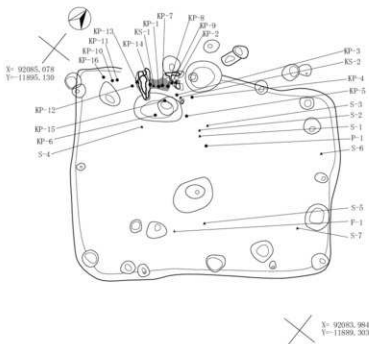
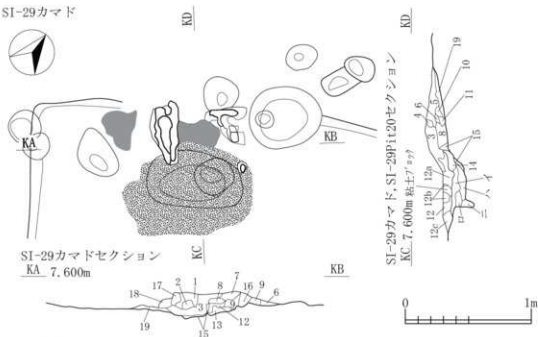


図 1-140 B・C区 SI-29-2

SI-29カマド



SI-29カマド

層	土質	説明
第1層	10YR3/4 暗褐色土	砂粘質土・焼土粒(φ1~12mm)多量,炭化粒(φ1~5mm)少量,10YR4/2(黄褐色土(φ2~3mm)微量
第2層	10YR3/3 暗褐色土	焼土粒(φ1~3mm)少量,炭化粒(φ1~3mm)少量,10YR5/3(赤い黄褐色土(φ10mm)極微量
第3層	10YR3/3 暗褐色土	焼土粒・ブロック(φ1~15mm)少量,炭化粒・物(φ1~12mm)中量
第4層	7.5YR4/4 褐色土	焼土ブロック(φ40mm)
第5層	10YR3/3 暗褐色土	焼土粒・ブロック(φ1~20mm)多量,炭化粒(φ1~5mm)少量
第6層	7.5YR4/4 褐色土	焼土粒(φ1~7mm)
第7層	10YR3/3 暗褐色土	焼土粒(φ1~5mm)多量,炭化粒(φ1~5mm)中量,10YR5/6(黄褐色土(φ1~9mm)中量
第8層	10YR4/4 褐色土	粘土ブロック(φ50mm)多量(軸の残骸)
第9層	10YR2/3 灰褐色土	炭化粒(φ1~5mm)多量,焼土粒(φ1~5mm)多量,10YR4/4(褐色土(φ1~5mm)少量
第10層	7.5Y4/6 暗褐色土	焼土ブロック
第11層	10YR3/3 暗褐色土	砂粘質土,10YR4/4(褐色土(φ1~7mm)少量,7.5YR3/6(暗褐色土(φ1~5mm)少量
第12層	10YR3/4 暗褐色土	炭化粒(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量,10YR4/4(褐色土粒(φ1~5mm)少量
第13層	10YR4/4 褐色土	炭化粒(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~2mm)少量(粘土ブロック, 抽納土)
第14層	10YR2/2 黒褐色土	炭化粒(φ1~5mm)少量,10YR4/4(褐色砂粘質土(φ1~4mm)少量
第15層	7.5YR4/6 褐色土	焼土ブロック
第16層	10YR2/2 黒褐色土	炭化粒・物(φ2~10mm)多量,焼土粒・ブロック(φ1~15mm)中量
第17層	10YR4/4 褐色土	砂粘質土
第18層	10YR4/3 赤い黄褐色土	炭化粒(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量,10YR5/4(赤い黄褐色土(φ1~7mm)中量
第19層	7.5YR4/3 褐色土	焼土粒・ブロック(φ5~20mm)中量,抽納土の後けた部分)
第20層	10YR5/3 赤い黄褐色土(抽納土)	砂粘質土,10YR6/4(赤い黄褐色砂粘質土・ブロック(φ1~20mm)中量
第21層	10YR4/4 褐色土	砂粘質土,10YR6/4(赤い黄褐色砂粘質土・ブロック(φ1~20mm)中量
SI-29P120		
第1層	10YR1/7 灰色土	(炭層)焼土ブロック(φ10mm)微量
第2層	10YR3/2 黒褐色土	焼土粒(φ2~5mm)少量,10YR6/4(赤い黄褐色砂粘質土(φ2~7mm)中量
第3層	10YR2/3 灰褐色土	炭化粒(φ1~9mm)多量,焼土粒(φ1~5mm)多量,10YR4/2(赤い黄褐色砂粘質土(φ3~5mm)微量
第4層	10YR3/3 暗褐色土	10YR6/4(赤い黄褐色砂粘質土(φ2~4mm)中量

SI-29カマド遺物出土位置図

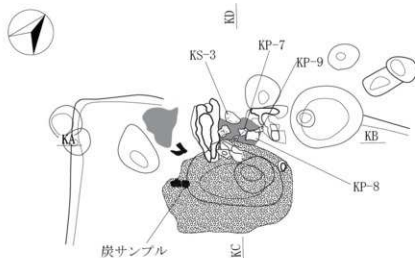


図 1-141 B・C区 SI-29-3

m、煙道長54cmを測る。前庭側の部分がPit 20により一部攪拌が生じており、ビット状の落ち込みとともに、炭化物の堆積が見られる。袖の中には芯材は認められないが、火床面上に礫の出土が認められることから支脚等を含めた構築材の一部に使用された可能性がある。遺物はカマド周辺から主に出土しており、図示した3点もいずれもカマド覆土主体の資料である。土師器製の79・80は頸部幅がややあるタイプで、79は頸部に80は体部下半に器壁の肥厚部がある。79は口径と体部最大径がほぼ同じ口径に最大径があるタイプであるが、80は体部中半に最大径がくるタイプである。小甕である81は口径11.6cmと小ぶりのタイプで、一部剥落しているものの、体部から直立気味に立ち上がり、口縁部でわずかに括れを持たせ軽く外反させている。

#### S1-30(図1-142-146,240-241)

調査区中央X=92,105,000, Y=11,896,000付近から検出した。平面形は台形状の長方形を呈しており、602×558×13cmを測る。主軸方位はN-60°-Eである。掘り方は無く、基礎の砂層上の一部に構築されている。堆積土は7層に分層している。魔絶後床面直上に堆積した第7層から一部攪拌を受けながらも自然堆積の様相を呈する。隣接するSD-08は本遺構の堆積土を切る形で構築されており、本遺構の方が古い。ビットは竅穴内の取扱としたものが37基、それ以外に竅穴内から検出したビットが48基検出している。支柱穴が不明瞭で、壁溝を断続的に巡らし、壁溝の内・端部や空開部分に小規模なビットを掘削している。

カマドは、北東壁2の位置から検出した。袖部幅108cm、煙道長28cmを測る。袖から羽口が出土し、周辺に礫の出土があったことから芯材としての利用された可能性がある。火床面の前庭側が凹んだ形状で、礫があり、炭粒・物層を検出している。焼土や灰が南西方向に広がった状況で検出しており、右袖の一部が欠損している状況を踏まえると前庭の南西方向への破壊が想定される。なお、カマド設置壁側の壁面には520×100cmの範囲で粘土を検出しており、土壁等の壁面利用が想定される。

出土遺物は、図1-240・241に7点図示した。82は覆土出土の須恵器甕体部片。85・88はカマド出土の資料で、土師器以外に87に図示した撫土器もある。土師器は体部中半に最大径のくるタイプであるが、口縁部の頸部が短頸気味で、外反が強く潰れ気味である。小甕である86は頸部の外反が緩やかで、口唇端部が上向きに面取り状の形状である。

#### S1-32(図1-147-149,244)

調査区中央X=92,090,000, Y=11,885,500付近から検出した。平面形は長方形を呈しており、590×442×13cmを測る。主軸方位はN-58°-Eである。軸線方位はS1-30とほぼ同様で、S1-29から94°振った位置関係にある。SK-77, SD-08・24と重複しており、本遺構の方が古い。また、SK-78・79も重複しているが、本遺構に帰属した可能性がある。SD-08は堆積土3層上面から掘り込みがなされており、竅穴の堆積層第2層と第4層が上位に堆積している。また、竅穴掃蕪扱ひのSK-01については第1層上面から掘り込みがなされており、SK-77と同様に本遺構の埋没完了後に掘り込まれた遺構である。SD-24については土層記録上新旧関係が記録されていないが、記録写真を確認したところ、平面確認時に溝跡のプランが竅穴を切った状態で残っていた写真があり、本遺構よりSD-24が新しい関係にあると思われる。

堆積土は、掘り方充填を含め6層に分層し、掘り方充填土は第6層が相当する。竅穴中央からカマド設置相当位置の北側に向かってやや掘り込みが深めになされ、南東壁側の一部が浅く掘り込みがなされている。ビットは竅穴扱ひで11基検出し、その他SP扱ひのビットが複数重複しているが、支柱穴の可能性があるビットはPit 3・10で、Pit 5は掘り込みが浅いがPit 3の延長線上に位置する。壁柱穴として北西壁側-南西壁側にかけてPit 6・7・9が位置し、その他SP扱ひのSP-266・299・300・758・759・760の一部の壁測最ラインよりも若干外側に配置する。建物の軸線に沿った配置で、関連した可能性が高い。

カマドは、北西壁側の北西1の位置から検出した。構造は半地下式で煙道は竅穴外の壁が下がりすぎているため、竅穴外20cm程度の部分が最深6cmで緩やかに立ち上がるのを確認した程度である。右袖側の残存が悪く、前庭部も南北軸に遺物が散乱した状況で検出している。残存部の袖部幅は62cm、煙道長は前述のとおり(20)cmである。カマド周辺から出土した遺物の中に土器以外に棒状支脚の破片(図1-244-137)が出土していることから構築材ないしは支脚として棒状支脚が利用されていたと考えられる。出土遺物は図1-244に9点図示したが、土師器の煮炊具主体で、下層出土の134は頸部幅が多少長めで、括れが多少しっかりした形の器形で、類似したタイプでやや括れが甘い135がカマドと竅穴上層から出土している。その他の竅穴上層出土資料は頸部幅が短く131のように短く折り返すものや133の小甕のように口縁部が外反せず、直立気味の器形も伴っている。

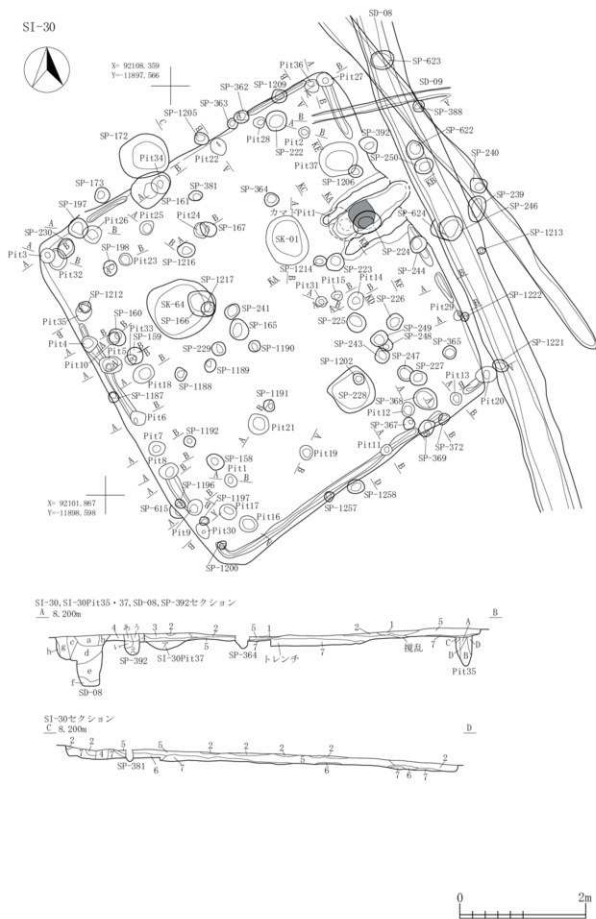


図 1-142 B・C区 SI-30-1

- SI-30  
 第1層 10YR3/3 に近い黄褐色土 砂粘質土、10YR3/2黒褐色砂粘質ブロック(φ10~60㎜)多量、炭化配(φ1~9㎜)少量  
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/6褐色砂粘質ブロック(φ10~50㎜)中量、ローム配(φ1~9㎜)少量、炭化配(φ1~9㎜)微量、焼土配(φ1~6㎜)少量  
 第3層 10YR3/4 に近い黄褐色土 粘質土、10YR3/2黒褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量、炭化配(φ1~9㎜)微量  
 第4層 10YR3/3 に近い黄褐色土 砂粘質土、10YR3/2に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)中量、ロームブロック(φ10㎜)少量、焼土配(φ1~2㎜)  
 第5層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土、10YR4/2に近い黄褐色砂粘質土(φ2~9㎜)中量、焼土配(φ1~9㎜)微量、炭化配(φ1~2㎜)微量  
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/4褐色砂粘質ブロック(φ10~50㎜)中量、炭化配(φ10㎜)少量、焼土配(φ1~2㎜)微量  
 第7層 10YR3/4 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/3に近い黄褐色砂粘質土(φ2~9㎜)少量、焼土配(φ1~2㎜)微量、炭化配(φ1~2㎜)微量
- SI-30P135  
 第A層 10YR4/3 に近い黄褐色土 砂粘質土、10YR4/6褐色砂粘質土(φ2~9㎜)微量  
 第B層 10YR2/3 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/6褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量、10YR2/1黒色砂粘質ブロック(φ10~30㎜)少量、  
 10YR2/2に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)中量
- 第C層 10YR3/2 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/2に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量  
 第D層 10YR4/3 に近い黄褐色土 砂粘質土、10YR2/1黒色砂粘質土(φ1~6㎜)少量、10YR3/2に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量
- SI-30P137  
 第7層 10YR3/3 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/2に近い黄褐色砂粘質土ブロック(φ10~60㎜)中量、10YR4/3に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)多量、  
 10YR4/2に近い黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量
- SI-30  
 第a層 10YR4/3 に近い黄褐色土 砂粘質土、10YR4/2に黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量  
 第b層 10YR3/2 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/2に黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量、炭化配(φ1~2㎜)微量  
 第c層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土、10YR4/2に黄褐色砂粘質土ブロック(φ10~100㎜)中量  
 第d層 10YR3/2 暗褐色土 砂粘質土、10YR3/4に黄褐色砂粘質土(φ3~10㎜)少量、10YR3/2暗褐色砂粘質ブロック(φ10~50㎜)少量  
 第e層 10YR2/3 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/2に黄褐色砂粘質土ブロック(φ10~50㎜)少量  
 第f層 10YR4/4 灰黄褐色土 砂粘質土  
 第g層 10YR3/2 暗褐色土 砂粘質土(層上)、10YR4/6褐色砂粘質土(φ1~9㎜)中量、炭化配(φ1~2㎜)微量  
 第h層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土(層上)、10YR3/2暗褐色砂粘質土(φ10~20㎜)少量
- SI-302  
 第a層 10YR2/2 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/2に黄褐色砂粘質土(φ1~9㎜)少量、炭化配(φ1~2㎜)微量  
 第b層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土、炭化配(φ1~9㎜)微量  
 第c層 10YR2/2 暗褐色土 砂粘質土、焼土配(φ1~2㎜)微量、炭化配(φ1~9㎜)微量  
 第d層 10YR3/4 暗褐色土 砂粘質土、10YR4/6褐色砂粘質土(φ9㎜)混入、炭化配(φ1~9㎜)微量

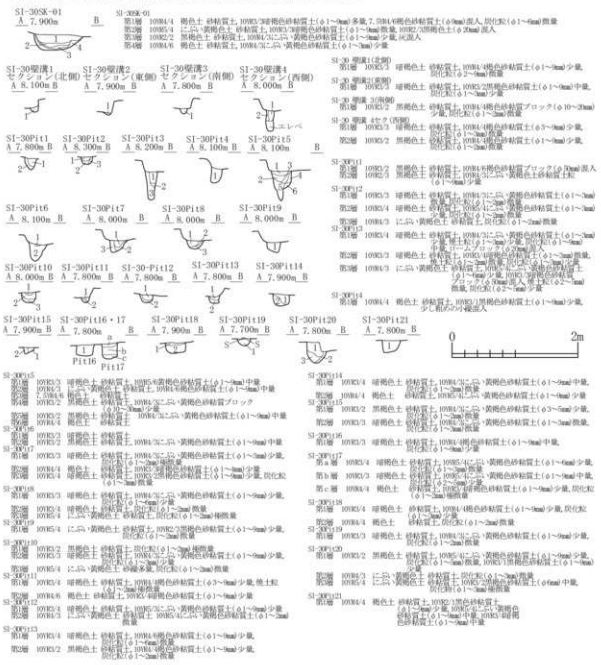
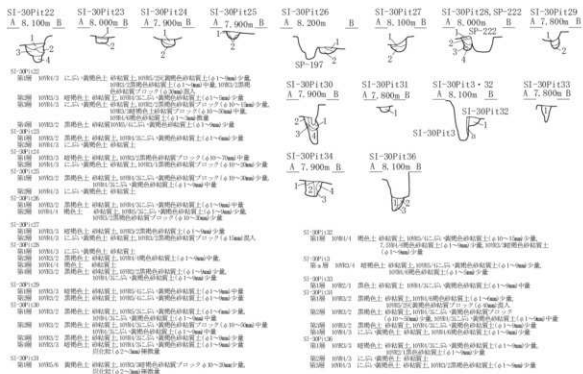


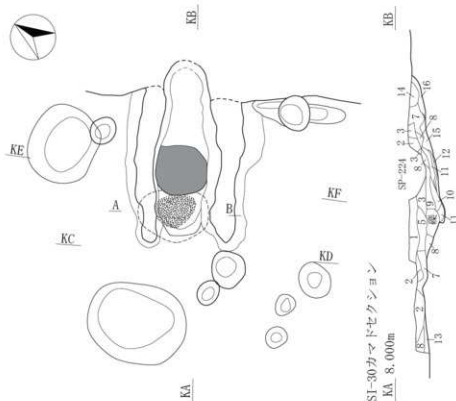
図 1-143 B・C区 SI-30-2  
 - 178 -



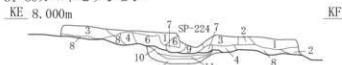
SI-30粘土範囲・遺物出土位置図

図 1-144 B・C区 SI-30

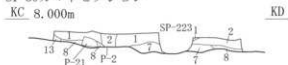
SI-30カマド



SI-30カマドセクション



SI-30カマドセクション



SI-30カマド

- |      |          |         |                                                                                                 |
|------|----------|---------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1層  | 10YK3/3  | 埴褐色土    | 砂粘質土、10YR4/3に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~6mm)微量                                    |
| 第2層  | 10YK3/4  | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)微量、焼土粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ90mm)混入                                                |
| 第3層  | 10YK3/4  | にぶい黄褐色土 | 粘土質、炭化粒(φ1~3mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量                                                                 |
| 第4層  | 10YK3/3  | にぶい黄褐色土 | 粘土質、炭化粒(φ1~9mm)中量、焼土ブロック(φ10~30mm)中量                                                            |
| 第5層  | 10YK3/4  | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ3~9mm)少量、焼土ブロック(φ10~30mm)少量                                             |
| 第6層  | 10YK5/6  | 黄褐色土    | 粘土質、炭化粒(φ1~2mm)少量、焼土粒(φ1~6mm)少量                                                                 |
| 第7層  | 7.5YR4/6 | 褐色土     | 黒砂粘質土、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ10~30mm)多量                                                          |
| 第8層  | 10YK3/3  | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)微量、焼土粒(φ1~3mm)微量                                                                |
| 第9層  | 10YK5/1  | 褐色土     | 炭化物質、砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量                                                           |
| 第10層 | 7.5YK3/3 | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~9mm)少量                                                                              |
| 第11層 | 10YK3/2  | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量                                                                |
| 第12層 | 10YR4/4  | 褐色土     | 砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)少量                                                                              |
| 第13層 | 10YK3/3  | にぶい黄褐色土 | 砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)微量                                                                              |
| 第14層 | 10YK3/3  | 埴褐色土    | 砂粘質土、炭化粒(φ1~2mm)微量、焼土粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ50mm)混入、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ10~30mm)少量 |
| 第15層 | 10YR4/4  | 褐色土     | 砂粘質土                                                                                            |
| 第16層 | 10YR4/3  | にぶい黄褐色土 | 砂粘質土、10YK5/6黄褐色砂粘質土ブロック(φ20~70mm)中量、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~6mm)少量                                 |

SI-30カマドPit1



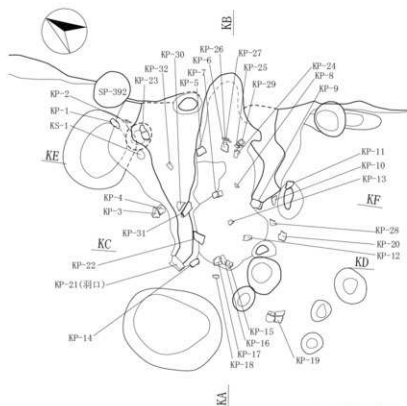
SI-30カマドP11

- |    |         |     |                                                                 |
|----|---------|-----|-----------------------------------------------------------------|
| 1層 | 10YR4/1 | 褐色土 | 砂粘質土、10YK5/6黄褐色砂粘質土ブロック(φ20~70mm)中量、炭化粒(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~6mm)少量 |
|----|---------|-----|-----------------------------------------------------------------|

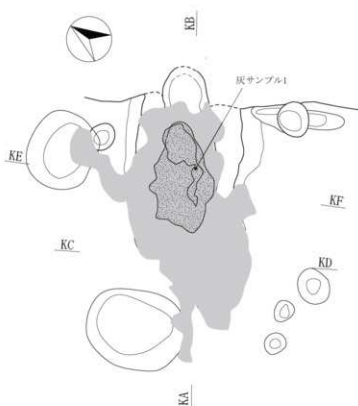
図 1-145 B・C区SI-30-4



SI-30カマド出土遺物位置図



SI-30カマド焼土・灰範囲



SI-30カマド掘り方

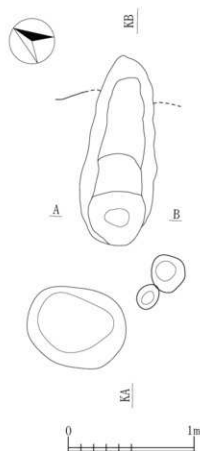
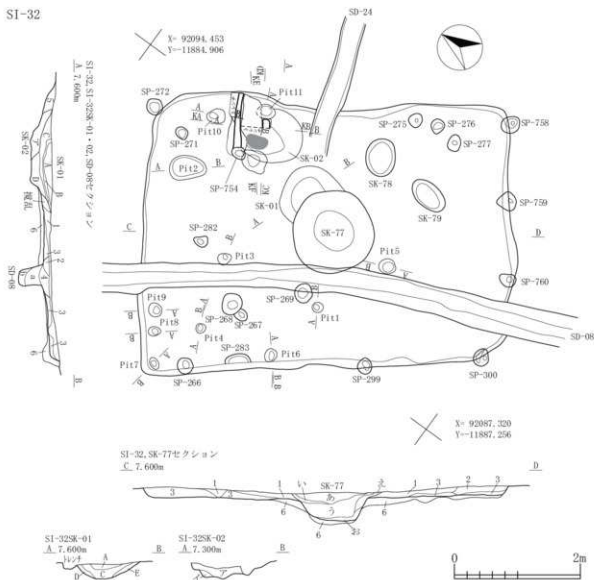


図 1-146 B・C区 SI-30-5

SI-32



SI-32

- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 砂粘質土, 10YR5/4に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 同色ブロック(φ10~20mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)微量  
 第2層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR5/6黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)微量, 焼土粒(φ1~2mm)極微量  
 第3層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR6/6明黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 同色ブロック(φ10~30mm)中量,  
 10YR7/2に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 10YR5/2黄褐色粘質土(φ1~9mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)極微量  
 第4層 10YR3/2 黒褐色土 砂粘質土, 10YR5/4に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 同色ブロック(φ10~30mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)極微量  
 第5層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土, 10YR7/2に多い黄褐色砂粘質土(φ10~30mm)少量, 炭化粒(φ1~2mm)極微量  
 第6層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 焼土, 10YR5/6黄褐色砂粘質土ブロック(φ10~50mm)中量, 10YR5/2黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)極微量, 10YR7/2C.5黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量

SI-32SK-01

- 第1層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR7/2に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)微量, 炭化粒(φ1~5mm)微量, 焼土粒(φ1~3mm)極微量  
 第2層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR7/2に多い黄褐色粘土粒(φ5~9mm)少量, 同色土ブロック(φ10~20mm)少量, 炭化粒・焼土粒(φ1~3mm)微量  
 第3層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR5/6黄褐色砂粘質土粒(φ1~9mm)中量, 同色ブロック(φ10~30mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)極微量  
 第4層 10YR4/4 褐色土 砂粘質土, 10YR5/6黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 10YR6/6明黄褐色砂粘質土(φ2~5mm)微量, 炭化粒(φ1~2mm)極微量

SI-32SK-02

- 第7層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR6/6明黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 同色ブロック(φ10~30mm)少量,  
 10YR7/2C.5黄褐色砂粘質土(φ5~9mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)微量, 焼土粒(φ1~5mm)極微量, B-To火山灰少量  
 第8層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR6/4に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 炭化粒(φ1~3mm)微量

SP-06

- 第8層 10YR3/2 黒褐色土 砂粘質土, 10YR5/4に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 同色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)極微量  
 第9層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR4/4褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 同色ブロック(φ10~35mm)中量, 10YR5/4C.5黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)極微量

SK-77

- 第10層 10YR2/2 黒褐色土 砂粘質土, 10YR5/4に多い黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)微量, 炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~5mm)微量  
 第11層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR4/4褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 10YR5/4C.5黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)少量,  
 炭化粒(φ1~2mm)極微量  
 第12層 10YR3/3 暗褐色土 砂粘質土, 10YR6/6明黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量  
 第13層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR6/6明黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 10YR5/6黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量,  
 炭化粒(φ1~2mm)極微量  
 第14層 10YR4/3 に多い黄褐色土 砂粘質土, 10YR5/4C.5黄褐色砂粘質土(φ1~9mm)中量, 同色ブロック(φ10~25mm)多量

SI-32 P111 SI-32 P112 SI-32 P113 SI-32 P114 SI-32 P115 SI-32 P116 SI-32 P117 SI-32 P118 SI-32 P119  
 A 7.300m B A 7.300m B A 7.300m B A 7.300m B A 7.300m B A 7.500m B A 7.500m B A 7.400m B A 7.400m B

SI-32 P110 SI-32 P111  
 A 7.300m B A 7.300m B



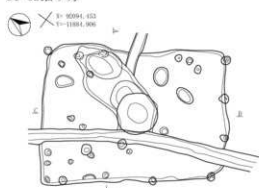
SI-32 P111  
 第1層 10933 埋褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)中量、炭化灰(φ1~2mm)極微量  
 第2層 10934 褐色土 砂粘質土、10972赤褐色、黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)少量、炭化灰(φ1~2mm)微量  
 SI-32 P112  
 第1層 10934 褐色土 砂粘質土、10972赤褐色、黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)少量、炭化灰(φ1~2mm)微量  
 10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)少量、炭化灰(φ1~2mm)極微量  
 SI-32 P113  
 第1層 10932 埋褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ5~5mm)少量、褐色ブロック(φ20~25mm)微量、炭化灰(φ1~5mm)極微量、焼土灰(φ1~2mm)極微量  
 第2層 10933 赤褐色土、砂粘質土、10972赤褐色、黄褐色砂粘質土(φ1~3mm)微量、7.5034黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)微量

SI-32 P114  
 第1層 10932 埋褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土ブロック(φ10~35mm)中量、炭化灰(φ1~2mm)極微量  
 第2層 10934 褐色土 砂粘質土、土部3に赤褐色土砂粘質土(φ1~5mm)中量  
 SI-32 P115  
 第1層 10933 埋褐色土 砂粘質土、10972赤褐色、黄褐色砂粘質土(φ1~3mm)微量、炭化灰(φ1~2mm)極微量

SI-32 P116  
 第1層 10933 赤褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)中量、炭化灰(φ1~2mm)極微量  
 SI-32 P117  
 第1層 10933 赤褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)中量、炭化灰(φ1~2mm)極微量

SI-32 P118  
 第1層 10934 褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)中量、炭化灰(φ1~2mm)極微量  
 SI-32 P119  
 第1層 10934 褐色土 砂粘質土、10956黄褐色砂粘質土(φ1~5mm)多量、炭化灰(φ1~2mm)極微量

## SI-32掘り方



## SI-32炭化物範囲・出土遺物位置図

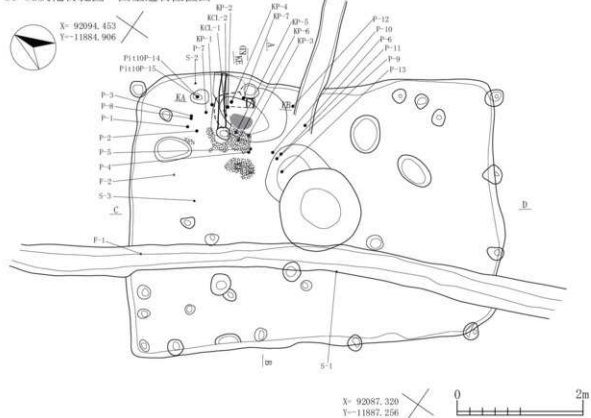


図 1-148 B・C区 SI-32-2





## S I-3 3 (図1-150, 244)

調査区中央から西寄りの地点 X = 92, 078, 000, Y = 11, 902, 000 付近から検出した。西側の半分が丘陵部の削平に伴い残存しておらず、また、壁面も残存しておらず、床面と土坑およびカマドの残存部の検出に留まった。なお、P i t 1 と取り扱ったピットについては床面のラインより屋外相当に位置し、本遺構と明確な帰属関係はない。残存部の平面形は台形気味の形状を呈しており、3 7 7 × ( 1 3 9 ) × ( 3 ) c m を測る。主軸方位は N - 9 3 ° - E である。堆積土は、掘り方充填の1層のみで、黒褐色土と暗褐色砂粘質土の混合土である。カマドは、ほとんど破壊されていたが、灰・焼土ブロック混じり土層と袖の一部の検出と床面の炭化物検出範囲を根拠に東壁側の東2の位置と取り扱った。構造等の情報は不明であるが、前庭部の K P - 1 - 6 出土の破片は図1-2 4 4 - 1 4 0 に図示した把手付小甕である。1 4 0 は口縁部があり、口縁部に屈曲があるタイプであるが、北側の床面 P - 2 から出土した図1-2 4 4 - 1 3 9 に図示した把手付小甕は口縁部が直立するタイプである。本遺構から出土し、図示に至った資料はこの把手付小甕2点のみである。

## S I-3 5 (図1-149・150)

調査区中央から南西の地点 X = 92, 063, 000, Y = 11, 893, 000 付近から検出した。平面形は長方形を呈し、5 0 3 × 3 8 5 × 2 c m を測る。東隅の一部にL字状の屈曲部がある。カマドの位置が不明瞭で、一部削平や焼乱による影響がある。主軸方位は N - 4 0 ° - W である。堆積土は掘り方充填の1層のみで、暗褐色土主体である。掘り方は凹凸が激しく、ほぼ全面に及んでいる。S D - 2 3 が重複しているが、本遺構の方が新しい。出土遺物は図示可能な資料の出土は無かった。

## S I-3 7・4 0 (図1-151-153, 244)

調査区南西寄り、X = 92, 058, 000, Y = 11, 908, 000 付近から検出した。いずれの遺構も堅穴部が不明瞭で、柱穴配置や貼床範囲等で認定したが、双方の新旧関係について直接判断できる材料はない。しかし、S I-3 7 と認定した遺構については、構成するピットが S I-4 0 を切る遺構を切って構築されており、S I-3 7 の方が新しい関係である。

S I-3 7 は、構成するピットが楕円形を呈するプランで、3 8 6 × 3 0 6 c m を測る。主軸方位は不明である。S I-3 7 扱ったピット以外に S P - 9 1 9 も軸線上に並ぶ。ただし、P i t 1 9 として S K - 1 0 5 に重複するピットについては帰属関係が認められず、別遺構の可能性が高いものと判断さ

れるが、調査時の記録を元に掲載している。出土遺物は図1-2 4 4 - 1 4 1 で図示した擦文土器底部片であるが、重複関係のある地点からの出土であることから、厳密に本遺構に帰属していたかどうかは不明である。

S I-4 0 には、南側-西側が S I-4 0 S D - 0 2 としてL字状の溝跡があり、その内側から溝の欠落する北側にかけて6 7 4 × 5 4 3 の範囲で貼床を検出したことから堅穴として認定した。土層についても貼床充填の土層主体で、廃絶後の堆積層が残存していないため、詳細は不明であるが、検出した土坑・ピット等の配置と掘り方等から検出した火山灰の検出範囲から7 m 四方程度のプランであった可能性がある。堆積層中掘り方最下層部分に相当する第5層と第7層中からB-T m 火山灰を検出した。カマドは無く、主軸方位は S I-3 7 同様不明である。本調査区内では S I-2 5・3 4 の外周にL字状にS D - 0 6 が配置しており、それ以外に中央の堅穴の状況が不明であるが、S D - 2 8・3 0・3 2 の中にも柱穴配置が確認されており、溝の内側にはカマド相当と考えられるS N - 0 2 が位置していることなどから、堅穴建物があった可能性が高い。それ以外にS I-2 8 の斜面上方にS D - 2 0 が配置しているなど、L字以外の溝も帰属した可能性がある。外周溝を有する堅穴建物跡の外周溝部のように馬蹄形状の形状ではないL字状の溝が主体であるが、本調査区内では斜面上方に設置されるケースが多く、排水溝としての可能性が高い。本遺構の中央付近にはS K - 8 7・1 0 2 と取り扱った土坑との重複関係があり、本遺構の方が古い。また、南側で本遺構内S X - 0 2 とS E a - 0 2 [ S K - 8 8 ] には重複関係があり、S X - 0 2 が古い。

その他、S D - 0 2 部分ではS K - 1 0 5、S D - 1 2・2 3 [ S X - 0 8 ] などと重複しており、S D - 0 2 側が古い。S K - 8 7・1 0 2 と重複する部分はS I-4 0 内の帰属遺構としてS K - 0 1、S X - 0 1・0 3、S D - 0 3 等の遺構があり、混み合った遺構配置である。図1-1 6 3 に掲載したS K - 8 7 と1 0 2 のセクション図についても重複するS K - 8 7・1 0 2 の重複関係に限定した土層図として作成されているが、それぞれの遺構の下部に基層となる第1層の存在が確認されており、場合によってS I-4 0 S X - 0 3 として遺構からS K - 8 7 の東端まで連結した遺構の可能性もある。同様の遺構は本遺構の北側のS I-2 8 に重複するS K - 6 9・S X - 1 1 として遺構も類似した形状で、似通った軸線であることから関連性が想起せられる。出土遺物で図示可能な資料は、図1-2 4 4 - 1 4 2 に図示した擦文土器底部片1点のみである。







SI-37・40火山灰範囲・遺物出土位置図

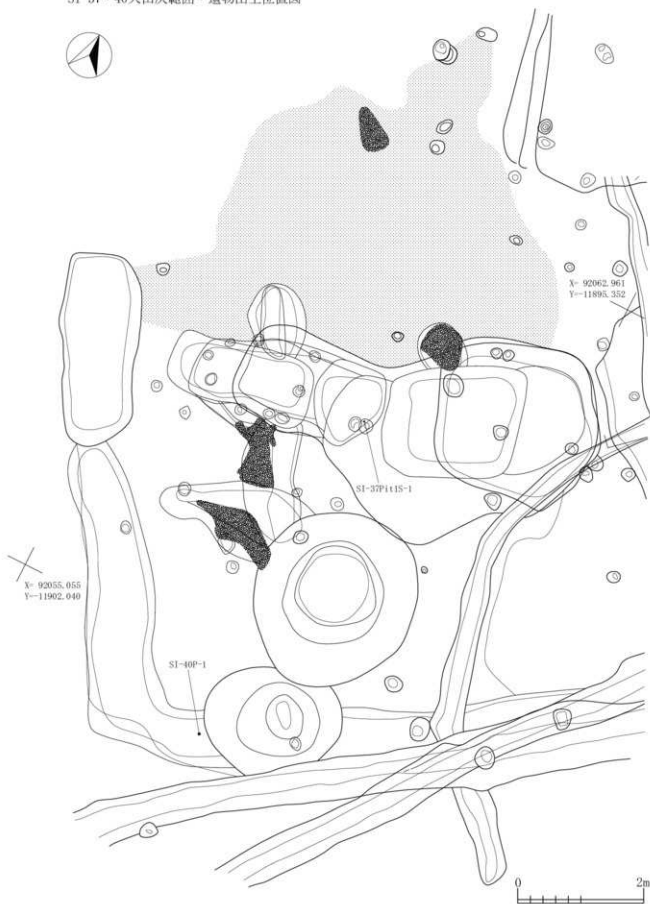


図 1-153 B・C区 SI-37・40-3

S I-38・39(図1-154~157, 244・245)

調査区北東寄り、X=92, 113, 500, Y=-11, 897, 000付近で検出した。S I-38とした堅穴が斜面上方の壁のプランが残存しており、認定出来たが、S I-39については、調査時に柱列の一部を認定し、整理時に配置を再確認し、想定されるプランを破線で提示した。なお、調査時の遺構認定が報告時の遺構認定と異なるケースもあるが、遺構名は調査時の名称を優先し、掲載している。S I-38とS I-39の新旧関係については記録された土層情報が断片的であるが、A-Bラインのメインセクション上でS I-39の堆積層である第A層をS I-38の堆積層扱いである第15層が切る形で記録されており、記録上はS I-39<S I-38の関係である。

重複する主だった遺構のうち、SK-103、SX-17、SN-11、SG-01、SD-08などが重複しているが、SX-17・SD-08<S I-38<SG-01の関係で、SK-103とSN-11については後述するが、S I-39側の付属施設の可能性がある。

S I-38は、長軸が東西方向の長方形を呈すると考えられるプランで、東側の傾斜方向は壁面が歪んでおり、斜面下方に相当する南壁と西壁の約半分が残存していない。南壁が残存していないため、柱穴配置の状況やカマド相当施設の配置状況を元に位置を推定すると、SP-355・981・1000・1142・1236などを結ぶラインか、S I-39Pit 4、SP-234・353・373・1157を結ぶラインのいずれかの可能性がある。また、SP-245・395・603・608・609・641・980等を結ぶラインも候補になるが、火床面相当位置から離れた位置関係になり、候補とすれば可能性が低い取扱となる。一番内側のSP-355のプランの場合、802×(562)cm、S I-39Pit 4のプランの場合、802×(634)cm、SP-245のプランの場合802×(734)cmのプランとなり、大型の規格である。主軸方位はN-173°-Eである。

堆積土は掘り方充填土を含め15層に分層したが、本遺構は焼失を受けており、堅穴北壁側一東側にかけて炭化材や焼土ブロックを検出している。堆積土中でも第4層から炭化した茅を検出している。など焼失の痕跡が強い。しかし、堅穴相当範囲内から検出した炭化材等は限定的で北西壁側に廃棄遺物の集中が見られるなど、廃棄に伴う焼成の可能性が高い。ピットは堅穴内から18基帰属した扱いで記録されているが、前述のとおり、整理段階で帰属関係が再検討され、Pit 18は明確に本遺構に帰属しないと認定された。S I-38・39のSKとし

て記録された土坑状の施設は配置状況から本遺構に属した可能性が高く、S I-38・39内SK-03と並ぶSX-17については本遺構より古い扱いで、掘り方土坑等の可能性も有する。

また、図1-173に図示したが、本遺構の西隣には調査時にSX-06として取り扱われた焼土・炭化物範囲を検出しており、本遺構の軸線と類似した配置を呈している。本遺構に関連した遺構である可能性がある。

カマドは、南壁相当の南4の位置から検出した。火床面のみの検出で、80×74cmを測る。

S I-39は、斜面上方の北側と東側の柱穴配置が不明瞭で、斜面上方の北側がSP-963・987・1128・1154・1180の軸線と、S I-38Pit 14とSP-1162・1181・1185・1186の軸線が想定され、東側についてはS I-39Pit 5とSP-979・985・996・998・1125を結ぶラインとS I-39Pit 9とSP-648・650・963を結ぶライン等が想定できる。内側を通った場合の規模は534×510cm、最も外側を通った場合は880×605cmとこのエリアの中で存在する堅穴住居と比較しても大型すぎる部類に入り、S I-38との建替で説明付けられるか、掘立柱建物跡などが重複した可能性も残される。調査時に遺構内ピットとして取り扱われたのは14基あるが、前述のとおり、他の遺構も構成を成した可能性がある。最も内側の柱穴配置を採用した場合屋外に相当するが、SK-103とSN-11についてはS I-39の範囲内に位置し、SK-103についてはS I-38に帰属したSK-01やSK-02と類似した規格である。また、SN-11については焼失であるS I-38とは異なる下がった面で焼土範囲が記録されている。北側が内側の柱列ではギリギリであるが、東側の内側の柱穴と整合性が保たれることからカマド相当位置と認定した場合、東側については内側の柱列が建物の範囲として認定できる。その場合位置としては北東1か北西4の位置となる。

出土遺物は、双方の遺構扱いの資料を含め図1-244・245中に11点図示した。床面から図1-245-150に図示した土師器甕口縁部片が出土しており、覆土中からも土師器破片が出土している。縄文土器についても付近の遺物包含層の影響も含め中期を主体に中一後期の資料が出土している。

## 2. 土坑

SK-57(図1-158, 245)

X=92095, 789, Y=-11912, 949付近で検出した。平面形は円形、断面形は袋状を呈し、68×62×

SI-38・39

X=92115.969  
Y=11902.696

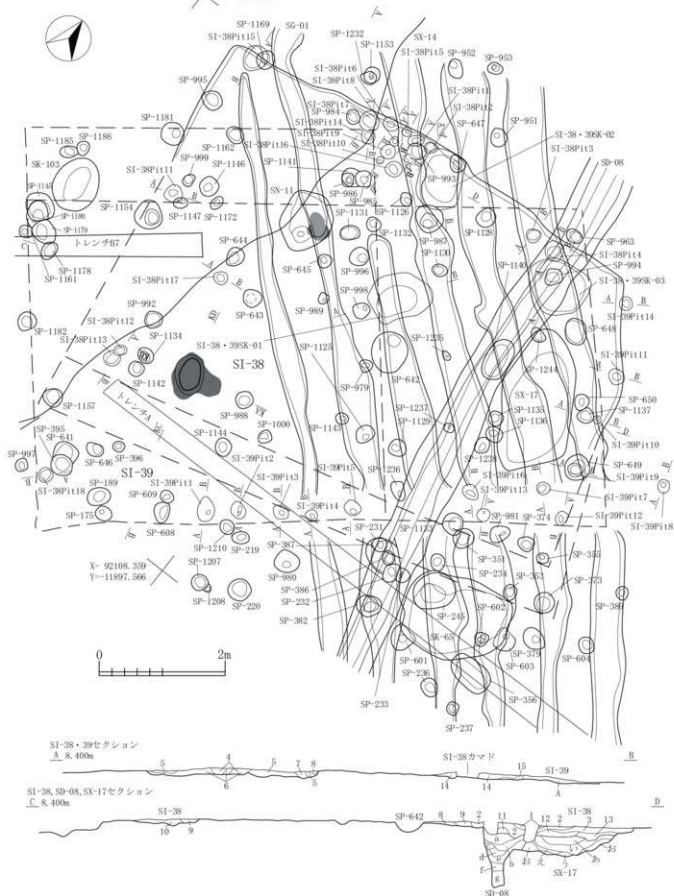


図 1-154 B・C区 SI-38・39-1







26 cmを測る。堆積土は間層を含め4層に分層した。覆土中から図1-245-154に図示した縄文時代中期の口縁部片が出土している。

#### SK-58 (図1-158)

X=92095.250, Y=-11896.779 付近で検出した。S1-25と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形、断面形は皿形で、底面に凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。156×67×12 cmを測る。堆積土は3層に分層し、黒褐色土主体の自然堆積である。

#### SK-59 (図1-158, 245)

X=92098.211, Y=-11897.013 付近で検出した。SK-62と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、72×55×11 cmを測る。堆積土は5層に分層し、底面直上には崩落も含めたブロック混じりの土層が堆積している。覆土中から図1-245-155に図示した縄文時代後期の体部片が出土している。

#### SK-60 (図1-158, 245)

X=92091.000, Y=-11900.600 付近で検出した。図1-105中でS1-34の西壁に近接するSD-06扱いの溝跡が相当する。調査時において土坑扱いとし、土層記録がなされており、土層情報について図1-158中で掲載した。平面形はL字状の溝形で、断面形は長軸方向は底面に凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がり、短軸方向は直立気味に立ち上がる形状で、一部は開き気味に立ち上がる箇所がある。堆積土は10層に分層した。出土遺物は図1-245に5点図示したが、土師器主体の出土で、S1-25・34の外周溝としての関連が想定できる。

#### SK-61 (図1-158)

X=92091.180, Y=-11903.561 付近で検出した。SN-01と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は不整形、断面形は鍋底形を呈し、173×120×16 cmを測る。底面はやや凹凸がある。堆積土は4層に分層し、埋戻しの要因が強いブロック混じりの土層堆積が認められた。

#### SK-62 (図1-158, 245)

X=92098.344, Y=-11897.319 付近で検出した。SK-59、SP-1253、SD-06と重複しており、いずれの遺構より本遺構の方が古い。平面形は不整形長方形、断面形は段状に立ち上がる形状を呈する。規模は223×98×28 cmを測る。堆積土は7層に分層し、崩落も伴いながら緩やかに堆積

した状況を呈している。覆土中からSK-63出土資料と類似した縄文土器体部片が出土した。

#### SK-63 (図1-158, 245)

X=92111.867, Y=-11906.188 付近で検出した。SK-66、SP-375・1104と重複しており、SK-66・SP-1104<SK-63<SP-375の関係である。平面形は約半分が調査の影響により欠損しており、126×[40]×38 cmを測る。堆積土は3層に分層し、一部崩落を含む自然堆積の状況を呈する。覆土中から図1-245-162・163に図示した縄文時代中期の体部片が出土している。

#### SK-64 (図1-159, 245)

X=92104.836, Y=-11897.400 付近で検出した。SP-166・1217と図面上は重複しているが、調査段階が異なる同一地点であり、SP-1217<SK-64<SP-166の関係である。平面形は不整形楕円形、断面形は壁上部の一部が緩やかに立ち上がる円筒形状を呈する。100×89×53 cmを測る。堆積土は7層に分層し、第1層の下位(=中層)と第6層(=下層)から炭化物包含層を検出した。自然堆積の様相を呈する。第1層から図1-245-164で図示した土師器片が出土している。頸部がほとんど無く、口唇部周辺を軽く折り曲げたような立ち上がりである。

#### SK-65 (図1-159, 245)

X=92110.664, Y=-11893.474 付近で検出した。SG-01、SP-245・601・602・603と重複しているが、SG-01、SP-245より古く、SP-601・603は調査段階が異なり、本遺構の方が新しい。SP-601・603<SK-65<SG-01、SP-245の関係である。平面形は不整形丸長方形、断面形は鍋底形を呈する。壁上部の一部が緩やかに立ち上がる円筒形状を呈する。168×133×35 cmを測る。堆積土は7層に分層し、第1層の下位(=中層)と第6層(=下層)から炭化物包含層を検出した。図示した土器は縄文土器の碎片のみであるが、それ以外に埴形鍔も出土し、廃棄の様相も伴う。

#### SK-66 (図1-158, 245)

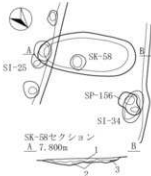
X=92112.477, Y=-11906.467 付近で検出した。A区S1-22、SK-63、SP-390と重複しているが、本遺構がいずれの遺構より古い。平面形は楕円形、断面形は直立気味に立ち上がる。86×75×76 cmを測る。堆積土は6層に分層し、壁際にバミス粒がやや多く含む土層堆積が見られ、崩

SK-57



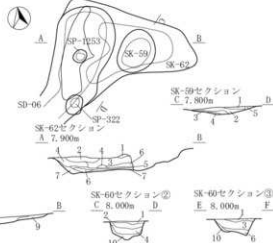
SK-57セクション  
A. 8.900m  
B

SK-58



SK-58セクション  
A. 7.800m  
B

SK-59・62



SK-59セクション  
C. 7.800m  
D

SK-60セクション③  
E. 8.000m  
F

SK-60

SK-60セクション①

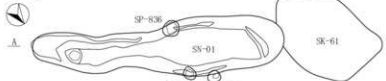
A. 8.000m



SK-60セクション②  
C. 8.000m  
D

SK-60セクション③  
E. 8.000m  
F

SK-61



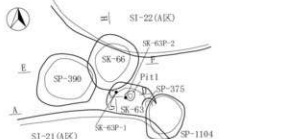
SK-61, SP-307

A. 8.100m



- SK-57 第1層 10W2/2 黒褐色土 パミス粒(φ1~2m)稀少, 炭化材(φ1~15m)微量
- 第2層 10W2/2 黒褐色土 パミス粒・ブロック(φ1~15m)中量, 炭化材(φ1~5m)少
- 第3層 10W1/7/1 黒褐色土 パミス粒(φ1~2m)微量
- 第4層 10W2/2 黒褐色土 パミス粒(φ1~2m)少量
- SK-59 第1層 10W2/2 黒褐色土 焼土粒(φ1~5m)微量, 炭化材(φ1~5m)少量
- 第2層 10W2/3 暗褐色土 パミス粒(φ1~7m)微量, 炭化材(φ1~5m)少量, 砂粒ブロック(φ1~2m)微量
- SK-60 第1層 10W3/6 褐色土 焼土ブロック
- 第2層 10W3/4 暗褐色土 焼土粒(φ1~2m)微量, 砂粒(φ2~3m)微量
- 第3層 10W2/3 黒褐色土 焼土粒(φ1~5m)中量, 炭化材(φ1~5m)少量
- 第4層 10W2/2 暗褐色土 砂粒(φ1~2m)微量
- 第5層 10W2/2 暗褐色土 10W3/4暗褐色土の混入土
- SK-61 第1層 10W2/1 黒褐色土 焼土粒少量, 炭化材少量, 砂粒微量
- 第2層 10W1/7/1 黒褐色土 焼土粒少量, 炭化材微量
- 第3層 10W2/2 暗褐色土 焼土粒微量, 炭化材微量
- 第4層 10W2/2 暗褐色土 焼土粒少量, 炭化材微量
- 第5層 10W3/2 暗褐色土 砂粒多量, 炭化材微量
- 第6層 10W1/7/1 黒褐色土 焼土ブロック(φ20m)微量, 砂粒少量
- 第7層 10W2/2 暗褐色土 砂粒少量, 炭化材微量
- 第8層 10W3/2 暗褐色土 焼土粒少量, 炭化材微量, 砂粒多量

SK-63・66



SK-63, SP-375

A. 8.900m



- SK-63 第1層 10W3/2 暗褐色土 パミス粒(φ3~5m)中量, パミスブロック(φ30m)少量
- 第2層 10W2/2 暗褐色土 パミス粒(φ3~5m)多量
- SK-66 第1層 P111 暗褐色土 パミス粒(φ3~5m)多量
- 第2層 10W2/2 暗褐色土 パミス粒(φ1~2m)少量
- 第3層 10W3/2 暗褐色土 パミス粒(φ1m)中量, パミスブロック(φ10m)微量
- SK-66 第1層 10W3/4 暗褐色土 パミス粒(φ2~5m)少量, パミスブロック(φ30m)少量
- 第2層 10W2/2 暗褐色土 パミス粒(φ1~2m)少量, 炭化材(φ1~5m)少量
- 第3層 10W2/2 暗褐色土 パミス粒(φ1~2m)少量, 炭化材(φ1~5m)中量
- 第4層 10W2/2 暗褐色土 10W3/2暗褐色土少量, 炭化材(φ3~30m)少量
- 第5層 10W2/2 暗褐色土 パミス粒(φ1~4m), パミスブロック(φ10m)中量, 炭化材(φ1~5m)微量
- 第6層 10W3/2 暗褐色土 パミス粒(φ1~5m)多量, 炭化材(φ1~5m)中量

SK-63 P111

C. 8.000m D

SK-66

E. 8.900m

F. G. 8.900m

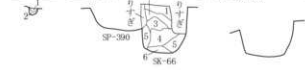


図 1-158 B・C・E SK-1



落に伴う堆積状況を呈している。覆土中から図1-245-166に図示した縄文時代中期に属すると考えられる縄文土器体部片が出土している。

#### SK-67 (図1-159)

X=92096.117, Y=-11883.372付近で検出した。SG-01と重複しているが、直接の切りあい関係は無く、本遺構が一段下がった古い面で検出している。平面形は不整隅丸長方形、断面形は直立気味に立ち上がる。100×86×33cmを測る。堆積土は3層に分層した。底面にブロック混じりの第3層が堆積し、基盤の土質と同質で若干色が濃い土が第1・2層で堆積している。第1層と第2層の差は炭化粒やブロックが第1層側に多く混入している程度である。

#### SK-68 (図1-159)

X=92074.570, Y=-11867.706付近で検出した。SD-16と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は不整隅丸長方形、断面形は皿形で緩やかに立ち上がる。100×[51]×13cmを測る。また、底面には30×23×6cmの小ピット1基を検出している。堆積土はピット部分が1層、土坑全体は基板層のブロック混じりの1層で埋まりきっており、人為的な埋戻しの可能性が高い。

#### SK-69 (図1-160, 245・246)

X=92070.133, Y=-11898.078付近で検出した。SI-28、SK-70、SX-11と重複しており、SK-69≧SX-11<SI-28<SK-70の関係である。平面形は不整長楕円形の形状に幅広い溝状の掘り込みが連結した不整形で、485×225×56cmを測る。断面形は一部袋状に入り込む形状で、底面も凹凸が激しい。SI-40の部分でも記述したが、類似した形態の掘り込みはSI-40内から検出したSK-87・102の状況に類似している。ただし、本遺構は廃絶の後に竪穴が構築されているのに対し、SI-40側は建物が廃絶後に土坑が構築されている。土層は地点により堆積状況が異なり、最大で23層の堆積が認められた箇所がある。埋戻し等による人為堆積の状況を呈する。土坑内からピットを4基検出している取扱であるが、重複する竪穴の軸線と関連したピットも取り扱われており、厳密に本遺構に帰属したとは認定できない。

出土遺物は、図1-245・246に19点図示したが、重複したSI-28の影響も考えられる。土器は、土師器煮炊具と椀文土器主体で、土師器は煮炊具だけで、頸部幅が短いながら頸部があるタイプが多い。椀文土器は176-180の覆土出土の資料と182の中層と覆土の接合資料を図示し

た。他の竪穴の出土資料と同様に土師器煮炊具と椀文土器が共存した事例である。その他、羽口や碗形鍔治平なども出土している。

#### SK-70 (図1-160)

X=92069.992, Y=-11895.894付近で検出した。SI-28、SK-69と重複しており、本遺構がいずれの遺構より新しい。平面形は不整長楕円形で、246×206×20cmを測る。断面形は鍋底状で緩やかに立ち上がる。堆積土は4層に分層し、ブロック混じりの土層が緩やかに堆積した状況で自然堆積状況を呈する。

#### SK-71 (図1-161)

X=92070.945, Y=-11900.433付近で検出した。平面形は不整長方形で、113×76×16cm測る。断面形は段状に立ち上がる形状を呈する。底面中央及び北側に小ピットが2基あり、中央のピットには廃絶後の堆積土が堆積しており、廃絶前まで開口していたものと考えられる。堆積土は2層に分層した。第1層にB-Tm火山灰が混入している。

#### SK-72 (図1-161)

X=92076.711, Y=-11860.226付近で検出した。SP-548・549が重複するが、本遺構の方が古い。平面形は不整長楕円形で、174×121×26cm測る。断面形は鍋底状に底面付近が丸みを帯び壁上部に向け垂直に近い形で立ち上がる。堆積土は3層に分層したが、周辺の基盤層とほぼ同じ土質で、炭化粒等の影響により若干土色が濃い。

#### SK-73 (図1-161, 246)

X=92105.453, Y=-11909.417付近で検出した。SN-03・04が重複するが、本遺構の方が古い。平面形は不整楕円形で、77×62×28cm測る。断面形は段状に立ち上がる箇所がある。堆積土は5層に分層したが、壁際には崩落が加わった堆積状況である。第1層及び覆土から縄文時代前期の土器片が出土している。

#### SK-74 (図1-161, 246)

X=92104.664, Y=-11908.096付近で検出した。SN-03・04、SX-07と重複しており、いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。平面形は小判形を呈し、断面形は垂直に近い形で立ち上がる形である。堆積土は9層に分層したが、上面は切りあいに伴う後段の遺構の掘削部分への堆積等の影響を受けており、本遺構の廃絶後の堆積層としては第5層以下の堆積土で、崩落に伴う自然堆積状況を呈する。出土遺物は覆土中から縄文時代中期の口縁部及び体







部片、石鏡などが出土している。

#### SK-75 (図1-161, 246)

X=92106.094, Y=-11902.170付近で検出した。SK-76と重複しており、本遺構の方が古い。また、本遺構の帰属扱いとしたPit1とほぼ同位置に存在している。SP-708が本遺構の精査後下げた位置での確認であることや、Pit1の記録土層と類似した土層が堆積していることなどから同一遺構の可能性があり、本遺構には帰属しない別遺構であることが考えられる。その場合、直接の新旧関係に関する情報は少ないが、Pit1の覆土の情報はSK-75の最上面に堆積している土層の土質と類似していることなどを見るに本遺構より新しい段階での掘り込みである可能性がある。

検出位置がSX-06と取り扱った斜面の地山丘陵部分とその後の砂層堆積部との境界周辺に相当し、SK-76と本遺構の掘り込みは砂地部分には及んでいない黒色土だが、ブロック混じりの堆積土で相当する西側は掘削深度の差により削平されてしまい、残存していない。平面形は小判形状を呈していると考えられ、255×83×32cmを測る。堆積土は3層に分層したが、ブロック混じりの堆積土で流れ込みの要因が強い。出土遺物は図1-246にSK-76との接合資料を含め10点図示したが、基本的に遺構外の遺物包含層としたA層とC層から出土した遺物と同様の遺物構成で、縄文時代前・中・後期の遺物が混在した内容である。埋没に際し、周辺に廃棄されていた遺物の流れ込みも含めた現象が発生したものと考えられる。

#### SK-76 (図1-161, 246)

X=92104.313, Y=-11902.709付近で検出した。SK-75と重複しており、本遺構の方が新しい。また、SK-75と同様に検出位置がSX-06と取り扱った斜面の地山丘陵部分とその後の砂層堆積部との境界周辺に相当し、掘り込みは砂地部分には及んでいない。斜面上方に相当する西側は掘削深度の差により削平され、残存していない。平面形は不整形楕円形状を呈していると考えられ、143×78×43cmを測る。堆積土は5層に分層し、SK-75に比べ時間幅の短い埋戻しの要因の高い堆積状況を呈している。出土遺物は前述のSK-75との接合資料を含め4点図示した。SK-75と同様に遺構外の堆積土に含まれる遺物の混入要因が高いもので、本遺構から出土した資料は後期主体で中期の資料が若干混入した出土状況であった。

#### SK-77 (図1-162, 246)

X=92090.375, Y=-11885.572付近で検出した。

SK-77はSK-75と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整形円形を呈し、断面形は開き気味に立ち上がる形状である。128×127×51cmを測る。堆積土は5層に分層したが、記録土では最下層に前段のSK-75の掘り方相当の土層がそのまま堆積した状態で記録されている。しかし、堅穴の掘り方がそのまま沈下した状況ではないことから、第6層起因の土層が崩落堆積したものが本遺構の最下層に堆積しているものと判断され、6層分の堆積土が堆積している。堆積状況は図1-246より自然堆積状況を呈する。出土遺物は図1-246-204に図示した縄文土器底部資料で、外面は無文で後期以降の可能性が高い。

#### SK-78 (図1-162)

X=92090.438, Y=-11884.198付近で検出した。SK-77と重複している取扱であるが、本遺構の検出位置はSK-79と同様SK-77の床面上とほぼ同一面であり、SK-78に帰属した遺構であった可能性が高い。平面形は楕円形を呈し、断面は、垂直に近い形で立ち上がる部分と開き気味に緩やかに立ち上がる形状が見られる。60×45×10cmを測る。堆積土は1層で、隣接するSK-79と同質の土層堆積であるが、本遺構の方が若干ブロックや炭化粒の混入量が多い。

#### SK-79 (図1-162)

X=92089.484, Y=-11884.251付近で検出した。前述のSK-78同様SK-77と重複している取扱であるが、SK-78と同様の理由で本遺構はSK-77に帰属した可能性がある。平面形は小判形を呈し、断面形は緩やかに立ち上がる。65×37×8cmを測る。堆積土は1層で、隣接するSK-78と同質の土層堆積であるが、本遺構の方が若干ブロックや炭化粒の混入量が少ない。

#### SK-80 (図1-162, 246)

X=92105.523, Y=-11885.017付近で検出した。SK-77と重複しており、本遺構の方が新しい。また、隣接した位置にSN-08が存在する。平面形は楕円形を呈し、136×113×20cmを測る。断面形は緩やかに立ち上がる。また、小ピットを本遺構の上面から1基、西側の底面から1基検出している。上面から検出したPit1は平面形が不整形円形、断面形が柱状穴を呈し上面が80cm×78×20cm、下面が34×31×17cmを測る。柱設置相当位置に当たる中央の一段下がった落ち込み中に2-3cm大の小礫が少量に混入している。なお、調査時にFと鉄関連遺物扱いの遺物が出土しているが、水洗い後、鉄分が凝結した硬化し

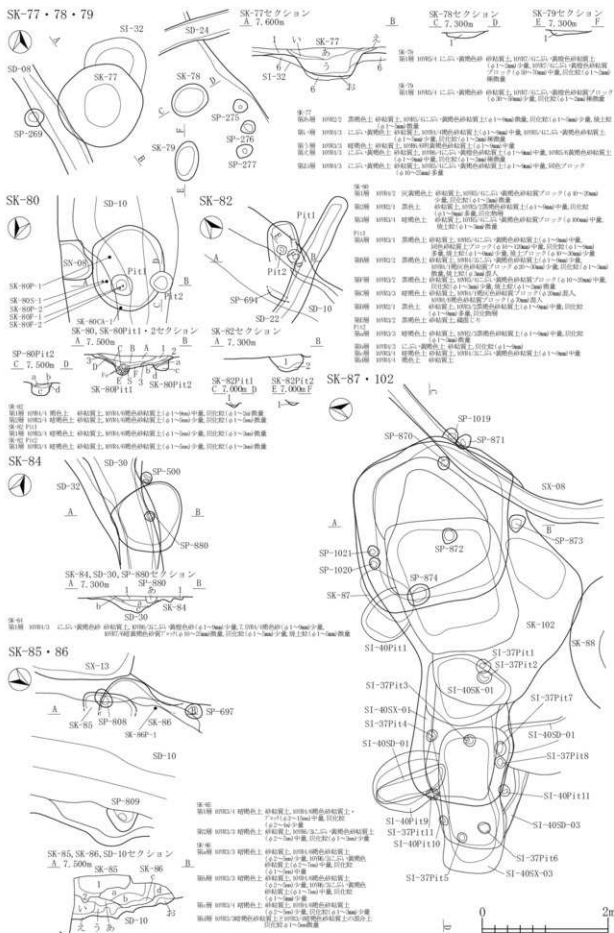


図 1-162 B・C区 SK-5

た土のブロックであることが判明し、自然遺物と認定され、本遺構から鉄関連遺物は出土していない。本遺構と隣接しているSN-08では上面から土師器が出土しているが、下層は焼土化した焼成を検出しており、何らかの焼成施設であったことが考えられる。本遺構のPit 1相当部分とSN-08については関連した可能性がある。Pit 2は平面形が不整形円形を呈し、 $34 \times 34 \times 16$  cmを測る。4層分の堆積層があり、土坑底面側の部分が薄く層が重なった堆積状況を呈している。上面の堆積土は炭化粒が混入している。Pit 1が土坑の堆積土を切る形で大部分を占めているため周縁のみの残存であるが、3層に分層し、第2層が炭化物層である。出土遺物は覆土中から出土した土師器壺1点のみを図1-246-205に図示し、土坑単独の部分はSN-08よりも古相を示している。

## SK-82 (図1-162)

X = 92101.922, Y = -11882.376 付近で検出した。SD-10・22と重複しており、いずれの遺構より本遺構が新しい。調査時に掘削が進んだ時点で確認したため、南側半分が残存していない状況であるが、平面形は長方形を呈しており、 $[61] \times 48 \times 26$  cmを測る。断面形は開き気味に立ち上がる形状である。堆積土は2層に分層し、基盤層起因の土層堆積である。また、底面から小ピット2基を検出し、Pit 1は平面形が楕円形で、 $20 \times 18 \times 8$  cm、Pit 2は平面形が円形で $15 \times 15 \times 6$  cmを測る。いずれのピットも土坑堆積土の第2層と同質の土層が堆積しており、埋没前は土坑と併存していたものと考えられる。

## SK-84 (図1-162)

X = 92071.664, Y = -11891.619 付近で検出した。SD-30、SP-880と重複しており、SD-30 < SK-84 < SP-880の関係である。平面形は不整形円形で、 $118 \times 105 \times 6$  cmを測る。堆積土は1層のみである。

## SK-85 (図1-162)

X = 92099.063, Y = -11883.417 付近で検出した。SK-86、SD-10、SP-808と重複しているが、検出面が異なり、いずれの遺構より本遺構の方が新しい。SD-10の掘削優先で確認が遅れ、東側が欠落しているが、残存部の平面形は小判形、断面形は鍋底状を呈している。規模は、 $[82] \times [26] \times 27$  cmを測る。堆積土は2層に分層されているが、実質的に遺構の覆土として認定できるのは第1層のみで、ブロックの混入が目立つ。

## SK-86 (図1-162, 247)

X = 92099.352, Y = -11883.727 付近で検出した。SK-85、SD-10、SP-697・808と重複しているが、検出面が異なり、SK-85、SP-697より古く、SD-10、SP-808より新しい。SK-85同様東側が欠落しているが、残存部の平面形は不整形を呈しており、断面形は緩やかに立ち上がる形状を呈している。規模は $[160] \times [57] \times 46$  cmを測る。堆積土は4層に分層されているが、北側の第4層は掘り方充墳土の可能性があり、底面からの堆積土は第a-c層の3層分である。覆土中から図1-247-206に図示した土師器壺が出土している。口径 $14.4$  cm、器高 $5.3$  cm、底径 $5.8$  cm、器高指数 $36.8$ 、底径指数 $4.03$ である。やや浅手で、底部下半で開き気味角度を変え、そこから伸ばし上げるように立ち上げた形状である。口唇端部は先細りで内面端部が口当たりを意識したのか面取り状に軽く面を作っている。底部切離しは右回転糸車である。

## SK-87 (図1-162, 163)

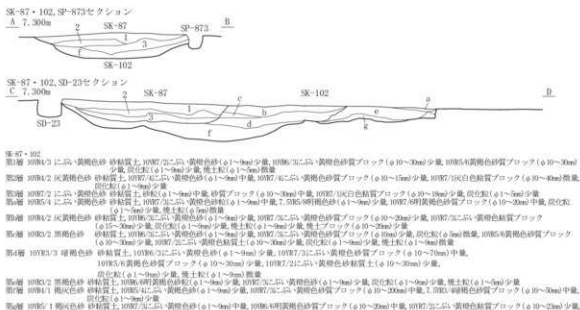
X = 92060.664, Y = -11896.073 付近で検出した。S1-40、SK-102、SD-23などと重複しており、SD-23と小ピットより古く、S1-40、SK-102より新しい。S1-37・40の項目でも記載したが、本遺構の下層には第1層がSK-102などとまたがっていることから前段の遺構としては連結した長い遺構であった可能性がある。SK-87単独としては、不整形丸方形を呈しており $260 \times 238 \times 32$  cmを測る。堆積土は3層に分層した。自然堆積の状況を呈している。また、北西隅の部分で焼土範囲として記録されている部分は焼土ブロックがまばらに堆積する部分である。

## SK-89 (図1-164)

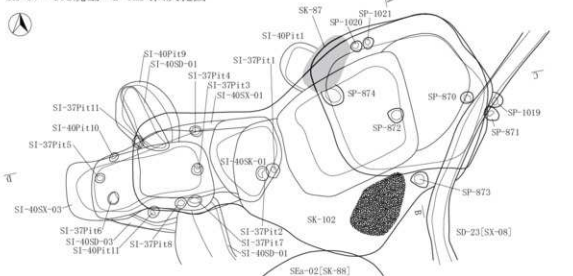
X = 92119.656, Y = -11904.803 付近で検出した。平面形は円形を呈し、断面形は鍋底状で垂直に近い形で立ち上がる。 $71 \times 68 \times 23$  cmを測る。堆積層は4層に分層し、壁際の崩落が伴った堆積状況を呈している。

## SK-90 (図1-164, 247)

X = 92117.461, Y = -11903.692 付近で検出した。平面形は不整形円形を呈し、断面形は鍋底状で垂直に近い形で立ち上がる。 $90 \times 71 \times 31$  cmを測る。堆積層は3層に分層し、壁際の崩落が伴った堆積状況を呈している。覆土中から縄文時代中期の口縁部片が出土している。



SK-87・102焼土・B-Tm火山灰範囲



SK-87掘り方

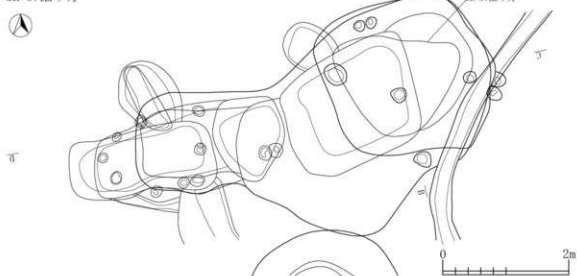


図 1-163 B・C区 SK-6



## SK-9 1 (図1-164)

X=92106.039, Y=-11908.392付近で検出した。A区SI-21SK-02, SN-03, SP-733と重複している。SI-21SK-02についてはA区の調査で先行して調査されており、物理的な重複関係はあるものの、情報が欠落しており不明であり、SN-03との関係は本遺構の方が下位から検出しており、本遺構の方が古い。また、SP-733については確認が下がった位置で確認しているが、SN-03の記録写真等でも痕跡が残存しており、上面で掘りこみが行われていた可能性が高く、本遺構の方が古い可能性がある。平面形は不整小判形を呈しており、断面形は緩やかに立ち上がる形状を呈する。規模は110×61×20cmを測る。堆積土は4層に分層し、壁際の崩落等の伴う自然堆積の状況を呈する。

## SK-9 2 (図1-164, 247)

X=92100.156, Y=-11907.503付近で検出した。SI-23と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整形、断面形は垂直に立ち上がる部分と緩やかに立ち上がる形状を呈す箇所があり、76×72×23cmを測る。覆土中から縄文中期の土器片2点が出土している。

## SK-9 3 (図1-164)

X=92096.625, Y=-11908.395付近で検出した。図面上ではSI-23と重複しているように記録されているが、実質的な重複関係はない。SP-1124と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。平面形は長楕円形、断面形は段状に立ち上がる形である。80×46×26cmを測る。堆積土は5層に分層したが、抜き取りされた柱穴の掘り方と類似した堆積状況である。

## SK-9 4 (図1-164)

X=92118.383, Y=-11894.498付近で検出した。SP-957・958と重複関係にあり、本遺構の方が古い。平面形は隅丸長方形、断面形は垂直に近い形で立ち上がり、一部で緩やかに立ち上がる形である。107×77×16cmを測る。堆積土は3層に分層し、壁際の崩落が伴う自然堆積を呈する。

## SK-9 5 (図1-164)

X=92089.563, Y=-11878.718付近で検出した。SD-10と重複しているが、SD-10の掘削を優先して精査されたため、明確な新旧関係の記録情報ではないが、本遺構として記録された土層情報のうち第3層と第6層が直接本遺構の埋没に関連しない土層で、SD-10側の土層の一部である可能性が

あるため、本遺構の方が新しい可能性がある。平面形は楕円形状を呈しており、残存部の規模は[61]×50×38cmを測る。堆積土は7層に分層したが、前述のとおり、厳密に本遺構に伴う土層は第3・6層を除いた5層分である。中層の第5層が炭化物層で、全般的に焼土・炭化粒等が伴った焼成に関する痕跡が残されている。

## SK-9 6 (図1-164)

X=92072.539, Y=-11884.075付近で検出した。SP-465・950と重複しているが、本遺構の方が古い。平面形は不整形楕円形、断面形は円筒形で、壁の上部の一部で緩やかに立ち上がる形状を呈する。103×90×76cmを測る。また底面中央にPit1とし、22×17×16cmの小ピットがある。堆積土は小ピットの堆積土を含め6層に分層したが、小ピットは底面埋没開始時に既に閉じていた堆積状況で、ブロック混じりの埋戻しがなされた堆積状況を呈している。

## SK-9 7 (図1-164, 165)

X=92067.680, Y=-11887.172付近で検出した。SP-453・454・455・456などと重複しているが、本遺構の方が古い。また、本遺構の西側は上端部の外側まで堆積土が及んでいて、本遺構の前段のピット状の掘り込みを切っており、本遺構の構築前に遺構が存在していた可能性がある。

平面形は不整形楕円形を呈し306×199×32cmを測る。また、底面から小ピット2基を検出した。Pit1は24×19×14cm、Pit2は46×40×16cmを測る。堆積土は7層に分層し、第6層中からは炭化物を検出している。その他底面直上からB-Tm火山灰が堆積しており、Pit2の第1層中でも同様にB-Tm火山灰の混入が認められる。

## SK-9 8 (図1-165, 247)

X=92120.539, Y=-11903.771付近で検出した。平面形は不整形楕円形、断面形は鍋底形で、垂直に近い形で立ち上がる形状である。規模は、124×86×27cmを測る。堆積土は4層に分層し、第1層部分で再掘削が行われている状況であるが、元々の穴は第3層が柱相当位置、第4層が裏込め土である柱穴状の堆積状況を呈している。覆土から図1-247-210・211に図示した縄文土器体部片が出土している。

## SK-9 9 (図1-165)

X=92103.820, Y=-11886.661付近で検出した。SN-09, SD-10と重複しているが、SN



-09より古く、SD-10との関係についてはSD-10の掘削が優先されたため、詳細は不明である。平面形は不整長楕円形を呈し、断面形はU字状に立ち上がる。規模は124×67×33cmを測る。堆積土は2層に分層し、人為的な埋戻しの要因が高いブロック混じりの堆積土である。

#### SK-100 (図1-165)

X=92095.750, Y=-11908.620付近で検出した。SI-31の想定範囲内に位置し、SN-10、SP-735と重複しているが、SN-10の精査後除去した面から本遺構を検出したので、本遺構の方がいずれの遺構よりも古い扱いになる。なお、堆積土についてもSN-10の堆積土とは直接関係のない堆積土である。平面形は不整楕円形で断面形は皿状に開き気味に立ち上がる形である。規模は76×62×11cmを測る。堆積土は3層に分層し、埋戻しの要因が高いブロック混じりの堆積土である。

#### SK-101 (図1-165)

X=92113.656, Y=-11904.021付近で検出した。A区SI-22、SK-104と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は円形、断面形は円筒形を呈し、垂直に近い形で立ち上がる。規模は90×88×36cmを測る。堆積土は間層を含め5層に分層した。一部壁上面で崩落が生じているが、自然堆積の様相を呈する。

#### SK-102 (図1-162・163)

X=92059.852, Y=-11897.337付近で検出した。SI-40、SK-87と重複しており、SI-40<SK-102<SK-87の関係である。SI-40、SK-87の部分でも記載したが、本遺構の重複部分を含め連結した遺構として機能した可能性もある。本遺構は掘り幅が広がった不整長方形の浅い土坑状の施設で、断面形は壁の一部で段状に立ち上がる形状である。規模は304×283×36cmを測る。堆積土は本遺構の堆積土として第a-g層の7層に分層しているが、明確な掘り込みとして機能していた部分は第b-d層の3層分で、他は元々の掘り込みの充填土等段階が異なる。

#### SK-103 (図1-165, 247)

X=92112.336, Y=-11902.413付近で検出した。平面形は楕円形を呈し、断面形は鍋底状を呈する。88×70×33cmを測る。堆積土は3層に分層し、第1層はややバミスブロック等の混入が多いが、自然堆積の様相を呈する。図1-247-212・213は、覆土中から出土した縄文時代中期の口縁破片の一部である。

#### SK-104 (図1-165)

X=92114.445, Y=-11904.684付近で検出した。A区SI-22、SK-101、SP-1163・1183と重複しており、SK-101、SP-1163・1183より古く、A区SI-22については本遺構の第1-3層までがSI-22の堆積土の可能性が高く、帰属ないしは前段階に属した遺構として認定できる。平面形は不整楕円形を呈し、170×134×42cmを測る。堆積土は5層に分層したが、前述のとおり第1-3層まではSI-22との関連性が考慮され、底面直上に薄くまばらに堆積した第5層の上位をバミス粒混じりの第4層でほとんど埋め尽くすような状況で堆積している。

#### SK-105 (図1-165, 247)

X=92054.594, Y=-11897.411付近で検出した。SI-37 Pit 19、SI-40 SD-02、SEa-02、SD-12と重複しており、SI-40 SD-02より新しく、他の遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、断面形は漏斗状に緩やかに立ち上がる形状である。規模は218×(187)×50cmを測り、底面中央に72×57×11cmの水溜状の掘り込みがある。堆積土は6層に分層し、壁際から堆積する自然堆積の状況を呈する。覆土中から図1-247-214に図示した擦文土器体部片が出土している。

#### SK-106 (図1-166, 247)

X=92037.102, Y=-11906.777付近で検出した。平面形は不整楕円形を呈しており、250×220×38cmを測る。また、西側の底面からPit 1とした小ピットを検出した。52×46×8cmを測る。堆積土は4層に分層し、Pit 1の堆積土と底面直上に堆積する第4層は同質の土が堆積している。また、南西側の底面直上から焼土・炭化物・鉄滓が出土しており、廃棄が伴っている。

#### SK-107 (図1-166)

X=92040.789, Y=-11907.306付近で検出した。SD-42と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は不整長楕円形、断面形は段状に立ち上がる形状を呈しており、(380)×289×56cmを測る。堆積土は1層に分層し、φ250mmとサイズの大きなブロックが混入した人為的堆積状況を呈する。

### 3. 井戸跡

#### SEa-02 [SK-88] (図1-166・167, 247)

X=92056.820, Y=-11897.433付近で検出した。調査時は土坑番号であるSK-88として調査され



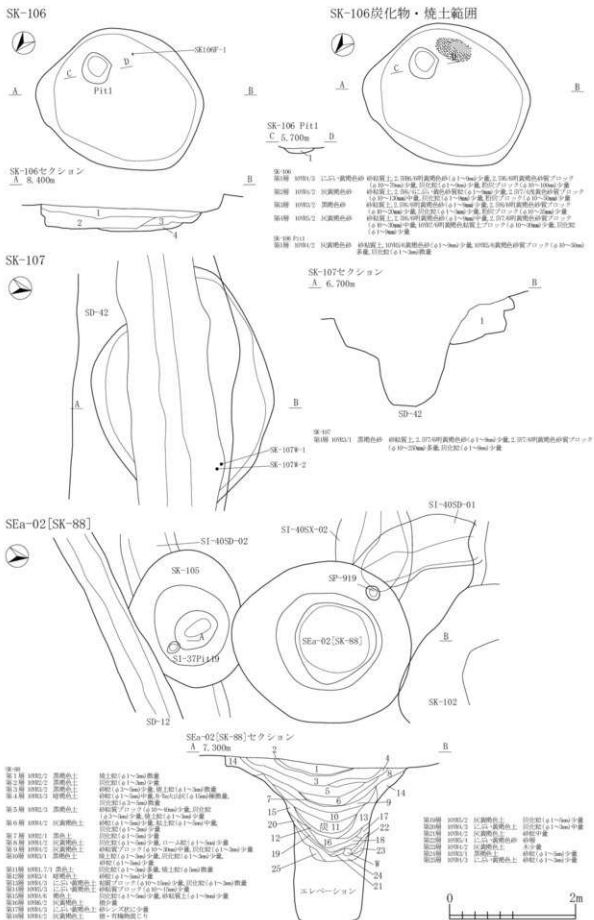


図 1-166 B・C区 SK-9,SE-1

たが、整理時に遺構名を井戸跡の区分に変更した。

S I-40、SK-105、SP-919と重複しており、S I-40、SK-105より新しく、SP-919より古い。平面形は不整形円形、断面形は中位まで円筒形で、壁上部で緩やかに立ち上がる形状である。規模は、 $2.85 \times 2.57 \times 2.50$  cmを測る。堆積土は中層以下が湧水等の影響により土層記録ができずエレベーションによる形状の記録のみであるが、中層までで2.5層の土層堆積を記録している。炭化物や焼土粒、砂粒やブロック等を含む流れ込みの堆積状況を呈しており、周辺環境の堆積土が流入した堆積を呈している。第4層からB-Tm火山灰が混入した記録がなされているが、ブロック状の堆積状況で、S I-28などと同様に降灰後の土の流動を含めた影響を考慮する必要性がある。

出土遺物は図1-247に10点図示した。覆土出土の資料として215は須恵器甕体部片で、焼成良好品で、非五所川原産の胎土・調整である。216は土師器甕で口径25.6 cmを測る。頸部が短く、口縁部は上端を軽く折り曲げたような形状である。217・218は縄文土器片、219は縄文時代晩期の土偶の胎である。220・223は中層出土の自然木を含めた木製品で、220・221は炭化している。それ以外にクワ属やクルミなどの種実を多数検出している。下層出土の資料は224に図示した1点のみで部材の一部と考えられるが、腐食が進み、丸みを帯びた遺存状況であった。

#### 4. 焼成関連遺構

S N-01 (図1-168, 248・249)

X=92089.773, Y=-11901.309付近で検出した。SK-61、SP-832・833・836と重複しており、SK-61 < SN-01 < SP-832・833・836の関係である。木炭窯の形状を呈しており、 $3.96 \times 9.3 \times 4.3$  cmを測り、主軸はN-126°-Eである。斜面下方に向けて煙出が延びる構築方法である。また、堆積土は2.9層に分層した。本遺構は操業面が2面あり、一次操業面は第2.4・2.5・2.7・2.8層を床面とし、煙道の煙出はSP-307とした第2・3層部分に相当する。二次操業面に相当する部分は一次操業面の部分に第1.3・2.2・2.3層などが盛り、第2.0層下部分を床面として煙出部分が第1.2・1.6・1.9層の堆積する部分を利用して、一次的構造より少し短めな構造に変更している。二次の前庭部から煙道部分までの全長は3.65 cmと3.0 cm短くなっている。遺物は前庭側から燃焼部にかけて破片資料主体で出土しているが、図1-248に図示した覆土出土の2.25、中層出土の2.28はいずれも土師器煮炊具で、覆土出土の2.26・2.27は混入していた縄文

土器体部片である。

S N-02 (図1-168)

X=92071.188, Y=-11885.232付近で検出した。周辺には多数の小ピットとともにSD-27・28・30・32がの字状に巡った配置である。 $7.8 \times 7.5 \times 8$  cmの浅い落ち込み状に焼土ブロックが多量に含まれ焼土層が堆積している。堆積土は3層に分層したが上面の焼土層の下に焼土粒・炭化粒を含む土層の堆積が認められる。調査時にはS Iの認定はされていないが、小ピットや周辺のSDの配置状況を踏まえると本遺構は堅穴のカマド火床面に相当した可能性が高い。SNから出土した遺物は図示していないが、土師器甕体部片がほとんどであり、明確に古代に帰属する可能性が高い。

S N-03 (図1-168, 248)

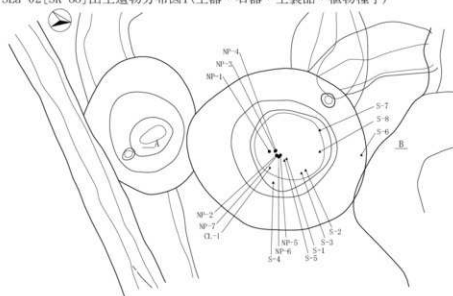
X=92105.555, Y=-11908.324付近で検出した。SK-73・74・91、SP-733と重複しており、SK-73・74・91より新しく、SP-733は直接新旧関係の把握できる位置の土層堆積等の記録は残っていないが、記録写真などを確認するとSP-733の堆積土がSN-03の上面でも確認されており、本遺構の方が古い可能性がある。浅い円形の土坑状の掘り方の中央に焼土ブロック化した焼土層、周辺に粘土を検出している。土坑状の掘り方は $1.87 \times (1.26) \times 1.6$  cmを測る。図1-248-2.29は縄文時代後期の口縁部片である。

S N-04 (図1-169, 248・249)

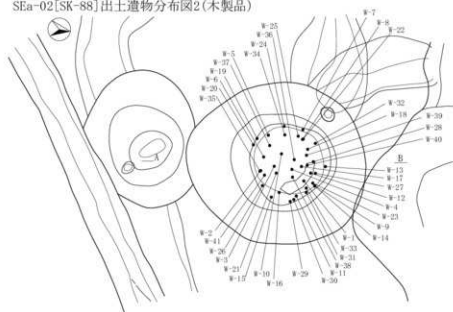
X=92104.656, Y=-11909.773付近で検出した。SK-73・74と重複しており、本遺構の方が新しい。本遺構はSN-01同様木炭窯で、 $4.00 \times 1.10 \times 5.7$  cmを測り、長軸方向の規模はSN-01とほぼ同じである。主軸はN-118°-Eである。また、堆積土は2.2層に分層した。第7層中からB-Tm火山灰を粒状に検出している。

本遺構はSN-01よりも操業面が若干多く4面ある。一次操業面は掘り込み最下層の第2.1層から底面を通るラインで、第2.0層中に炭化物の残留物が確認される。その後、第1.8・1.9層で面を調整され、第1.5層下端の面での操業(二次)、第1.4層上位の面での操業(三次)、第8・9層により形成される面(四次)の操業に利用されたものと考えられる。煙出側が斜面下方に相当する影響か、各段階とも煙出方向へ向けて立ち上がるような面形成を行なっている。また、本遺構からは廃棄に伴い多量の遺物が出土している。破片そのものは接合関係が認められたが、接合破片間で色調の異なるものや破断面が摩擦した資料が多く見受けられる。接合状況を確

SEa-02[SK-88]出土遺物分布図1(土器・石器・土製品・植物種子)



SEa-02[SK-88]出土遺物分布図2(木製品)



SEa-02[SK-88]出土遺物・種子検出範囲,炭化物範囲図

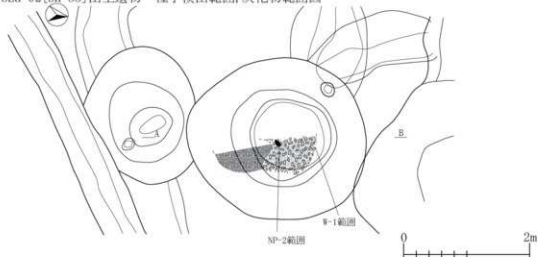


図 1-167 B・C区 SE-2

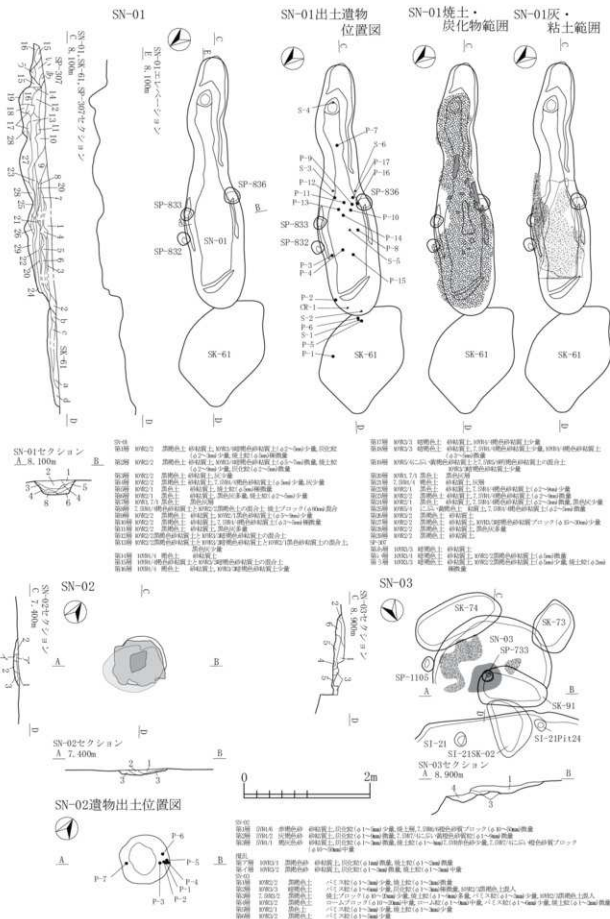
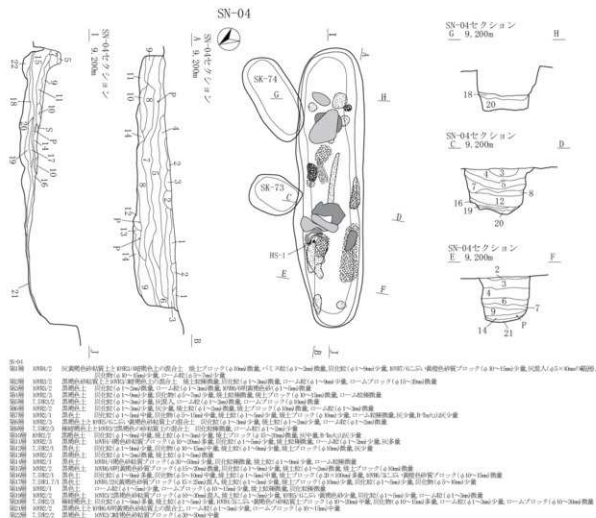


図 1-168 B・C区SN-1





SN-04出土土器位置図

SN-04出土土器品等・鉄関連遺物・植物種子分布図

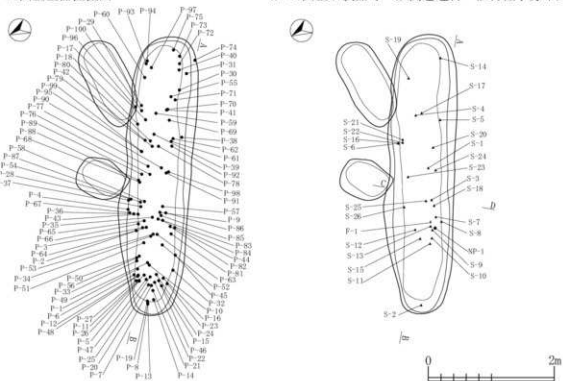


図 1-169 B・C区 SN-2

認すると中層と下層と底面、覆土と中層と下層などの接合も認められ、破片化した状況で窠内に残り、流動していた可能性がある。図1-248・249に15点図示した。内訳は、底面から土師器椀の口縁部資料(図1-249-243)と口縁部が肥厚化し、括れの甘い甕の破片(図1-249-244)が出土し、下層から頸部幅の短い甕の口縁部片(図1-249-239)、製塩土器の底部(図1-249-240)、スサ入りの円盤状の焼成粘土塊(図1-249-241)、木葉底のあるスサ入り焼成粘土塊(図1-249-242)、中層出土の軽石(図1-248-234)、覆土出土の土師器椀底部(図1-248-230)、甕口縁部(図1-248-231)、層間接合資料として、土師器瓶(図1-248-233)、土師器甕(図1-248-236・237)、擦文土器(図1-248-235)、縄文土器(図1-248-238)、遺構外出土との接合資料の土偶(図1-248-232)である。

#### SN-06(図1-170)

X=92110.297, Y=-11889.278付近で検出した。SG-01、SP-1239・1240と重複しており、SG-01より古く、SP-1239・1240とは検出面が異なるため、本遺構の方が新しい。

平面形はカマド状遺構に類似した形態で、227×101×116cmを測り、主軸はN-4°-Wである。堆積土は4層に分層したが、検出面が実際の遺構の掘り込みよりも低い位置で検出した状況で、第1層から灰を多量検出しており、第1層下部が床面であったものと考えられる。煙出部は北端が30cm程突出した状況である。規模が異なるが、SN-01・04が斜面下方に煙出が作られていたのに対し、本遺構は斜面上方に向かって煙出が作られている点や、堆積状況などを比較すると本遺構はSN-01・04よりは新しい段階に機能していたものと思われる。

#### SN-07(図1-170)

X=92080.859, Y=-11866.249付近で検出した。平面形はカマド状で88×55×116cmを測る。主軸はN-12°-Wで、地点は離れているが、SN-06と同様に斜面上方を向いた構築がなされている。前庭側があまり被熱しておらず、煙出相当部分に炭化粒・物がやや多く検出している。

#### SN-08(図1-170,249)

X=92105.750, Y=-11884.210付近で検出した。SD-10と重複しており、本遺構が新しい。また、隣接するSK-80と関連した可能性がある。東側はSD-10の壁面より外側に延びずに不整形を

呈し、63×50×26cmを測る。なお、北側は土坑状の掘り方より70cmほど北側に延びた広がりである。断面形は鍋底状の土坑と浅い掘り込みが組み合わされた形状で、堆積土は掘り方充填を含め19層に分層した。掘り方よりも12cm程度高い第13層上面で焼成が行われており、第13層が焼土化している。遺物は火床面より上面の第3・8層主体に出土しており、図1-249に図示した出土遺物3点も第3・4・8層出土の資料である。245は第3層出土で、口径29.6cmとやや大ぶりのタイプである。器形と内面の調整が擦文土器と類似するが、外面は無文で土師器的な要素がある。246は、第3・4・8層出土の土師器甕で、口径19.2cmを測る。体部に最大径がくするタイプで、口縁は直立気味に立ち上がる。247は第4・8層出土の土師器甕で口径22.6cmを測る。246に比べると頸部幅があり、頸部の括れもあるが、体部側に最大径のある器形である。

#### SN-09(図1-171)

X=92104.406, Y=-11887.012付近で検出した。SK-99、SG-01、SP-399・605と重複しており、SG-01より新しく、SG-01、SP-399・605より古い。また周辺にはSN-08とSK-80が近接している。

平面形は溝状の掘り込みとピット状の掘り込みが組み合わされた状況で、平面形はカマド状と類似した形状である。断面形もピット状に掘りこまれた部分が深く、そこから段状に立ち上がる形状である。規模は179×75×46cmを測る。下一中層にかけて堆積する第9・10層に灰が多量に混入している。

#### SN-10(図1-171,249)

X=92095.586, Y=-11908.496付近で検出した。SK-100、SP-735と重複しており、SK-100より新しく、SP-735より古い。S1-31と規定した竅穴想定範囲内に位置しており、仮に本遺構が帰属すると想定した場合、南西向きのカマド火床面の取扱となる。周辺の基盤は黒色土を基調としているが、楕円形の焼土化した範囲であり、下層は黒褐色土が焦土化し、赤褐色には至らない褐色-明褐色土の色調を呈している。焼土上から図1-249に図示した土師器甕(248)と縄文土器片(249)が出土している。

#### SN-11(図1-171)

X=92114.156, Y=-11899.170付近で検出した。SG-01と重複しており、本遺構の方が古い。また、本遺構はS1-39相当の範囲内に所在してお





りの崩落土が堆積した堆積状況を呈している。出土遺物は図1-249に3点図示したが、250・251は縄文時代中期の口縁部片、252は環状土製品で、同様の資料はSI-31の覆土中などからも出土しており、縄文時代の資料については本遺構と同様に縄文時代中期の資料を主体とする縄文土器が出土している遺構である。

## 6. その他の遺構

### SX-03 (図1-172, 249)

X=92101.273, Y=-11899.460付近で検出した。SP-206~214・1193・1198・1211・1218・1220・1229・1255と重複しているが、明瞭な新旧関係について記録が残存しておらず、本遺構と併存した可能性があるビットも含まれる。平面形は長方形で北東側に突出部を有する。規模は493×295×21cmを測る。東側にSI-30が所在しており、軸線が類似した配置である。堆積土は8層に分層し、最上面の第1層中には焼土や炭化物の混入が顕著である。底面には凹凸があり、壁際は緩やかに立ち上がる。出土遺物は図1-249中に縄文土器破片2点を図示した。

### SX-04 (図1-172, 249・250)

X=92095.945, Y=-11901.787付近で検出した。SP-152・782・822・1225・1264・1265・1271と重複しているが、本遺構の方が古い。また、SD-06と近接しているが、切り合い関係はなく、前段からの配置が意識されたか、併存した可能性がある。その他南側にSI-25・34が所在しており、本遺構はSI-34と軸線が類似している。平面形は不整形長方形を呈しており543×195×26cmを測る。堆積土は地点により土層名称が異なるが、4層に分層し、SX-03と同様に最上層の第1層中に焼土粒・炭化物の混入がある。出土遺物は図1-249中に覆土出土の土器器身・小壺、擦文土器、縄文土器片を図示し、図1-250-259は隣接するSD-06覆土と接合した土器器身である。

### SX-06・07・14 (図1-173~179, 255~262)

X=92124.000, Y=-11898.000~X=92091.000, Y=-11908.000付近で検出した。調査開始時には当初SX-06を堅穴住居扱いで精査しているが、SX-14と同様に斜面の落ち際の境界部分の粘土検出範囲として出土遺物が取り扱われており、付近一帯の遺構外出土遺物のまとまりとして本項では取り扱う。ただ、SX-06扱いで取り上げられた遺物の分布状況を確認すると、SI-38の西側に隣接する方形の焼土・炭化物検出地点内にも合致してお

り、当初の堅穴認定されたSX-06についてはSI-38と重複ないしは併存した堅穴住居跡であった可能性がある。SX-07は不整形円形の土坑状を呈し、316×223×58cmを測る。SP-182・183・551・729・747・1106と重複しており、本遺構の方が古い。図1-177で図示したSTP-01の土層堆積図上で本遺構の土層堆積についても図示しているが、SX-06と同様に高い位置から掘り込みが行われており、堆積土中からB-Tm火山灰の検出が認められることなど、本遺構そのものについてはSX-06・14とも異なる時期の新段階の遺構であることが考えられる。

出土遺物は図1-255~262に図示したが、SX-06については、遺構外の遺物包含層の土層番号と同一の層名が付された資料が多く、実質的に遺構外出土資料と同質の内容であるものと考えられる。上層に相当する第A層からは第III群の縄文時代後期に相当する資料が主体的に出土しており、下層の第C層からは第I群や第II群の遺物が主体ではあるが、一部図1-258-471~475や図1-259-491のような縄文時代後期の資料も含まれている。SX-07についてもB-Tm火山灰が混入している記録はあるが、出土遺物そのものは縄文時代中・後期の遺物が混在した状況である。505は覆土出土の土製品で、中空の土偶状の資料である。

SX-14もSX-06とほぼ類似した様相であり、縄文時代中期の資料として521・522・531・532などの覆林式の資料が他の遺構扱いの地点よりも比較的多く出土している。

### SX-10 (図1-180)

X=92069.586, Y=-11900.309付近で検出した。長方形の土坑状を呈し、118×56×9cmを測る。断面形は垂直に近い形で立ち上がる。堆積土は1層に分層し、ブロック混じりの人為的な堆積状況を呈する。

### SX-11 (図1-180, 250)

X=92065.867, Y=-11898.884付近で検出した。SI-28、SK-69などと重複しており、SI-28より古く、SK-69とは連結していた可能性がある。平面形は不整形円形状を呈し、315×150×50cmを測る。断面形は一段段状を呈しているが、他は垂直に近い形で立ち上がっている。堆積土は13層に分層し、ブロック混じりの人為的な堆積状況を呈する。調査時に本遺構の帰属扱いでビット3基が精査されているが、厳密に本遺構に帰属したと認定できるものは少なく、Pit1につい

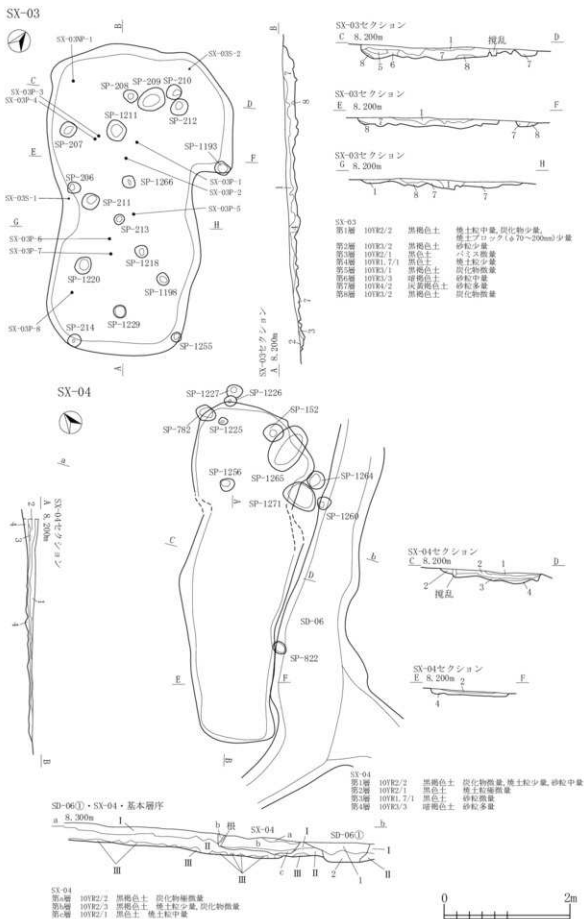


図 1-172 B・C区SX-1

Ⓐ SX-06・07・14(S=1/150)



Ⓐ 1-173 B・C区 SX-2





SX-06·07·14出土遗物位置图1



图 1-175 B·C区 SX-4

SX-06・07・14出土物位置位置図2



図 1-176 B・C区 SX-5

SX-06·07·14出土物位置图3



图 1-177 B·C区 SX-6

SX-06・07・14出土遺物位置図4



図 1-178 B・C区SX-7

SX-06・07・14出土遺物位置図5,骨・炭化物サンプル位置図

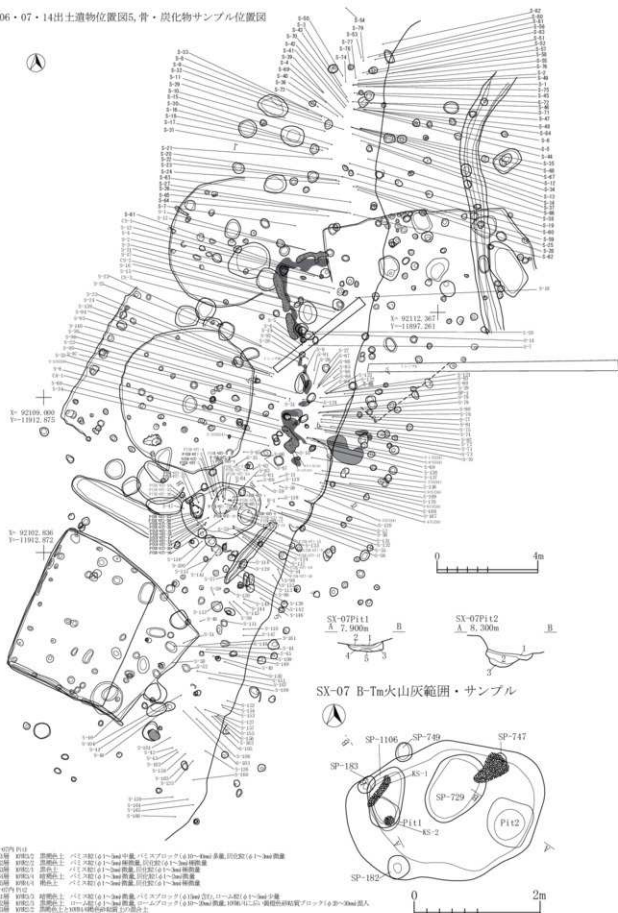


図 1-179 B・C区 SX-8



てはS I-28に帰属した可能性がある。覆土から出土した土師器甕1点を図示した。体部に最大径を持つタイプで、頸部幅が短いものの口縁部は括れを持っている。

#### SX-12 (図1-180)

X=92081.898, Y=-11890.097付近で検出した。SD-19と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整形長方形を呈しており、113×70×14cmを測る。堆積土は3層に分層したが、壁際の崩落が伴う人為的埋め戻しの要因が高い堆積状況である。

#### SX-15 (図1-180)

X=92096.266, Y=-11898.070付近で検出した。SP-153・1261・1262と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は溝状を呈し、357×61×23cmを測る。堆積土は2層に分層し、ブロックは多少混入するが、自然堆積状況を呈する。本遺構の南側にはS I-25・34が所在し、北側にはその付属施設の可能性があるSD-06が所在している。本遺構はSD-06とS I-25・34の間に挟まれた位置から検出しており、本遺構の用途としても雨落ち溝等の排水設備の可能性もある。

#### SX-16 (図1-180, 250)

X=92122.047, Y=-11896.544付近で検出した。SC-03と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整形長方形を呈し、186×96×54cmを測る。断面形は一部で袋状に入り込む部分や、段状に立ち上がる部分が認められる。出土遺物は図1-250に3点図示したが、縄文時代前・中・後期の破片が出土している。262は縄文時代後期の注口土師器の注口部の根元部分である。

#### SX-17 (図1-181, 250)

X=92114.109, Y=-11894.492付近で検出した。S I-38、SD-08、SG-01と重複しており、S I-38、SG-01より古く、SD-08より新しい。また、S I-38については床面の掘り方充填土よりは古いが、掘り方土坑として機能した可能性もある。平面形は不整形円形を呈し、231×116×48cmを測る。底面は凹凸があり、断面は段状に立ち上がる形状である。図1-250-264に覆土中から出土した縄文土器破片を図示した。

#### SX-18 (図1-181, 250)

X=92058.594, Y=-11902.519付近で検出した。S I-40SD-02と重複しているが、重複部分

が後世の畑による擾乱で不明瞭である。ただ、S I-40SD-02とした溝跡の北端部に接する形で、この溝は堅穴施設の外周を巡るL字状の溝であり、本遺構とは調査時に別遺構としたが、底面に相当する第3層直上に堆積する第2層は炭化物層で、同様に床面に炭化物の影響を受けているS I-40の炭化物範囲の延長部にも合致していることなどを踏まえると本遺構もS I-40相当施設に該当した可能性がある。堆積層は5層分で記録されているが、小文字アルファベットとした第a・b層は基盤層の堆積土層と同質で、本遺構の堆積土として認定できるのは第1～3層までである。図1-250に図示した資料は覆土中から出土した擦文土器(265)と土師器甕(266・267)である。

#### SX-20 (図1-230)

X=92075.000, Y=-11861.000付近で検出した。SD-25と重複しているが、本遺構が古い。幅175cm、深さ20cmの土層堆積が確認されている。

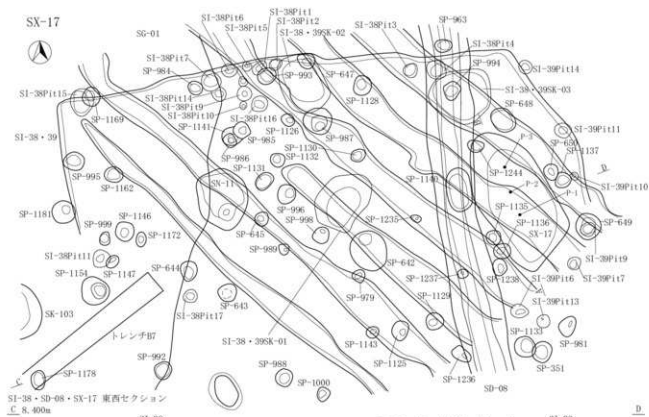
#### SX-22 (図1-181, 250)

X=92097.555, Y=-11899.332付近で検出した。SD-06と重複しているが、本遺構はSD-06を検出した砂層上面より下段の黒色土中から検出しており、本遺構の方が古い。平面形は小判形の土坑状を呈しており、122×73×18cmを測る。断面形は垂直に近い形で立ち上がる形状である。堆積土は2層に分層した。出土遺物は縄文時代中期の土器片が2点出土しており、遺構の帰属時期として認定できる。

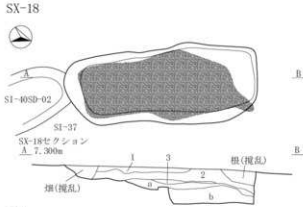
### 7. ビット (図1-182～220, 250・251)

調査区内から多数のビットを検出した。掘立柱建物跡や堅穴住居跡の柱穴として機能した可能性のあるものも含まれると思われるが、調査時の情報を元に分割図を作成し、対応するビットの土層堆積図を掲載した。また、遺構内ビットと取り扱ったものの中には緻密に柱穴に帰属しないものも含まれていたが、掲載に際し調査時の遺構側に掲載している。

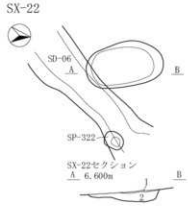
出土遺物は図1-250・251に掲載したが、遺構の覆土中に混入した縄文土器がほとんどで、遺構外に包含していた遺物が埋没に際し、流動等により混入した資料が多く見受けられる。その他SP-306・332・730からは古銭が出土しており、判読に難があるものも含まれるが、いずれの資料も「至大通寶」(1310年初鋳)である。他の遺構内からの出土資料で、中世に帰属する資料はなく、遺構外から珠洲焼が出土している程度である。同種の古銭はB区の遺構外やI区のSP-0033からも



- 遺跡 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量  
 遺構 3002 砂粘質土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量、灰土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、砂粘質フック(a3a)少量、人、住土(a1~3a)少量  
 遺物 3004 焼土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量



- 遺跡 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、砂粘質フック(a3a)少量、人、住土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量



- 遺跡 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、焼土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量、砂粘質フック(a3a)少量、人、住土(a1~3a)少量  
 遺物 3002 赤褐色土、砂粘質土、暗褐色土、黄褐色粘質土(a1~3a)少量

SX-18出土物位置図

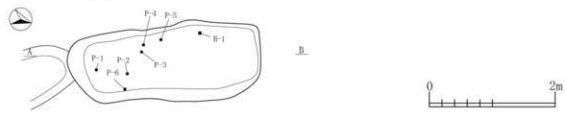


図 1-181 B・C区 SX-10





図 1-182 B・C区 SP-1



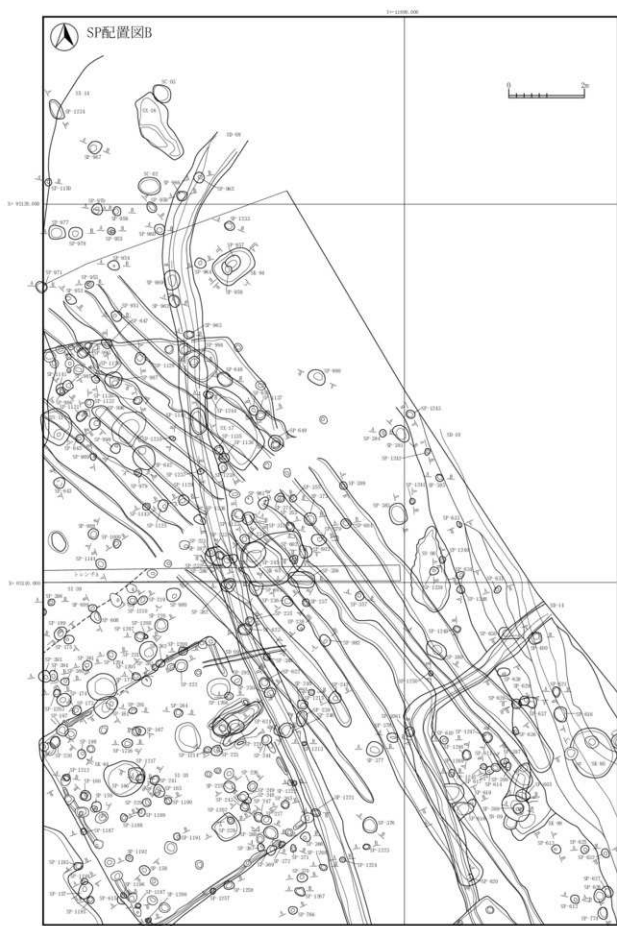


図 1-184 B・C区SP-3

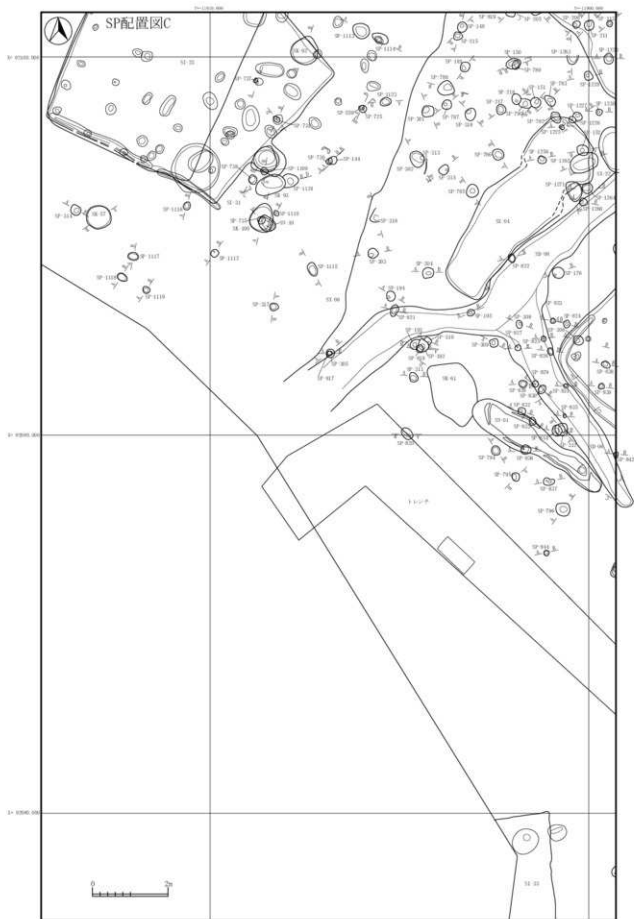


図 1-185 B・C区 SP-4

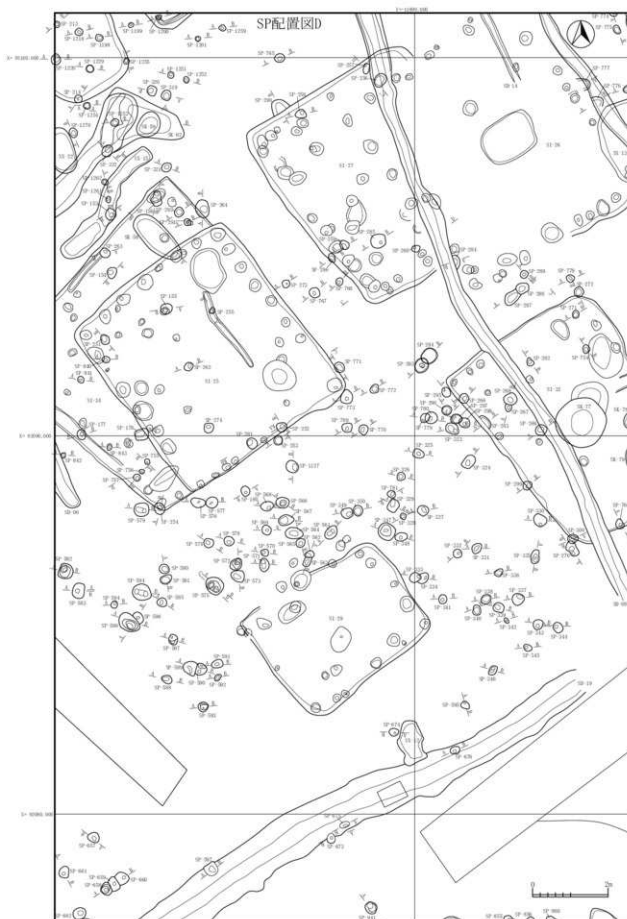


図 1-186 B・C区 SP-5



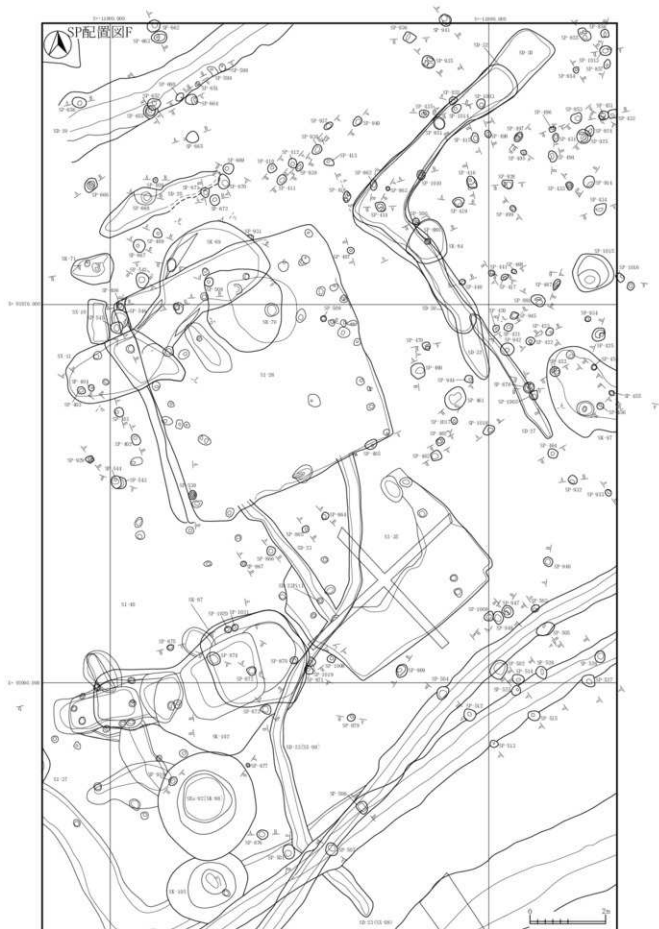


図 1-188 B・C区 SP-7





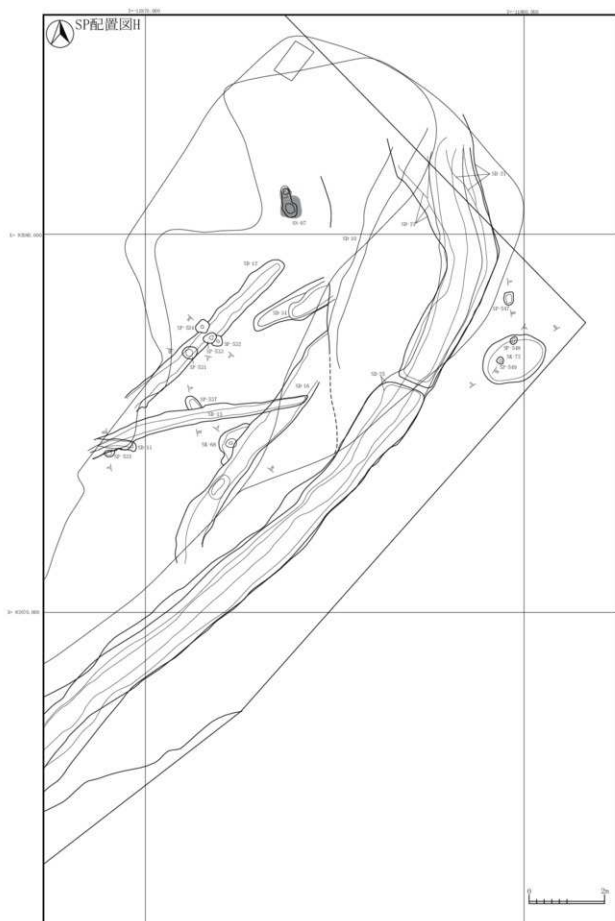


図 1-190 B・C区 SP-9

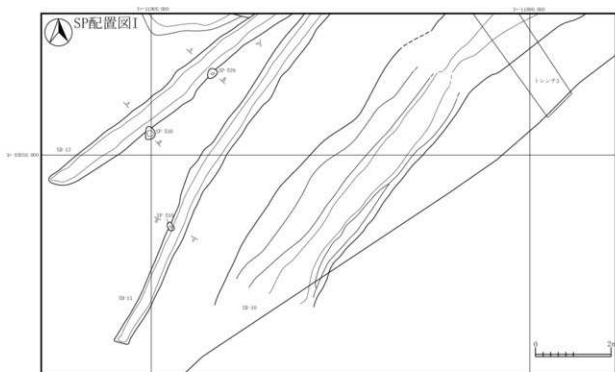


図 1-191 B・C区 SP-10

出土している。

### 8. 畝状遺構

SG-001 (図1-221, 255)

X = 92118.000, Y = -11897.000 ~ X = 92106.500, Y = -11891.000 付近で検出した。A区のSX-001とした遺構と連続する遺構の可能性が高い。砂層の最上位で検出しており、重複するいずれの遺構よりも上位にあり、本遺構の方が新しい。畝間を6条検出し、その範囲は幅4.7m、長さ19.4mの範囲に及ぶ。発掘調査前の地割に即する軸線ではあるが、検出地点には作業小屋が建てられていた地点にあり、調査直前より一段階以上古い時点の畝跡である可能性が高い。図1-255-4・23に覆土から出土した縄文土器片を図示した。

### 9. 溝跡

SD-006 (図1-223, 252)

X = 92091.500, Y = -11906.800 ~ X = 92098.500, Y = -11987.800 付近で検出した。SK-62、SX-22、SP-195・308・312・322・817・821・822・825・826・827・829・830・831・835・1253・1260と重複しており、SK-62、SX-22より新しく、他のピットよりは古い。幅43~114cm、長さ12.8mを測る。溝の途中で、斜面下方に流路が分かれており、5.8mほど延びている。深さは29~37cmを測る。他の

遺構の項目でも記載しているが、本遺構の斜面下方にはS1-25・34が位置しており、本遺構は外周溝的な位置づけとなる。出土遺物は図1-252中に10点図示したが、溝の機能した時期に関連した資料は348~351の資料である。348は土師器甕であるが、破片であるため、径の復元に至らなかった。口唇は先細り気味であるが、口縁部は肥厚化せず、直線気味に立ち上がる。350は図上復元の土師器把手付小甕で、口径12.0cmを測る。短頸で、口唇端部は面取り気味に平滑である。把手は上向きに接合されており、体内内面側が若干肥厚化している。

SD-007 (図1-252)

調査時に欠番となった遺構であるが、本遺構扱いで出土した遺物が定量あったので、遺物について図1-252中に9点図示した。縄文時代前・中・後期の資料が混在した状況で後期の資料が若干量が多い傾向にある。

SD-008 (図1-224・225, 252)

X = 92121.766, Y = -11894.571 ~ X = 92085.906, Y = -11884.431 付近で検出した。調査区を南北に走る溝跡で、斜面上方に相当する北側が若干東側に振った軸線である。幅18~50cm、長さ39mを測る。S1-26・27・30・32・38と重複しており、S1-30より新しく、他の堅穴より古い。出土遺物は図1-252中に5点図示したが、縄

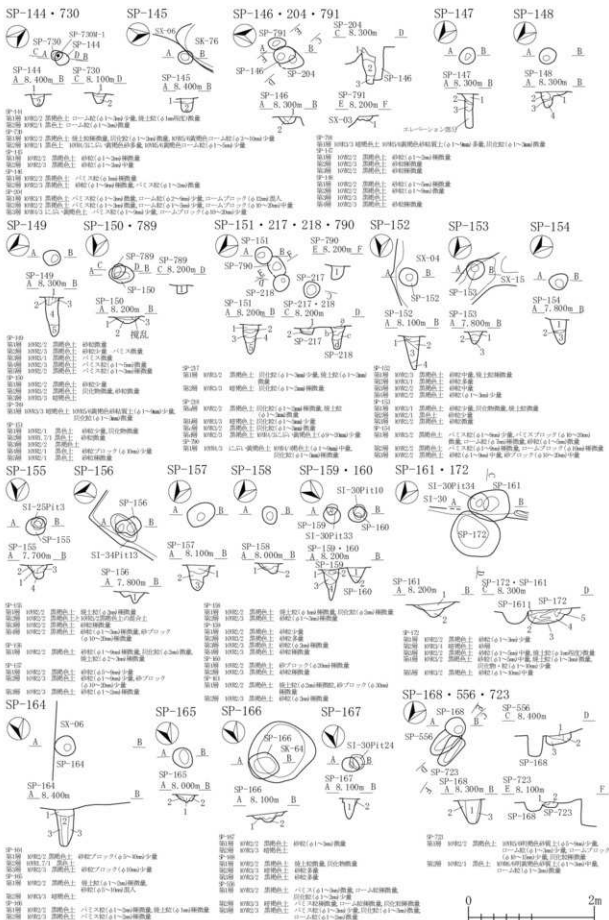


図 1-192 B・C区 SP-11

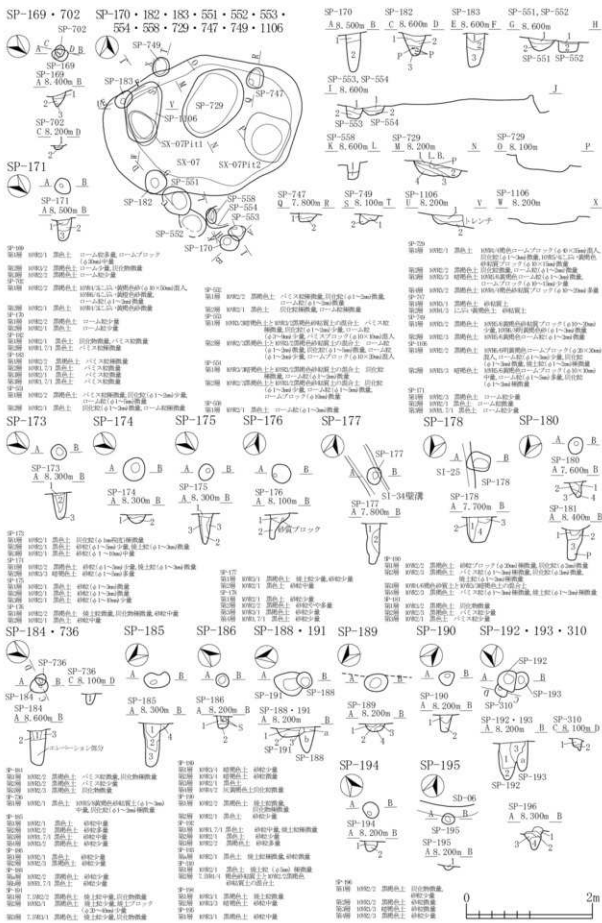


図 1-193 B・C区 SP-12

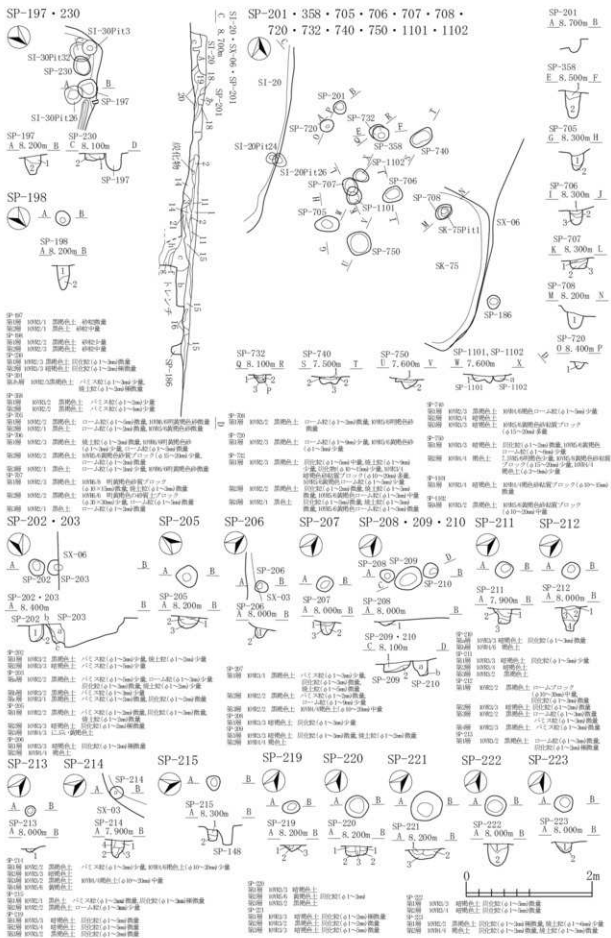


図 1-194 B・C区 SP-13



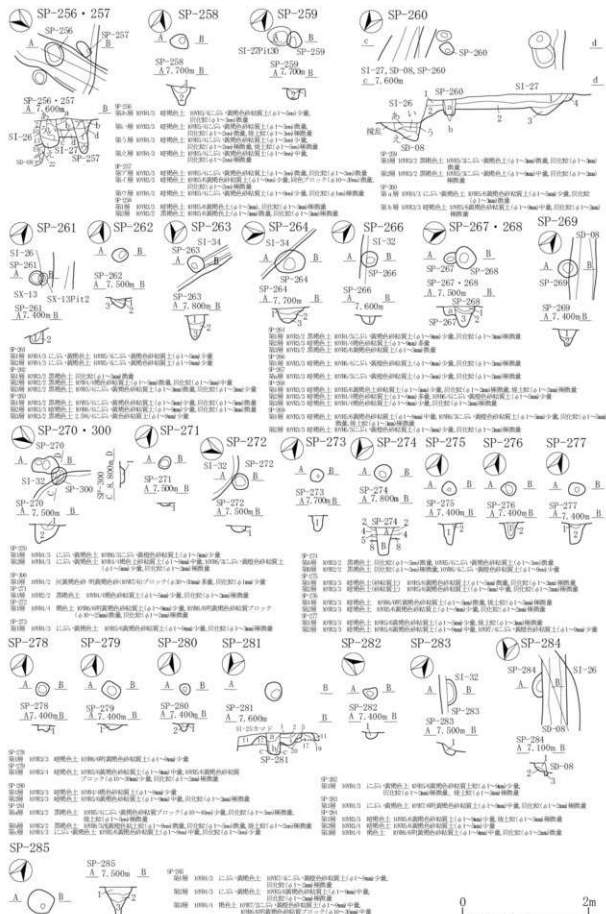


図 1-196 B・C区 SP-15

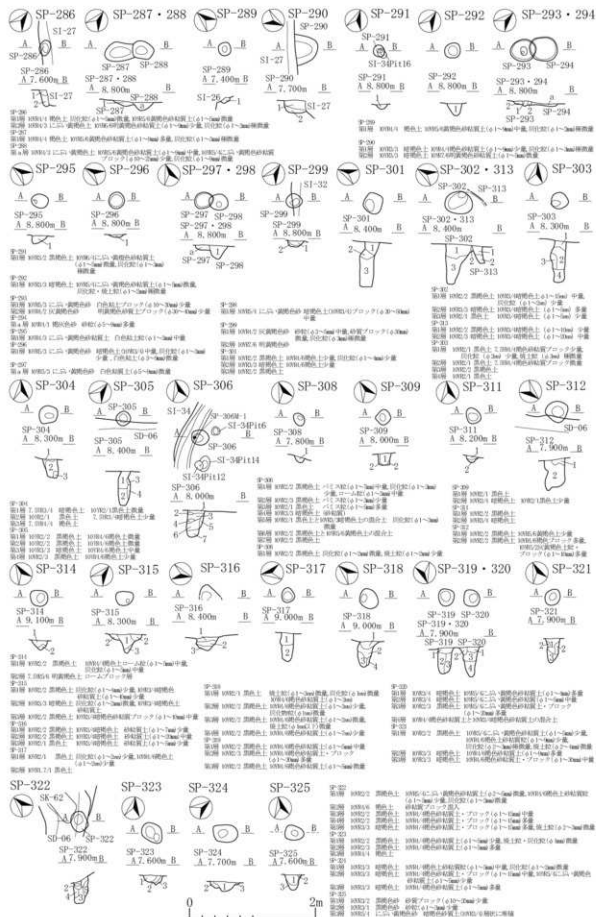


図 1-197 B・C区 SP-16



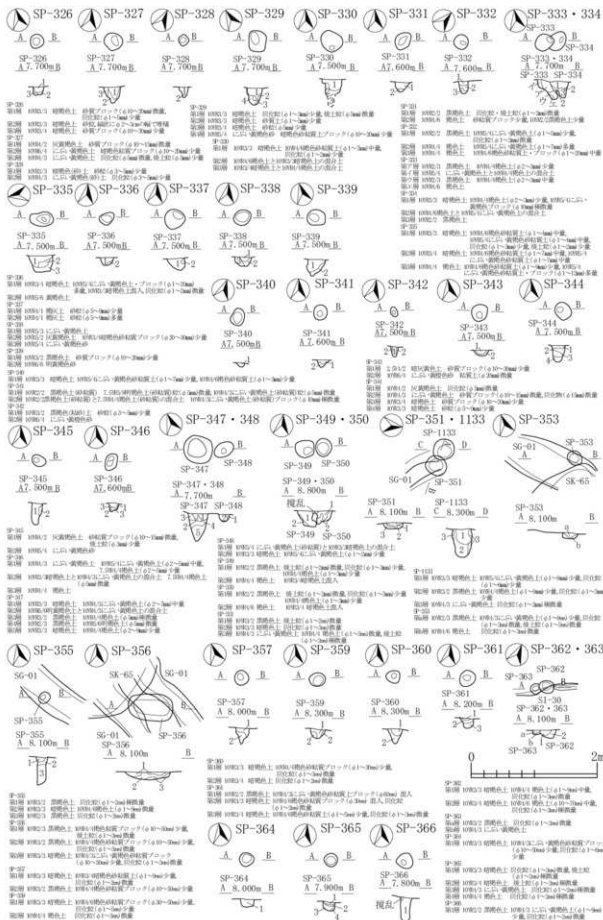


図 1-198 B・C区 SP-17

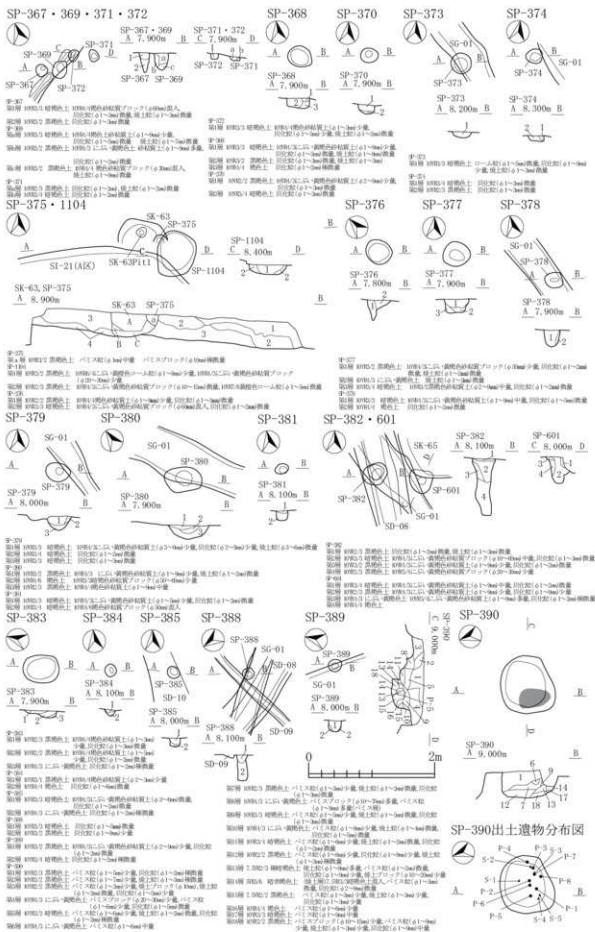


図 1-199 B・C区 SP-18



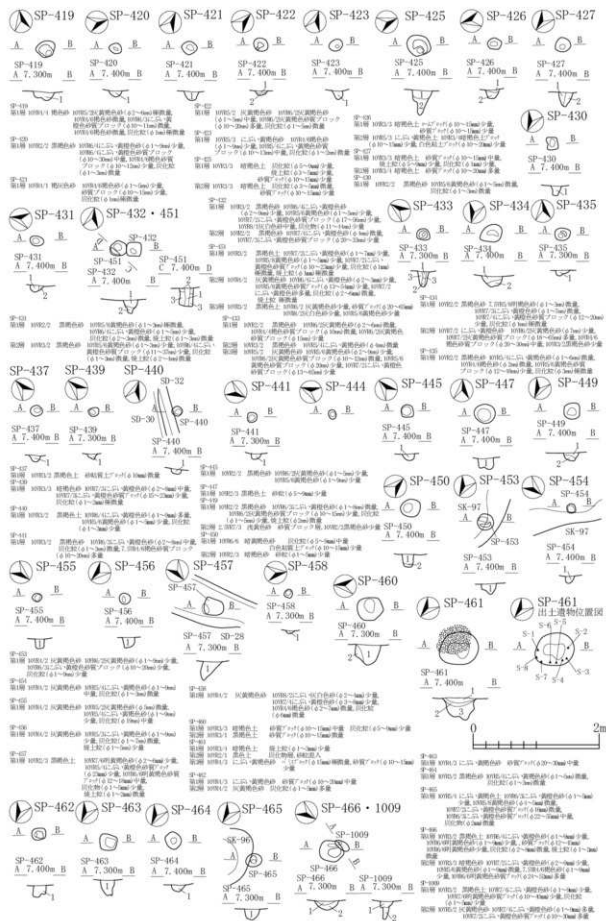


図 1-201 B・C区 SP-20

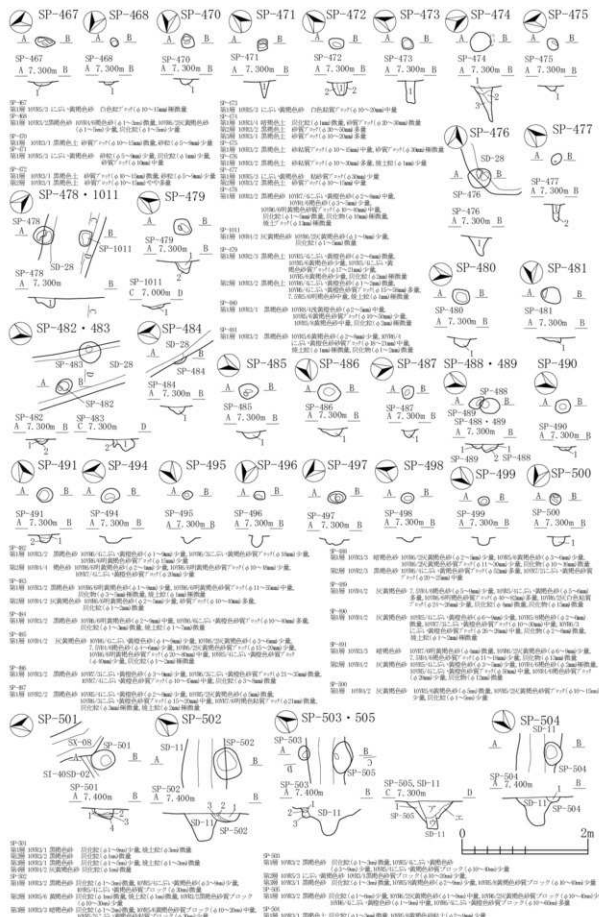


图 1-202 B·C区 SP-21

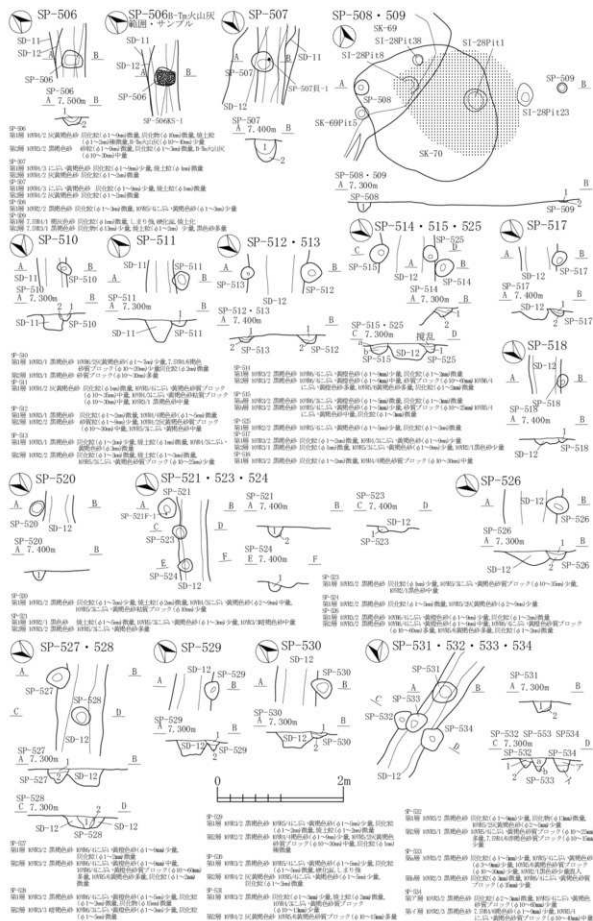


図 1-203 B・C区 SP-22

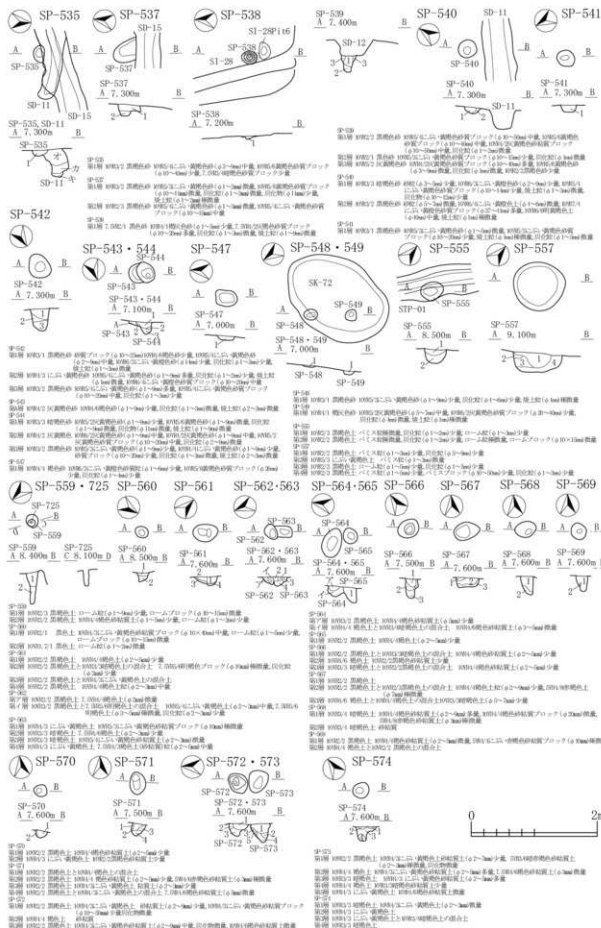


図 1-204 B・C区 SP-23

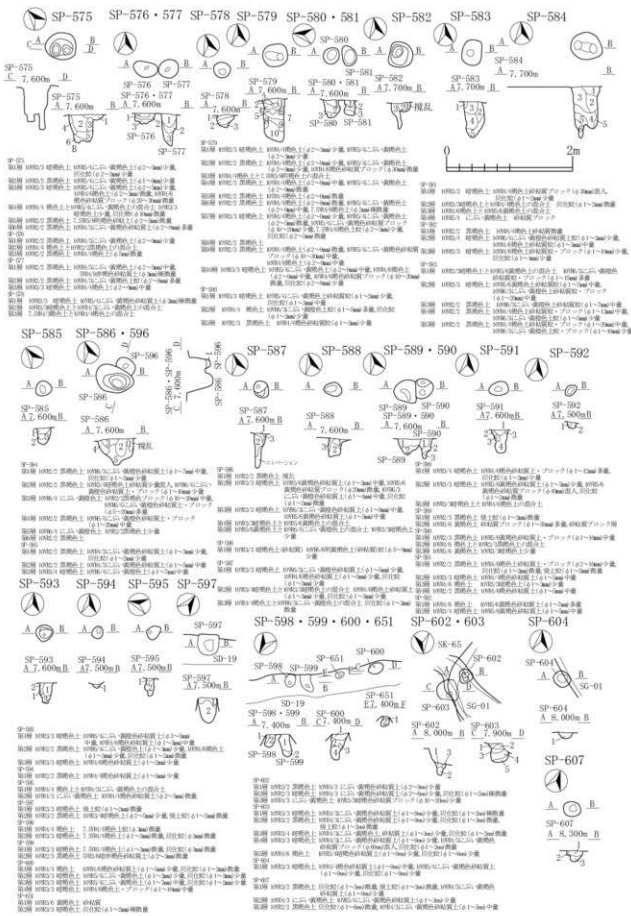


図 1-205 B・C区 SP-24



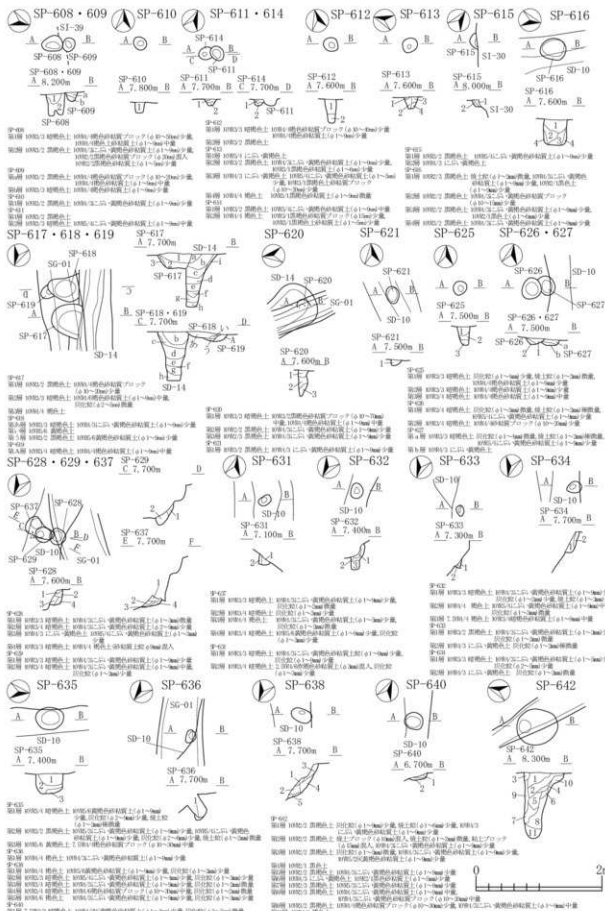


図 1-206 B・C区 SP-25

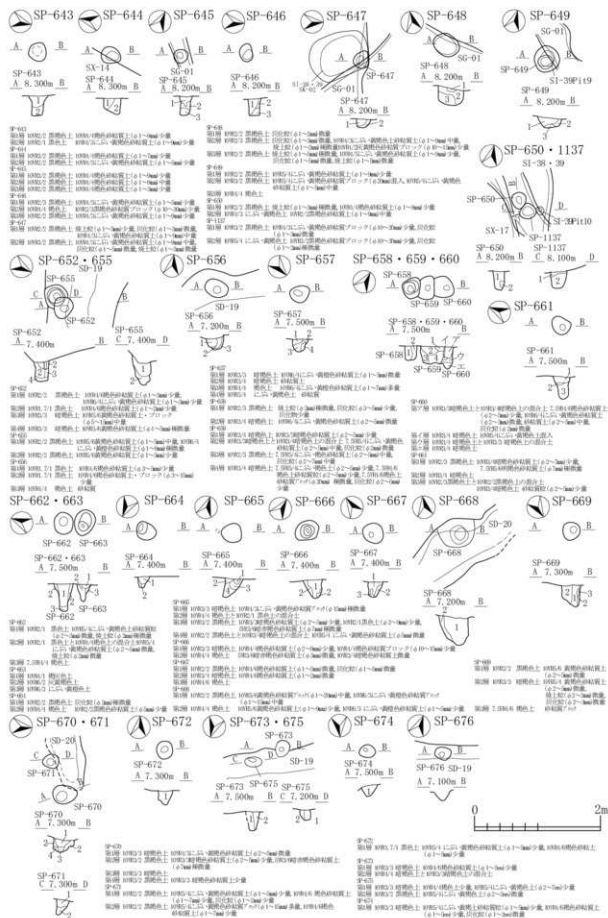


図 1-207 B・C区 SP-26

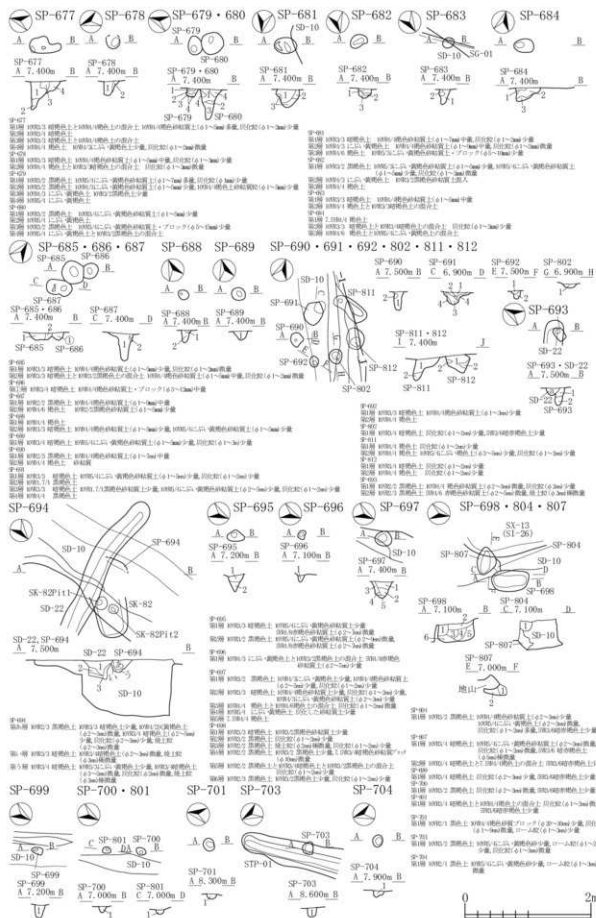


図 1-208 B・C区 SP-27



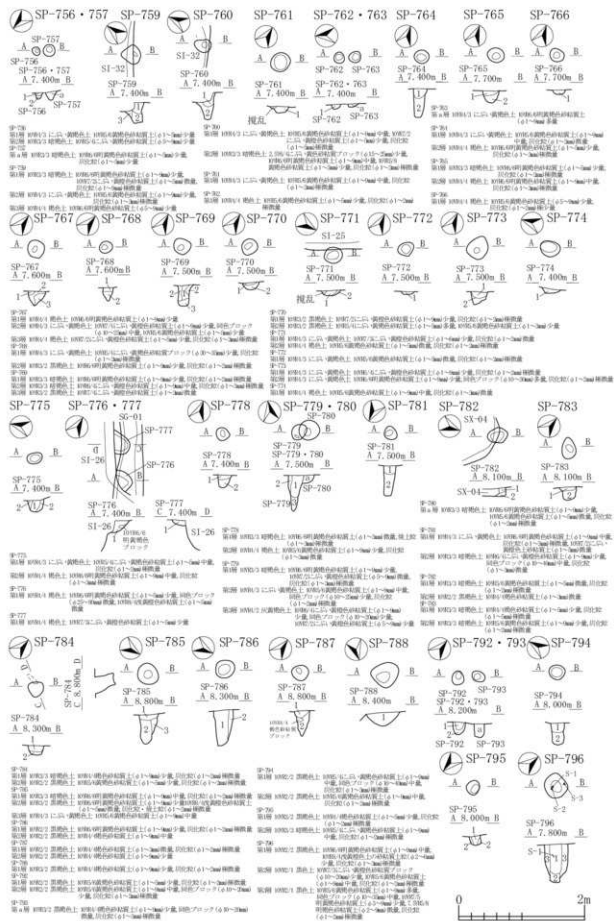


図 1-210 B・C区 SP-29



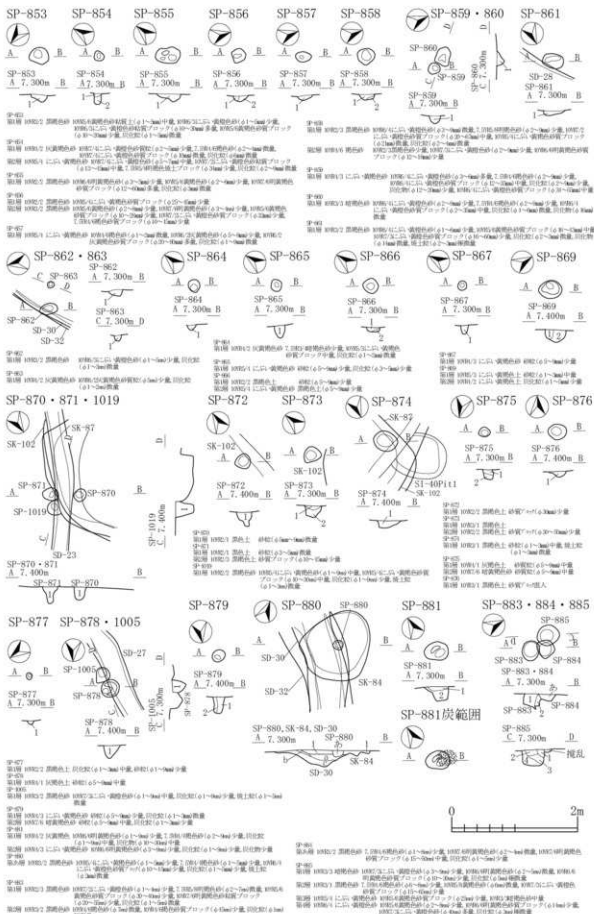


図 1-212 B・C区 SP-31

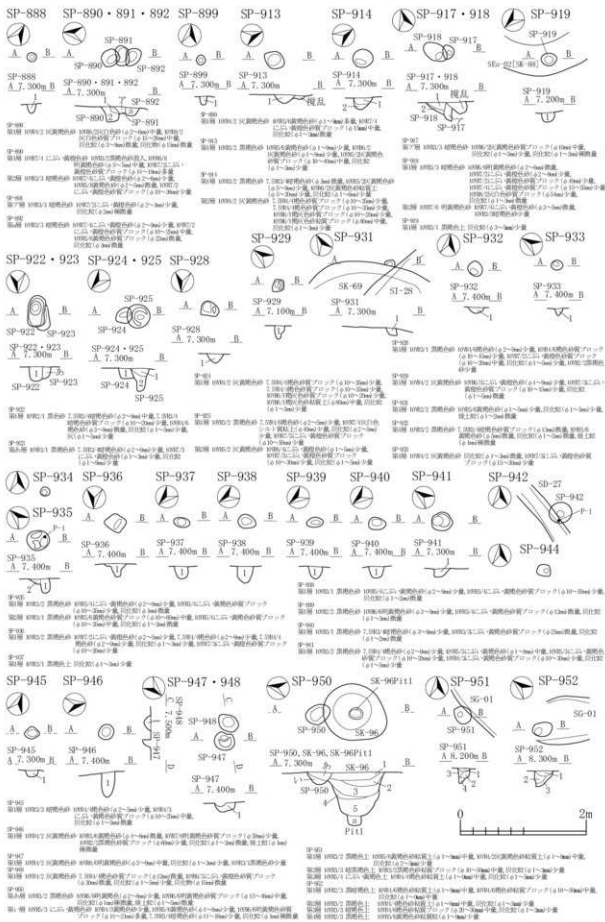


図 1-213 B・C区 SP-32



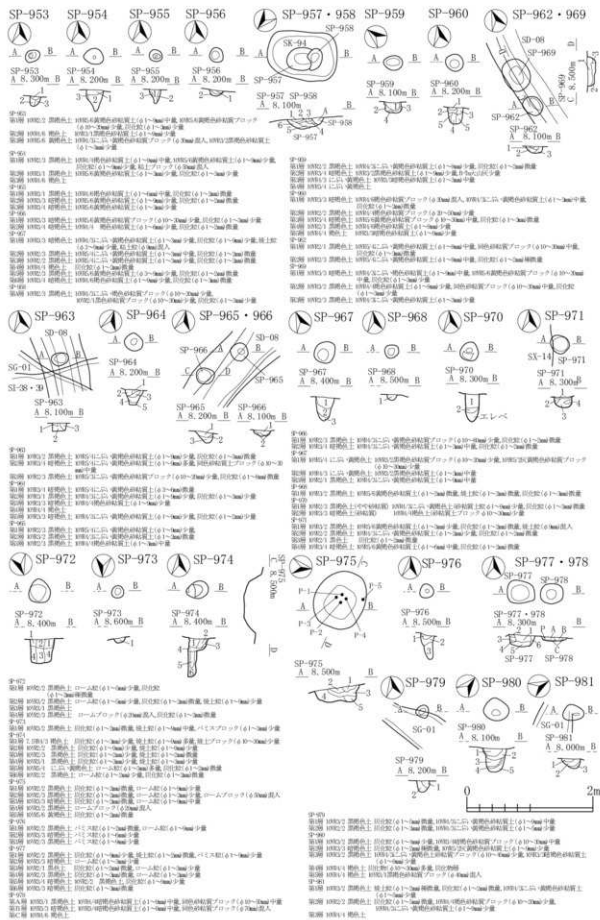


図 1-214 B・C区 SP-33

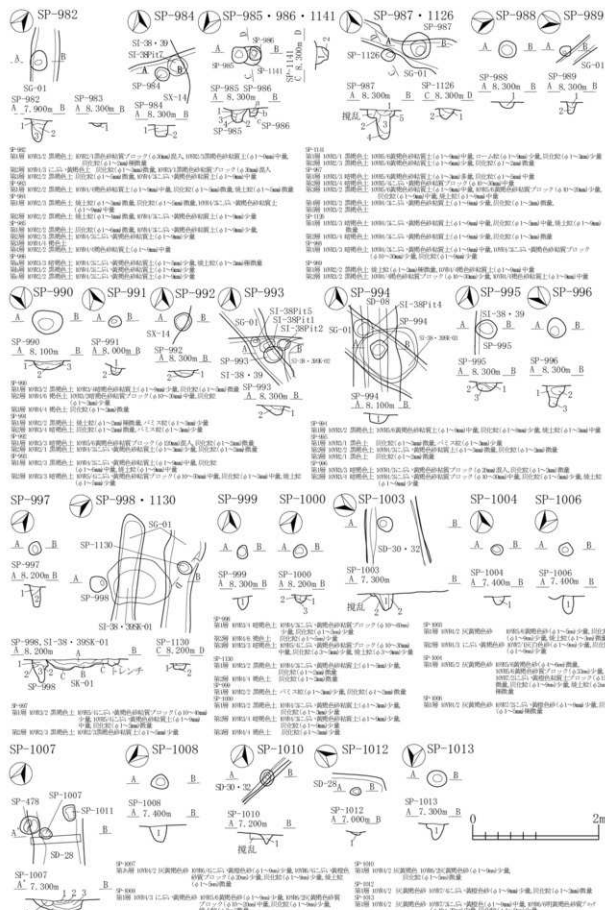


図 1-215 B・C区 SP-34









図 1-219 B・C区 SP-38

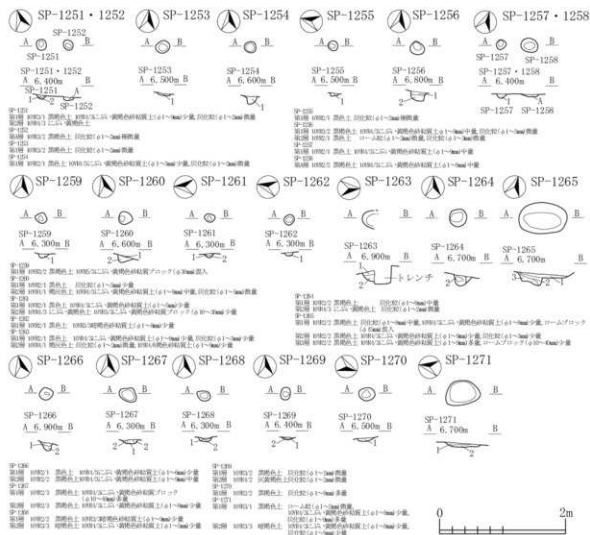


図 1-220 B・C区 SP-39

文時代の資料が主体で、369は中期の口縁部片、371は詳細時期は不明であるが、縄文時代後期以降の無文の壺形土器である。

## SD-09 (図1-224・225)

X = 92108.258, Y = -11893.182 ~ X = 92107.828, Y = -11895.296 付近で検出した。調査区を東西方向に走る溝跡で、SI-30、SD-08と重複しており、本遺構の方が新しい。幅13cm、長さ2.2mを測る。

## SD-10 (図1-224・226 ~ 230, 252 ~ 254)

X = 92114.600, Y = -11890.000 ~ X = 92090.000, Y = -11878.000 付近。X = 92046.000, Y = -11897.000 ~ X = 92083.000, Y = -11862.000 付近で検出した。調査時に北側のB区地点と南側のC区地点とは別々に精査しており、B区南端部分が擾乱により溝跡が破壊されていた。その為、流路の連続性が確認できないままC区側の東西方向の流路についても連続する認識で遺構番号の付与、遺物の取り上

げがなされた。図1-222で提示したように全体図上で確認すると、北側のB区SD-10扱いの溝跡と南側のC区内のSD-10扱いの溝跡は直接的に連続性は認められず、異なる溝跡の可能性が有する。北側の溝跡は幅2~3m、深さ1.2m、長さ2.7m、南側は幅1.2~3m、深さ0.5m、長さ50.4mを測る。

出土遺物は北側のB区出土の資料は土器主体で、土器器煮炊具を中心に椀土器、縄文土器などが出土している。一方、南側のC区の地点では擦文土器が若干出土しているが、木製品主体の出土で、部材杭、木片などとともに図1-254-406に図示した近代の鉄道に関連した荷札と考えられる資料が出土している。

## SD-11 (図1-227 ~ 230, 254)

X = 92074.406, Y = -11870.329 ~ X = 92045.125, Y = -11900.753 付近で検出した。SD-12・23と重複しており、本遺構が新しい。幅30~60cm、深さ45cm、長さ43mを測る。東側の擾乱



図 1-221 B・C区 SG-1





図 1-222 B·C区 SD-1

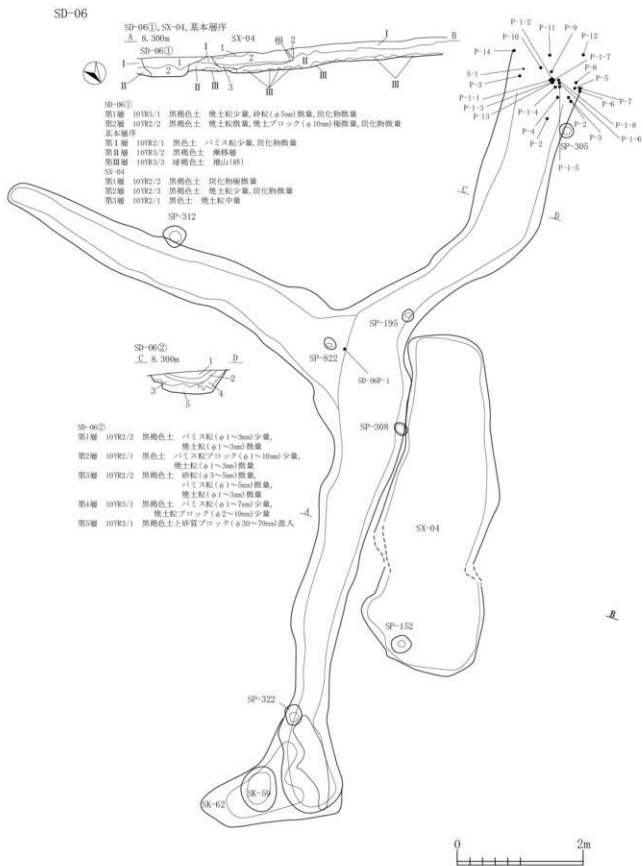


図 1-223 B・C区 SD-2

SD-08 · 09 · 10 · 14 · 22 · 24 · 29

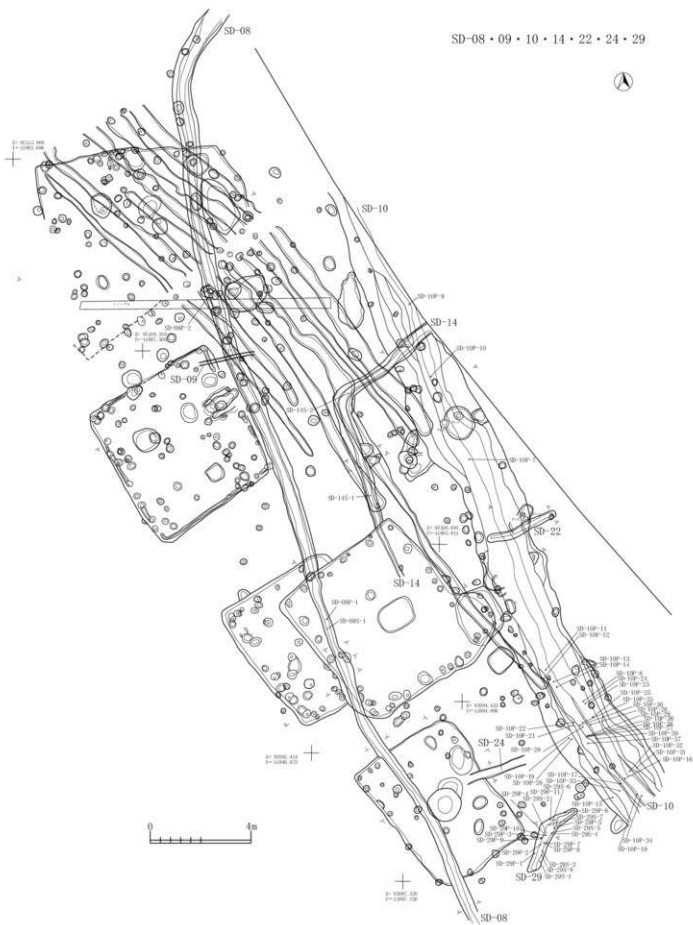


图 1-224 B·C区 SD-3







SD-10・11・12・13・15・16・21・23・25・34

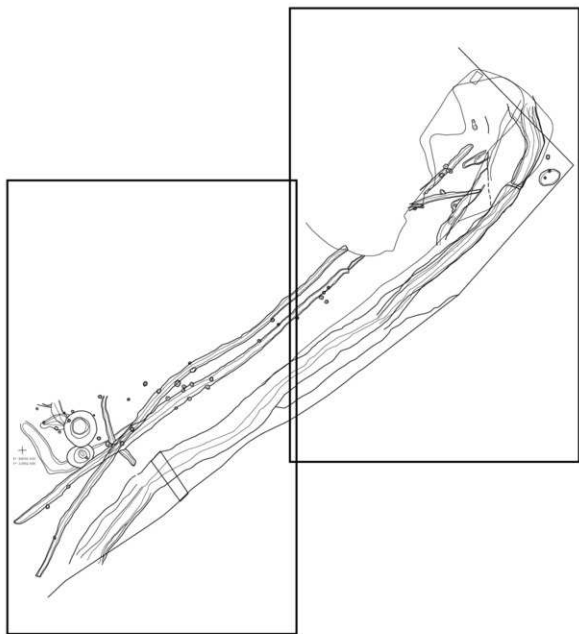


図 1-227 B・C区 SD-6

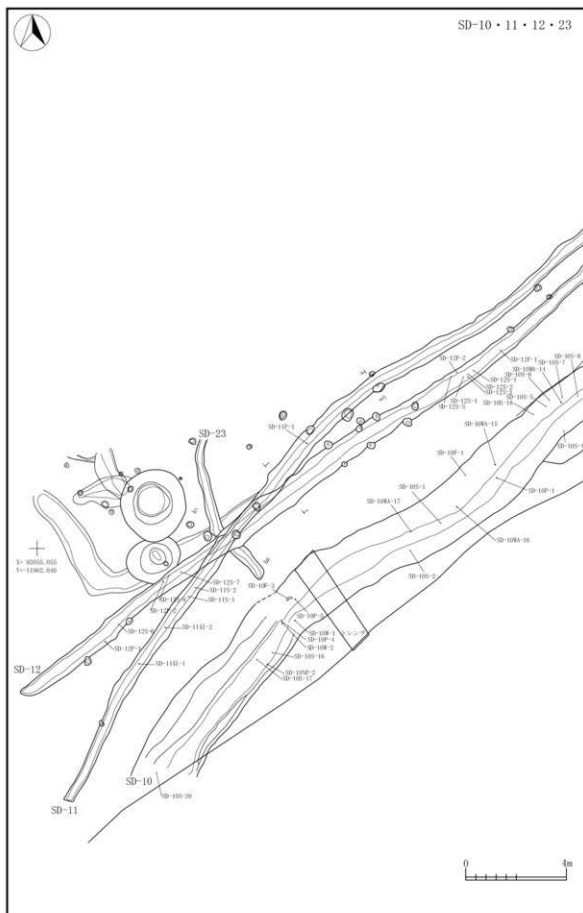


图 1-228 B·C区 SD-7

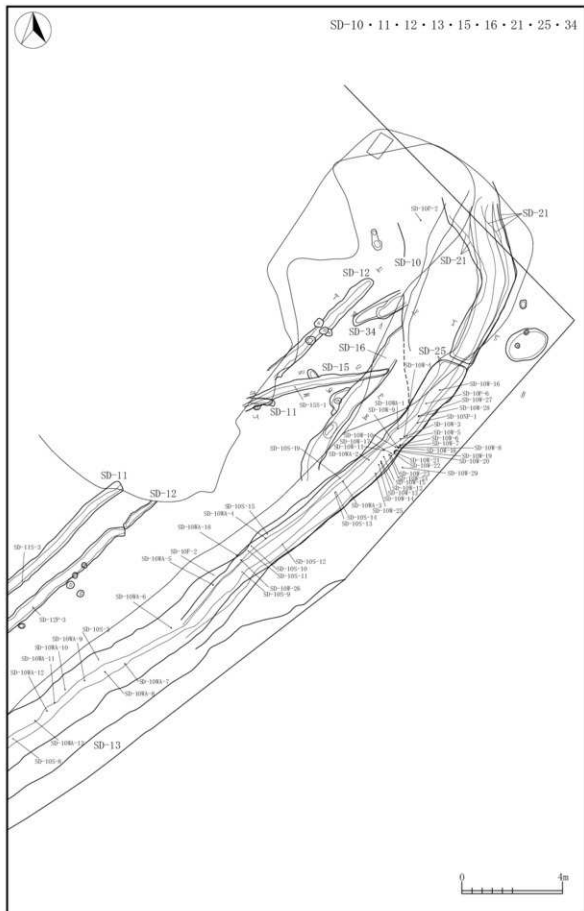


図 1-229 B・C区 SD-8





## SD-19(図1-230, 254)

X = 92083.430, Y = -11885.712 ~ X = 92074.664, Y = -11901.038 付近で検出した。西端が段丘境界に相当し、削平により残存しておらず、東端は攪乱により破壊されているため、一部の検出にとどまったが、幅7.0~16.0cm、深さ5.6cm、長さ18.2mを測る。東西方向を走る溝跡で、東の延長線上にはB区のSD-10が流れており、ほぼ90度振った位置関係にある。出土遺物は覆土及び上層から無文の体部破片2点を図示したが破片の詳細は不明である。

## SD-20(図1-231, 254)

X = 92073.367, Y = -11897.231 ~ X = 92071.938, Y = -11900.094 付近で検出した。SP-668・670・671と重複しており、本遺構が古い。本遺構の斜面下方にはSI-28が所在しており、壁面と平行している点など関連した可能性がある。幅4.7~8.3cm、深さ5.7cm、長さ35.7cmを測る。上面の一部に焼土が堆積している。出土遺物は図1-254に土師器甕(410)と縄文土器(411)の2点図示した。

## SD-21(図1-227, 229・230)

X = 92082.766, Y = -11862.558 ~ X = 92076.227, Y = -11862.853 付近で検出した。C区SD-10と重複しているが、本遺構の方が上面に相当し、本遺構の方が新しい。また、南西側にはSD-25が所在しており、本遺構と連結はしていないが、同じ軸線であり、連結した溝であった可能性が高い。幅1~2.2m、深さ1.6cm、長さ7mを測る。

## SD-22(図1-224, 226)

X = 92101.898, Y = -11881.290 ~ X = 92100.891, Y = -11883.807 付近で検出した。SK-82、SP-693、B区SD-10と重複しており、SD-10 < SD-22 < SK-82、SP-693の関係である。規模は幅3.0~3.8cm、深さ3.1cm、長さ2.9mを測る。

## SD-23(図1-228, 230・231)

X = 92064.766, Y = -11896.457 ~ X = 92061.797, Y = -11894.146 付近で検出した。SI-28・35、SK-87、SD-11・12と重複しているが、SK-87 < SI-28 ≈ SD-23 < SI-35、SD-11・12である。本遺構は分岐しているが、東側の溝を調査時にはSX-08として精査している。幅3.1~4.3cm、深さ2.4cm、長さ13.5mを測る。また、溝の上面から炭化物・焼土粒を検出している。

## SD-24(図1-224, 226・231)

X = 92092.133, Y = -11882.441 ~ X = 92091.391, Y = -11884.573 付近で検出した。SI-32と重複しており、本遺構の方が新しい。規模は、幅3.1~4.0cm、深さ8cm、長さ2.5mを測る。

## SD-25(図1-227~230)

X = 92075.758, Y = -11863.224 ~ X = 92065.281, Y = -11873.466 付近で検出した。SD-10、SX-20と重複しており、本遺構が新しい。本遺構が最も新しく、上面からの掘り込みであったため、東側の残存が悪く、幅12.0cm、深さ4.3cm、長さ1.6mを測る。前述のSD-21での記載のとおり、SD-21と連結はしていないものの、連続した配置状況であり、本遺構とSD-21は同時併存の可能性が高い。

## SD-27(図1-232)

X = 92069.547, Y = -11890.318 ~ X = 92066.625, Y = -11888.460 付近で検出した。SD-30・32と重複しており、SD-32より新しく、SD-30については併存の可能性が高い。SN-02がカマド相当と考えられる建物跡の外周溝の可能性が高く、SD-28・30などとともに併存した可能性がある。幅2.8~4.0cm、深さ1.6cm、長さ3.8mを測る。

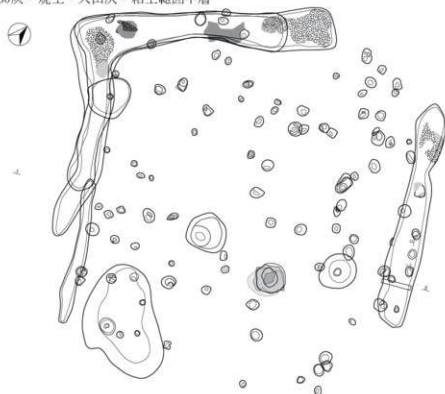
## SD-28(図1-232・233, 254)

X = 92077.227, Y = -11885.115 ~ X = 92072.742, Y = -11882.290 付近で検出した。前述のSD-27やSD-30・32と関連した溝跡の可能性が高く、SN-02をカマド相当とする建物跡の外周溝の可能性が高い。また、位置的に若干離れているが、SD-30とした溝跡と炭化物や焼土等の検出状況が類似しており、出土遺物についても双方から出土した破片が接合した資料(図1-254-414)もあることなど、本遺構とSD-30は同時併存した可能性が高い。幅4.3~8.2cm、深さ2.1cm、長さ6mを測る。SD-30出土資料と同一個体の資料である414は土師器甕で口径23.4cmを測る。海綿骨針をやや多く含む粉っぽい胎土であるが、内面の口縁部はヘラ磨きにより器面が潰されており光沢を帯びている。内面体部についても幅広のヘラにより撫で潰されているかのように調整されており、水の浸透を多少なりとも抑えようとしている。外面は頸部直下~体部にかけてスス付着が目立ち、内面は幅広の工具が施された体部側の器面に白色付着物が観察される。





SD-28・30炭・焼土・火山灰・粘土範圍中層



SD-28・30土器・石器・鉄関連遺物出土位置図

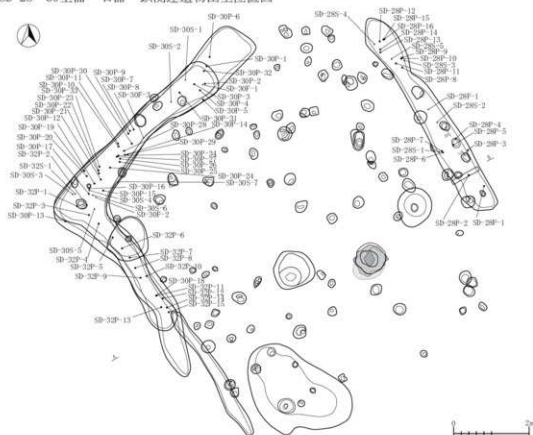


図 1-233 B・C区 SD-12

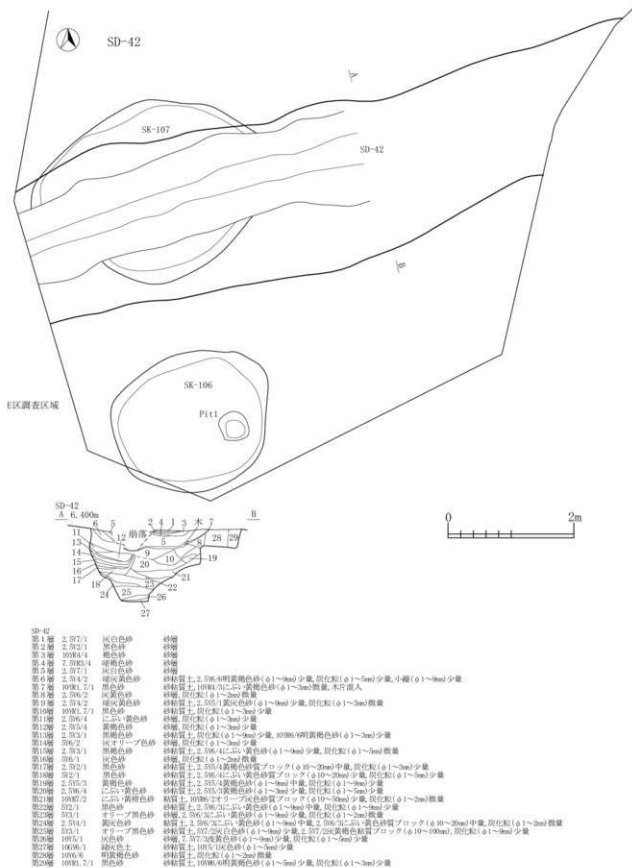


図 1-234 B・C区 SD-13

SD-29 (図1-224, 226, 254)

X = 92090.109, Y = -11880.476 ~ X = 92087.859, Y = -11882.057 付近で検出した。への字状に若干屈曲した平面形で、底面は東端が一段下がった形状である。幅24~60cm、深さ34cm、長さ3.1mを測る。付近にS1-32があり、関連した遺構であったのか、土師器の出土が多く、図1-254に図示した資料2点いずれも土師器甕である。

SD-30 (図1-232, 233, 254・255)

X = 92069.000, Y = -11890.600 ~ X = 92077.000, Y = -11889.000 付近で検出した。SD-32と重複しており、本遺構の方が新しい。また、SD-27・28の項目でも記載したが、SN-02をカマド相当位置の建物の外周を囲む溝跡の可能性が高い。平面形はL字状に屈曲しており、幅65~110cm、深さ10cm、長さ10.2mを測る。上層から炭化物・埴土を検出しており、SD-28でも同様の状況が確認されており、本遺構とSD-28は同一状況にさらされた可能性がある。出土遺物は図1-254・255に図示したが、SD-28出土と同一個体である414以外に覆土から出土した甕417を図示した。口径22.4cmを図る。414と同様に粉っぽい胎土で、内面は磨かれて器面が光沢を帯びている。外面は線文土器のように平行沈線気味に回っているが、414とはほぼ変わりない胎土の質感等も踏まえ、土師器の範疇で取り扱っておく。図1-255-418に図示した土師器甕はSD-32覆土とSP-942出土資料の遺構間接合の甕で口径20.8cmを測る。他の資料同様粉っぽい胎土で、内面は磨かれていないが、褐色物が全面に付着しており、水漏れ防止の対策がなされている。外面は肩部に炭化物のこびりつきが顕著で、口縁部直下の一部では抜けが見られるが外面体部にかけたス・炭化物の付着が顕著である。

SD-32 (図1-232, 233, 255)

X = 92068.000, Y = -11890.200 ~ X = 92076.000, Y = -11889.200 付近で検出した。SD-27・30と重複しており、本遺構の方が古い。SD-30と同様にL字状の形状を呈しており、SN-02をカマド相当位置とする建物の外周溝の一部であった可能性がある。本遺構はSD-27・30より前段の施設に相当し、建物が二時期に及んだ可能性がある。本遺構はSD-30に比べ南側の部分が突出しており、北東隅はSD-30側の方が突出しており、長さに変化が生じている。幅40~150cm、深さ15cm、長さ10.6mと長さについてはSD-30と大差がない。出土遺物はSD-30の部分で

記載した土師器甕以外に図1-255-419に図示した縄文土器無文壺形土器の体部片が出土している。

SD-34 (図1-227, 229・230)

X = 92078.531, Y = -11865.157 ~ X = 92077.617, Y = -11867.056 付近で検出した。C区SD-10と重複しており、本遺構の方が古い。幅20~60cm、深さ36cm、長さ2.3mを測る。

SD-42 (図1-234)

X = 92042.219, Y = -11900.380 ~ X = 92039.664, Y = -11909.127 付近で検出した。SK-107と重複しており、本遺構の方が新しい。また、本遺構は埋め戻し後に再掘削が最低5度行われており、一部は発掘調査直前まで機能していた溝跡にもつながるものや、C区SD-10と連結した段階のものも存在した可能性がある。調査前直前の水つながる形であったため、掘削範囲は限られ幅19.5~25.5cm、深さ11.7cm、長さ10mの精査にとどまった。

## 10. 土器埋設遺構

SC-02 (図1-235, 255)

X = 92120.469, Y = -11896.724 付近で検出した。60×45×39cmの平面形が楕円形、断面形が袋状の土坑状の掘り込みで第II群A類の縄文時代中期の円筒上層式の土器を正位に設置している。土器は口径30.0cm、器高36.7cm、底径10.8cmを測る。体部地文は結束第一種が施されるのみで、口縁部には波状の隆帯が貼られている。

SC-03 (図1-235, 255)

X = 92122.938, Y = -11896.411 付近で検出した。48×42×21cmの平面形が不整形、断面形が袋状の土坑状の掘り込みから土器が横位に出土した。土器は図1-255-421で、地文にRL縄文が施されただけの土器である。口縁部の肥厚化などSC-02の420と類似した特徴から第II群A類に属するものと考えられる。また、覆土中から422に図示した台付鉢の脚部が欠損した資料が出土している。口唇部はRL匠痕でキザミ状に表現しており、体部の地文は結束第一種の羽状縄文である。外面体部にターレット状の付着物があり、内面にも黒色の油分状の付着物が底部見込~体部下半にかけて顕著に観察される。

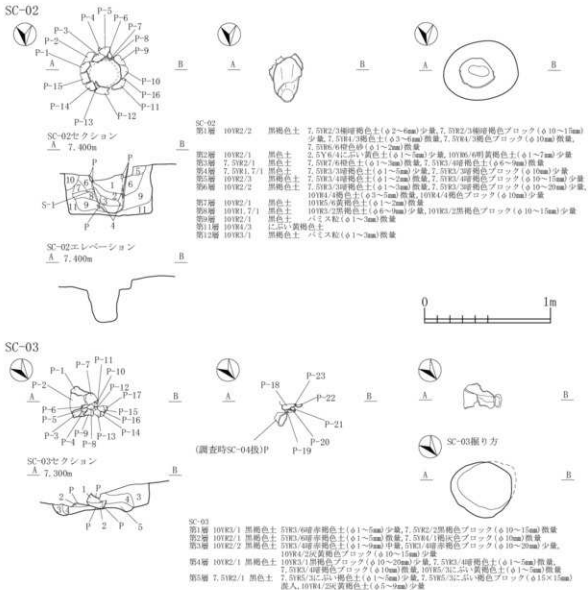


図 1-235 B・C区 SC-1

11. 埋没林 (図 1-236・237)

X = 92069.400, Y = -11891.400 ~ X = 92074.000, Y = -11862.400 付近で検出した。砂層直下に堆積する若干灰色がかった黒褐色粘質土(第2地点第8層相当)中から根、枝なども含め100本以上の自然木を確認した(出土層位は第10層扱い)。倒木の方向としては斜面下方に相当する南東方向~南方向に倒れているものが多く、一部図1-236中の46のように北東側に倒れた資料も含まれる。樹種はトネリコ属、カツラ、ハンノキ属で、トネリコ属を多く検出している。年輪年代解析とウィグルマツチング法による放射性炭素年代測定を実施しており、クロスデートイングできない資料も一部含まれるが、比較的材料とまった生育期間であったことが裏付けられており、年代は弥生時代前半に相当する年代値が得られている(分析編3参照)。

第2節 遺構外出土遺物 (図 1-263 ~ 293)

SX-06・07・14の記述でも若干触れたが、A区側から南東方向に傾斜する地形で、古代以降の遺構は砂層の上面に構築されており、縄文時代の地層は砂の下層の黒色土が相当し、傾斜角度がきつくなっている。丘陵の傾斜部と砂層の境界部をSX-06・14として調査しているが、それ以外の遺構外の出土資料については、図1-263に提示した小グリッド単位で、図1-7aの基本土層で提示した第17層=A層、第22層=C層扱いで層一括取り上げを行っている。ただし、斜面上での掘削作業で明瞭に層の判別ができていない地点や、掘り込み等による混入等の要因もあり、A層=後期、C層=中期といった明瞭な区分の遺物構成ではない。しかしながら、相対的な傾向としてA層が縄文時代後期第III群C類を主体とし、C層が縄文時代中期第II群



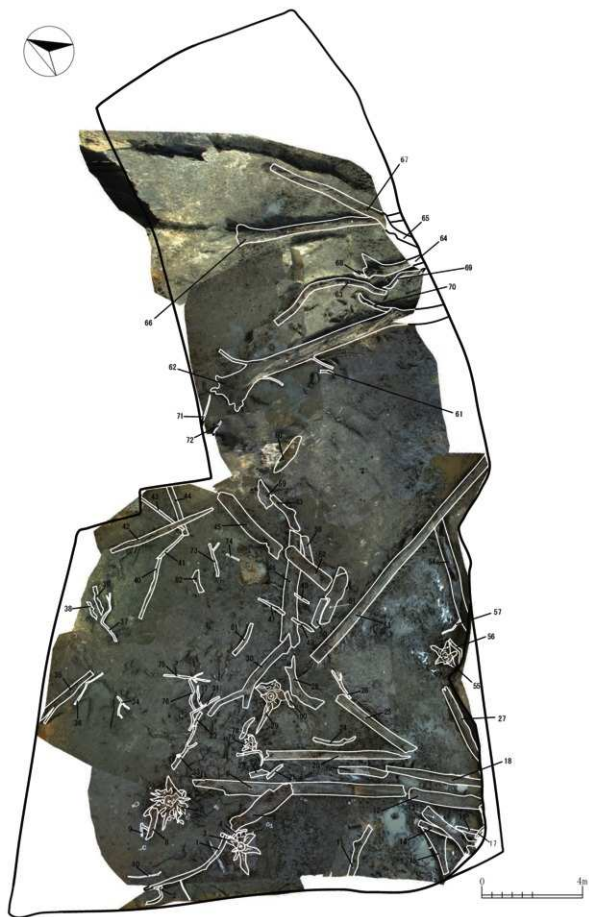
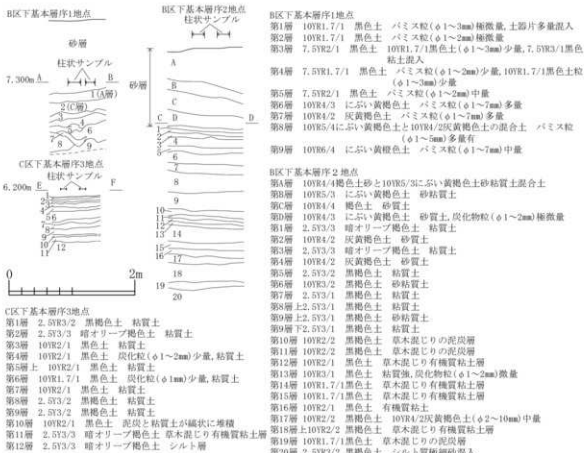


图 1-236 B·C区埋没林-1



新城平岡(4) B・C区下基本層序1~3地点

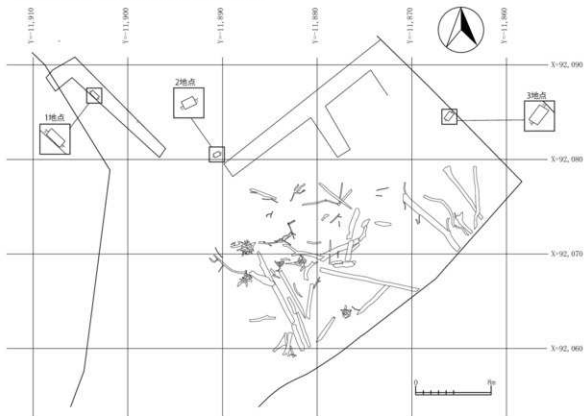


図 1-237 B・C区埋没林-2

A類の資料が多く出土している傾向にある。また、A区では出土が無かった縄文時代中期の榎林式（図1-282-704~716）、後期前葉の土器（図1-282-717）、十腰内Ⅲ式（図1-283-720）、十腰内Ⅳ式（図1-283-722）なども出土している。その他図1-292-873に図示した資料は表土出土の資料であるが、刷毛目調整の後に重菱形文が施される土器で弥生時代後期に属する。土製品資料の中で、C層出土の資料であるが、縄文時代後期十腰内Ⅰ式期に多く見られる動物形の土製品が出土しており、図1-292-862は土器内面に貼付されていたのか脚部が剥落した痕跡が観察される。

石器は剥片石器・礫石器ともA区の傾向とほぼ同様の構成であり、図1-274-638・639、図1-286-805・806のような6類の異形石器も伴っている。

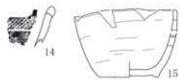
砂層上面の遺構外からは古代以降の資料が多く出土しており、土師器・擦文土器以外に中世の珠洲焼や瓦器、近世以降の染付や陶器、泥面子なども出土している。

S I-2 0 (A区追加資料)

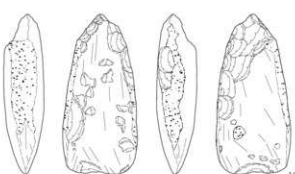
S I-2 1 (A区追加資料)



S I-2 2 (A区追加資料)



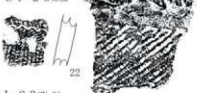
S I-2 3 雑土



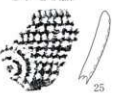
S I-2 3 磁床F



S I-2 3 磁床



S I-2 3 磁床



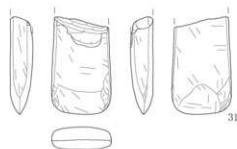
S I-2 3 磁中方



S I-2 3 SN-01



S I-2 3 SN-01



S I-2 3 Pit23



S I-2 3 Pit36

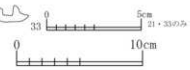


図 1-238 B・C区 SI 出土遺物-1

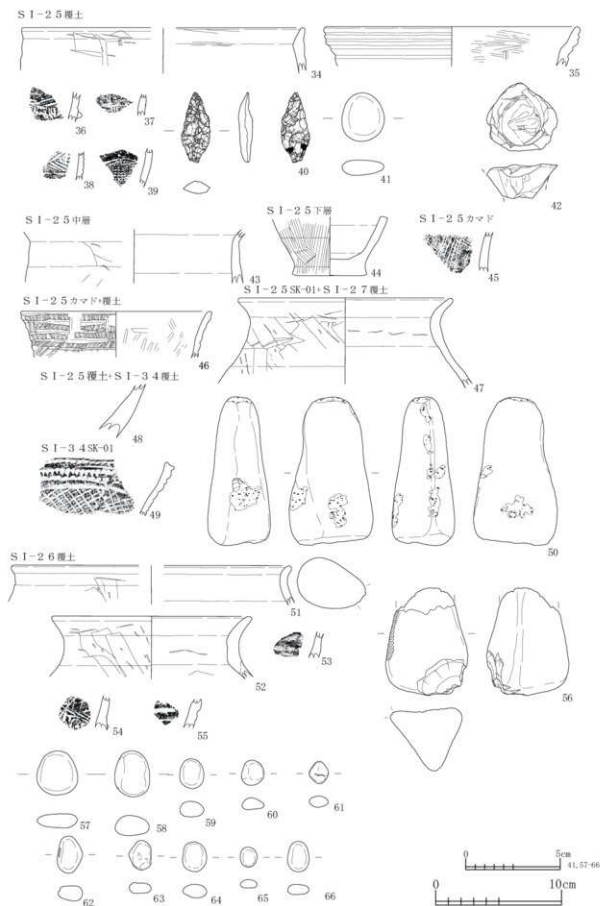


図 1-239 B・C区 SI 出土遺物-2

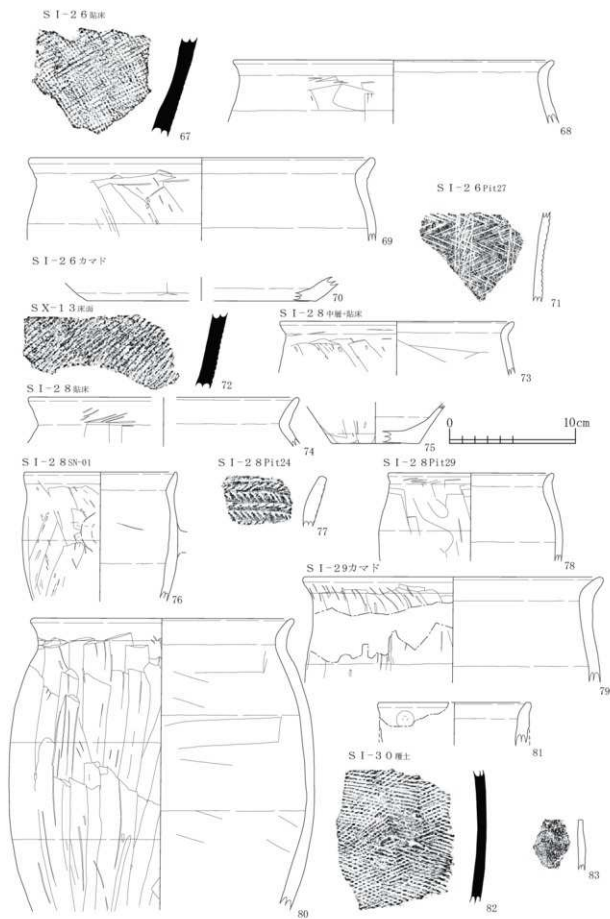


図 1-240 B・C区 S1 出土遺物-3

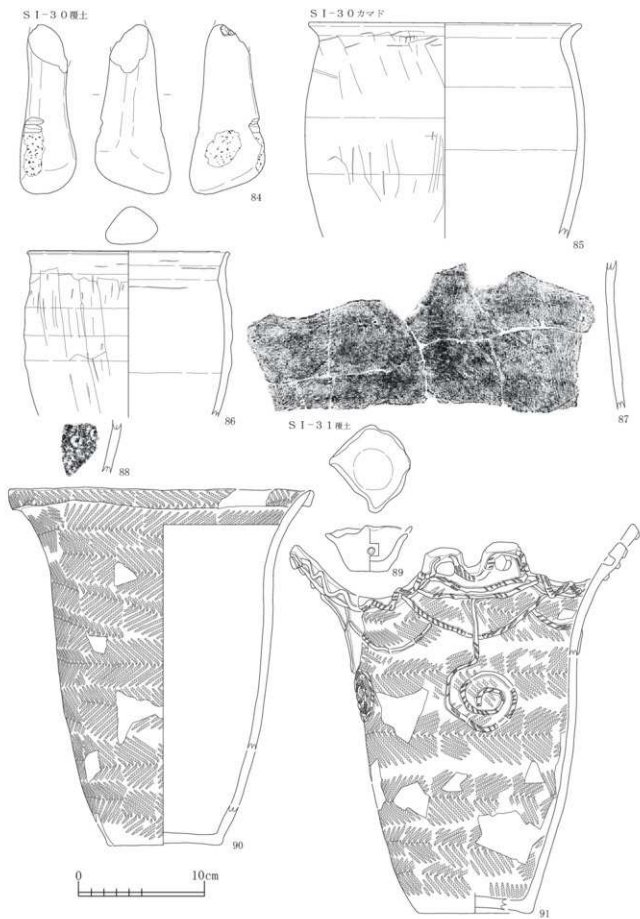


図 1-241 B・C区 SI 出土遺物-4

S I-3 1 雑土

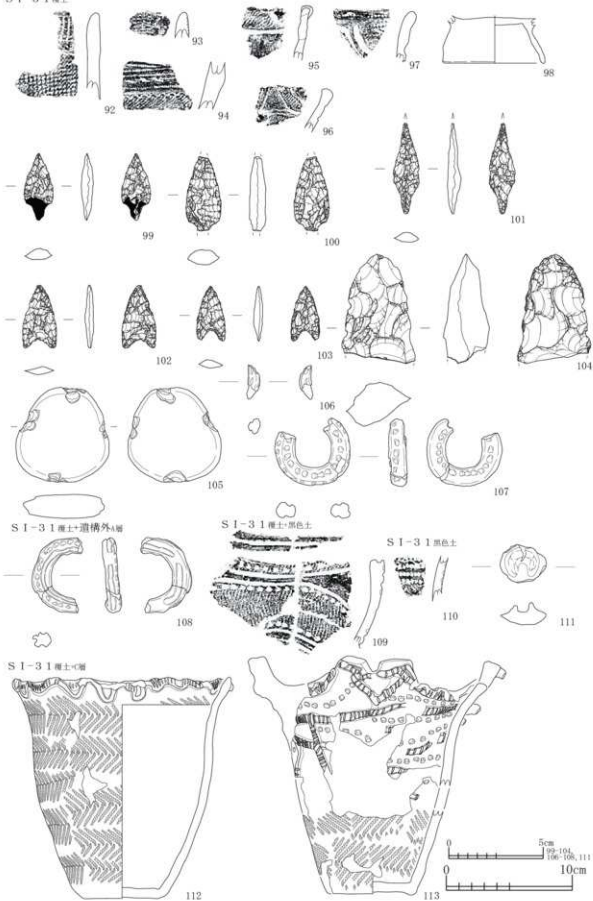


図 1-242 B・C区SI出土遺物-5



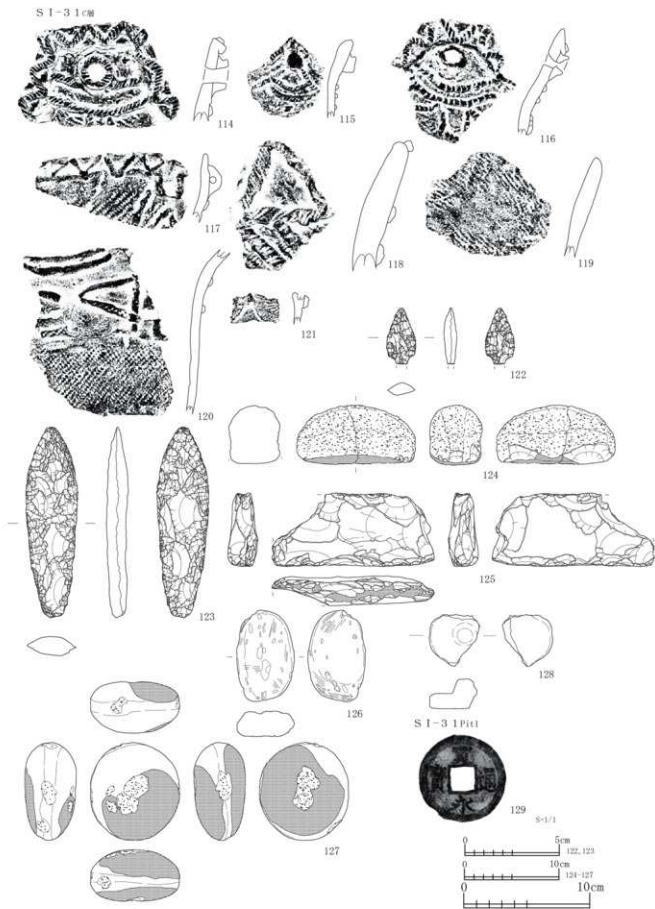


图 1-243 B·C区 S1 出土遗物-6

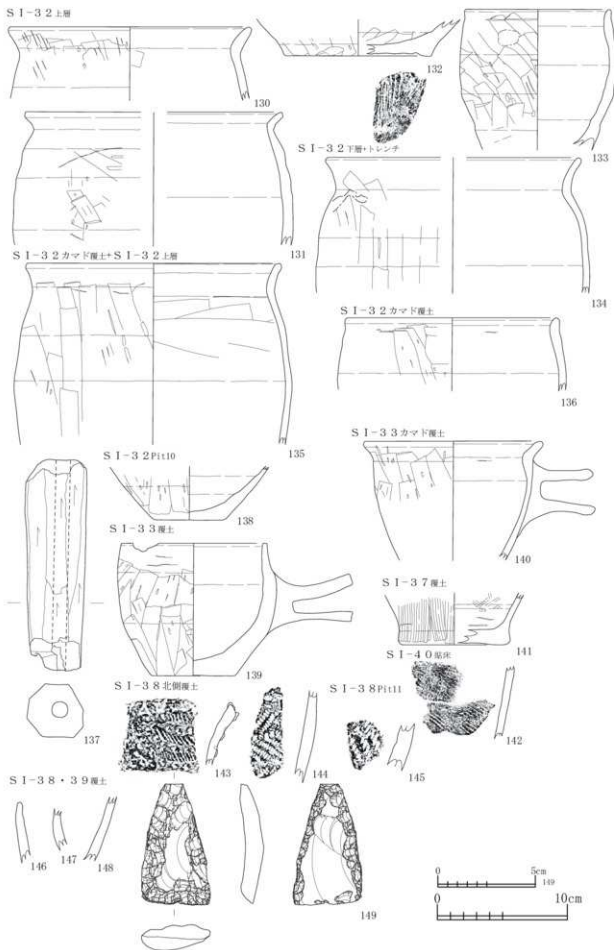


図 1-244 B・C区S1出土遺物-7

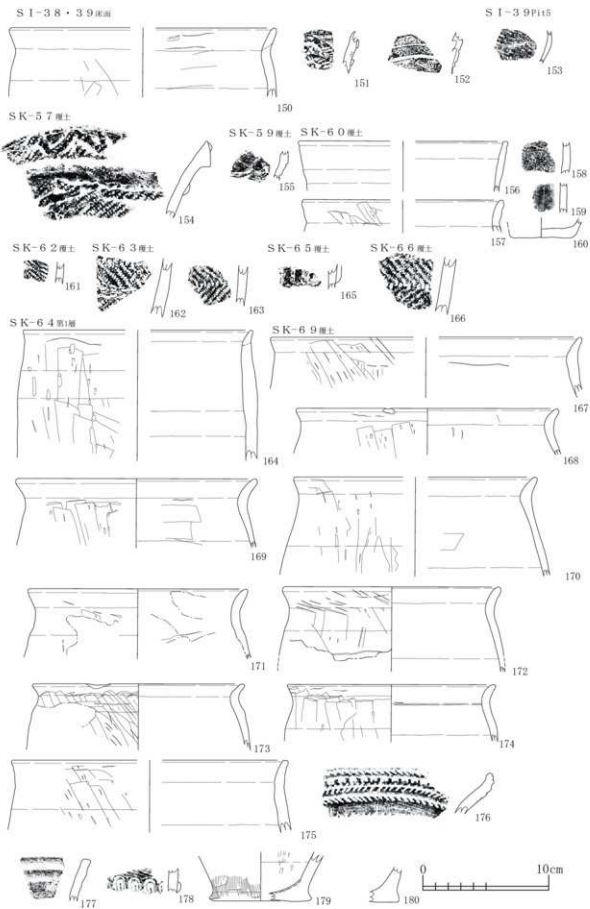


图 1-245 B·C区 S1 出土遺物-8, SK 出土遺物-1

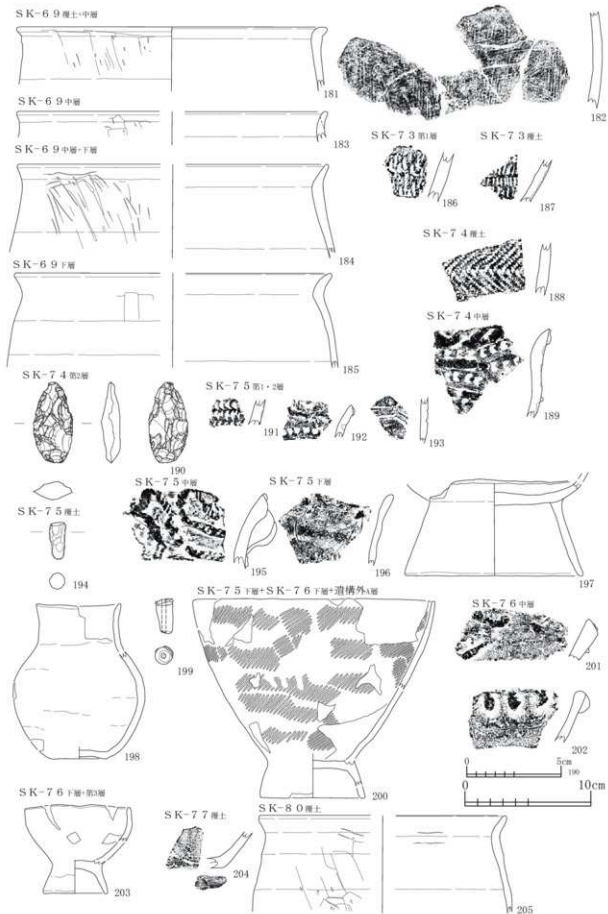


図 1-246 B・C区 SK 出土遺物-2

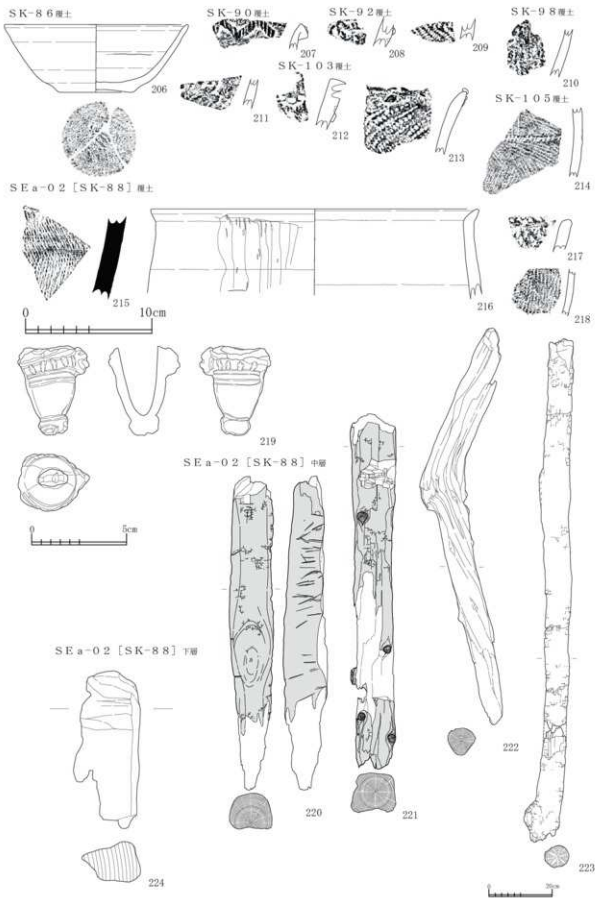


图 1-247 B·C区 SK 出土遗物-3, SE 出土遗物-1

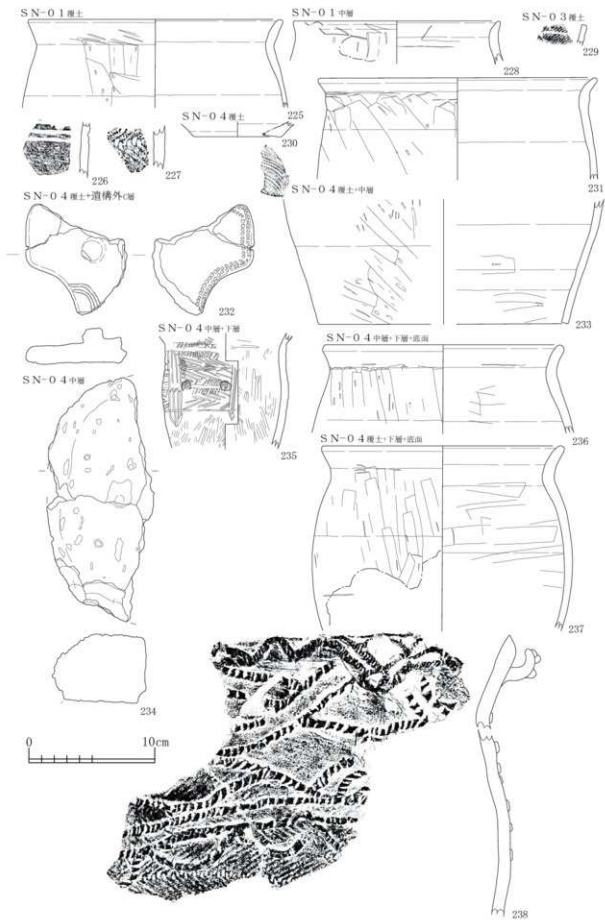


図 1-248 B・C区 SN 出土遺物-1

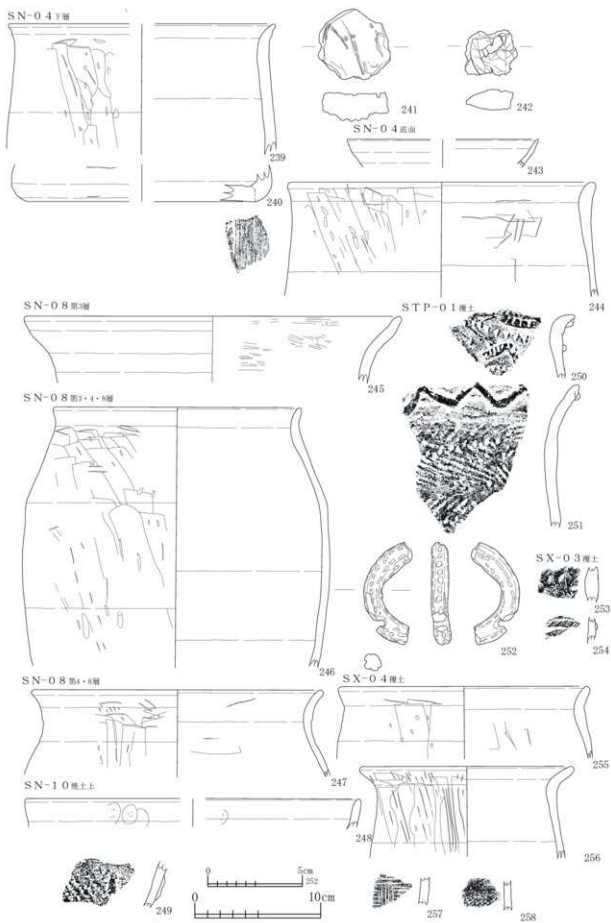


図 1-249 B·C区 SN 出土遺物-2, STP·SX 出土遺物-1

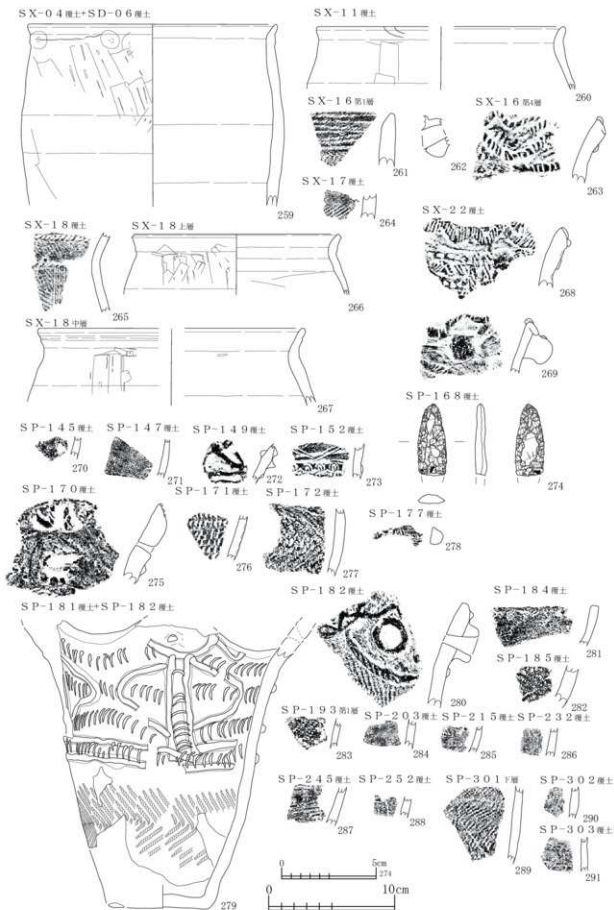


図1-250 B・C区SX出土遺物-2,SP出土遺物-1





図 1-251 B·C区 SP 出土遺物-2

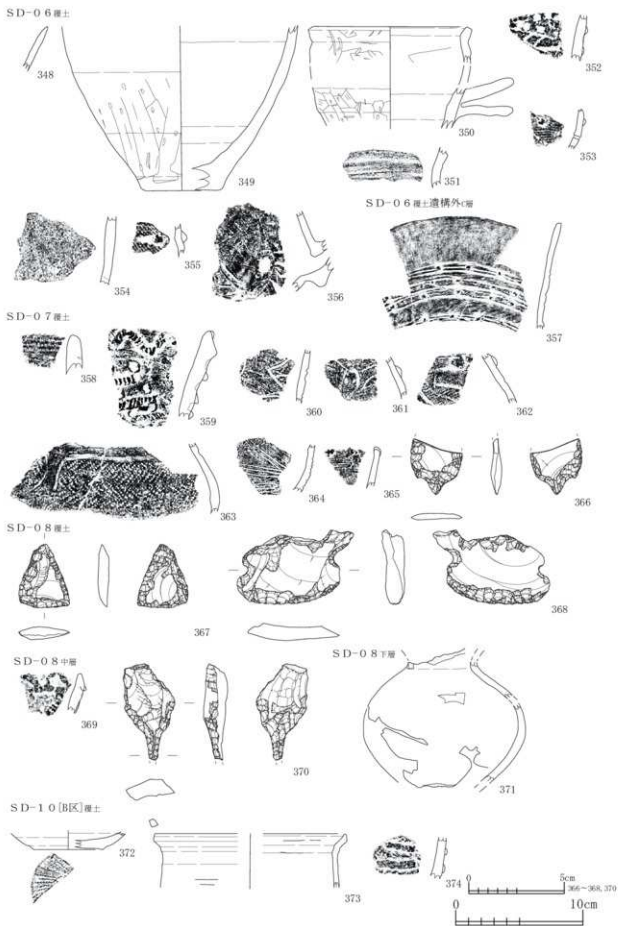


図 1-252 B・C区 SD 出土遺物 -1

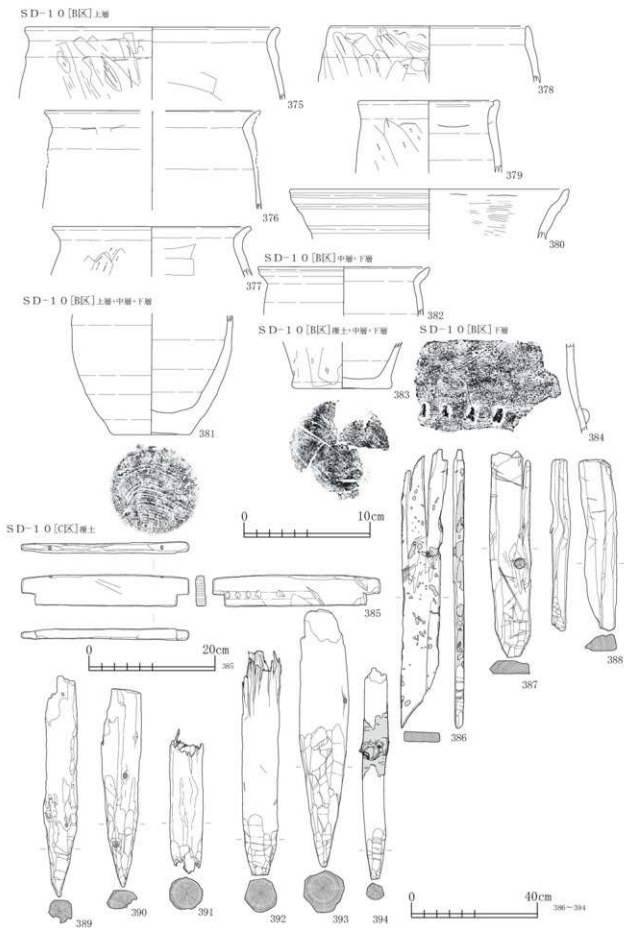


图 1-253 B·C区 SD 出土遗物-2

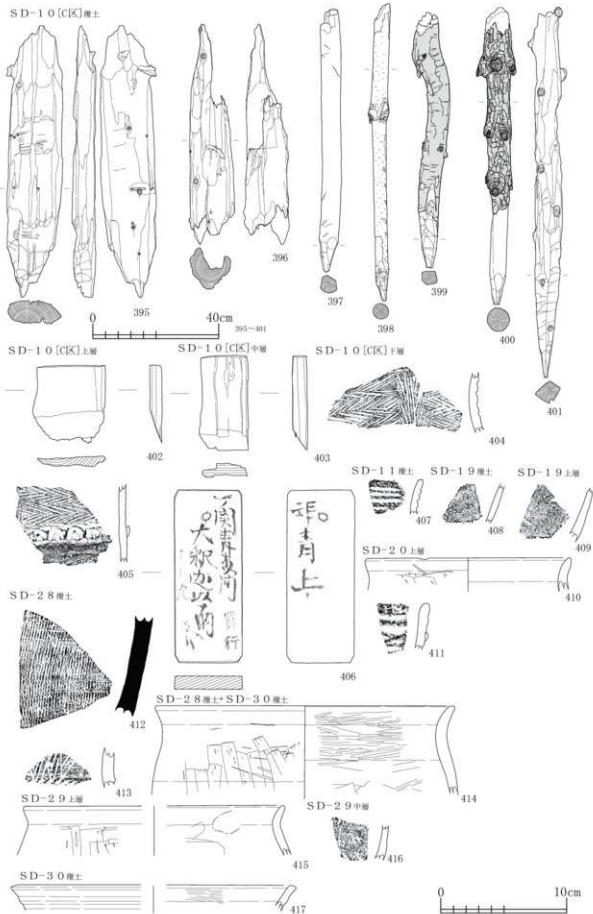


図 1-254 B・C区 SD 出土遺物 -3

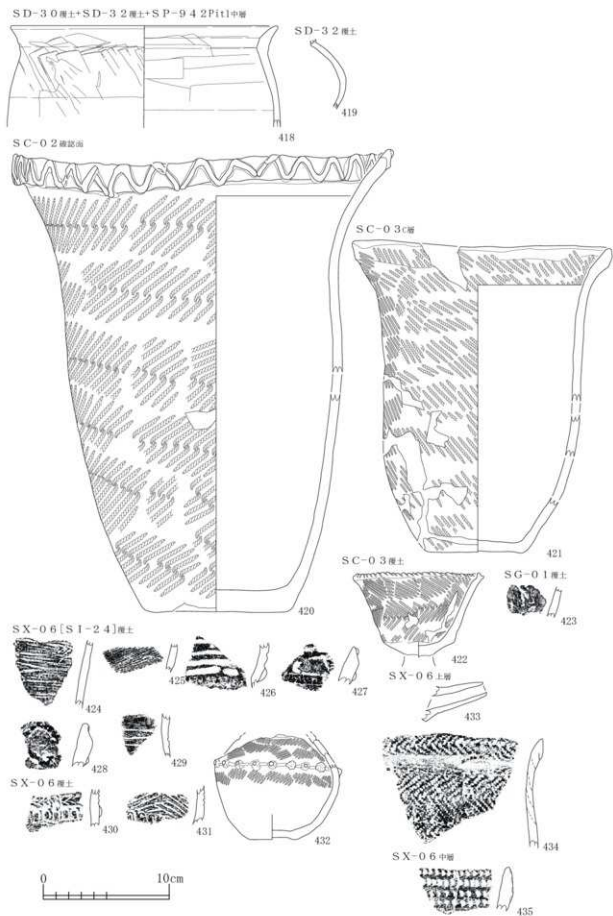


图 1-255 B·C区 SD 出土遗物-4, SC·SX 出土遗物-1

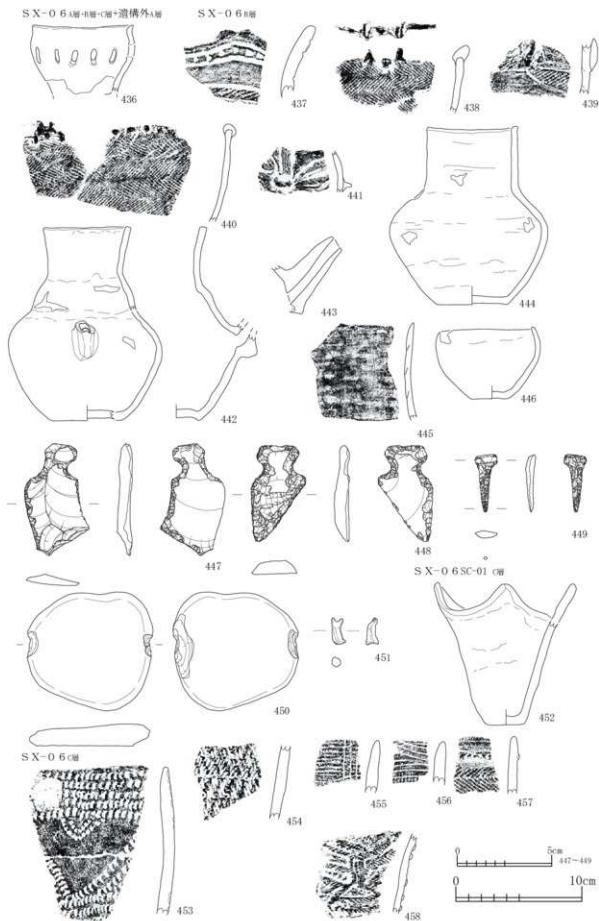


図 1-256 B・C区 SX 出土遺物-2

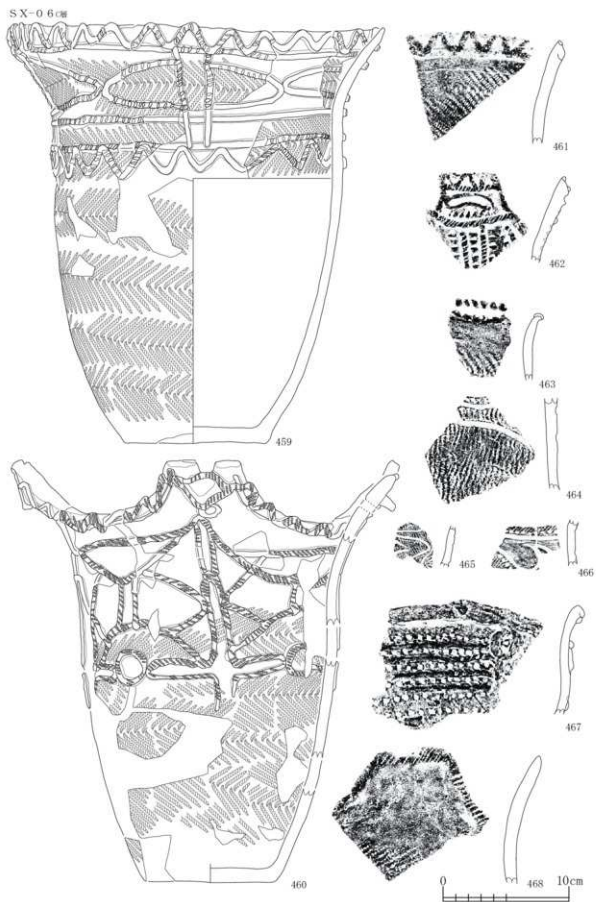


图 1-257 B·C区 SX 出土遗物-3

SX-0 6cm

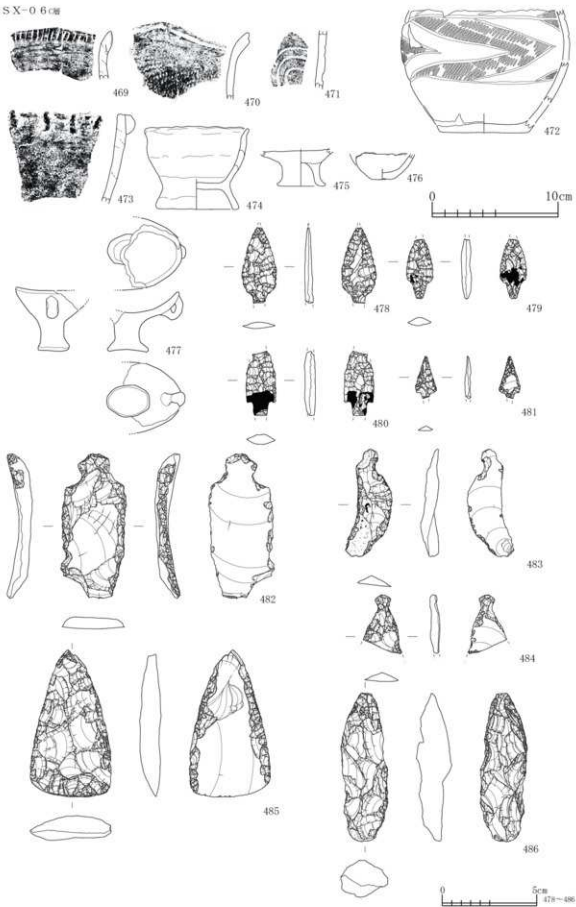
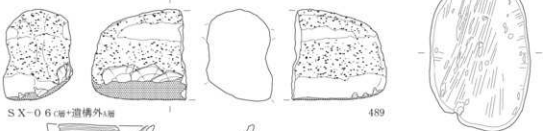
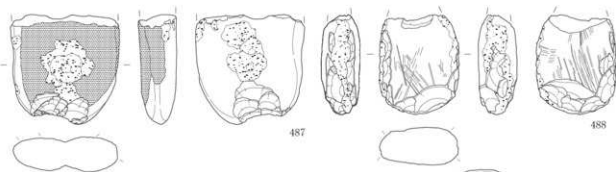


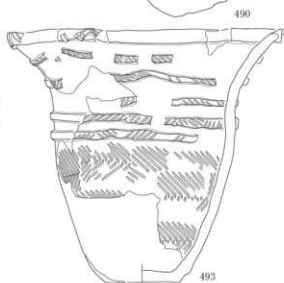
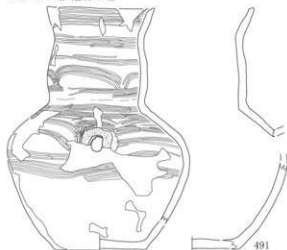
図 1-258 B・C区 SX 出土遺物-4



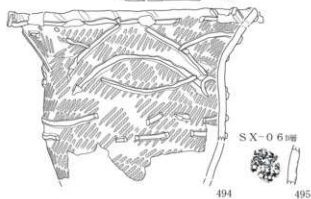
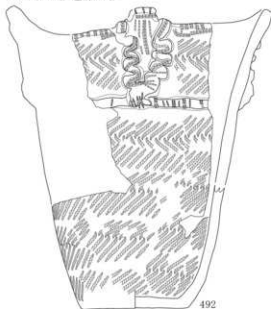
SX-06 罐



SX-06 罐+遺構外壁



SX-06 罐+遺構外壁



SX-06 罐



图 1-259 B·C区 SX 出土遺物 -5

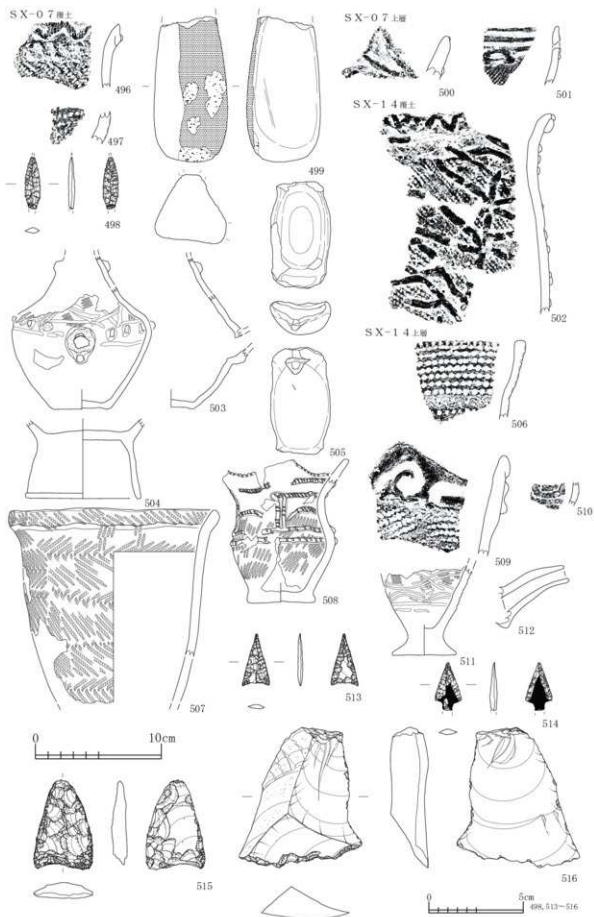


図 1-260 B・C区 SX 出土遺物 -6



图 1-261 B·C区 SX 出土遺物-7

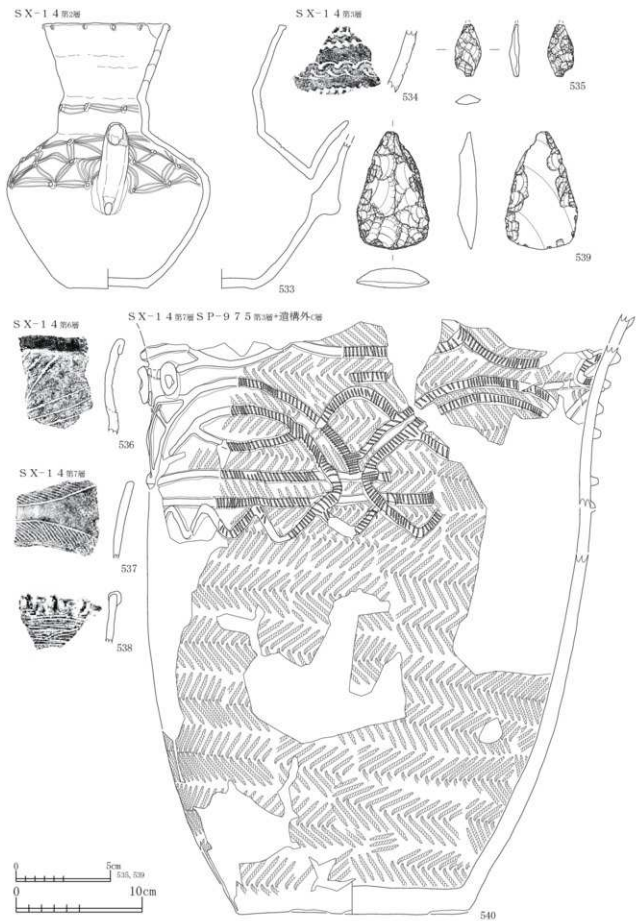


图 1-262 B·C区 SX 出土遺物 -8

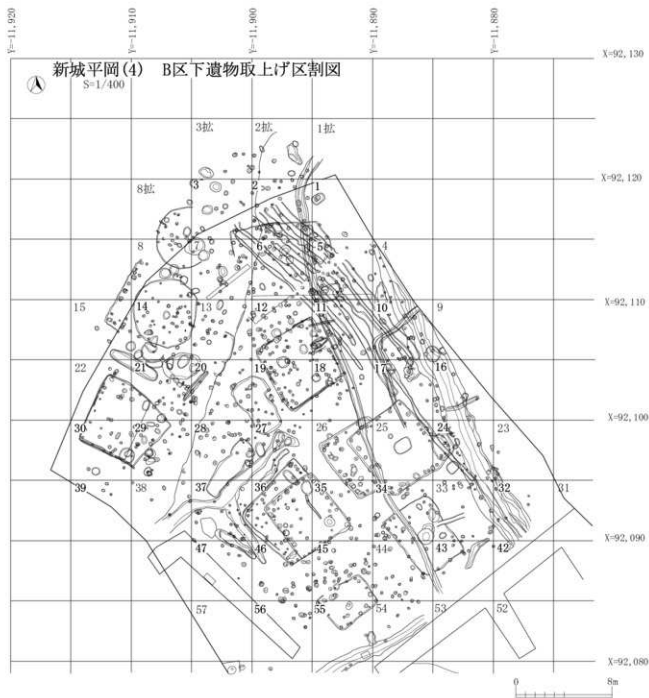


図 1-263 B・C区遺構外出土遺物-1



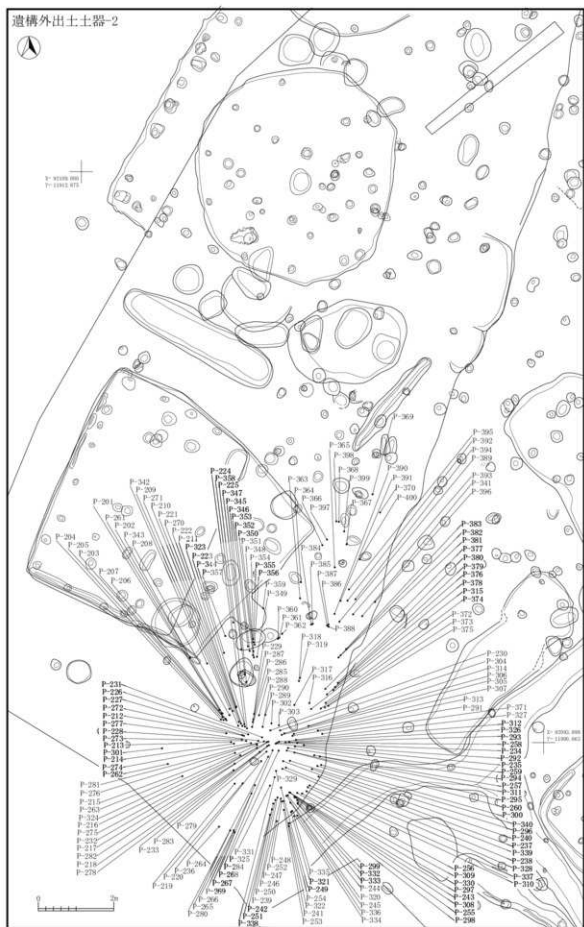


図 1-265 B・C区遺構外出土遺物-3

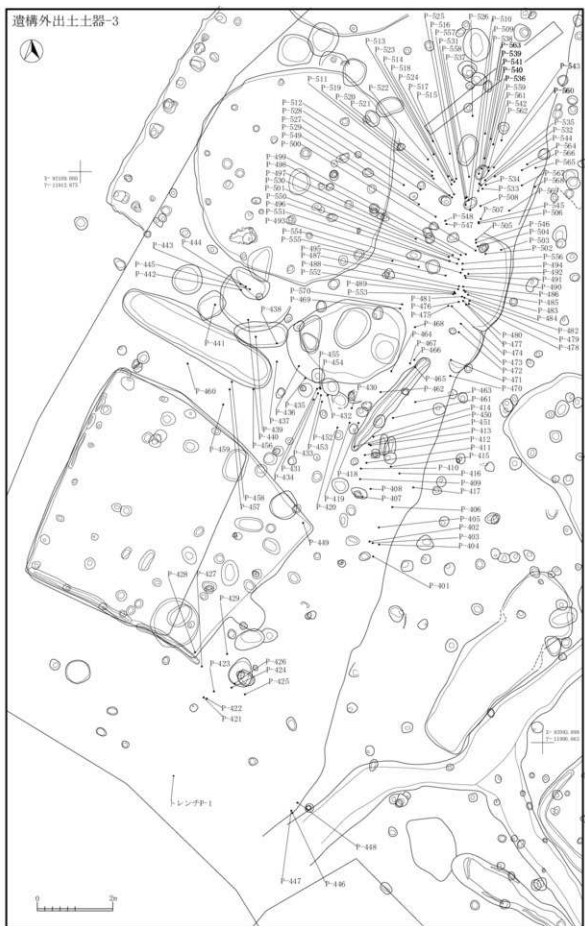


図 1-266 B・C区遺構外出土遺物-4



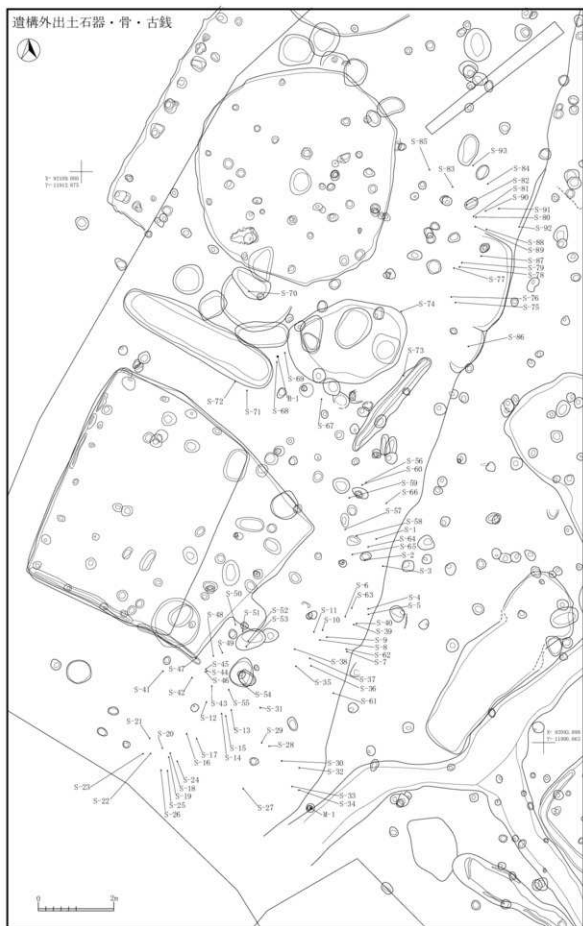


図 1-267 B・C区遺構外出土遺物-5

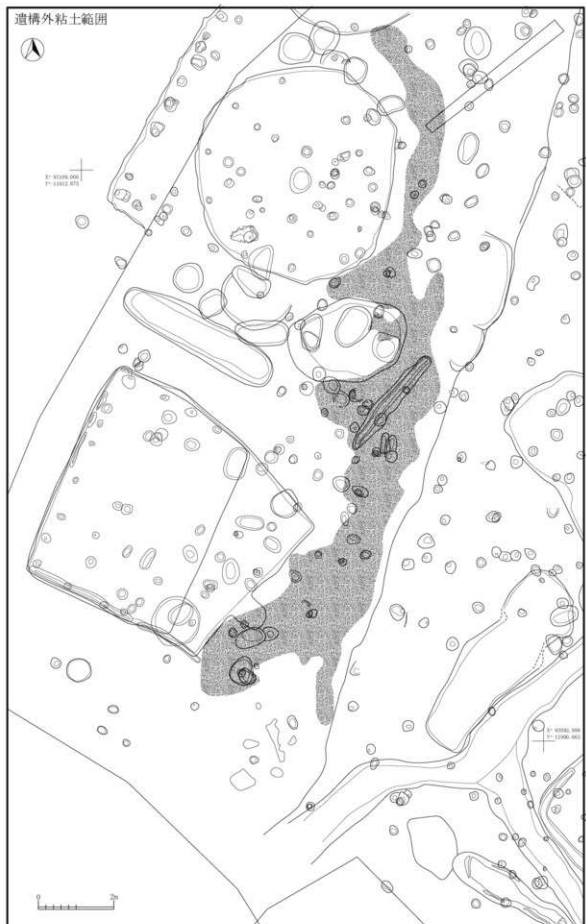


図 1-268 B・C区遺構外出土遺物-6

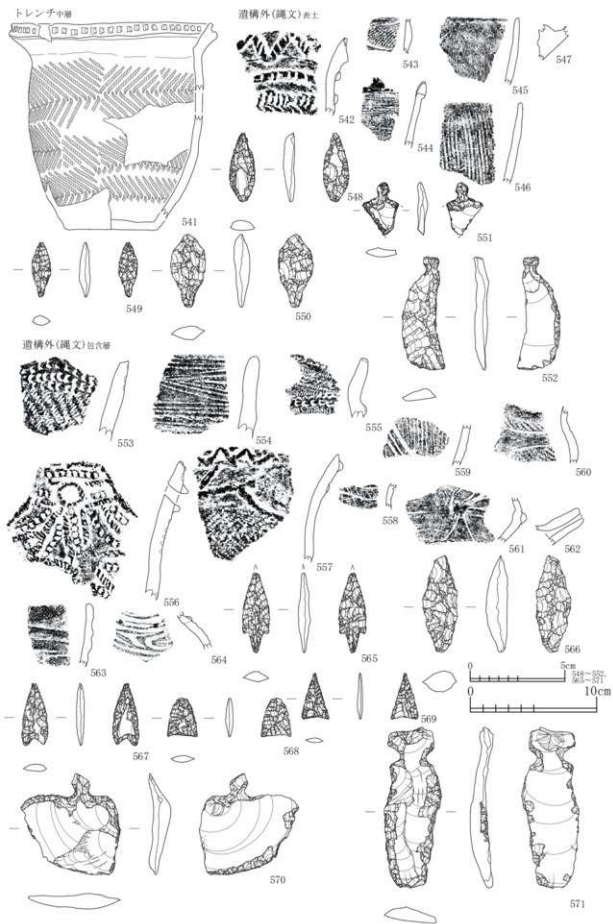
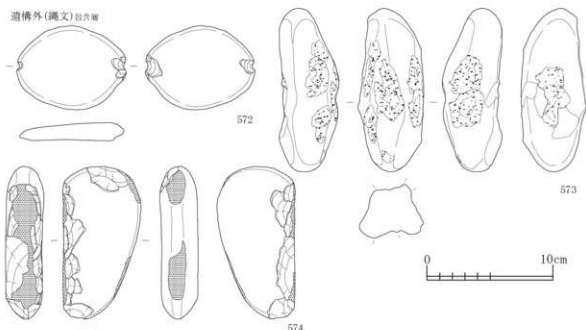


図 1-269 B・C区遺構外出土遺物-7

遺構外(縄文)包土層



遺構外(縄文)壁

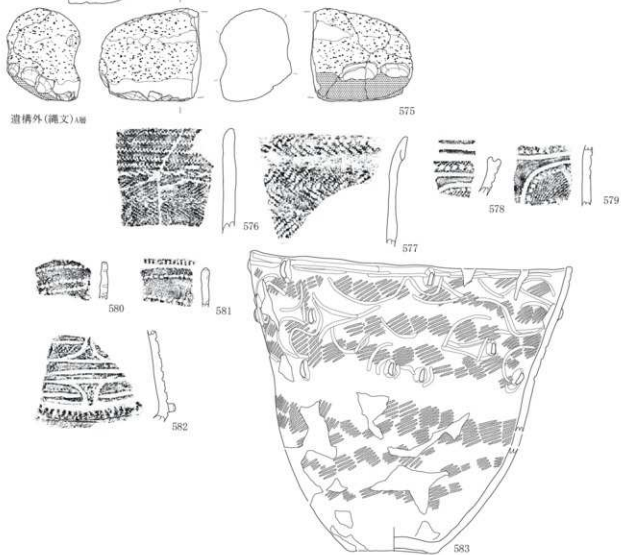


図 1-270 B・C区遺構外出土遺物-8



图 1-271 B·C区遺構外出土遺物-9

遺構外(縄文)Ⅱ

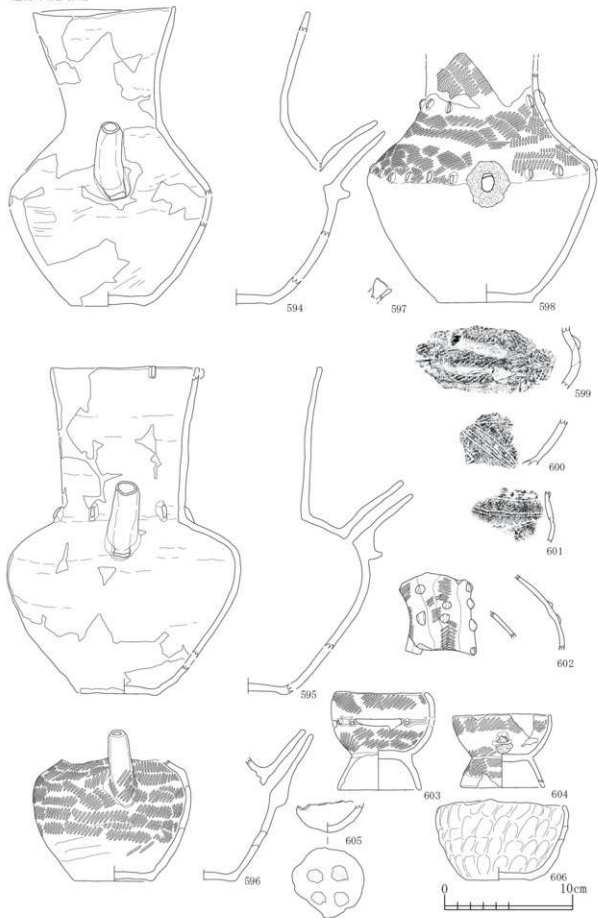


図 1-272 B・C区遺構外出土遺物 -10

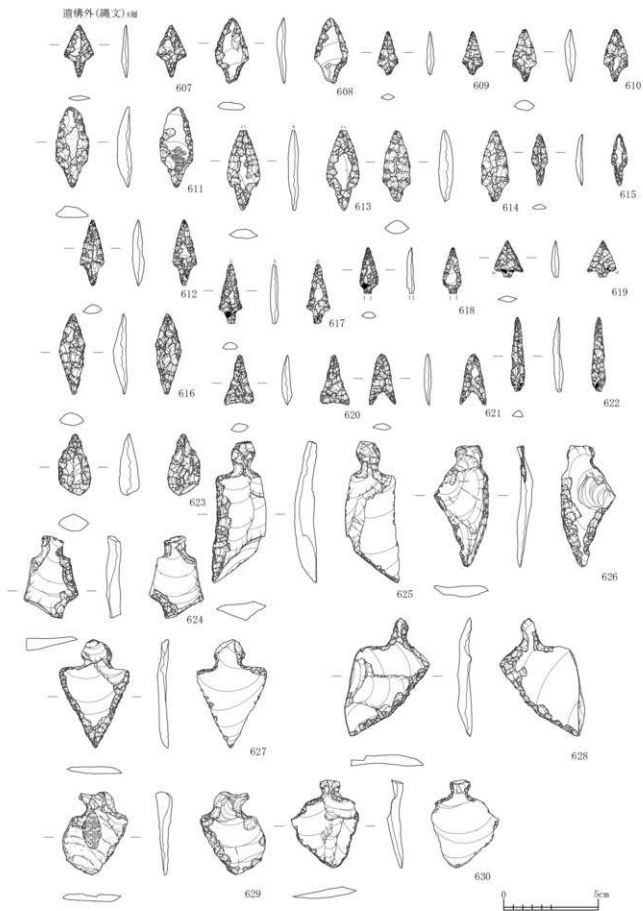


图 1-273 B·C区遺構外出土遺物-11

遺構外(掘文)A面



図 1-274 B・C区遺構外出土遺物 -12



遗構外(縄文)土

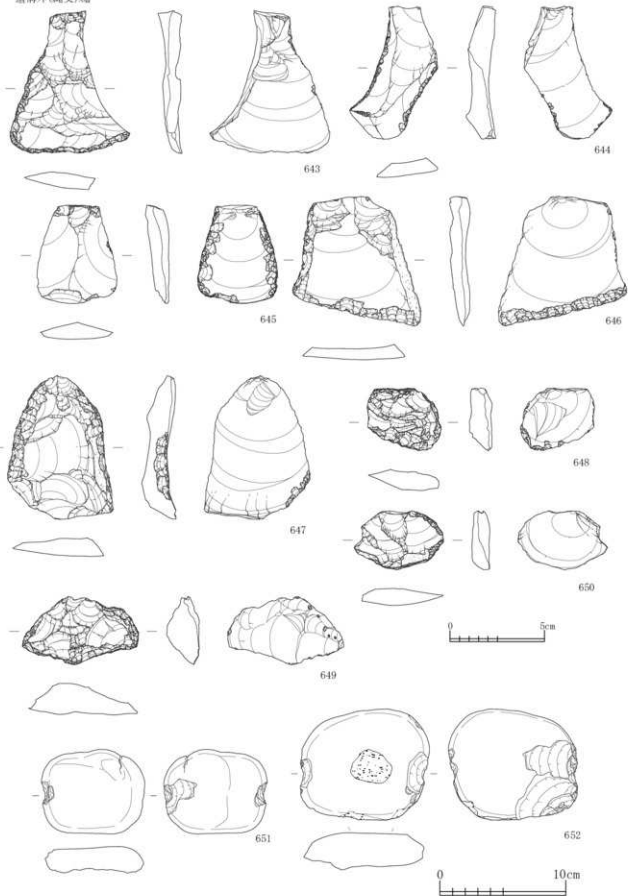


图 1-275 B·C区遗構外出土遺物-13

遺構外(雑文)AIII

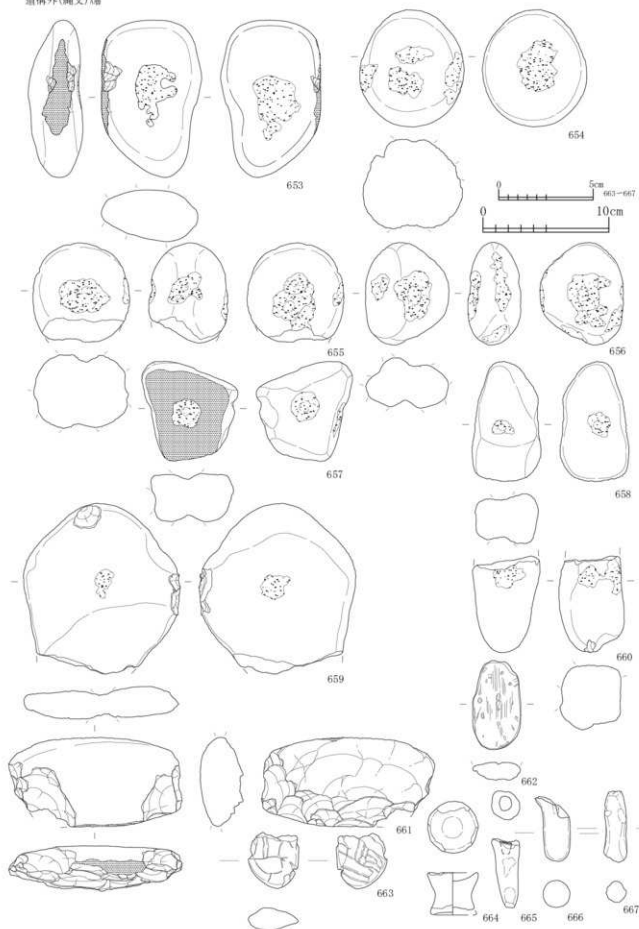


図 1-276 B・C区遺構外出土遺物-14

遺構外(縄文)層下位

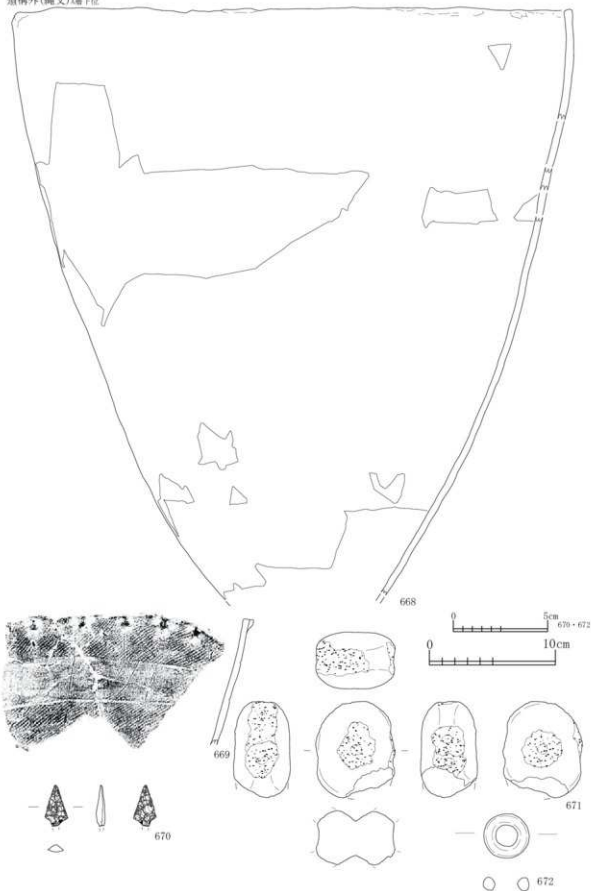


图 1-277 B·C区遺構外出土遺物-15

遺構外(縄文)am-cw

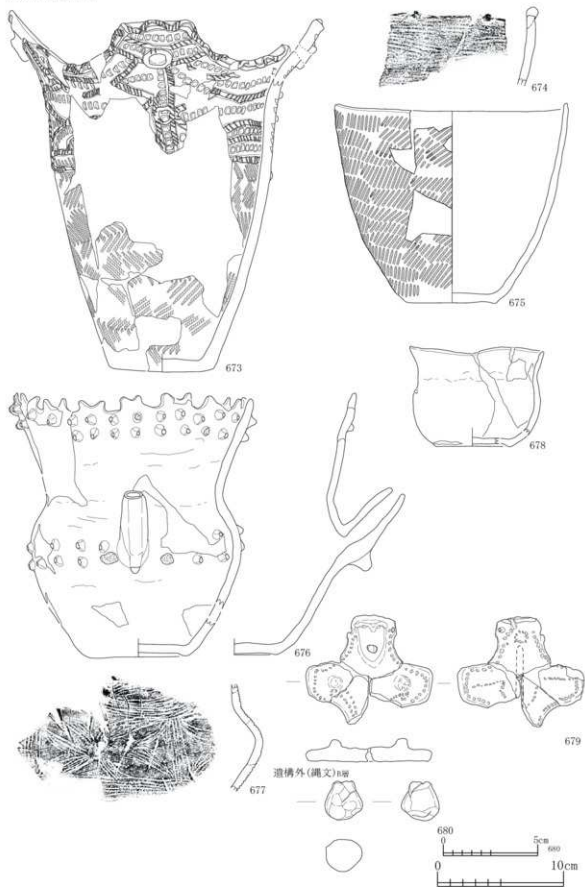


図 1-278 B・C区遺構外出土遺物-16

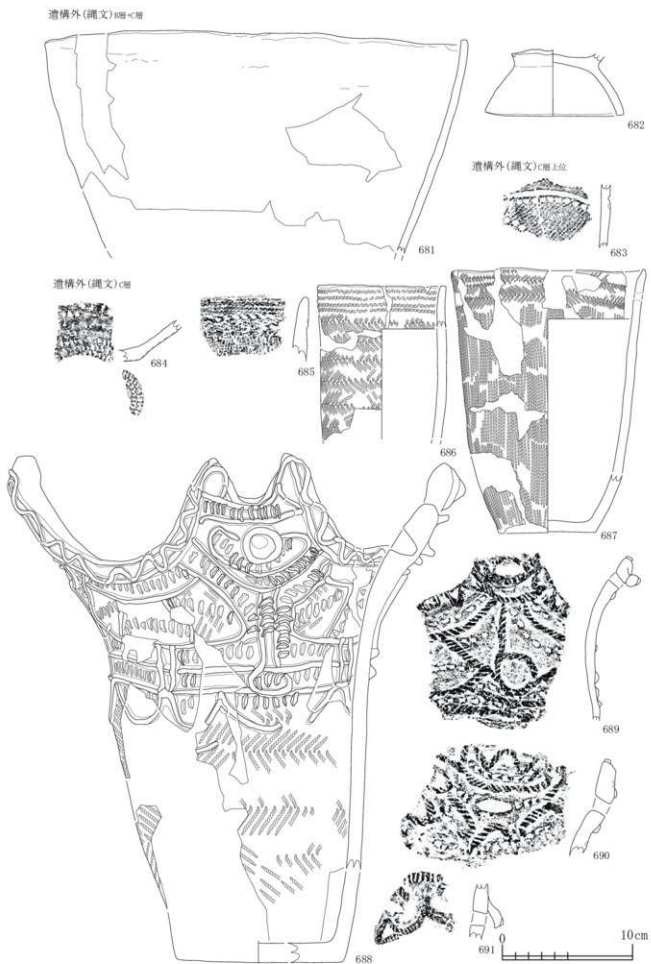


图 1-279 B·C区遺構外出土遺物-17

遺構外(陶文)cm

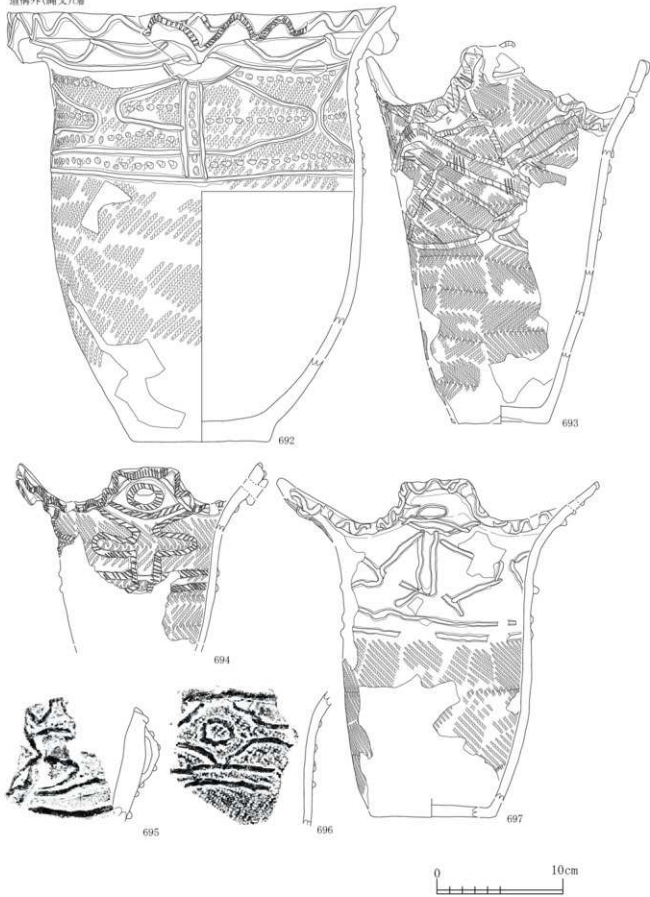


図 1-280 B・C区遺構外出土遺物-18

遗構外(陶文)等

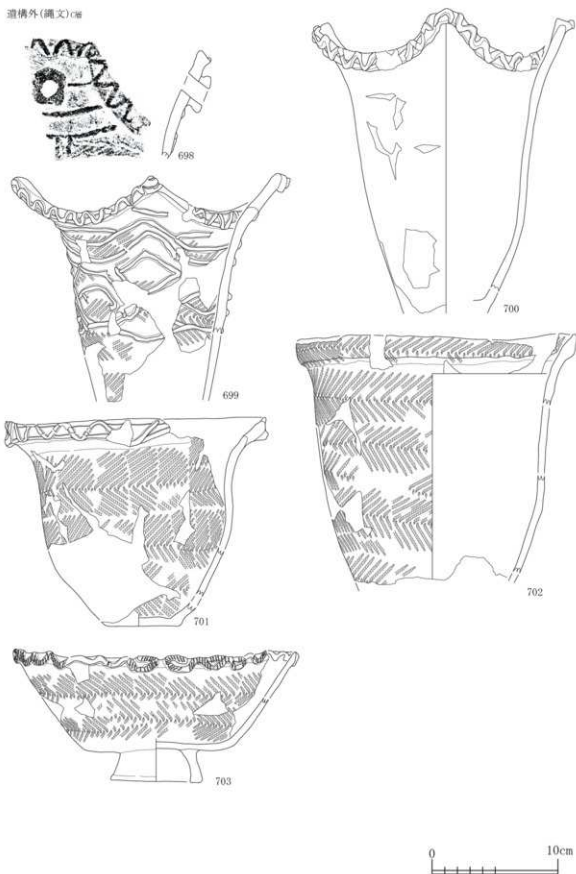


图 1-281 B·C区遗構外出土遺物-19

遺構外(縄文)cm

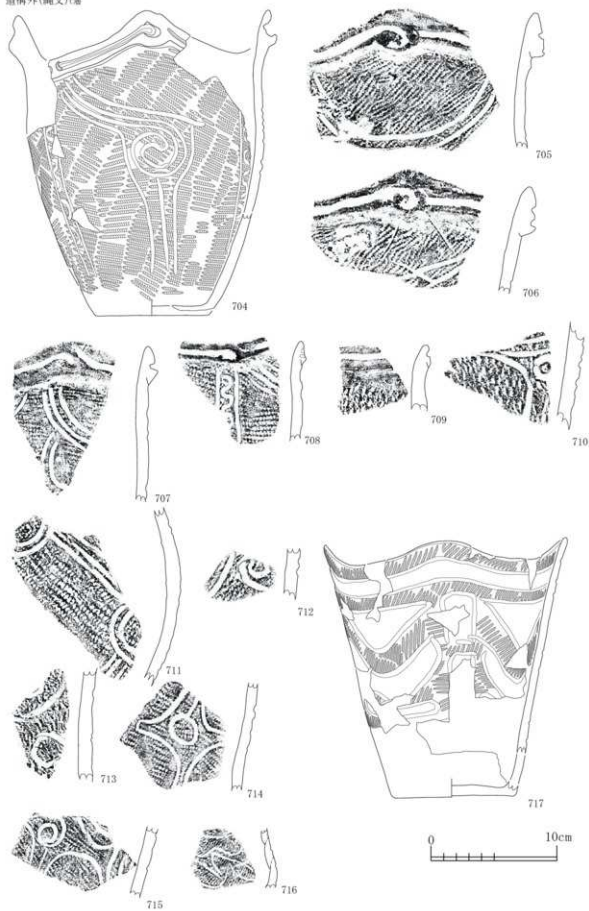


図 1-282 B・C区遺構外出土遺物-20



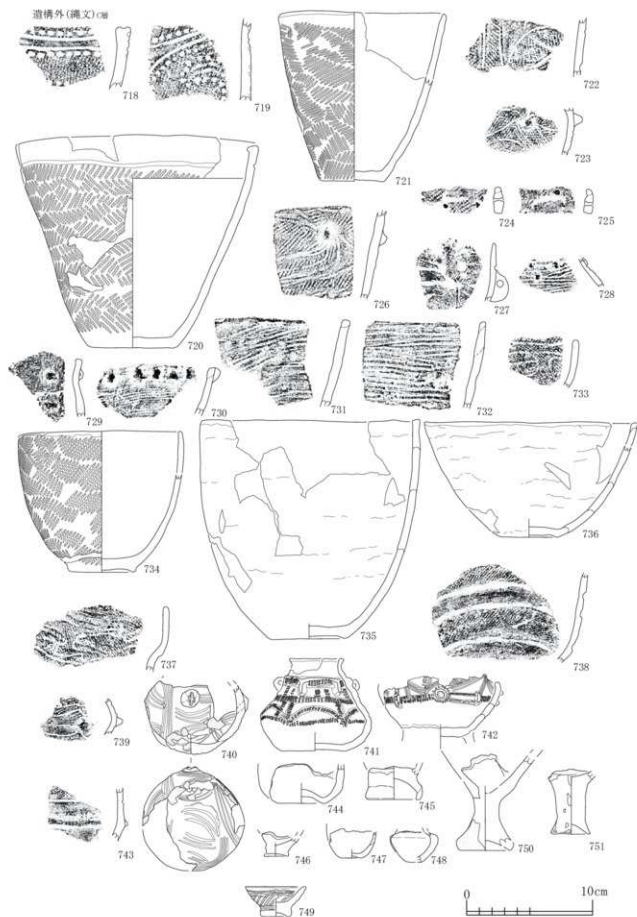


図 1-283 B·C区遺構外出土物-21

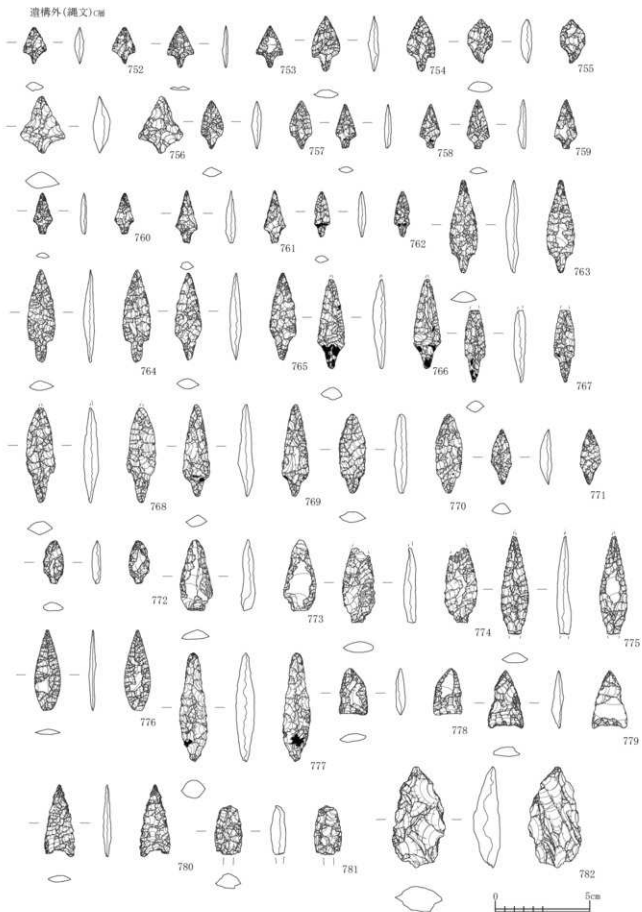


図 1-284 B・C区遺構外出土遺物-22

遺構外(縄文)②

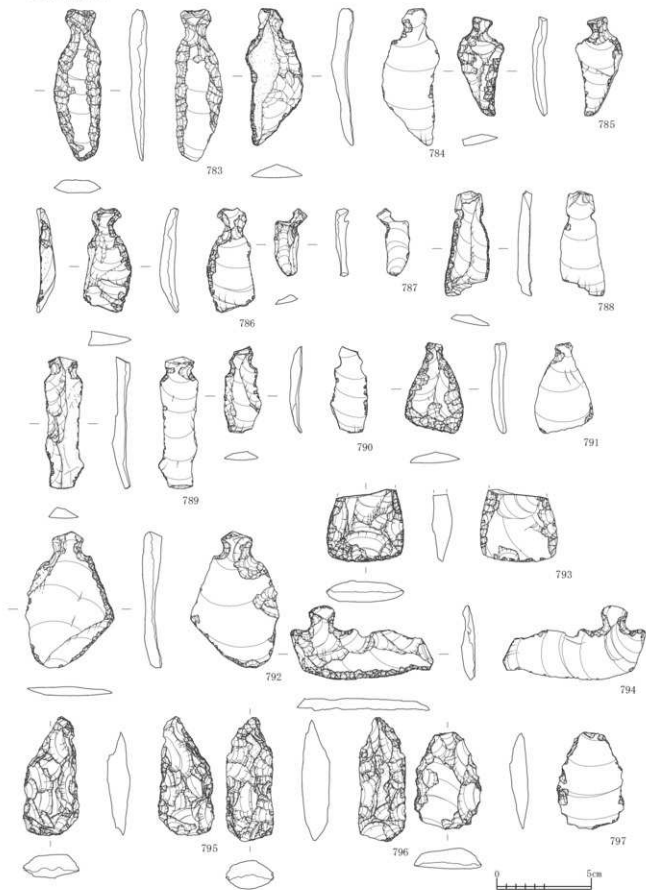


图 1-285 B·C区遺構外出土遺物-23

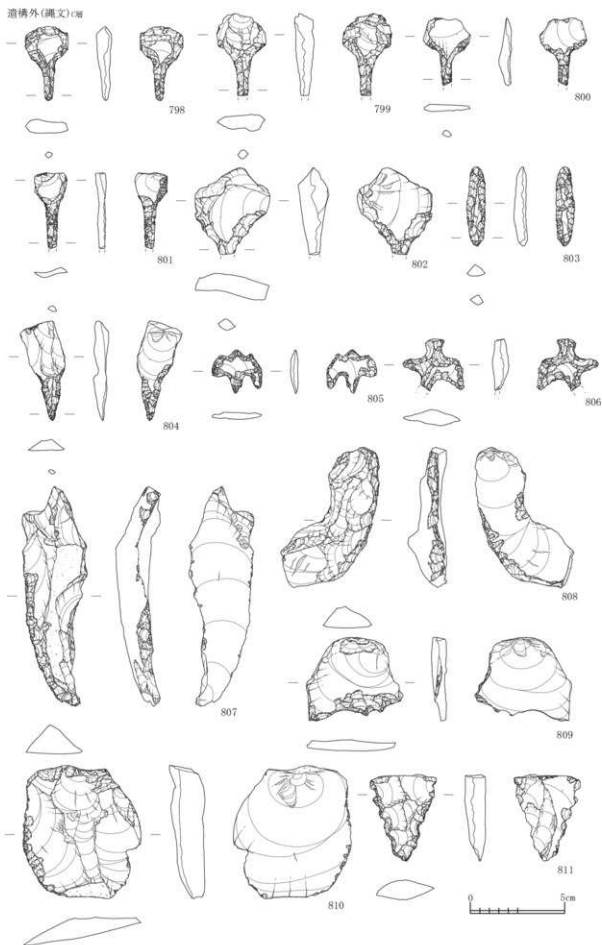


図 1-286 B・C区遺構外出土遺物-24

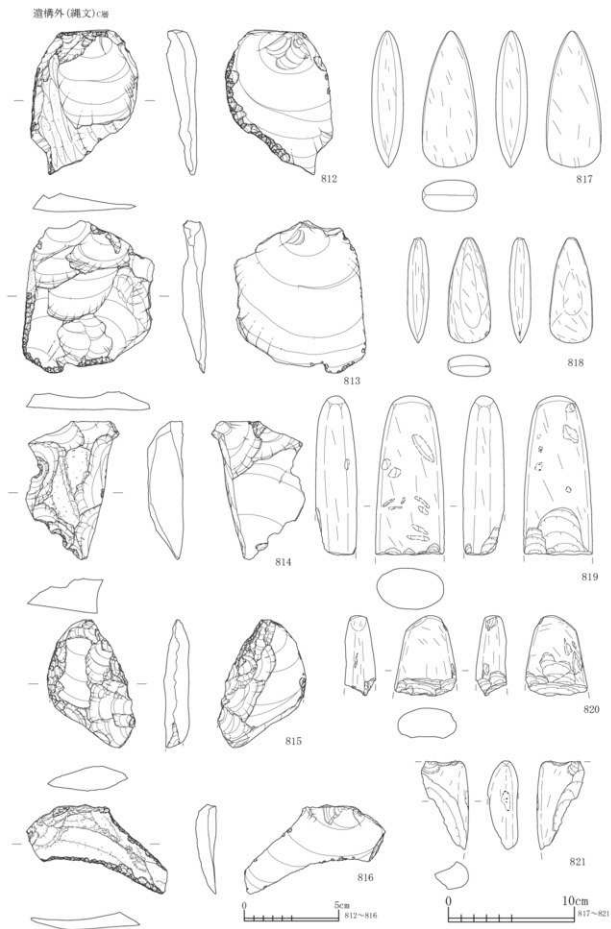


图 1-287 B·C区遺構外出土遺物-25

遺構外(縄文)cm

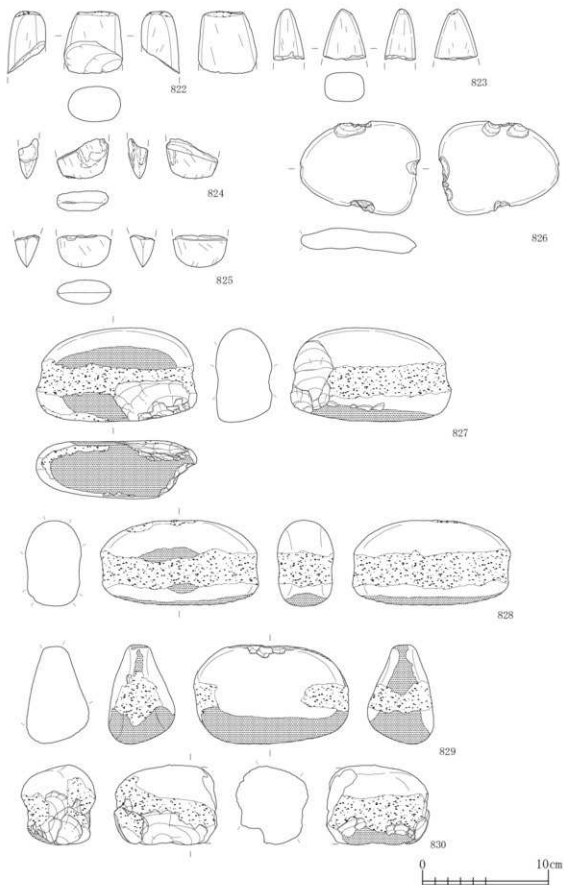


図 1-288 B・C区遺構外出土遺物-26

遺構外(調文)出土

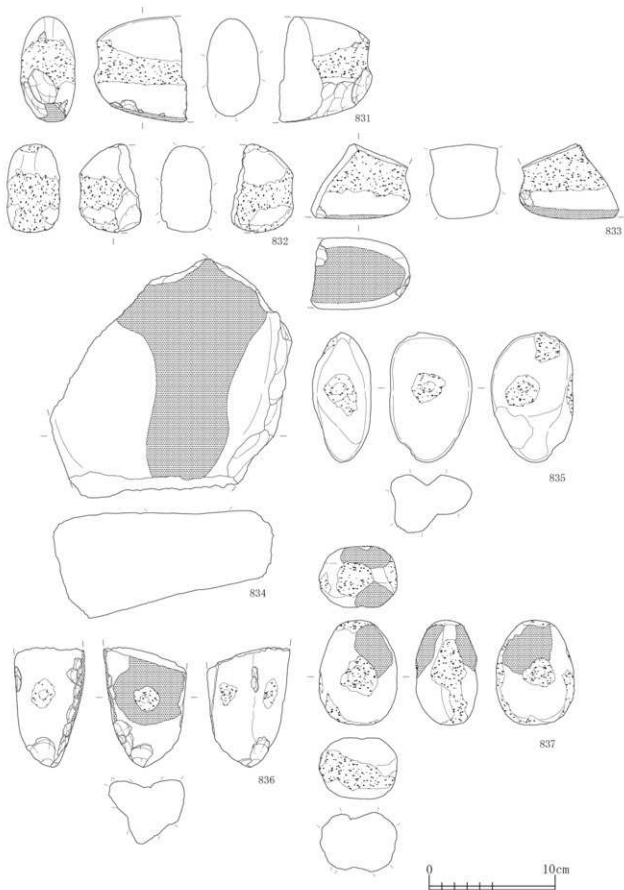


图 1-289 B·C区遺構外出土遺物-27

遺構外(雑文)cm

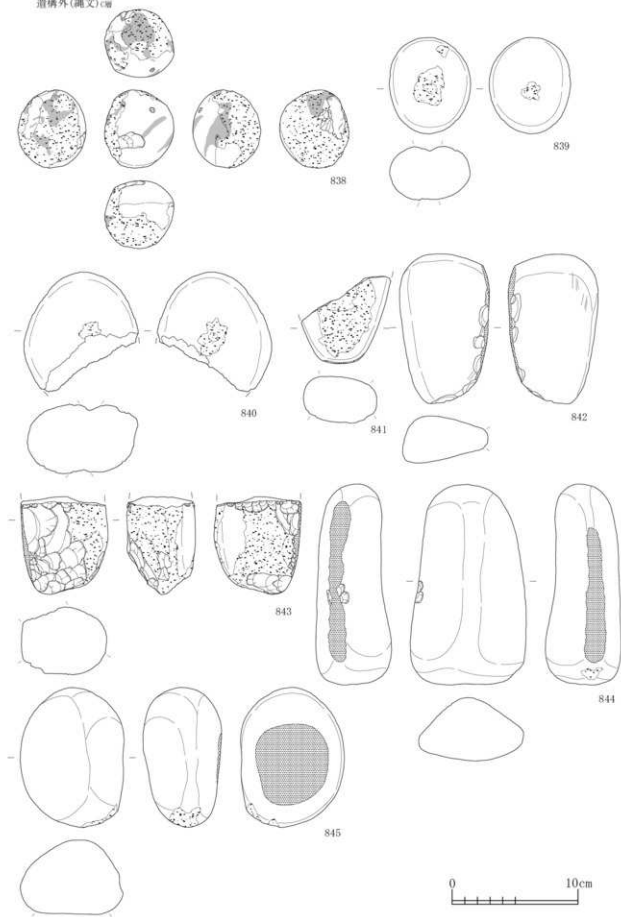


図 1-290 B・C区遺構外出土遺物-28



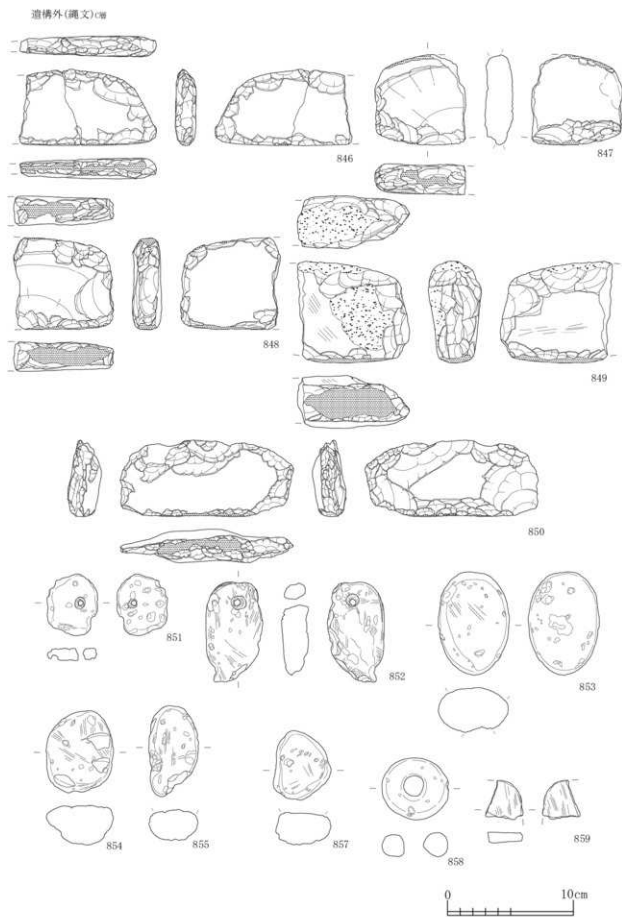


图 1-291 B·C区遺構外出土遺物-29

遺構外(縄文)cm

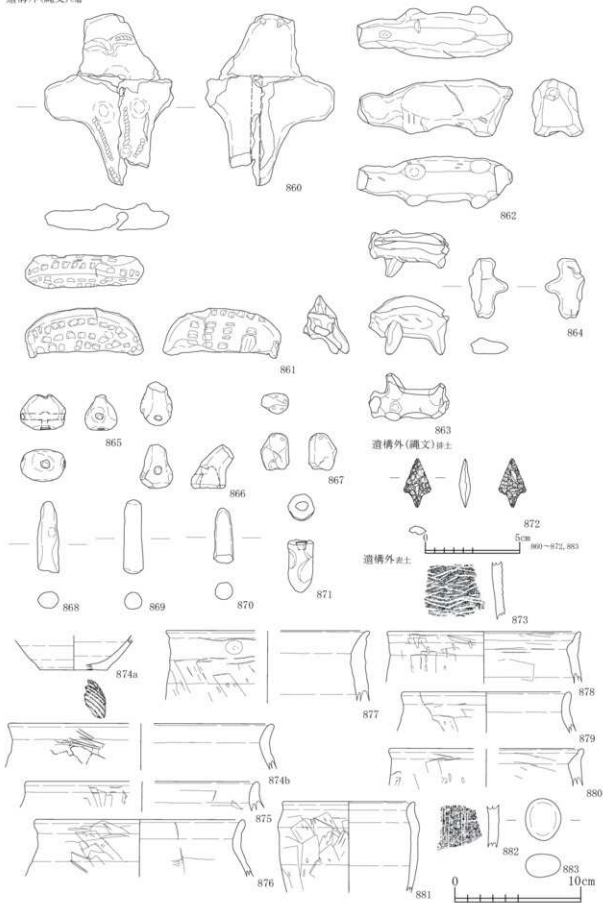


図 1-292 B・C区遺構外出土遺物-30

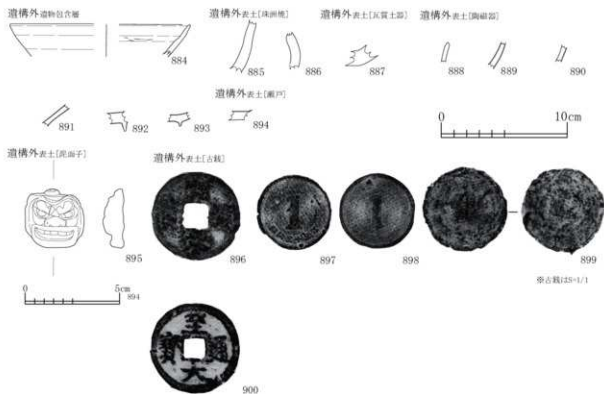


図 1-293 B・C区遺構外出土遺物 -31

新城平岡(4) D区遺構配置図 1/300

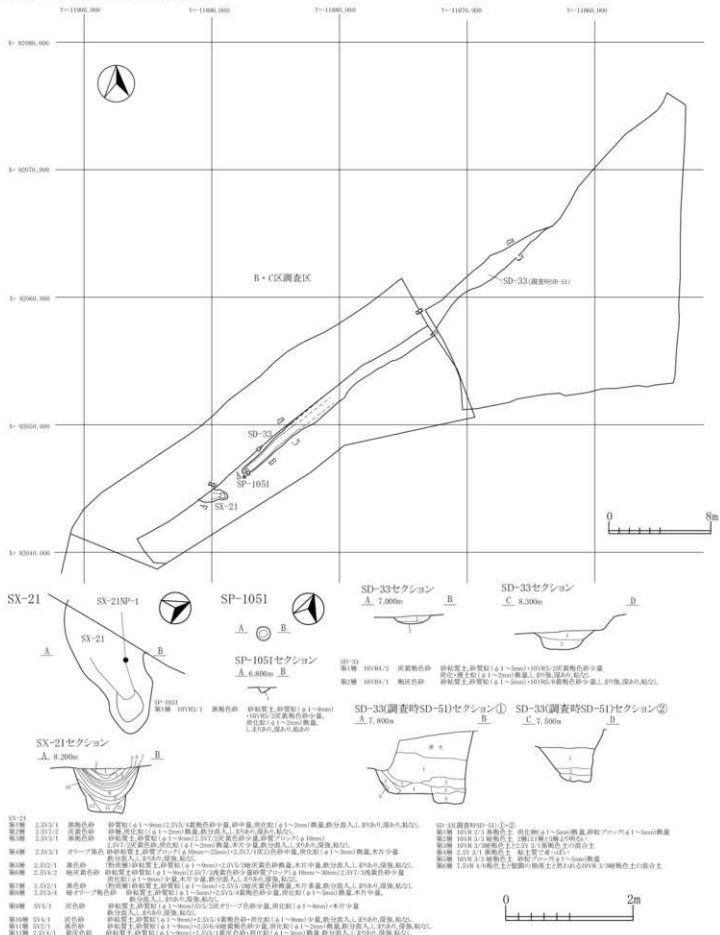


図 1-294 D区遺構配置・平面・セクション図

## 第IV章 D区

調査面積 548.6 m<sup>2</sup>の小規模な面積であるが、平成18・19年度の2カ年にわたって調査している。発掘調査担当者が異なった影響から、同一溝跡が各年度で異なる遺構番号が付されているが、報告に際し、最初に付された遺構名を優先して記載する。

### 第1節 検出遺構

#### 1. その他の遺構

SX-21 (図1-294)

調査区西端X=92044.200, Y=-11890.000付近で検出した。北西側が用水路側に面している為、崩落を防ぐため調査はとどめているが、不整長楕円形を呈する。検出部分での規模は、(231)×(101)×72cmを測る。断面形は、壁中段で角度を変え開き気味に立ち上がるが、ほぼ逆台形状を呈する。堆積土は12層に分層した。砂質土主体の堆積で、粉炭などが混入する。また、堆積土中からオニグルミ1点を検出した。

#### 2. ビット

SP-1051 (図1-294)

調査区西側X=92045.800, Y=-11887.700付近で検出した。平面形は円形を呈し、22×22×8cmを測る。断面形は、壁の一部が緩やかに立ち上がる形状を呈する。堆積土は1層に分層した。

#### 3. 溝跡

SD-33 (図1-294)

調査区西側X=92046.400, Y=-11887.700-X=92065.200, Y=-11864.000付近で検出した。流路は南西から北東方向で、東側の北壁側は用水路に接し、残存していない。幅は用水に接する東側が広く90-140cm、中央-西側は55-80cmを測る。断面形は段状に立ち上がる形状が一部で見られるが、鍋底状や逆台形状を呈する部分があり、形状が一様ではない。深さは、上流の西側が13-26cm、東側が55cm前後である。

新城平岡(4) E区遺構配置図 1/300

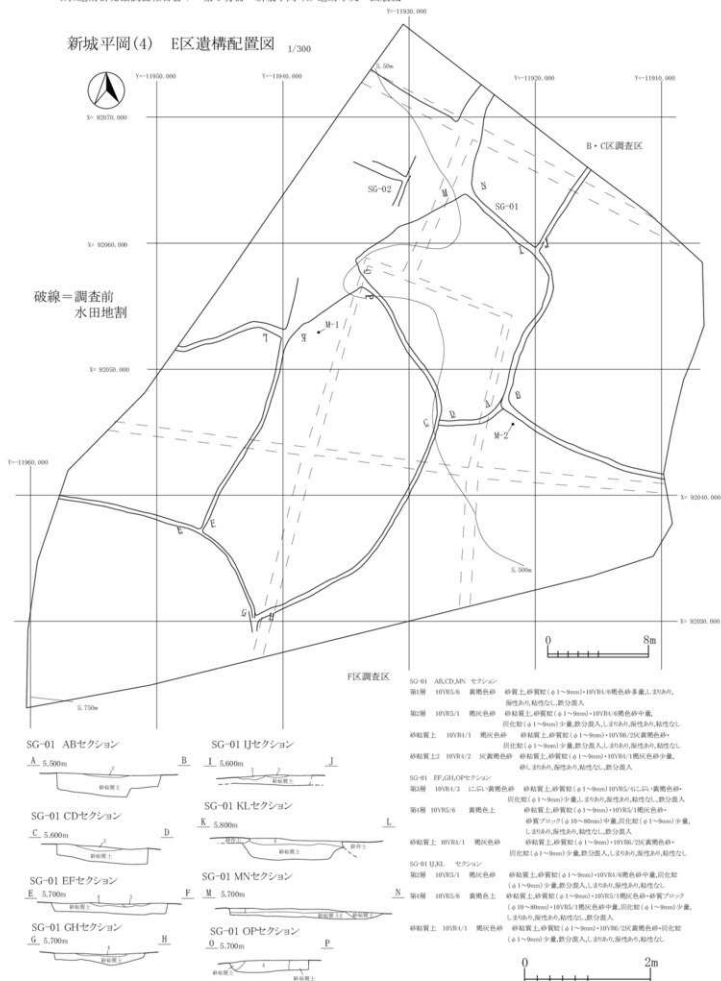


図 1-296 E区遺構配置・セクション図

## 第V章 E区

B・C区の南東側約1,692㎡を調査した。調査前の現況は水田及び廃材置き場で、標高5.4～5.7m前後とA区とは比高差が4mほどある。北側のB・C区側に接する部分は、元々A区から延びる丘陵が旧新城川によって削平されているが、近代以降にその削平部分をさらに拡張して平坦面とし、水田を構築しているようである。本地区の基盤は地山土であった。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

調査区内では、水田の畦畔が一部断続しながら検出しているが、破線で表現した調査前まで機能していた畦畔の区画単位と異なる位置のものが認められ、それぞれSG-01とSG-02という遺構名を付した。

新城平岡(4)遺跡以外の石江遺跡群内では青森市埋蔵文化財調査報告書第106集第2分冊中で掲載した新田(1)遺跡内のA・C区で発掘調査直前の地割と異なる畦畔を検出している(第106集第2分冊11・12ページ参照)。

新田(1)遺跡では、本遺跡同様、基盤が地山である地点を中心に検出した。調査前の地割とはほぼ類似した軸線を基本としているが、地割の中でも調査前直前迄機能していたものに比べ細分された単位の部分(SG-11・25・27-30)や異なる軸線(SG-01-04)を検出した。同一地点には古代を主体とする溝跡が走っているが、基盤が地山主体の地点では堆積層が薄く、時期判断ができる要素が無い。畦畔の痕跡が不明瞭ではあるが、A・C区南側の耕作土直下から近世～近代にかけての陶磁器や煙管・古銭が出土しているので、新田(1)遺跡の畦畔は、近世以降の利用が想定される。

#### 1. 畦畔

##### SG-01 (図1-296)

一部断続的ではあるが、調査区内全城を区画する形で検出した。区画の単位が不整形で調査区内で区画が明瞭なのが2箇所のみで、水田1が157.7㎡、水田2が274.2㎡と差がある。土器や陶磁器等の明確な時代特定のできる資料の出土は無かったが、水田2のM-1と表記した地点から大正12年銘のある桐一銭青銅貨(図1-295)が出土した。

##### SG-02 (図1-296)

SG-01と重複しているが、本遺構面の方が上位に位置していた為、掘削時点で除去された部分が多く、記録として残すことができた部分がわずかで

ある。破線で表記した調査前の地割に対して類似した軸線であることから、方形基調の地割であったことが想定される。しかし、現代の区割に比べると小規模な区割で、位置が緻密に重複していない部分も認められることから、現代まで利用されていた区割の前段階のものであったことが考えられる。

層的な重複関係の確認はなされていないが、検出状況などから、現代の水田>SG-02>SG-01の関係であったことが推察される。

遺物についてSG-01から大正十二年製の古銭が出土している程度で、明確な時期判断はできないが、戦後間もない昭和23年撮影の航空写真では方形基調の区割となっているのが確認できるので、少なくとも戦前以前として土地利用されていたことが考えられる。

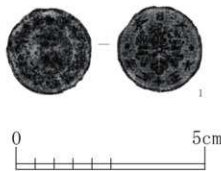


図1-295 E区遺構外出土古銭拓影図

新城平岡(4) F区遺構配置図

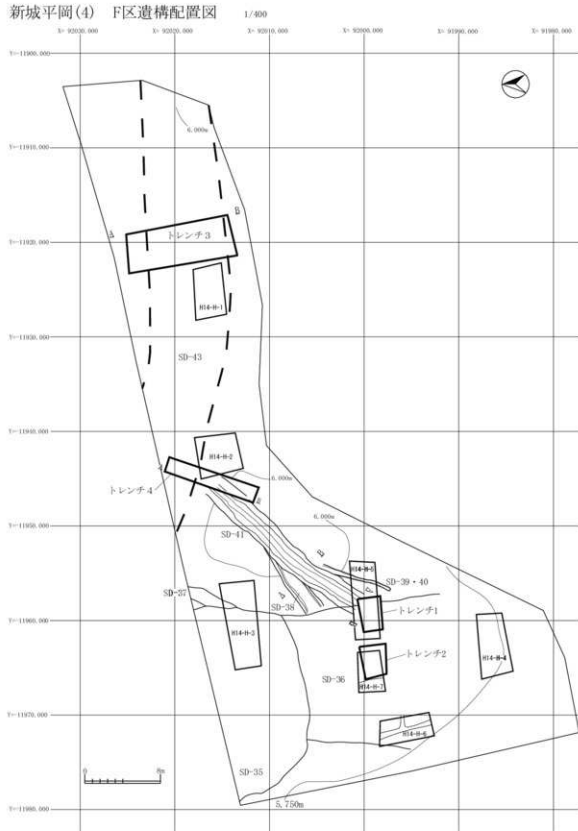


図 1-297 F区遺構配置図



## 第VI章 F区

E区の南側約1556.3㎡を調査した。E区とはほぼ連続する地形で、調査前はE区と同様に水田として利用されていた。南側に隣接するG区とはG区東側の地点が連続した地形となっているが、G区中央～西側の地点はG区側の方が高低な丘陵となっており、比高差が最大3.6mある。E区については、公園として保存される地点となった為、平成14年度に実施した範囲確認調査(当時の調査区名はH区)に引き続き、トレンチ優先の調査とし、遺構精査も一部に留めている。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 溝跡

SD-35・36 (図1-297, 299, 302)

調査区の西側で検出した。全面掘削していない為、全容は不明であるが、確認した平面幅は2.1m程まで広がる地点がある。平成14年度の範囲確認時のトレンチ(図中でH14-H-○と表記)の情報ではH14-H-3で深さ253cm、H14-H-4で深さ256cmと類似した深さであったことからほぼ、連続する流路であったことが推定され、旧河道であった可能性がある。

SD-36地点でSD-38・41と重複しているが、いずれの遺構も切っており、本遺構が新しい。

H14-H-5の部分の底面近くから摩滅した擦文土器(図1-302-1)が出土している。

SD-37 (図1-297・298)

SD-35の東側、平面確認のみ。平成14年度のトレンチ位置と重複しているが、当時は重機による掘削中心であったため、明確な記録がされていない。残存部の確認状況からSD-38・41と同様にSD-35・36より前に存続した溝跡であると考えられる。確認部分の規模は、幅140cm、長さ540cmを測る。

SD-38 (図1-298・299)

SD-36の東側で検出した。SD-36・41と重複しており、いずれの遺構にも切られており本遺構が最も古い。残存部の幅は200cm、長さ840cm、深さ75cmを測る。断面形は検出部分で箱形を呈する。

SD-39・40 (図1-298・299)

調査時に別の遺構として精査されたが、上層(SD-39)と下層(SD-40)の一本の溝跡である。平面図上ではSD-41との合流地点で途切れている

ように記録されているが、セクション図上ではSD-41の上面に堆積が確認されており、本遺構の方がSD-41よりも新しい。ただ、SD-41との重複位置についてはSD-41を主眼に掘削が行われ、残存しておらず詳細は不明である。

残存部の規模は、幅30～140cm、長さ880cm、深さ23cmを測る。

SD-41 (図1-298～300, 302)

調査区のほぼ中央～西側の地点で検出した。SD-36・38・39・40・43と重複しており、SD-38より新しく、残りの遺構より古い。西端をSD-36、東端をSD-43に切られている為、全容は不明であるが、北東方向へ流れる溝跡である。残存部の規模は、幅210～280cm、長さ2,150cm、深さ112～156cmを測る。

中・下層から木製品、下層から土師器破片(図1-302-3)が出土している。

SD-43 (図1-298, 300～314)

調査区中央～東側を流れる流路。平成14年度の範囲確認時のトレンチ1地点(H14-H-1)、2地点の一部(H14-H-2、深さ316cm掘削)、本調査時のトレンチ3、トレンチ4の一部が該当する。深さはトレンチ3で314cmを測る。ただ、比較的面積が広く掘削できたトレンチ3の地点でも、湧水が著しく、壁面崩落に伴い土層観察が部分的に留められ、トレンチ4についても北側に調査時も使用されていた用水があり、壁面崩落を防ぐために用水に接する壁面を残した為、調査が部分的に留められている。明確な幅と長さに関する規模は不明である。

平成14年度の確認調査時にH14-H-1の地点から19世紀代の陶磁器片が中層から出土し、底面近くから「十三仏」「十三神」「一切三世仏」等の笹塔婆が出土したが、本調査時のトレンチ3からも中層以下から多量の木製品が出土し、下層からは曲物なども出土している。笹塔婆も底面直上から多量出土した。笹塔婆に関しては次節で詳述する。図示した土器片は中層から出土した土師器2点である。

土層記録はトレンチ3・4で行なっているが、トレンチ3側の堆積は流れの緩やかな堆積状況を示している。

本流路は、西側の延長線上にSD-35・36とした流路と合流する位置関係にあり、東側は後述するG区の標高の低い地点へとつながり、流路幅が若干異なるがSD-56につながる位置関係となる。

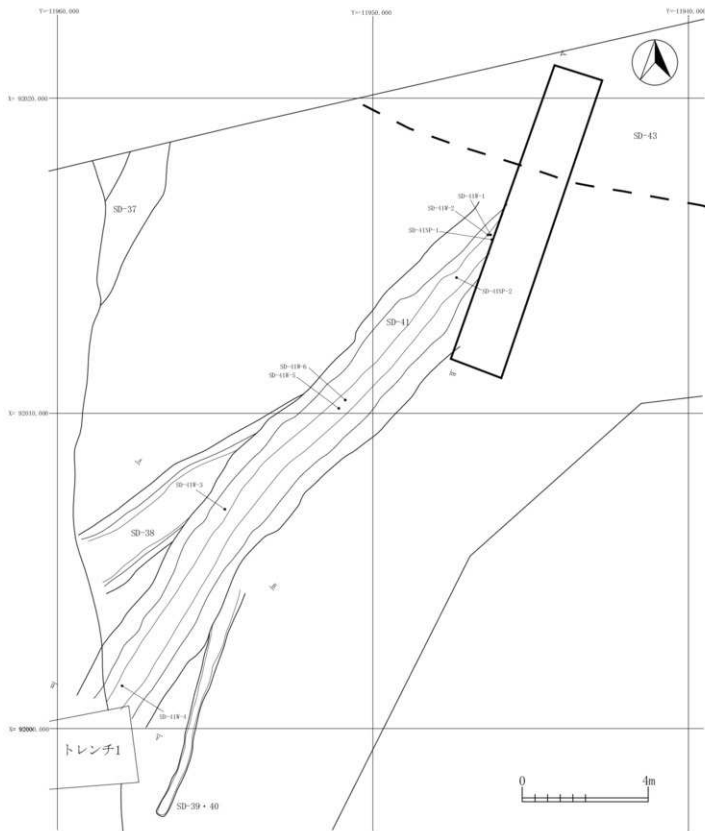
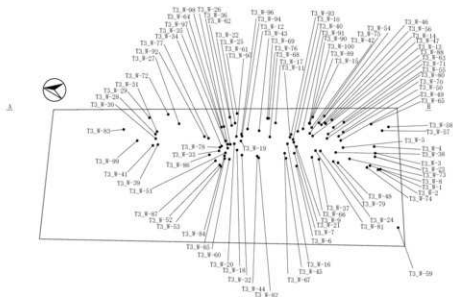


図 1-298 F区 SD-37~41, 43

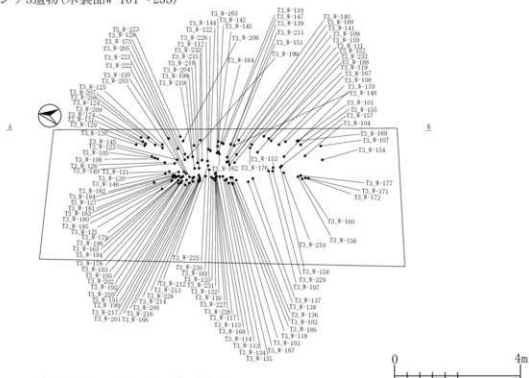




トレンチ3遺物(木製品W-1~100)



トレンチ3遺物(木製品W-101~233)



トレンチ3遺物(土器・石器・骨・植物種子)

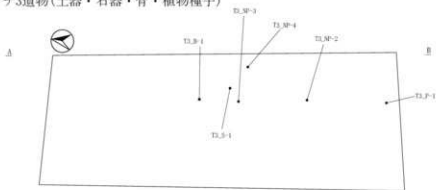


図 1-301 F区SD出土遺物位置図

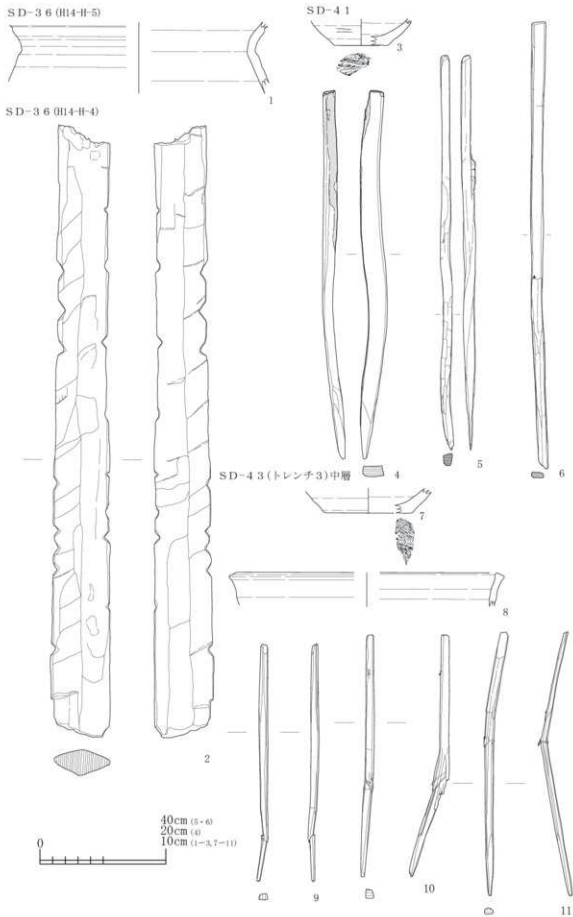


図 1-302 F区SD出土遺物-1

SD-43(トレンチ3)中層

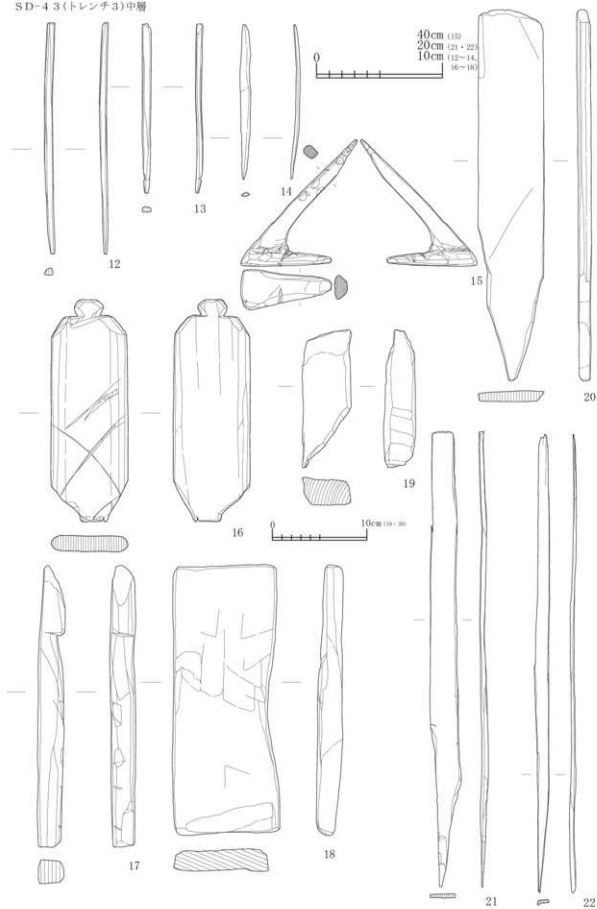


図 1-303 F区 SD 出土遺物 -2

SD-4 3 (トレンチ3) 中層

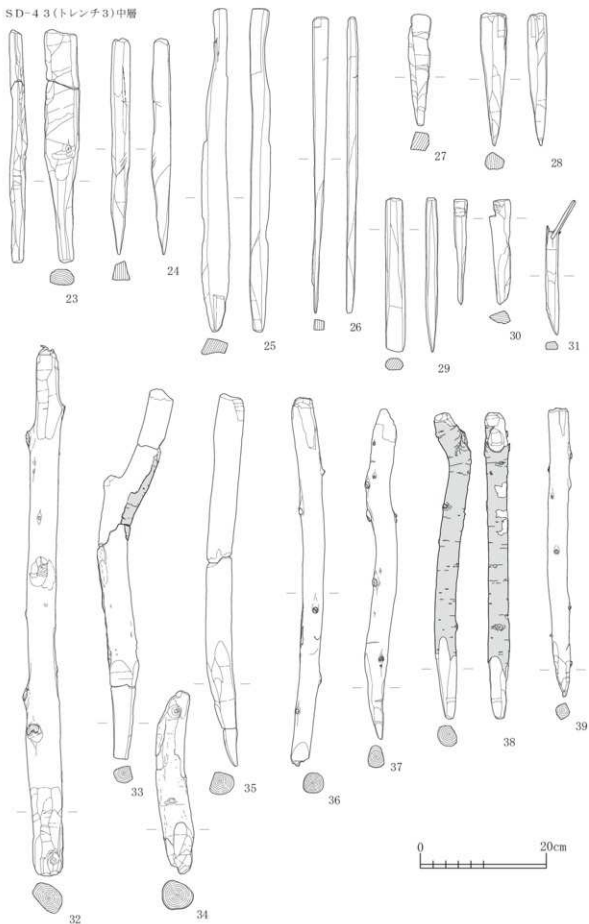
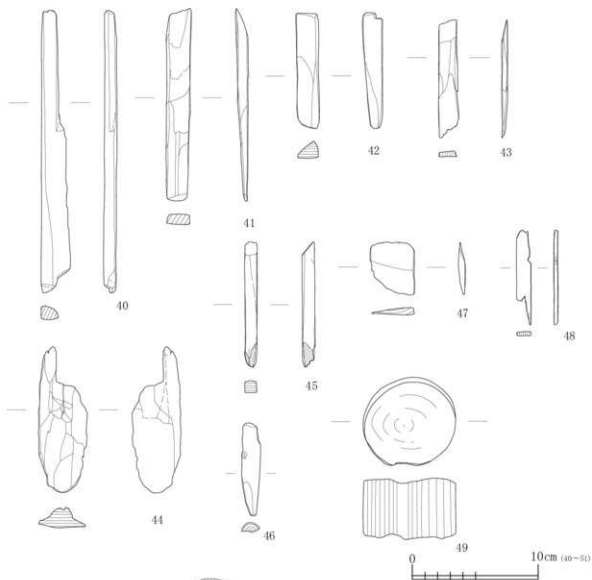


図 1-304 F区 SD 出土遺物-3



SD-43(トレンチ3)中層



SD-43(トレンチ3)下層

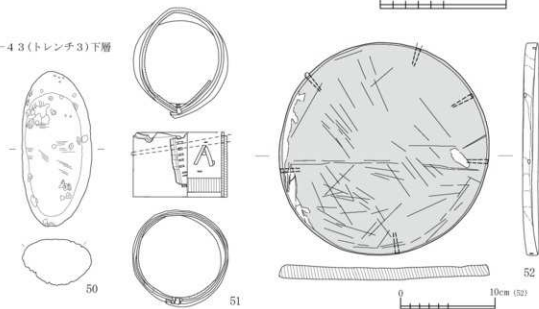


図 1-305 F区 SD 出土遺物-4

SD-4 3 (トレンチ3)下層

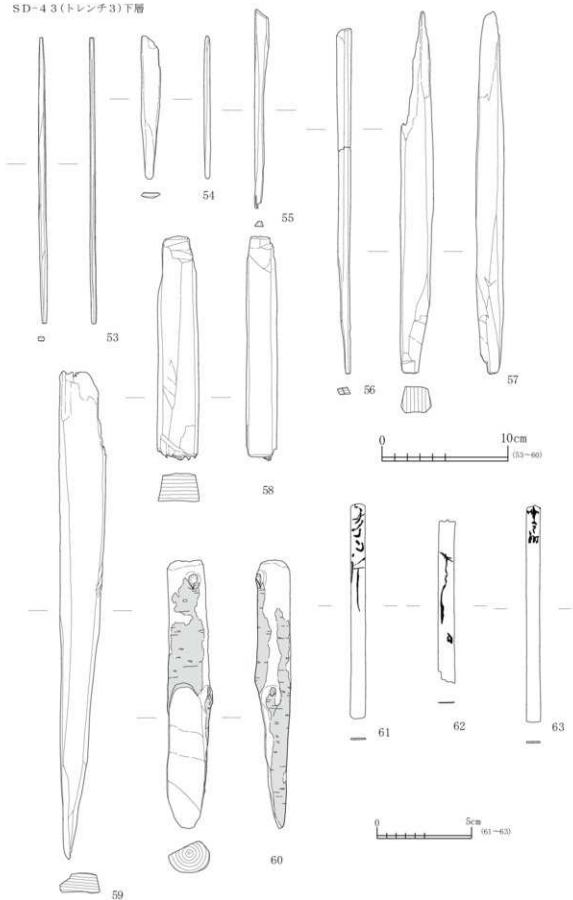


図 1-306 F区SD出土遺物-5

SD-4 3 (トレンチ3)下層

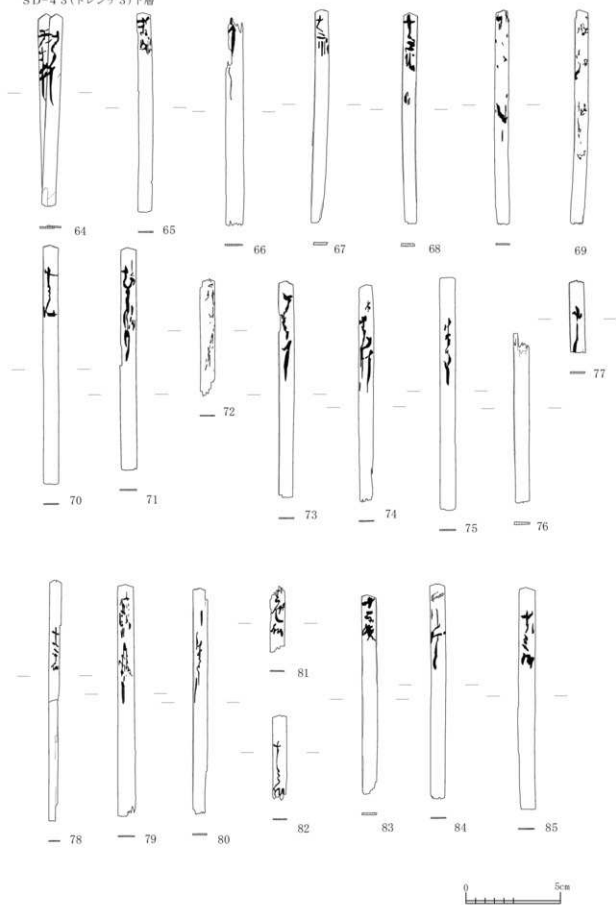


図 1-307 F区 SD 出土遺物 -6

SD-4 3 (トレンチ3) 下層

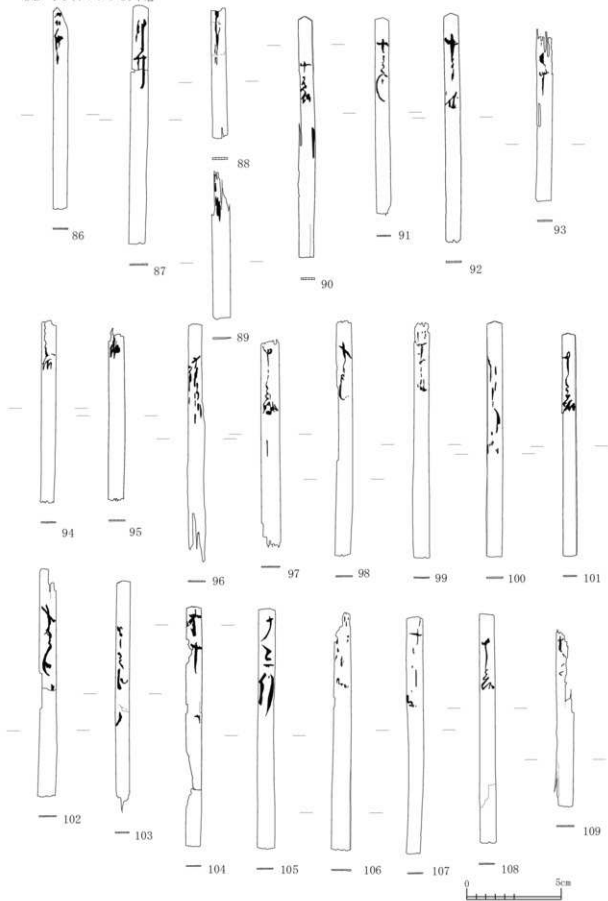


図 1-308 F区 SD 出土遺物 -7

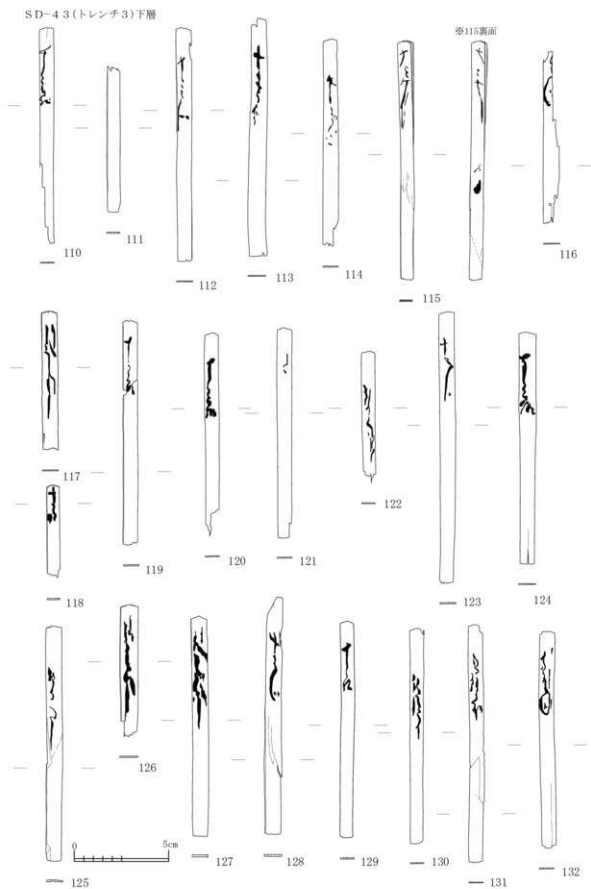


図 1-309 F区 SD 出土遺物 -8

SD-43(トレンチ3)下層

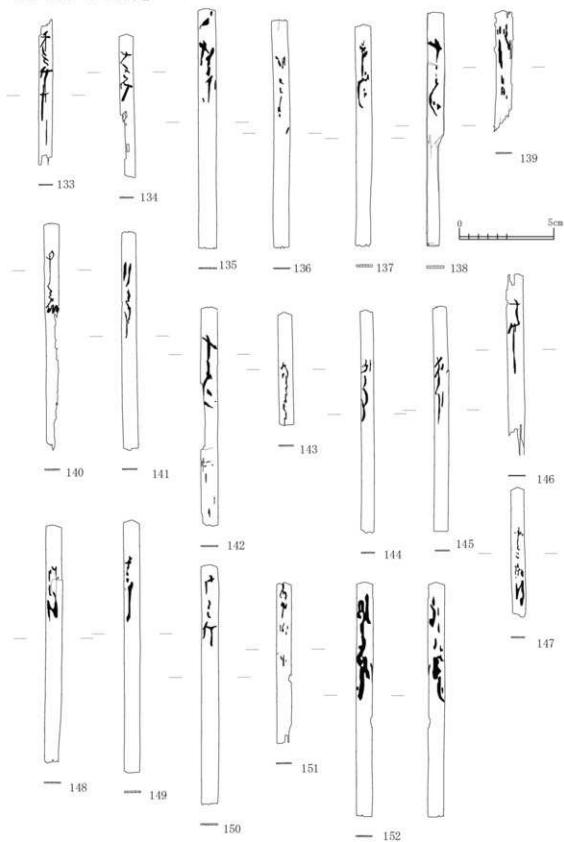


図 1-310 F区SD出土遺物-9

SD-43 (トレンチ3) 下層

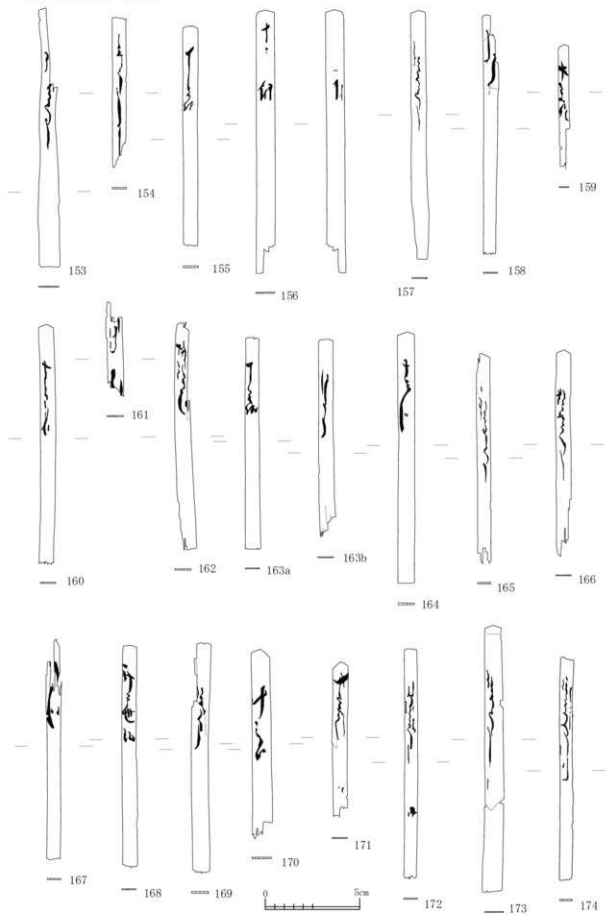


図 1-311 F区 SD 出土遺物 -10

SD-43(トレンチ3)下層

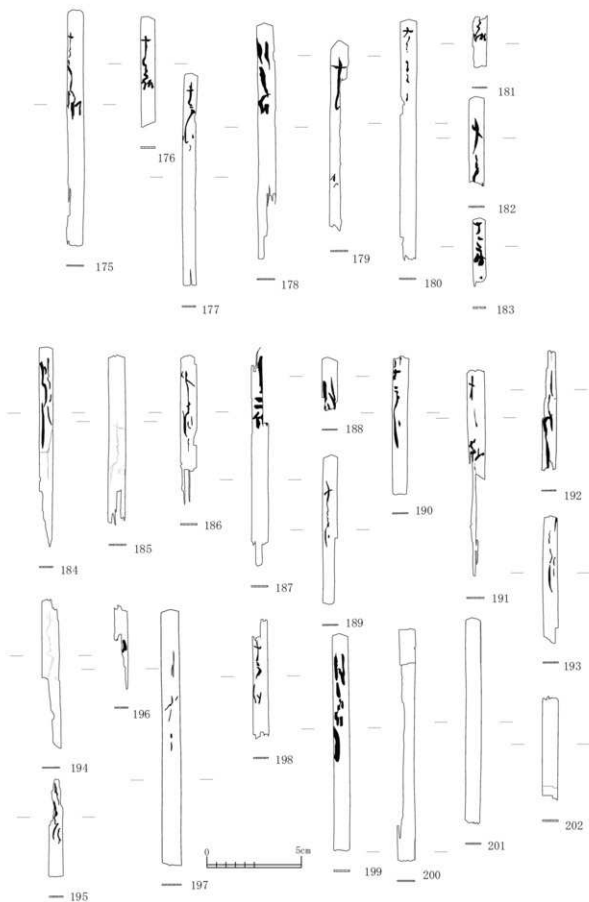


図 1-312 F区SD出土遺物-11



SD-43(トレンチ3)下層

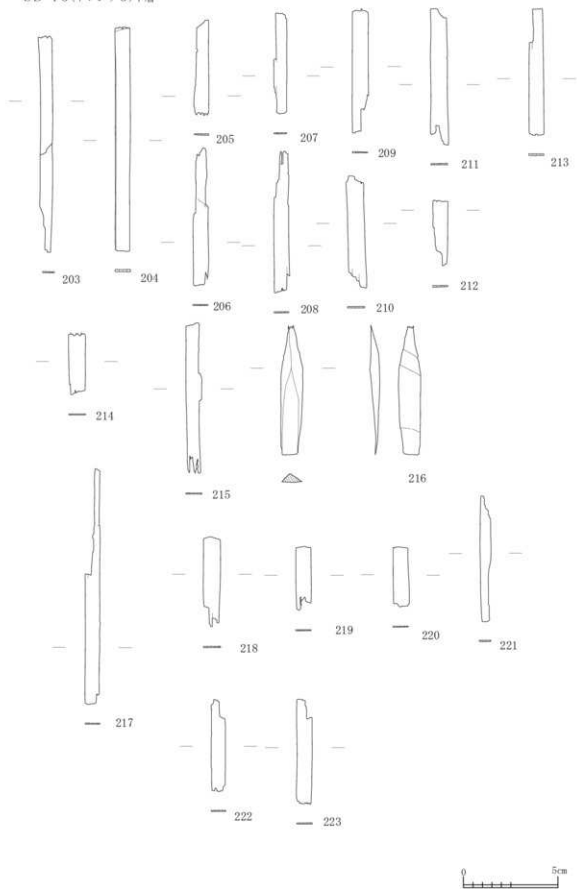


図 1-313 F区SD出土遺物-12

SD-4 3 (014-II-1)下層

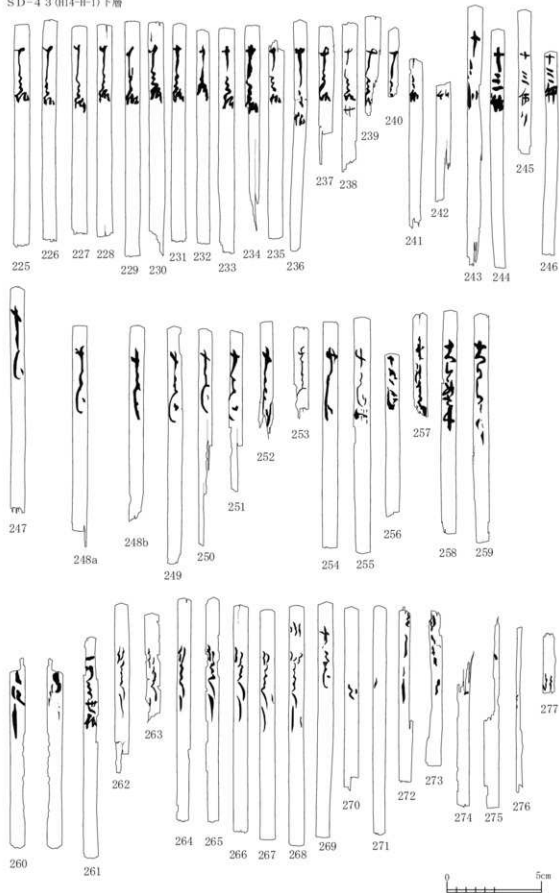


図 1-314 F区SD出土遺物-13

## 第Ⅶ章 G区

F区の南側約1525.2㎡を調査した。東側の一部107.8㎡は、用水掘削に伴い先行して調査している。F区の記述の際一部触れたがG区東側の地点がF区側と連続した地形となっているが、G区中央～西側の地点はG区側の方が小高い丘陵となっており、比高差は最大3.6mある。東側の溝跡が近代以降のものが主体であったため、一部土層確認を行い、平面確認主体で調査を留めた箇所がある。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡

S I-4 1 (図1-316・317, 332・333)

調査区の西側で検出した。南側が用水に切られており、残存していない。残存部の規模は535×[415]×31cmを測る。北西壁の外周にSD-67が掘削されていて斜面下方の北西側部分で鍵状に曲がっている部分を検出しており、本遺構の外周溝のような機能を有した可能性があるが、北隅部分で重複している箇所はルーズな広がり、竪穴と溝の軸線が異なるなどの不整合が生じている。ただし、記録されたセクションを確認すると溝と竪穴の堆積土は同一面で堆積しており、また、遺構配置図で掲載したコンターラインなどを比較してみると溝が斜面に対し直交するなどの位置関係にあることから、雨落ち溝等としての機能は果たしている関係にある。

竪穴内部柱穴は中央付近で3箇所、北西壁際で1箇所検出しているが、4本柱タイプであったことが推定される。西側のPit 2・4に新旧関係があり、Pit 2側が新しい。堆積土でも掘り方が一部再掘削された形跡があることから柱穴の再配置も含め建て替えが行われた可能性がある。壁溝は南西壁側の一部で断絶が見られるが、検出部分ではほぼ全周している。

堆積土は12層に分層し、掘り方部分を除く廃絶後の堆積層は10層に分層した。床面直上に堆積している10層からTora-火山灰をブロック状に検出した。出土遺物は4・5層を中心に出土しており、図示した28点もほとんどがこの層からの出土資料である。食膳具は非黒色の土師器主体で、甕は頸部幅が短くなる傾向にあり、口唇端部を折り返すように反らさせる5や6などの資料がある。非クロコでも8のように口唇端部を面取りしてクロコ気味に作出させる資料も含まれる。口径15cm未満の小甕はクロコ・非クロコが存在し、非クロコの方が若干大型である。その他製塩土器(26-28)なども出土している。

S I-4 2 (図1-318・319, 333)

調査区西側で検出した。SD-6 2と重複し、切られており、本遺構の方が古い。残存部の規模は[309]×307×39cmを測る。竪穴の軸線はコンターラインに直交した形で立てられており、斜面に対応した配置である。柱穴は竪穴内部で6箇所検出している。S I-4 1と同様にPit 1a・bとした柱穴が同一位置で配置替え(Pit 1a>1bの関係)が行われているので、建て替えが生じた可能性もある。

また、中央～南側にかけてPit 3と取り扱った土坑を検出している。隅丸方形を呈し166×150×45cmを測る。カマドは残存部からは未検出で、土坑の配置がかなり面的に場所を占める為、場合によってカマドが無かった可能性も否定できない。仮に存在していたと想定した場合、溝との重複部分にあたる南壁側にあつたものと推定される。

堆積土は13層に分層した。北壁側に掘り方を持つ以外は床面に掘り方がなく、壁際を中心に8～11層が堆積し、その後の中央付近の堆積に伴う第6・7層の上位にB-Tm火山灰が堆積している。

出土遺物はPitを中心に破片資料主体で出土しているが、重複するSD-6 2側に元々本遺構に帰属した資料の流れ込みが発生している可能性がある。図示した資料8点のうち、食膳具は29・30の非クロコの小坏ないしは小皿のみで、それぞれ第1・2層出土であることなども含め竪穴存続時期の資料とは認定できない。手づくね資料で底部切離しが静止糸切という特徴を有するタイプで、同様の資料はS I-4 3、SD-6 2からも出土している。甕はS I-4 1同様頸部幅の短い資料が多く、33のように外面体部のヘラ削りの調整が上下方向ではなく、横方向に行うものも見られる。

S I-4 3 (図1-320～322, 334～336)

調査区西側で検出した。北半分以上が用水によって切られているが、南側が残存している為、カマドを検出している。残存部の規模は115×[420]×56cmを測る。主軸方位はN-139°-Eで、いずれも用水に切れ、確定はできないが、S I-4 1と類似した軸線である。

竪穴内部からPitは11基検出しているが、この内、柱穴として機能したものは、Pit 6・7・8・12で、カマド設置壁側に壁に配置される4本柱タイプの可能性が高い。カマドの改築等建て替えが行われているが、柱穴もPit 7・8からPit 6・12に配置を変えている。壁溝は一部で断絶しているが、検出部分のほとんどを全周する形である。



図 1-315 G区遺構配置図

SI-41

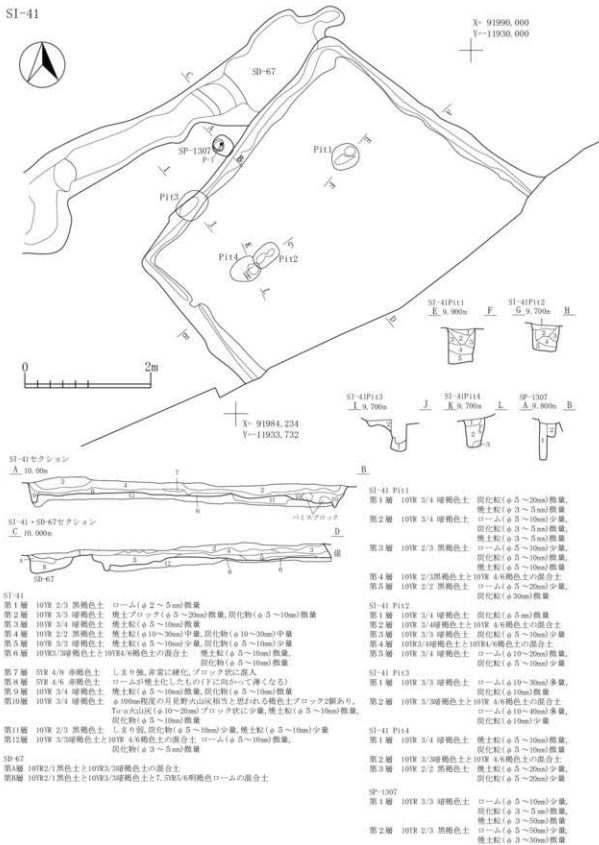


図 1-316 G区 SI-41-1



SI-42

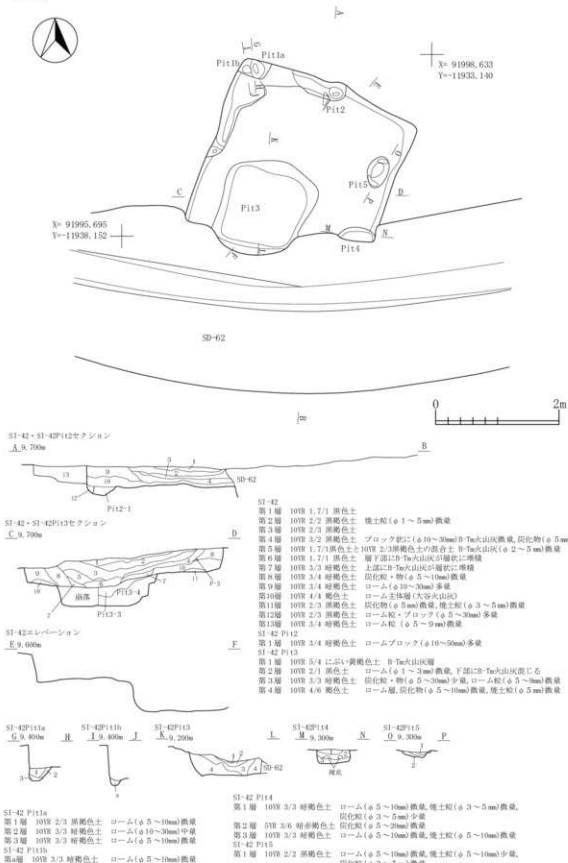


図 1-318 G区 SI-42-1

## SI-42遺物分布

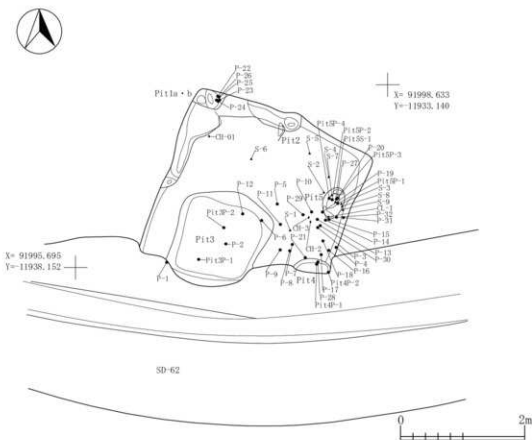


図 1-319 G区 SI-42-2

堆積土は10層に分層し、廃絶後の堆積層は9層に分層している。壁際に第7・8層が堆積した後に中央付近まで堆積した第6層の上面の一部にT o a火山灰が堆積している。また、その上位にあたる堅穴中層に堆積する第3層中でB-T m火山灰が堆積しており、自然堆積で両火山灰を検出している。

カマドは2基検出しており、西寄りのものが古く、東寄りのものが新しい。カマド2と取り扱った旧カマドは半地下式で、火床面と煙道の一部のみが残存している。残存部の煙道長は41cmを測る。新カマド使用時に壁際にP i t 1 2が構築されているので、使用時からかなり改変された可能性があるが、残存部からの軸線は、N-136°-Eと新カマドの軸線よりも若干振れが少ない程度である。火床面部分を貼床状にローム主体の土で覆ったり、カマド位置変更時点でしっかり整理されている。

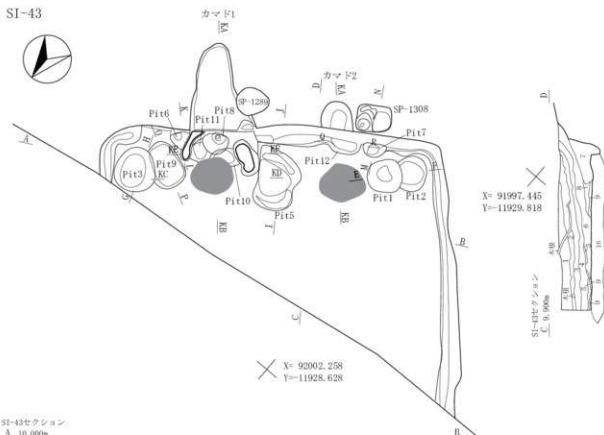
新カマドは半地下式で、袖幅103cm、煙道長130cmを測る。袖の芯材はなく、遺物が散乱した状況で出土している。

遺物は、カマド周辺を中心に万遍なく出土しており、本調査区の中では最も多い30資料を固化している。食器はP i t 1出土破片とSK-117攪乱部分出土の遺構間接合があった黒色土器の有台碗

(47)や床面直上相当の第9層出土の両面へら磨きの資料(48)、第9層とP i t 1出土破片が接合した墨痕のあるやや大ぶりの黒色土器桶(49)などが出土している。49は、口径16.8cm、器高7.6cm、底径6.4cm、器高指数4.5、底径指数3.8である。口唇端部の外反はなく、口縁部から伸ばし上げるように軽く反らせている程度である。土師器食器のうち、43は、第7層と第1層の接合資料で、1層出土の資料は摩滅している。口径9.0cm、器高3.3cm、底径5.2cm、器高指数3.6.7、底径指数5.7.8である。底部切離しは静止系切で、S I -4 2やSD-6 2出土資料と類似している。床面直上に相当する第6層出土の42は口径13.2cm、器高6.3cm、底径5.8cm、器高指数4.7.7、底径指数4.3.9である。ロクロ使用で、底部切離しは左回転系切である。カマド出土資料のうちカマド第4層の火床面より前庭側出土のP-5を図示した51は口径13.0cm、器高5.5cm、底径5.8cm、器高指数4.2.3、底径指数4.4.6である。器壁が厚く、口唇部が先細りの形状を呈する。二次被熱が顕著で、口唇部が一部欠け、内面に煤付着・油痕が認められることから灯明具としての使用の可能性が考慮できる。また、



SI-43



SI-43

- 第1層 10YR 2/2 黒褐色土
- 第2層 10YR 1.7/1 黒色土
- 第3層 10YR 2/3 黒褐色土 下部に5-Ta火山灰が層状に堆積
- 第4層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒(φ5~10mm)少量, 焼土粒(φ3mm)微量, 炭化物(φ5mm)微量
- 第5層 10G7 7/1 明緑灰色土 To-a火山灰層
- 第6層 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒(φ5~20mm)少量, 焼土粒(φ5~10mm)少量, 炭化物(φ5~10mm)微量
- 第7層 10YR 2/3 黒褐色土 ローム粒(φ5~40mm)少量, 焼土粒(φ5~10mm)少量, 炭化物(φ5~10mm)微量
- 第8層 10YR 4/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ50~100mm)多量混入
- 第9層 5YR 3/6暗赤褐色土 焼土層, 炭化物混入
- 第10層 10YR 5/3 に近い黄褐色土 ロームブロック(φ50~80mm)少量, 焼土粒(φ5~10mm)少量

SI-43P11・2  
E 9.500m



SI-43P13  
F 9.400m



SI-43P15  
H 9.800m



SI-43P16  
J 9.800m



SI-43P17  
L 9.900m



SI-43P19  
P 9.400m



SI-43 P11

- 第1層 7.5YR 4/6褐色土と2.5YR 4/6赤褐色土の混合土
- 第2層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)微量
- 第3層 10YR 2/3 黒褐色土 10YR 4/4褐色土ブロック(φ10mm)混入
- SI-43 P12
- 第1層 10YR 2/3 黒褐色土 ローム粒(φ5~10mm)微量, 炭化粒(φ5~10mm)微量
- 第2層 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒(φ5~10mm)少量, 焼土粒(φ5~10mm)微量, 炭化粒(φ1~5mm)微量, 灰(φ10~30mm)微量

SI-43 P13

- 第1層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒(φ5~10mm)微量, 炭化粒(φ5mm)少量, 焼土粒(φ5mm)微量, 灰(φ5mm)微量
- 第2層 7.5YR 4/4 褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)少量, 炭化粒(φ5~10mm)微量, 焼土ブロック(φ10~30mm)中量
- SI-43 P14
- 第3層 10YR 4/4 褐色土 ローム粒・ブロック(φ5~15mm)少量, 焼土粒(φ5~10mm)微量

SI-43 P15

- 第1層 10YR 3/4 暗褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)多量, 炭化粒(φ5~10mm)微量
- 第2層 10YR 3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ10~30mm)少量, 炭化粒(φ5~10mm)微量
- 第3層 10YR 3/3 暗褐色土 ロームブロック(φ30~50mm)多量

SI-43 P16

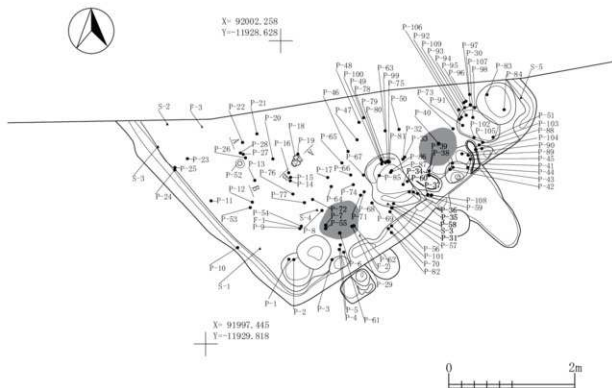
- 第1層 10YR 3/4 暗褐色土 ローム粒(φ5~10mm)微量, 炭化粒(φ5mm)少量

SI-43 P17

- 第1層 10YR 3/3 暗褐色土 ローム粒(φ5~10mm)微量, 炭化粒(φ10mm)微量

図 1-320 G区 SI-43-1

SI-43遺物分布



SI-43焼土範囲

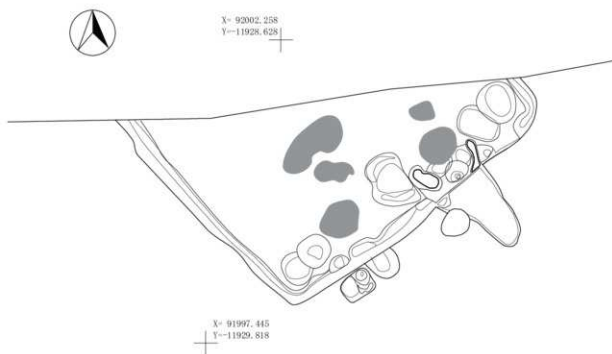


図 1-321 G区 SI-43-2

カマド煙道部第3層P-15出土を图示した50の体部には鋭利な工具による刻痕が施されている。

煮炊具の口縁部資料のうち、ロクロ系の資料は第7層出土の54、第4層出土の52はある程度の回転運動によって製作されており、52の内面の一部ではカキメが観察される。また、Pit3とPit5から出土した破片の接合資料である56は回転が緩いながらも口縁端部を面取りし、ロクロ系を志向する造りとなっている。体部-底部にかけての資料の中で、堆積土第6層とカマド第4層(火床面前庭側、KP-20)の接合資料である58は、底部が平底ながら体部がタタキによる調整で、底部はヘラ削りで調整している。内面はヘラによる調整で当て具痕を撫で消すなど、平底主体の製作となっている。非ロクロはロクロ系と同様に全形が再現できた資料は無いが、復元率が多少高く、口縁部に最大径がくる器形がある。57と59は堅穴堆積土とカマドならびにSK-117と遺構間接合した非ロクロの甕で、57は口径20.5cm、59は20.0cmを測る。57は歪みが顕著で、口縁が波状気味である。また、59は全体の調整が確認できる面以外に外面の体部上半に刻痕が残る部分があり、二面图示した。受け口気味の形状を呈する。小甕はSI-41と同様にロクロ・非ロクロそれぞれのタイプがあり、SI-41と同様にロクロ使用のものが小型で非ロクロのものが若干大きい形状である。非ロクロの62は底面が砂底で、口径14.2cm、器高13.2cm、底径6.5cmを測る。内面頸部に煮炊痕はなく、体部下半の一部に内外面が対応するように楕円形黒斑が観察される。ロクロ使用のものは64で、口径9.4cm、器高6.8cm、底径5.2cmを測る。底部切離しは回転切削であるが、糸切後に中央を中心にヘラによる再調整が行われており、回転方向までは不明である。内面頸部周辺に煮炊痕状の煤付着が見られるが、口唇の打ち欠きはその煤付着部分を切っており、打ち欠きの発生時期は煮炊段階ではない時期のものである。65は第6層と第9層出土のロクロ小甕で口径7.4cmを測る。羽釜状に外面頸部に耳状の突出があったようであるが、資料はその部分を打ち欠かれた状況で耳状の部分は残存していない。

#### SI-44 (図1-323, 336)

調査区中央より西側の地点で検出した。南側が用水によって切られているが、西側のカマド火床面が残存している。東側は欠落している為、単純比較はできないが、前述のSI-43の旧カマドと同じ側にカマドが構築されているのは確実である。ただし、建物の軸は、N-163°-EとSI-43比ベ南向き軸線となっている。また、SI-43が

壁際の堆積の後にT<sub>0-a</sub>火山灰の堆積が見られるのに対し、本遺構は床面直上やPit、カマド火床面直上堆積の土層にT<sub>0-a</sub>火山灰がブロック状に混入している点などSI-43より新しく、SI-41と類似した堆積状況を呈している。本遺構の配置は遺構配置図に图示したコンターラインを比較すると他の堅穴と同様に斜面の落ち際に建てられており、東側に傾斜する斜面の傾斜方向と直交するように建てられている。壁溝の一部が重複しているSTPa-01(SD-66)もほぼ同軸であり、斜面の傾斜方向を意図した構築である可能性がある。また、SBa-01b(新段階)の構成柱穴であるSP-1287・1288・1301と重複しており、本遺構の方が古い。Pitは堅穴内から重複するPitを除いて3基検出したが柱穴として機能したと考えるPitは無い。壁溝はカマド設置側の南西部分と東壁中央の一部で欠落し、断続している。堆積土は7層に分層した。第7層とした貼床が地山に直接貼られ、掘り方は存在していない。出土物はカマドから少量、堅穴中央-北側を中心に少量出土しており、图示した資料は4点である。床面直上に相当する第6層中から出土した68と69のうち、68は内黒釉の体部、69は小甕で口径14.0cmを測る。SI-43で掲載した62と類似した規格のものと考えられるが、本資料の方が口縁部が開き気味で丸みを帯びた口唇形態である。

#### SI-45 (図1-324)

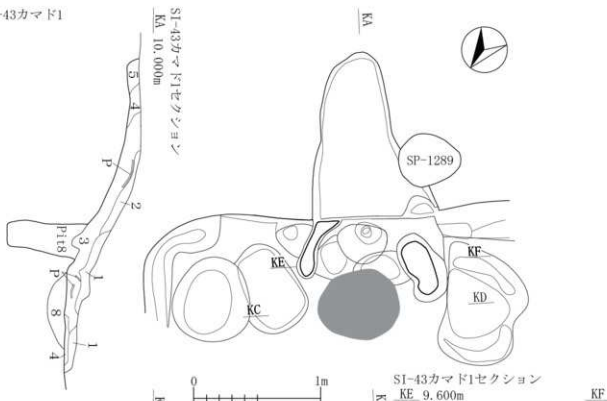
調査区の西側で検出した。調査時に堅穴のSIを付して精査されているが、重複するSD-61とSK-112に切られ、形状が変化しており、様相が不明瞭である。残存部の形状などから堅穴住居としてではなく、土坑ないしは小規模な堅穴遺構程度の規模であったものと推定される。残存部の規模は[210]×[60]×31cmを測る。堆積土中に火山灰、そして堅穴内からPitなどは検出していない。しかしながら、SI-45周辺にはSK-111・115が近接しており、類似した軸線を有し、図1-330で图示したSD-61のセクション③でもSI-45と若干離れた北側の地点に掘り方を確認していることから、SD-61を除く付近の遺構を一体で取扱う必要があるかもしれない。

## 2. 土坑

#### SK-111 (図1-324)

調査区西側で検出した。SD-61とSK-115と重複しており、SK-115<SK-111<SD-61の關係である。ただし、前述のとおり、一連の遺構として捉えられる可能性がある。平面形は、不整形長方形を呈し、133×63×27cmを測

SI-43カマド1

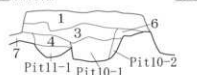


SI-43カマド1

- |             |                 |                                                   |
|-------------|-----------------|---------------------------------------------------|
| 第1層         | 10YR 2/3 黒褐色土   | 焼土ブロック(φ10~30mm)少量, To-a火山灰層上面にブロック状に散入           |
| 第2層         | 10YR 2/3 黒褐色土   | 焼土ブロック(φ20~30mm)少量, カマド煙道の天井崩落土と思われる              |
| 第3層         | 2.5YR 3/6 暗赤褐色土 | 焼土ブロック(φ10~20mm)少量                                |
| 第4層         | 10YR 3/3 暗褐色土   | 焼土粒(φ10~20mm)少量                                   |
| 第5層         | 10YR 2/3 黒褐色土   | 焼土粒(φ5~10mm)少量                                    |
| 第6層         | 10YR 3/4 暗褐色土   | ローム粒(φ5~10mm)少量, 地基部残存部分の上に堆積,<br>カマド壁より若干黄色土を帯びる |
| 第7層         | 10YR 4/6 褐色土    | 月見野火山灰10YR 5/6と大谷火山灰10YR 4/6の混合土<br>大床面           |
| 第8層         | 2.5YR 4/6 赤褐色土  | 焼土                                                |
| SI-43 Pit10 |                 |                                                   |
| 第1層         | 2.5YR 3/6 暗赤褐色土 | 焼土粒(φ5~20mm)少量, ローム粒(φ5~10mm)少量,<br>炭化粒(φ3~5mm)少量 |
| 第2層         | 10YR 3/4 暗褐色土   | 焼土粒(φ5~20mm)少量                                    |
| SI-43 Pit11 |                 |                                                   |
| 第1層         | 10YR 3/4 暗褐色土   | ローム粒(φ5~10mm)少量, 炭化粒(φ3~5mm)少量,<br>焼土粒(φ5~20mm)少量 |

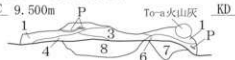
SI-43カマド1セクション

KE 9.600m

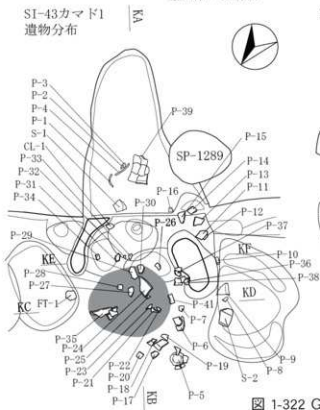


SI-43カマド1セクション

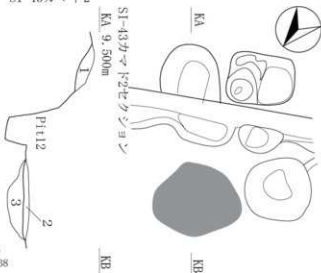
KC 9.500m



SI-43カマド1  
遺物分布



SI-43カマド2

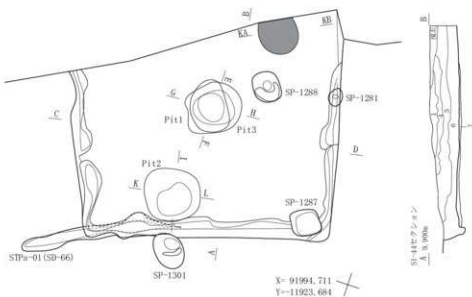
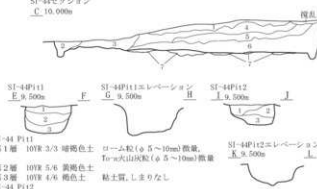


SI-43カマド2

- |     |                |                                                     |
|-----|----------------|-----------------------------------------------------|
| 第1層 | 10YR 3/3 暗褐色土  | 焼土粒(φ5~10mm)少量                                      |
| 第2層 | 2.5YR 5/6 明褐色土 | ローム土体, 薪炭屑混入, 炭ブロック(φ10~20mm)少量,<br>焼土粒(φ10~20mm)少量 |
| 第3層 | 2.5YR 4/6 赤褐色土 | 大床面                                                 |

図 1-322 G区 SI-43-3

SI-44


 X= 91990,000  
 Y=11920,000

 SI-44セクション  
 C 10,000m


SI-44 Pit11

第1層 10YR 3/3 暗褐色土

第2層 10YR 5/6 黄褐色土

第3層 10YR 4/6 褐色土

SI-44 Pit12

第1層 10YR 3/4 暗褐色土

第2層 10YR 3/4暗褐色土と10YR5/6黄褐色土の混合土

第3層 10YR 4/6 褐色土

SI-44Pit11ニレベレーション

E 9,500m

F 9,500m

G 9,500m

H 9,500m

I 9,500m

J 9,500m

K 9,500m

L 9,500m

M 9,500m

N 9,500m

O 9,500m

P 9,500m

Q 9,500m

R 9,500m

S 9,500m

T 9,500m

U 9,500m

V 9,500m

W 9,500m

X 9,500m

Y 9,500m

Z 9,500m

AA 9,500m

AB 9,500m

AC 9,500m

AD 9,500m

AE 9,500m

AF 9,500m

AG 9,500m

AH 9,500m

AI 9,500m

AJ 9,500m

AK 9,500m

AL 9,500m

AM 9,500m

AN 9,500m

AO 9,500m

AP 9,500m

AQ 9,500m

AR 9,500m

AS 9,500m

AT 9,500m

AU 9,500m

AV 9,500m

AW 9,500m

AX 9,500m

AY 9,500m

AZ 9,500m

BA 9,500m

BB 9,500m

BC 9,500m

BD 9,500m

BE 9,500m

BF 9,500m

BG 9,500m

BH 9,500m

BI 9,500m

BJ 9,500m

BK 9,500m

BL 9,500m

BM 9,500m

BN 9,500m

BO 9,500m

BP 9,500m

BQ 9,500m

BR 9,500m

BS 9,500m

BT 9,500m

BU 9,500m

BV 9,500m

BW 9,500m

BX 9,500m

BY 9,500m

BZ 9,500m

CA 9,500m

CB 9,500m

CC 9,500m

CD 9,500m

CE 9,500m

CF 9,500m

CG 9,500m

CH 9,500m

CI 9,500m

CJ 9,500m

CK 9,500m

CL 9,500m

CM 9,500m

CN 9,500m

CO 9,500m

CP 9,500m

CQ 9,500m

CR 9,500m

CS 9,500m

CT 9,500m

CU 9,500m

CV 9,500m

CW 9,500m

CX 9,500m

CY 9,500m

CZ 9,500m

DA 9,500m

DB 9,500m

DC 9,500m

DD 9,500m

DE 9,500m

DF 9,500m

DG 9,500m

DH 9,500m

DI 9,500m

DJ 9,500m

DK 9,500m

DL 9,500m

DM 9,500m

DN 9,500m

DO 9,500m

DP 9,500m

DQ 9,500m

DR 9,500m

DS 9,500m

DT 9,500m

DU 9,500m

DV 9,500m

DW 9,500m

DX 9,500m

DY 9,500m

DZ 9,500m

EA 9,500m

EB 9,500m

EC 9,500m

ED 9,500m

EE 9,500m

EF 9,500m

EG 9,500m

EH 9,500m

EI 9,500m

EJ 9,500m

EK 9,500m

EL 9,500m

EM 9,500m

EN 9,500m

EO 9,500m

EP 9,500m

EQ 9,500m

ER 9,500m

ES 9,500m

ET 9,500m

EU 9,500m

EV 9,500m

EW 9,500m

EX 9,500m

EY 9,500m

EZ 9,500m

FA 9,500m

FB 9,500m

FC 9,500m

FD 9,500m

FE 9,500m

FF 9,500m

FG 9,500m

FH 9,500m

FI 9,500m

FJ 9,500m

FK 9,500m

FL 9,500m

FM 9,500m

FN 9,500m

FO 9,500m

FP 9,500m

FQ 9,500m

FR 9,500m

FS 9,500m

FT 9,500m

FU 9,500m

FV 9,500m

FW 9,500m

FX 9,500m

FY 9,500m

FZ 9,500m

GA 9,500m

GB 9,500m

GC 9,500m

GD 9,500m

GE 9,500m

GF 9,500m

GG 9,500m

GH 9,500m

GI 9,500m

GJ 9,500m

GK 9,500m

GL 9,500m

GM 9,500m

GN 9,500m

GO 9,500m

GP 9,500m

GQ 9,500m

GR 9,500m

GS 9,500m

GT 9,500m

GU 9,500m

GV 9,500m

GW 9,500m

GX 9,500m

GY 9,500m

GZ 9,500m

HA 9,500m

HB 9,500m

HC 9,500m

HD 9,500m

HE 9,500m

HF 9,500m

HG 9,500m

HH 9,500m

HI 9,500m

HJ 9,500m

HK 9,500m

HL 9,500m

HM 9,500m

HN 9,500m

HO 9,500m

HP 9,500m

HQ 9,500m

HR 9,500m

HS 9,500m

HT 9,500m

HU 9,500m

HV 9,500m

HW 9,500m

HX 9,500m

HY 9,500m

HZ 9,500m

IA 9,500m

IB 9,500m

IC 9,500m

ID 9,500m

IE 9,500m

IF 9,500m

IG 9,500m

IH 9,500m

II 9,500m

IJ 9,500m

IK 9,500m

IL 9,500m

IM 9,500m

IN 9,500m

IO 9,500m

IP 9,500m

IQ 9,500m

IR 9,500m

IS 9,500m

IT 9,500m

IU 9,500m

IV 9,500m

IW 9,500m

IX 9,500m

IY 9,500m

IZ 9,500m

JA 9,500m

JB 9,500m

JC 9,500m

JD 9,500m

JE 9,500m

JF 9,500m

JG 9,500m

JH 9,500m

JI 9,500m

JJ 9,500m

JK 9,500m

JL 9,500m

JM 9,500m

JN 9,500m

JO 9,500m

JP 9,500m

JQ 9,500m

JR 9,500m

JS 9,500m

JT 9,500m

JU 9,500m

JV 9,500m

JW 9,500m

JX 9,500m

JY 9,500m

JZ 9,500m

KA 9,500m

KB 9,500m

KC 9,500m

KD 9,500m

KE 9,500m

KF 9,500m

KG 9,500m

KH 9,500m

る。壁上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られる。堆積層は2層に分層し、火山灰の検出はなく、自然堆積の様相を呈する。

#### SK-1112 (図1-324)

調査区西側で検出した。SD-61とSI-45と重複しており、SI-45<SK-1112<SD-61の関係である。不整長楕円形を呈し、137×89×49cmを測る。壁の形状はまちまちで、上部の一部で緩やかな立ち上がりが見られ箇所や、直立気味に立ち上がる箇所、袋状に入り込む箇所などが見られる。テラスを有する形状で、底面はやや凹凸がある。堆積層は3層に分層し、火山灰の検出はなく、ロームブロックの混入率が高い土層が堆積している。

#### SK-1114 (図1-324)

調査区西側で検出した。重複はないが、SI-41に近接した位置である。平面形は不整楕円形を呈し、114×103×21cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がる面が多く、底面はやや凹凸がある。堆積層は2層に分層し、壁際は崩落土の堆積が見られる。

#### SK-1115 (図1-324)

調査区西側で検出した。SK-111と重複しており、本遺構の方が古い。しかし、前述のとおり、一連の遺構として捉えられる可能性がある。土坑の番号が付され精査されているが、実質的には、ピット程度の規模で、53×30×29cmを測る。平面形は不整長方形を呈し、斜面に直交する形でSD-61側に傾斜した掘削がされており、山手側は底側が入り込む。堆積層は2層に分層した。

#### SK-1116 (図1-324)

調査区西側で検出した。他の遺構との重複はなく、近隣にはSI-42がある。小判形を呈し、73×50×28cmを測る。壁は一部で緩やかな立ち上がりが見られ、底面は凹凸がある。堆積土は1層で、ロームブロック等が混入する人為的堆積状況である。

#### SK-1117 (図1-324, 336)

調査区の中央付近で検出した。北側が用水によって切られており、全容は不明であるが、残存部は不整楕円形状を呈しており、142×74×26cmを測る。残存部の壁は直立気味に立ち上がり、底面は中央部分が若干凹んだ形状を呈する。堆積土は5層に分層しているが、5層は掘り方の充填土であり、土坑としての埋没は4層分の堆積である。第3・4

層は黒色土主体で炭化物混じりの土層で、その上位に堆積する第2層中に焼土混じりの赤変したローム土層(土色では焼土の色調を基調としている)が堆積し、その上位にT o-a火山灰粒の混じった暗褐色土が堆積している。

本遺構から第1・3層を中心に81片の土器片や土製品等の遺物が出ているが、SI-43のPit1などと接合関係が認められる。図示した11点のうち、土器器については74とSI-43の52、75と54などが器形・技法などが類似した特徴を有し、SI-43の廃棄土坑であると考えられる。

### 3. 溝状土坑

#### STP-01 [SD-66] (図1-324)

調査区西側で検出した。SI-44と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は溝状を呈し、(238)×30×24cmを測る。壁面は一部袋状に入り込み、垂直に近い形で立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

堆積層は3層に分層し、壁際は崩落土の堆積が見られる。また、上端は元々の堆積とは異なる土質の堆積が見られ、本遺構の軸線がSI-44の壁溝の延長線上にあたるなど、上面が溝跡として機能した可能性がある。

### 4. 掘立柱建物跡・ピット (図1-325～327, 337, 390)

調査区内から軸線が同一な柱穴と考えられるピットが複数確認でき、整理作業において配置を検討したところ、G区の南側の調査区に所在する溝跡やピットも含めて建物として組み上がることが判明した。建物の詳細について中村隼人氏に別項で検討してもらおう形としたので、この部分では概略のみを提示することとする。

なお、それぞれの計測値・形状等については掘立柱建物の柱穴以外にも含めてピットの観察表中で表記することとした。

#### SBa-01 (図1-325～327, 337, 390)

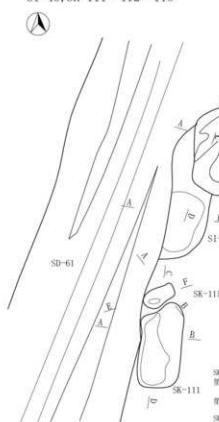
中村氏の検討の結果、斜面下方に相当する側の軸線のみ建て替えが行われており、古い方をSBa-01a(古)と表記し、新しい側をSBa-01b(新)と表記した。

該当するピットは以下のとおりである。

SBa-01a(古): P1(H区SP-120)、P3(G区SP-1297)、P4(G区SP-1299)、P7(H区SP-116)、P8(H区SP-057)

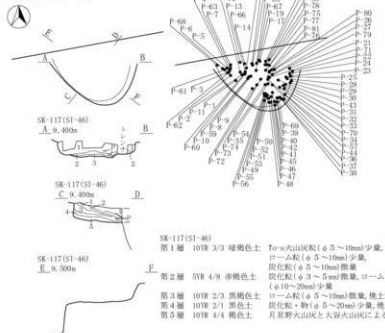
SBa-01b(新): P1(H区SP-121)、P2(H区SP-114)、P7(G区SP-

SI-45, SK-111・112・115



SK-117 (SI-46) 遺物分布 (土器)

SK-117 (SI-46)



SK-117 (SI-46) 遺物分布 (石器・鉄関連・土製品)

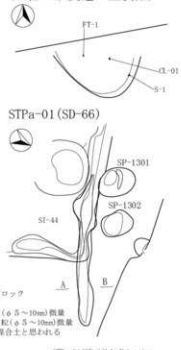


図 1-324 G区 SI-45, SK, STP

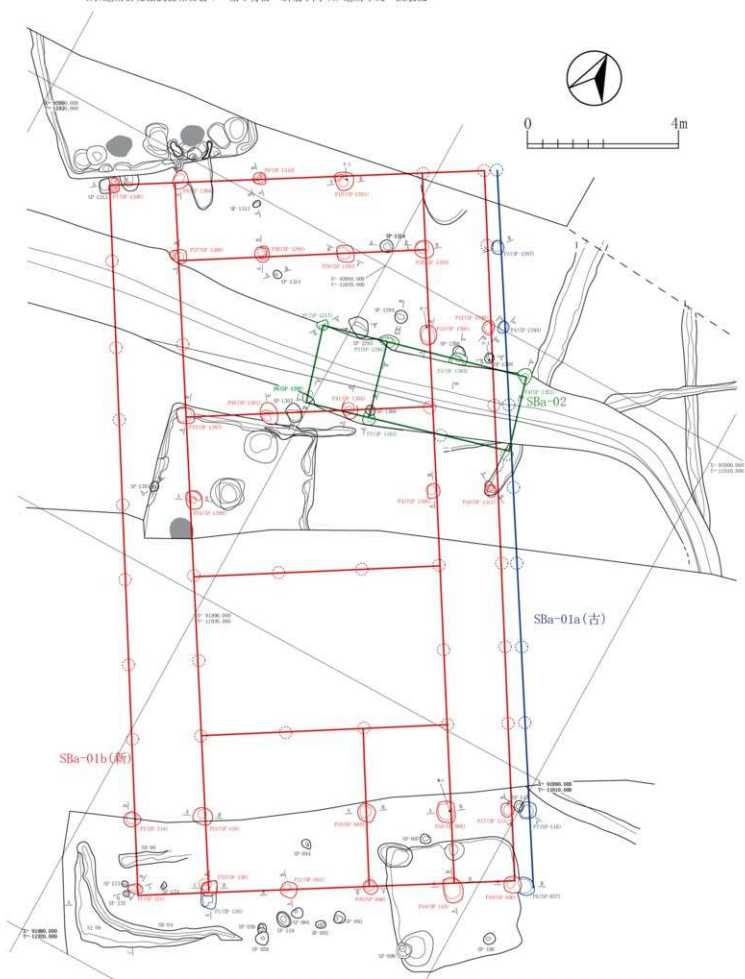


図 1-325 G区 SBa-1



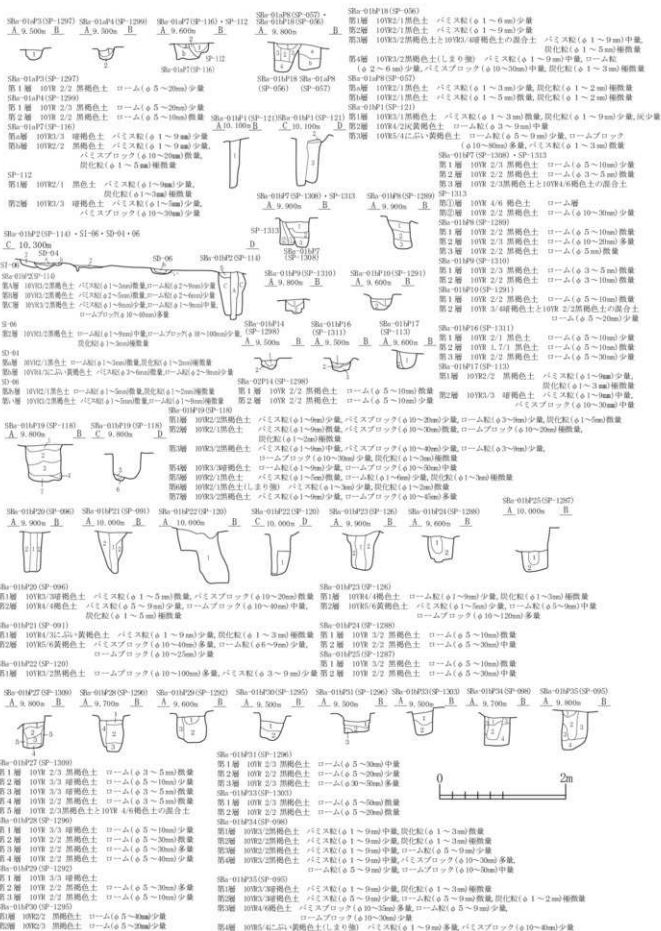


図 1-326 G区 SbA-2



図 1-327 G区 SBA-3

1308)、P8 (G区SP-1289)、P9 (G区SP-1310)、P10 (G区SP-1291)、P14 (G区SP-1298)、P16 (G区SP-1311)、P17 (H区SP-113)、P18 (H区SP-056)、P19 (H区SP-118)、P20 (H区SP-096)、P21 (H区SP-091)、P22 (H区SP-120)、P23 (H区SP-126)、P24 (G区SP-1288)、P25 (G区SP-1287)、P27 (G区SP-1309)、P28 (G区SP-1290)、P29 (G区SP-1292)、P30 (G区SP-1295)、P31 (G区SP-1296)、P33 (G区SP-1303)、P34 (H区SP-098)、P35 (H区SP-095)、P38 (G区SP-1301)、P41 (G区SP-1304)

P34 (H区SP-098) から永楽通寶が出土しており、図1-390-77に図示した。

また、南西側にH区SD-04があり、雨落ち溝としての機能を果たしたものと考えられる。

SBA-02 (図1-325, 327)

調査区中央付近で検出した。該当するピットは、P1 (SP-1315)、P2 (SP-1284)、P3 (SP-1285)、P4 (SP-1283)、P5 (SP-1305)、P6 (SP-1282)である。

SD-62と平行した軸線であるが、SD-62の堆積土を切っている堆積状況を呈するピットが多く、本遺構の方が新しい。

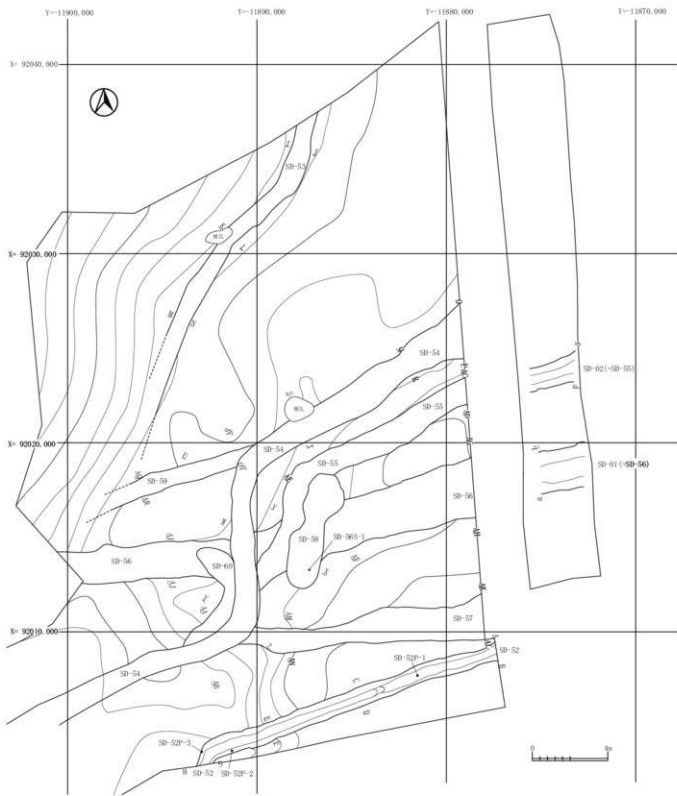
### 5. 溝跡

SD-52 (図1-328・329)

調査区東側の南端で検出した。幅98×123cm、深さ50×54cm、長さ16.4mを測る。断面形は箱形基調で、壁上部で崩落のためか一部角度が変わり、一部段状になる部分がある。

SD-53 (図1-328・329)

調査区東側北寄りの部分で検出した。幅90×105cm、深さ25×36cm、長さ20mを測



SD-59①  
埋 7.200m



AP SD-59②  
埋 7.200m



AR SD-01(-SD-56)  
埋 7.200m



b, c SD-01(-SD-56)  
埋 7.00m



- SD-59 ①~②  
第1層 10YR 2/3 黒褐色土 2.5Y 3/2黒褐色土(砂質) (φ1~10mm)少量  
第2層 2.5Y 3/1黒褐色土と10YR 2/3暗褐色土の混合土  
第3層 10YR 2/1 黒色土 7.5YR 4/6暗褐色土(砂質) (φ1~10mm)少量  
第4層 2.5Y 3/2黒褐色土と10YR 2/1黒色土の混合土 粘質土

- SD-01(-SD-56)  
第1層 10YR3 黒褐色土 炭化物微量  
第2層 10YR3 黒褐色土 炭化物少量, 砂粒多量  
第3層 10YR4 2/4黄褐色土 砂粒多量  
第4層 10YR1 1/1黄土 砂粒ブロック (φ20~80mm) 中量  
第5層 10YR2 3 黒褐色土 砂粒多量  
第6層 10YR3 2 黒褐色土 砂粒多量  
第7層 10YR3 3 黒褐色土 炭化物微量  
第8層 10YR2 2 黒褐色土 砂粒ブロック (φ50~90mm) 少量  
SD-01(-SD-56)  
第1層 10YR2 3 黒褐色土 炭化物少量, 砂粒ブロック (φ20mm) 微量  
第2層 10YR3 2 黒褐色土 砂粒少量  
第3層 10YR4 2/4 黄褐色土 砂粒ブロック (φ40~120mm) 多量  
第4層 10YR3 1 黒褐色土 炭化物少量, 砂粒少量

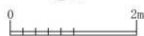


図 1-328 G区 SD-1

る。浅い逆台形状を呈し、一部では丸底形を呈する箇所がある。

#### SD-54 (図1-328・329)

調査区東側中央で検出した。西側の中央部分は比高差が高く、遺構の残存が確認出来なかった。検出部分での規模は90×250cm、深さ35×50cm、長さ34mを測る。浅い逆台形状を呈する箇所が多い。SD-55・56・57・59・60と重複しており、いずれの遺構より新しい。

#### SD-55 (図1-328・329)

調査区東側中央で検出した。SD-54・56・58と重複しており、SD-56<SD-55<SD-54・58の関係である。特にSD-54との関係は、X=92014.000、Y=-11890.000付近で合流する形で、西側の流路はSD-54と重複している状況である。また、先行調査したトレンチ部分のSD-02は流路の延長上にあたる。SD-02部分を含めた規模は、幅135×185cm、深さ35×80cm、長さ21mを測る。浅い逆台形状を呈する箇所が多く、底面は凹凸がある箇所がある。

#### SD-56 (図1-328・329)

調査区東側中央で検出した。ほぼ東西方向を流れる流路で、SD-54・55・58・60と重複しており、本遺構がいずれよりも古い。また、先行調査トレンチのSD-01は本流路東側の延長部にあたり、西側はF区SD-43につながる位置関係にある。規模は、幅160×310cm、深さ78×118cm、長さ27.8mを測る。壁上部の一部でテラスが見られる箇所がある。底面は凹凸がある。

#### SD-57 (図1-328・329)

調査区東側の南寄りの地点で検出した。SD-54と重複しており、本遺構の方が古い。SD-54との重複部分より西側はSD-54の流路が勝っている形なので、SD-55と同様の様相である。幅90×216cm、深さ40×74cm、長さ16.8mを測る。断面形は箱形を呈するが、一部上部で段状に立ち上がる箇所がある。

#### SD-58 (図1-328・329)

調査区東側中央で検出した。SD-55・56と重複しており、本遺構が最も新しい。幅98×231cm、深さ43×55cm、長さ6.1mと溝としては非常に短く、断片的な様相であるため、場合によっては他の溝の埋戻しの際の掘削痕等の可能性も考慮できる。

#### SD-59 (図1-328)

調査区東側中央で検出した。SD-54と重複しており、本遺構の方が古い。幅83×115cm、深さ19×26cm、長さ8.7mを測る。断面は箱形状で、壁上部の一部で緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が少ない。

#### SD-60 (図1-328・329)

調査区東側中央で検出した。SD-54・56と重複し、SD-56<SD-60<SD-54の関係である。西向きに弧状を呈した流路で、南側はSD-54に切られており、北側はSD-56上で閉じた状況で確認されている。幅82×85cm、深さ30×35cm、長さ7mを測る。

#### SD-61 (図1-330)

調査区西側隅で検出した。北端と南西隅は用水によって切られており、部分的な調査である。新旧二段階あり、断面形が箱形状とV字状の葉研堀形の形状で、箱形が古く葉研堀形のタイプが新しい。規模は、箱形のものに切られているため部分的であるが、幅[110]～[130]cm程度、深さ61～103cm、長さは31m、新しい葉研堀タイプが幅157×207cm、深さ130cm、長さは旧と同様に31mを測る。ほとんどが箱形の溝を埋め戻した後に再度掘削を行い形成しているが、S1-45付近で新しい溝と古い溝がクロスする形となり、古い溝が西寄りの部分を行っている。本遺構の北東側を東西方向に流れるSD-62についても本遺構と近接しており、V字状の形状を基調とする。囲郭として接した可能性があるが、残念ながら、用水によって切られた部分に合流点に相当する部分が当たっているため判断できない。

#### SD-62 (図1-331,337)

調査区中央から西側で検出した。ピットを除く遺構ではS1-42、SD-63～65と重複しており、いずれの遺構よりも本遺構が新しい。前述のとおり、SD-61と関連した可能性があるが、確定はできない。幅81×256cm、深さ101×179cm、長さ33.5mを測る。また、本遺構は中層まで埋没した後、一部再掘削を行い溝として利用しているようである。本遺構からは上層～下層にかけて遺物が土器だけで80点程度出土しているが、周辺の遺構からの流れ込みや紛れ込みによる混入が基本で、古代についてはS1-43でも出土が見られた非クロの小坏・小皿の資料や壺などが出土している。その他、瀬戸や北宋銭が少量出土し、攪乱等の影響による近代の陶磁器片も出土している。

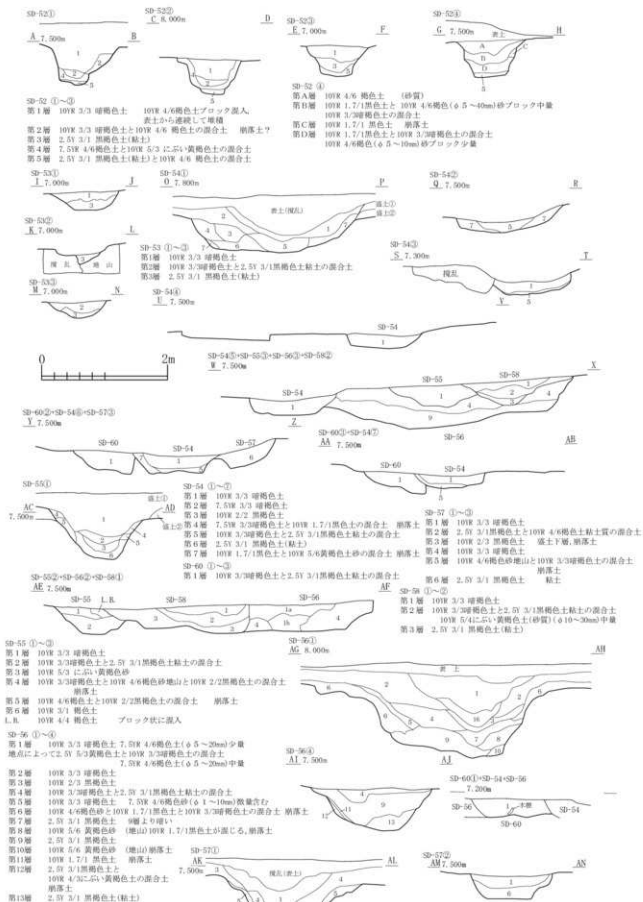
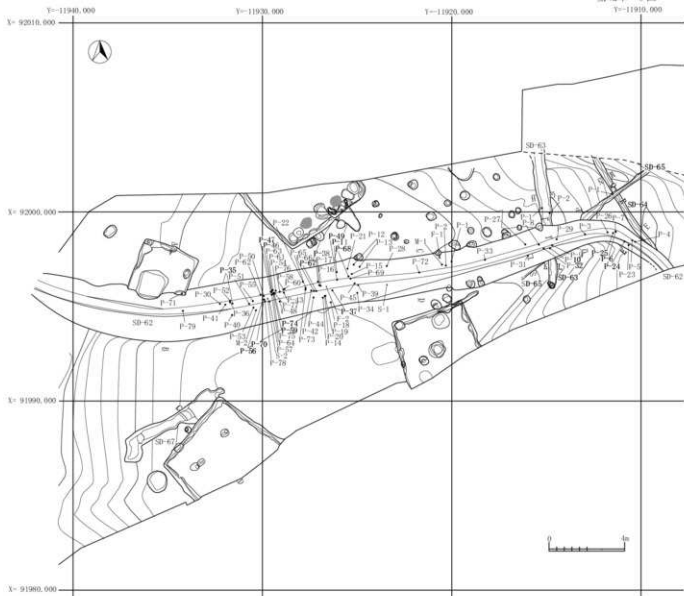
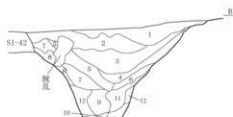


図 1-329 G区 SD-2





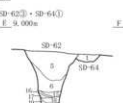
SD-62①  
A. 9,790m



SD-62②  
C. 9,700m



SD-62③・SD-64①  
E. 9,000m



SD-62 ①~③

- 第1層 101K 2/3 黒褐色土 ローム(φ1~10m)中量,炭化物(φ10m)微量,焼土粒(φ3~5mm)微量
- 第2層 101K 2/2 黒褐色土 ローム(φ1~20m)中量,焼土粒(φ1~5mm)微量
- 第3層 101K 3/1 暗褐色土と101K4/4褐色土粘土の混合土 ローム(φ1~10m)少量
- 第4層 101K 1,7/1 黒色土 炭化灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量
- 第5層 101K 3/2 黒褐色土 ローム(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)微量
- 第6層 101K 3/3 暗褐色土 ローム(φ1~5mm)微量
- 第7層 101K 2/2 黒褐色土 しまりあり,ローム(φ1~10m)微量,焼土粒(φ1~5mm)微量
- 第8層 101K 2/2 黒褐色土と101K 5,6黄褐色土の混合土 礫土
- 第9層 101K 3/2 黒褐色土 ローム(φ1~30m)少量,炭化灰(φ5~10m)微量
- 第10層 101K 1,7/1 黒色土 ローム(φ5~10m)微量
- 第11層 101K 5,6黄褐色土と101K 3/3暗褐色土の混合土 崩壊土
- 第12層 101K 4,6 褐色土
- 第13層 101K 3/3暗褐色土と101K 4,6褐色土の混合土
- 第14層 7,5V 5,9 明褐色土
- 第15層 101K 2/2 黒褐色土 ローム(φ1~10m)中量
- 第16層 101K 1,7/1 黒色土 ローム(φ1~5mm)微量
- 第17層 101K 4,6 褐色土 ローム(φ1~15m)多量
- 第18層 101K 2/2 黒褐色土 ローム(φ1~5mm)微量
- 第19層 101K 2/3 黒褐色土 ローム(φ1~20m)中量
- 第20層 101K 3/1 暗褐色土 ローム(φ1~15m)多量
- 第21層 2,5V 3/1 黒褐色土(粘土)

SD-63①  
G. 9,200m



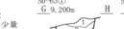
SD-63②  
H. 9,500m



SD-64②  
M. 8,500m



SD-65①  
I. 9,100m



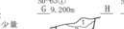
SD-65②  
P. 8,500m



SD-65③  
Q. 9,300m



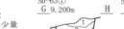
SD-66①・②  
R. 10,000m



SD-65 ①~③

- 第1層 101K 2/2 黒褐色土 ローム(φ5~20m)少量
- 第2層 2,5V 3/1 黒褐色土(粘土)

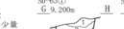
SD-67  
S. 10,000m



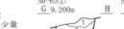
SD-67  
T. 10,000m



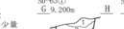
SD-67  
U. 10,000m



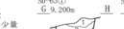
SD-67  
V. 10,000m



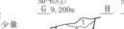
SD-67  
W. 10,000m



SD-67  
X. 10,000m



SD-67  
Y. 10,000m



SD-67  
Z. 10,000m

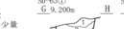


図 1-331 G区 SD-4

S1-41

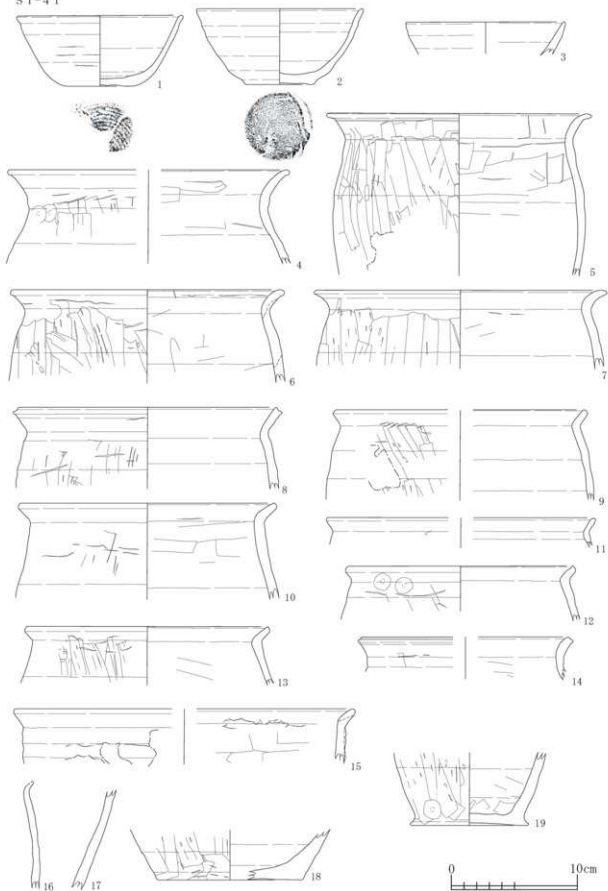


図 1-332 G区 S1 出土遺物 -1



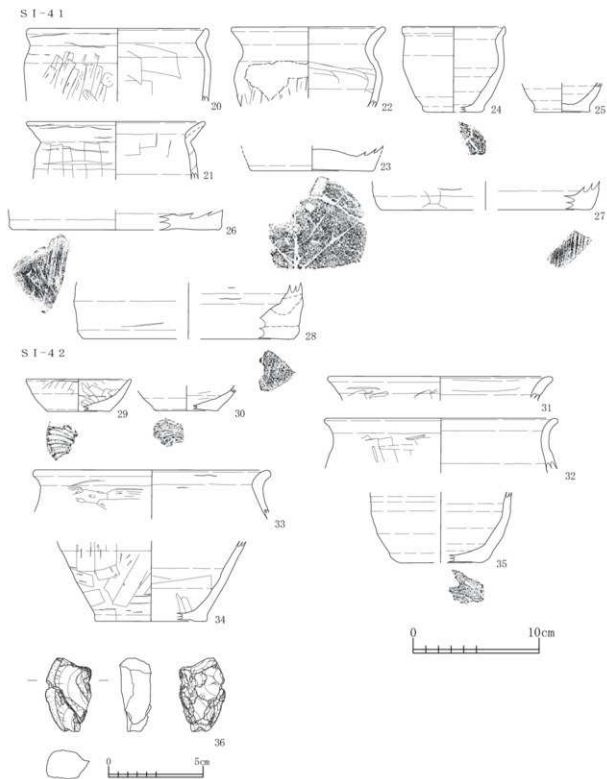


图 1-333 G区 SI 出土遺物-2

S I-43

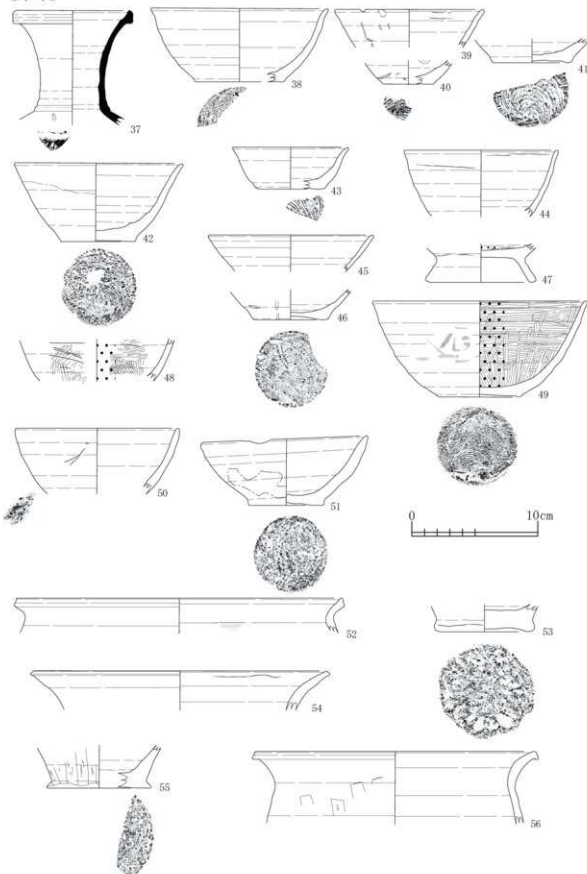
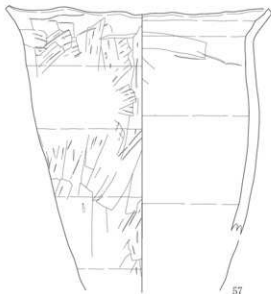


図 1-334 G区 S1 出土遺物 -3

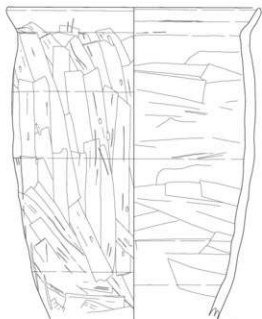
SI-43



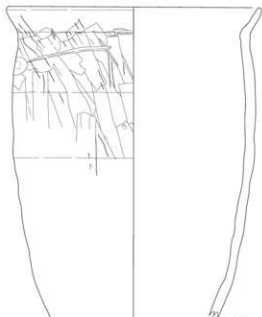
57



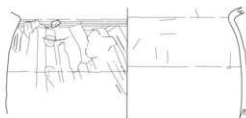
58



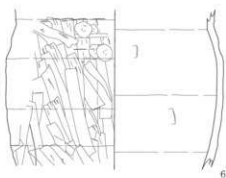
59a



59b



60

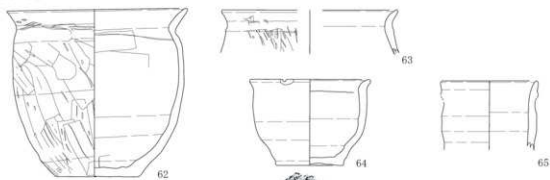


61

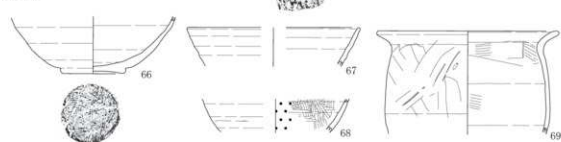


图 1-335 G区 SI 出土遗物-4

S1-43



S1-44



SK-117

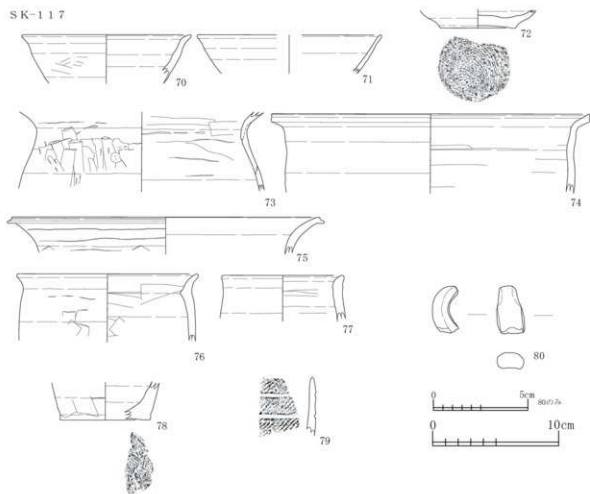


図 1-336 G区 S1 出土遺物 -5, SK 出土遺物

SD-67 (図1-331)

調査区西側で検出した。S1-41と重複しており、S1-41の項目でも記載したが、本遺構と関連した可能性がある。幅71-192cm、深さ

23-31cm、長さ7.9mを測る。西端が鍵状に曲がり、斜面の傾斜が凹んだ側に流れこむような角度調整されている。

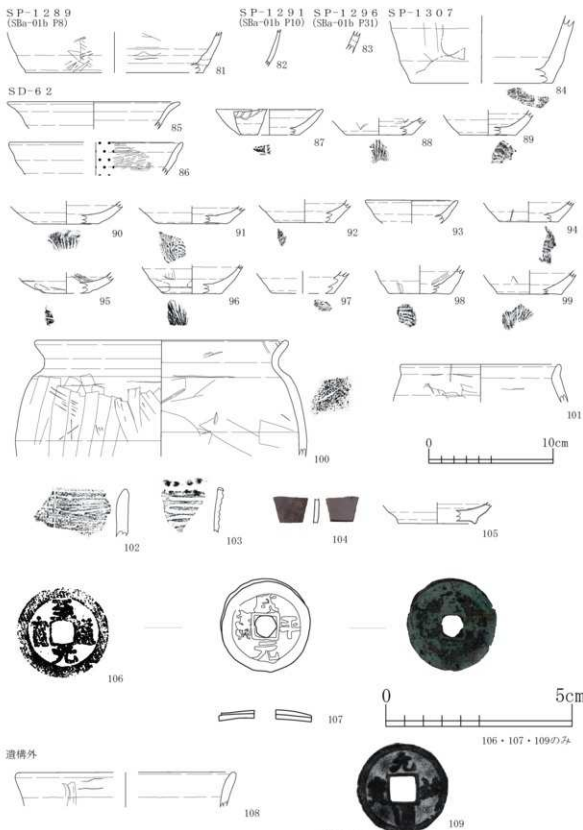


図 1-337 G区 SP・SD・遺構外出土遺物

## 第2節 遺構外出土遺物 (図1-337)

図示可能な資料に限られた為、2点のみ図示した。108は、S1-41の西側の遺構外から出土した土師器甕の口縁部片で口径17.2cmを測る。括れが緩く、直立気味の形状で内面口縁部は若干黒味

がかっている。109はSK-117周辺から出土した古銭で、北宋銭の元祐通寶である。

新城平岡(4) H区遺構配置図

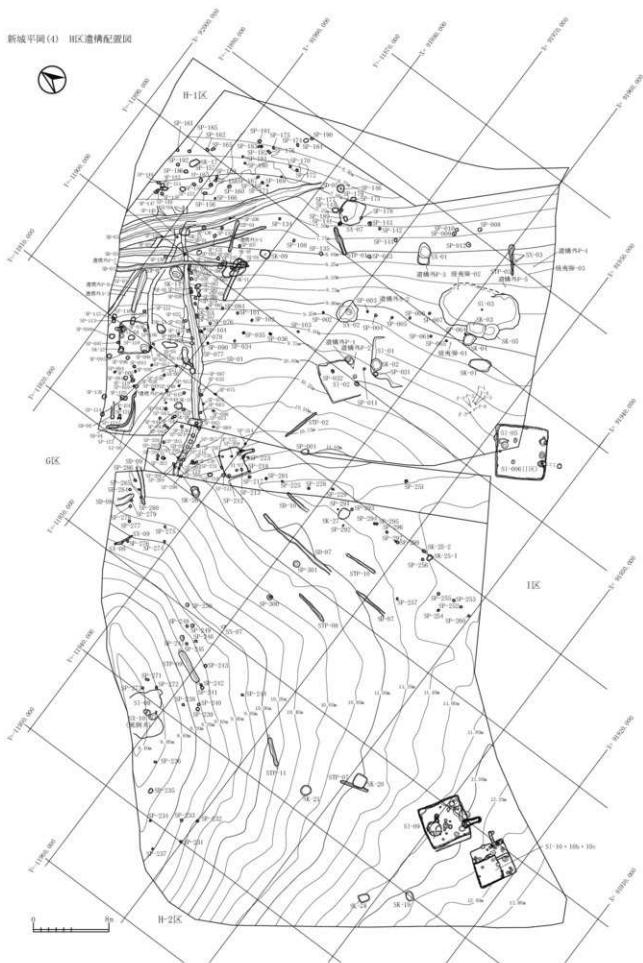


図 1-338 H区遺構配置図

## 第Ⅷ章 H区

G区の南側約3519.8㎡を調査した。平成18年度に東側1,531.6㎡、平成20年度に中央一西側の1,988.2㎡を調査している。平成20年度にはH区の南側に相当するI区も調査しており、平成18年度にS I-05として検出した竪穴住居跡についてS I-06として残地部分の精査を行なっている。カマド等の主たる施設がS I-06として調査された部分を占める為、報告に際してはI区の記述を優先し、本調査区内では欠番扱いと同様とする。

調査区について平成18年度調査区をH-1区、平成20年度調査区をH-2区と便宜的に呼称する。

地形的には、北側のG区と連続した地形であるが、現在まで使用されてきた用水に切られており、G区でS B a-01と報告した掘立柱建物のように用水部分で欠落している遺構もある。H-1区とH-2区の境界付近が根根の頂部に当たり、標高10.8～11.4mである。中央から東側のH-1区側ではやや斜度を持ちながら、東側方向に傾斜し、斜面下方は標高6.5m前後である。中央から西側のH-2区側はI区西側から北方向に傾斜する斜面となっており、調査区北端のS I-08とした地点で標高8.4m程度である。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴遺構

S I-01 (図1-339)

調査区の東側H-1区内で検出した。精査前の掘削が深く、斜面下方に相当する南東側の残存が悪い。残存部の規模は530×[355]×11cmを測る。壁溝は検出しておらず、北壁際でSK-02とした土坑、SP-031としたピットが重複している。堆積土の残存が少ない状態で精査している為、それぞれ単独の遺構として取扱い、新旧関係について明確な記録が残っていない状況であるが、堆積土を比較した際、S I-01の堆積土と類似した堆積土が認められることから、それぞれ、本遺構に帰属した可能性がある。南側中央の床面に被熱面があり、カマド設置相当位置にあたる可能性がある。

S I-02 (図1-340・341,385)

調査区の東側H-1区内で検出した。S I-01と同様に精査前の掘削が深く、南壁の境界が不明瞭では、基部のみの残存である。確認できた規模としては、4.43×[3.94]×16cmを測り、主軸はN-131°-Eである。斜面下方の東側に掘り方や壁溝があるが、それ以外の部分では検出していな

い。しかし、壁溝が検出されていない西壁側の壁際から一部CS-1・2と取り扱った板状の炭化材を検出しており、明確な溝状の掘り込みがないにせよ、壁面側に板材が用いられていた可能性がある。

柱穴として機能した可能性があるピットはP i t 1・2と床面内で検出したSP-032である。このうち、P i t 2については壁溝のラインより内側に掘削されているP i t 3を切る形で構築されており、P i t 2の東側は壁溝のラインよりも外側に広がっている。堆積土の残存が思わしくない為、不明瞭であるが、P i t 2は別遺構として機能した可能性が残されている。なお、出土遺物についてはP i t 3とまたがる地点からの出土がある点なども含めるとP i t 3に包含していた遺物の紛れ込みの可能性もある。

カマドは、S I-01と同様に南壁側に被熱痕を検出したが、本遺構の方が面的に明瞭で火床面と言い切れる範囲となっている。煙道等の構造は、壁面が残存しておらず、不明である。

出土遺物は前述のP i t 2を中心に8点図示した。1は、P i t 2覆土出土の土師器碗で口径13.1cm、器高7.1cm、底径5.6cm、器高指数5.4.2、底径指数4.2.7を測る。右肩上がり器形で、器高の数値が高くなっているが、元々は6cm前後の高さを志向しているようである。口縁部は軽くつまみ上げ反させている。2はP i t 2覆土3層出土の土師器碗で、口径14.8cm、器高6.0cm、底径5.6cm、器高指数4.0.5、底径指数3.7.8を測る。底径が1と同じであるが、本資料の方が開き気味の形状で、底部から反反している。底部の残存がないが、3が類似した器形である。煮炊具の図示した資料のうち6・7が非ロクロ、8がロクロ使用で、小甕である7・8のうち、1.5cmに近い7が非ロクロ、9cm弱の8がロクロと小型品に対するロクロ使用と作り分け、使い分けがある。

S I-03 (図1-342)

調査区の南東側H-1区内で検出した。不整長楕円形を呈し、857×376×48cmを測る。楕円形状の形態であるが、炉跡や柱穴として認定できるピットもなく、土器破片の他は鉄製品等も出土している。隣接するI区の斜面上でもSX-001とSX-002とした遺構が類似した形態である。

本遺構は斜面上方側の壁面際で、SK-03とSK-05が重複しており、本遺構の方がいづれの遺構より古い。

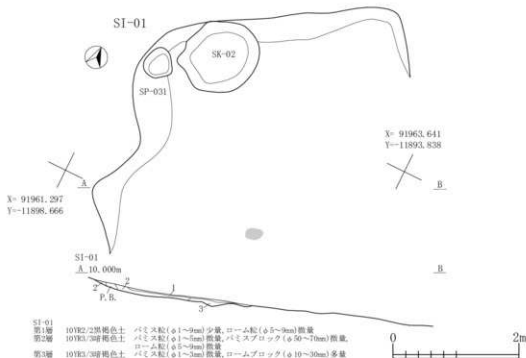


図 1-339 H区 SI-01

## SI-04 (図 1-343・344, 385・386)

調査区北東H-1区北側で検出した。340×330×26cmを測り、N-30°-Wである。SBa-01とした掘立柱建物跡に関連する柱穴と重複している。また、南壁側はSF-01とした溝状の遺構と重複しており、いづれの遺構よりも本遺構の方が古い。遺構に属すると認定できたピットはPit1のみで、柱穴として機能したと考えられる。また、西壁側の北隅・南隅双方に土坑状の掘り込みがある。調査時に北側の土坑は堅穴に属しない別遺構として取扱ひ、本遺構の掲載に際しても土坑部分で掲載したが、本遺構図中でも参照の為一部の図を重複掲載する。堅穴の壁面を意識した掘削状況や床面直上に堆積する第6層が欠落した堆積で、第6層起因の土と地山混合土が土坑の上面に堆積する第1層中に堆積している点などを踏まえると、堅穴廃絶後の第6層堆積以降に再掘削され構築された可能性がある。第1-6層及びSK-12の第1層中にはTora-a灰が混入し、降灰後の土が埋没に関連している。SK-12の内部には完形に土師器甕2点が横位の状態で合せ口状に埋設されて検出した。類例は、青森県内では4例目の検出事例で、青森平野側では合子沢松森(2)遺跡、浪岡地区では野尻(1)遺跡、野尻(3)遺跡でそれぞれ1例ずつある。北東北では岩手・秋田両県でも検出事例があるが、特に太平洋側の岩手県で類例が多い。同じ青森平野内の合子沢松森(2)遺跡と本遺跡の検出事例が堅穴居住内からの検出で、他は単独遺構としての検出がほとんどである。

カマドは北西向きで、南一東側基本の他の堅穴とは異なる軸線である。半地下式の短めの煙道を持つタイプで、礎を支脚とし、構築材は粘土のみである。掘り方はほぼ全面で暗褐色主体の土が充填されている。

出土遺物は14点図示し、図版上では重複しているSK-12も連続して図示した。須恵器や黒色土器は碎片主体で、土師器食膳具についても全体形の追える資料はSI-04内単独の出土事例はない。煮炊具については甕は体部上半に最大径がくるタイプで、頸部幅が短くなっているものが多い。また、小甕はロクロ使用のものが口径13cm程度にままとまっており、外面体部にはカキメや沈線状の稜段が伴っている。非ロクロのタイプはロクロ使用のものより小型のタイプがあり、19bは、口径10.6cm、器高8.1cm、底径5.2cmを測る。ただし、ロクロ小甕の18・19bは内面頸部に煮炊痕や二次被熱の痕跡があるのに、非ロクロの19bには認められず、具体的な使用用途よりもむしろ20と同様に小型土器の範疇として捉えた方が適切なものかもしれない。20はロクロ使用の小甕で、外面体部には「×」の刻書がある。21は縄文土器で底面および体部に連続刺突文が施されている。SK-12部分から出土した遺物についても本項で記載するが、22は、SK-12上層とSI-04下層、G区のSI-4第4層出土資料の遺構間接合の土師器碗で、口径13.2cm、器高5.2cm、底径5.4cm、器高指数39.4、底径指数40.9を測る。聞き気味に立ち上がる器形で、口縁部はやや肥厚し



ながら引き伸ばすように立ち上がる。23は、1層から出土した土師器非クロコ小甕で口径12.6cmを測る。無頸に近い形状ではあるが、頸部を軽く外反させている。合口埋塞に使用された土器は24と25で、24はクロコ、25は非クロコ系である。クロコ系の甕である24は口径20.3cm、器高32.2cm、底径8.1cmを測る。長胴形で、輪積成形の後、明確な回転運動に伴い整形されており、底面はへら状の工具で起こされた痕跡がある。輪積みの粘土は上方では乾燥気味であったのか内面側はほつれたような隙間があり、一部破割れもある。また、外面体部上半部-底部にかけてへら削りが体部では上下方向、底部側では横方向に調整されている。外面には面的に口縁-底部にかけて及び底面に煤・炭化物付着しており、内面も底部周辺に炭化物が薄く付着している。また、内面側は白色付着物が斑状に付着している箇所と褐色状の付着物が液垂れ状や飛沫が付着したように付着している箇所がある。25は非クロコの甕で口径19.8cm、器高24.5cm、底径9.0cmを測り、24に比べると低くやや体部が広がった形状で、砂粒の混入量が多い。底部端部のつくりや、頸部の横方向ナデが体部の境界を明確にさせている点等、丁寧に作られているが、体部上半に最大径がくる点など時期的に下る要因がある。24と同様に炭化物付着が認められるが、体部-底面にかけてが主体で、口縁部は約半分が煤・炭化物付着という付着状況に差が生じている。また、内面は煮炊された痕跡があり、体部-底部にかけて褐色・白色付着物が観察され、一部は口縁部側に吹きこぼれたような痕跡が観察される。煮炊状況として、クロコ系のものは直接内容物が伴わない水の煮沸、非クロコのものには有機物の含んだ内容物の煮炊に使われた可能性がある。

このように合口として使用された2つの土器は元々は使用されていたものを利用してのものである。

#### S I-06 (図1-371)

調査区中央H-1区で検出した。竪穴建物の掘り方状の方形の掘り込みを420×240cm程度部分的に検出した。本遺構は削平の為、様相が不明で、S B a-01とした掘立柱建物跡の雨落ち溝であるSD-04や近接するSD-06などと重複関係にあるが詳細は不明である。

#### S I-07 (図1-345・346, 386)

尾根上の東側への落ち際のH-2区で検出した。規模は、306×242×14cmを測る。主軸はN-138°-Eである。S P-208・212などのピットと重複しているが、いずれのピットも本遺構の上面で検出した遺構で本遺構には帰属しない。

貼床下からピットを2基検出したが、柱穴として明確に認定できる規模のものではない。カマドは東壁側から1基検出した。竪穴内の前庭部側は袖部が基部のみの残存であるので、不明な点があるが、建物の外側にも一部袖の基部に相当する部分が確認できるので、構築を構築して、竪穴の外側を突出させ、カマドの前庭部を構築しているようである。火床面部分は54×53cm程度、煙道長は150cmで、火床面は竪穴の壁際より外側まで被熱している。竪穴内部はほぼ全面掘り方を持ち、バミスブロック・ロームブロック等が混在した形で充填されている。その為、掘り方部分の堆積土の層数が多く分層されている。廃絶後の堆積土は第1-11層が相当し、第4層と第7層の上面にB-Tm火山灰がブロック状に堆積している。出土遺物は砕片中心で図示できたものが限られたが、縄文土器と土師器破片、砥石1点を図示した。

#### S I-08 (図1-347・348, 386)

H-2区の西側に傾斜した斜面の最下方から検出した。S X-10とした風倒木を切る形で構築されている。北側は調査区外へ延びており、確認した時点で床面相当位置まで下がっていた為、壁面が不明瞭であることから全体形・規模の詳細は不明であるが、検出した床面の規模は486×[345]×cmである。ピットは貼床下のものを含めて2基、S K扱いの番号で精査されたものが2基あるが、S K扱いのものも柱穴状の形態である。掘り方や堆積状況で明確に柱穴として機能したと考えられるのは、P i t 1である。

南壁側相当の東寄りの部分に火床面を検出しており、支脚設置相当位置にK P-10としてクロコ小甕が倒位に設置されていたことから、カマドが存在した可能性が高い。火床面の規模は76×70cmである。火床面周辺からS K・P i t 周辺にかけて貼床が貼られており、前庭部の利用頻度を意識したつくりとなっている。

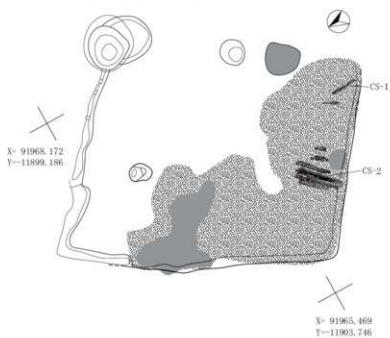
出土遺物は7点図示した。カマド支脚相当位置から出土した34は、口径13.4cmを測るクロコ小甕で外面体部には刻書がある。煮炊具の甕は頸部幅がありながらも、口縁部が短くなっている32や35などが見られる。また、先端を折り曲げた程度の33のタイプもある。食膳具は須臾器・土師器とも破片の出土であるが、類似した立ち上りの角度で、先端が先細り気味の形状である。30は29と同地点から出土した須臾器の底部で底面には菊花状の削りが施されている。

#### S I-09 (図1-349～357, 387・388)

調査区の西側、H-2区の西隅周辺で検出した。



SI-02炭化物・焼土範囲



SI-02掘り方

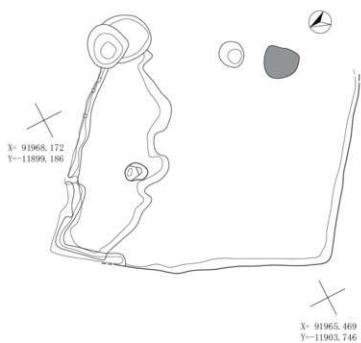


図 1-341 H区 SI-02-2

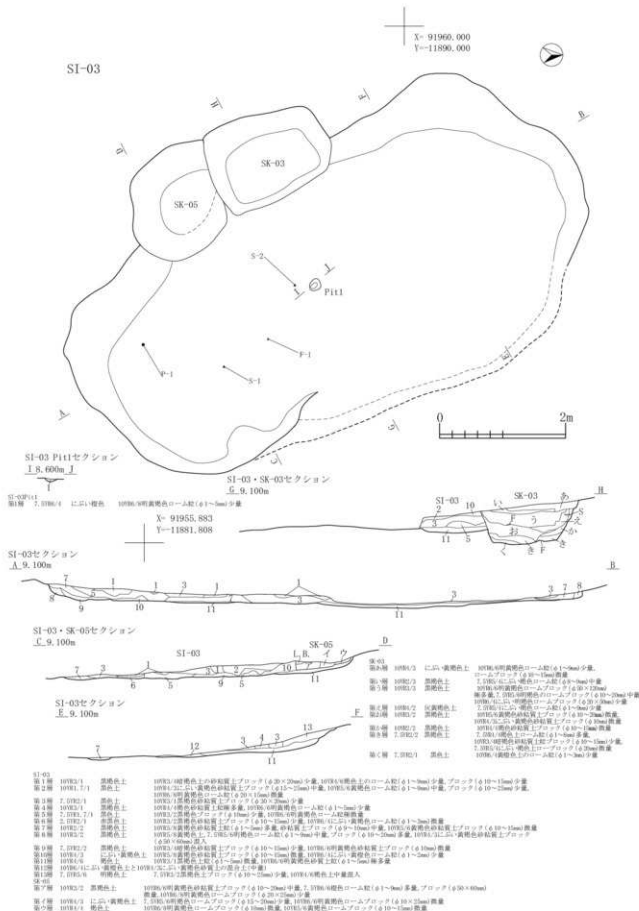


図 1-342 H区 SI-03



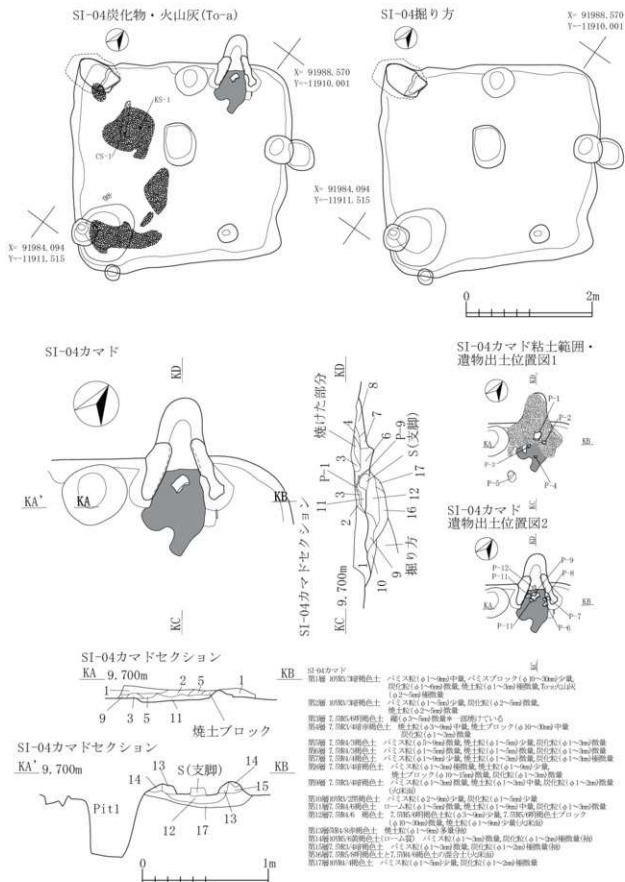


図 1-344 H区 SI-04-2



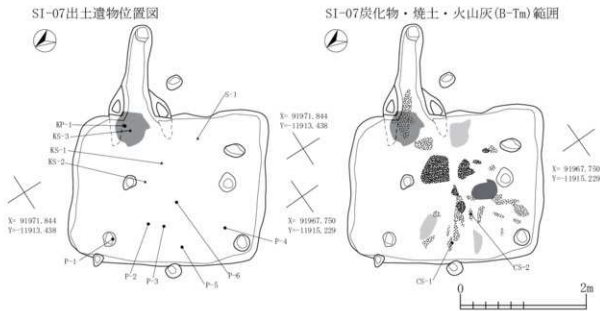


図 1-346 H区 SI-07-2

本遺構は堅穴部分が新旧二段階あり、また、堅穴廃絶後もSN-03と取り扱った鉄生産関連炉が使用されるなど、継続的な土地利用の痕跡が確認されている。SN-03について本来は単独の遺構として取り扱うべき内容ではあるが、本遺構精査時に連続して精査し、また堅穴内に存在する鍛冶炉の位置関係等も関連する可能性があるため、本項で掲載し、記述に際しても触れることとする。尚、鉄関連遺物に関しては、穴澤義功氏調査指導の下、別工程で整理作業を実施している為、整理がまとまる平成25年度発行予定の鉄関連遺物編中で触れることとし、遺構情報についても遺物の性格等も含めて再掲する予定である。

前述のとおり、本遺構は堅穴が新旧二段階営まれているが、セクション等の記録では廃絶後の利用状況を把握できる土層の記録は成されているのに対し、堅穴存続時期の新旧の変遷について古段階の情報は残念ながらあまり明瞭でない。G-HラインSK-01セクションの第2層がころうじて古段階の壁溝の一部を記録したもので、北東壁側でも廃絶時の壁溝のラインと異なる断続した幅広の壁溝の掘削痕を検出している。充填されている堆積土は新段階で新規に構築された南西側の壁溝の充填土と同一の土層が充填していることから、改築に際し、従前の壁溝を利用した可能性が考えられる。

カマド設置壁側にSK-01、SK-02とした浅い土坑状の落ち込みがあり、SK-01よりSK-02の方が古い。また、Pit 8としたピットについても柱穴状の掘り方の前段階には浅い土坑状の掘り込みや壁外へ延びる袋状の掘削がなされている(当初地下式のカマド煙道の可能性も考慮されたが、掘削は一部に限られ、延長部から煙出の検出は認め

られなかった)。遺物もPit 8を中心に出土していることから廃棄中心のカマド脇ピットとしての機能があることが考えられる。

堆積土は新旧、掘り方部分も含めて17層に分層したが、四隅の壁際に掘り方を持ち、板壁を設置している。なお、腰板部分は廃絶後の堆積しているセクション上でも第5層として直立した堆積状況を呈していることから、廃絶後も壁際には板壁が存在した可能性が高く、SN-03使用時の上壁としてそのまま利用されていた可能性がある。廃絶後に第9-13層までの堆積の後にSN-03の構築が成されており、この時点でも一部では堅穴の床面と同一面が床面として使用されている。堅穴部の埋設はSN-03の廃絶後の時点でTora火山灰を粒状に含む土層(SI-09第1・2・6層、SI-09カマド第1層、SK-03第a層)が一気に埋め戻されるように堆積している。

ピットは、前述のPit 8を含め15基検出し、その他北側に数基ピットを検出している。SN-04と取り扱った遺構についても、上面で焼土等の検出は認められるが、他のSNを付した遺構に比べると直接の被熱などの痕跡が認められない為、実質的にはピットと同様の取扱である。柱穴として機能したと考えられるピットはPit 1・2・4・6・10で、南西壁側に集中し、その他は比較的浅く、掘り方もしっかりしていない。壁溝は前述のとおり、廃絶後も板壁が一定時間機能したようであるが、新段階のものはカマド設置壁のPit 8以外ほぼ全周する形で構築されている。旧段階のものは南西壁側と北西壁側はほぼ全面で、北東側にSK-01に近接する位置まで半分程度掘削されたようである。

カマドは、南東壁側に新旧ともほぼ同一地点に構



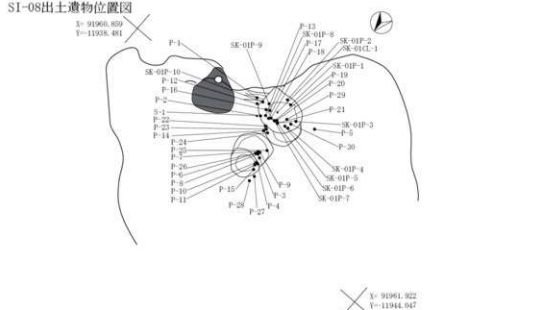
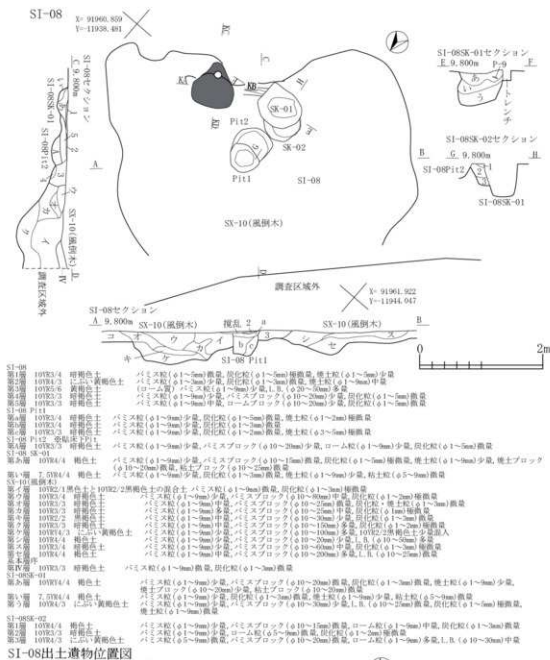
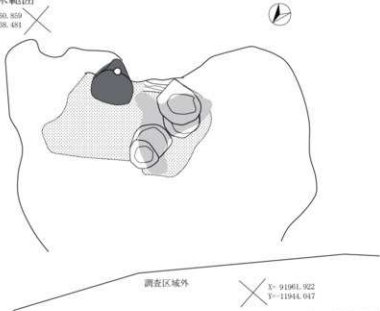


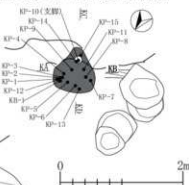
図 1-347 H区 SI-08-1

SI-08焼土・貼床範囲

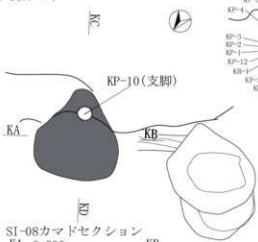
X=91960.859  
Y=11938.481



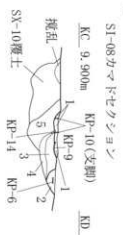
SI-08カマド出土遺物位置図



SI-08カマド



SI-08カマドセクション  
KA 9,900m



- SI-08カマド  
 第1層 7.5YR4/6 褐色土  
 第2層 10YR4/4 褐色土  
 第3層 7.5YR5/8 暗褐色土  
 第4層 7.5YR5/6 暗褐色土  
 第5層 10YR3/4 暗褐色土  
 掘乱 7.5YR3/2 黒褐色土
- パミス粒(φ1~3mm)稀散量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
 パミス粒(φ1~3mm)散量, 炭化粒(φ1~2mm)散量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
 パミス粒(φ1~3mm)散量, 炭化粒(φ1~2mm)稀散量, 焼土粒(φ1~5mm)少量, 焼土ブロック(φ10~20mm)少量- 穴床面  
 パミス粒(φ1~3mm)散量, 焼土粒(φ1~5mm)少量- 穴床面  
 パミス粒(φ1~3mm)少量, 炭化粒(φ1~2mm)散量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
 パミス粒(φ1~3mm)稀散量, 炭化粒(φ1mm)稀散量, 焼土粒(φ1~3mm)少量  
 パミス粒(φ1~3mm)少量, パミスブロック(φ10~20mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)散量
- SX-10覆土: 10YR4/3に2:5黄褐色土と10YR4/4褐色土の混合土

図 1-348 H区 SI-08-2

SI-09

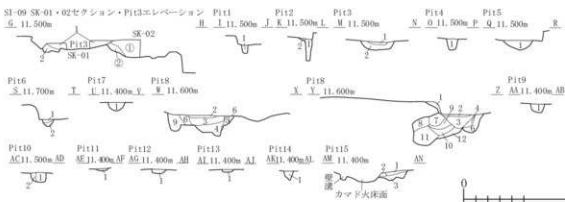
SI-09



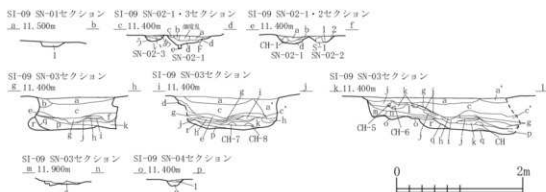
SI-09

第1層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~50mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,火山灰(To-a)(φ10~25mm)少量
第2層 10YR3/2 暗褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~30mm)少量,炭化粒(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)微量,火山灰(To-a)(φ10~30mm)少量
第3層 10YR2/3 黒褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~15mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量,火山灰(To-a)(φ5~9mm)少量
第4層 10YR1/1 黒褐色土	パミス粒(φ1~2mm)微量,炭化粒(φ1~2mm)微量
第5層 10YR5/2 黒褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~25mm)中量,炭化粒(φ1~2mm)微量,焼土粒(φ1~2mm)微量
第6層 10YR2/2 黒褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,炭化粒(φ1~7mm)少量,焼土粒(φ1~2mm)微量,火山灰(To-a)(φ1~3mm)微量
第7層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)多量,パミスブロック(φ10~25mm)中量,炭化粒(φ1~9mm)少量
第8層 10YR3/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)多量,パミスブロック(φ10~20mm)多量,炭化粒(φ1~2mm)微量
第9層 10YR1/7/1 黒色土	粉砂層,パミス粒(φ1~3mm)少量,炭化粒(φ5mm)中量
第10層 10YR2/2 黒褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,炭化粒(φ1~3mm)微量,焼土粒(φ1~2mm)微量
第11層 7.5YR4/3 褐色土	焼土層,炭化粒(φ1~2mm)微量
第12層 10YR2/1 黒色土	粉砂層,炭化粒(φ2~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量
第13層 10YR4/2 灰黄褐色土	パミス粒(φ1~7mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量
第14層 10YR4/2 灰黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~25mm)中量,炭化粒(φ1~2mm)微量,焼土粒(φ1mm)微量
第15層 10YR5/4 に近い黄褐色土	赤SI-09Hの壁溝掘り方
第16層 10YR3/4 暗褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~20mm)中量,炭化粒(φ1~2mm)微量,赤SI-09Hの壁溝掘り方
第17層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~30mm)中量,炭化粒(φ1~5mm)少量,壁溝掘り方
第18層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)多量,パミスブロック(φ10~130mm)多量,ロースブロック(φ10~25mm)少量,炭化粒(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)微量,灰床
SI-09 SN-03	
第1層 10YR3/3 暗褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~40mm)中量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)微量,火山灰(To-a)(φ10~20mm)少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土	パミス粒(φ1~9mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量
第3層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~30mm)中量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
第4層 10YR6/1 褐色土	炭粒,火山灰(To-a)(φ10~20mm)中量

図 1-349 H区 SI-09-1



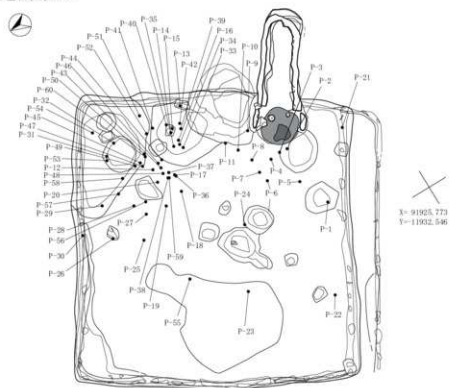
- SI-09 SK-01  
第1層 109R1/3 にぶい黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, ローム殻(φ5~10mm)少量,  
ロームブロック(φ20~30mm)散見  
第2層 109R1/4 褐色土 ロームブロック(φ30~35mm)少量, 炭化粒(φ3~5mm)散見
- SI-09 SK-02  
第1層 109K1/1 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, ローム殻(φ10~15mm)少量, 炭化粒(φ3~10mm)散見  
第2層 109K1/2 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
第3層 109K1/3 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~2mm)少量, 焼土粒(φ1mm)極微量  
第4層 109K1/4 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)中量, 炭化粒(φ1~3mm)少量  
第5層 109K1/5 にぶい黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)中量, パリスブロック(φ10~30mm)中量,  
炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)少量  
第6層 109K1/6 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~30mm)少量,  
炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)散見,  
丸山炭(Tor) (φ3~5mm)少量
- SI-09 Pit 15  
第1層 109P1/2 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~25mm)多量,  
ロームブロック(φ10~15mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)少量
- SI-09 Pit 6  
第1層 109P3/2 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, ローム殻(φ1~5mm)中量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)少量  
第2層 109P3/3 にぶい黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)中量, 炭化粒(φ1~2mm)散見
- SI-09 Pit 7  
第1層 109P1/3 にぶい黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)中量, パリスブロック(φ10~15mm)少量,  
炭化粒(φ1~2mm)少量, 焼土粒(φ1~5mm)少量
- SI-09 Pit 8  
第1層 109P1/2 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~3mm)散見  
第2層 109P1/3 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第3層 109P1/4 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第4層 109K1/4 暗褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第5層 109P1/5 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第6層 109P1/6 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~30mm)多量,  
ロームブロック(φ10~15mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第7層 109P1/7 暗褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~15mm)少量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)散見  
第8層 109P1/8 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量  
第9層 109P1/9 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~30mm)多量,  
炭化粒(φ1~5mm)散見, 焼土粒(φ1~3mm)散見,  
焼土ブロック(φ5mm)散見  
第10層 109K1/2 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~15mm)少量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)少量  
第11層 109K1/3 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~30mm)少量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
第12層 109K1/4 暗褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~25mm)中量,  
炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)極微量
- SI-09 Pit 9  
第1層 109P1/2 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)中量, 炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~5mm)少量  
第2層 109P1/3 にぶい黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~30mm)多量,  
ロームブロック(φ10~15mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)少量,  
焼土粒(φ1~3mm)散見  
第3層 109P1/4 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~30mm)多量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)極微量
- SI-09 Pit 11  
第1層 109P1/2 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~5mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量
- SI-09 Pit 12  
第1層 109P1/2 灰黄褐色土 パリス殻(φ1~5mm)多量, パリスブロック(φ10~25mm)中量,  
炭化粒(φ1~3mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)極微量
- SI-09 Pit 13  
第1層 109P1.7/1 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, 炭化粒(φ1~3mm)少量,  
焼土粒(φ1~5mm)少量, 約同層
- SI-09 Pit 14  
第1層 109K1/1 黒褐色土 パリス殻(φ1~5mm)少量, パリスブロック(φ10~15mm)少量,  
炭化粒(φ1~5mm)少量, 焼土粒(φ1~3mm)散見
- SI-09 Pit 15  
第1層 109P1/3 褐色土 焼土粒(φ5~10mm)少量, 炭化粒(φ3~5mm)散見,  
丸山炭(Tor) (φ3~5mm)少量  
第2層 109P1/4 にぶい黄褐色土 ローム殻(φ2~5mm)散見, 焼土粒(φ2~5mm)散見, 炭化粒(φ3~5mm)散見  
第3層 109P1/5 褐色土 ローム殻(φ2~5mm)散見, 焼土粒(φ2~5mm)散見, 炭化粒(φ3~5mm)散見,  
丸山炭(Tor) (φ3~5mm)散見, 焼土粒(φ1mm)散見



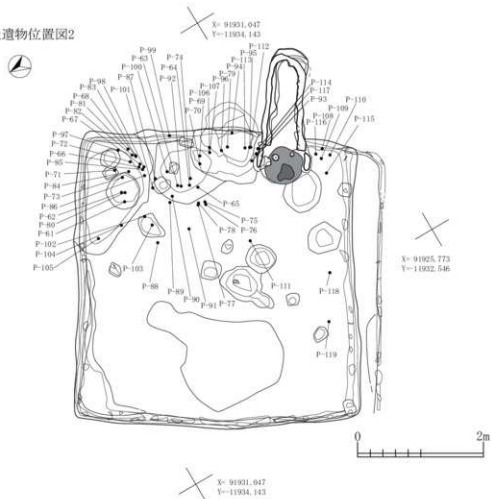
SI-09 SN-01 第1層 10YR1, 7/1 黒色土	炭化物層, パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量
SI-09 SN-02-1 第2層 10YR5/4 暗褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, パミスブロック( $\phi 10\sim 40\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\text{mm}$ )極微量, 火山灰(Tor-a) ( $\phi 10\sim 15\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )微量
第3層 10YR4/2 灰黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )微量
第4層 10YR2/2 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
第5層 10YR1, 7/1 黒色土	炭化物層, パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )少量
第6層 7.5YR3/1 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
SI-09 SN-02-2 第1層 10YR4/2 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, パミスブロック( $\phi 10\sim 25\text{mm}$ )中量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 火山灰(Tor-a) ( $\phi 10\sim 15\text{mm}$ )少量
第2層 10YR5/4 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
SI-09 SN-02-3 第3層 10YR1, 7/1 黒色土	炭化物層, パミス粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
第4層 10YR3/2 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )少量
第5層 7.5YR4/2 灰褐色土	焼土層, 炭灰中, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量
SI-09 SN-03 第1層 10YR3/3 暗褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, パミスブロック( $\phi 10\sim 40\text{mm}$ )中量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )微量, 火山灰(Tor-a) ( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )少量
第2層 10YR3/2 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量, パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, パミスブロック( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
第3層 10YR4/3 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, パミスブロック( $\phi 10\sim 30\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量
第4層 10YR5/4 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, パミスブロック( $\phi 10\sim 30\text{mm}$ )多量, 炭化粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量
第5層 10YR6/1 褐色土	炭層, 火山灰(Tor-a) ( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )中量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )中量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )中量, 焼土ブロック( $\phi 20\text{mm}$ )微量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 火山灰(Tor-a) ( $\phi 6\sim 9\text{mm}$ )少量
第6層 10YR2/2 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )少量
第7層 10YR5/3 に近い黄褐色土	炭化粒( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )少量, 焼土層, 炭灰上層, 炭化粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量, 粉屑多量, 焼土ブロック( $\phi 30\text{mm}$ )少量
第8層 10YR2/2 黒褐色土	炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 焼土粒( $\phi 1\sim 2\text{mm}$ )微量, 粉屑多量, 炭化粒( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )少量
第9層 7.5YR5/2 暗褐色土	火山灰(Tor-a)層 少量, 炭灰層
第10層 2.5YR5/8 暗赤褐色土	焼土層, 粉土層, 粉土層上層
第11層 2.5YR3/2 暗赤褐色土	粉土層
第12層 7.5YR6/4 に近い褐色土	粉土層 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量
第13層 7.5YR4/3 褐色土	粉屑層 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, 焼土ブロック( $\phi 10\sim 50\text{mm}$ )多量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 10\sim 40\text{mm}$ )少量
第14層 7.5YR1, 7/1 黒色土	炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 約同多量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 粉屑( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )少量, 焼屑層
第15層 7.5YR4/6 褐色土	炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, 粉屑( $\phi 10\sim 50\text{mm}$ )少量, 炭屑層
第16層 7.5YR2/2 暗褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量
第17層 10YR5/3 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, パミスブロック( $\phi 10\sim 30\text{mm}$ )多量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量
第18層 10YR3/1 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )微量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, 焼土粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )中量
第19層 10YR5/4 に近い黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )多量, パミスブロック( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )多量, 炭化粒( $\phi 1\sim 7\text{mm}$ )微量
第20層 7.5YR4/2 灰黄褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, パミスブロック( $\phi 10\sim 30\text{mm}$ )少量, ロームブロック( $\phi 10\sim 50\text{mm}$ )多量, 炭化粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量, 炭化粒( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )中量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )少量, 焼土ブロック( $\phi 10\sim 50\text{mm}$ )少量, 粉屑( $\phi 10\sim 20\text{mm}$ )多量, 砂中層, 炭灰中
SI-09 SN-04 第1層 7.5YR4/2 灰黄褐色土	焼土層, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 9\text{mm}$ )中量 概然別
第2層 10YR3/1 黒褐色土	パミス粒( $\phi 1\sim 7\text{mm}$ )少量, 炭化粒( $\phi 1\sim 5\text{mm}$ )少量, 焼土粒( $\phi 1\sim 3\text{mm}$ )少量

図 1-351 H区 SI-09-3

SI-09 出土遺物位置図1

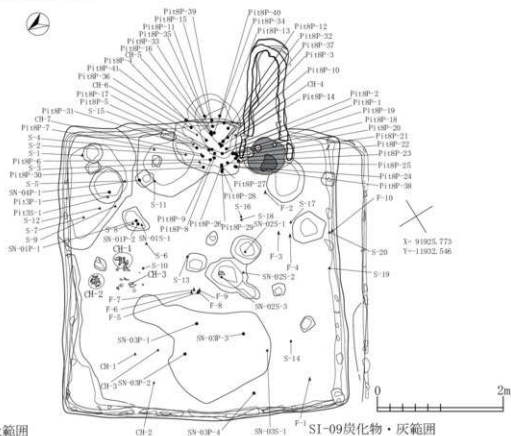


SI-09 出土遺物位置図2

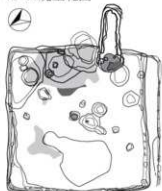


☒ 1-352 H ☒ SI-09-4

SI-09出土遺物位置図 3



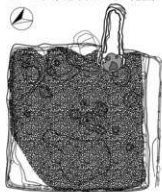
SI-09焼土範囲



SI-09炭化物・灰範囲



SI-09火山灰(To-a)範囲



SI-09掘り方

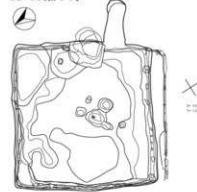
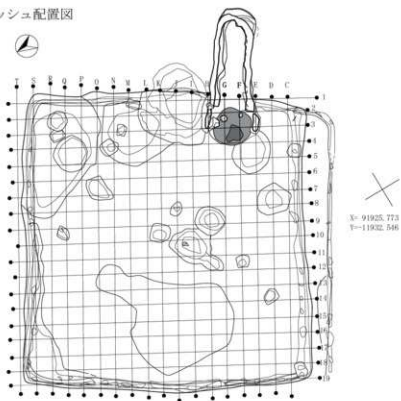


図 1-353 H区 SI-09-5

SI-09鉄関連遺物メッシュ配置図



SI-09内SN鉄関連遺物メッシュ配置図

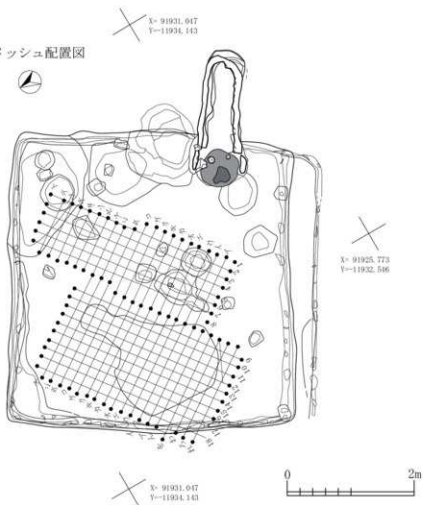


図 1-354 H区 SI-09-6



築されている。改築状況を確認すると二段階であることから竪穴の改築に伴いカマドも改築されている状況で、カマド単独での改築はなさそうである。新段階のカマドは半地下式で、旧段階のカマドの煙道の同一地点を利用して構築されている。袖部幅92cm、煙道長128cmを測る。主軸方位はN-124°-Eである。袖部には芯材に礎が使用されており、粘土により構築されている。煙道部も煙出外周を薄く粘土で構築された箇所が残存している。

支脚はやや左寄りの箇所土師器小甕を倒位に設置している。小甕は図1-387中に48として図示したが、ロクロ使用で底面に穿孔があり、体部には四面に刻書が施されている。旧段階のカマドは、地下式で、煙道の位置的には新カマドとほぼ同一地点に掘削されているが、旧カマドの方が煙出部は南西寄りに広がった形状である。前庭部は火床面のみの残存で、煙道長は123cmを測る。煙道部の主軸はN-126°-Eである。

本竪穴内にはSNを付した遺構が4基精査されており、うちSN-04については前述のとおりピット扱いとなるが、残りのSN-01-03については鉄生産関連の可能性もある。ただし、SN-03については前述のとおり、竪穴の廃絶後に一定量の土層堆積が進んだ後に構築されており、その堆積土（竪穴堆積土第9層）にSN-02が埋没していることからSN-02とSN-03については同時操業ではなく、時期幅が存在する。SN-02については竪穴部の埋没過程でSN-03操業前に堆積している第9層が上に堆積しているが、面的には竪穴の床面と同一面であることから竪穴使用時に鍛冶炉として使用されている。95×55×22cmを測る舌がついた不整楕円形のピットと50×45×10cmを測る不整隅丸方形のピット状の掘り込みが接する形で、北側の舌付きの不整楕円形のピットの舌部分に羽口が出土しており、東側の不整楕円形部分には赤変化した部分や炭化物の残存があり、南側の不整隅丸方形の箇所からは礎が出土している。羽口は先端が西方向を向いており、炉体そのものに向いている状況ではなく、廃絶後の流動の可能性があるが、原位置に近接した位置の可能性が高く舌部分が羽口装着箇所の可能性が高い。作業場所としては炉体の東側のPit11周辺の可能性が高い。SN-01はSN-02に比べると遺物も砕片化した破片が堆積土中に混入する程度で、図1-349の平面図上でセクションポイント「p」（SN-04ライン）のセクションポイントライン周辺が被熱の強い箇所である。SN-01とSN-02については遺存状況が異なり、SN-01側は遺物の残存量も少なく、埋戻しがされている状況であることから2基は併存でなく、SN-01<SN-02側であったこと

が考えられる。

SN-03については、竪穴部の廃絶後に第9-13層の堆積の後、第9層部分を掘り込んで構築されている。前庭部は隅丸方形で、東北東方向に煙道状に突出部があり、炉体が構築されているようである。前庭部は竪穴の軸線と類似しているが、炉体に相当する部分は竪穴やカマドの軸線とは異なる軸線で、N-55°-Eである。堆積土は21層に分層したが、第a-g層までは廃絶後の堆積によるもので、竪穴部の最終的に埋没過程とも関連した堆積が認められる。出土した鉄洋も製錬系のものが多いことから半地下式竪形炉として機能した可能性が高い。

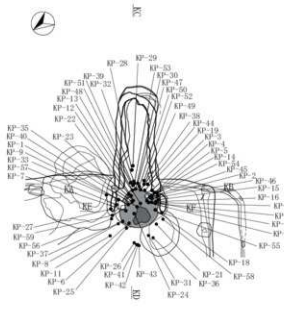
出土遺物は19点図示した。36は下層出土の土師器椀で、口径14.4cm、器高5.1cm、底径5.4cm、器高指数35.4、底径指数37.5を測る。聞き気味の形状で、丸みを帯びた口縁端部を持ち、口縁部は軽く外反させている。37は下層ならびにカマド第13層出土の土師器椀で口径12.0cm、器高6.3cm、底径5.0cm、器高指数52.5cm、底径指数41.7を測る。体部下半が肥厚化し、体部中半からやや直立気味に立ち上がった形状で、類似の形態の一部では非ロクロのみもある。本資料はロクロ使用のもので、体部下半はこのタイプのもんとしては器壁が薄い。煮炊具のうち甕については39-41のように体部上半に最大径がくるタイプや42のように直胴気味で口縁部を折り曲げたタイプ、43-46のように頸部が短くなり外反が強くなるタイプなども出土している。また、47はロクロ系である。小甕は前述のカマド支脚として使用された48はロクロ使用で、口径10.4cm、器高11.1cm、底径7.4cmを測る。口縁部縁帯は内傾気味で、底面中央に穿孔されている。刻書は体部中央を中心に面的に四面対称に刻書が刻まれている。一面は明確に「米」であるが、残りの面は「A」（六画）、「X」（五画A）、「X」（五画B）で、六画と五画Bは類似した刻書であるが、線がたどどしく刻まれ、縦ぎ足したような刻線である。床面出土の非ロクロ資料である49は、口径13.6cm、器高16.4cm、底径8.2cmを測る。体部中半の一部がヘラ磨きによる調整である。50は上一層出土の製塩土器の頸-体部にかけての資料である。直立気味にはであるが、頸部が緩やかに外反している。

S1-10・10b・10c（図1-358～361,388・389）

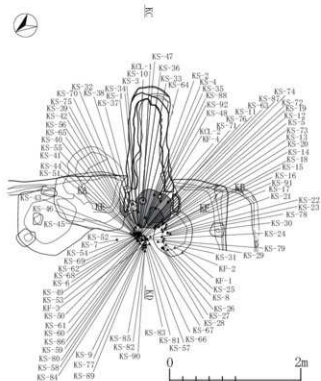
調査区南西隅でH-2区内で検出した。S1-09に近接している。調査時に確認順に番号を付した為、番号は実際の変遷過程の順番とは異なり、遺構の変



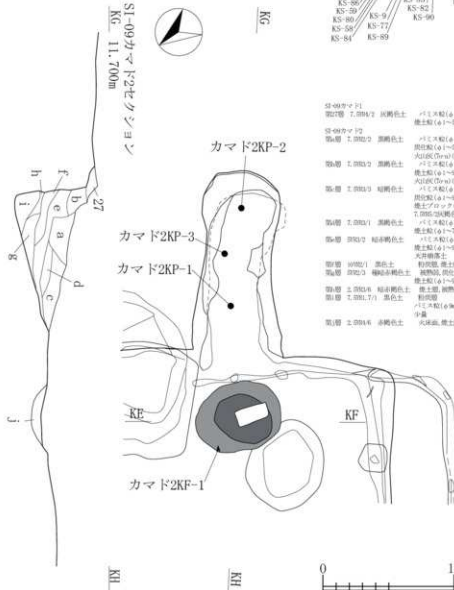
SI-09カマド1出土遺物位置図1



SI-09カマド1出土遺物位置図2



SI-09カマド2

SI-09カマド2セクション  
KG. 11.700m

- 500中マ21 灰褐色土  
 500中マ22 灰褐色土  
 500中マ23 灰褐色土  
 500中マ24 灰褐色土  
 500中マ25 灰褐色土  
 500中マ26 灰褐色土  
 500中マ27 灰褐色土  
 500中マ28 灰褐色土  
 500中マ29 灰褐色土  
 500中マ30 灰褐色土  
 500中マ31 灰褐色土  
 500中マ32 灰褐色土  
 500中マ33 灰褐色土  
 500中マ34 灰褐色土  
 500中マ35 灰褐色土  
 500中マ36 灰褐色土  
 500中マ37 灰褐色土  
 500中マ38 灰褐色土  
 500中マ39 灰褐色土  
 500中マ40 灰褐色土  
 500中マ41 灰褐色土  
 500中マ42 灰褐色土  
 500中マ43 灰褐色土  
 500中マ44 灰褐色土  
 500中マ45 灰褐色土  
 500中マ46 灰褐色土  
 500中マ47 灰褐色土  
 500中マ48 灰褐色土  
 500中マ49 灰褐色土  
 500中マ50 灰褐色土  
 500中マ51 灰褐色土  
 500中マ52 灰褐色土  
 500中マ53 灰褐色土  
 500中マ54 灰褐色土  
 500中マ55 灰褐色土  
 500中マ56 灰褐色土  
 500中マ57 灰褐色土  
 500中マ58 灰褐色土  
 500中マ59 灰褐色土  
 500中マ60 灰褐色土  
 500中マ61 灰褐色土  
 500中マ62 灰褐色土  
 500中マ63 灰褐色土  
 500中マ64 灰褐色土  
 500中マ65 灰褐色土  
 500中マ66 灰褐色土  
 500中マ67 灰褐色土  
 500中マ68 灰褐色土  
 500中マ69 灰褐色土  
 500中マ70 灰褐色土  
 500中マ71 灰褐色土  
 500中マ72 灰褐色土  
 500中マ73 灰褐色土  
 500中マ74 灰褐色土  
 500中マ75 灰褐色土  
 500中マ76 灰褐色土  
 500中マ77 灰褐色土  
 500中マ78 灰褐色土  
 500中マ79 灰褐色土  
 500中マ80 灰褐色土  
 500中マ81 灰褐色土  
 500中マ82 灰褐色土  
 500中マ83 灰褐色土  
 500中マ84 灰褐色土  
 500中マ85 灰褐色土  
 500中マ86 灰褐色土  
 500中マ87 灰褐色土  
 500中マ88 灰褐色土  
 500中マ89 灰褐色土  
 500中マ90 灰褐色土  
 500中マ91 灰褐色土  
 500中マ92 灰褐色土  
 500中マ93 灰褐色土  
 500中マ94 灰褐色土  
 500中マ95 灰褐色土  
 500中マ96 灰褐色土  
 500中マ97 灰褐色土  
 500中マ98 灰褐色土  
 500中マ99 灰褐色土

図 1-356 H区 SI-09-7

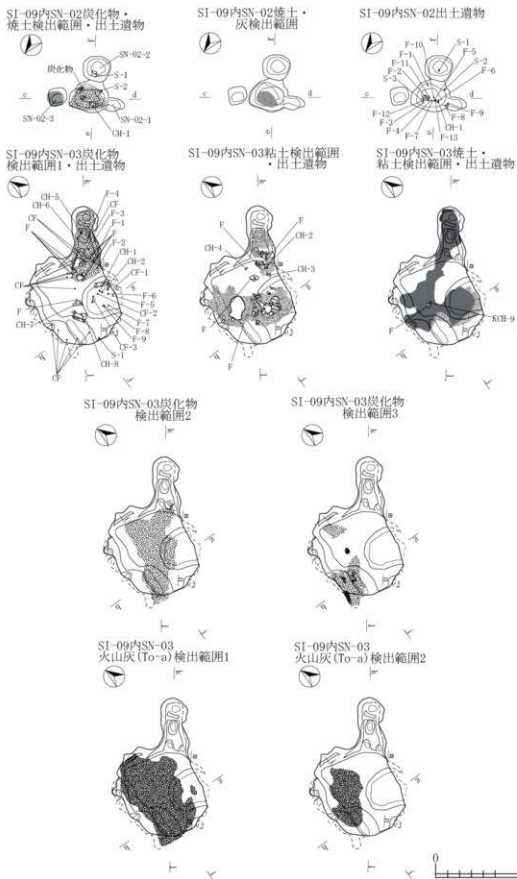


図 1-357 H区 SI-09-8

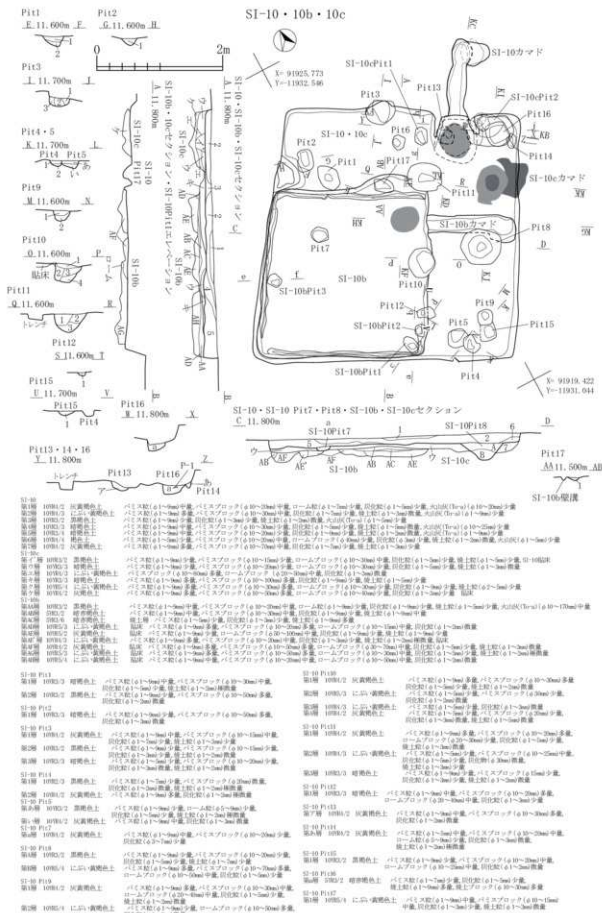


図 1-358 H区 SI-10-1

遷としてはS I-10 b→S I-10 c→S I-10の順番である。カマドの主軸方位は隣接するS I-09と類似している軸線はS I-10 bと10 cの段階である。遺構の記述に際して新しい段階から記載する。

#### S I-10

最終段階のS I-10とした堅穴建物は、S I-10 cとした前段階の堅穴と同一地点に構築されており、412×401×23 cmを測る。カマドの主軸が前段階までのものから壁面の位置が変更され、北東壁側に構築されている。主軸はN-35°-Eで、他のカマドの軸線より隣接しているS I-09内のSN-03の軸線に近似している。ピットは17基精査しているが、P i t 10など前段階の柱穴が含まれている可能性がある。しかし、堆積土の観察時点で重複部分の残りが悪く、明確な記録が残っていない。柱穴として機能したと考えられるピットはP i t 3・7・8・16で、壁溝は検出していない。堆積層は7層分層しているが、廃絶後の堆積層は第1-6層で近接するS I-09同様T o-a火山灰が粒・ブロック状に混入する土の堆積がほとんどである。T o-a火山灰については後述するS I-10 bの時点で既に堆積しており、本遺構の堆積は二次的な要因が強い。カマドは前述のとおり北東壁に構築されており、袖部幅82 cm、煙道長120 cmを測る。煙出部が煙道の延長線上から東側に広がる形でピット状に掘削されており、煙出部分の掘り方の幅は60 cm程に広がっている。使用時の煙出部は煙道と煙出部掘り方の中間地点に42×36 cm程度の開口から排煙されていたようである。検出部分は半地下式であるが、煙道部が煙出方向へ向けて下に傾斜しており、煙出部の構築方法がピットを掘り込む形で煙道とぶついているなど、地下式の構築方法であることから、調査時点の確認そのものが位置的に使用面よりも下がった位置であることが想定される。地下式のカマドとした方が適切だと思われる。右側面に自然礫があり、図面上では塊のように見えるが、実際は板状節理で板状になった礫が重なった状況であり、構築材の一部である可能性がある。

#### S I-10 c

最終段階のS I-10と同じ場所に構築され、掘り方等も同一で明確な建て替えの差が無い。一部でS I-10 cの床面上に土が充填されているケースがあるが、実質的にはカマドの位置換えと柱穴の配置換え程度の変更にしかな過ぎないものと考えられる。S I-10と同一地点の利用でカマド部分も同一面であるので、カマドは袖などの構築材の残存はなく、火床面のみが残存で、63×47 cmを測る。

また、煙道は壁際の一部が15 cm程屋外に掘り込まれている事を確認したが、建物外の煙道のほとんどは擾乱により残存していない。火床面の残存位置を確認すると前段階の堅穴であるS I-10 bと同じ配置でカマドを構築していることが考えられることから、軸線的にはS I-10 bと類似した軸線であったと考えられる。ピットは明確に帰属が認定できなかったものも含まれるが、調査時の認定としてP i t 1・2の2基を本遺構に帰属するものと取り扱っている。

S I-10のカマド構築前に構築されていたP i t 2が本遺構に帰属した可能性は高いが、S I-10のP i t とされたものも帰属した可能性があり、詳細は不明瞭である。

#### S I-10 b

本堅穴の最初に構築された建物で、他の堅穴より小型で、275×271×36 cmを測る。主軸はN-122°-Eである。後段の堅穴に比べると若干掘り込みが深い。カマドの東側の北壁側には浅いテラス状の施設があり、後段の堅穴には壁溝は伴わないが、本遺構のみカマド設置壁である西壁を除く三面で、一部断続しながらも壁溝が掘削されている。ピットは堅穴内で3基検出したが、主柱穴として機能したものはなく、小規模なものである。カマドは前述のS I-10 cと同様に東壁側の北寄りの位置に構築されている。袖部は残存しておらず、火床面と煙道部のみの残存であるが、火床面は46×40 cm、煙道長144 cmを測る。構造は地下式であるものと考えられ、S I-10のカマドの煙道と類似した傾斜である。煙出部が南側に広がりを見せており、S I-10同様煙出部が別に構築された可能性がある。床面直上に堆積している第AA層中にT o-a火山灰がブロック状に混入しており、床面からもT o-a火山灰ブロックが観察される箇所があり、本遺構の廃絶前後の時点で既にT o-a火山灰は降灰していたものと考えられる。

出土遺物はS I-10出土資料を中心に13点図示した。黒色土器は破片資料のみで、下層出土の55が、口径12.8 cm、中層出土の56は13.4 cmである。非黒色の57は、口径12.2 cm、器高6.9 cm、底径5.6 cm、器高指数56.5、底径指数45.9を測る。深身で、口縁部は上端をつまみ返すように立ち上げている。外面体部にやや幅広の刻書が施されている。58はS I-10床面出土とS I-10 b床面出土の接合資料の土師器碗で、口径12.8 cm、器高5.2 cm、底径5.0 cm、器高指数40.6、底径指数39.1を測る。

S I-10 bの時点で既に破片化していたものと考えられ、S I-10に直接帰属関係は認められな

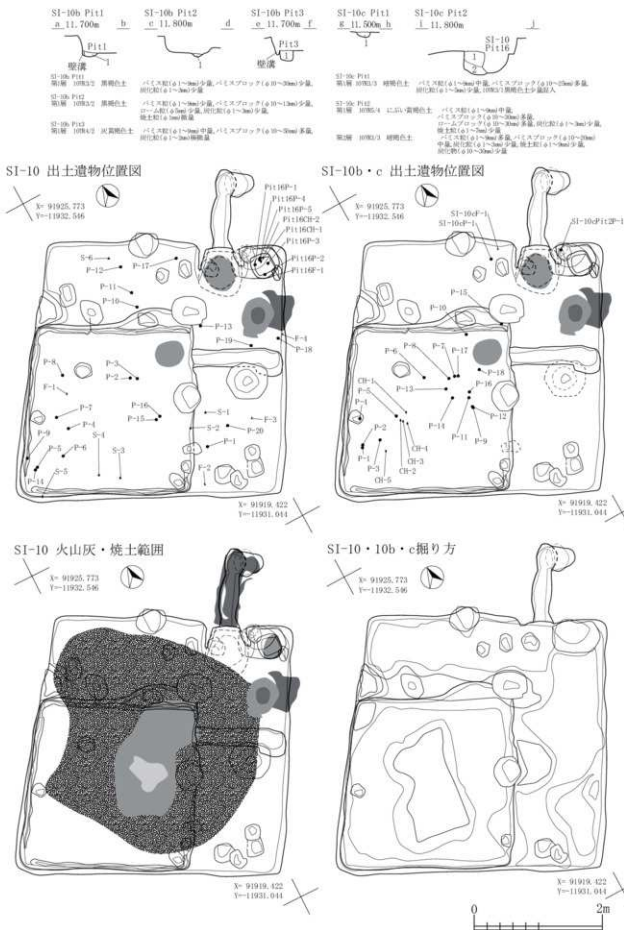


図 1-359 H区 SI-10-2

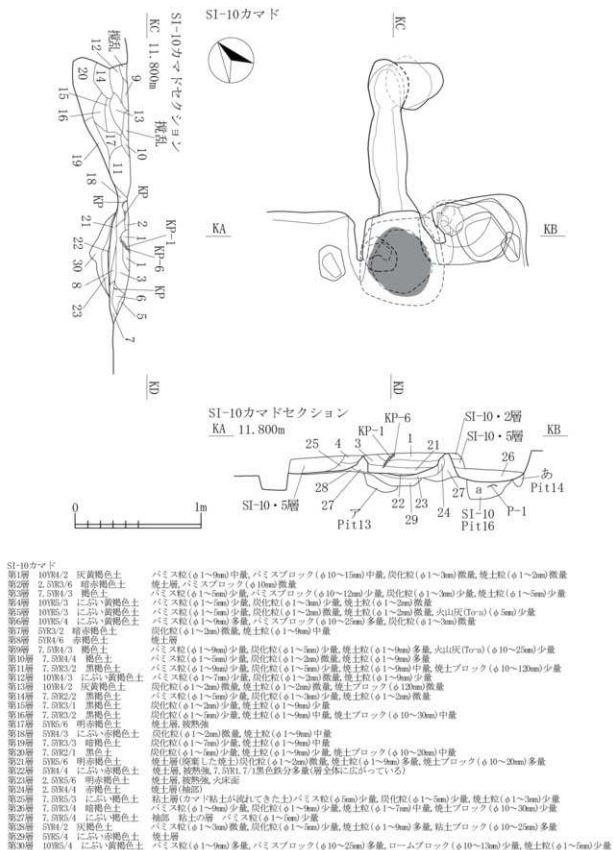


図 1-360 H区 SI-10-3





いが、口唇部の一部に打ち欠きがあり、内外面に煤が付着しているなど灯明具としての利用が想定される。煮炊具は頸部が短い資料がほとんどで、口縁部と体部の最大径が近いタイプが多い。また外面のヘラによる調整が体部までで留められるもの(60・61)や頸部を突き抜け口唇部直下まで及ぶもの(62)なども見られ、調整手法がやや複雑な状況である。小甕は非ロクロ系の体部資料が1点のみで、内外面に煤・付着し、外面に油痕があるなど、灯明的利用が考慮される。場がPit16から破片の状況で出土している。口径31.2cmを測り、内外面に煤が付着している。

## 2. 土坑

### SK-01 (図1-362)

調査区南東側H-1区部分で検出した。223×122×8cmを測る。不整長方形を呈し、南東際は丸みを帯びている。断面形は底面に凹凸がある浅い掘り込みで、底面北側は被熱で焼土化している。

### SK-02 (図1-362)

調査区東側H-1区内で検出した。SI-01と重複しており、前述のとおり、検出時の堆積土の除去が深く、明瞭な新旧関係がつかめておらず、残存している堆積土は類似した土質の堆積が認められる。平面形は不整形を呈し、132×116×16cmを測る。断面形は浅い楕円状を呈し、底面は平坦な箇所がある。

### SK-03 (図1-362, 389)

調査区南東側H-1区で検出した。SI-03・SK-05と重複しており、本遺構はいずれの遺構よりも新しい。隅丸長方形を呈し、198×146×78cmを測る。断面形は底面の一部に凹凸を持ち、壁上部の一部で角度を変え、緩やかに立ち上がる箇所がある。土層注記の記述では混入物として記載がないが、底面直上に堆積している第3層中に炭化物が面的に堆積しており、本遺構の埋没途中で焼成が行われた可能性がある。遺物分布図では土器・石器・木製品等が出土した箇所が示されているが、新しい資料がほとんどで、図1-389-68で図示した染付皿が出土している。

### SK-04 (図1-362)

調査区南東側H-1区で検出した。SK-03・05と近接しているが、本遺構は重複関係が無い。不整形を呈し、142×113×17cmを測る。断面形は柱状に中央浅くが凹んだ形状で周辺は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。ブロック主体の堆積土で埋戻しの様相が強い。

### SK-05 (図1-362)

調査区南東側H-1区で検出した。SI-03・SK-03と重複しており、SI-03より新しく、SK-03より古い。不整形円形を呈し、195×160×20cmを測る。断面形は直立気味に立ち上がる箇所と緩やかに立ち上がる箇所がある。SK-04と類似した土が堆積しており、近接していることから関連した可能性がある。

### SK-06 (図1-362)

調査区中央H-1区で検出した。SP-023・SD-01と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は小判形を呈し、143×71×18cmを測る。断面形は壁上部の一部で立ち上がる形状で、底面の一部には凹凸がある。

### SK-09 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。平面形は不整形円形を呈し、113×90×22cmを測る。断面形は中央部分が凹む形状で、底面は凹凸が顕著である。

### SK-10 (図1-363)

調査区中央H-1区内で検出した。平面形は不整形円形で、84×72×12cmを測る。断面形は鍋底状で、底面の一部には凹凸がある。壁面は緩やかな角度で立ち上がる。

### SK-11 (図1-363)

調査区東側H-1区で検出した。SK-16、STP-05、SD-02、SX-04・06bと重複しており、SD-02より古く、他の遺構より新しい。平面形は不整形長楕円形を呈し、204×103×18cmを測る。断面形は他の遺構の重複部分の堆積土の影響を受け段を持つように立ち上がる部分があり、底面は傾斜がある。

### (SI-04内) SK-12 (図1-363, 386)

SI-04内で検出した。SI-04の記述でも触れたが、合口埋塞遺構で、SI-04廃絶後の第6層の堆積以降に掘削され構築されている。平面形は不整形長楕円形を呈し、71×42×54cmを測る。断面形は袋状を呈し、上端は堅穴建物の壁面を利用し、床面以下は西側に広がるように掘削されて、東側に傾斜するように角度をつけている。土器は西側にロクロ系、東側に非ロクロの甕を合口になるように横位に設置しており、東側の凹んだ箇所には第8層とした黄褐色土を充填し、設置角度を調整している。出土遺物の図示・記述はSI-04中で行ったが、周辺でもT-o-a火山灰が粒状に混入する土



が堆積土で認められる堅穴があり、B-Tm火山灰が降灰するまで集落としては継続しているので、T-o-a火山灰降灰後に廃絶した堅穴建物以降の集落変遷の中で構築された遺構である。

#### SK-13 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。平面形は不整長楕円形を呈し、 $111 \times 82 \times 17$  cmを測る。断面形は段状に立ち上がる形状で、西壁際の一部が浅いピット状に掘り下がっている。壁面は緩やかに立ち上がる。

#### SK-14 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。SD-02と壁際で重複しており、本遺構が古い。平面形は不整楕円形を呈し、 $168 \times 123 \times 62$  cmを測る。中央が段落ちした形状で、壁際がテラス状にやや平坦な面を持つ。壁面は直立気味に立ち上がる。

#### SK-15 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。SD-01・05、SF-01と重複しており、セクション図では記録されていないが、記録写真を確認すると本遺構の最上面の一部にSD-01の堆積土が確認できる。よってSD-05より新しく、SD-01とSF-01より古い。平面形は不整楕円形を呈し、 $110 \times 80 \times 41$  cmを測る。断面形は楕円状を呈する箇所が多いが、長軸方向の北側が壁上部で角度を変え、緩やかに立ち上がる。

#### SK-16 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。SK-11、STP-05、SD-02、SX-04・06b、SP-125と重複しており、いずれの遺構より古い。平面形は不整楕円形を呈し、 $168 \times 111 \times 35$  cmを測る。断面形は直立気味で立ち上がる箇所もあるが、一部では袋状を呈する箇所もある。底面は傾斜があり、凹凸がある。

#### SK-17 (図1-363)

調査区東側H-1区内で検出した。平面形は不整小判形を呈し、 $118 \times 65 \times 16$  cmを測る。断面形は直立気味に立ち上がる箇所と緩やかに立ち上がる箇所がある。底面はやや凹凸がある。

#### SK-19 (図1-364)

調査区西側H-2区内で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、 $103 \times 75 \times 20$  cmを測る。断面形は楕円形を呈し、緩やかに立ち上がる。

#### SK-20 (図1-364, 389)

調査区西側H-2区内で検出した。STP-07と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は隅丸方形で、 $140 \times 133 \times 26$  cmを測る。本遺構は製炭土坑で、第4層と取り扱った土層中に炭化物が含まれ、壁際に被熱により赤変した箇所が確認されている。土層中では観察出来なかったが、壁際からB-Tm火山灰粒が確認され、周辺に存在するS1-09内での鉄生産時に製炭施設として一定の役割を果たしたものと考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。出土遺物は第2層と第8層から縄文土器片が出土しているが、本遺構の帰属時期の資料とは認定できず、紛れ込みの可能性が高い資料である。

#### SK-21 (図1-364)

調査区西側H-2区内で検出した。平面形は不整円形を呈し、 $113 \times 101 \times 30$  cmを測る。掘り方を有し、第6・7層が充填土に相当する。使用時の断面形は鍋底形を呈している。第2層が炭化物層で、本遺構はSK-20同様製炭土坑であり、平面形の違いはあるが、近接していることから、関連性が考慮できる。

#### SK-24 (図1-364)

調査区西側H-2区内で検出した。平面形は不整長方形を呈し、 $112 \times 85 \times 8$  cmを測る。断面形は鍋底形で、若干緩やかに立ち上がる形状である。堆積土は1層に分層し、ブロックの混入は認められるが自然堆積の様相を呈する。

#### SK-25 (図1-364)

調査区中央南側H-2区から検出した。近接する小ピット程度の炭化物を含む浅い落ち込みでSK-25を付し、各炭化物の単位で「-1」「-2」の番号を付した。土層的には第1層には土片混じりの土層が同一で、底面に赤変した箇所があるなど、同時期もしくは近接した時期に焼成が行われたことが考えられる。SK-25-1は不整長方形を呈し $68 \times 50 \times 7$  cmを測る。断面形は一部で緩やかに立ち上がる箇所が見られ、底面が被熱により赤変している箇所がある。SK-25-2は不整楕円形を呈し、 $43 \times 30 \times 6$  cmを測る。断面形は凹凸があり、基部のみの残存の可能性がある。

#### SK-26 (図1-364)

調査区中央H-2区内で検出した。平面形は調査時には不整小判形を呈しているが、攪乱等による影響があり、元々は不整円形を呈していたものと考えられる。 $120 \times 80 \times 35$  cmを測る。堆積土の中





位に炭化物の堆積層があり、炭化物とともに被熱礫が出土している。

#### SK-27 (図1-364)

調査区中央H-2区で検出した。開口部一部が直線的ではあるが、元々は楕円形を呈していたものと考えられる。断面形は袋状を呈し、根根上から検出したので、上部が削平された可能性が高く、フラスコ状の土坑であったことが考えられる。

### 3. 焼成関連遺構

#### SN-03 (図1-365)

調査区東側H-1区で検出した。STP-03と重複しており、本遺構が新しい。焼土が落ち込みの部分にブロック状に混入する堆積状況を呈しており、掘り込みというより、土が風倒木状に置き換わった状況を呈している。図1-338のH区遺構配置図で図示したが、付近には、太平洋戦争時に、本調査区東側にある石江堤周辺から投下され、高間(1)遺跡地内で大量に出土したM74六角焼夷弾が3発出土している(地点はSN-03南西側遺構外、SI-03内、SI-03西側遺構外)。M74六角焼夷弾を束ねたE48焼夷集束弾の部品等による影響も考慮できる。

#### SN-04 (SX-06) (図1-365, 389)

調査区東側H-1区で検出した。カマド状遺構で、 $2.26 \times 7.0 \times 3.0$  cmを測る。前庭部と燃焼部+煙道部の軸線が異なる形で構築されている。煙道側の軸線はN $16^{\circ}7'$ -Eで、前庭部側の軸線はN $12^{\circ}3'$ -Eである。調査時に燃焼部の上面をSX-06として精査し、古銭が2点出土している。

いずれも北宋銭で、71は天禧通寶、72は熙寧元寶である。周辺にSBa-01とした掘立柱建物等があり、関連した可能性がある。

#### SN-05 (図1-365)

調査区東側H-1区で検出した。SN-04の1m北側に位置しており、近接している。記録された平面図がやや円形な形状であるが、本遺構も北側に煙道部を持つカマド状遺構である。規模は $1.62 \times 6.5 \times 1.4$  cmを測る。主軸はN $25^{\circ}$ -Wである。前庭部側が若干浅い掘り込みとなっているが、燃焼・煙道部ともしっかり掘削され、粘土の貼りつけが行われている。本遺構も前述のSN-04同様付近にSBa-01等の掘立柱建物があり、建物は変遷過程があることなどから、本遺構とSN-04が仮に帰属した場合、新旧関係が発生する可能性がある。しかし、重複関係がなく、比較できる遺物の出土がないことから検討に至れない。

#### SN-07 (図1-365)

調査区西側H-2区で検出した。 $5.0 \times 3.5 \times 4$  cmの規模で、骨混じりの炭化物層を検出した。詳細は不明である。

### 4. 溝状土坑

#### STP-01 (図1-366)

調査区東側H-1区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $3.12 \times 6.2 \times 6.0$  cmを測る。底面は斜面下方に向かって傾斜し、下端は段を持ち、平坦気味になっている。壁面は中段まで直立気味に立ち上がり、開口部に向けて若干角度を変え、広がっている。

#### STP-02 (図1-366)

調査区中央H-1区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $4.10 \times 3.0 \times 7.0$  cmを測る。底面は若干斜面下方に向け傾斜しているが、ほぼ平坦である。壁面は、セクション図を見ると開口部上端が内傾した状況となっているが、底面から直立気味に立ち上がり、中段から開口部に向かって少し開き気味に立ち上がっている。

#### STP-03 (図1-366)

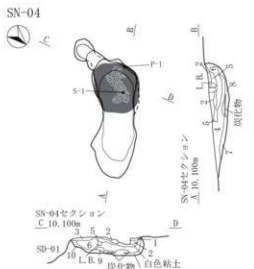
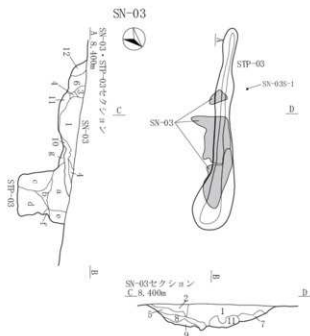
調査区東側H-1区で検出した。SN-03と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は溝状を呈し、 $3.23 \times 6.7 \times 8.4$  cmを測る。斜面下方が広がった形状を呈しており、斜面上方の最も狭い部分との差が4.5 cm程度ある。底面はSTP-01同様斜面下方に向かって傾斜する形状で、本遺構は中央周辺から角度を変えている。壁面は一部下端が袋状に入り込む箇所があり、それ以外の箇所は直立気味に立ち上がり、壁上部で角度を変え、段状を呈する。

#### STP-04 (図1-366)

調査区東側H-1区で検出した。SD-03と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は溝状を呈し、 $3.47 \times 3.8 \times 7.8$  cmを測る。底面はSTP-03と同様に中央付近から斜面下方に向かって下がる段のある形状である。壁面は短軸側が直立気味に立ち上がり、開口部付近で少し広がる形状で、長軸側は両端とも浅く袋状に入り込んだ形状である。

#### STP-05 (図1-366)

調査区東側H-1区で検出した。SK-11・16、SX-04・06b、SD-02と重複しており、SK-16より新しく、他の遺構より古い。平面形は溝状を呈し、 $4.70 \times 4.0 \times 6.3$  cmを測る。底面は斜面下方に緩やかに傾斜し、やや凹凸がある。壁面は短軸側は直立気味に立ち上がり、開口部付近

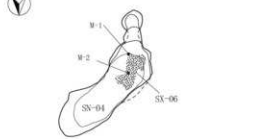


- SN-03セクション  
 第1層 10YR3.7/1 黒色土  
 第2層 10YR3.7/1 赤色土  
 第3層 7.5YR6.6/4 褐色土  
 第4層 10YR3.7/1 赤色土  
 第5層 10YR3.7/1 赤色土  
 第6層 10YR3.7/1 赤色土  
 第7層 10YR3.7/1 赤色土  
 第8層 10YR3.7/1 赤色土  
 第9層 10YR2.2/ 黒褐色土  
 第10層 7.5YR6.6/4 褐色土  
 第11層 10YR3.7/1 赤色土  
 第12層 10YR3.7/1 赤色土

- SN-03セクション  
 C. 8,400m
- パイル敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ1~2m)少量  
 柱土敷(φ1~2m)少量,パイルブロック(φ10~15m)稀散敷  
 パイル敷(φ1~2m),柱土敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ2~5m)少量  
 パイル敷(φ1~2m)少量,パイルブロック(φ10~20m)稀散敷,  
 10YR3.7/1褐色土敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ1~2m)少量,10YR2.2/黒褐色土敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ2~3m)少量  
 柱土ブロック(φ10YR3.7/1)褐色土少量散入,  
 柱土ブロック(φ10~100m)少量  
 パイル敷(φ1~2m)敷露
- 10YR6.6/4褐色土ローム敷(φ1~5m)中量,ロームブロック(φ20~60m)  
 散入,柱土敷(φ1m)少量,炭化物敷(φ1~2m)少量  
 10YR6.6/4褐色土ローム敷(φ1~5m)中量  
 炭化物敷(φ1~2m)少量,柱土敷(φ1~2m)敷露  
 炭化物敷(φ1~2m)少量,柱土敷(φ2~3m)少量  
 10YR6.6/4褐色土ローム敷(φ1~5m)少量  
 炭化物敷(φ1~2m)少量,柱土敷(φ1~2m)少量  
 柱土ブロック(φ10m)敷露  
 10YR6.6/4褐色土敷(φ1~5m)中量,砂土上ブロック  
 (φ20~25m)中量,炭化物敷(φ1~2m)少量  
 10YR6.6/4褐色土の柱土(φ1~2m)散入  
 炭化物敷(φ1~2m)少量,柱土敷(φ1~2m)中量  
 10YR6.6/4褐色土上ブロック(φ20~25m)少量  
 10YR6.6/4褐色土の柱土敷(φ1~2m)少量  
 砂土上ブロック(φ20~25m)少量  
 10YR6.6/4褐色土上ブロック(φ20~25m)少量  
 炭化物敷(φ1~5m)少量,10YR6.6/4褐色土敷(φ1~5m)少量,  
 柱土ブロック(φ20~30m)中量,柱土散入  
 柱土敷(φ1~2m)少量,柱土上ブロック(φ10~15m)少量  
 炭化物敷(φ1~2m)少量,柱土敷(φ1~2m)少量  
 柱土ブロック(φ10m)少量

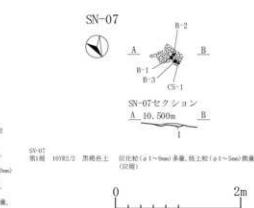


※調査時SX-06炭化物範囲および古銭出土位置図



- SN-05セクション  
 C. 9,900m
- 第1層 10YR3.7/1 赤色土  
 第2層 7.5YR6.6/4 褐色土  
 第3層 10YR3.7/1 赤色土  
 第4層 10YR2.2/ 黒褐色土  
 第5層 10YR3.7/1 赤色土  
 第6層 10YR3.7/1 赤色土

- SN-05炭化物範囲
- 10YR6.6/4褐色土の柱土敷(φ2~5m)少量,炭化物敷(φ1~2m)敷露,柱土敷(φ1~2m)少量  
 パイル敷(φ2~5m)敷露,柱土敷(φ1~2m)中量,  
 炭化物敷(φ1~2m)稀散敷  
 パイル敷(φ1~5m)敷露,ロームブロック(φ10~20m)少量,  
 パイル敷(φ1~2m)稀散敷  
 炭化物敷(φ1~2m)敷露,炭化物敷,  
 パイル敷(φ1~5m)少量,炭化物敷(φ1~2m)稀散敷,  
 炭化物敷,柱土敷(φ1~2m)稀散敷



SN-07 第1層 10YR2.2 黒褐色土 炭化物敷(φ1~2m)敷露,柱土敷(φ1~2m)敷露(炭露)



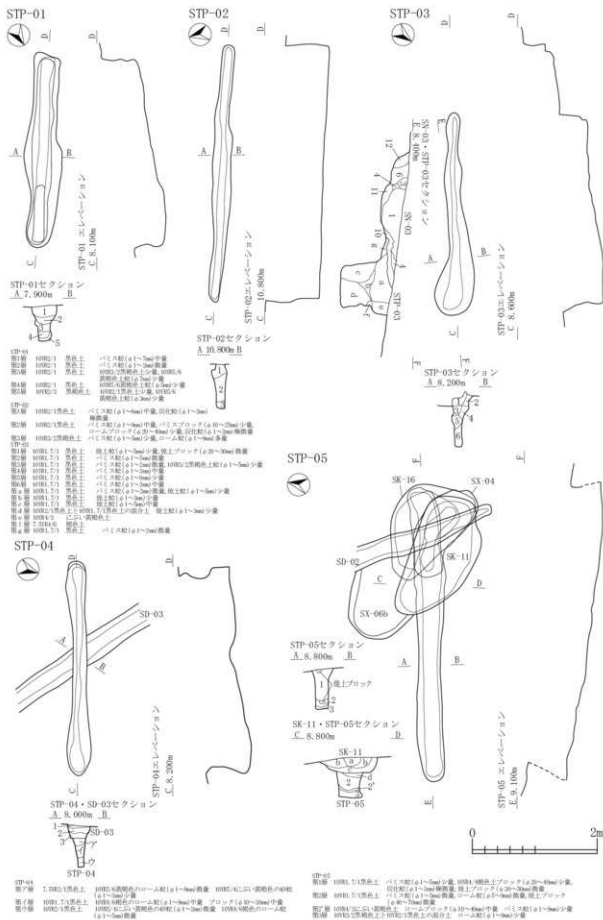
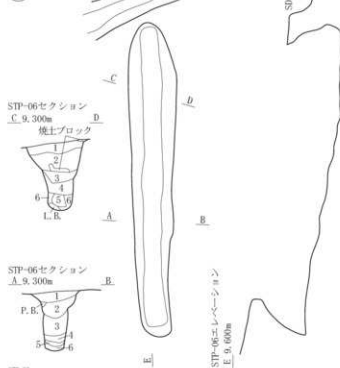


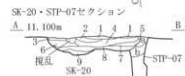
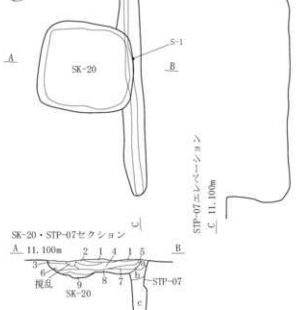
図 1-366 H区 STP-1

STP-06



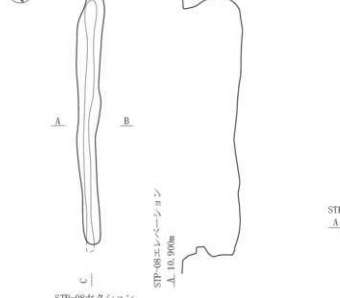
- STP-06
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土
  - 第2層 10YR2/1 黒褐色土
  - 第3層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第4層 10YR1/1 黒褐色土
  - 第5層 10YR1/1 黒褐色土
  - 第6層 10YR2/2 黒褐色土
- パミヌ粒(φ1~2mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)稀散見, 柱土粒(φ2~5mm)稀散見  
 凹凹粒(φ1~2mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)稀散見, 柱土ブロック(φ10~30mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)少量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)少量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)中量, パミヌブロック(φ10~30mm)中量, 凹凹粒(φ1~2mm)散見  
 パミヌ粒(φ1~2mm)少量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量

STP-07



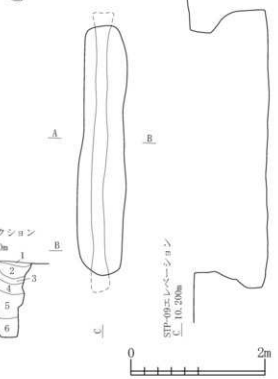
- STP-07
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第2層 10YR2/1 黒褐色土
  - 第3層 10YR2/2 黒褐色土
- パミヌ粒(φ1~2mm)中量, 凹凹粒(φ2~5mm)散見, 柱土粒(φ1~2mm)散見  
 パミヌ粒(φ1~2mm)少量, パミヌブロック(φ11mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)散見  
 パミヌ粒(φ1~2mm)少量, パミヌブロック(φ10~30mm)少量

STP-08



- STP-08
- 第1層 10YR3/4 暗褐色土
  - 第2層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第3層 10YR3/3 暗褐色土
  - 第4層 10YR2/3 黒褐色土
  - 第5層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第6層 10YR2/2 黒褐色土
- パミヌ粒(φ1~2mm)散見, パミヌブロック(φ10~15mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)中量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)中量, パミヌブロック(φ10mm)散見, 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 凹凹粒(φ1~2mm)少量  
 パミヌ粒(φ1~2mm)中量, 7.5YR6/1 紅褐色土, 7.5YR6/1 紅褐色土, 7.5YR6/1 紅褐色土  
 少量  
 7.5YR6/1 暗褐色土のローム粒(φ1~5mm)少量, ブロック(φ10~15mm)散見  
 10YR2/2 暗褐色土少量, 7.5YR6/1 暗褐色土のロームブロック(φ20~30mm)中量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量

STP-09



- STP-09
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第2層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第3層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第4層 10YR2/2 黒褐色土
  - 第5層 10YR2/1 黒褐色土
  - 第6層 7.5YR1/7 黒褐色土
- パミヌ粒(φ1~2mm)散見, パミヌブロック(φ10~15mm)稀散見, 凹凹粒(φ1~2mm)散見  
 パミヌ粒(φ1~2mm)散見, パミヌブロック(φ10mm)散見  
 パミヌ粒(φ1~2mm)中量, 凹凹粒(φ1~2mm)少量, パミヌ粒(φ1~2mm)少量, パミヌブロック(φ20~30mm)少量, パミヌ粒(φ1~2mm)少量, パミヌブロック(φ10mm)散見  
 7.5YR6/1 暗褐色土, 7.5YR6/1 暗褐色土, ブロック(φ20~30mm)散見  
 10YR1/2 暗褐色土, ブロック(φ10~15mm)少量, パミヌ粒(φ1~2mm)少量  
 7.5YR6/1 暗褐色土のロームブロック(φ20~30mm)散見  
 7.5YR6/1 暗褐色土のロームブロック(φ20~30mm)少量  
 7.5YR6/1 暗褐色土のロームブロック(φ20~30mm)少量

図 1-367 H区 STP-2

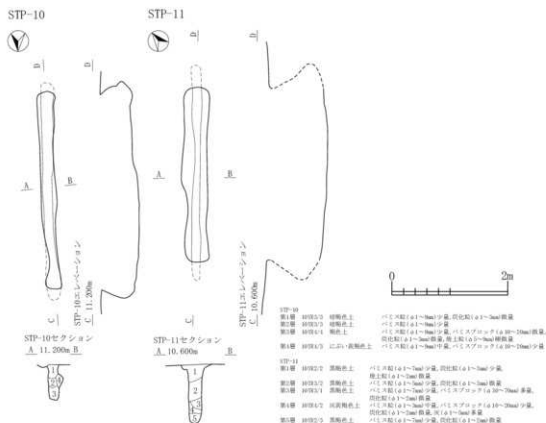


図 1-368 H区 STP-3

で緩やかに立ち上がる。長軸側は袋状に入り込む。

#### STP-06 (図 1-367)

調査区東側H-1区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $468 \times 72 \times 106$  cmを測る。底面は凹凸があり、斜面下方に向かって緩やかに傾斜している。断面形は長軸方向が袋状、短軸方向が壁上部で角度を変え、緩やかに立ち上がる形状を呈している。

#### STP-07 (図 1-367)

調査区西側H-2区で検出した。SK-2と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は溝状を測り、 $305 \times 33 \times 97$  cmを測る。底面は若干凹凸があるが、ほぼ水平で、長短軸とも垂直に近い形で立ち上がる。図示はしていないが、自然礫が出土している。H-2区から検出した溝状土坑は、本遺構を除き、コンターラインに平行して構築されている。本遺構はコンターに直交する形で構築されており、H-1区側で検出した溝状土坑と類似している。

#### STP-08 (図 1-367)

調査区西側H-2区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $379 \times 33 \times 84$  cmを測る。底面はやや凹凸があり、短軸側の西側が斜面下方に相当する為、若干下方寄りに傾斜する。断面形は長軸側が袋状、短軸側が直立気味に立ち上がる形状を呈している。

#### STP-09 (図 1-367, 389)

調査区西側H-2区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $370 \times 73 \times 115$  cmを測る。底面は若干凹凸があるが、ほぼ水平で、断面形は長軸方向が袋状、短軸方向が壁上部で角度を変え緩やかに立ち上がる形状を呈する。中層と下層から出土し、接合した縄文土器片 1点を図示した。

#### STP-10 (図 1-368, 389)

調査区西側H-2区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $338 \times 28 \times 61$  cmを測る。底面は中央付近で浅い段状になっており、断面形は長軸方向が袋状、短軸方向が開口部付近で緩やかに立ち上がる形状を呈している。底面直上に堆積している第5層から出土した縄文土器片 1点を図示した。

#### STP-11 (図 1-368, 389)

調査区西側H-2区で検出した。平面形は溝状を呈し、 $300 \times 45 \times 103$  cmを測る。底面は中央付近が凹むような形状で、断面形は長軸方向が袋状、短軸方向が開口部付近で緩やかに立ち上がる形状を呈している。底面直上に堆積している第5層から出土した縄文土器片 1点を図示した。

## 5. その他の遺構

#### SX-01 (図 1-369)

調査区東側H-1区で検出した。平面形は不整形円形の形状と不整形丸方形状のものが組み合わせら

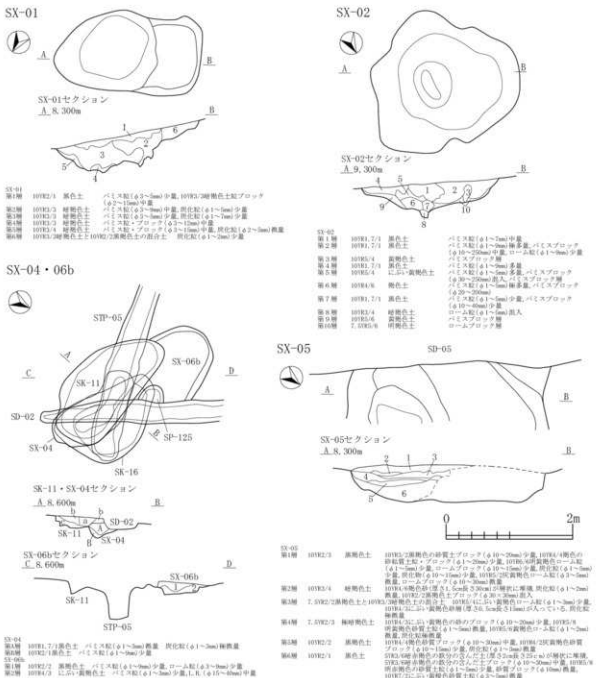


図 1-369 H区 SX-1

れたもので、 $233 \times 128 \times 65$  cmを測る。隅丸方形の浅い掘り込みに不整形円形状の穴が再掘削されたもので、再掘削された側の堆積は凹凸があり、堆積も流動的な堆積状況を呈している。底面も凹凸・傾斜があり、断面形は段状に立ち上がる形状を呈している。

## SX-02 (図1-369)

調査区東側H-1区で検出した。平面形は不整形を呈し、 $250 \times 217 \times 71$  cmを測る。底面中

央に柱穴状の落ち込みがあり、堆積状況も裏込めを含めた堆積と、抜き取り・再構築を含めた第1~3層の堆積が認められる。壁面は一部で緩やかに立ち上がる形状を呈する。

## SX-04 (図1-369)

調査区東側H-1区で検出した。SK-11・16, STP-05, SX-06b, SD-02と重複しており、SK-16, STP-05, SX-06bより新しく、他の遺構より古い。平面形は不整形



を呈し、155×70×30cmを測る。重複の為部分的な検出だが、断面形は一部が緩やかに立ち上がる形状を呈する。

#### SX-05 (図1-369)

調査区東側H-1区で検出した。SD-05と重複しているが、SD-05の掘削後に壁面の一部で確認したので、新旧関係の情報が得られていない。また、斜面下方についても黒色土主体で、SD-05の確認面より1層分下がる位置に堆積層があることから面的に飛んでおり、下方の情報が欠落している状況にある。SD-05より下段に堆積層が確認できたことから、本遺構の方が古い可能性があるが、前述の理由で確定できない。検出部の規模は307×100×59cmを測る。段状の落ち込みがあり、不整楕円形状に延びた可能性がある。検出部分の断面形は壁の一部で角度を変え直立気味で立ち上がる箇所がある。

#### SX-06 [調査時]→SN-04の項目で記載

#### SX-06b (図1-369)

調査区東側H-1区で検出した。SK-11・16、STP-05、SX-04、SD-02と重複しており、SK-16、STP-05より新しく、他の遺構より古い。重複の為、残存部のみ情報であるが、長楕円形を呈し、[150]×110×20cmを測る。底面は若干傾斜や凹凸があり、壁面は直立気味に立ち上がっている。

#### SX-07 (図1-370)

調査区東側H-1区で検出した。SP-144・177・178・179・189と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は不整隅丸方形を呈し、262×242×18cmを測る。浅い掘り込みで、底面は凹凸があり、断面形も緩やかに立ち上がる形状である。

#### SX-08・09 (図1-370, 389)

調査区中央H-2区で検出した。近接している位置に検出し、類似した形状であることから、一括して記載する。

いずれも溝状を呈し、SX-08部分が95×23×18cm、SX-09部分が133×20×6cmを測る。断面形はSX-08側が直立気味に立ち上がる形状で、SX-09は若干開き気味に立ち上がる形状である。

#### SX-10 (図1-370)

調査区西側H-2区で検出した。風倒木で、厳密

に遺構ではないが、SI-08とした堅穴は風倒木の上面を利用していることから、遺構略号としてSXを付し精査した。一部調査区外へ延びるが470×420cm程度の範囲が土層改変の影響を受けており、北西方向が天地返しの影響が深く、南東方向へ向けて影響範囲が延びていることから北西方向から南東方向へ向けて倒れたものと判断される。SI-08の面は風倒木の盛り上がった部分を削り平坦面をつくり利用しているので、構築時点でも意識はあったことが考えられる。風倒木面を堅穴建物等の構築の際に利用するケースは青森市内でも青森平野南部に所在する雲谷山吹(6)遺跡SI-03とSX-05の関係(青森市教育委員会2003青市理報第65集)などでも見られる。

#### 6. 掘立柱建物跡・ビット (図1-371～379, 390)

G区同様調査区内から軸線が同一な柱穴と考えられるビットが複数確認でき、中村氏に別稿で検討してもらう形としたので、この部分では略略のみを提示することとする。G区で検出した建物は本調査区まで延びる資料があったが、G区側で掲載している。

なお、それぞれの計測値・形状等については掘立柱建物の柱穴以外も含めてビットの観察表中で表記することとした。出土遺物は図1-390に図示したが、縄文土器片や土師器などの破片資料が多く、厳密に遺構に帰属しない可能性が高い。SP-098から永楽通寶が出土している。

#### SBa-05 (図1-371)

調査区中央H-1・2区で検出した。東西軸の建物で、該当するビットはSP-033・038・039・041・045・047・048・062・063・203・205・207・220、SD-01内Pit2である。その他南側にSP-075・088・089の3基のビット列があり、本建物と平行する配列となっている。ただし、若干東寄り配置していることなどから、報告に際しては帰属させず報告する。

#### 7. 道路跡

##### SF-01・02 (図1-380)

H-1区内で、黒色土主体ではあるが、路面と認定できるような硬化面が溝状に2基検出した。SF-01はSI-04の南端からSD-05の途中まで確認した。確認部分の長さは約10.8m、幅35～50cmを測る。確認順の精査が主であったため、平面図上では掘り上がりの状態で図示しているところもあるが、本遺構が新しい。また、東側の斜面下方ではSD-01と重複するような範囲となっているが、土層上では重複関係は見られず、詳細は不明

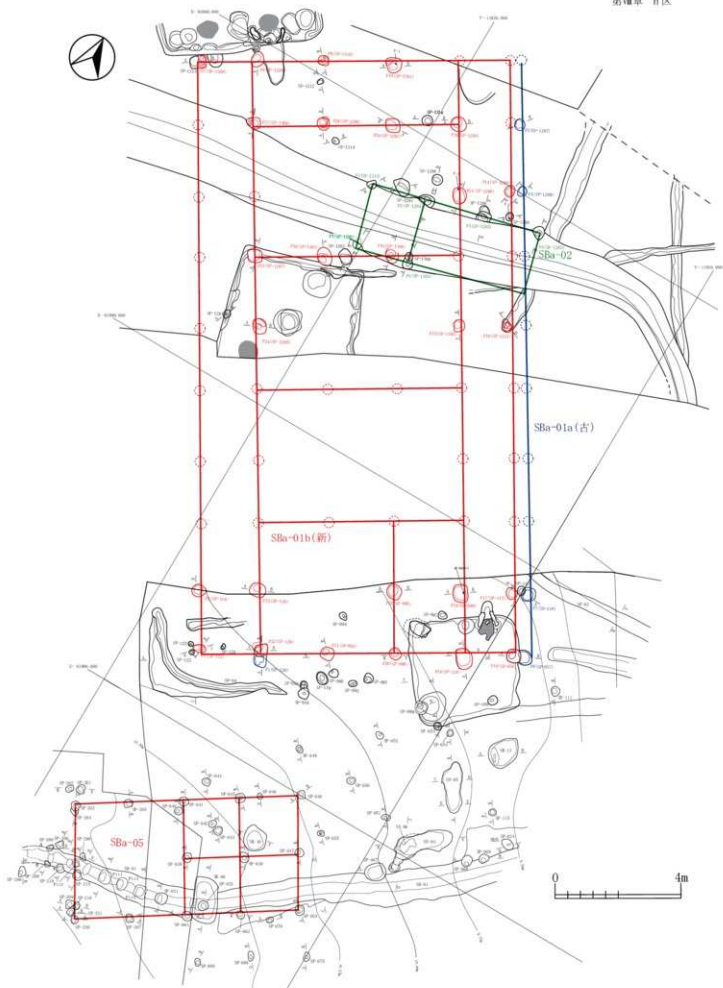


图 1-371 H区 SB









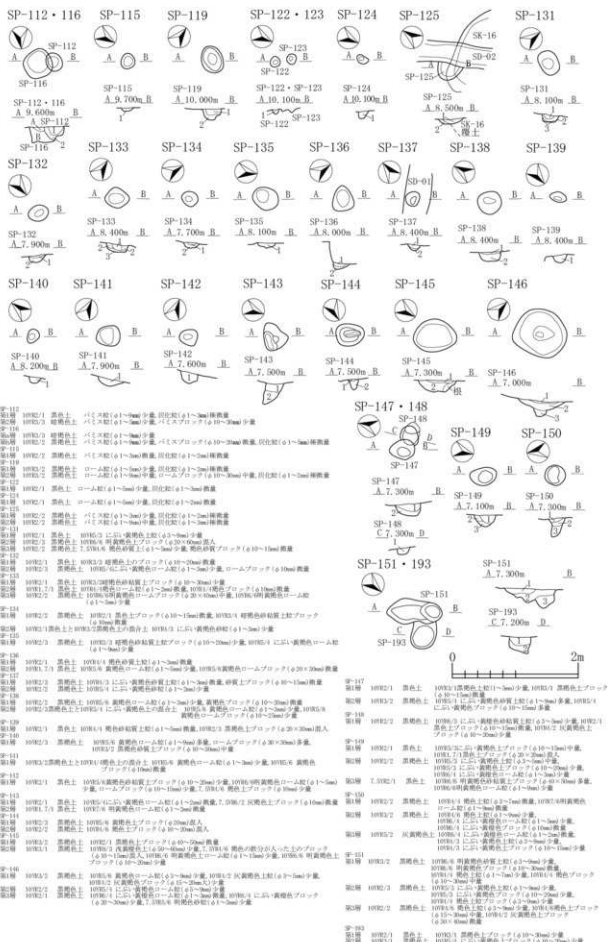


図 1-375 H区 SP-4



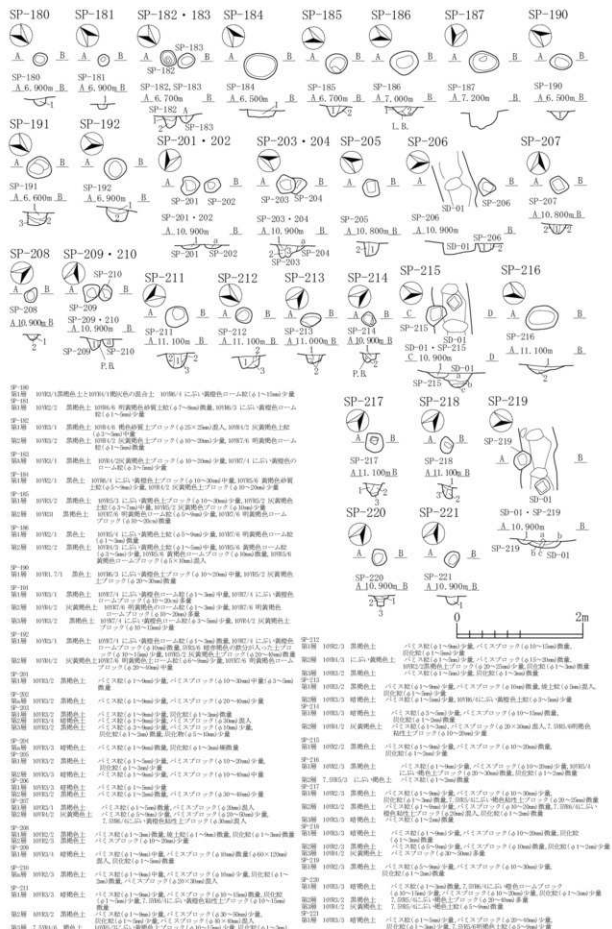


図 1-377 H区 SP-6

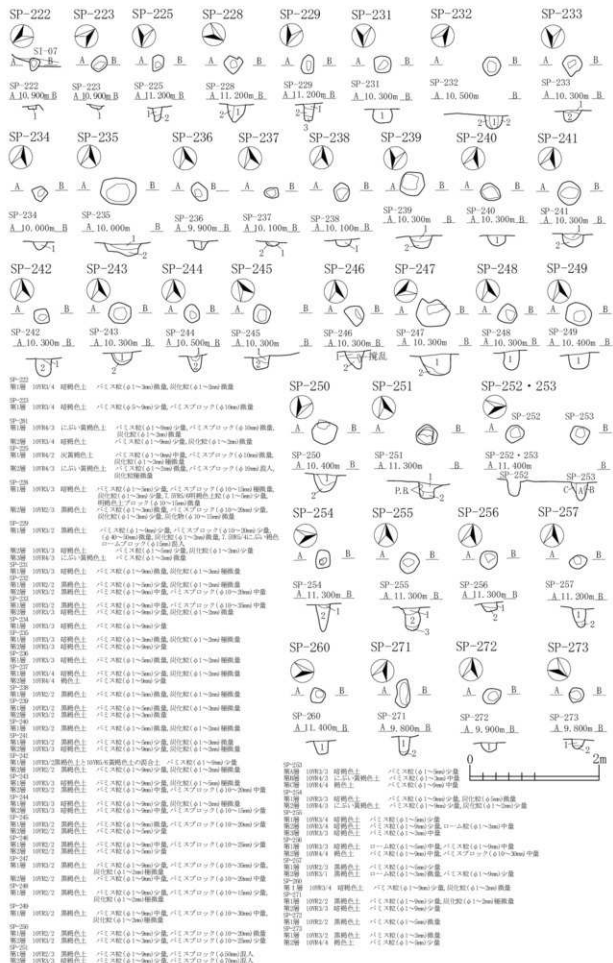
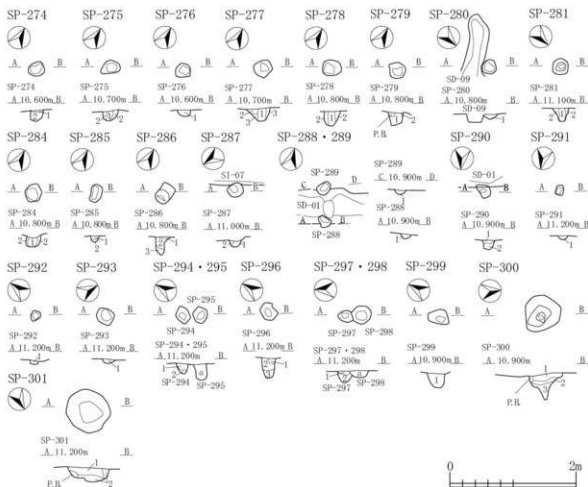


図 1-378 H区 SP-7



SP-274	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(62~8m)極微量, 浮化灰(61~8m)少量, バニスブロック(610~15m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-275	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-276	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-277	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-278	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-279	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-280	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-281	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-284	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-285	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-286	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-287	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-288・289	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-289	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-290	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-291	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-292	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-293	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-294・295	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-296	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-297・298	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-299	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-300	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-301	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量

SP-284	暗褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-285	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-286	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-287	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-288・289	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-289	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-290	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-291	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-292	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-293	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-294・295	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-296	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-297・298	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-299	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量
SP-300	赤褐色土	バニス灰(61~8m)少量, 浮化灰(61~8m)極微量

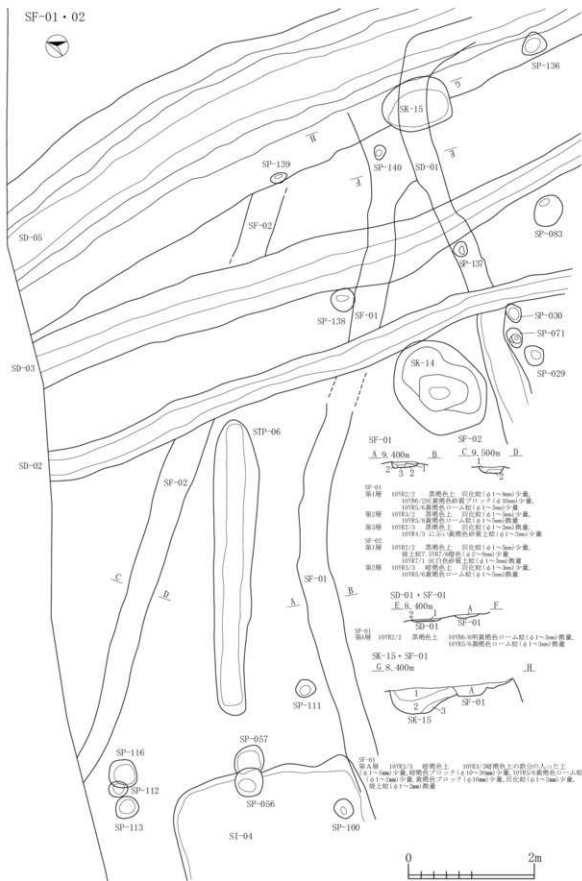


図 1-380 H区 SF



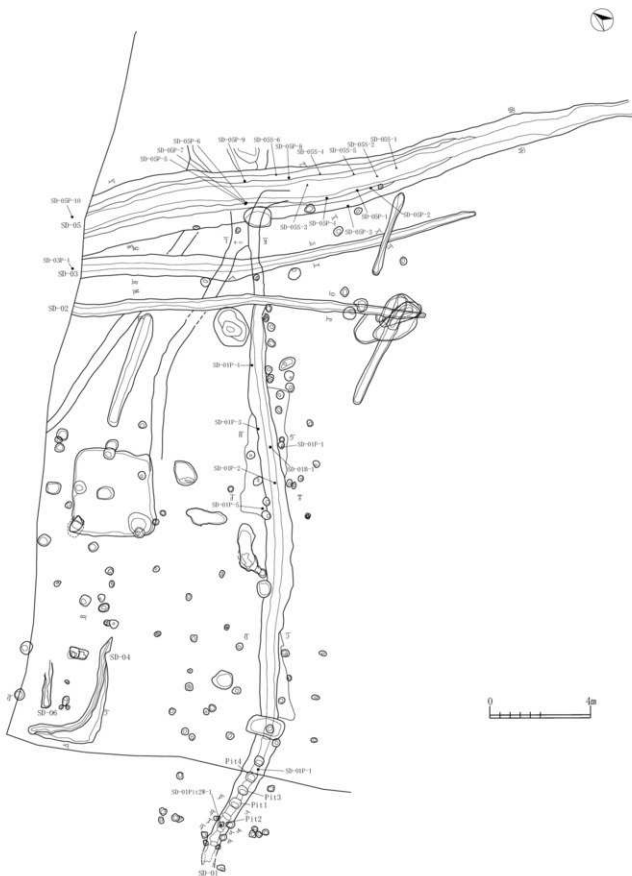
SD-01~06  
S=1/150

图 1-381 H区 SD-1



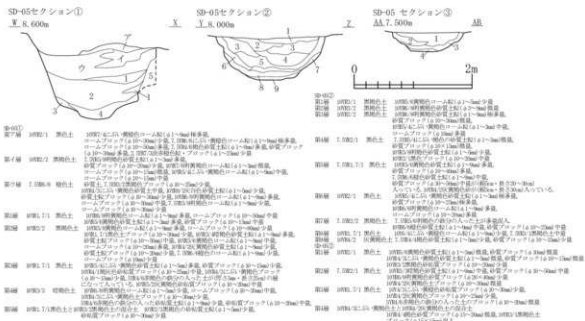


図 1-383 H区 SD-3

である。

SF-02は、調査区外からSD-05方向にほぼ東西軸で走っている。断続的な確認ではあるがSF-01と同様にSD-05と重複する位置までは伸びているようである。検出部分の長さは10.5m、幅は30-52cmを測る。

## 8. 溝跡

### SD-01 (図1-381、382、390)

調査区中央-東側にかけて検出した。幅53-155cm、深さ5-55cm、長さ27.1mを測る。東隅にコーナーがあり、南西方向に角度を変えている。断面形は主に緩やかに立ち上がる形態で、一段段状に立ち上がる。斜面上部には柱穴列が伴っており、溝というより塀の可能性もある。図示した資料は縄文土器片で、遺構に帰属しない。

### SD-02 (図1-381、382)

調査区東側H-1区で検出した。調査区内では幅25-35cm、深さ16-31cm、長さ23.6mを測る。ほぼコンターラインに沿う形である。南隅で端点があるが、北側は調査区外の現在の用水、さらにはG区側に伸びており、G区ではSD-64が本遺構の延長線上の遺構と認定できる。双方の調査区の検出部分をつなげた長さは約27mほどである。

### SD-03 (図1-381、382)

調査区東側H-1区で検出した。調査区内では幅37-95cm、深さ23-82cm、長さ15.6mを測る。SD-02同様南隅に端点があり、流路も途中までコンターラインに平行する形である

が、南側は斜面下方に軸線を変えている。本遺構も北側のG区側に伸びているが、延長線上に該当するのはSD-62が相当する。しかしながら、後述するSD-05の延長部についてもSD-62が相当している。SD-62は南端の流路が窄まった形で、SD-03と比較できるが、中層迄の埋没時に再掘削され利用されており、SD-03とSD-05については新旧の流路という可能性も残る。残念ながら交差地点が現代の用水によって切られている為、用水上に別流路の存在の可能性も含め、具体的な検証には至れない。仮にSD-62の検出部分からSD-03までの長さは約57.2mになる。

### SD-04 (図1-325、381、382)

G区で掲載したSBa-01の雨落ち溝としてH-1区内で検出。幅12-46cm、深さ9-13cm、長さ7mを測る。

SD-07



SD-08

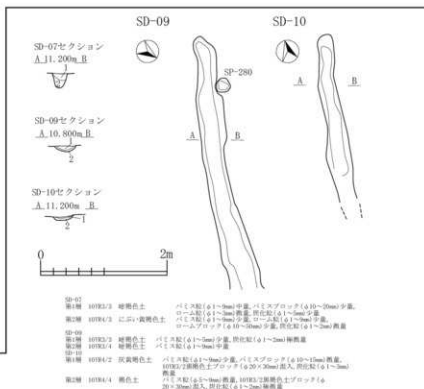
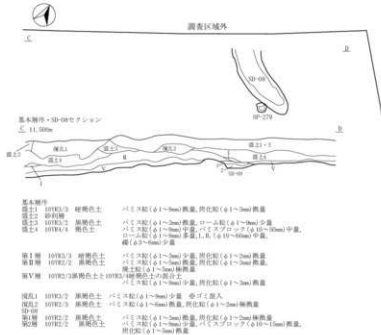


図 1-384 H区 SD-4

3.3~4.3 cm、深さ6~8 cmを測る。

SD-07 (図1-384)

調査区中央H-2区で断続的に検出した。幅2.2~5.3 cm、深さ2.3 cm、長さ16.6 mを測る。SD-10やSTP-08・10などと平行した配置となっており、コンターラインに沿った構築である。

SD-08 (図1-384)

調査区中央北端H-2区で検出した。北側が調査区外に延びており、検出部分での規模は幅4.8~7.3 cm、深さ1.7 cm、長さ2 mを測る。周辺に掘立柱建物があり、SD-04同様雨落ち溝の可能性もある。

SD-09 (図1-384)

調査区中央H-2区で検出した。東側が調査区外

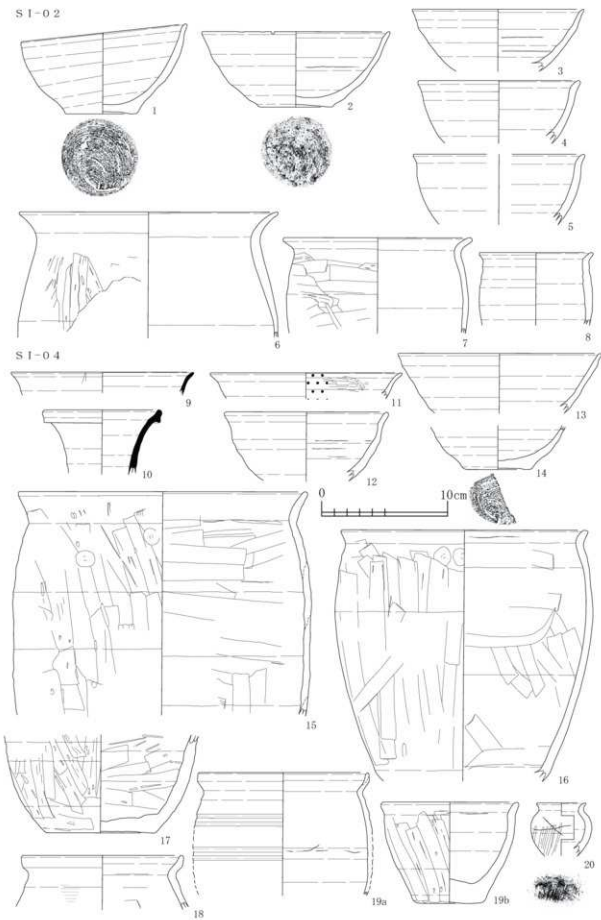


图 1-385 H区 S1 出土遗物 -1

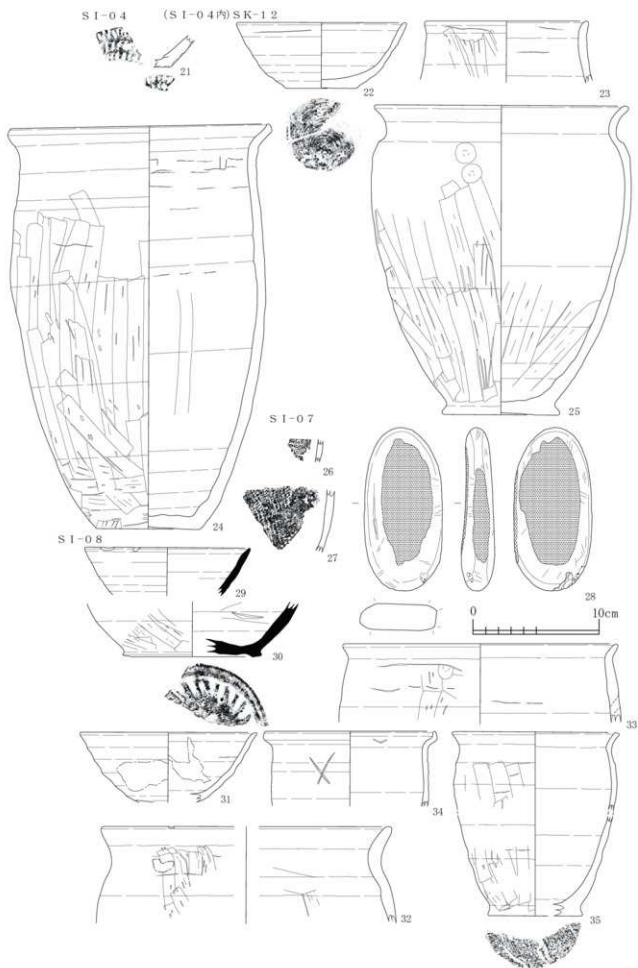


図 1-386 H区 SI出土遺物-2

S1-09

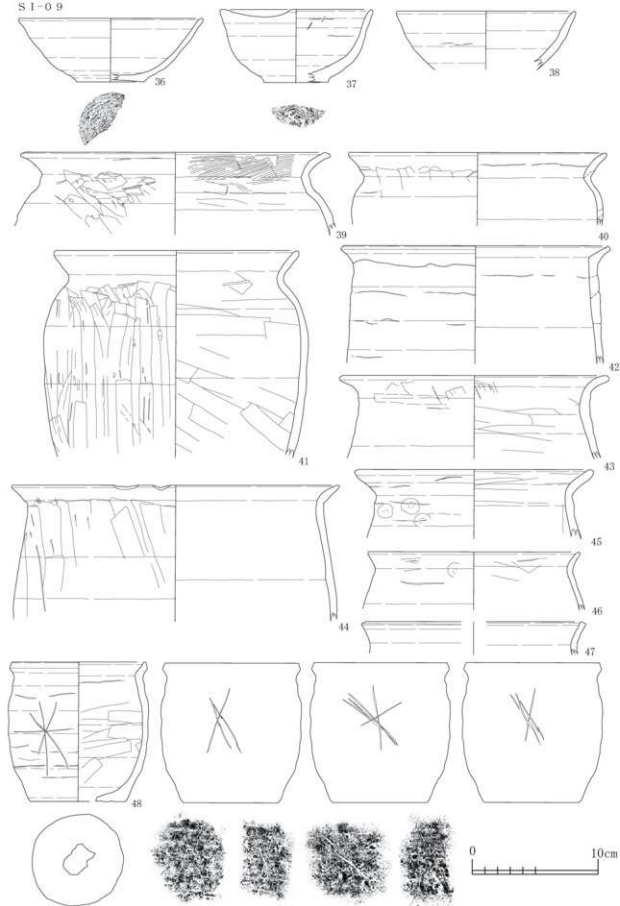
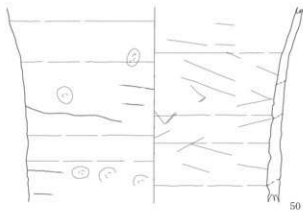
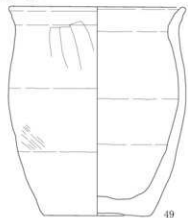


图 1-387 H区 S1 出土遺物 -3

S1-09



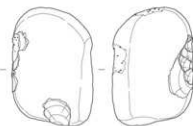
0 10cm

0 5cm

53/2/2



53



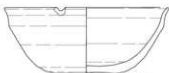
54



S1-10



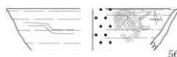
55



58



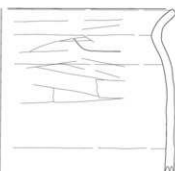
59



56



57



60

図 1-388 H区 S1 出土遺物-4



S1-10

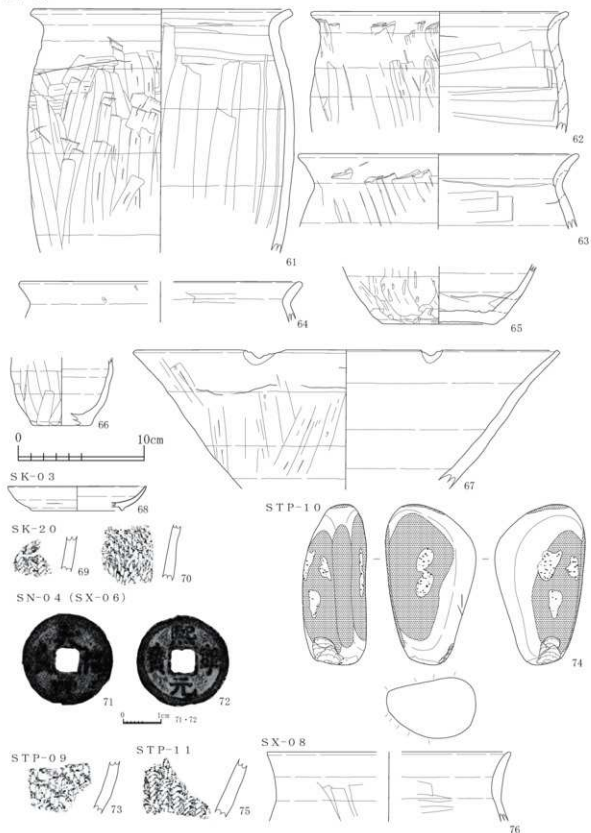


図1-389 H区 S1 出土遺物 -SK・SN・STP・SX 出土遺物

へ延びており、検出部分での規模は幅30～51cm、深さ8cm、長さ4.1mを測る。

SD-10 (図1-384)

調査区中央H-2区で検出した。SD-07で記述

したが、本遺構と平行しており、本遺構の検出部分周辺のコンターラインとは合致しないが、SD-07を基軸とした関連遺構としての位置づけが考慮できる。検出部分の規模は幅24～38cm、深さ7cm、長さ2.9mである。

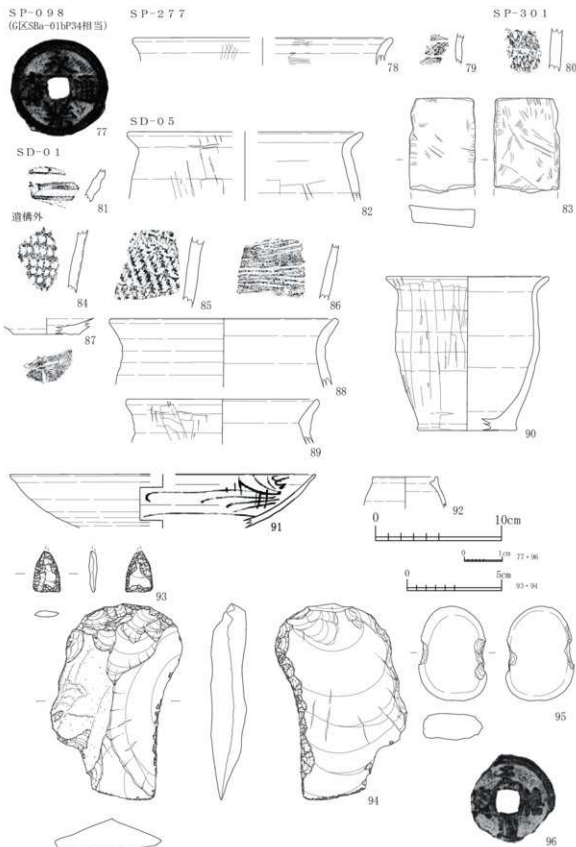


図 1-390 H区 SP・SD・遺構外出土遺物

第2節 遺構外出土遺物 (図1-390)

13点図示した。内訳は縄文土器片3点、土師器4点、陶器2点、石鏃1点、不定形石器1点、石錘1点、古銭1点である。土器は全般的に摩耗してお

り、90以外は残存率が低い資料中心で、古銭は北宋銭の天禧通寶である。

## 第Ⅸ章 I区

H区の南側約3,889.7mを調査した。平成20年度に中央及び道路側3,448.9m、平成21年度に南西側の残地部分440.8mを調査している。I区の東側の地点では、試掘・確認調査時には調査対称地点が制限され、現地が削平されていたことから遺構が存在しないものと推定し、遺跡範囲から除外していたが、調査の結果、削平部分にもS1-001・002等の遺構が残存することが判明し、平成20年6月に遺跡範囲変更を行ない削平部分も包蔵地範囲としている（青教文第349号）。

地形的には、北側のH区と連続した地形で、遺構の構成についても緊接建物等は連続した配置である。しかし、G・H区で見られた掘立柱建物跡や区画的な溝跡などは本調査区内では検出しておらず、中世以降の様相は土坑墓であるSK-004の検出程度にとどまっている。

地形は調査区西側の部分が標高が高く標高11.8m程で、南東→東方向にやや勾配を持ち傾斜している。斜面下方の標高は6.7mである。

なお、遺構番号は隣接するH区の遺構名と区分するため数字部分を3桁とし、S1-001のように表記している。

### 第1節 検出遺構と出土遺物

#### 1. 竪穴住居跡・竪穴遺構

S1-001（図1-392～394,449）

調査区の東側で検出した。STP-002と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は台形を呈し、規模は487×485×32cmを測り、主軸はN-101°-Eである。壁溝は全周しており、斜面下方に相当する東→北東→北側にかけて掘り方の掘り込みが深い。

ピットは15基検出しているが、主柱穴として機能したと考えられるピットはPit1・7-10で、南西側から主柱穴に相当するピットは検出していない。北壁と東壁には壁際に壁柱穴があり、斜面下方の壁立に際し、補助的な柱を設置しているようである。また、Pit1と7、Pit8と10の関係のように柱穴の配置替えが行われており、建替の可能性がある。

壁際に第9-13層の堆積が完了した後に中央の床面→壁際の堆積土層にB-Tm火山灰が混入する土層の堆積が見られる。Pit1・3・4の堆積土からT-o火山灰を検出していることからT-o火山灰降灰後、B-Tm火山灰降灰前に廃絶した竪穴建物という取扱になる。壁際を中心に炭化材を

検出し、中央の堆積土中からも炭化物・炭化材を検出しているが、床面の被熱はほとんど無く、壁際の炭化材が中央の堆積の際に流動した可能性が考えられる。本遺構は厳密な意味での焼失住居では無く、廃絶後の清掃に伴う一部燃焼が伴った可能性がある。

カマドは、東壁3の位置から検出した。袖幅124cm、煙道長135cmを測る。構造は調査時の残存状況としては半地下式にも見えるが、煙出部は別に掘削しており、竪穴側から延びる煙道と連結した構築方法であることから、元々は地下式として構築された可能性が高い。その為、煙出部分は煙道の軸線から北東寄りの向きに構築されており、断面形は袋状を呈している。

出土遺物は7点図示した。内黒の有台椀は第7層出土の資料で、体部下半→脚部にかけての残存である。第7層からは底部側が主に剥落している無台椀の2やカマド前庭部側の破片と接合関係が認められた6（口唇部に打欠があり、油痕が認められ灯明使用の可能性が高い。口径13.2cm、器高6.2cm、底径5.8cm、器高指数46.9、底径指数43.9）、非クロコ甕3の破片などが出土しているが、廃棄時以降の流動の要因が高い。Pit5第2層出土の小壺である5は、口径10.4cm、器高12.3cm、底径7.2cmを測る。球銅気味の器形で、頸部と体部の区画が明瞭である。底面→外面全体および内面口縁部をヘラミガキにより調整されており、外面は一部ヘラの幅が広い工具でもヘラ削り状に調整されている。頸部を肥厚察せ、口唇端部を丸みを帯びさせ軽く外反させている。

S1-002（図1-395・396,449・450）

調査区の北東側で検出した。SX-001と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は不整形円形を呈し、600×537×58cmを測る。H区S1-003、そして本調査区内SX-001・002同様、方形ではない不整形の掘り込みであるが、本遺構内からはピットを検出している。しかしながら、柱穴として明瞭に機能したと認定できるものは無く、中央付近に位置するPit4には土層注記上では焼土層を検出したと記録されているが、者記録写真を確認したところ焼土ブロックと炭化材が一部混入する堆積層で、炉跡の可能性はない。同様に炭化物の検出が記録されているが、粒度の細かい炭化物が少量まとまった範囲が記録されているのみで、本遺構内での焼失や焼成等の要因では無く、落ち込みに廃棄されたブロックの中に入っている焼土ブロックが記録されたものである。

新城平岡(4) 1区遺構配置図 1/400

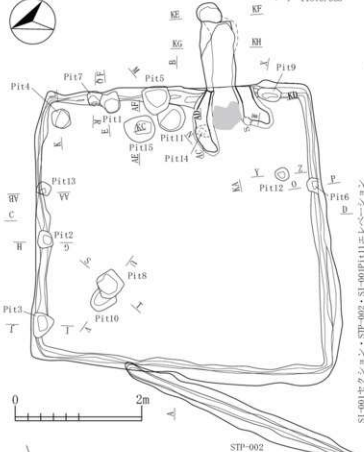


図 1-391 | 1区遺構配置図

SI-001



X= 91926.836  
Y=11875.636



X= 91932.844  
Y=11881.633  
SI-001セクション  
C. 10.700m



SI-001

第1層 10YR1.7/1 黒褐色土

バニス灰(φ1~2m)少量, 横土粒(φ1~2m)少量, 炭化粒(φ1~2m)少量

第2層 10YR3/1 黒褐色土

バニス灰(φ1~5m)少量, 横土粒(φ1~2m)少量, 炭化粒(φ1~2m)少量

第3層 10YR3/3 暗褐色土

バニス灰(φ1~9m)中量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 横土粒(φ1~5m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量混入

第4層 10YR3/2 黒褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量, 火山灰(非-Tr)少量混入

第5層 10YR3/1 黒褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量, 火山灰(非-Tr)少量混入

第6層 10YR3/3 暗褐色土

バニス灰(φ1~9m)中量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 横土粒(φ1~5m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 炭化粒(φ10~30m)中量, 火山灰(非-Tr)中量混入

第8層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, バニスブロック(φ10~30m)中量, 炭化粒(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第9層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量, 火山灰(非-Tr)少量混入

第10層 10YR3/1 黒褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~9m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第11層 10YR3/2 暗褐色土

バニス灰(φ1~9m)中量, バニスブロック(φ10m-K)混入, 横土粒(φ1~2m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第12層 10YR5/4 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)中量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第13層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~2m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量, 火山灰(非-Tr)少量混入

第14層 10YR5/4 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~9m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第15層 10YR5/4 にぶい黄褐色土

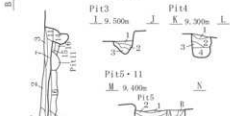
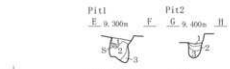
バニス灰(φ1~9m)少量, 横土粒(φ1~9m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第16層 10YR4/4 暗褐色土

バニス灰(φ1~9m)少量, バニスブロック(φ10~30m)少量, 横土粒(φ1~3m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量

第17層 10YR4/3 にぶい黄褐色土

バニス灰(φ1~9m)中量, バニスブロック(φ10~30m)中量, 横土粒(φ1~9m)少量, 炭化粒(φ1~9m)少量



SI-001 Pit1  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit2  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit3  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit4  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit5  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit6  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit7  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit8  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit9  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit10  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit11  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit12  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit13  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit14  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit15  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

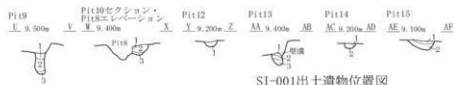
SI-001 Pit16  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit17  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

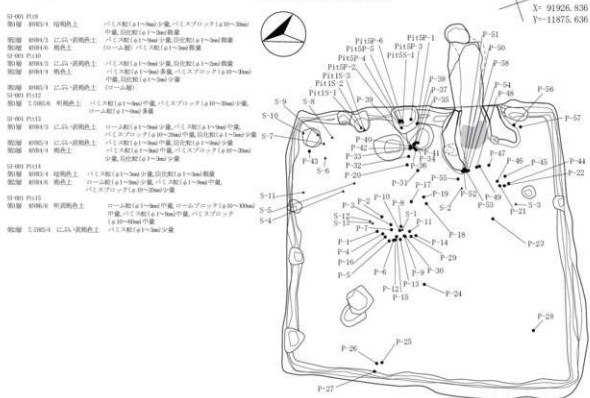
SI-001 Pit18  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

SI-001 Pit19  
第1層 10YR3/4 暗褐色土  
バニス灰(φ1~2m)少量, バニスブロック(φ10~15m)少量, 炭化粒(φ1~9m)中量, 火山灰(非-Tr)少量

図 1-392 I 区 SI-001-1

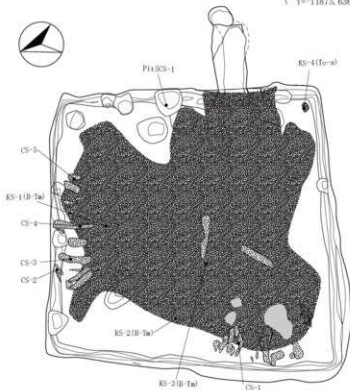


SI-001出土遺物位置図



SI-001焼土・炭化物・火山灰範囲

X= 91926.836  
Y=11875.636



SI-001掘り方

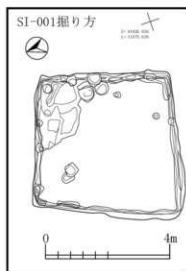
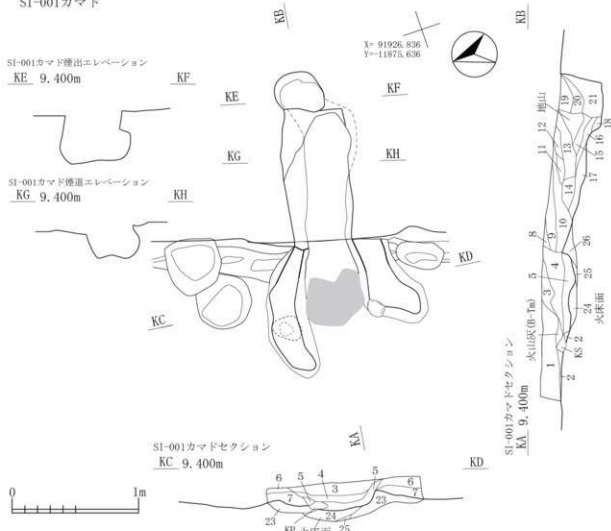


図 1-393 | 区 SI-001-2

SI-001カマド



- SI-001カマド
- 第1層 10YR2/1 黒色土
- 第2層 10YR3/2 黒褐色土
- 第3層 10YR2/1 黒褐色土
- 第4層 10YR3/4 暗褐色土
- 第5層 7.5YR4/3 褐色土
- 第6層 10YR3/2 暗褐色土
- 第7層 10YR3/3 暗褐色土
- 第8層 10YR3/2 暗褐色土
- 第9層 7.5YR5/4 に近い褐色土
- 第10層 10YR3/3 暗褐色土
- 第11層 10YR2/2 暗褐色土
- 第12層 10YR2/2 暗褐色土
- 第13層 10YR2/2 暗褐色土
- 第14層 10YR3/3 暗褐色土
- 第15層 10YR2/2 暗褐色土
- 第16層 10YR3/3 暗褐色土
- 第17層 7.5YR3/3 暗褐色土
- 第18層 10YR5/4 に近い黄褐色土
- 第19層 7.5YR5/6 明褐色土
- 第20層 10YR4/4 褐色土
- 第21層 10YR2/3 暗褐色土
- 第22層 7.5YR4/3 褐色土
- 第24層 5YR4/8 赤褐色土
- 第25層 7.5YR5/4 に近い褐色土
- 第26層 7.5YR3/1 暗褐色土

- パミス灰(φ1~5mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量,火山灰(B-To)少量混入
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,火山灰(B-To)(φ1~100μ)混入
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~6mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,焼土ブロック(φ10~20mm)混入
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~2mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,10YR2/2同定土シラス(φ1~40μ)中量
- パミス灰(φ1~4mm)中量,炭化灰(φ1~3mm)中量,焼土粒(φ1~9mm)少量
- パミス灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量,パミス灰(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~20mm)中量,炭化灰(φ1~5mm)中量,火山灰(B-To)(φ1~50μ)中量
- パミス灰(φ1~9mm)中量,パミスブロック(φ10~20mm)中量
- パミス灰(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~20mm)少量,炭化灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)中量
- パミス灰(φ1~3mm)少量,炭化灰(φ1~2mm)少量,パミス灰(φ1~5mm)少量,パミスブロック(φ10~40mm)中量,炭化灰(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ10~50μ)中量
- パミス灰(φ1~2mm)少量,炭化灰(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)中量,焼土ブロック(φ10~20mm)少量(パミス)
- パミス灰(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~2mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)中量,火山灰(B-To)(φ10~30μ)少量
- パミス灰(φ1~5mm)少量
- パミス灰(φ1~5mm)少量,炭化灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)中量,焼土ブロック(φ10~20mm)少量
- パミス灰(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~20mm)少量,炭化灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
- パミス灰(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~3mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)少量
- パミス灰(φ1~9mm)少量,炭化灰(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~9mm)中量,炭化灰(φ1~9mm)少量

SI-001カマド出土遺物位置図

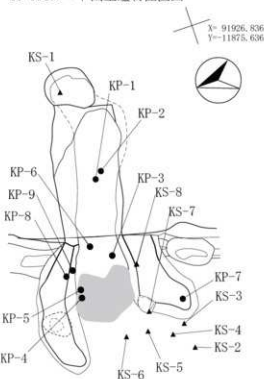
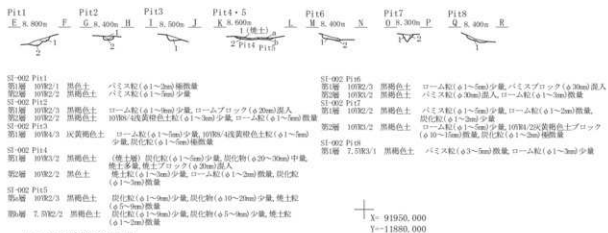


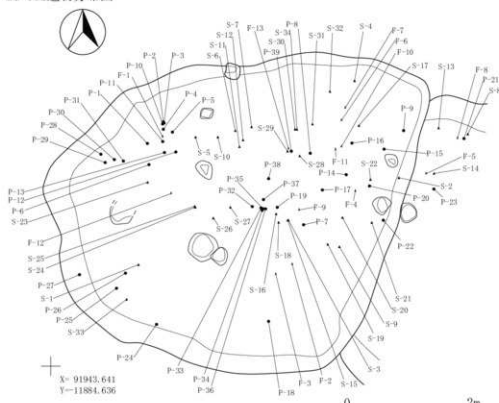
図 1-394 Ⅰ区 SI-001-3







SI-002遺物分布図



SI-002炭化物・焼土範囲

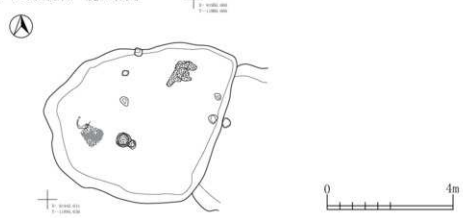


図 1-396 | 区 SI-002-2

出土遺物は9点図示したが、砕片が多く、縄文時代から古代の資料が混合した状態で出土している。SX-001寄りの下層から近代以降の染付が出土している。

SI-003 (図1-397～402, 450～452)

調査区西側で検出した。方形を呈し、473×461×17cmを測る。主軸はN-137°-Eである。また、南壁東隅から192×173×32cmを測る不整形の浅い土坑状の突出部を検出し、調査時には堅穴建物の張出部として精査している。土層観察ベルトの残存状況が明確な新旧関係の把握がなされていない為、不明瞭であるが、張出部の第F-H層の堆積は本遺構に、それ以外の土層はその前段階に存在した別な土坑状の掘り込みであると考える。出土遺物について張出部という取扱で取り上げられている破片の中に堅穴内から出土した資料と接合した事から掲載に際しては本遺構の資料として取り扱った。

本遺構はカマドが2基あり、新旧関係が存在し、柱穴についても段階を示すビット配置が認められることから、建替が行われたと考えられる。ビットは15基検出したが、そのうち主柱穴として機能したと考えられるビットはPit3・4・7・11・12・13で、旧段階はPit3・4・7・12、新段階ではPit3・4・11・13が機能したと考えられる。壁溝は全周し、棒状の木材が刺さっていたような落ち込みを断続的に検出し、Pit1・15のような補助的な柱底もある。掘り方についても建替の際に床を嵩上げた形跡などが見られないが、出土遺物の中にPitの埋土と掘り方の遺物に接合関係が認められることから、建替時に一部掘り方の再掘削に伴い、カマド側の柱穴の変更とカマドの配置換程度での作業を行なっているようである。

また、本遺構は床面直上から多量の炭化材・物を検出し、壁溝の一部には腰板が突き刺さった状況で炭化して検出している箇所も確認出来た。倒壊した板壁の部材が組み合わされている様子なども部分的に検出したが、主柱穴に相当する位置本来あるべき柱が炭化した状態で検出はしていない。カマド2の部分主柱を抜き取りの後に板壁などの倒壊させた一部を廃棄のために焼成している可能性がある。

堆積土は20層に分層したが、掘り方の部分にもTora火山灰がブロック状に堆積しており、建物の焼成廃棄後の埋土中にもTora火山灰がブロック状に混入していることからTora火山灰降灰後に構築され、廃棄時点でもTora火山灰を含まれた土層を中心に埋め戻しが行われているようである。

カマドは新旧とも南壁側に設置されており、旧段

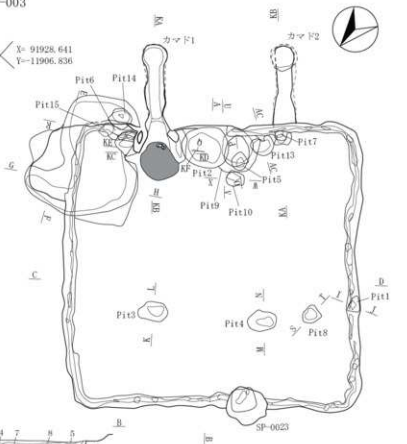
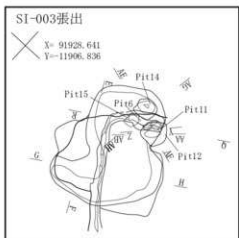
階が南3、新段階が南2の位置である。新段階のカマドは軸線を少し北寄りとしN-135°-Eで、軸部幅84cm、煙道長138cmを測る。旧段階のカマドと同様煙道側に向かって傾斜しているが煙出部手前で平坦になっており、煙出部はビット状の落ち込みはない。支脚として土師器甕底部3個体(42=KP-8、43=KP-8、41=KP-7[一部KP-5])、土師器椀1個体(40=KP-5)が重ねられている。

旧段階のものは主軸方位がN-137°-Eで、前底部・火床面は残存しておらず、煙道長は126cmを測る。構造は半地下式で、堅穴壁際の煙道部は床面から5cm程度比高差を持ち、煙道側に傾斜しながら延びる。煙出部はビット状に落ち込みがあり、奥壁側に向かって入り込んでいる。

出土遺物は30点図示した。貼床下層から出土した22の外面、床面等出土の甕29と張出出土の甕33の底面及びカマド1等出土の内黒椀の内面に刻線がある。食膳具のうち内黒の18は灯芯甕があり、灯明具として使用されている。全体形の追える資料のうち、24はPit9・貼床・張出下層から出土した接合資料で、口径13.0cm、器高5.9cm、底径5.2cm、器指指数45.4、底径指数40.0である。内外面とも二次被熱の影響で外面の剥落が顕著である。37はカマド1中層とPit2上層の接合資料で、口径12.6cm、器高5.7cm、底径5.4cm、器指指数45.2、底径指数42.8である。底部端部が突出した形状で、底径幅がやや広く、体部の膨らみが浅い。口縁部は端反である。39は、カマド中層とカマド2上層(煙出部分)の接合資料である土師器鉢で、口径15.2cm、器高7.4cm、底径7.0cm、器指指数48.7、底径指数46.1である。やや大ぶりの食膳具の規格と類似しているが、クロコ甕と同様の口縁部形状を呈する。二次被熱は認められるが、煤や炭化物等の付着は無く、煮炊具として使用された可能性は低い。また外面に墨書等はされていない。本資料と同様の資料はSI-007から出土しており、器高と底径に若干の差があるが口径が同一で、類似した胎土であることから、同時期の資料の可能性が高い。40はカマド支脚として利用されていた椀で口径14.0cm、器高5.2cm、底径5.8cm、器指指数37.1、底径指数41.4である。体部下半から開き気味に立ち上がり、口縁部も引き伸ばすように立ち上がらせている。煮炊具の中で全体形の追える資料は小甕のみで、29は上・中・下層、床面、覆土出土破片が接合した小甕で、口径13.8cm、器高21.1cm、底径8.0cmを測る。長胴で直立気味に立ち上がり、口径が最大径である。床面出土の30は口径14.2cm、器高16.2cm

SI-003

X=9128.641  
Y=11906.836



SI-003・SI-003 Pit2セクション



SI-003セクション



X=91931.344  
Y=11914.034

- SI-003 Pit2
- 第1層 10784/2 灰黄褐色土
- 第2層 10782/2 灰褐色土
- 第3層 7.0784/2 灰黄褐色土
- 第4層 10785/2 じいし・黄褐色土
- SI-002
- 第1層 10782/1 灰褐色土
- 第2層 10783/2 暗褐色土
- 第3層 10785/2 じいし・黄褐色土
- 第4層 10784/2 灰黄褐色土
- 第5層 7.0783/2 暗褐色土
- 第6層 10781/2 灰褐色土
- 第7層 10781/2 暗褐色土
- 第8層 10781/2 じいし・黄褐色土
- 第9層 10781/2 暗褐色土
- 第10層 10782/2 暗褐色土
- 第11層 10783/2 暗褐色土
- 第12層 7.0783/2 暗褐色土
- 第13層 10784/2 灰黄褐色土
- 第14層 10781/2 じいし・黄褐色土
- 第15層 10785/2 じいし・黄褐色土

- 第16層 7.0785/2 じいし・暗褐色土
- 第17層 10782/2 灰黄褐色土
- 第18層 7.0784/1 じいし・暗褐色土
- SI-003出土セクション
- 第1層 10785/2 じいし・黄褐色土
- 第2層 10782/2 灰黄褐色土
- 第3層 10783/2 じいし・黄褐色土
- 第4層 10785/2 じいし・黄褐色土
- 第5層 10783/2 暗褐色土
- 第6層 10782/2 灰黄褐色土
- 第7層 7.0785/2 暗褐色土
- 第8層 7.0784/2 灰褐色土
- 第9層 10784/2 じいし・黄褐色土
- SI-003出土セクション
- 第1層 10785/2 じいし・黄褐色土
- 第2層 10782/2 灰黄褐色土
- 第3層 10783/2 じいし・黄褐色土
- 第4層 10785/2 じいし・黄褐色土
- 第5層 10783/2 暗褐色土
- 第6層 10782/2 灰黄褐色土
- 第7層 7.0785/2 暗褐色土
- 第8層 7.0784/2 灰褐色土
- 第9層 10784/2 じいし・黄褐色土

図 1-397 Ⅰ区 SI-003-1

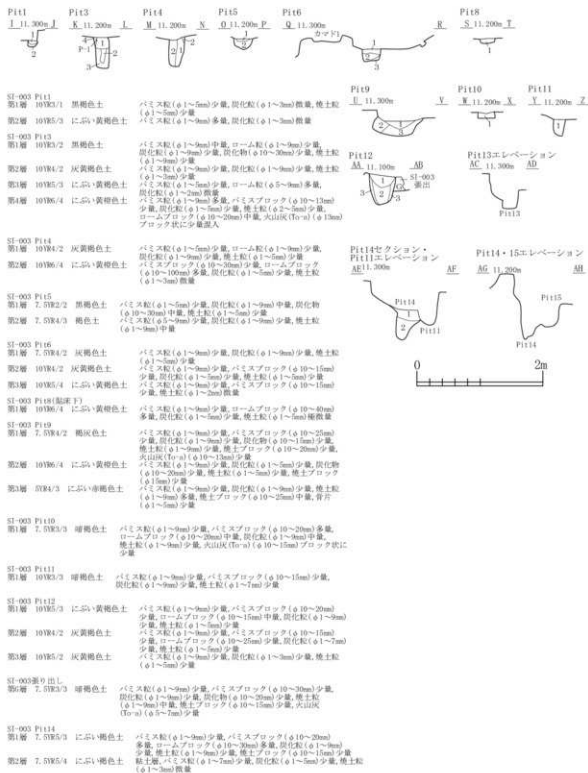
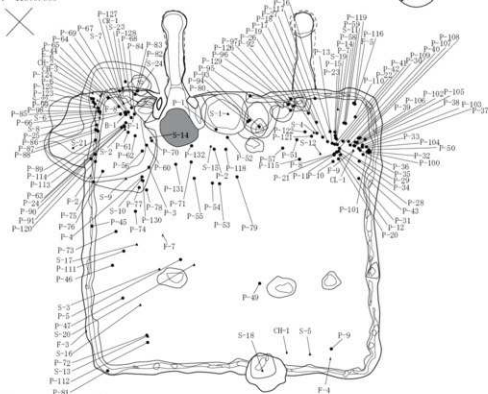


図 1-398 | 区 SI-003-2

SI-003遺物分布図1

X= 91928.641  
Y=11906.836



SI-003遺物分布図2

X= 91928.641  
Y=11906.836

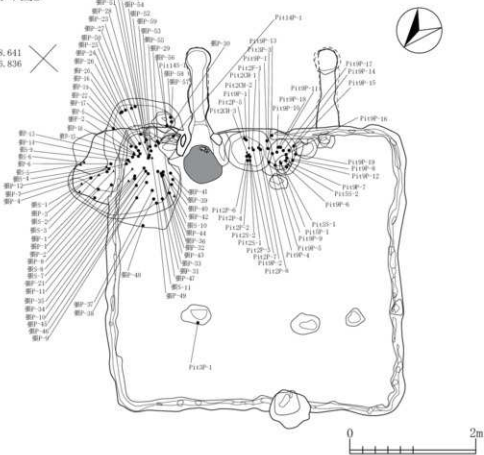
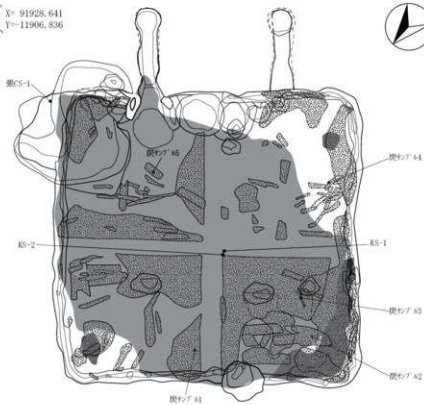


図 1-399 | 区 SI-003-3

SI-003炭化物・焼土範囲

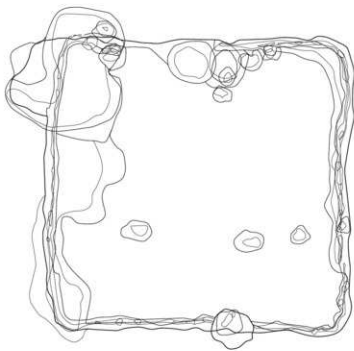
× X= 91928.641  
Y=11906.836



SI-003掘り方

× X= 91928.641  
Y=11906.836

× X= 91931.344  
Y=11914.034

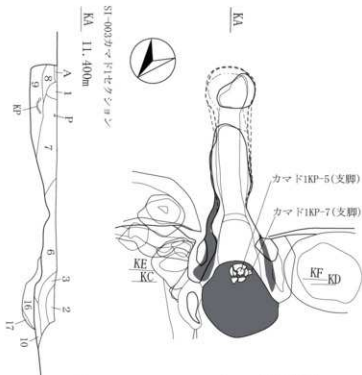


× X= 91931.344  
Y=11914.034

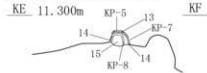


図 1-400 | 区 SI-003-4

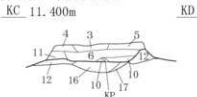
SI-003カマド1



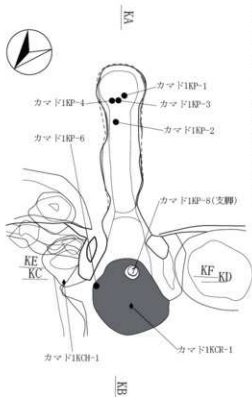
SI-003カマド1(支脚)セクション



SI-003カマド1セクション



SI-003カマド1出土遺物位置図

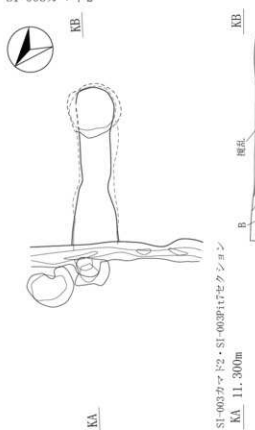


- SI-003カマド1
- 第1層 10YR7/6 明黄褐色土
  - 第2層 10YR3/3 暗褐色土
  - 第3層 10YR5/2 灰黄褐色土
  - 第4層 7.5YR4/2 灰褐色土
  - 第5層 10YR4/3 に近い黄褐色土
  - 第6層 7.5YR4/2 灰褐色土
  - 第7層 10YR5/3 に近い黄褐色土
  - 第8層 5YR3/1 黒褐色土
  - 第9層 7.5YR3/1 黒褐色土
  - 第10層 7.5YR5/1 黒褐色土
  - 第11層 7.5YR4/2 灰褐色土
  - 第12層 7.5YR5/4 に近い褐色土
  - 第13層 7.5YR4/3 褐色土
  - 第14層 7.5YR4/2 灰褐色土
  - 第15層 5YR4/4 に近い暗褐色土
  - 第16層 2.5YR5/8 明赤褐色土
  - 第17層 2.5YR6/6 褐色土

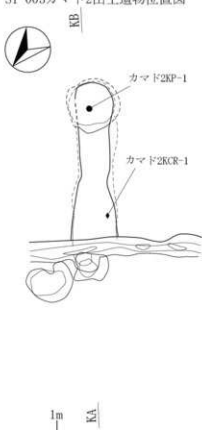
- パミス質 灰化灰(φ3mm)微量  
 パミス粒(φ1~5mm)少量、灰化灰(φ1~7mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ10~20mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)中量、灰化物(φ10~15mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)中量、焼土ブロック(φ10~20mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)多量、灰化物(φ10~20mm)中量、焼土粒(φ1~9mm)少量  
 パミス粒(φ5~7mm)微量、灰化灰(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)多量、焼土ブロック(φ10~20mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、パミスブロック(φ10~20mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)中量、焼土ブロック(φ10~15mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)中量、灰化物(φ10~15mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量、焼土ブロック(φ10~15mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量  
 パミス粒(φ1~9mm)少量、灰化灰(φ1~9mm)少量、焼土粒(φ1~9mm)少量  
 灰土層、灰化灰(φ1mm)微量  
 灰化灰(φ1~3mm)少量、焼土粒(φ1~2mm)少量  
 灰化灰(φ1~2mm)微量、焼土粒(φ1~5mm)少量  
 焼土の層、焼土粒(φ1~5mm)多量  
 (灰土層) パミスブロック(φ30mm)少量

図 1-401 Ⅰ区 SI-003-5

SI-003カマド2



SI-003カマド2出土遺物位置図



SI-003カマド2

取層 1005/3 にごみ・黄褐色土  
取層 1.006/2 黒褐色土  
取層 1.006/1 黒褐色土  
取層 1.006/0 黄褐色土  
取層 1.006/2 黒褐色土

パミス灰(φ1~5m)中層、炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ1~5m)少量、焼土ブロック(φ10~15m)多数、穴口灰(φ1m)多数(ブロック状に混入)  
パミス灰(φ1~5m)少量、炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ1~5m)中層、焼土ブロック(φ10~15m)多数、穴口灰(φ1m)少量(ブロック状に混入)  
パミス灰(φ5m)多数、炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ1~5m)中層  
パミス灰(φ5m)少量、炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ1~5m)中層、焼土ブロック(φ10~15m)多数、穴口灰(φ1m)少量(ブロック状に混入)  
炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ10~15m)中層、焼土(φ1~5m)少量、焼土ブロック(φ10~15m)多数

取層 1.005/3

にごみ・褐色土  
取層 1005/3 にごみ・黄褐色土

パミス灰(φ1~5m)中層、パミスブロック(φ10~15m)中層、ロームブロック(φ10~15m)多数、炭灰(φ1~5m)少量、炭灰(φ10~15m)少量、焼土(φ1~5m)少量、焼土ブロック(φ10~15m)少量、穴口灰(φ1m)少量(ブロック状に混入)  
ロームブロック(φ10~15m)少量、炭灰(φ10~15m)少量、パミス灰(φ1~5m)少量、パミスブロック(φ10~15m)少量、ロームブロック(φ10~15m)少量、炭灰(φ1~5m)少量、焼土(φ1~5m)少量

SI-003 Pit7

取層 1005/4 にごみ・黄褐色土

パミス灰(φ5m)多数、ローム(φ1~5m)多数、ロームブロック(φ5m)多数、炭灰(φ1~5m)多数

### 図 1-402 I X SI-003-6

m、底径7.4cmを測る。SI-001出土5と同様に球胴気味であるが、本資料は内面頸部に煮炊痕があり、煮炊具として利用されているようである。ヘラマガキは外面底部下半と内外面口縁部に留められており、外面体部は縦方向のヘラ削りである。底面は2.9同様無調整である。その他破片資料のうち、口縁部破片は2.5や3.2などの資料があるが、開き気味に立ち上がり、頸部幅が短くなるものが多い。2.7は底面に網状脈の木葉痕があるが、カマド支脚として利用された4.1~4.3は指ナデもしくはヘラによるナデによる調整である。

その他、3.5と3.6は床面などから出土した製塩土器破片で、3.6の資料は底面に疋目状圧痕が観察される。

### SI-004 (図 1-403 ~ 405, 452)

調査区西側で検出した。方形を呈し、3.72×3.57×3.2cmを測る。主軸はN-5.9°-Wである。北向きのカマドを持つ堅穴建物で、カマド設置

側にSX-01とした土坑状の掘り込みやピットなどが集中し、反対側には検出していない。壁溝も検出しておらず、掘り方部分の充填土を除去した時点でも柱穴に相当する痕跡は確認できていない。

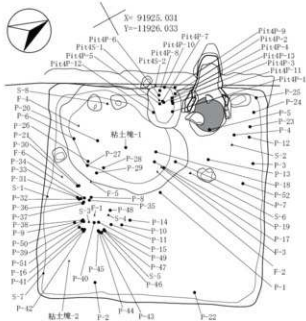
ピットは7基検出しており、主柱穴と認定できるピットはない。Pit4はカマド脇のピットとして遺物の廃棄主体の穴である。堆積土は1.8層に分層し、第1~1.4層が床面直上の堆積土である。ブロック主体の堆積で、壁際も一部崩落があるものの、複数の混合土が短期間の間に積み重なったような堆積状況であることから埋め戻し等による人為的な堆積状況である。床面直上に堆積する第1.3層中にもT-o-a火山灰がブロック状に堆積していることから廃絶時にT-o-aは降灰していたものと考えられる。

カマドは西3の位置から検出した。構造は半地下式で袖部幅7.9cm、煙道長5.6cmである。袖部の構築材として自然礫が使用されており、一部が火床面上から割れて出土している。また、支脚相当位置から自然礫が出土しており、平滑な面を天にして

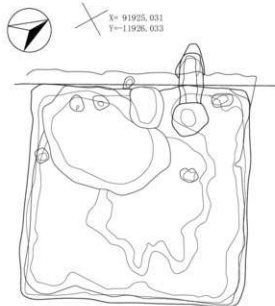




SI-004遺物出土位置図

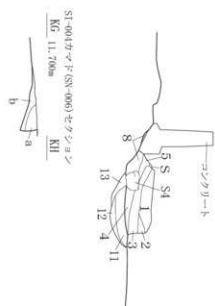
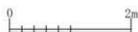


SI-004掘り方



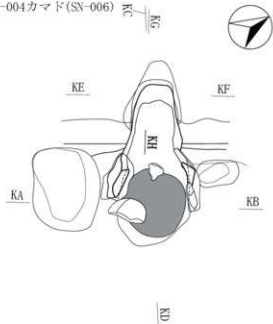
X=91922.031  
Y=11921.230

X=91922.031  
Y=11921.230



SI-004カマド(SN-006)セクション  
KC 12.100m

SI-004カマド(SN-006)



SI-004カマド(SN-006)セクション  
KE 11.700m KF

SI-004カマド(SN-006)セクション  
KA 12.100m KB

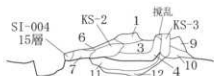
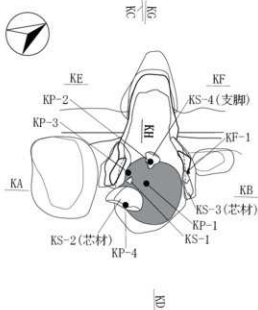
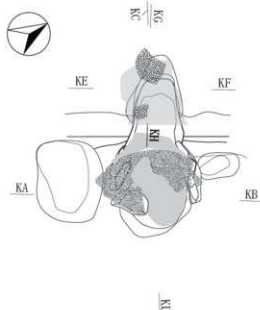


図 1-404 | 区 SI-004-2

SI-004カマド遺物出土位置図



SI-004カマド粘土・焼土・炭化物範囲図



SI-004カマド	層	出土品	説明
第1層	SI002	埴輪色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, パミズブロック (φ30~35mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第2層	SI003	にがい・黄褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) ブロック状 (断面: 最大φ3~5mm) 少量
第3層	SI004	灰黄褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 中量, パミズブロック (φ30~35mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第4層	SI005	褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) ブロック状 (断面: 最大φ3~5mm) 少量
第5層	SI006	にがい・黄褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第6層	SI007	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第7層	SI008	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第8層	SI009	にがい・黄褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第9層	SI010	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第10層	SI011	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第11層	SI012	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第12層	SI013	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第13層	SI014	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第14層	SI015	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第15層	SI016	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第16層	SI017	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第17層	SI018	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第18層	SI019	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第19層	SI020	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第20層	SI021	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第21層	SI022	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第22層	SI023	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量
第23層	SI024	赤褐色土	パミズ粒 (φ1~3mm) 少量, 灰化灰 (φ1~3mm) 少量, 焼土粒 (φ1~3mm) 少量

SI-004カマド掘り方

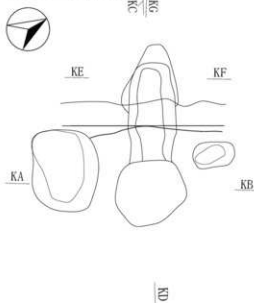


図 1-405 | 区 SI-004-3

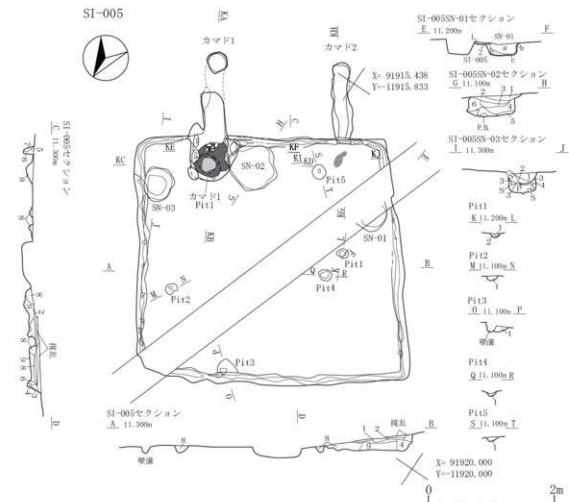
設置されている状況から、流動の要因は無く、支脚として原位置に残されていたものと判断した。

出土物は7点図示したが、ほとんどがカマド脇ピットに相当するPit 4からの出土である。47はPit 4第a層P-1出土の土師器碗で口径12.8cm、器高6.0cm、底径5.8cm、器高指数4.6.9、底径指数4.5.3である。内黒釉で、外面もミガキが行われているが、黒色処理はされていない。口縁部に打欠があり、外面体部に油痕の付着が顕著で、灯明具の可能性が考慮される。48はPit 4第c層P-7出土の土師器甕で口径17.4cmを測る。頭部の括れが甘く、外面体部の調整もルーズに輪積痕が撫で消されていない。内面体部にもやや細い工具による刻線が6条施されている。

50はPit 4第d層及び床面出土の接合資料の土師器小甕で口径11.2cm、器高11.3cm、底径6.6cmを測る。体部中半からやや下方の位置に最大径があり、口縁部は短頸である。底面はヘラによる調整である。51は床面出土の土師器小甕体部下半―底部にかけての資料で、底面は平行脈の木葉痕である。その他破片の為図示はしていないが、製塩土器の破片が床面から出土している。出土位置の記録したもののうちP-15・16・20・26・37、39-45・47・48・50・51が該当し、集中した出土状況である。

SI-005 (図1-406~410, 453)

調査区西側で検出した。調査前に建っていた旧跡



SI-005 第1層 10181/3 二灰・黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)多数,バシスブロック(φ10~20cm)少量,ローム状(φ5~10cm)中量,石灰粒(φ1~5mm)少量,腐土(φ1~2cm)散見
第2層 10181/2 黒色土	腐土,硝子土(φ1~2cm)散見
第3層 10181/1 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第4層 10180/2 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第5層 7, 10181/2 黄色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第6層 10180/3 暗褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見,硝子ブロック(φ10~20cm)散見
第7層 10180/4 暗黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第8層 10180/5 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見,硝子ブロック(φ10~20cm)散見
第9層 10180/6 黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 Pit1 第1層 10181/4 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量
第2層 10181/5 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 Pit2 第1層 10181/4 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量
第2層 10181/5 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 Pit3 第1層 10181/4 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量
第2層 10181/5 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 Pit4 第1層 10181/4 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量
第2層 10181/5 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 Pit5 第1層 10181/3 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシス状(φ1~3cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量
第2層 10181/4 二灰・黄褐色土	ローム状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見

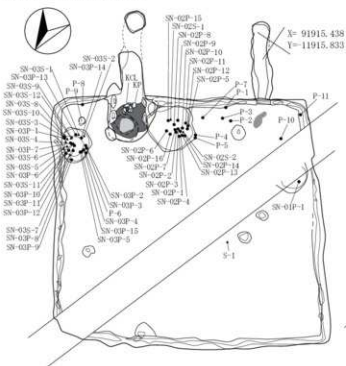
SI-005 05-01 第1層 10180/3 二灰・黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)中量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第2層 10180/4 赤褐色土	硝子土,石灰粒(φ1~5mm)少量
第3層 10180/5 赤褐色土	硝子土
第4層 7, 10180/5 赤褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第5層 10180/2 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第6層 10180/3 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第7層 10180/4 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第8層 10180/5 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第9層 10180/6 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第10層 10180/7 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 05-02 第1層 10180/3 二灰・黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)中量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第2層 10180/4 赤褐色土	硝子土,石灰粒(φ1~5mm)少量
第3層 10180/5 赤褐色土	硝子土
第4層 7, 10180/5 赤褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第5層 10180/2 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第6層 10180/3 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第7層 10180/4 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第8層 10180/5 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第9層 10180/6 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第10層 10180/7 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
SI-005 05-03 第1層 10180/3 二灰・黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)中量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第2層 10180/4 赤褐色土	硝子土,石灰粒(φ1~5mm)少量
第3層 10180/5 赤褐色土	硝子土
第4層 7, 10180/5 赤褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第5層 10180/2 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第6層 10180/3 黒褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第7層 10180/4 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第8層 10180/5 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第9層 10180/6 褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見
第10層 10180/7 灰黄褐色土	バシス状(φ1~3cm)少量,バシスブロック(φ10~20cm)少量,石灰粒(φ1~5mm)少量,硝子土(φ1~2cm)散見

図 1-406 | 区 SI-005-1

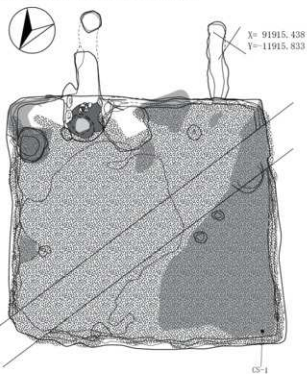
舎の建物基礎があり、残存状況が悪い。平面形は方角を呈し、430×392×7cmを測る。主軸はN-14 8°-Eである。本遺構はSI-003と同様に南壁側にカマドを2基構築しており、SI-003と同様東寄りのカマドが新しく西側のカマドが

古い。SI-003との比較では主軸が10°異なっているものの壁溝が全周する点やカマド脇庇の配置状況(SI-003Pit2とSI-005Pit2)や煙出側に傾斜するカマドの構造等が類似する一方、SI-005には主柱穴配置を検出して

SI-005遺物出土位置図



SI-005炭化物・焼土・粘土範囲



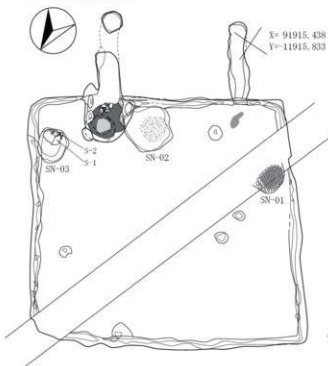
X=91920.000

Y=11920.000

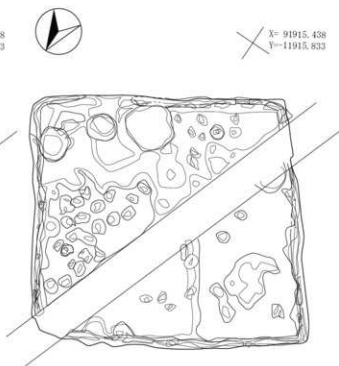
X=91920.000

Y=11920.000

SI-005 SN-01・02焼土・炭化物・灰範囲、  
SN-03遺物微細図

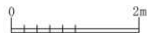


SI-005掘り方



X=91920.000

Y=11920.000



X=91920.000

Y=11920.000

図 1-407 | 区 SI-005-2

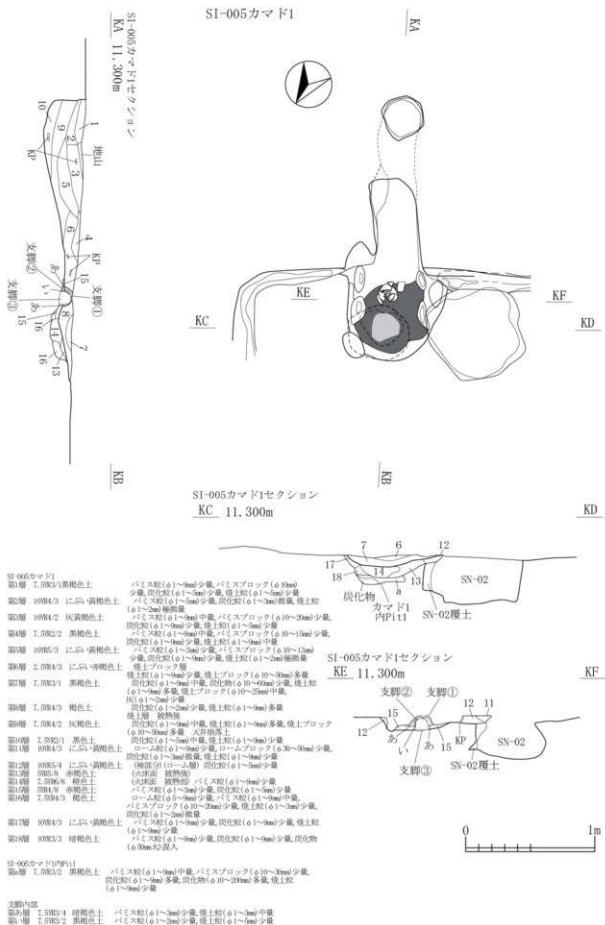
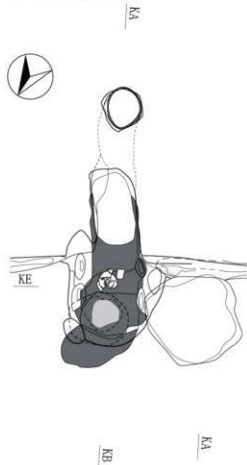
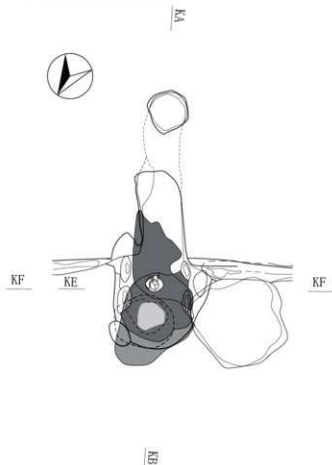


図 1-408 | 区 SI-005-3

SI-005カマド1焼土範囲図1



SI-005カマド1焼土範囲図2



SI-005カマド1遺物位置図

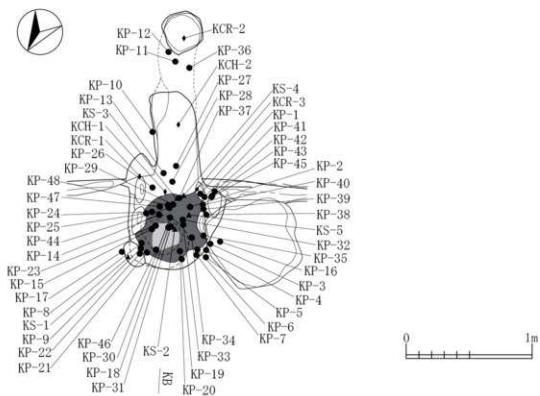


図 1-409 | 区 SI-005-4

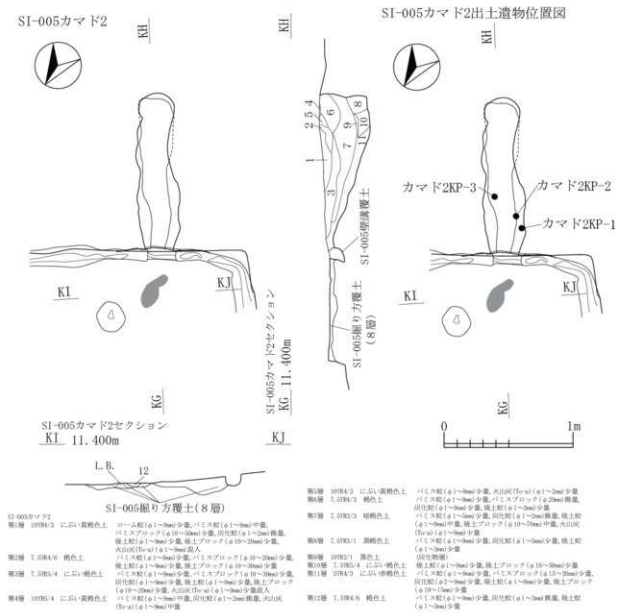


図 1-410 | 区 SI-005-5

いない点や堅穴内のSNとしたカマドの清掃物の廃棄ピットが伴っている点、掘り方の掘削痕を確認すると北側の部分に同軸の小区画状の掘り込みが確認でき、壁溝に関しても各壁で新旧二段階の変遷を検出している点などが差異である。SI-005の堆積土の残存状況が悪いので、限定的な確認であるが、掘り方に相当する第9層中からもT-0-a火山灰を検出しており、SI-003についても同様に掘り方からT-0-a火山灰を検出している点から、T-0-a火山灰降灰後の構築及び廃絶の可能性が高く、堅穴建物の変遷過程に差があるものの、最終段階で両遺構は併行していた可能性が高い。

ピットは5基検出しているが、前述のとおり主柱穴と認定できるピットは無く、SN-01-03としたカマド脇ピットに相当するカマドの清掃物の廃棄ピットを検出している。本遺構は床面直上から炭化粒・物、焼土ブロック等が混在する土層を検出し

ている。後世の二次的な破壊の影響もあり、明確に認定はできないが、焼成が伴った可能性がある。

カマドは旧段階は南4、新段階は南2の位置から検出している。新段階のカマドは構造が半地下式で、前庭部の遺存状況は悪いが、袖部幅7.4cm、煙道長13.4cmを測る。主軸はN-14.9°-Eで旧カマドよりも若干東寄りである。支脚相当位置に土師器小甕(支脚③=図1-453-65)の上に破片ともに須恵器环(支脚④=図1-453-60)が出土している。須恵器环について煤付着が認められ、一定量の焼成にさらされた可能性があるが、器壁に熱変性が認められないことから廃棄時の倒置の可能性もある。カマド出土の破片とSN-03出土破片とに接合関係が認められることからカマド廃絶時に廃棄や流動が発生している可能性がある。

旧段階のカマドは前庭部の構築材等の残存は無く、煙道部のみの残存で、煙道長は12.2cmを測



る。煙道の構造は地下式で崩落した堆積状況を呈している。前庭部の一部に焼土範囲が記録されているが、焼土ブロック層の検出範囲で火床面ではない。

出土遺物は14点図示した。60はカマド支脚相当位置から出土した須恵器環で口径14.4cm、器高5.7cm、底径5.8cm、器高指数40.4、底径指数41.1である。体部に膨らみを持ち口縁部は伸ばし上げるように外反させている。61はカマド第6層出土の土師器椀で、口径14.6cm、器高5.7cm、底径6.0cm、器高指数39.0、底径指数41.1である。器形には須恵器環と類似しているが、底径幅と内面の見込み部分が多い。煮炊具は全体の器形が追える資料が少ないが、床面直上出土の55とSN-02出土の56は口径が若干異なるが類似した器形で、頸部が長く、器壁が肥厚化している。カマド1の第6層や袖部及び床面などから出土した破片の接合資料である64は口径23.8cm測る。底部が欠損している為、全体形の詳細は不明であるが、口径と体部中央の径が近似した器形で、頸部の括れが明瞭である。小甕は口径8.2~14.6cm程度と幅があり、ロクロ使用のものが若干小さく、非ロクロのものも大きめの傾向がある。全体形わかるものはカマド支脚相当位置から出土した65のみで、口径10.8cm、器高10.5cm、底径6.6cmを測る。ロクロ使用で、須恵器環とは異なり、二次被熱が顕著である。66・67は旧段階のカマドから出土したロクロ小甕で、接合関係は認められなかったが、類似した器形・規格であると思われる。65と口径も近接しているが、体部中央が張るタイプで直立気味に立ち上がる65とは器形が異なる。

#### SI-006 (図1-411~414, 454・455)

調査区中央北側で検出した。Ⅰ区調査年(平成21年度)の前年度にH-Ⅰ区の調査時にSI-05として精査しているが、SI-006として精査した部分が大部分を占める為、本報告に際し、SI-006に統括して報告する。

平面形は方形に近い台形を呈し、568×553×51cmを測る。主軸はN-156°-Eである。

ピットは12基検出し、主柱穴と考えられるピットはPit1・3・8とH-SI-05Pit1で、カマド設置壁側に寄った柱穴配置となっている。Pit3に重複するSK-01がPit3の柱を抜き取った上で掘削・埋戻しが行われていることや、本遺構は壁際を中心に板壁に相当する炭化材を多量検出したが、SI-003と同様に主柱穴に相当する位置から炭化材の検出が認められなかったことなどから、本遺構で炭化材が多量に発生した焼成は、偶発的な焼失ではなく、廃棄時に主柱穴が転用された上

で、廃棄に伴う焼成が行われている可能性が高い。Pit2はカマド脇ピット、SK-01としたピット状の掘り込みは前述のとおり、廃絶前にPit3の柱穴の抜き取りの上に遺物や焼土ブロック等の廃棄に伴い埋没しており、焼成前には埋没している。

堆積層は18層に分層したが、上面が耕作による影響が強く、中一下層にかけてがプライマリーな堆積状況を呈している。床面直上に炭化材等を多く含む第12層の堆積が認められ、その上位にB-Tm火山灰を混入する第5層の堆積があり、B-Tm火山灰の二次的な混入が考慮される第2層が第5層の上位に堆積している。T-o-a火山灰はPit10の堆積土中に微量確認されているのみで、他の遺構のようにT-o-a火山灰が堆積土中に介在しない状況で、火山灰的にはT-o-a火山灰が降灰して一定時間経った上でB-Tm火山灰降灰前に廃絶が行われているようである。

掘り方を確認すると、西壁側の壁溝の掘り方とは異なる位置に長さ183cm、幅22cm程度の壁溝状の掘り方と浅い柱状の落ち込みを検出している。本遺構の構築前に小規模な堅穴建物が存在した可能性が考えられるが、部分的な検出で、検証できる検討要素が少なく不明である。

カマドは南3の位置から検出した。構造は地下式で、袖幅70cm、煙道長166cmを測る。袖部には芯材に竪を使用し、83に図示した支脚と81の土師器環底部などを組み合わせて支脚としている。煙道は堅穴床面から若干下がり、そこから緩やかに立ち上がった後、煙道中央付近で煙出口へ向かって軽く傾斜するがほとんど平坦に見える。奥壁は軽く袋状に入り込んでいる。

出土遺物は16点図示した。68と69は下層出土の資料で、68は口径12.8cm、器高6.5cm、底径5.8cm、器高指数50.8、底径指数45.3、69は口径13.2cm、器高5.2cm、底径5.6cm、器高指数39.4、底径指数5.6である。38が体部中央から緩やかに外反するのに対し、69は体部上半から若干開き気味に立ち上がっている。69の外面には刻線が観察される。70はSK-01とPit2から出土した破片の接合資料の椀で、口径13.8cm、器高5.9cm、底径5.6cm、器高指数42.8、底径40.6である。精緻な胎土で体部に稜段が顕著な焼成良品で、口唇部に打欠がある。69と同様に体部上半から外反させているが、若干深めに反り上げている。煮炊具のうち、全体形に分かる資料は小型の製品に限られる。73は下層出土のロクロ甕の図上復元資料で、口径15.2cm、器高(16.4)cm、底径6.4cmを測る。外面の二次被熱・剥落が顕著で、底面は回転糸切である。74は下層及び床面出

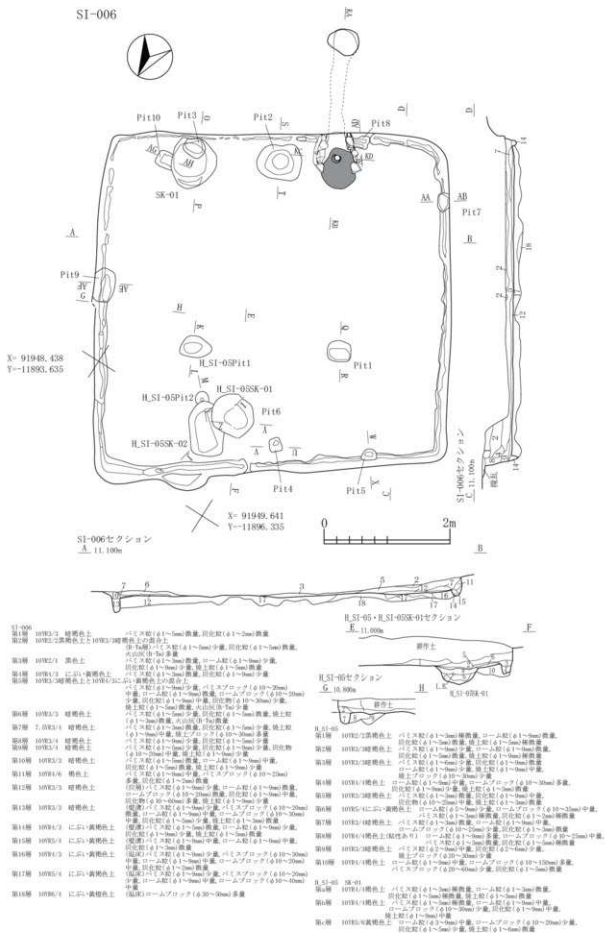


図 1-411 | 区 SI-006-1

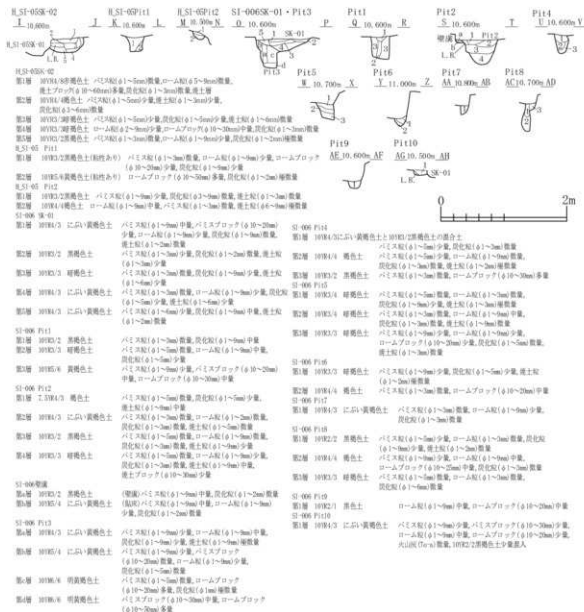


図 1-412 | Ⅰ区 SI-006-2

SI-006出土遺物位置図

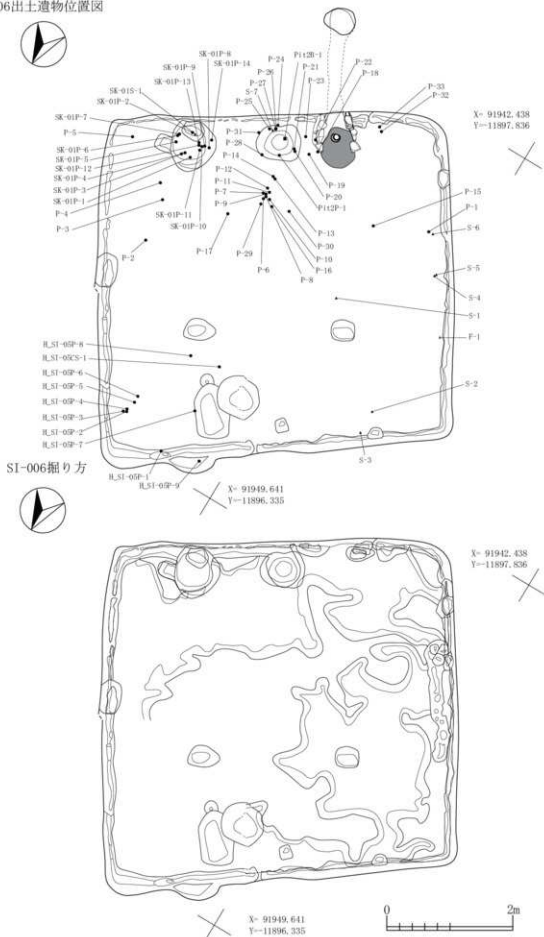


図 1-413 | 区 SI-006-3

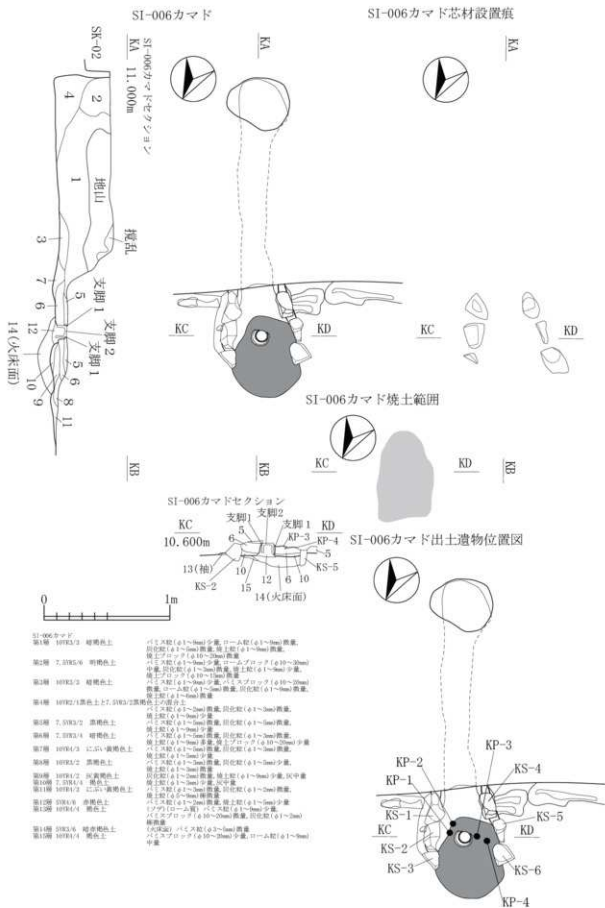


図 1-414 | 区 SI-006-4

土の接合したロクロ甕で、口径15.0cm、器高13.3cm、底径6.8cmを測る。73と同様に小甕の部類に入るような小型の規格である。体部に若干膨らみを持ち、口縁部は受け口上に内側を凹ませ内湾気味に立ち上げている。Pit9から出土したロクロ小甕である78は74と類似した規格であるが、若干小ぶりで口縁端部を面取りしている。また、下層・床面とSK-01出土破片の接合資料である79は、ロクロ小甕で、口径13.8cm、器高13.9cm、底径7.2cmを測る。体部中半に最大径があり、口唇分は丸みを帯びた形状である。外面体部、内面頸部直下に刻線がある。80は下層・床面とカマド中層の接合資料の土師器甕で口径24.8cmを測る。底部が欠損しているが、体部上半と口径がほぼ同じ位の資料で、頸部は短頸気味ではあるが、口縁部は外反が強い。外面体部のヘラによる調整は縦方向主体でありながらも斜め気味で、上半部は横方向の調整も加えられている。

#### S1-007 (図1-415・416,455)

調査区中央北側で検出した。S1-006と隣接した位置にある。平面形は方形を呈し、284×272×28cmを測る。主軸はN147°-Eである。

小型の竈穴で、ビットを3基検出したが、明確に主柱穴と考えられるビット無く、斜め方向に掘削されているPit1とPit2については柱穴の可能性はある。その他、カマド設置壁及び斜面下方には小規模な柱痕が5箇所検出している。その他、SKを付した土坑状の落ち込みをカマド設置壁の対面である北壁側から2箇所検出しており、SK-01については袋状に入り込む。壁溝は西壁側に部分的に検出したのみである。堆積土は10層に分層し、廃絶後に堆積している土層は第1～9層までである。掘り方はほぼ全面にあり、同一の土が充填されている。床面直上及び床面上にT0-a火山灰がブロック状に堆積しており、堆積土中層にB-Tm火山灰が多量混入して堆積しており、上位の第1層中にも二次堆積のB-Tm火山灰の堆積が認められる。T0-a火山灰は掘り方の充填土中には確認されておらず、床面上であるため、T0-a降灰時に床面に接する状況と、廃絶時点はB-Tm火山灰降灰前という状況で、隣接するS1-006と比較できる。カマドは南2の位置から検出した。構造は地下式で、袖幅77cm、煙道長103cmを測る。支脚は出土しておらず、袖部の構築材も粘土のみである。煙道に竈穴側から煙出側へ緩やかに傾斜し、ビットに掘りこまれた煙道と連結している。カマドからは底部が欠落した甕二個体分が出土しており、カマド前庭部と煙道の竈穴寄りの部分から出土した破

片が87で、煙出側から出土した資料が88である。

出土遺物は5点図示したが、前述の甕以外は破片資料が多い。全体形の分かる資料はカマド前庭部出土の86のみで、口径15.2cm、器高6.9cm、底径6.8cm、器高指数45.4、底径指数44.7である。S1-003からも類似の器形が出土しており、口径が同一で、その他の法量も近似した規格の資料である。87は前述のカマド前庭部と前庭部寄りの煙道から出土した甕で、口径21.8cmを測る。調整は一時調整の時点では口縁部付近まで行なっているが、頸部周辺を撫で消し、体部上半から下方にかけて縦方向のヘラによる削り調整である。口縁部が肥厚しており、口唇部が向上きに三角形に若干尖らせている。煙出側出土の88は23.0cmを測る。S1-006出土の80と類似した規格及び調整手法であるが、頸部の屈曲が本資料の方が「く」字状に顕著に作り出しているのと体部上半の横方向のヘラによる調整が部分的に留まっている点などが若干異なる。

#### S1-008 (図1-417～419,456)

調査区中央からやや西寄りの位置で検出した。S1-013、SK-004・005と重複しており、S1-013との重複部分は削平が著しい為、部分的な確認にとどまったが、本遺構の方が新しく、SK-004・005に対しては本遺構の方が古い。平面形は台形を呈し、376×372×24cmを測る。主軸はN126°-Wで、他の竈穴建物と軸線が異なる。ビットは残存部から12基検出したが、明確に主柱穴として機能したと認定できるビットはない。また、東壁側は床面精査時に確認したビット以外に掘り方時点で2基新たに確認しており、壁柱穴の一部である可能性がある。堆積土は15層に分層し、廃絶後の堆積土は第1～12層が相当する。床面直上部分にT0-a火山灰が微量堆積しているが、堆積土中にもT0-a火山灰が含まれている土層が多く、T0-a火山灰降灰後の堆積層が埋土に介在した可能性が高い。カマドは南西2の位置から検出した。左側がSK-004に切られている為詳細は不明であるが、残存部の袖幅は[62]cm、煙道長156cmを測る。構造は地下式で、煙出部へ向かって緩やかに傾斜する。煙出部分はS1-013の堆積層を切っている。しかしながら、田豚舎敷地内で削平されている部分が多いため、極めて限定的な確認に留まっている。

支脚として土師器小甕97が体部上半～底部にかけて倒伏して設置されていた。その前後から直径20cm程度の棒状の礎と扁平な礎が出土しており、カマド構築材の芯材の可能性もある。出土遺物は10点図示したが、破片資料主体で、全体形



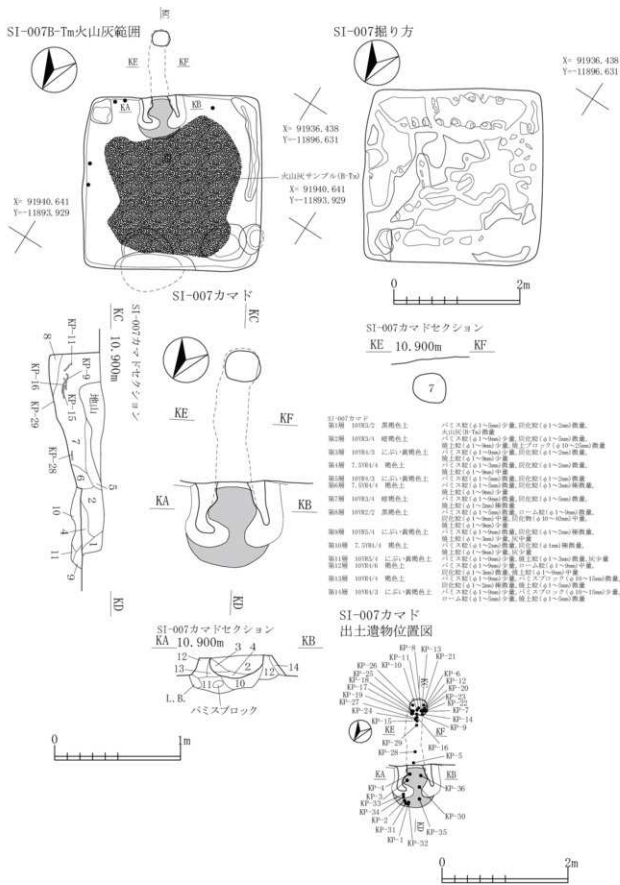
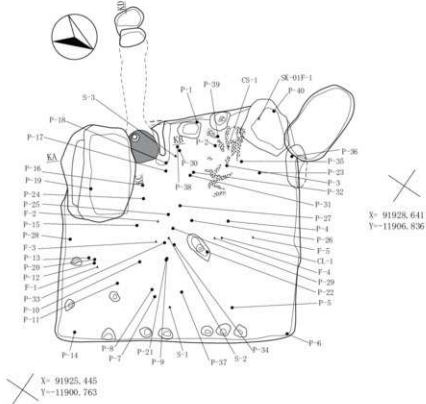


図 1-416 I 区 SI-007-2

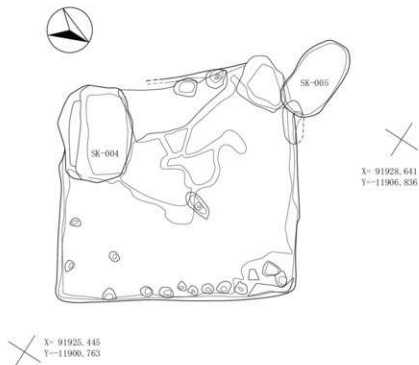




SI-008遺物出土位置図



SI-008掘り方





の追える資料は中層出土の92のみである。口径13.4cm、器高5.8cm、底径5.6cm、器高指数43.3、底径指数41.8である。底部が微高台状に円柱部分の一部が残存し、そこから横方向に広げた後に内面の見込み部分を広げ、伸ばし上げるように立ち上げている。体部中半・口縁部にかけて、条線状の痕跡が4条分観察される。この条線状の痕跡はカマド支脚として使用された97の体部にも見られる調整である。96はカマド煙出外の掘り込みから出土した非ロクロ甕で口径23.4cmを測る。精査時に本遺構に帰属させ精査しているが、S1-013との重複部分に相当する位置で、厳密にはカマドの前段階に帰属した可能性を有する為、S1-013帰属の可能性がある。頸部幅が長く、口縁部がやや短めに折り返すように外反しているが、体部と頸部との境界は内側で段状に区分されている。同一の口径である95は中層出土のロクロ系甕で、頸部幅は比較的短い。口縁部は丸みを持っているが、口唇部は上向きに三角形に突出させている。

#### S1-009 (図1-420～422, 457～459)

調査区中央からやや南寄りの位置で検出した。現代の構築物によって南壁側が破壊されており、部分的な精査にとどまった。平面形は方形を呈していたものと思われ、残存部の規模は406×[382]×33cmを測る。主軸はN-125°Eである。掘り方は中央を高くしている以外はほぼ全面掘り込みが行われているが、斜面下方側である東壁側に向かって深く掘られ、黒色土混じりのロームブロックが充填されている。壁溝は西壁・北壁(東隅を除く)部分と東壁の北側の一部で検出した。ピットは14基検出したが、主柱穴として機能したと考えられるピットはPit4・6で、南側の柱穴は未検出であるが、カマド部分からPit13と取り扱ったピットが検出しており、本遺構が建替が発生している可能性がある。その際は、Pit3についても柱穴として機能した可能性がある。また、Pit11は壁溝の途切れる部分にあたり、壁柱穴として機能していると考えられる。Pit10はカマド脇ピットに相当し、北西隅側にはSK-01としたピット状の落ち込みなどが密集して検出しており、東側のPit1・2・12周辺とともに廃棄物の集中が見られ、カマド脇ピットと同様の機能を果たしていたものと考えられる。堆積土は21層に分層したが、掘り方の第20層中にTora火山灰が混入していることから構築時点でTora火山灰は降灰していたものと考えられる。床面もついで第20・21層の充填土の面に対し、第19層が面的に別段階の貼床の可能性があり、前述のカマド内検出のPit

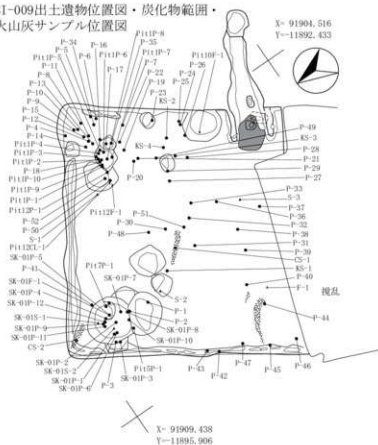
13の柱穴配置に見る段階の存在の可能性は床面の形成などを含めると、二段階の変遷を経ている可能性を考慮せざるを得ない。

カマドは南壁の位置が確定できないので推定であるが、東3の位置から検出しており、袖部幅76cm、煙道長159cmを測る。主軸が煙口の軸線より北側に寄っておりN-116°Eである。構造は半地下式で、床面から緩やかに煙出側に傾斜している。袖部及び煙道の一部から自然塵を検出しており、芯材として用いられた可能性がある。燃焼部寄りの煙道内からPit1とした19×11×16cmほどのピットを検出している。天井部の支柱的役割を果たした可能性がある。

出土遺物は22点図示したが、食器具については器形の追える資料が多い。99は床面直上に堆積している第7層と第15層出土の接合資料である須恵器杯で、口径14.6cm、器高5.3cm、底径5.4cm、器高指数36.3、底径指数36.9である。微高台状に円柱の一部が残存した状況で、体部下半は開き気味に広がり、体部上半・口縁部にかけてもそのまま開き気味に立ち上げている。100は第2層出土の土師器碗で口径13.2cm、器高6.0cm、底径6.2cm、器高指数45.5、底径指数46.9である。器壁がやや厚く、底径が広いタイプで、体部下半を軽く膨らませた後に引き上げながら成形しており、口縁部は外面に段がつくように意識して整形している。口縁部を打ち欠いており、内面の煤付着が顕著である。101は床面直上である第8層と第15層出土の接合資料である土師器碗で、口径13.4cm、器高6.0cm、底径5.4cm、器高指数44.8、底径指数40.1である。体部下半を膨らませ、体部中半からはやや直立気味に立ち上げ、口縁部は軽く外反させている。内外面体部に刻線が観察される。102はSK-01とPit9出土の接合資料の土師器碗で、口径13.2cm、器高5.3cm、底径5.6cm、器高指数40.2、底径指数42.4である。102と同じように体部下半が開き気味に立ち上がるが、器壁が厚く、体部中半から伸ばし上げるように立ち上げていて、口縁部は101より外反が浅い。底面に刻線があり、外面体部は二次被熱により剥落している。103は102と同様にSK-01とPit1出土の接合資料の土師器碗で、口径12.8cm、器高5.6cm、底径6.0cm、器高指数43.8、底径指数46.9である。破片資料であるが、底面中央が穿孔されており、穿孔部は摩耗している状況である。器壁が体部上半までやや厚く、体部下半は開き気味に立ち上げた上で体部中半で若干内側に角度を変え、口縁部で開き気味に伸ばし上げるように立ち上げている。112は床面直上に堆積する第15層、



SI-009出土遺物位置図・炭化物範囲・  
火山灰サンプル位置図



SI-009掘り方

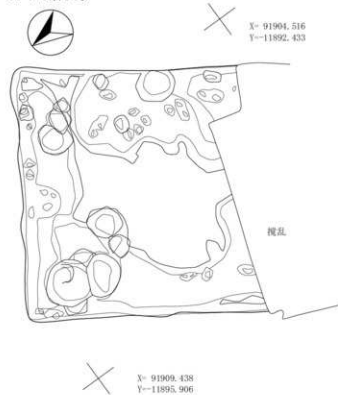


図 1-421 | 区 SI-009-2



S K-01およびカマド第2層出土の接合資料の土師器椀で、口径13.4cm、器高6.1cm、底径5.4cm、器高指数45.5、底径指数40.3である。底部が微高台状に円柱の一部が残存し、外面底部から若干膨らみ、引き上げるように立ち上げられている。口縁部と体部の境界に沈線状のロクロ挽き痕がある。口唇部は打欠が行われ、油痕が認められることから灯明具としての使用が考慮される。

煮炊具は底部が欠損する資料が多く、全体形のわかる資料は105のみである。105は、床面直上の第15層出土の非ロクロの土師器甕で口径22.9cm、器高28.5cm、底径8.6cmを測る。口縁部に最大径が来るが胴部と頸部が短めである。体部調整は外面が縦方向、内面が横方向のヘラによる調整で、外面のヘラ削りは頸部まで及んでいない。口縁部は屈曲がやや強く、折り曲げるように外反させている。底面は剥落の為詳細は不明である。非ロクロの甕としては、口縁部一体部にかけての資料である115や116についても短頸で、口縁部に最大径がくるタイプが認められる。ロクロ系はカマド出土資料の113と114があるが、非ロクロのタイプに比べると長胴気味である。輪轆成形の後に整形時のみに回転運動が伴っている状態で、口唇部は外面側は面取りとしたように作出している。小甕は非ロクロのタイプ主体で全体形の追える資料は無い。カマド第6層出土の117の底面は平面はヘラによる調整であるが、刻線状に強く残った箇所が認められる。118は床面直上の第8層と第15層、カマド出土の甕で、上端径18.6cm、器高26.5cm、下端径15.5cmを測る。本地域では土師器甕の底部を打欠いて甕として使用しているケースが多々あり、113や114についても同様のケースが想定できるが、甕専用として作られたケースは少なく、把手の付くタイプは例が限られる。輪轆成形で円筒形に作出した上で、体部中央に粘土塊を二個一対で付け把手部としている。下半側に相当する位置には二ヶ所穿孔されている。その他120はPit12から出土した土玉で長さ、幅、厚さとも12mmで、重量は1.5gである。

#### SI-010 (図1-423~425,459)

調査区中央からやや南寄り、SI-009から東寄りの位置で検出した。掘乱により西壁側と南壁側の一部が破壊されている。平面形は台形を呈し、規模は350×305×27cmを測る。主軸はN-139°-Eである。掘り方は一部中央を高くしている以外はほぼ全面掘り込みが行われているが、斜面上方側である西壁側が検出されたビット以外も掘り込みが行われ、ローム・パミスブロックの混合土が充填されている。堆積土は11層に分層したが、

掘り方充填の第11層を除く第1~10層が廃絶以降に堆積した土層である。床面上に堆積する8層がT<sub>o-a</sub>の堆積層で、廃絶直後の開口時に降灰した可能性がある。その上位にもT<sub>o-a</sub>火山灰が介在するが、基本的に二次的な要因である。

ビットは18基検出したが、主柱穴として認定できるのはPit4程度で、その他Pit3・5・7・11・15などが柱穴として機能した可能性がある。また、壁溝は検出していない。カマドは南1の位置から検出した。掘乱側の左袖が残存しており、全容は不明であるが、煙道長は151cmを測る。構造は地下式で、床面側から煙道に向かって25度程度の斜度で延びている。袖部は右袖側のみの残存で、芯材は検出していない。また、支脚も出土していない。煙出は壁側から掘りこまれた煙道の軸線よりも南側にビット状に掘り込まれ、斜めに連結している。

出土遺物は4点図示した。121は第4層出土の土師器椀で、口径13.8cm、器高6.2cm、底径5.6cm、器高指数44.9、底径指数40.6である。微高台状に円柱部分の一部が残存し、底部からやや上向きに立ち上がり、口縁部で若干角度を変えているもの、聞き気味に立ち上げられている。口縁部の一部が焼き歪みにより変形している。123は同じく第4層出土の非ロクロの鉢形の土器で口径9.0cm、器高4.9cm、底径7.2cm、器高指数54.4、底径指数80.0である。手捏の小型土器の範疇に含まれ、内外面とも煤が付着している。煮炊具は体部下半部底部にかけて資料である124のみ図示した。下層、カマド、Pit2等から出土の接合資料で、底径9.0cmを測る。底面が網状獣の木葉痕である。

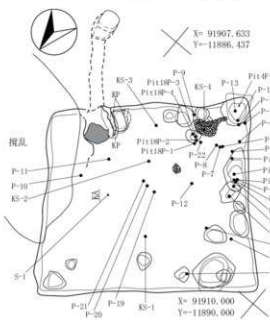
#### SI-011 (図1-426・427,460)

調査区中央から検出した。SI-0043とカマド煙出部が重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は台形を呈し、規模は270×255×50cmを測る。主軸はN-139°-Eである。掘り方は北西側が掘り込みが無く、それ以外の箇所が段状に掘り込みが行われている。ビットは9基検出しているが、主柱穴として認定できるビットはPit1・9で、Pit3・4・10のように小規模な支柱穴も検出している。壁溝はない。また北西壁側は中段に入り込んだ掘り込みがあり、壁面が段状になっている。堆積層は14層に分層したが、掘り方充填の第14層を除く第1~13層が廃絶後の堆積層である。このうち、第3層がT<sub>o-a</sub>火山灰の堆積層で、最大4cm程度の厚さを持っており、雨水による流れ込みによる沈殿の可能性が高い。その下位に堆積する第7層以下の土層はブロック等を多量に含む

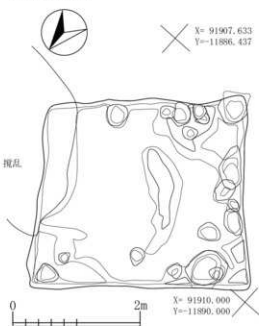




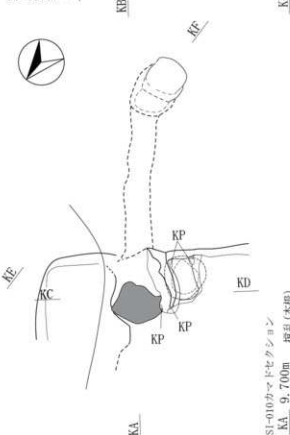
SI-010火山灰(To-a)範囲・出土遺物位置図



SI-010掘り方



SI-010カマド



SI-010カマドセクション

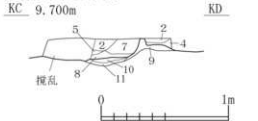


図 1-424 Ⅰ区 SI-010-2

SI-010カマド出土遺物位置図

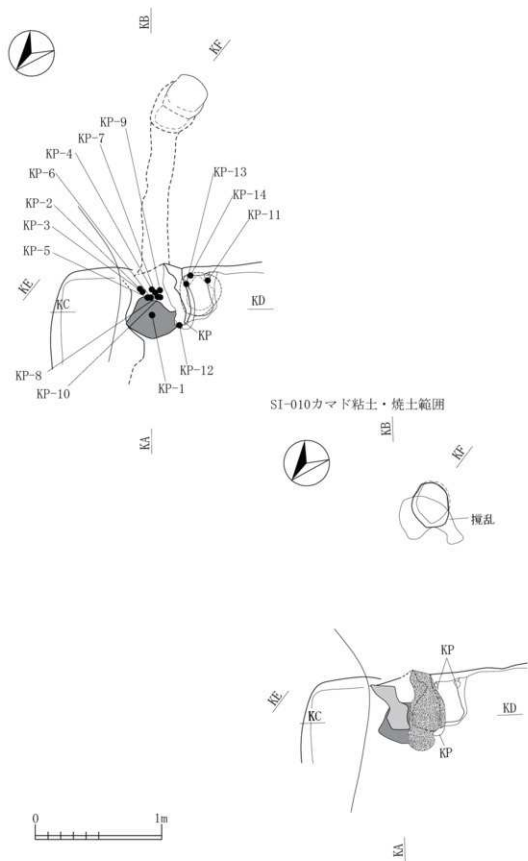


図 1-425 1区 SI-010-3

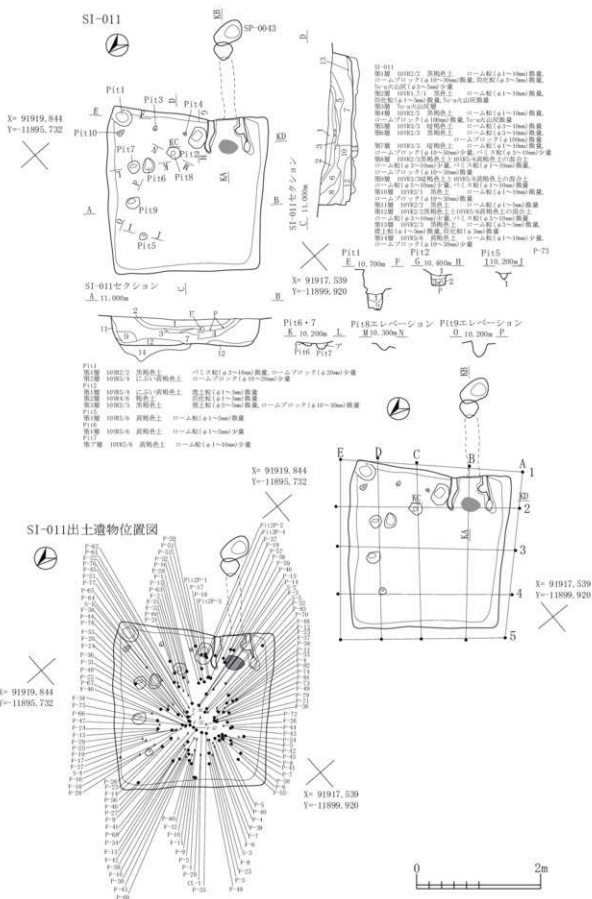
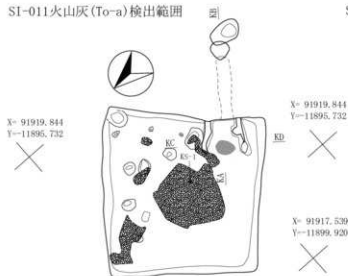
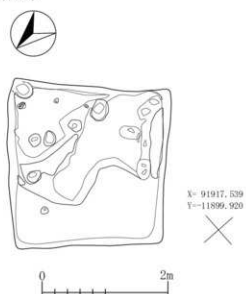


図 1-426 Ⅰ区 SI-011-1

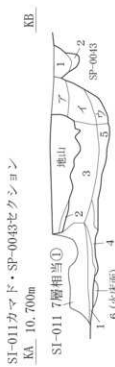
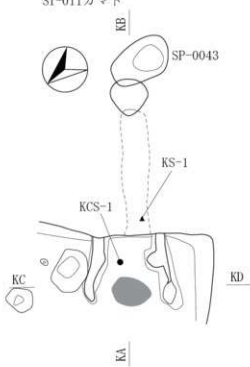
SI-011火山灰(To-a)検出範囲



SI-011掘り方



SI-011カマド



SI-011カマドセクション



SI-011 7層相当①	地層名	説明
掘り方	101923	埋積土上
SI-011カマド	101924	焼土
掘り方	101925	埋積土上
掘り方	101926	埋積土上
掘り方	101927	埋積土上
掘り方	101928	埋積土上
掘り方	101929	埋積土上
掘り方	101930	埋積土上
掘り方	101931	埋積土上
掘り方	101932	埋積土上
掘り方	101933	埋積土上
掘り方	101934	埋積土上
掘り方	101935	埋積土上
掘り方	101936	埋積土上
掘り方	101937	埋積土上
掘り方	101938	埋積土上
掘り方	101939	埋積土上
掘り方	101940	埋積土上
掘り方	101941	埋積土上
掘り方	101942	埋積土上
掘り方	101943	埋積土上
掘り方	101944	埋積土上
掘り方	101945	埋積土上
掘り方	101946	埋積土上
掘り方	101947	埋積土上
掘り方	101948	埋積土上
掘り方	101949	埋積土上
掘り方	101950	埋積土上
掘り方	101951	埋積土上
掘り方	101952	埋積土上
掘り方	101953	埋積土上
掘り方	101954	埋積土上
掘り方	101955	埋積土上
掘り方	101956	埋積土上
掘り方	101957	埋積土上
掘り方	101958	埋積土上
掘り方	101959	埋積土上
掘り方	101960	埋積土上
掘り方	101961	埋積土上
掘り方	101962	埋積土上
掘り方	101963	埋積土上
掘り方	101964	埋積土上
掘り方	101965	埋積土上
掘り方	101966	埋積土上
掘り方	101967	埋積土上
掘り方	101968	埋積土上
掘り方	101969	埋積土上
掘り方	101970	埋積土上
掘り方	101971	埋積土上
掘り方	101972	埋積土上
掘り方	101973	埋積土上
掘り方	101974	埋積土上
掘り方	101975	埋積土上
掘り方	101976	埋積土上
掘り方	101977	埋積土上
掘り方	101978	埋積土上
掘り方	101979	埋積土上
掘り方	101980	埋積土上
掘り方	101981	埋積土上
掘り方	101982	埋積土上
掘り方	101983	埋積土上
掘り方	101984	埋積土上
掘り方	101985	埋積土上
掘り方	101986	埋積土上
掘り方	101987	埋積土上
掘り方	101988	埋積土上
掘り方	101989	埋積土上
掘り方	101990	埋積土上
掘り方	101991	埋積土上
掘り方	101992	埋積土上
掘り方	101993	埋積土上
掘り方	101994	埋積土上
掘り方	101995	埋積土上
掘り方	101996	埋積土上
掘り方	101997	埋積土上
掘り方	101998	埋積土上
掘り方	101999	埋積土上
掘り方	102000	埋積土上

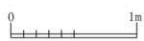


図 1-427 1区 SI-011-2

土層で、埋戻し等による人為的な要因が強い。カマドは南東3・4の位置から検出した。構造は地下式で袖部幅78cm、煙道長124cmを測る。前庭の燃焼部周辺は上面のほとんどが破壊により欠落しており、芯材や構築材のほとんどが除去されている。前庭部の袖部は基部のみの確認であり、構築材は粘土のみの検出であった。煙道は床面から若干傾斜する程度の傾きで延び、煙出は奥壁側から煙道に向かって傾斜するような形状で掘り込みが行われている。本遺構はT o-a 火山灰上から多量の遺物が廃棄され出土している。下層資料も含め11点図示した。125は火山灰層(=3層)・火山灰上、第2層から出土した内黒の椀で口径15.4cm、器高7.2cm、底径7.0cm、器高指数46.8、底径指数45.5である。外面体部に刻線がある。規格的にはやや大ぶりの椀形で、体部に稜段を持ち、口縁部はつまみ上げるように外反させている。133は第12層出土の土師器椀で、口径12.4cm、器高6.4cm、底径5.6cm、器高指数51.6、底径指数45.2である。体部の器壁が厚く膨らみを持ち、口縁部は縮み返すように端反させている。口唇分は打欠がある。134は下層出土の土師器椀で口径12.4cm、器高5.8cm、底径6.2cm、器高指数46.8、底径指数50である。底径幅があり、133より器壁が薄いが、底部一体部下半までは器壁が若干厚い。体部下半を膨らませ、伸ばし上げるように立ち上げ、口縁部を外反させている。底部切離しは静止糸切である。

煮炊具は131の下層と火山灰上出土の接合資料の非クロコ小甕のみ図示したが、127については立ち上がりクロコ小甕の可能性が強い。132は第2層出土の製塩土器の口縁部片で口径22.2cmを測る。

#### S I-O 12 (図1-428~430, 460・461)

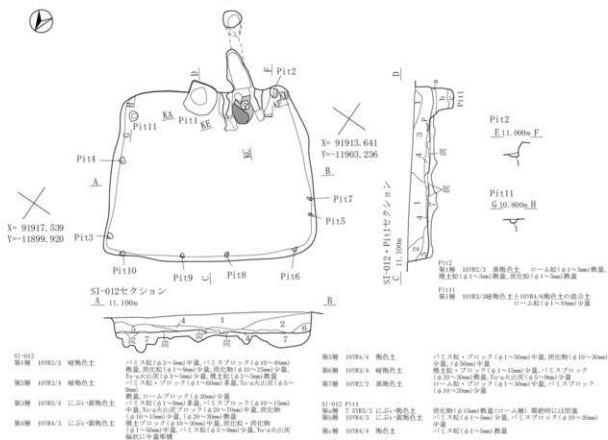
調査区中央からやや南西寄りの位置から検出した。平面形は台形を呈し、規模は333×265×32cmを測る。主軸はN-144°-Eである。掘り方は設置部分周辺には掘り込みが無く、それ以外の箇所が断続的に掘り込みが行われている。ピットは11基検出しているが、壁際に支柱穴のような壁支柱穴が10基確認し、カマド脇にはカマド脇ピットに相当するP i t 1を検出した。壁際の部分は堅穴のラインよりも突出しており、張り出した形状を呈している。また、壁溝はない。床面直上から炭化材・物を検出しているが、東側に集中し、検出量も断片的である。炭化物の堆積層の上位は若干の堆積の後に一気に埋め戻されている堆積状況であることから、廃絶に際し、不要物を焼成した後に、埋戻しが行われていたと思われる。堆積土は7層に分層

し、廃絶後の堆積層は第1~6層が相当するが、このうち、壁際の第6層の時点でも既にT o-a 火山灰が混入し、降灰しているものと考えられる。第4層がT o-a 火山灰が、織状に堆積しており、雨水等による流れ込みによる沈殿の可能性が高い。二次的な要因ではあるが、T o-a 火山灰降灰後、地表面で流動が発生した可能性があることから、本遺構の廃絶後、近接した時期にT o-a 火山灰の降灰が発生しているものと考えられる。

カマドは南3の位置から同一地点で新旧二段階確認した。新段階のカマドは半地下式で袖部幅80cm、煙道長62cmを測る。主軸は旧段階のものより北寄り度でN-132°-Eである。前庭部は袖に礎を芯材とし構築しており、左袖側は板状に割った礎を基部に差し込み、角度を調整し右袖側の礎と高さを揃えている。支脚として143の内黒椀を倒位に設置している。旧段階のカマドは地下式で前庭部は新段階のカマドの構築によりほぼ残存していない状態で、煙道長は124cmを測る。堅穴の床面側から26°の傾斜で下降しながら延びており、煙出部はピット状に掘りこまれた部分と連結している。なお、堆積状況を確認すると一定の埋没後、煙出部の一部が柱穴状の新しい堆積が認められる。

出土遺物は14点図示した。全体形のわかる資料のうち、136は中層の火山灰上(第4層上に相当)出土の土師器椀で、口径13.2cm、器高5.8cm、底径5.0cm、器高指数43.9、底径指数37.9である。底部が微高台状に円柱を若干残し、体部下半に膨らみを持たせ、見込部分の器壁がやや厚く、内面底部中央の平坦部分が少ない状況である。体部下半よりやや上位の位置で角度を変え、口縁部はつまみ返すように端反させている。141はカマド第4層と第6層の接合資料の椀で、口径12.4cm、器高5.6cm、底径5.8cm、器高指数45.2、底径指数46.8である。136が体部下半に肥厚部が集中するのに対し、141の資料は体部下半の器壁の厚さより体部上半一口縁部にかけての厚さの方が厚い資料で口唇分は先細り気味の形状である。143は前述のカマド支脚に使用された内黒椀で、口径12.7cm、器高5.5cm、底径5.2cm、器高指数43.3、底径指数40.9である。椀形で体部下半に膨らみを持ち、開き気味に外反し、口縁部は内外面からつまむように軽く外反させている。口唇分は丸みを帯びている。144は堅穴中層から出土した土師器椀で口径12.2cm、器高5.8cm、底径5.8cm、器高・底径指数とも47.5である。見込部分の器壁が厚く、やや直立気味に立ち上がり、口唇部を軽く外反させている。内外面とも二次被熱が顕著である。煮炊具は甕は下層およびカマド第1層出土の

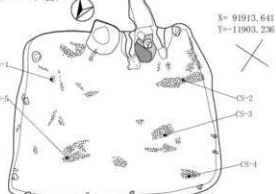
SI-012



SI-012出土遺物位置図



SI-012炭化物検出範囲1 (上・中層)



SI-012炭化物検出範囲2(下層)・焼土範囲

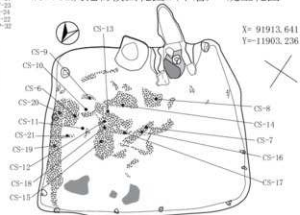


図 1-428 | 区 SI-012-1





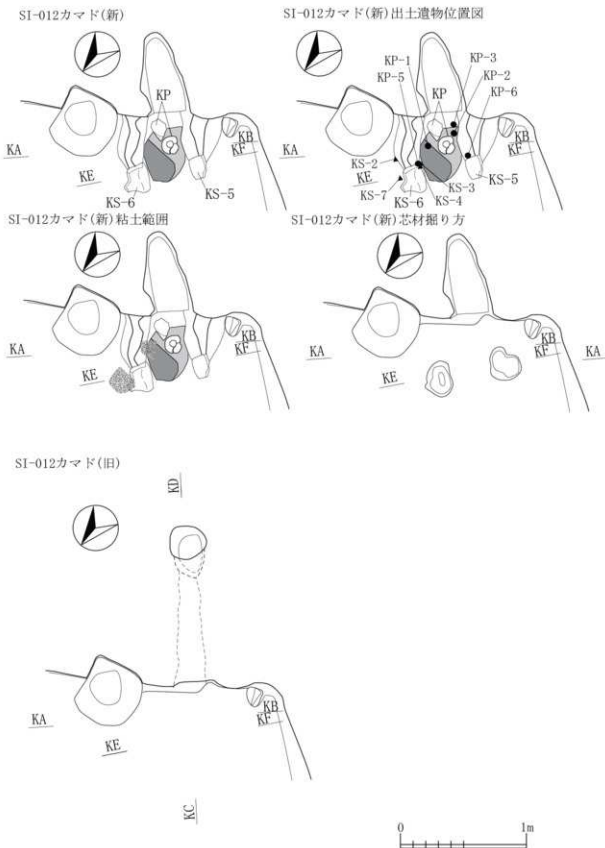


図 1-430 Ⅰ区 SI-012-3

接合資料である142のみで、口径21.0cmを測る。頸部が緩やかに長く、口縁部は軽つまみ返すように外反させている。下層出土の小甕である145は口径11.6cm、器高9.4cm、底径6.6cmを測る。底面は砂底で、体部下半から直立気味に開き、立ち上がる。口縁部は体部上半からやや肥厚させ、口唇端部を反らせて上部に外反させている。140は中層火山灰上位から出土した小型土器で、口径4.8cm、器高3.1cm、底径3.0cmを測る。手捏で、145と同様に直立気味に立ち上がらせているが、本資料は直胴形で、体部と口縁部の境界が無い。その他147は第1層出土の焼成粘土塊、148と149は火山灰上から出土した土玉である。148については穿孔が一箇所貫通と部分的に穿たれている箇所がある。

#### SI-O13 (図1-431~432)

調査区中央からやや西寄りの位置から出土した。検出地点は旧豚舎の基礎部分上に位置し、平坦面造成部分にもあったところから、削平が顕著で、東壁の一部と床面ならびにカマドの残存部を精査するにとどまった。残存部の情報であるが、平面形は方形を呈し、規模は[340] × [282] × 6cmを測る。主軸はN-33°-Wである。また、SI-O08の部分で記載したが、SI-O08の煙出部分と重複関係にあり、残存している情報から本遺構が古いと認定した。掘り方はカマド設置部分周辺には掘り込みが無く、それ以外の箇所で断続的に掘り込みが行われている。ピットは7基検出しているが、主柱穴として認定できるものは無い。壁上部を検出していない部分が多く、ピット2と6は、SI-O12のピット1のように壁際から突出したピットの可能性がある。ピット3はカマド脇ピットである。堆積層は3層に分層し、壁の一部が残存していた東側では床面直上とその上位の堆積層2層分を確認したが、それ以外の箇所は破壊された部分の基部に残存した土である。カマドは北3の位置から検出し、前庭部側は袖部等が残存していない。構造は地下式で、煙道長は120cmを測る。支脚相当位置に羽口が出土しており、支脚として機能した可能性がある。煙道は床面から14°の角度で傾斜し、煙道中半で角度を37°に変え、煙出手前の部分で平坦に近い形に変化している。遺物は鉄関連遺物扱いとなった羽口以外破片中心で図示できるものは無かった。

#### SI-O14 (図1-433~435, 461)

調査区西側から検出した。検出地点はSI-O13と同様旧豚舎の基礎部分上に位置し、削平が顕著で残存部の精査にとどまった。平面形は不整形

を呈し、土圧によるものなのか、変形しており、西側は軸線が異なる。規模は[545] × [540] × 33cmを測る。主軸はN-128°-Eで、前述の西壁側はN-111°-Eである。ピットは15基検出したが、主柱穴は不明瞭で、柱穴として機能した可能性のあるピットはPit 2・4・5・7・9である。このうちPit 9についてはカマドの火床面相当位置を切る形で構築されており、実際カマドが機能していたと想定した場合干渉する位置にあることから堅穴廃絶後の構築された可能性もある。Pit 3はカマド脇ピットに相当する。壁溝は検出していない。

堆積土は、攪乱を除く堆積土を3層に分層した。第2層中および第1層と第2層の間層中にT-O-a火山灰を検出している。カマドは東4の位置から検出した。前庭部は破壊されており、焼土ブロック及び火床面のみを検出で、煙道の一部も削平されているが、煙道長は150cmを測る。構造は地下式で、削平を受けている為、煙道途中からの検出ではあるが、段状に傾斜し、ピット状に掘りこまれた煙出部と連結する。出土遺物は破片中心で固化可能であった資料は煮炊具の2点のみである。150はカマド及びPit 6出土の接合資料の土師器で、口径19.6cmを測る。SI-O12の142で図示した甕より頸部幅は狭くなるが、口縁部の外反度合いは類似している。151はカマド及びPit 3出土の接合資料の小甕で、口径13.6cmを測る。体部上半に最大径があり、体部と口縁部の境界が明瞭で、体部のヘラの調整は頸部迄入っている。

#### SI-O15 (図1-436~437, 461~462)

調査区南西から検出した。平面形は台形を呈し、規模は372 × 298 × 34cmを測る。主軸はN-150°-Eである。小規模な堅穴であるが、ピットの数が多く、20基検出した。主柱穴は不明で、壁溝の欠落部分のPit 14・19・20などが、支柱穴として機能した可能性があり、Pit 5については柱穴の可能性もある。他のピットは比較的浅い掘り方で、Pit 1・2・3・4・7・15・16などはカマド脇ピット・相当で焼土ブロックや破片の廃棄が行われている。壁溝は一部断続が見られるが、カマド設置部分を除きほぼ全周する形で検出している。堆積土は12層に分層した。掘り方は堅穴中央の一部が高くなっている以外は不整形に掘り込みが行われており、バミス・ロームブロック混じりの黒褐色土が充填されている。廃絶後の堆積層は第1~11層で、床面直上からサイズの大きなローム・バミスブロック混じりの混合土が堆積しており、壁際では一部遺物の投棄が生じており、人為的な埋戻しが行われているものと考えられる。カマドは









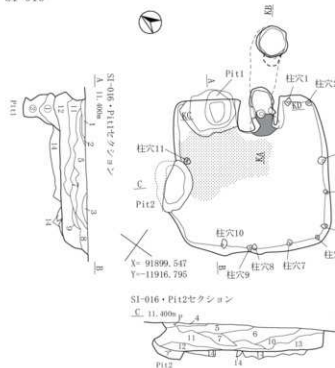








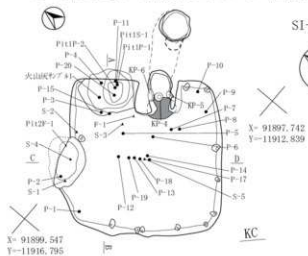
SI-016



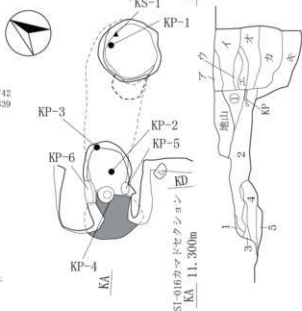
SI-016掘り方



SI-016出土遺物・火山灰(To-a)サンプル位置図



SI-016カマド



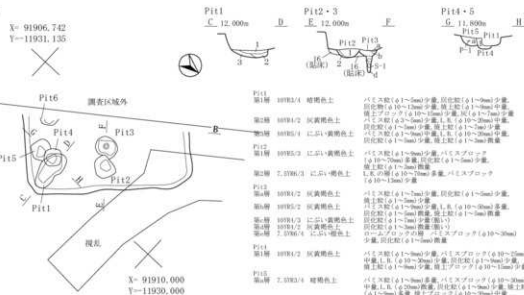
SI-016カマドセクション

KC 11.300m

- |                               |                                                                                                                                                 |
|-------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| SI-016カマド<br>竪穴層 109K2-3 黒褐色土 | ローム状(φ3~10cm)少量、ロームブロック(φ15~20cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見、厚土状(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~10cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見                         |
| 竪穴層 109K4-1 褐色土               | ローム状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~10cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見                                                                |
| 竪穴層 109K2-3 暗褐色土              | ローム状(φ3~10cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見                                                                                                 |
| 竪穴層 7.109K7-3 褐色土             | ローム状(φ3~10cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見                                                                                                 |
| 竪穴層 109K2-3 暗褐色土              | ロームブロック(φ10cm)散見、石灰化(φ5~10cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見                                                                                               |
| 竪穴層 109K4-8 褐色土               | ロームブロック(φ10~20cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~10cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見                                                                             |
| 竪穴層 109K2-1 暗褐色土              | 厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~5cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見                                  |
| 竪穴層 7.109K1-6 褐色土             | ローム状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~5cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見 |
| 竪穴層 109K1-6 褐色土               | ローム状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~5cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見 |
| 竪穴層 109K1-6 褐色土               | ローム状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~5cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見 |
| 竪穴層 109K1-6 褐色土               | ローム状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>ローム状(φ3~5cm)少量、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>厚土状(φ3~5cm)散見、石灰化(φ3~5cm)散見、<br>石灰化(φ3~5cm)散見 |

図 1-438 Ⅰ区 SI-016

SI-017

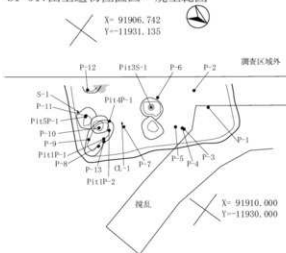


SI-017・Pit16セクション

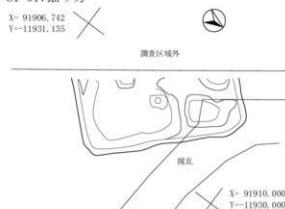


基本層序	層位	説明	特徴
第1層	10182/1	赤土	パリス軟(φ1~5cm)少量、同径(φ1~5cm)少量、焼土(φ1~2cm)散在
第2層	10184/3	にじみ・黄褐色土	パリス軟(φ1~9cm)少量、同径(φ1~5cm)少量、パリスブロック(φ10~30cm)多量
SI-017	10185/5	黄褐色土(上層)	
第3層	10183/2	灰黄褐色土	パリス軟(φ1~9cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、焼土(φ1~9cm)少量、Pit16(φ10~15cm)中に埋入、Pit16軟(φ10~15cm)少量、Pit16ブロック(φ10~20cm)少量、L、E、(φ10cm)散在
第4層	10184/2	灰黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、焼土(φ1~5cm)散在、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ブロック(φ10~20cm)少量、L、E、(φ10cm)散在
第5層	10183/3	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、焼土(φ1~5cm)散在、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ブロック(φ10~20cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、焼土(φ1~5cm)散在、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ブロック(φ10~20cm)少量
第6層	10183/4	暗褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第7層	10183/2	黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第8層	10184/4	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第9層	10184/2	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第10層	10184/3	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第11層	10184/2	灰黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第12層	2.10182.9	明黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第13層	10185/3	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第14層	10181.1/1	赤土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第15層	10186/1	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量
第16層	10185/2	にじみ・黄褐色土	同径(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量、同径(φ1~9cm)少量、L、E、(φ10~10cm)少量、Pit16軟(φ1~9cm)少量、Pit16ソフト(φ10~15cm)少量

SI-017出土遺物位置図・焼土範囲



SI-017掘り方



SI-018

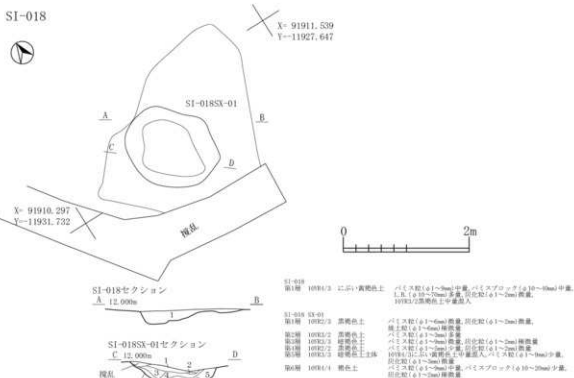


図1-440 | 区SI-018

13層で、パミスブロックの多く含む人為的な堆積状況を呈する。中層の第8層の時点でT0-a火山灰は既に介在しているが、上位の第2層中にT0-aの二次的堆積が確認でき、本遺構はT0-aの降灰以前に中位までの埋没は完了しているものと考えられる。カマドは北東3の位置から検出した。構造は半地下式で、袖部幅76cm、煙道長114cmを測る。主軸は竪穴の軸線より東寄りでN-60°-Eである。袖部の構築材は粘土で、煙道は竪穴床面から一段上がり、水平気味に竪穴外に延び、ピット状に掘りこまれた煙出部と連結している。出土遺物は10点図示した。全体形の追える資料のうち、166はPit1第1層出土の土師器碗で口径13.2cm、器高5.8cm、底径5.8cm、器高・底径指数とも43.9である。器壁がやや厚く、開き気味に立ち上がった後、体部中半でやや厚みを持ち、口縁部はつまみ上げるように外反させている。口唇部は先細り気味である。169はカマド第4層から出土した土師器碗で、口径12.7cm、器高6.3cm、底径5.6cm、器高指数49.6、底径指数44.1である。体部下半に膨らみを持ち浅い稜段を持ちながら立ち上がり、口唇分は軽く反り返らせている。外面体部に刻線、口縁部に打欠がある。煮炊具は破片資料主体で、全体形のわかる資料は173の小甕のみである。173は竪穴第2・3層、カマド第2・4層出土の接合資料のロクロ小甕で、口径7.8cm、器高7.4cm、底径4.4cm

mを測る。口径と体部がほぼ同じ径で、口縁部は短頭で、端部は面取り状ではあるが、厚みを帯びている。外面体部に刻書が横方向に展開している。破片の煮炊具については167・168のように緩やかに外反するタイプやロクロ系の170や非ロクロ系の172のように短頭で開き気味に外反させるタイプが見られる

## SI-017 (図1-439)

調査区南西隅から検出した。調査区外へ延びており、全体形は不明であるが、検出部から推定できる平面形は(方形)を呈し、規模は261×[127]×47cmを測る。主軸はN-135°-Eである。ピットは約半分の精査ながら6基検出した。支柱穴は不明であるが、Pit3については軸受のピットが中央にあり、ロクロピットの可能性がある。カマドは調査区内では未検出であるが、Pit6の上面から焼土層を検出しており、カマドが南西壁側に存在した可能性がある。堆積層は16層に分層し、廃絶後の堆積層は第1-12層である。南側が約半分堆積した後に、北方向が折り返重なるように堆積している。上位の第1層中にT0-a火山灰が粒・ブロック状に混入している。図化可能な出土遺物はない。

## SI-018 (図1-440)

調査区南西隅SI-017に近接して検出した。削平された部分に掘り方充填土と土坑状の落ち込み

を確認した。削平されており、詳細が不明な状況であるが、調査時の遺構名に基づき、本項で報告する。平面形は不整形で、 $310 \times 240 \times 2$  cmを測る。掘り方は最深 $22$  cm程度の掘り込みで、バミス粒・ブロック、ロームブロックを主体とした充填がなされている。掘り方確認部分からはSX-01とした不整楕円形の土坑状の落ち込みを検出した。規模は $150 \times 122 \times 36$  cmを測る。図示できる出土遺物の出土は無かった。

## 2. 土坑

### SK-001 (図1-441)

調査区北東側で検出した。不整楕円形を呈し、 $128 \times 116 \times 11$  cmを測る。断面形は鍋底状に緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層し、第B層とした土層のバミス粒・ブロックの混入量が顕著である。

### SK-002 (図1-441)

調査区北側、SI-006とSI-007の間付近から検出した。不整隅丸方形を呈し、 $81 \times 76 \times 24$  cmを測る。断面形は段状に立ち上がる形状で、堆積土は3層に分層した。柱穴状の掘り方である。

### SK-003 (図1-441,463)

調査区北側、SK-002の南側から検出した。円形を呈し、 $95 \times 87 \times 17$  cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、壁際に丸みを帯びる箇所がある。堆積土は2層に分層し、下位の第2層はバミス粒の混入が多く、上位の第1層は黒味を帯び混入物が少ない。自然竃3点と土器片1点が出土し、土器は第Ⅲ群C類の体部片である。

### SK-004 (図1-441,463)

調査区中央からやや西寄りの位置で検出した。SI-008と重複しており、本遺構の方が新しい。不整長方形を呈し、 $155 \times 120 \times 72$  cmを測る。断面形は長軸側が一部袋状を呈し、短軸側は壁の一部で段状に立ち上がる。本遺構は土坑墓で、骨の遺存が悪く骨片と歯のみの出土であった。調査時の歯(B-1-3)や遺物の出土状況および底面の凹み状況と土色の変色状況から、頭が東側で顔を北方向を向けた状況で横たえて、足を屈曲させて横臥の状況で埋葬し、東側に頭部があると推定した。仮に頭が東側とすると $N-56^\circ-E$ の軸線である。底面から無文銭約3枚(保存処理の際、土ごと固定したため、分解確認していない)と鈍刀1点、鉄鎌1点、漆器轆などが出土しており、副葬品であると考えられる。周辺にはSK-005が存在するが、本遺構と異なり、明確な出土遺物が無く、掘り込み

も浅い。長方形の土坑墓として本遺構は単独の検出状況である。本調査区の北側のG・H区内にSBa-01掘立柱建物跡などの建物があり、関連について考慮される。

### SK-005 (図1-441,463)

調査区中央からやや西寄りの位置で検出した。SI-008と重複しており、本遺構の方が新しい。平面形は小判形を呈し、 $129 \times 79 \times 13$  cmを測る。断面形は鍋底形を呈し、やや直立気味に立ち上がる。底面は若干東方向に傾斜している。堆積層は2層に分層し、ブロックの混入が強い。堆積土中から土器片、鉄滓を出土した。図示した土器片2点はいずれも縄文土器で第Ⅲ群のA類とC類で時期幅があり、本遺構の帰属時期を示すものではない。前述のSK-004での記述の通り、本遺構の周辺にSK-004が存在しているが、規模や構造が異なり、遺物も平行関係を示す資料の出土はなく、無関係の可能性が高い。

### SK-006 (図1-441)

調査区中央から検出した。平面形は不整形を呈し、 $127 \times 114 \times 13$  cmを測る。断面形は直立気味に立ち上がる部分と緩やかに立ち上がる箇所がある。底面には凹凸がある。堆積層は3層に分層したが、壁際の第2・3層はブロックの混入が多い。

### SK-007 (図1-441)

調査区南東側(平成21年度調査区)から検出した。平面形は不整楕円形を呈し、 $70 \times 55 \times 23$  cmを測る。断面形は楕円状を呈し、緩やかに立ち上がるが、一部で段状を呈する。底面は中央が凹んでいる。堆積土は3層に分層し、第2層はバミスブロックの混入が多い。

### SK-008 (図1-441)

調査区南東隅(平成21年度調査区)から検出した。平面形は不整形を呈し、 $110 \times 103 \times 17$  cmを測る。断面形は段状を呈し、緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が顕著である。堆積層は2層に分層し、バミス粒などの混入は少ない。

### SK-009 (図1-441)

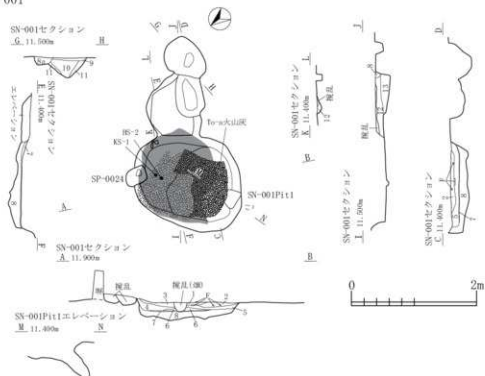
調査区南東隅(平成21年度調査区)から検出した。SK-010と重複しているが、明瞭な新旧関係はない。平面形は不整形を呈し、 $120 \times 114 \times 18$  cmを測る。断面形は柱穴状を呈し、緩やかな段状を呈する。堆積土は2層に分層した。

### SK-010 (図1-441)

調査区南東隅(平成21年度調査区)から検出した。



SN-001



- SN-001
- 第1層 101K3/7 黒褐色土 パミス粒(φ1~3mm)少量,炭化粒(φ1~9mm)中量,焼土粒(φ1~5mm)少量
  - 大山灰(To-a)(φ10~30mm)ブロック状29枚,鉄屑(φ10~20mm)少量
  - 第2層 101R1/7 黒色土 パミス粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,砂粒多量,焼土粒(φ1~5mm)少量,鉄屑(φ10~100mm)多量
  - 第3層 101R4/2 灰黄褐色土 パミス粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,焼土粒(φ1~3mm)少量,火山灰(To-a)(φ10~130mm)ブロック状に多量
  - 第4層 7.23R/A/2 灰褐色土 パミス粒(φ1~9mm)少量,炭化粒(φ1~9mm)少量
  - 第5層 101R3/2 黄褐色土 パミス粒(φ1~9mm)少量,焼土粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~9mm)少量
  - 第6層 101R2/1 黒色土 パミス粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~2mm)少量,砂粒多量,焼土粒(φ1~3mm)少量
  - 第7層 5V85/8 明赤褐色土 焼土粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~9mm)中量,炭化物
  - 第8層 101R5/3 に近い黄褐色土 パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~25mm)中量,ロームブロック(φ10~30mm)中量,炭化粒(φ1~5mm)少量
  - 第9層 101R6/4 に近い黄褐色土 パミス粒(φ1~5mm)少量,炭化粒(φ1~2mm)少量
  - 第10層 101R2/2 灰黄褐色土 パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~20mm)少量,炭化粒(φ1~5mm)少量,火山灰(To-a)(φ5~7mm)少量
  - 第11層 101R6/3 に近い黄褐色土 パミス粒(φ1~2mm)少量,火山灰(To-a)(φ7mm)少量
  - 第12層 101R5/3 に近い黄褐色土 パミス粒(φ1~9mm)少量,パミスブロック(φ10~30mm)中量,炭化粒(φ1~5mm)少量
  - 土,51R6/8褐色土の一部着色している
  - 第13層 101R6/4 に近い黄褐色土 焼土質土

SN-001出土遺物分布図

SN-001メッシュ配置図

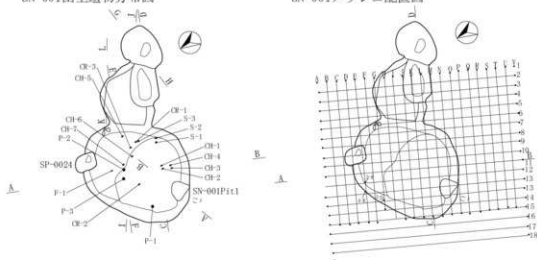


図 1-442 Ⅰ区 SN

SK-009と重複しているが、前述のとおり土層からは明瞭な新旧関係はない。平面形は不整楕円形を呈し、[83]×98×13cmを測る。断面形は柱穴状を呈し、底面は中央が凹んだ形状を呈する。堆積層は2層に分層し、上層の第a層は実質的にSK-009の第1層と同一である。

### 3. 焼成関連遺構

SN-001 (図1-442, 463)

調査区北西側で検出した。SP-0024と重複しており、本遺構の方が古い。周辺にブロック崩があり、後世の破壊の要因が高く、詳細は不明であるが、不整楕円形の土坑状のプランと東側に突出した

張出があり、さらにビット状の落ち込みがある。ただし、突出部とビット状の落ち込みさらには10 YR 5/3の同色の土が充填されており、使用時に開口していたのは土坑部分が基本となっている。土坑部分の規模は185×145×16 cmを測り、突出部は100×85×12 cmを測る。土坑部分は掘り方があり、前述のぶい黄褐色土が充填されている。床面は被熱して一部赤化しており、第7層相当で取り扱われている。その上位には粉炭を多く含む第6層の堆積があり、その上位に第4層と第5層が堆積している。鉄滓は第4・5層の上位にあたる第1層と第2層の黒色～黒褐色土主体の土層から出土しており、第2層中から特に多量出土している。羽口等も出土しており、調査時は鉄関連等の可能性を含めてSN略号を付し精査している。調査後の遺物整理で、出土した鉄滓を確認したところ、製錬滓も鍛冶滓も混在した状況であることが確認され、出土位置についても上位に堆積している部分からの出土がほとんどであったことから、本遺構内での鉄生産に関連した排出物では無いことを認定した。本遺構の機能としては第6層以下の状況から元々は製炭土坑として機能し、廃絶後の埋没過程の途中で廃滓場として利用されていたものと考えられる。第1層と第3層、第9・10層からT<sub>0-a</sub>火山灰を検出しているが、第1・3層がブロックで、第3層のサイズが大きい。鉄滓の介在する土層とH区S1-09の鉄関連炉に介在するT<sub>0-a</sub>火山灰は比較できる内容で、H区で検出したS1-09内の鉄関連炉跡等から排出された鉄滓等の廃滓場所である可能性が考えられる。

#### 4. 溝状土坑

##### S1P-001 (図1-443)

調査区東側で検出した。コンターラインに直交する形で、斜面に沿う形で長軸方向を設定している。平面形は溝状を呈し、283×70×130 cmを測る。断面形は長軸側の一部が袋状に入り込む形状で、フラスコ状を呈している。短軸側は溝状に幅13 cm程度と狭く、壁上部では角度を緩やかに立ち上がる。堆積土は12層に分層したが、開口部周辺の土層が二次的に混み合った堆積で、焼土層や焼土ブロック等を検出している。中層以下の土層は自然堆積状況を呈している。

##### S1P-002 (図1-443)

調査区東側で検出した。S1-001と重複しているが、本遺構の方が古い。コンターラインとは68°程のやや浅い角度である。平面形は溝状を呈し、436×40×103 cmを測る。断面形は長軸方向が一部袋状に奥壁側に入り込み、短軸側は底

部から2/3位の位置まで直立気味に立ち上がり、開口部付近で角度を変え、やや緩やかに立ち上がる。底部付近での幅は9 cmと非常に狭い。堆積土は4層に分層し、第2層中から焼土粒を検出した。

##### S1P-003 (図1-443)

調査区東側で検出した。長軸方向がコンターラインとはほぼ直交する形で、斜面を意識した構築である。平面形は溝状を呈し、313×26×82 cmを測る。断面形は長軸方向が袋状に入り込む形状で、フラスコ状を呈している。短軸側は開口部付近まで直立気味に立ち上がり、開口部付近で角度を変え、緩やかに立ち上がる。底部付近の幅は11 cmと狭い。堆積土は3層に分層した。

##### S1P-004 (図1-443)

調査区中央より西側の位置から検出した。旧豚舎の建っていた地点で、上端の一部は影響が生じている。コンターラインは擾乱の影響により乱れているが、10m80cmのライン以下の斜面のラインに対してはほぼ直交する形で長軸が向いており、斜面を意識した構築となっている。平面形は溝状を呈し、300×45×96 cmを測る。断面形は長軸方向が袋状に入り込む形状でフラスコ状を呈し、特に斜面下方側の入り込みが顕著である。また、短軸方向は開口部が削平を受けている影響か、ほぼ直立気味に立ち上がる。堆積土は7層に分層し、下位の5層以下はブロック混じりで崩落した土層堆積が認められる。

##### S1P-005 (図1-443, 463)

調査区南東側から検出した。コンターラインと直交し、斜面の向きを意識した構築である。平面形は溝状を呈し、328×40×106 cmを測る。断面形は長軸軸とも底部からほぼ直立気味に立ち上がり、壁上部で角度を変え開き気味に立ち上がる。堆積土は5層に分層した。また、第1層中から縄文土器体部片が出土した。

#### 5. その他の遺構

##### SX-001 (図1-444・445, 463)

調査区北東側から検出した。S1-002、SX-002と重複しており、S1-002の方が新しく、SX-002との関係は斜面下方に位置し、表土除去が深かった為、新旧関係の確認できる土層が残存しておらず、詳細は不明である。平面形は不整形を呈しており853×621×63 cmを測る。本調査区内のS1-002とSX-002、H区のS1-003等不整形の堅穴状の掘り込みを検出しており、本遺構も同様のものである。はS1-002







SX-001・002土器・石器・鉄関連遺物・植物種子分布図

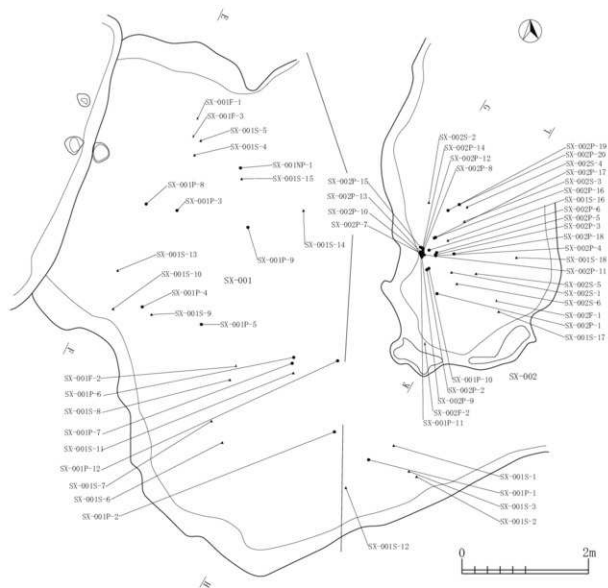


図 1-445 | 区 SX-2

側の重複部分から1基検出しているが、堅穴内からは検出していない。ただし、堅穴中央から $5.6 \times 4.5$  cmの地床炉のように焼成がおこなわれた跡がある。出土遺物は2点図示したが、重複するS1-002と同様近代以降の遺物も混在しており、縄文土器等も出土しているが、遺構そのものとしては新しい時点で構築された可能性が高い。

#### SX-002 (図1-444・445)

調査区北東側から検出した。SX-001と重複しており、SX-001との関係は前述のとおり、詳細は不明である。斜面下方に位置した影響で一部滅失があるが、平面形は不整長楕円形を呈し、 $5.22 \times 2.72 \times 3.6$  cmを測る。南壁側の一部でテラス状の段を有し、断面形は壁上部の一部で段を持つ、緩やかに立ち上がる形状である。床面は若干

凹凸があるが、ほぼ平坦に近い。堆積土中から破片資料を中心に土器などを出土したが、SX-001やS1-002などと同様に新しい段階での構築が想定され、図示できるものはない。

#### SX-003 (図1-446)

調査区西側で検出した。不整形円形を呈し、 $11.3 \times 8.0 \times 1.9$  cmを測る。断面形は凹凸があり、壁も直立気味な箇所と緩やかに立ち上がる箇所がある。ブロックの混入が多く、埋戻し等による人為的な要因が強く、本遺構及び周辺に焼土を検出している。

#### SX-003b (図1-446)

調査区南東側で検出した。調査年が2009年で、北側の一部が滅失していた為、残存部の一部に精査

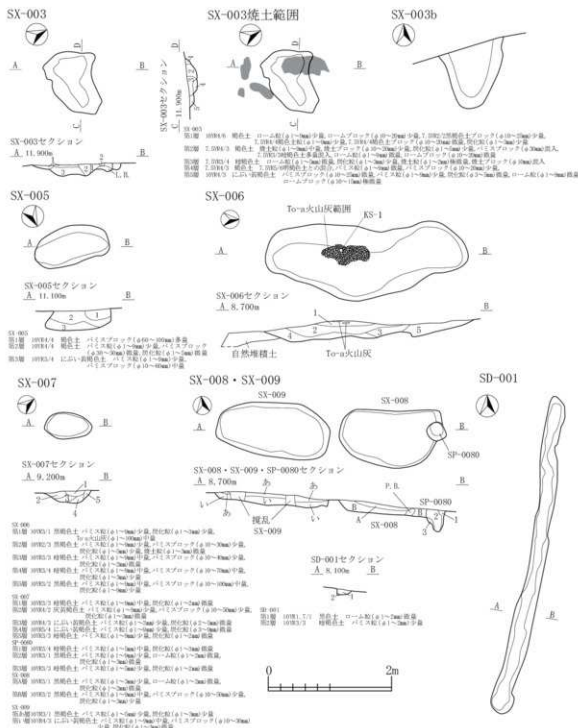


図 1-446 | 区 SX-3,SD

が留まった。検出部分の規模は $[96] \times 108 \times [13] \text{ cm}$ を測る。堆積層は図面に残存していないが、記録写真を確認すると緩やかな立ち上りの断面形である。堆積土は3層に分層した。底部直上には厚さ3 cm程度のバミスブロック層が堆積し、その直上には5-6 cm程度黒褐色土が堆積し、さらにその上位に最厚4 cm程度の厚さで、バミス粒・ブロックが多量混合する暗褐色土の堆積が認められる。

SX-005 (図1-446)

調査区中央で検出した。土坑状の形状で、平面形は不整小判形を呈し、 $122 \times 63 \times 31 \text{ cm}$ を測る。断面形は東壁側が袋状に入り込み、フラスコ状を呈している。堆積土は3層に分層したが、ブロックの混入が多く、埋戻し等による人為的な要因が強い。

SX-006 (図1-446)

調査区南東側で検出した。平面形は不整長楕円形

を呈し、324×122×29cmを測る。断面形は血形に広がる形状で緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は5層に分層したが、第1層中にT<sub>0</sub>-a火山灰のブロックが中量堆積している。底面直上に堆積する第4層はバミスブロック等が多く含まれ、崩落等による流入の要因が強い。

SX-007 (図1-446)

調査区南東側で検出した。小規模な土坑状を呈し、77×43×19cmを測る。断面形は緩やかに立ち上がる形状で、底面はやや凹凸がある。堆積土は5層に分層したが、粒径の大きなブロック混じりで、埋戻し等の要因が強い。

SX-008 (図1-446)

調査区南東側で検出した。SP-0080と重複しており、本遺構の方が古い。平面形は不整小判形を呈し、SP-0080の重複部分周辺の形状が変形している。堆積土は2層に分層し、第B層の埋没はブロック等を多く含み、人為的な要因がある。

SX-009 (図1-446)

調査区南東側で検出した。SX-008に隣接している。SX-008同様不整小判形の土坑状を呈し、183×90×19cmを測る。断面形は直立気味に立ち上がる壁と緩やかに立ち上がる壁の部分があり、底面は若干凹凸がある。堆積層は2層に分層し、SX-008と同様に下層に相当する第I層はバミスブロック等を多く含み人為的な要因がある。

6. ビット (図1-447・448)

調査区内から60基検出した。G・H区内検出の資料のように掘立建物跡として認定できる資料はないが、SP-0045・0046・0047・0048・0049やSP-0050・0051、SP-0071・0072・0075・0076・0077のように軸線上に複数のビットが並ぶケースがある。特に2009年調査の南東部側でビットや土坑状の掘り込みの検出例が多いが、厳密に中世や古代以前と認定できる資料は少なく、2008年調査の調査区とは土地所有者が異なるなどの差がある為、土地利用状況の差による影響が考えられる。個別のビットの法量等の情報は一覧表に集約した。

7. 溝跡

SD-001 (図1-446)

調査区東側で検出した。斜面下方のコンターラインに沿う形で構築されており、幅19～33cm、深さ8cm、長さ510cmを測る。堆積土は2層に分層し、崩落に伴う自然堆積の様相を呈する。

第2節 遺構外出土遺物 (図1-463)

2点図示した。183は遺構外出土の土師器小甕で口径12.8cm、器高12.2cm、底径7.6cmを測る。底面には砂粒付着痕が残存しているが、砂粒の残存はほとんど無い。底部下半から直立気味に立ち上がり、体部中半に膨らみをもたせた後、若干内傾気味に立ち上がり、口縁部で折り返すように屈曲させている。外面体部の調整のへらは口唇部直下まで及んでいる。外面体部中半まで二次被熱により淡灰褐色状に変色しているが、内面頸部にも煮炊痕は見られない。184は遺構外出土の石匙で長さ10.2mm、幅3.9mm、厚さ9.0cmを測り、重量は30.2gを量る。石質は珪質頁岩である。

引用・参考文献

青森県教育委員会2006『新田 ② 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第41集  
 青森県教育委員会2006『新田 ① 遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第42集  
 青森県教育委員会2006『青森県遺跡詳細分布調査報告書21』青森県埋蔵文化財調査報告書第476集  
 青森県教育委員会2004『西高穴遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集  
 青森県教育委員会2010『青森県遺跡詳細分布調査報告書22』青森県埋蔵文化財調査報告書第493集  
 青森県 2002『青森県史 別冊 三内丸山遺跡』  
 青森県 2003『青森県史 資料編 考古4』  
 青森市教育委員会2003『市内遺跡発掘調査報告書11』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集  
 青森市教育委員会2007『石江遺跡群発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第94集  
 青森市教育委員会2010『石江遺跡群発掘調査報告書II』青森県埋蔵文化財調査報告書第106集  
 青森市教育委員会2016『石江遺跡群発掘調査報告書III』青森県埋蔵文化財調査報告書第107集  
 青森市教育委員会2016『石江遺跡群発掘調査報告書IV』青森県埋蔵文化財調査報告書第108集  
 木簡学会2003『木簡研究』第二五号  
 木簡学会2007『木簡研究』第二九号  
 船木龍勝2009「『堀と土塁』結界表現の諸相 - 青森市高屋敷館遺跡の基本的考察 -」『秋田考古学』33  
 丸山浩治2012「テフラを指標とした古代土器編年とその地域差」『紀要XXX』岩手県文化振興事業埋蔵文化財センター  
 山口清男1979『日本先史土器の編年』



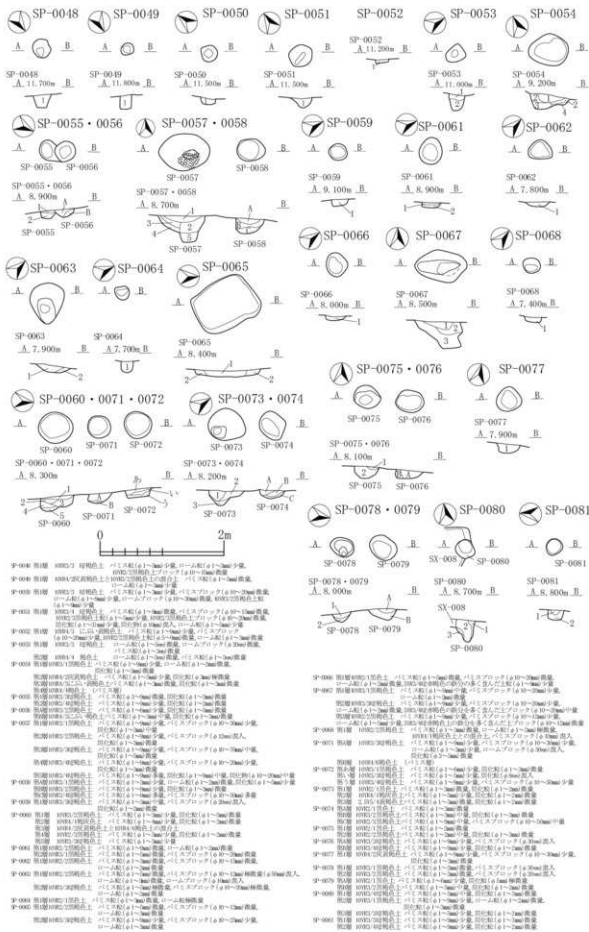


図 1-448 | 図 SP-2

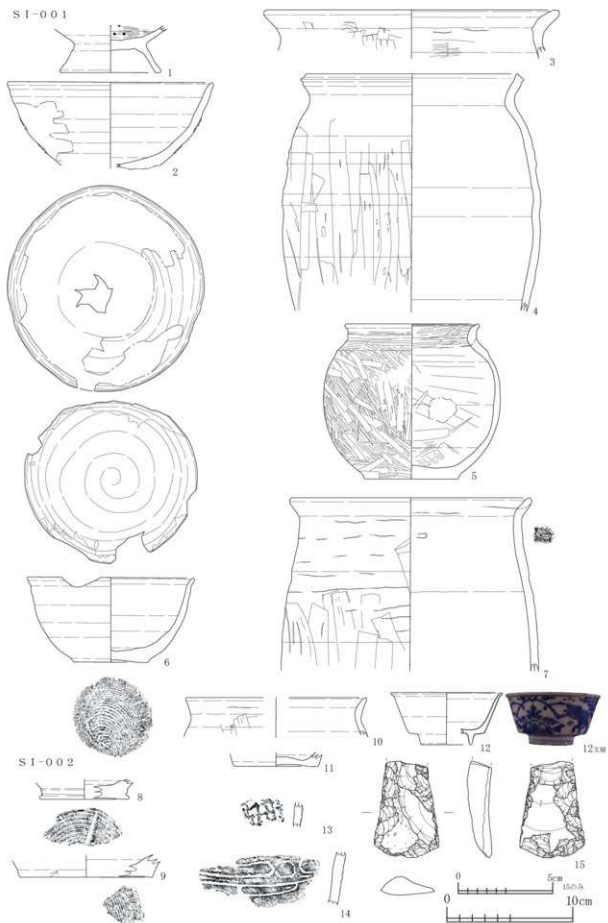
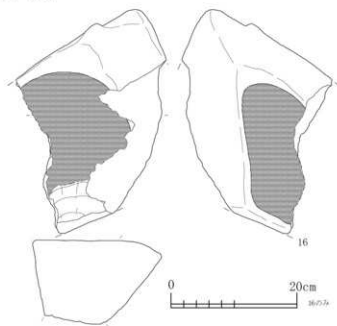


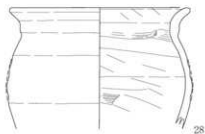
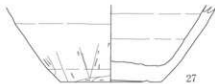
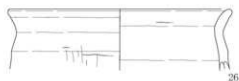
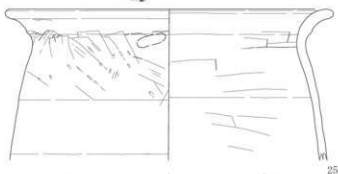
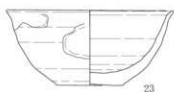
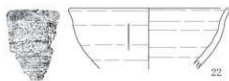
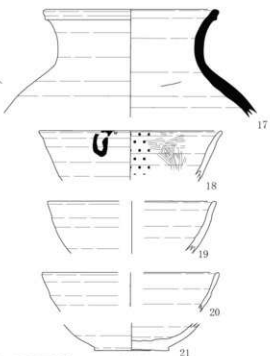
図 1-449 | 区 SI 出土遺物 -1



S1-002



S1-003



0 10cm

图 1-450 I区 S1 出土遗物-2

S1-003

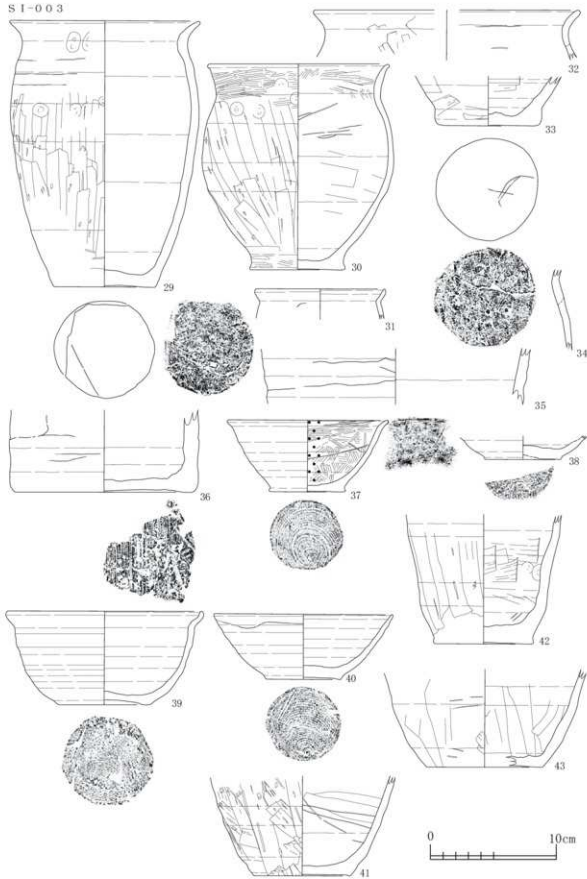


図 1-451 I 区 S1 出土遺物 -3

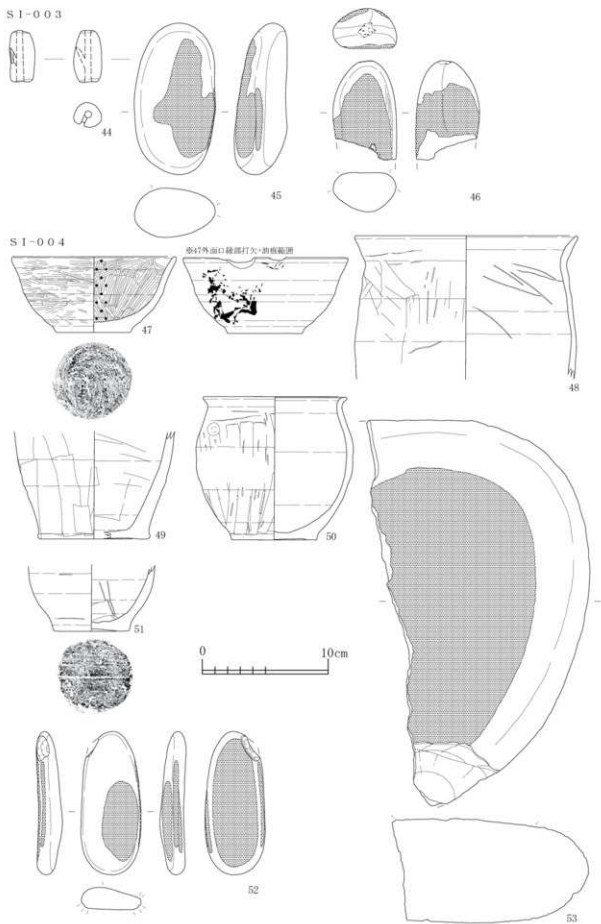


图 1-452 I 区 S1 出土遗物-4

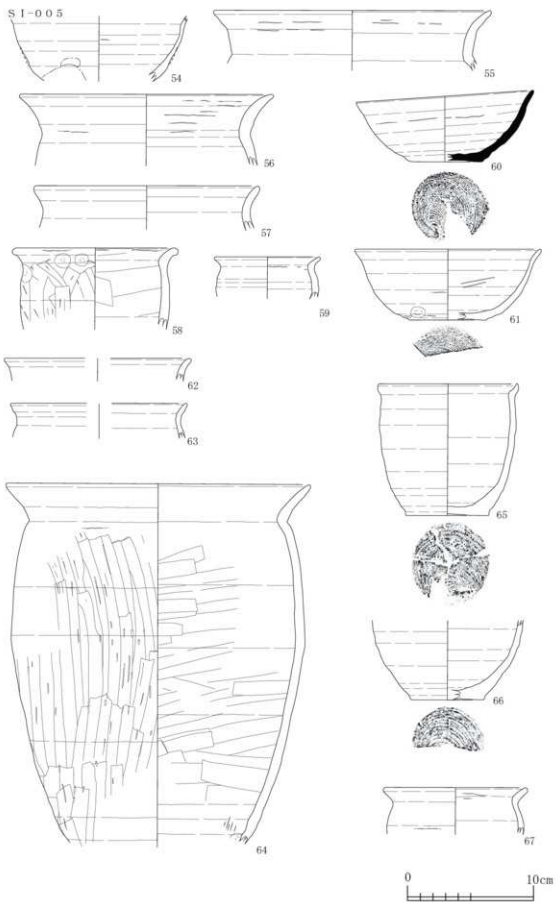


図 1-453 I 区 S1 出土遺物 -5

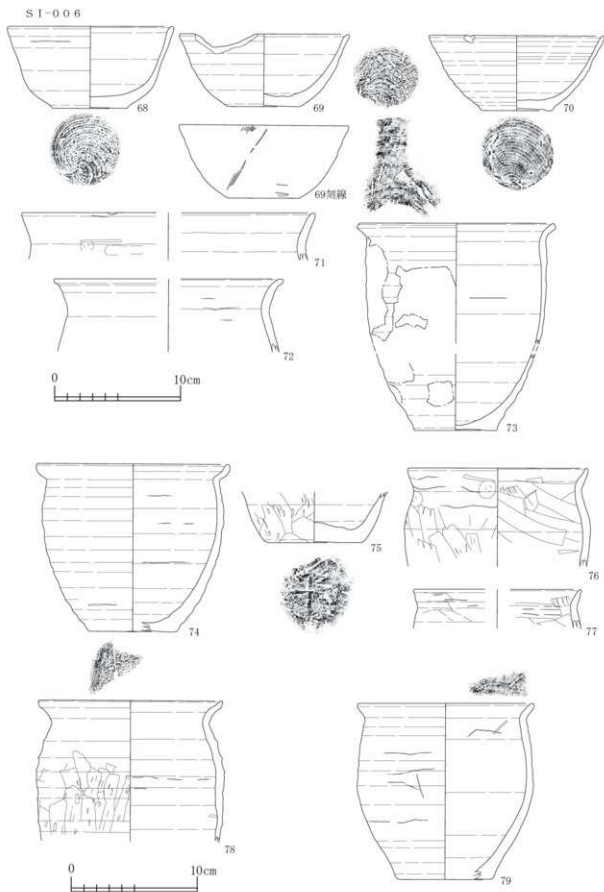
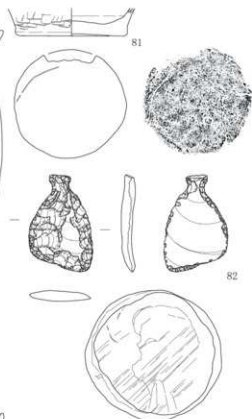
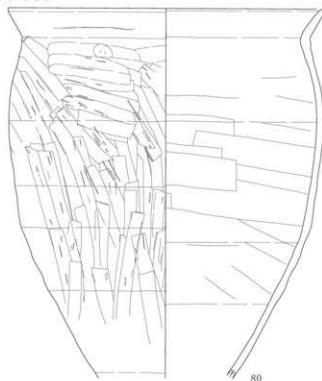


图 1-454 I 区 SI 出土遺物 -6

S1-006



S1-007

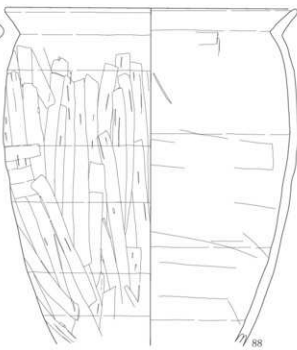
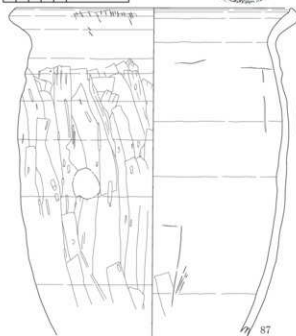
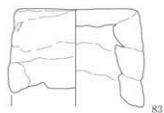


図 1-455 I 区 S1 出土遺物 -7

SI-008

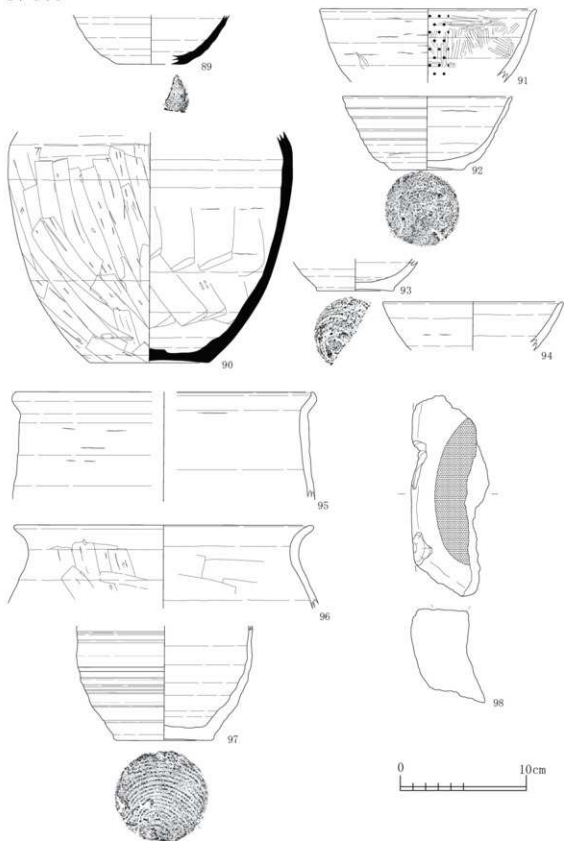


图 1-456 I 区 SI 出土遗物 -8

S1-009

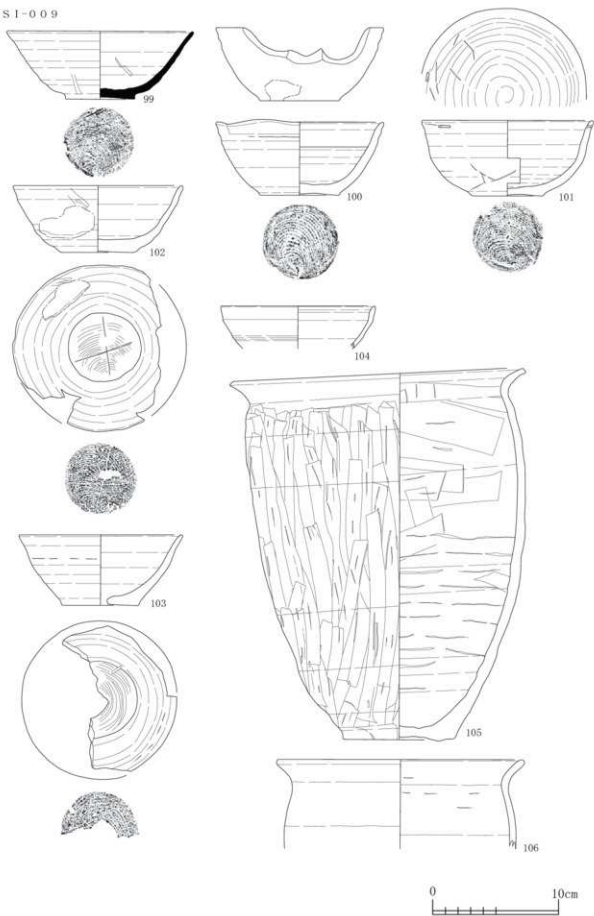


図 1-457 I 区 S1 出土遺物 -9



SI-009

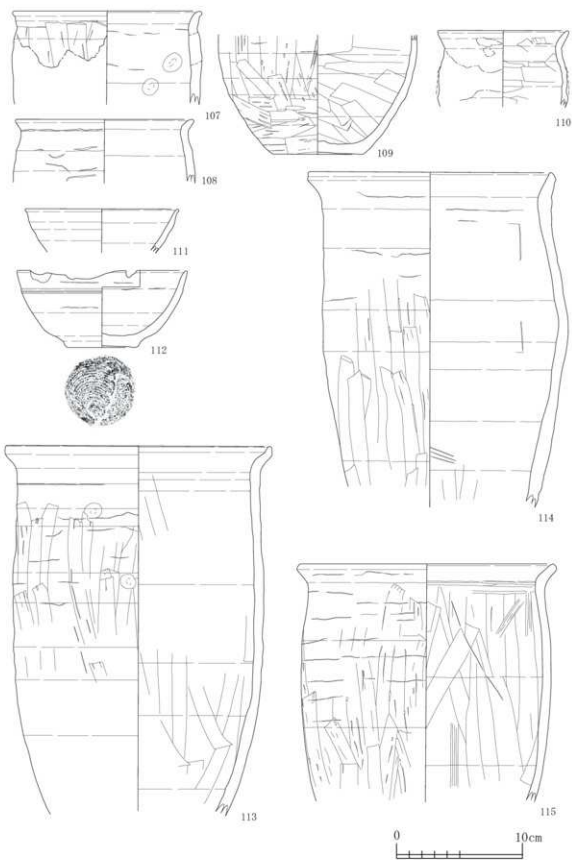
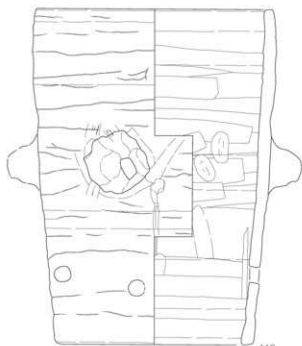
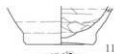
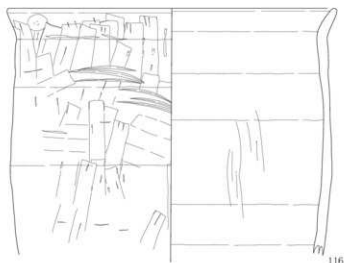


图 1-458 I 区 SI 出土遺物 -10

S1-009



S1-010

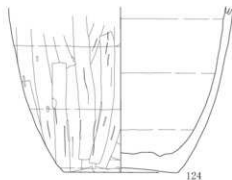
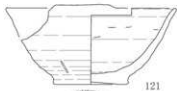
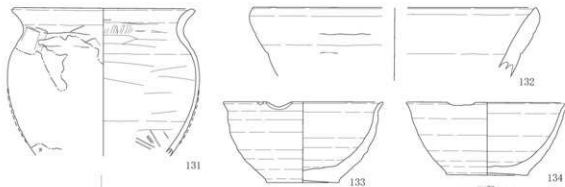
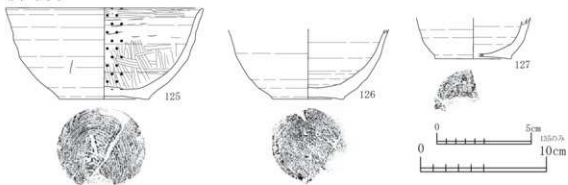


図 1-459 | 区 S1 出土遺物 -11

SI-011



SI-012

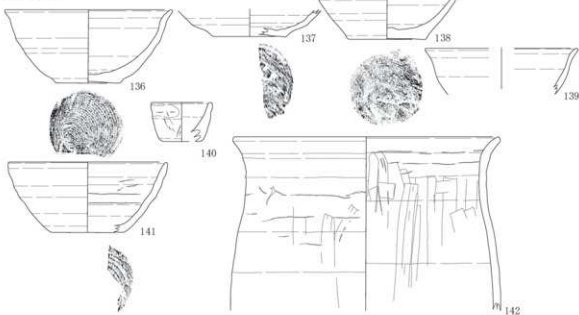
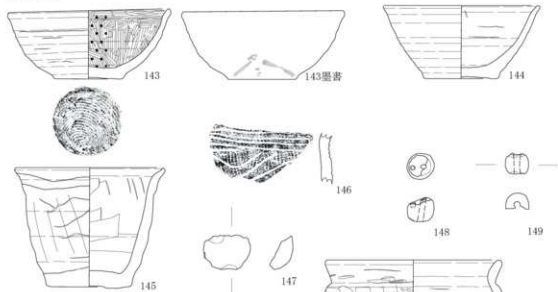
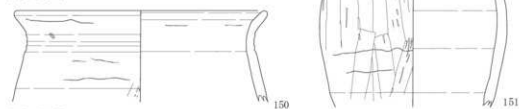


图 1-460 I 区 SI 出土遗物 -12

SI-012



SI-014



SI-015

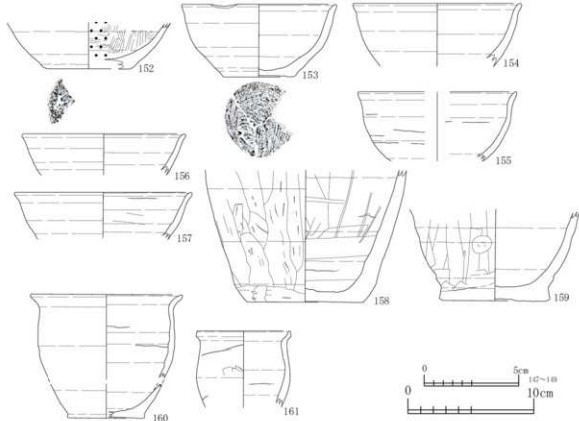


図 1-461 | 区 SI 出土遺物 -13

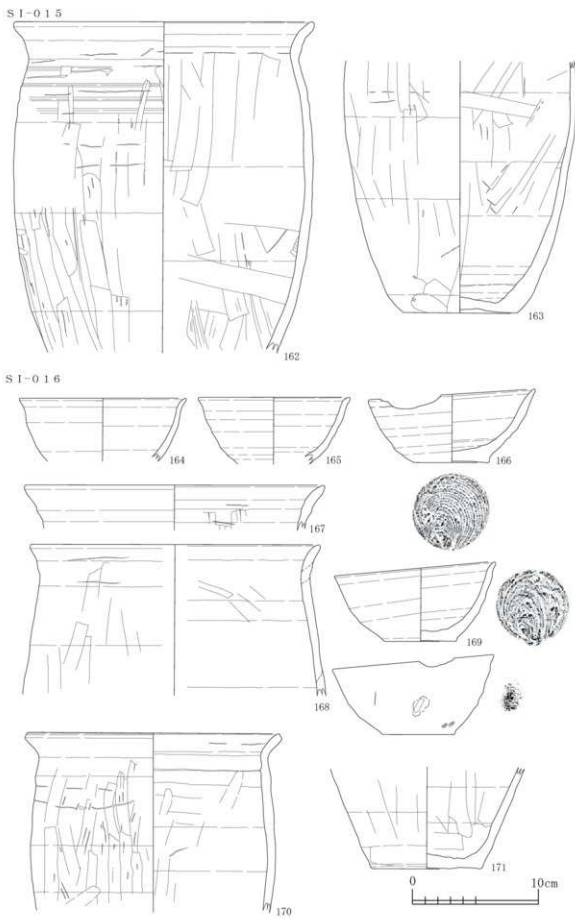


图 1-462 I 区 S1 出土遗物 -14

S1-016

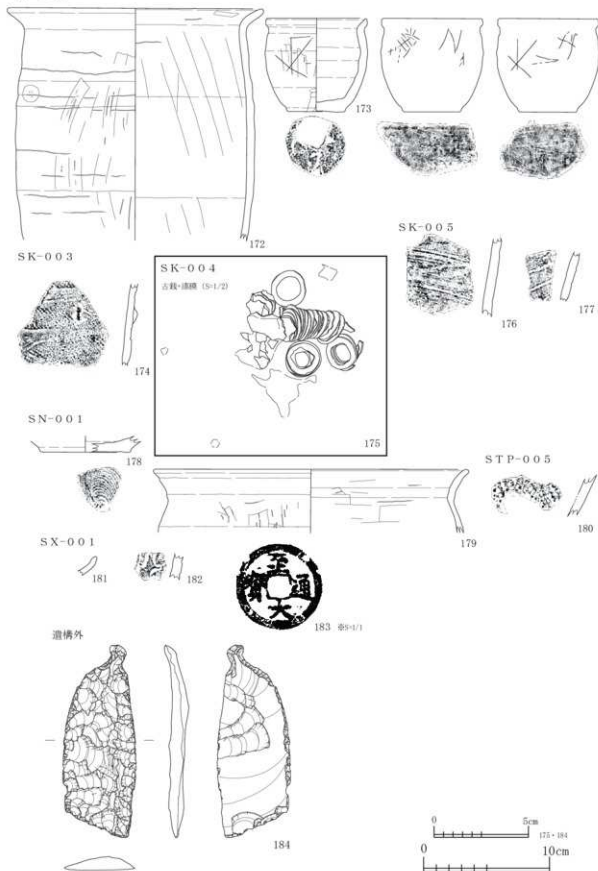


図 1-463 | 区 S1 出土遺物 -15, SK・SN・STP・SX・遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	いしえいせきぐんぱくつちようさほうこくしよご しんじようひらおかかっこよんいせきほんぶん・ずほんへん
書名	石江遺跡群発掘調査報告書V 新城平岡(4)遺跡本文・図版編
副書名	石江土地区画整理事業に伴う発掘調査
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第112集-1
編著者名	木村淳一, 相馬俊也, 松橋智佳子
編集機関	青森県教育委員会
所在地	〒038-8505 青森県青森市柳川二丁目1番1号 TEL017-761-4796
発行年月日	西暦 2012年 11月 30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
新城平岡(4)遺跡	青森県青森市大字新城 字平岡386-2ほか	00201	01074	40° 49' 52"	140° 41' 38"	(第一次) 20030416～ 20030401  (第二次) 20030901～ 20030905  (第三次) 20060201～ 20060115  (第四次) 20070422～ 20070628  (第五次) 20080211～ 20080211  (第六次) 20090704～ 20090805	15,857	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
新城平岡(4)遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 中世 近世 近代		竪穴住居跡 69軒 土坑 142基 溝状土坑 18基 井戸跡 2基 焼土状遺構等 15基 溝跡 64条 土器埋設遺構 2基 掘立柱建物跡 4棟 畝状遺構 1箇所 水田畦畔 2箇所 その他の遺構 34基		縄文土器・石器・ 土師器・須恵器・ 弥生土器・鉄製品・ 木製品・土製品・ 石製品・陶磁器・ 古銭	弥生時代の埋没林、 近代の木札、詳細時期 不明の「十三仏」等 の根塔婆	

要 約	<p>青森市西部に所在する石江遺跡群のうち新城平岡(4)遺跡地内の発掘調査の本文・図版について所収した。</p> <p>新城平岡(4)遺跡は、平成14年度に西バイパス(1)遺跡と高岡(5)遺跡が統合された遺跡である。</p> <p>石江土地区画整理事業に先立つ記録保存の発掘調査として平成15・17～21年度に13,536㎡の面積が調査された。</p> <p>遺跡は新城(新田)川の右岸標高5.4～11.8mの丘陵部に所在しており、北側の旧西バイパス(1)遺跡地内には丘陵部の一部に砂が厚く堆積している地点が確認されている。</p> <p>縄文時代の遺物包含層及び弥生時代の埋没林は砂層の下位から確認され、古代以降の以降は砂の上位から確認されている。</p> <p>南側の旧高岡(5)遺跡側は、平安時代の中和田a火山灰が堆積土中に検出する竪穴住居跡を検出しており、弥生前期遺跡も検出している。中世は掘立柱建物跡やカマド状遺構、土坑などを検出しており、土坑基からは無文銭、鉄製品、漆器(甕)が出土している。</p> <p>その他、自然流路上から大量の根塔婆が出土し、詳細時期は不明であるが「大日如来」「一切三世仏」「十三仏」「十三神」などの文字が記入されていた。</p>
-----	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

既刊埋蔵文化財關係報告書一覧

青森市文化財 1

- 1942 『三内遺跡発掘調査報告』
- \* 2 1945 『四ノ木遺跡発掘調査報告』
- \* 3 1947 『水汲木遺跡発掘調査報告』
- \* 4 4 1970 『三内丸山遺跡発掘調査報告』
- \* 5 1971 『野木遺跡発掘調査報告』
- \* 6 1973 『水汲木遺跡発掘調査報告書』
- \* 7 1973 『大沼遺跡発掘調査報告書』
- \* 8 1973 『三内丸山遺跡発掘調査報告書』
- 1979 『諏訪遺跡』
- 1985 『四ノ木遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書

- 1985 『山形野遺跡』
- 1985 『高森遺跡発掘調査報告書』
- 1986 『庄元木野遺跡発掘調査報告書』
- 1987 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- 1988 『三内丸山 1 遺跡発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書

- \* 第 1 集 1989 『石川 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 17 集 1992 『埋蔵文化財出土品調査報告書』
- \* 第 18 集 1993 『三内丸山 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 19 集 1993 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 20 集 1993 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 21 集 1994 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 22 集 1994 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 23 集 1994 『三内丸山 (2)・三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 24 集 1995 『鶴川遺跡 (内) (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 25 集 1995 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 26 集 1995 『稲事 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 27 集 1996 『稲事 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 28 集 1996 『三内丸山 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 29 集 1996 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 30 集 1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 31 集 1997 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 32 集 1997 『稲事 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 33 集 1997 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 34 集 1997 『鹿野 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 35 集 1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 36 集 1998 『稲事 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 37 集 1998 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 38 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 39 集 1998 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 40 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 41 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 42 集 1998 『野木遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 43 集 1999 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 44 集 1999 『稲事 (2) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 45 集 1999 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 46 集 1999 『稲事 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 47 集 1999 『鶴山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 48 集 2000 『三内丸山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 49 集 2000 『鶴山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 50 集 2000 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 51 集 2000 『稲事 (1)・雲山 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 52 集 2000 『大矢武野田 (1) 遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 53 集 2000 『野内山遺跡発掘調査報告書』
- \* 第 54 集 2001 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- \* 第 55 集 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- \* 第 56 集 2001 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- \* 第 57 集 2001 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

青森市埋蔵文化財調査報告書

- \* 第 58 集 2001 『大矢武野田 (1) 遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- \* 第 59 集 2001 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- \* 第 60 集 2001 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- \* 第 61 集 2002 『大矢武野田 (1) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 62 集 2002 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 63 集 2002 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 64 集 2002 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 65 集 2002 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- \* 第 66 集 2003 『雲山 (1) (1)・(2) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 67 集 2003 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- \* 第 68 集 2003 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 69 集 2003 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- \* 第 70 集 2003 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 71 集 2004 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
- \* 第 72 集 2004 『鶴山遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
- \* 第 73 集 2004 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- \* 第 74 集 2004 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
- \* 第 75 集 2004 『江崎遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 76 集 2005 『鶴山 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 77 集 2005 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
- \* 第 78 集 2005 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 79 集 2005 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 80 集 2005 『小矢武野田 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 81 集 2005 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 82 集 2006 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- \* 第 83 集 2006 『小矢武野田 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 84 集 2006 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅡ』
- \* 第 85 集 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- \* 第 86 集 2006 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅢ』
- \* 第 87 集 2006 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅣ』
- \* 第 88 集 2006 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅤ』
- \* 第 89 集 2006 『鶴山遺跡発掘調査報告書ⅧⅥ』
- \* 第 90 集 2007 『丹波野 (1) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 91 集 2007 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅦ』
- \* 第 92 集 2007 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅧ』
- \* 第 93 集 2007 『小矢武野田 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
- \* 第 94 集 2007 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
- \* 第 95 集 2008 『野内山 (1) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 96 集 2008 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅨ』
- \* 第 97 集 2008 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅩ』
- \* 第 98 集 2008 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅪ』
- \* 第 99 集 2008 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅫ』
- \* 第 100 集 2008 『丹波野 (1) 遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 101 集 2009 『大矢武野田 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- \* 第 102 集 2009 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅬ』
- \* 第 103 集 2009 『野内山遺跡発掘調査報告書ⅧⅭ』
- \* 第 104 集 2009 『高森遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 105 集 2009 『野内山 (2) 遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
- \* 第 106 集 2009 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書ⅧⅮ』
- \* 第 107 集 2009 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書ⅧⅯ』
- \* 第 108 集 2009 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅷⅰ』
- \* 第 109 集 2009 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅷⅱ』
- \* 第 110 集 2009 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅷⅲ』
- \* 第 111 集 2009 『野内山遺跡発掘調査報告書Ⅷⅴ』
- \* 第 112 集 2009 『三内丸山 (3) 遺跡発掘調査報告書Ⅷⅵ』

青森市埋蔵文化財調査報告書第112集-1

石江遺跡群発掘調査報告書 V

—石江土地区画整理事業に伴う発掘調査—

第 1 分冊 新城平岡 (4) 遺跡本文・図版編

発行年月日 2012年(平成24年) 11月 30日

編 集 青森市教育委員会  
〒038-8505 青森県青森市柳川二丁目1番1号  
TEL 017-761-4796

印 刷 第一印刷株式会社  
〒038-0003 青森県青森市石江字江渡3-1  
TEL 017-782-2333 FAX 017-781-9153